

不満表明に対する返答の日韓比較*

— 親疎上下関係と不満表明の強弱に注目して —

盧 娃 鉉**
chel99@hanmail.net

<ABSTRACT>

This study tries to find out, focusing on power, social distance and the strength of complaint, features and differences of Korea and Japan on “Responses to Complaints”. The results are as follows:

- (1) In Japan, when one listens to the other complain about something, he or she is affected by ‘the strength of complaint’ rather than ‘power & social distance’. On the contrary, in case of Korea, under the same situation, a respondent of discontent is affected by both the strength of complaint and the power & social distance.
- (2) When investigating a behavioral sense of the respondent, Japanese people focus on delivering their apologetical mind to the counterpart, but a Korean takes heed on ‘releasing the complaints of the counterpart.’ Then it makes a huge difference between Korea and Japan.
- (3) When examining the strategy and linguistic expression of the respondent, Japanese language expresses [sorriness] and [sorriness + compensation], regardless of power & social distance and the strength of complaint. On the contrary, Korean language shows different strategies and linguistic expressions depending on power & social distance and the strength of complaint.

This study will be helpful to research on linguistic behaviour and contribute to deepen the mutual understanding between Korea and Japan.

Key Words: Responses to Complaint, Power, Social Distance, Strength of Complaint

1. はじめに

「不満」とは、ある種の行動期待や当然と見なされる文化規範に反するような状況を好ましくないと感じることであり、不満状況を引き起こした相手の行動や発話への反応として表出する言語行動を「不満表明」といい、その不満表明への反応として表出する言語行動を「不満表明に対する返答」という¹⁾。「不満表明」は人間関係を損なう恐れがあるので、誰しもなるべく行いたくないものであるが、日常生活の中では何らかの必要に迫られて不満表明を行わざるを得ない羽目になったり、逆に思ってもない不満を言われたりすることもある。この不満表明は相手の面子に関わる行為であり、ちょっとした言葉の使い方や話の持ちかけ方で人間関係に大きな影響を与える可能性のある行為であ

* “This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government (NRF-2011-327-A00523)”

** 고려대학교 언어정보연구소 연구교수

1) 用語の概念は初鹿野他(1996)、藤森(1997)、崔東花(2009)などを参考にした。

るので、異文化コミュニケーションや外国語教育などの分野では研究対象としてしばしば取り上げられてきた。だが、なるべく避けたいはずの不満表明に対してどのように返答しているかという「不満表明に対する返答」についての研究は数少ない。「不満表明に対する返答」は、返答者自分と不満表明者、両者のつぶされた面子を回復するための行動でもあり、その行動のメカニズムを究明することは、異文化コミュニケーションや外国語教育などにおいて重要且つ有益であると思われる。

そこで、本研究では「不満表明に対する返答」における日韓の特徴及び相違点を、親疎上下関係と不満表明の強弱に注目して考察したい。このような研究成果は日韓の相互理解を深める上で有効であり、異文化コミュニケーションや社会言語学及び外国語教育の研究領域の更なる発展にも役立つものと考えられる。

2. 先行研究の検討及び本稿の目的

「不満表明に対する返答」に関する研究は、Frescura(1993)、Boxer(1993)から始まった。Frescura(1993)は英語学習者と英語母語話者を対象にロールプレイを行い、そこから得られたデータを不満表明に対する返答表現及びストラテジーの側面で分析した。その結果、不満表明に対する返答ストラテジーの分類の枠組みを提示し、イタリア人英語学習者が英語で会話する時に生じやすいトラブルや難関を予測するなど、英語教育や異文化コミュニケーションに有益な成果を上げた。Boxer(1993)は不満状況を引き起こした相手ではなく、第三者に行われる間接不満表明とその返答行動について考察し、一般的に否定的に認識されている間接不満表明が実際にはポジティブな機能をも担っていることを明らかにした。この間接不満表明は「不満表明に対する返答」の考察においても考慮に入れるべきではあるが、これは稿を改めて論じることとし、本稿では不満状況を引き起こした相手に直接行った不満表明に対する返答のみを研究の対象とする。

日本と韓国の「不満表明に対する返答」に関する調査研究は管見によれば、조정민(2005)、최명선(2007)、宋蓮姬(2008)のほかにはないようである。조정민(2005)は日本人韓国語学習者の中間言語的な特徴の解明を試み、최명선(2007)は日本人韓国語学習者・中国人韓国語学習者の中間言語的な特徴と韓国人母語話者の特徴についての分析結果を活かして韓国語教育の教室活動の設計及び指導案を提示している。このように、조정민(2005)、최명선(2007)は韓国語学習者の不満表明に対する返答ストラテジーに現れた中間言語的な特徴に研究の重点が置かれており、日韓の不満表明に対する返答についての綿密な考察までには至らなかった。一方、宋蓮姬(2008)は対照言語学的な観点から日韓の不満表明に対する返答ストラテジーの考察を試みた最初の研究であると言えよう。だが、異なるストーリーの日韓のドラマシナリオを対照データとしており、考察の段階では親疎関係や不満表明の強弱など、不満表明に対する返答に影響を与える可能性の高い要素を変数としてほとんど考慮しておらず、上下関係による違いのみに焦点を合わせている点や考察の対象がストラテジーに片寄っている点などについて検討の余地がある。

そこで、本稿では、談話完成テストやグループ式面接調査で収集したデータを考察の対象とし、親疎上下関係と不満表明の強弱に注目して不満表明に対する返答における日韓の特徴及び相違点を明らかにしたい。分析と考察は、次の3つのリサーチクエスチョンを柱に、それぞれどういう要因が働き、どういう日韓の違いがあるかを中心に行う。

- (1) 不満を言われた時の気持はどうか。
- (2) 不満表明に対して返答する際、何を一番気にするか。
- (3) 不満表明に対する返答にはどのような戦略が用いられるか。

3. 考察データの概要及び分析の枠組み

本稿での考察データは、「不満表明及びその返答」における日韓コミュニケーション行動や行動意識の特徴を把握し、日韓対照研究の基礎資料を得ることを目的として行った調査の一部である。

不満表明及びその返答に関する調査²⁾は、日本在住の経験のある韓国人5名と韓国在住の経験のある日本人5名を対象に予備調査を行い、不快感と不満事項及びその理由などについての意見を交わし、本調査の場面や設問の作成に必要な情報を得た。この情報を活用して作成した調査項目を中心に、日本人、韓国人、韓国人日本語学習者を対象に、量的調査の談話完成テスト(所要時間：約20分)と質的調査のグループ式面接調査(所要時間：一グループ当り約40分)を行った。談話完成テスト(以下、「DCT」)は当該の言語行動が予想される場面を設定し、場面ごとに話者の内省を問うものであり、一定の設問に対して多数の回答が得られ、その回答が数量化できるので、日韓コミュニケーション行動の全体の傾向を把握する上で、有効な調査方法であると思う。だが、DCTは一定の設問に対して得られた回答に突っ込むような質問ができないし、あくまでも意識調査であるため、その回答に実態がどの程度反映されているかという疑問が残る。このような問題を補うため、グループ式面接調査を行ったのである。

本稿では今回の調査の中で日本人と韓国人を対象にした「不満表明に対する返答」に関わるDCTの回答だけを分析の対象とする。グループ式面接調査や韓国人日本語学習者を対象にした調査結果などについては、稿を改めて考察したい。

以下に、本研究の考察データについて簡単に示しておく。

<調査方法> DCT (Discourse Completion Test)

<調査期間> 2011年10月～2012年2月

<調査対象者(年齢:20代)>

日本側：東京近辺の大学生(156名)

韓国側：ソウル近辺の大学生(162名)

2) 調査全体についての詳細は拙稿(2012)を参照されたい。

<状況>

あなたはBさんに本を借りました。Bさんは大切な本なのであまり貸したくないようでしたが、Bさんに無理を言って貸してもらいました。数日後、Bさんにその本を返しました。Bさんは何気なくその本を開き、飲み物でちよつと汚れているところがあることに気づいたようです。しかし、あなたはそのことに気づいていません。Bさんはあなたに不満を言います。

<相手> 話し相手(B)としては、親疎上下関係を考慮して次の4名を設定した。

- ①親しい友達 ②同じ授業を取っている親しくない(面識だけある)同年代の人
- ③親しい教授 ④親しくない(面識だけある)教授

<不満表明の強弱> 相手の不満表明が ①きつい場合(強) / ②きつくない場合(弱)

<質問項目>

- ①「〜〜」と不満を言われた時、あなたの気持はどうか。
- ②「〜〜」と不満を言われた時、どのように返答するか。
- ③ 返答の際、何を一番気にするか。

分析にあたっては、質問項目ごとに、相手との親疎上下関係や不満表明の強弱による影響を中心に日本と韓国の傾向を比較する。特に、被験者に直接書いてもらった「不満表明に対する返答」は、ストラテジー及び言語表現における日韓の相違を中心に分析する。また、不満表明に対する返答ストラテジーは、Brown&Levinson(1987)、조정민(2005)、최명선(2007)などを参考にし、<表 1>のように八つに分類する。なお、データの集計や分析にはSPSS(PASW Statistics)18.0を用いる。

<表 1> 不満表明に対する返答のストラテジー

	日本側の例	韓国側の例
[謝罪]	ごめん	미안해
[責任認定]	不注意だった	내가 실수로 흘렸나봐
[補償]	弁償するよ	새것으로 사줄게
[約束]	次から気をつけます	다음부터는 조심하겠습니다
[探り合い]	どうしたらいい?	언제 묻었지?
[反論・否認]	不良品じゃないの?	이거 내가 한거 아닌데
[了解求め]	気づいてなかった	흘린 줄 몰랐어
[不満表明]	ちよつと言い方きつくない?	일부러 그런 것도 아닌데 그게 그렇게 화낼 일이야?
その他	もう私には貸さないください	내 흔적이야

4. 分析及び考察

4.1. 不満を言われた時の返答者の感情

不満表明に対してどのように返答しているかは、不満を言われた時の返答者の気持に影響されると

ころが少なくないと思う。そこで、本調査では不満表明の強弱を変数として取り入れたが、返答の考察に先立って、本調査で設定した場面の不満成立と不満表明の強弱の妥当性を確認する必要がある。そのため、「〜〜」と不満を言われた時の返答者の感情について、「①そう言われるのが当たり前だ」「②すまないことだが、その言い方はきつい」「③すまないと思うほどのことではない」、という三つの選択肢から選んでもらった。その結果を<表 2, 3>にまとめる。

<表 2> 相手別の不満表明の強弱と返答者の感情：日本側 単位：人(%)

返答者の感情	* 3) (対)親/同		(対)疎/同		(対)親/上		(対)疎/上	
	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱
①そう言われるのが当たり前だ	100 (64.5)	148 (94.9)	78 (51.3)	141 (91.6)	101 (68.7)	140 (92.1)	96 (64.9)	134 (89.9)
②すまないことだが、その言い方はきつい	50 (32.3)	5 (3.2)	67 (44.1)	9 (5.8)	40 (27.2)	6 (3.9)	45 (30.4)	9 (6.0)
③すまないと思うほどのことではない	5 (3.2)	3 (1.9)	7 (4.6)	4 (2.6)	6 (4.1)	6 (3.9)	7 (4.7)	6 (4.0)
合 計	155 (100)	156 (100)	152 (100)	154 (100)	147 (100)	152 (100)	148 (100)	149 (100)

<表 3> 相手別の不満表明の強弱と返答者の感情：韓国側 単位：人(%)

返答者の感情	* (対)親/同		(対)疎/同		(対)親/上		(対)疎/上	
	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱
①そう言われるのが当たり前だ	72 (44.4)	143 (88.3)	59 (36.6)	146 (90.1)	106 (66.3)	153 (96.8)	103 (64.0)	146 (93.0)
②すまないことだが、その言い方はきつい	82 (50.6)	6 (3.7)	94 (58.4)	10 (6.2)	53 (33.1)	4 (2.5)	57 (35.4)	11 (7.0)
③すまないと思うほどのことではない	8 (4.9)	13 (8.0)	8 (5.0)	6 (3.7)	1 (0.6)	1 (0.6)	1 (0.6)	-
合 計	162 (100)	162 (100)	161 (100)	162 (100)	160 (100)	158 (100)	161 (100)	157 (100)

<表 2>の日本側の傾向を見ると、全体的に「①そう言われるのが当たり前だ」が多いが、相手の不満表明が「強」の場合は「②すまないことだが、その言い方はきつい」も少なくない。また、「③すまないと思うほどのことではない」の割合は、相手別の不満表明の強弱に関わりなく5%以下である。このことから、日本側の調査で設定した場面の不満成立と不満表明の強弱の妥当性が確認できたと思う。また、日本の場合、返答者の感情に不満表明の強弱は影響するが、親疎上下関係は影響しないことが分かる4)。

一方、<表 3>の韓国側の傾向を見ると、全体的に「①そう言われるのが当たり前だ」が多いが、相手の不満表明が「強」の場合は「②すまないことだが、その言い方はきつい」も少なくないな

3) <上段>は話し相手(不満表明者)との親疎上下関係、<下段>は不満表明の強弱を示す。以下の表においても「*」は同一の意味で使う。

4) 日本の場合、返答者の感情が不満表明の強弱によって異なるか否かについてカイ二乗検定を行ったところ、p<.01水準で有意差が認められた。一方、返答者の感情が親疎上下関係によって異なるか否かについてカイ二乗検定を行ったところ、p<.01水準で有意差が認められなかった。

ど、日本と類似している。このことから韓国側の調査で設定した場面の不満成立と不満表明の強弱の妥当性が確認できたと思う。だが、(対)親/同の「強」と(対)疎/同の「強」の場合、「②すまないことだが、その言い方はきつい」の割合は日本や韓国の他の相手に比べ極めて高い。即ち、韓国の場合、同年代の人に強く不満を言われた時は日本や韓国の他の相手に比べ「すまないことだが、その言い方はきつい」と思う傾向があり、返答者の感情に不満表明の強弱と上下関係が影響していることが分かる⁵⁾。

以上、不満を言われた際の返答者の感情に、日本は不満表明の強弱が大きく影響するが、韓国は不満表明の強弱だけでなく上下関係も影響すると言えよう。

4.2. 返答者の行動意識

DCT調査では「不満表明に対して返答する際、何を一番気にするか」を聞いたが、その結果をまとめたのが<表 4, 5>である。

<表 4> 相手別の不満表明の強弱と返答者の行動意識：日本側

単位：人(%)

* 返答者が気にする点	(対)親/同		(対)疎/同		(対)親/上		(対)疎/上	
	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱
①相手の不満を和らげるように	50 (32.9)	26 (16.9)	43 (29.1)	29 (19.0)	40 (26.1)	27 (17.4)	44 (29.3)	26 (17.1)
②自分のすまない気持が相手に伝わるように	86 (56.6)	120 (77.9)	82 (55.4)	110 (71.9)	89 (58.2)	112 (72.3)	85 (56.7)	110 (72.4)
③自分の印象が悪くならないように	2 (1.3)	-	5 (3.4)	8 (5.2)	8 (5.2)	8 (5.2)	6 (4.0)	4 (2.6)
④相手から反感をかかわないように	7 (4.6)	3 (1.9)	14 (9.5)	5 (3.3)	11 (7.2)	7 (4.5)	10 (6.7)	10 (6.6)
その他	7 (4.6)	5 (3.2)	4 (2.7)	1 (0.7)	5 (3.3)	1 (0.6)	5 (3.3)	2 (1.3)
合計	152 (100)	154 (100)	148 (100)	153 (100)	153 (100)	155 (100)	150 (100)	152 (100)

<表 5> 相手別の不満表明の強弱と返答者の行動意識：韓国側

単位：人(%)

* 返答者が気にする点	(対)親/同		(対)疎/同		(対)親/上		(対)疎/上	
	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱
①相手の不満を和らげるように	65 (40.4)	68 (41.5)	59 (36.4)	56 (35.2)	72 (45.0)	61 (37.7)	73 (46.5)	58 (37.4)
②自分のすまない気持が相手に伝わるように	52 (32.3)	75 (45.7)	58 (35.8)	76 (47.8)	55 (34.4)	76 (46.9)	47 (29.9)	65 (41.9)
③自分の印象が悪くならないように	4 (2.5)	7 (4.3)	18 (11.1)	19 (11.9)	22 (13.8)	15 (9.3)	21 (13.4)	24 (15.5)
④相手から反感をかかわないように	18 (11.2)	12 (7.3)	8 (4.9)	6 (3.8)	7 (4.4)	7 (4.3)	9 (5.7)	6 (3.9)
その他	22 (13.7)	2 (1.2)	19 (11.7)	2 (1.3)	4 (2.5)	3 (1.9)	7 (4.5)	2 (1.3)
合計	161 (100)	164 (100)	162 (100)	159 (100)	160 (100)	162 (100)	157 (100)	155 (100)

5) 韓国の場合、返答者の感情が不満表明の強弱や上下関係によって異なるか否かについてカイ二乗検定を行ったところ、 $p < 0.1$ 水準で有意差が認められた。一方、返答者の感情が親疎関係によって異なるか否かについてカイ二乗検定を行ったところ、 $p < 0.1$ 水準で有意差が認められなかった。

<表 4>の日本側の傾向を見ると、全体的に「②自分のすまない気持が相手に伝わるように」が多いが、相手の不満表明が「強」の場合は「①相手の不満を和らげるように」も少なくない。このことから、日本は返答者の行動意識に不満表明の強弱は影響しているが、親疎上下関係は影響していないことが分かる。また、日本は不満表明に対して返答する際、自分のすまない気持を相手に伝えることに一番気を使うが、相手の不満表明が強い場合は相手の不満を和らげることに気を使うと言えよう。

一方、<表 5>の韓国側の傾向を見ると、相手の不満表明が「強」の場合は「①相手の不満を和らげるように」が、相手の不満表明が「弱」の場合は「②自分のすまない気持が相手に伝わるように」が、少し多い傾向にある。だが、全体的にはどの相手に対しても「①相手の不満を和らげるように」と「②自分のすまない気持が相手に伝わるように」、両方とも気にしていると見られる。このことから、韓国は返答者の行動意識に不満表明の強弱は少し影響しているが、日本ほどではないことが分かる。つまり、韓国は不満表明に対して返答する際、自分のすまない気持を相手に伝えつつ相手の不満を和らげることに気を使うと言えよう。特に、ほとんどの場合、相手の不満を和らげることに気を使うところは、日本と異なる部分である。

以上、不満表明に対して返答する際、日本は韓国に比べ「自分のすまない気持を相手に伝える」ことにより多く気を使うが、韓国は「自分のすまない気持を相手に伝える」だけでなく「相手の不満を和らげる」ことにも気を使う、というところに日韓の相違があることが確認できた⁶⁾。

4.3. 不満表明に対する返答戦略及び言語表現

4.3.では、不満表明に対する返答に、実際どのような戦略が使われており、どのような言語表現が使われているのかについて分析する。まず、日韓の戦略の平均使用数を相手別の不満表明の強弱との関わりからまとめ、<表 6>に示す。

<表 6> 相手別の不満表明の強弱と日韓戦略の平均使用数

*	(対)親/同		(対)疎/同		(対)親/上		(対)疎/上	
	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱
日本	1.67	1.55	1.49	1.47	1.57	1.49	1.44	1.38
韓国	1.99	2.17	1.76	1.99	1.70	1.82	1.66	1.59

<表 6>から分かるように、全体的に一つ以上の戦略を用いており、疎の関係より親の関係の方で、上の関係より同の関係の方で、それぞれ戦略の平均使用数が多いという点で日韓共通している。また、不満表明の強弱との関わりから見ると、(対)疎/上では日韓共通して「弱」より「強」の方で戦略の平均使用数が多い。しかし、(対)親/同、(対)疎/同、(対)親/上では日韓

6) 日本と韓国の「相手の不満を和らげるように」「自分のすまない気持が相手に伝わるように」の分布についてカイ二乗検定を行ったところ、 $p < 0.01$ 水準で有意差が認められた。

で異なった傾向が見られ、日本は「弱」より「強」の方でストラテジーの平均使用数が多いが、韓国は「弱」より「強」の方でストラテジーの平均使用数が少ない⁷⁾。

それでは、実際どのようなストラテジーの組み合わせが多く使われているのか、日韓の特徴や相違が見られる[謝罪]、[謝罪]+[責任認定]、[謝罪]+[補償]、[謝罪]+[了解求め]の4つのパターンを中心に、その出現割合を<表7, 8>にまとめる。

<表7> 相手別の不満表明の強弱とストラテジーの組み合わせ：日本側 単位：人(%)

*	(対)親/同		(対)疎/同		(対)親/上		(対)疎/上	
	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱
[謝罪]	56(38.1)	70(47.9)	71(49.3)	80(54.4)	65(44.5)	80(55.2)	80(55.2)	87(60.4)
[謝罪]+[責任認定]	3(2.0)	6(4.1)	1(0.7)	5(3.4)	3(2.1)	8(5.5)	2(1.4)	4(2.8)
[謝罪]+[補償]	54(36.7)	34(23.3)	40(27.8)	38(25.9)	49(33.6)	35(24.1)	41(28.3)	28(19.4)
[謝罪]+[了解求め]	6(4.1)	15(10.3)	4(2.8)	13(8.8)	5(3.4)	6(4.1)	2(1.4)	7(4.9)
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
合計	147(100)	146(100)	144(100)	147(100)	146(100)	145(100)	145(100)	144(100)

<表8> 相手別の不満表明の強弱とストラテジーの組み合わせ：韓国側 単位：人(%)

*	(対)親/同		(対)疎/同		(対)親/上		(対)疎/上	
	強	弱	強	弱	強	弱	強	弱
[謝罪]	31(19.1)	23(14.2)	49(31.0)	43(27.0)	68(42.8)	53(33.3)	69(44.5)	80(50.6)
[謝罪]+[責任認定]	9(5.6)	30(18.5)	12(7.6)	32(20.1)	17(10.7)	47(29.6)	11(7.1)	23(14.6)
[謝罪]+[補償]	28(17.3)	16(9.9)	38(24.1)	27(17.0)	24(15.1)	9(5.7)	25(16.1)	15(9.5)
[謝罪]+[了解求め]	16(9.9)	27(16.7)	11(7.0)	25(15.7)	17(10.7)	25(15.7)	17(11.0)	19(12.0)
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
合計	162(100)	162(100)	158(100)	159(100)	159(100)	159(100)	155(100)	158(100)

例1) 日本側の例

- ① [謝罪] … ごめん
- ② [謝罪]+[責任認定] … ごめん、こぼしちゃった～
- ③ [謝罪]+[補償] … ごめん、買って返すね。
- ④ [謝罪]+[了解求め] … ごめん。気が付かなかった！

例2) 韓国側の例

- ① [謝罪] … 미안해
- ② [謝罪]+[責任認定] … 미안. 내가 흘렸나봐.
- ③ [謝罪]+[補償] … 미안. 다음에 맛있는 거 사줄게.
- ④ [謝罪]+[了解求め] … 미안. 흘렸는지 몰랐는데...

<表7>の日本側の傾向を見ると、全体的に[謝罪]が一番多く、その次が[謝罪]+[補償]であるが、(対)親/同の「強」では[謝罪](38.1%)と[謝罪]+[補償](36.7%)が両方ともよく使われる。つま

7) 日韓でストラテジーの平均使用数に差があるかについて t 検定を行ったところ、 $p < 0.01$ 水準で有意差が認められた。

り、日本は[謝罪]と[謝罪]+[補償]が典型的なパターンであると言えよう。しかし、<表 8>の韓国側の傾向を見ると、親疎上下関係や不満表明の強弱によって異なった戦略の組み合わせを見せており、日本に比べバリエーションに富んでいる。特に、(対)親/同の場合は「強」と「弱」両方とも[謝罪]の割合が低く(15%前後)、20%以上の飛び出たパターンが見られない点で、日本はもちろんのこと、韓国への相手の場合とも異なった傾向を見せている。

この他、[補償]の戦略を表わす言語表現にも日韓の相違が見られる(例 1 の③、例 2 の③)。日本はほとんどの場合「同じ本を買って返すか弁償する」という補償の仕方を言葉で表現する。しかし、韓国は上下関係によって言語表現が異なっており、目上の人にはほとんどの人が「죄송합니다. 제가 새 책으로 사오겠습니다」のように「同じ本を買って返す」という弁償の仕方を言葉で表現するが、同年代の人には「同じ本を買って返すか弁償する」だけでなく「何かをおごる」という弁償の仕方をも言葉で表現することが多い。

5. おわりに

本稿では「不満表明に対する返答」における日韓の特徴及び相違点を、親疎上下関係と不満表明の強弱に注目して考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 不満を言われた時の返答者の感情を見ると、日本人は相手の不満表明の強弱に影響されるが、韓国人は相手の不満表明の強弱だけでなく上下関係にも影響される。
- (2) 不満表明に対して返答する際、日本は韓国に比べ「自分のすまない気持ちを相手に伝える」ことにより多く気を使うが、韓国は「自分のすまない気持ちを相手に伝える」ことだけでなく「相手の不満を和らげる」ことにも日本に比べより多く気を使う。
- (3) 不満表明に対して返答する際、日本は不満表明の強弱や親疎上下関係に関わりなく[謝罪]か[謝罪]+[補償]が典型的な戦略として使われているが、韓国は不満表明の強弱や親疎上下関係によって異なった戦略の組み合わせを見せている。

以上、不満表明に対して返答する際、返答者の感情、行動意識、戦略及び言語表現における日韓の相違が明らかとなった。このような日韓の違いをお互いに理解することは日韓両国人が円滑なコミュニケーションを図る上で何よりも重要であり、異文化コミュニケーションや社会言語学及び外国語教育の研究領域の更なる発展にも役立つものと考えられる。

今回の分析結果は「相手の大切な本を汚してしまい、相手に不満を言われた場合」という一つの不満事項から得られたものである。だが、不満表明やその返答は不満を起こした事柄によって影響される可能性があるため、今回の考察結果が日韓の不満表明に対する返答の全体をカバーするものとは言いがたい。今回の考察結果を一般化するためには、不満事項という要素を軸にした更なる考察

が必要であろう。また、今回は不満表明の強弱を「きつい場合(強)」と「きつくない場合(弱)」に単純化して調査分析したが、不満表明の強弱は不快度と直接関わっている抽象的な概念で個人差や文化差なども考えられる。不満表明とその返答のメカニズムを解明するためには、不快度を含めた不満表明の強弱についてのより詳細な調査分析が必要であろう。なお、不満表明に対する返答には男女差も予想されるが、本稿では考察の変数として取り入れなかった。いずれも今後の課題としたい。

◀ 参考文献 ▶

- 姜錫祐(2007) 「韓国人と日本人のコミュニケーション行動に関する比較対照研究 - 依頼行動における 依頼主の意識に注目して-」 『日本語学研究』 19, 韓國日本語學會. pp.13-28
- 拙稿(2012) 「親疎上下関係による不満表明に日韓比較-行動主体の意識に注目して-」 『日本語学研究』 34, 韓國日本語學會. pp.59-73
- 宋蓮姬(2008) 『不満表現と応答に関する日・韓対照研究』, 한국외국어대학교 석사학위논문. p.1-62
- 조정민(2005) 『한국어 불평에 대한 응답 화행 실현 양상 연구 -일본어권 한국어 고급 학습자를 대상으로-』, 이화여자대학교 대학원 석사학위 논문. p.1-111
- 최명선(2007) 『한국어 불평·응답 화행의 양상과 교육 방안 연구 -한국인 모어 화자와 일본인, 중국인 학습자의 담화 분석을 중심으로-』, 고려대학교 교육대학원 석사학위 논문. p.1-189
- 尾崎喜光編(2008) 『対人行動の日韓対照研究』, ひつじ書房. pp.1-59
- 真田信治[編](2006) 『社会言語学の展望』, くろしお出版. pp.41-70
- 杉戸清樹・尾崎喜光(2006) 「敬意表現」から「言語行動における配慮」へ」 『言語行動における「配慮」の諸相』, くろしお出版. pp.1-10
- 崔東花(2009) 「不満表明とそれに対する応答-中国語母語話者と日本語母語話者を比較して-」 『多文化接触場面の言語行動と言語管理 第218集』 村岡英裕編, 公共研究専攻, 共生文化. pp.43-63
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子(1996) 「不満表明ストラテジーの使用傾向-日本語母語話者と日本語学習者の比較-」 『日本語教育』 88, 日本語教育学会. pp.128-139
- 藤森弘子(1997) 「不満表明ストラテジーの日英比較-談話完成テスト法の調査結果をもとに-」 『言語 との対話』, 英宝社. pp.243-257
- 洪珉杓(2007) 『日韓の言語文化の理解』, 風間書房. pp.75-86
- Boxer, D(1993) *Complaints as positive strategies: What the learner needs to know*, TESOL Quarterly 27. pp.277-299
- Brown, P. and Levinson, S.(1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press. p.61-284
- Frescura, M.A.(1993) *A Sociolinguistic comparison of "reactions to complaints"; Italian L1 vs English L1, Italian L2 and Italian as a community language*. Unpublished doctoral dissertation. Toronto: University of Toronto, Graduate Department of Education.

- 투 고 : 2012. 11. 30.
- 심 사 : 2012. 12. 15.
- 심사완료 : 2013. 01. 15.

外国語寮における日本語学習に関する意識調査

— 日本人留学生の増加が韓国人大学生の意識に与える影響について —

齊藤明美*
saito@hallym.ac.kr

<要 旨>

本研究は、韓国の大学にある外国語寮における日本語学習に関する研究である。HID(Hallym International Dormitory)では、日本語の他にも英語、中国語、ロシア語等の外国語をネイティブスピーカーである留学生と共に生活しながら日常的に用いることによって語学力を伸ばし、お互いの国の文化を理解し、グローバルな精神を身につけ、国際社会で活躍できる人材を育成しようという取り組みが行なわれている。具体的には、ネイティブの教員による会話の授業(必修科目)である「生活日本語」や、留学生がチューターとなって会話を学ぶ「チューター授業」等もある。本研究では、このような取り組みの中で、韓国の日本語寮生の日本語学習に関する学習認知、学習努力、学習興味、自信、および社会性などに関する意識が、彼らが共に生活する日本人留学生の増加によって変化がみられるかどうか、について調査した結果を報告するものである。調査の結果、日本人留学生の増加は韓国人大学生の意識に影響を及ぼしていることが明らかになった。日本人留学生が4人であった1学期より、9人に増加し、1室を除いた全ての寮室で韓国人学生と日本人学生が生活を共にすることになった2学期の方が、HID生の日本語に対する学習意欲が高まり、学習に自信をもつことができたという結果を得たのである。また、1学期に比べて2学期に統計的に有意差がみられた項目が増加したことも明らかになった。

キーワード：韓国、外国語寮、日本語学習、アンケート調査、留学生の人数

1. はじめに

本研究は、韓国の大学の外国語寮であるHID¹⁾の日本語学習に関する研究である。HIDでは、韓国の大学生が、ネイティブスピーカーである留学生と共に生活しながら、日本語、英語、中国語、ロシア語等の外国語を日常的に用いることによって語学力を伸ばし、お互いの国の文化を理解し、グローバルな精神を身につけ、国際社会で活躍できる人材を育成しようという取り組みが行なわれている。具体的には、ネイティブの教員による会話の授業(必修科目)である「生活日本語」や、留学生がチューターとなって会話を学ぶ「チューター授業」等もある。これらの授業の他にも、日本文化に関してグループ学習を行ない、その結果を目標言語で発表する「文化の夜」や、留学生と共に目標言語で唄う「のど自慢」、留学生と韓国の学生が共に楽しむ「スポーツ大会」等もある。本研究では、このような取り組みの中で、韓国の日本語寮生(以下HID生とする)の日本語学習に対する学習認知、学習努力、学習興味、自信感、および社会性等に関する意識が、彼らが共に生活する日本人留学生の数の増加によって変化がみられるか否か、について調査した結果を報告するものである。尚、HID生は、入寮希望者が申請書を提出したあと面接を経て選抜されるので、ある程度日本

* 翰林大学校 日本文学教授

1) HIDとは、Hallym International Dormitoryの略である。

語会話ができる学生が多いが、まれには日本語会話力に問題がある学生がいる場合もある。ここでは、HID生とそうでない学生を対象にアンケート調査を実施し、結果を分析した。これは、統計的に証明することによって、より客観的なデータを示すことができると考えたからである。

2. 先行研究

大学の学生寮に関する先行研究には、鈴木(2010)、鈴木・元岡・桂(2011)、大野(2012)、加納(2012)、瀧口・前田・吉廣・梶原・池田・徳田(2012)、中田(2012)等がある。鈴木(2010)は、日本の国立大学、私立大学等の留学生宿舎を訪問し、聞き取り調査を行なうことによって、留学生宿舎は「異文化理解教育に資する住環境を提供していくべきである(p.1522)」、とすると同時に、「個室内の設備が完備している宿舎ほど寮生間の交流は少なくなり、留学生の日本語習得等にも時間がかかるようである。(p.1521)」としている。また、鈴木・元岡・桂(2011)は、女子大学の学生寮の寮室と共用空間の構成について述べており、「大学の学生寮とは、学生たちが個性を活かしながらも、共同生活を通じて豊かな人間関係を形成することのできる場所ではないだろうか。(p.14)」としている。また、大野(2012)は、寮生活をしている学生43名にインタビューをし、寮生の意識についてまとめており、寮生活は人間関係を学習する良い機会であると述べている。加納(2012)は、寮生が書いた文章を分析することによって、女子大学の教育寮は、「明確な目的意識と確固とした方針で寮運営に臨めば、学生寮は人格教育およびキリスト教教育の場として十分に機能し得ることを示唆している。(p.125)」としている。瀧口・前田・吉廣・梶原・池田・徳田(2012)は、学寮運営の現状と課題について言及し、「寮内に勉強会や文化サークルのようなものを作り寮生同士が学びあい切磋琢磨できるような環境を作ることも重要で、人が大勢いることを上手に利用する発想も必要であろう。(p.16)」としている。また、中田(2012)は、ドイツの寮付き学校の調査をし、「寮付き学校は若者の友達関係を研究するには、調査結果の普遍性が制限されていても、最も良い場所だと言える。(p.57)」としている。

これらの先行研究をみると、学生寮及び留学生の宿舎が、人間関係の学習、人格教育、国際理解教育の場に成り得ることがわかると共に、寮生が切磋琢磨できる環境が必要である、としていることもわかる。しかし、これらの先行研究には、日本語寮を対象としたものはなく、日本語教育に関する分析をしているものもみられない。しかし、わずかではあるがHIDに関する先行研究として、齊藤(2011)、齊藤・黄・小城(2011)がある。齊藤(2011)は、2007年のHIDの取り組みを紹介し、HIDで生活した経験のある学生へのインタビューを通して、HIDにおける日本語学習に関する支援が、学生の日本語会話学習に対する動機付けや日本文化の理解に影響を与えていることを明らかにした。また、齊藤・黄・小城(2011)は、2011年1学期にHID生とそうでない学生を対象にアンケート調査を実施した結果を分析し、齊藤(2011)の結論を統計的に証明している。そこで、ここでは2011年2学期に留学生の数が増え、1室を除く全ての部屋で韓国の学生と日本人留学生が生活を共にすることになったのをきっかけにして、留学生の数の増加が韓国人大学生の日本語学習に対する学習認知、学習努力、学習興味、自信

感、および社会性に関する意識に影響を及ぼすか否かについて調査することにした。

3. 調査の概要

2011年の1学期末(2011年6月)に、HID生33名と、日本語を学習しているがHID生ではない学生61名、計94名を対象にアンケート調査を実施した。また、2011年の2学期末(2011年12月)にHID日本語寮生29名とHID生でない学生58名、計87名を対象に同様のアンケート調査を実施し、韓国人大学生の日本語学習に関する、学習認知、学習努力、学習興味、自信感、および社会性に対する意識に変化があるかどうかについて考察した。調査紙は、齊藤・黄・小城(2011)で作成したものを使用した。調査時は韓国語版の調査紙を使用した。本稿では筆者が日本語に訳したものを示している。調査は授業中に実施し、その場で回収した。尚、調査結果の分析は、SPSSを用い、t検定を行なった。2)

3.1 2011年1学期と2学期のHID生の数

次に2011年1学期と2学期のHID生の数を示す。〈表1〉、〈表2〉のHID日本語生の数をみると、1学期には33名、2学期には30名であったことがわかる。また、1学期には4名であった日本人留学生在が2学期には9名に増えている。HID生の部屋は3人部屋であるので、1学期は11室のうち4室に日本からの留学生在がいて、2学期には10室中9室に日本人留学生在がいたことになる。また、1学期と2学期のHID生には学生の事情により多少の移動がある場合もあるが、1学期に入寮した学生の多くが2学期も残っていた。

<表1> 2011年1学期のHID生の数

外国語	男子学生	女子学生	計
	韓国人学生(外国人学生)	韓国人学生(外国人学生)	
英語	28(5)	40(11)	68(16)
日本語	9(0)	20(4)	29(4)
中国語	5(4)	14(7)	19(11)
ロシア語	2(0)	7(1)	9(1)
	53	104	125(32)

<表2> 2011年2学期のHID生の数

外国語	男子学生	女子学生	計
	韓国人学生(外国人学生)	韓国人学生(外国人学生)	
英語	23(8)	44(7)	67(15)
日本語	7(2)	14(7)	21(9)
中国語	8(1)	10(8)	18(9)
ロシア語	0(5)	7(1)	7(6)
	53	104	153

2) t-検定は、2つの平均値の検定をする時に最もよく使われる統計の方法であり、Nは人数を表わす。また、 $p < 0.01$ ***は、0.1%レベルで有意差があることを示している。

3.2 2011年2学期の調査参加者³⁾

調査参加者は以下に示すとおりであるが、〈表3〉から〈表6〉をみると、HID生29名、HID生でない学生58名であり、合わせて87名であったことがわかる。また、学生の国籍は、日本人が8名、韓国人が79名であった。調査参加者の学年区分をみると、1年生は0名、2年生が22名、3年生が36名、4年生が29名であり、3年生、4年生、2年生の順に多かった。尚、調査参加者の性別は、男性32名、女性55名であり、女性が63、2%を占めていた。但し、調査の際に回答に不備なものもあり、統計処理できた数はHID生21名とHID生でない学生58名、計79名であった。

<表3> HIDの学生とHIDでない学生の数

	頻度	パーセント
HIDの学生	29	33.3
HIDでない学生	58	66.7
合計	87	100.0

<表4> 調査参加者の国籍

	頻度	パーセント
韓国人学生	79	90.8
留学生(日本人)	8	9.2
合計	87	100.0

<表5> 調査参加者の学年区分

	頻度	パーセント
2学年	22	25.3
3学年	36	41.4
4学年	29	33.3
合計	87	100.0

<表6> 調査参加者の性別

	頻度	パーセント
男	32	36.8
女	55	63.2
合計	87	100.0

3.3 調査紙

次に2011年1学期および2学期に使用した調査紙を示すが、調査は調査紙にある各項目に関して1～5の中から一つ選択してもらうという方法で実施した。調査紙の1～5の数字は、「1本当にそう思う 2どちらかというと思う 3どちらでもない 4あまりそう思わない 5全然そう思わない」であった。

<表7> 調査紙

	質問内容	1	2	3	4	5
1	教科書以外の日本語の書物や新聞を読んだ。	1	2	3	4	5
2	日本語のイントネーションが正確になったと思う。	1	2	3	4	5
3	日本語の会話がじょうずになったと思う。	1	2	3	4	5
4	日本語で話すとき恐らなくなった。	1	2	3	4	5
5	日本文化について理解できたと思う。	1	2	3	4	5
6	日本人の学生とよく日本語で話した。	1	2	3	4	5
7	日本人の友達に韓国語を教えることができた。	1	2	3	4	5
8	日本人の友達に日本語を教えてもらった。	1	2	3	4	5
9	色々な国の留学生と友達になった。	1	2	3	4	5
10	留学生に韓国文化を教えてあげることができた。	1	2	3	4	5

3) 本稿は2011年2学期の調査結果を中心に述べているので、ここでは2011年2学期の調査参加者を示している。2011年1学期の調査参加者については、齊藤・黄・小城(2011 p.121)を参照されたい。

11	毎日日本語の勉強をした。	1	2	3	4	5
12	日本語の授業の予習・復習は必ずした。	1	2	3	4	5
13	日本語の単語をたくさん勉強した。	1	2	3	4	5
14	日本語の漢字をよく勉強した。	1	2	3	4	5
15	韓国人の友達とも日本語で話すようにした。	1	2	3	4	5
16	毎日できるだけ日本語で話すようにした。	1	2	3	4	5
17	日本語の文法がよくできるようになった。	1	2	3	4	5
18	日本語の勉強は楽しい。	1	2	3	4	5
19	授業以外に日本語の勉強会があれば参加したい。	1	2	3	4	5
20	今後日本語の勉強をもっと頑張ろうと思う。	1	2	3	4	5
21	日本語の勉強はこれからも続けようと思う。	1	2	3	4	5
22	日本語の勉強は将来役に立つと思う。	1	2	3	4	5
23	日本語作文がじょうずになったと思う。	1	2	3	4	5
24	日本語の聞き取りがよくできるようになったと思う。	1	2	3	4	5
25	日本語のアクセントが正確になったと思う。	1	2	3	4	5
26	卒業後は日本語を使って仕事をしたいと思っている。	1	2	3	4	5
27	日本人学生との交流会があれば参加したい。	1	2	3	4	5
28	自分の学科以外の友達ともなかよくなった。	1	2	3	4	5
29	日本のドラマやアニメーションをたくさんみた。	1	2	3	4	5
30	東日本大震災の影響で日本語学習者が減少すると思う。	1	2	3	4	5

齊藤・黄・小城(2011 pp.122-123)

4. 調査結果

ここでは、調査結果のうち、学生がHID生であるか否かによって有意差がみられた項目と、HID生のうち、学生が日本学科の学生であるか否かによって有意差がみられた項目について述べる。⁴⁾尚、ここでは質問を「Q」で表わし、Q1～Q10を「学習認知」、Q11～Q17を「学習努力」、Q18～Q22を「学習興味」、Q23～Q25を「自信感」、Q26～Q30を「社会性」のように、それぞれの項目を5つのカテゴリーに分類した。⁵⁾

4.1 学生がHID生であるか否かによる有意差がみられた項目

○2011年1学期にHID生であるか否かによって有意差がみられた項目。

- Q6. 日本人の学生とよく日本語で話した。
- Q7. 日本人の友達に韓国語を教えてあげることができた。
- Q8. 日本人の友達に日本語を教えてもらった。
- Q9. 色々な国の留学生と友達になった。
- Q10. 留学生に韓国文化を教えてあげることができた。

4) 2011年1学期の調査結果は、齊藤・黄・小城(2011)によるものである。ここでは2011年2学期の調査結果を中心に述べ、有意差がみられた項目に1学期と共通の項目がある場合には、1学期と2学期の調査結果を示した。

5) 質問項目は「学習認知」10項目、「学習努力」7項目、「学習興味」5項目、「自信感」3項目、「社会性」5項目であり「学習認知」に関する項目を中心に尋ねている。

Q16. 毎日できるだけ日本語で話すようにした。

Q28. 自分の学科以外の友達ともなかよくなった。

2011年1学期にHID生であるか否かによって有意差がみられた項目をみると、「学習認知」(Q6.Q7.Q8.Q9.Q10.)、「学習努力」(Q16.)、「社会性」(Q28.)の категорияにおいて有意差がみられたことがわかる。

○2011年2学期にHID生であるか否かによって有意差がみられた項目。

Q3. 日本語の会話がじょうずになったと思う。

Q4. 日本語で話すとき恐くなくなった。

Q6. 日本人の学生とよく日本語で話した。

Q7. 日本人の友達に韓国語を教えてあげることができた。

Q8. 日本人の友達に日本語を教えてもらった。

Q9. 色々な国の留学生と友達になった。

Q10. 留学生に韓国文化を教えてあげることができた。

Q13. 日本語の単語をたくさん勉強した。

Q16. 毎日できるだけ日本語で話すようにした。

Q21. 日本語の勉強はこれからも続けようと思う。

2011年2学期にHID生であるか否かによって有意差がみられた項目をみると、「学習認知」(Q3.Q4.Q6.Q7.Q8.Q9.Q10.)、「学習努力」(Q13.Q16.)、「学習興味」(Q21.)の категорияにおいて有意差がみられたことがわかる。

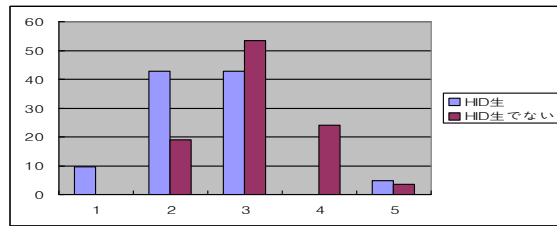
また、1学期と2学期の結果を比べてみると、2学期の方が1学期に比べて、より多くの項目で有意差がみられたことがわかる。1学期に有意差がみられた項目のうちQ28.以外は全て有意差がみられ、1学期には有意差がみられなかった、Q3.Q4.(「学習認知」)、Q13.(「学習努力」)、Q21.(「学習興味」)の4項目においても有意差がみられたのである。Q28.(「社会性」)は、1学期には有意差がみられたが、2学期に有意差がみられなかった項目であるが、その理由を明確にすることは困難であるが、1学期のHID生の方が2学期のHID生より、学科にこだわらず幅広く友達になろうとしていたことがわかる。

次に2011年2学期の調査で有意差がみられた項目をグラフで示す。6)尚、調査結果はカテゴリーごとにまとめてある。

○ 「学習認知」の categoriaにおいて有意差がみられた項目

○ [Q3]日本語の会話がじょうずになったと思う。

6) 1学期と2学期で有意差がみられた項目が共通している場合は1学期の調査結果もグラフで示した。但し、t検定の結果は2学期のものだけを示している。



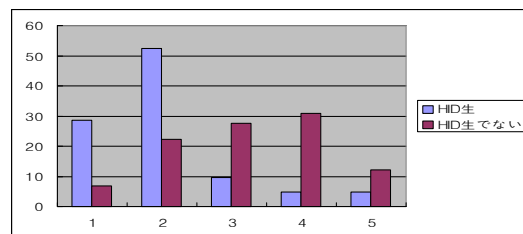
<図1>日本語の会話がじょうずになったと思う学生(2学期)

<表8> 日本語の会話がじょうずになったと思う学生(2学期)

集団	N	平均	標準偏差
HIDでない学生	58	3.12	.751
HIDの学生	21	2.48	.873
t値 = 3.226 , df = 77 , P = .002 (p<.01**)			

Q3は、1学期の調査ではHID生とHID生でない学生の調査結果に有意差がみられなかったが、2学期には有意差がみられた項目である。調査の結果から、HIDで生活する学生の方がHID生でない学生に比べて、日本語の会話がじょうずになったと思う、と答えている学生が多い。1と答えた学生は9.5%、2と答えた学生は42.9%であった。

○ [Q4]日本語で話すとき恐らなくなった。



<図2>日本語で話すとき恐らなくなった学生。(2学期)

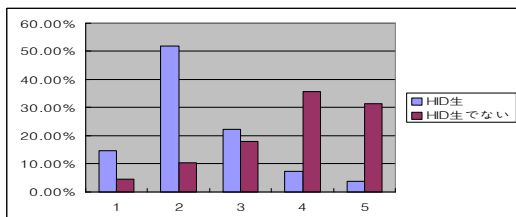
<表9> 日本語で話すとき恐らなくなった学生。(2学期)

集団	N	平均	標準偏差
HIDでない学生	58	3.19	1.131
HIDの学生	21	2.05	1.024
t値 = 4.061 , df = 77 , P = .000 (p<.001***)			

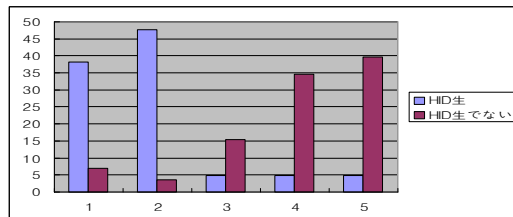
Q4も1学期の調査ではHID生とそうでない学生の調査結果に有意差がみられなかったが、2学期の調査結果では有意差がみられた項目である。HID生はそうでない学生に比べて、日本語で話すとき恐らなくなったと答えたのである。これは、10室中9室の学生が日本人学生と生活を共にすることに

よって日本語で話すことに慣れ、恐くなくなったと思われる。1と答えた学生が28.6%、2と答えた学生が52.4%であった。

○ [Q6]日本人の学生とよく日本語で話した。



<図3>日本人の学生とよく日本語で話した学生(1学期)



<図4> 日本人の学生とよく日本語で話した(2学期)

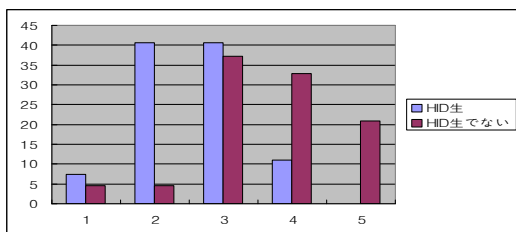
<表10> 日本人の学生とよく日本語で話した学生(2学期)

集団	N	平均	標準偏差
HIDでない学生	58	3.97	1.154
HIDの学生	21	1.90	1.044

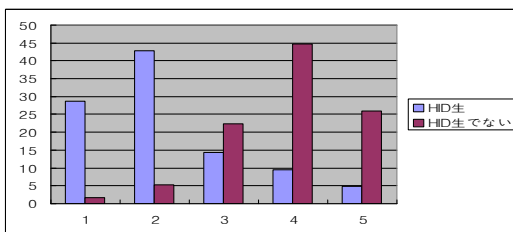
t値 = 7.182 , df = 77 , P = .000 (p<.001***)

Q6.の1学期と2学期の結果を比較してみると、HID生のうち1学期に1と答えた学生が14.8%であり、2と答えた学生が51.9%であったのに対して、2学期に1と答えた学生は38.1%、2と答えた学生は47.6%であった。これにより、日本人学生が増えた2学期の方が1学期に比べて、日本人とよく日本語で話したと答えている学生が増加したことがわかる。

○ [Q7]日本人の友達に韓国語を教えてあげることができた。



<図5>日本人の友達に韓国語を教えてあげることができた学生(1学期)



<図6>日本人の友達に韓国語を教えてあげることができた学生(2学期)

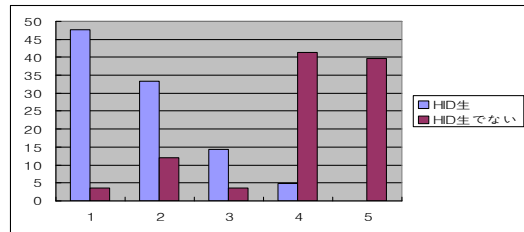
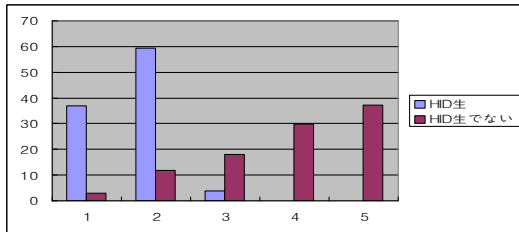
<表11> 日本人の友達に韓国語を教えてあげることができた学生(2学期)

集団	N	平均	標準偏差
HIDでない学生	58	3.88	.919
HIDの学生	21	2.19	1.123

t値 = 6.792 , df = 77 , P = .000 (p<.001***)

Q7.については、HID生のうち1学期に1と答えた学生は7.4%であり、2と答えた学生は40.7%であり、1と2の合計は48.1%であった。これに対して、2学期に1と答えた学生は28.6%、2と答えた学生は42.9%であり、1と2の合計は71.5%になる。図5、図6をみると、2学期に1と答えた学生がかなり増えていることがわかる。

○ [Q8]日本人の友達に日本語を教えてもらった。



<表7>日本人の友達に日本語を教えてもらった学生(1学期)

<表8>日本人の友達に日本語を教えてもらった学生(2学期)

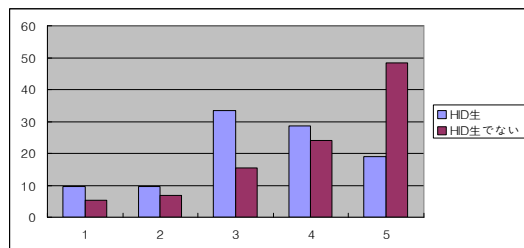
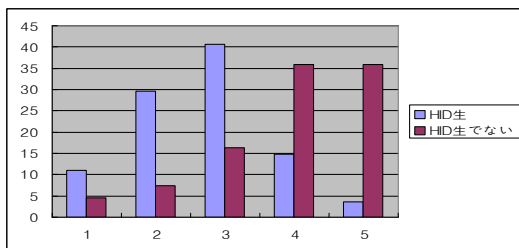
<表12> 日本人の友達に日本語を教えてもらった(2学期)

集団	N	平均	標準偏差
HIDでない学生	58	4.02	1.116
HIDの学生	21	1.76	.889

t値 = 8.341 , df = 77 , P = .000 (p<.001***)

Q8.においては、HID生のうち1学期に1と答えた学生は37.0%、2と答えた学生は59.3%であり、1と2の合計は96.3%であった。これに対して、2学期に1と答えた学生は47.6%、2と答えた学生は33.3%であり、1と2の合計は80.9%であった。HIDには「チューター授業」があり、基本的には寮生全員が日本人の友達に日本語を教えてもらっていることになるのであるが、チューターの授業方法や学生の学習スタイルによって学生の認識が異なっていると思われる。

○ [Q9] 色々な国の留学生と友達になった。



<表9>色々な国の留学生と友達になった学生(1学期)

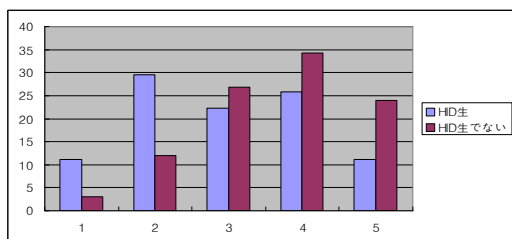
<表10>色々な国の留学生と友達になった。(2学期)

<表13> 色々な国の留学生と友達になった学生(2学期)

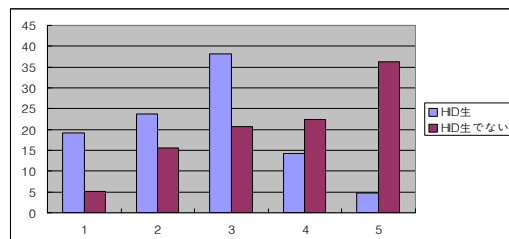
集団	N	平均	標準偏差
HIDでない学生	58	4.03	1.184
HIDの学生	21	3.38	1.203
t値 = 2.158 , df = 77 , P = .034 (p<.05*)			

Q9.については、HID生のうち1学期に1と答えた学生が11.1%、2と答えた学生が20.6%であり、2つ合わせると40.7%である。これに対して、2学期には、1と答えた学生も2と答えた学生も9.5%であり、2つの合計は19%であった。これにより、この項目に関しては2学期より1学期の方が、色々な国の留学生と友達になったと答えた学生が多かったことがわかる。これは、2学期には同室に日本人学生がいるので色々な国の留学生と友達になったと認識している学生が少ないということなのであろうか。

○ [Q10] 留学生に韓国文化を教えてあげることができた。



<図11>留学生に韓国文化を教えてあげることができた学生(1学期)



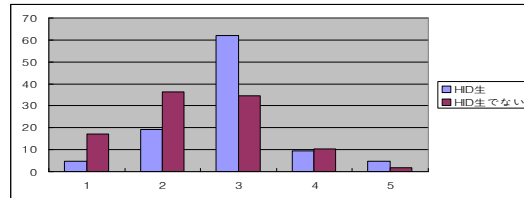
<図12>留学生に韓国文化を教えてあげることができた学生(2学期)

<表14>留学生に韓国文化を教えてあげることができた(2学期)

集団	N	平均	標準偏差
HIDでない学生	58	3.69	1.259
HIDの学生	21	2.62	1.117
t値 = 3.434 , df = 77 , P = .001 (p<.01**)			

Q10.に関しては、1学期に1と答えたHID生は11.1%、2と答えた学生は29.6%であり、1と2の合計は40.7%になる。また、2学期の結果をみると、1と答えた学生が19.1%、2と答えた学生が23.8%であり、1と2の合計は43.5%になる。1学期に比べて2学期のほうが1と答えた学生が増加し、2と答えた学生が減少したが、1と2の合計は2学期のほうが、やや増加したといえる。

- 「学習努力」の категорияにおいて有意差がみられた項目
- [Q13]日本語の単語をたくさん勉強した。



<図13>日本語の単語をたくさん勉強した学生(2学期)

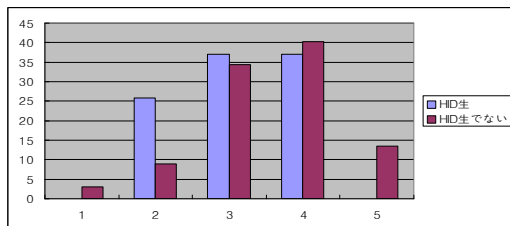
<表15>日本語の単語をたくさん勉強した学生(2学期)

集団	N	平均	標準偏差
HIDでない学生	58	2.43	.957
HIDの学生	21	2.90	.831

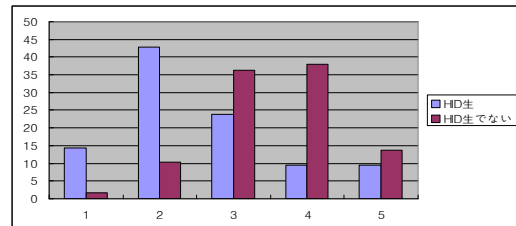
t値 = -2.147 , df = 40.550 , P = .038 (p<.05*)

Q13.は、1学期には有意差がみられなかったが2学期の調査結果では有意差がみられた項目である。図13.をみると1または2と答えた学生は、HID生より、HID生でない学生のほうが多いことがわかる。

- [Q16]毎日できるだけ日本語で話すようにした。



<図14>毎日できるだけ日本語で話すようにした学生(1学期)



<図15>毎日できるだけ日本語で話すようにした学生(2学期)

<表16>毎日できるだけ日本語で話すようにした学生(2学期)

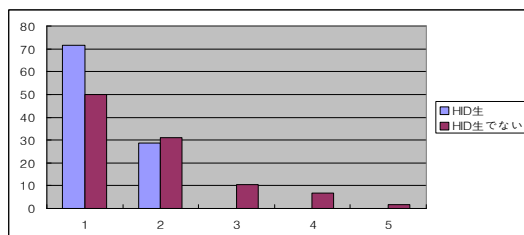
集団	N	平均	標準偏差
HIDでない学生	58	3.52	.922
HIDの学生	21	2.57	1.165

t値 = 3.747 , df = 77 , P = .000 (p<.001***)

Q16.に関しては、1学期に1と答えたHID生はいなかったが、2と答えた学生が25.9%いた。一方2学期の結果をみると、1と答えた学生が14.3%、2と答えた学生が42.9%いた。これをみると、日本人学生が増加したことにより毎日できるだけ日本語で話すようにしたと答えたHID生がかなり増えたことが

わかる。これは、日本人留学生と生活を共にしていることによる当然の結果といえよう。

- 「学習興味」の категорияにおいて有意差がみられた項目
- [Q21]日本語の勉強はこれからも続けようと思う。



<図16>日本語の勉強はこれからも続けようと思う学生(2学期)

<表17>日本語の勉強はこれからも続けようと思う学生(2学期)

集団	N	平均	標準偏差
HIDでない学生	58	1.79	1.005
HIDの学生	21	1.29	.463

t値 = 3.054 , df = 72.445 , P = .003 (p<.01**)

Q21は、1学期には有意差はみられなかったが、2学期に有意差がみられた項目である。HID生の結果をみると、1と答えた学生が71.4%で、2と答えた学生が28.6%であり、2つを合わせると100%になることがわかる。これにより、日本人留学生と生活を共にすることにより、HID生の日本語学習に対する学習意欲が高くなることが明らかにされた。

4.2 HID生が日本学科であるか否かによって有意差がみられた項目

ここでは、HID生が日本学科の学生であるか否かによって、有意差がみられた項目について言及する。1学期の調査結果では、「学習認知」(Q2.)、「学習努力」(Q13.)、「社会性」(Q26)の категорияで3項目において有意差がみられたが、2学期の調査結果では、「学習努力」(Q11. Q12.)「学習興味」(Q20.)、「社会性」(Q26. Q28.)の categoriaで5項目に有意差がみられた。これをみると、1学期と2学期の共通項目は「社会性」のQ26.だけであることがわかる。各項目の内容は次のようである。尚、1学期の調査参加者はHID生27名のうち、日本学科が15名であり、日本学科以外の学生が12名であった。また、2学期の調査参加者はHID生21名のうち日本学科が12名、日本学科以外の学生は9名であった。

- 1学期にHID生が日本学科の学生であるか否かによって有意差がみられた項目。
- Q2. 日本語のイントネーションが正確になったと思う。

Q13. 日本語の単語をたくさん勉強した。

Q26. 卒業後は日本語を使って仕事をしたいと思っている。

1学期にHID生が日本学科の学生であるか否かによって有意差がみられた項目をみると、「学習認知」(Q2.)、「学習努力」(Q13.)、「社会性」(Q26.)において有意差がみられたことがわかる。

○2学期にHID生が日本学科であるか否かによって有意差がみられた項目。

Q11. 毎日日本語の勉強をした。

Q12. 日本語の授業の予習・復習は必ずした。

Q20. 今後日本語の勉強をもっと頑張ろうと思う。

Q26. 卒業後は日本語を使って仕事をしたいと思っている。

Q28. 自分の学科以外の友達ともなかがよくなった。

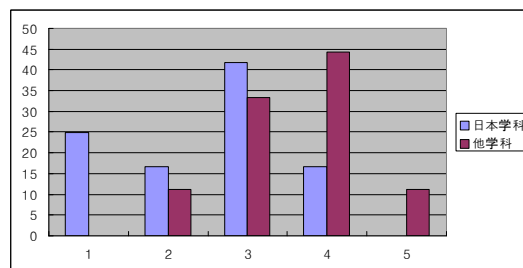
2学期にHID生が日本学科であるか否かによって有意差がみられた項目をみると、「学習認知」の категорияに属する項目はなく、「学習努力」(Q11.Q12.)、「学習興味」(Q20.)、「社会性」(Q26.Q28.)に属する項目において有意差がみられたことがわかる。

1学期と2学期の調査結果を比較すると、1学期に有意差がみられた項目では、すべて日本学科の学生が、他の学科の学生より「1」または「2」を多く選んでいた。また、2学期の調査結果についても、Q28以外は、日本学科の学生が他の学科の学生より、「1」または「2」を多く選んでいた。このように、同じくHID生であっても、学科によって調査結果が異なることが明らかになった。また、2学期の調査で有意差がみられた「Q11.毎日日本語の勉強をした。」「Q12.日本語の授業の予習・復習は必ずした。」「Q20.今後日本語の勉強をもっと頑張ろうと思う。」は、1学期には有意差がみられなかった項目であるが、これらは「学習努力」や「学習興味」の categoriaに属する項目であり、日本人留学生が増えたことが学生の意識に影響を及ぼした結果であると思われる。

次に2学期の調査結果で有意差がみられたQ11.Q12.Q20.Q26.Q28.の調査結果をグラフで示す。

○「学習努力」の categoriaにおいて有意差がみられた項目

○ [Q11]毎日日本語の勉強をした。



<図17>毎日日本語の勉強をした学生

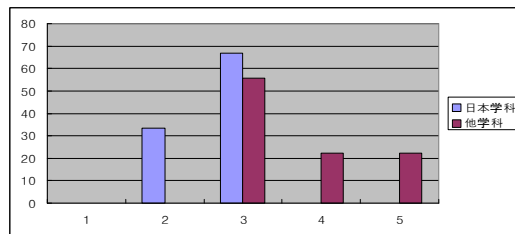
<表18>毎日日本語の勉強をした学生

集団	N	平均	標準偏差
日本学科でない学生	12	2.50	1.087
日本学科の学生	9	3.56	.882

t値 = -2.380 , df = 19 , P = .028 (p<.05*)

Q11.で1を選んだ日本学科の学生は25.0%、2と答えた学生は16.7%であり、2つあわせると41.7%になる。これは3を選んだ学生と同じパーセンテージであった。

- [Q12]日本語の授業の予習・復習は必ずした。



<図18>日本語の授業の予習・復習は必ずした学生

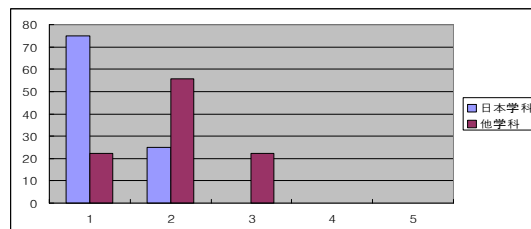
<表19>日本語の授業の予習・復習は必ずした学生

集団	N	平均	標準偏差
日本学科でない学生	12	2.67	.492
日本学科の学生	9	3.67	.866

t値 = -3.108 , df = 11.843 , P = .009 (p<.01**)

Q12.では、1を選択した学生はいなかったが、2を選択した日本学科の学生が33.3%いた。3を選択した学生は66.7%であったので、2と3を合わせると100%になる。

- 「学習興味」の категорияにおいて有意差がみられた項目
- [Q20]今後日本語の勉強をもっと頑張ろうと思う。



<図19>今後日本語の勉強をもっと頑張ろうと思う学生

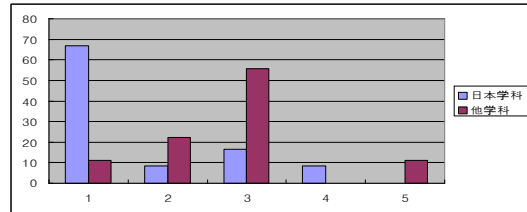
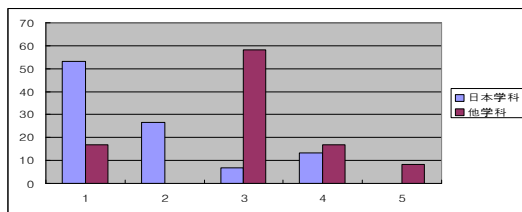
<表20>今後日本語の勉強をもっと頑張ろうと思う学生

集団	N	平均	標準偏差
日本学科でない学生	12	1.25	.452
日本学科の学生	9	2.00	.707

t値 = -2.966 , df = 19 , P = .008 (p<.01**)

Q20.で1を選択した日本学科の学生は75.0%であり、2を選択した学生は25.0%であった。2つ合わせると100%になる。日本人留学生の存在は、日本学科の韓国人学生の学習意欲を高めていると思われる。

- 「社会性」のカテゴリーにおいて有意差がみられた項目
- [Q26]卒業後は日本語を使って仕事をしたいと思っている。



<図20>卒業後は日本語を使って仕事をしたい学生(1学期) <図21>卒業後は日本語を使って仕事をしたい学生(2学期)

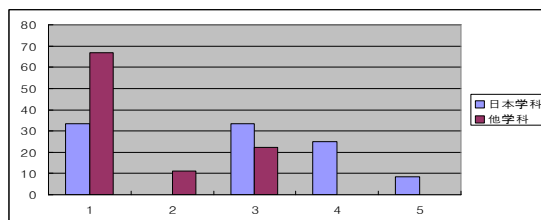
<表21>卒業後は日本語を使って仕事をしたいと思っている学生

集団	N	平均	標準偏差
日本学科でない学生	12	1.67	1.073
日本学科の学生	9	2.78	1.093

t値 = -2.330 , df = 19 , P = .031 (p<.05*)

Q26.で、2学期に1と答えた日本学科の学生は66.7%、2と答えた学生は8.3%であった。1と2の合計は75.0%であり、日本学科以外の学生に比べて、かなり多いことがわかる。また、1学期より2学期に1と答えた学生が増えたこともわかる。これは日本学科の学生の特性であるとも思われるが、2学期になって、卒業後は日本語を使って仕事をしたいと思う気持が強くなった学生が増加したことがわかる。

- [Q28]自分の学科以外の友達ともなかよくなった。



<図22>自分の学科以外の友達ともなかよくなった学生

<表22>自分の学科以外の友達ともなかよくなった学生

集団	N	平均	標準偏差
日本学科でない学生	12	2.75	1.422
日本学科の学生	9	1.56	.882

t値 = 2.213 , df = 19 , P = .039 (p<.05*)

Q28.の調査結果をみると、日本学科の学生に比べて日本学科以外の学科の方が、自分の学科以外の友達とも仲良くなった、と答えた学生がかなり多かったことがわかる。これは、日本学科の学生が、同じ学科の学生と仲が良いために、他学科の学生とはあまり付き合いがなかったのではないか、とも思われるが、今回の調査だけでは理由を断定することは困難であると思われる。

以上の調査結果をみると、「学習努力」(Q11.Q12.)、「学習興味」(Q20.)、「社会性」(Q26.Q28.)のうち、Q28.を除くQ11.Q12.Q20.Q26.において日本学科の学生の多くが他の学科の学生に比べて、「Q11.毎日日本語の勉強をした。」「Q12.日本語の授業の予習・復習は必ずした。」「Q20.今後日本語の勉強をもっと頑張ろうと思う。」「Q26.卒業後は日本語を使って仕事をしたいと思っている。」と答えた学生が多かったことがわかる。これは学科の特性であるともいえるが、1学期に比べて2学期に有意差がみられた項目が増加したのは、日本人留学生の影響もあると思われる。また、「Q28. 自分の学科以外の友達ともなかよくなった。」において、日本学科の学生に比べて日本学科以外の学生の方が、自分の学科以外の友達とも仲良くなった、と答えた学生がかなり多かったのは、日本学科の学生が日本学科の学生同士で友達関係を構築していたためであるとも考えられるが、今回の調査結果だけでは、その理由を明らかにするのは困難であると思われる。

5. おわりに

本稿は、韓国の大学の外国語寮である、HIDにおける日本語学習に関する研究である。ここでは、日本人留学生が4名であった2011年の1学期と、留学生が9名に増え、1室を除く全ての寮室において韓国人学生と日本人学生が生活を共にすることになった2学期に、韓国人大学生の日本語学習に対する学習認知、学習努力、学習興味、自信、および社会性に関する意識に変化がみられたか否かについて言及した。まず、HID生とそうでない学生を対象に調査し、1学期と2学期の調査結果を比較した。次に、HID生が日本学科であるか否かについても同じように調査し、結果を比較した。

○HID生とそうでない学生との間で有意差がみられた項目

調査結果をみると、HID生とそうでない学生の間には、「Q3.日本語の会話がじょうずになったと思う。Q4.日本語で話すとき恐くなくなった。Q6.日本人の学生とよく日本語で話した。Q7.日本人の友達に韓国語を教えてあげることができた。Q10.留学生に韓国文化を教えてあげることができた。」(「学習認知」)、「Q16.毎日できるだけ日本語で話すようにした。」(学習努力)「Q21.日本語の勉

強はこれからも続けようと思う」(「学習興味」)において有意差がみられ、いずれもHID生の方が、そうでない学生に比べて「1本当にそう思う」または「2どちらかというと思う」と答えた学生が多かったことが明らかになった。また、2学期のほうは、より肯定的な回答が増加したこともわかった。特に、「Q3.日本語の会話がじょうずになったと思う。Q4.日本語で話すとき恐くなくなった」のような項目や、「Q21.日本語の勉強はこれからも続けようと思う」のような自信や学習意欲を高めるような良い結果が出たのは、日本人留学生が増加したと関係があると思われる。しかし、「Q13.日本語の単語をたくさん勉強した」についてはHID生よりHID生でない学生の方が肯定的であった。

○HID生であっても日本学科であるか否かによって有意差がみられた項目

HID生であっても日本学科であるか否かによって有意差がみられた項目に関しては、2学期に「Q11.毎日日本語の勉強をした。Q12.日本語の授業の予習・復習は必ずした。」(「学習努力」)、「Q20.今後日本語の勉強をもっと頑張ろうと思う。」(「学習興味」)、「Q26.卒業後は日本語を使って仕事をしたいと思っている」(「社会性」)において日本学科の学生がそうでない学生より肯定的な回答をしたことが明らかになった。特に「Q20.今後日本語の勉強をもっと頑張ろうと思う」に関しては、日本学科の学生は、1または2を選択した学生の合計が100%になり、日本人学生の存在が日本学科の学生の学習意欲を高めていると思われる。しかし、「Q28.自分の学科以外の友達ともなかよくなった」については、日本学科の学生より他の学科の学生の方が肯定的な回答をした人が多いことが明らかになった。

○1学期と2学期の調査結果比較

1学期と2学期の調査結果を比較すると、2学期のほうに有意差がみられた項目が多く、肯定的な回答が増加したことも明らかになった。このことは2学期により多くの韓国人大学生が日本人留学生と生活を共にしたことと関連があると思われる。

尚、今後の課題として、韓国大学生と生活を共にすることによって生じる日本人学生の韓国語学習への影響についても研究する必要があると考えている。

◀ 参考文献 ▶

- 大野愛子(2002)「シオン寮在寮生の寮生活に関する意識」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』10pp.103-124
 加納孝代(2002)「思い出の中のシオン寮-女子大学の教育寮での二年間-」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』10 pp.125-138
 齊藤明美(2011)「HIDにおける日本語教育支援への取り組み-2007年度の取り組みと学生へのインタビューを中心に-」『日本語学研究』第32輯 韓国日本語学会 pp.105-119
 齊藤明美・黄慶子・小城彰子(2011)「HIDにおける日本語会話指導について-2011年6月のアンケート調査結果を中心に-」『日本語文学』第51輯 韓国日本語学会 pp.117-141
 鈴木在乃(2010)「日本の大学における留学生宿舍提供の現状と課題」『日本建築学会大会学術講演幾梗概集』pp.1521-1522

鈴木杏理・元岡展久・桂瑠以(2012)「女子大学学生寮における寮室と共用空間の構成」『お茶の水女子大学教育機構紀要』2 pp.14-21

瀧口三千弘・前田弘隆・吉廣晃・梶原和範・池田晶・徳田太郎(2012)「学寮運営の現状と課題」『広島商船高等専門学校紀要』34 pp.7-37

中田知生(2012)「ティーンエイジャーにとって『友達』とは -ドイツの寮付き学校の調査から-」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』第49号 pp.55-68

■ 투 고 : 2012. 11. 30.

■ 심 사 : 2012. 12. 15.

■ 심사완료 : 2013. 01. 15.

無生物主語の「させる」構文の 特徴

— 일본어교육의 관점에서 —

안 평 호* · 지 호 순**
ahnph@sungshin.ac.kr · ikkeji@naver.com

<要 旨>

本稿では、無生物主語をとる「動詞+(さ)せる」構文を使役文の一つのタイプとして位置づけた上で、これらの構文について考察を加え、次のようなことを明らかにしている。

- (1) 日本語の使役文のうち、無生物主語をとる構文には少なくとも(1a)及び(4c)のような二つのタイプが存在すること、なお(4c)のタイプに関する区別が重要であることについて述べている。
- (2) 使役文と関連した先行研究においては、無生物主語の使役文をめぐって広い意味での「因果関係」という概念で説明するのが一般的である。しかし、本稿では「因果関係」の外延があまりにも広すぎて、韓国語を母語とする日本語学習者がこれらの構文を学習するのに、「因果関係」という概念はあまり役に立たないという問題について指摘している。
- (3) 無生物主語の使役文に対する成立条件だけでなく、使役文が成立しない条件についても「間接性」及び「自己制御性」という概念と関連づけて説明している。

キーワード： ヴォイス(Voice)、 「無生物主語の使役文」、 「自己制御性」、 「間接性」、 日本語教育

1. 들어가기

본 논문에서는 (1)의 문맥을 구성하는 밑줄 친 문장, 즉 (1a)와 같은 무생물(無生物)의 논항(論項, argument)을 주어(主語)로 하는 「(さ)せる」 구문(構文)과 관련하여 일본어교육의 관점에서 고찰하는 것을 목적으로 한다.

- (1) 「ものまね」という芸が成り立つためには「まねる意味」のある存在が必要である。だが、80年「お笑いスター誕生」でデビュー、今年で25周年を迎えるクロツケの悩みは「まねでも見るひとがわからない人が増えたこと」である。突出した個性を嫌う時代は、ものまね芸人に受難を味わわせる。(毎日050711)¹⁾
(1a) (突出した個性を嫌う)時代は(が)ものまね芸人に受難を味わわせる。

(1a)는 「時代(시대)」라고 하는 무생물(無生物)의 논항을 취하고 있으며, 「味わう(맛보다, 경험하다)+(さ)せる→味わわせる」를 술어(述語)로 한다. 본 논문에서는 「味わわせる」 등과

* 성신여자대학교 일어일문학과 부교수, 일본어학

** 한양대학교 대학원 박사과정 일본어학 전공

1) (毎日050711)은, 2005년 7월 11일에 발행된 『毎日新聞』 기사에서 인용했다는 것을 나타내며, 이하에서는 같은 방법으로 용례의 출전을 표기하기로 하겠다.

같이 「動詞+(さ)せる」를 술어로 하는 문장을 사역문(使役文)의 한 종류로 간주한다. (1a)와 같은 문장은 (2a)에서 (2b)와 같은 파생(派生; derivation) 과정을 거쳐 생성된 것으로 판단할 수 있기 때문이다.

(2a) ものまね芸人が受難を味わう。

(2b) [s 時代が [s ものまね芸人が受難を味わう]せる](s'=sentence)

그뿐만이 아니라, (1a)와 같은 문장, 즉 무생물을 주어로 하는 사역문의 경우는 (3b)와 같은 전형적인 사역문과 비교해 볼 때 특수한 경우라고 할 수 있겠다.

(3a) 子供たちが運動場の掃除をする。(作例)

(3b) 先生が子供たちに運動場の掃除をさせる。

[s 先生が[s 子供が運動場の掃除をする]せる]

(3b)와 같은 사역문은 주체(先生, 선생님)가 제3의 대상(子供たち, 아이들)에게 동작이나 행동을 하게 하는 동사의 성질이라고 하는 사전적인 의미를 고려해 볼 때, (1a)와 같은 사역문은 주어가 무생물이라는 특수성을 갖고 있기 때문이다.²⁾

(1b) ?돌출된 개성을 기피하는 시대는, 흥내를 잘 내는 연예인들에게 수난(견디기 어려운 일들)을 **경험하게 한다**. (번역은 필자에 의함)

한편, (1b)는 (1a)를 한국어로 번역한 문장이다. 한국어를 모국어로 하는 화자들을 대상으로 하는 일본어교육에서 「(さ)せる」에 대응하는 한국어로는 「~게 하다」 「~시키다」 「~하는 대로 버려두다(방해하지 않다, 는 의미)」 등과 같은 형식으로 교육하고 있다는 사실을 고려해 볼 때, (1b)는 일반적인 번역의 한 예(例)가 될 수 있을 것이다.

그러나 이상에서 언급한 내용이 타당하다는 전제 하에서 (1a)와 같은 문장에 대해 재검토해 보면 다음과 같은 문제점을 상정(想定)할 수 있겠다.

첫 번째는 한국어 모어(母語)화자의 한 사람으로서 (1b)과 같은 문장의 문법성(文法性)에 대해서 비문법적(非文法的)은 아니지만 번역 투(套)의 다소 부자연스러운 문장으로 느껴지는 경우가 있다는 사실이다. 지면이 제한되어 있어서 한국어에 대한 자세한 조사결과를 소개할 여유는 없지만 필자의 조사결과에 의하면 (1)과 같은 문맥에서 한국어 모어화자는

2) 사역(使役)의 사전적인 의미에 대해서는 『표준국어대사전』(국립국어원)에서 인용하였다. 사동(使動)이라고도 한다. 또한 (1a)의 특수성 및 (3b)와 같은 전형적인 사동문과의 관계에 관해서는 2절에서 자세히 기술하겠다.

(1c)와 같이 사용하는 경향이 많은 것으로 나타났다.

(1c) 돌출된 개성을 기피하는 시대는, 흥내를 잘 내는 연예인들에게 수난(견디기 어려운 일들)을 경험하게 만든다.

(1d) *突出した個性を嫌う時代は、ものまね芸人に受難を味わわせてくれる。

또한 (1)과 같은 문맥에서는 「味わわせる」를 「味わわせてくれる」와 교체할 수 없으므로 (1d)는 비문법적인 문장이 된다. 한편 (4c)와 같은 문장과 비교해 보기로 하겠다.

(4) ドラマは見て楽しければいいという声もあるが、見た後の余韻に浸り、生き方を少し揺さぶられるような作品にも出会いたい。このドラマはそんな満足感を味わわせてくれる。(毎日050924)

(4a) (視聴者が)そんな満足感を味わう。

(4b) [このドラマが(視聴者が)そんな満足感を味わう]せる]

(4c) このドラマは(視聴者に)そんな満足感を味わわせる。

(4c)는 (4a)가 (4b)와 같은 파생 과정을 거쳐 생성된 것으로 판단되므로 (1a)와 같은 사역문의 한 종류로 판단되지만, (4)의 문맥에서 「味わわせてくれる」와 같이 표현할 수 있다는 것이 (1a)와 대조적이라고 할 수 있겠다.

(5a) ?이 드라마는 (시청자들에게) 그런 만족감을 경험하게(맛보게) 한다.

(5b) ??이 드라마는 (시청자들에게) 그런 만족감을 경험하게(맛보게) 만든다.

(5c) 이 드라마는 (시청자들에게) 그런 만족감을 경험하게(맛보게) 해 준다.

그뿐만 아니라 ((4)의 문맥에서)(4c)에 대한 한국어 번역과 관련해서는, (5a)와 같은 표현이 번역 투(套)의 인상을 주는 것은 (1a)와 동일하다고 할 수 있겠으나, (5b)보다는 (5c)가 보다 자연스럽다는 점은 (1a)와 대조적이라고 할 수 있겠다.

이상에서 살펴본 바와 같이 (1a)와 (4c)는 두 문장 모두 「味わわせる」를 술어로 하는 사역문이라고는 하지만 그 쓰임이나 의미에서 차이가 있다(즉, 같은 무생물주어의 사역문이라고 하더라도 각각의 쓰임이 서로 다르다)는 것을 알 수 있다.

두 번째 문제점은 (1a)와 (4c)와 같은 사역문을 선행연구에서는 모두 인과관계(因果關係)로 파악하고 있다는 사실이다. 예를 들면 사역문과 관련된 대표적인 선행연구의 하나인 사토(佐藤里美, 1990)에서는 무생물주어(사토의 용어로는 「物名詞や出来事名詞」)의 사역문과 관련해서 다음과 같이 규정하고 있다.³⁾

3) 그밖에 닛타(仁田義雄, 2009) 등에서도 넓은 의미에서의 「原因的使役文」으로 규정하고 있다.

主語の位置に物名詞や出来事名詞をすえた使役文は、ひろい意味での因果関係を表現している。 ふつう、ひとえ文は、主語と述語をくみあわせることで、ひとつの出来事をあらわすが、因果関係を表現する使役文は、原因となる出来事と結果となる出来事とのふたつの出来事をむすびつけ、それをひとまとまりのものとしてさしだす。(p. 103)

(주어의 위치에 사물을 나타내는 명사라든지 사태(事態)를 나타내는 명사를 취하는 사역문은, 넓은 의미에서의 인과관계를 표현한다. 보통 단문(單文)은 주어와 술어를 결합시켜 하나의 사태를 표현하지만, 인과관계를 표현하는 사역문은 원인이 되는 사태와 결과가 되는 사태, 와 같이 두 가지 사태를 결합하여 그것을 하나의 사태로 표현한다⁴⁾

위에서 살펴본 바와 같이 사토(1990)를 비롯한 대부분의 선행연구에서는 본 논문에서 다루고 있는 무생물주어의 「(さ)せる」 구문(사역문)을 넓은 의미에서 인과관계로 파악하고 있다.

그러나 본 논문에서는 (1a)와 (4c)을 모두 인과관계로 설명하는 것에는 문제점이 있다고 생각하고 있는데 그 이유는 다음과 같다.

먼저, 사전적인 의미를 조사해 보면 인과관계라고 하는 것은 인과관계를 구성하는 하나의 현상은 다른 현상의 원인이 되고, 그 다른 현상은 먼저의 현상의 결과가 되는 관계를 가리킨다.⁵⁾

(1a) (突出した個性を嫌う)時代は(が)ものまね芸人に受難を味わわせる。

時代(시대) →

芸人が受難を味わう(남의 흉내를 잘 내는 연예인이 수난을 경험하다)

<사태1> <사태2>

(4c) このドラマは(視聴者に)そんな満足感を味わわせる。

ドラマ(드라마) → 視聴者が満足感を味わう(시청자가 만족감을 맛보다)

<사태1> <사태2>

(1a)를 구성하는 두 개의 사태는 <사태1 ; 돌출된 개성을 기피하는 시대(시대가 돌출된 개성을 기피하다)>와 <사태2 ; 흉내를 잘 내는 연예인이 수난을 경험하다>가 될 것이다. (1a)의 경우, 시대가 돌출된 개성을 기피하는 것이 원인이 되어, 흉내를 잘 내는 연예인이 수난을 경험하게 되는 결과를 초래했다, 라는 의미로 해석할 수 있으므로 선행연구에서 주장하는 인과관계로 설명 가능할 것이다.

그러나 (4c)의 경우는 (1a)와 사정이 다르다. (4c)를 구성하는 두 개의 사태는 <사태1 ; 드라마(드라마를 시청하다)>와 <사태2 ; 생활방식이 조금 동요되는 만족감을 맛보다>가 될 것이다. 필자의 직관으로는 (4c)의 경우, 드라마(드라마를 시청하는 것)가 원인이 되어 만족감

4) 인용문에 대한 번역은 필자에 의한 것임.

5) 인과관계에 관한 사전적인 의미에 대해서는 『표준국어대사전』(국립국어원)을 참조하였다.

을 맛보게 되는 결과를 초래했다는 것으로 설명하는 데는 무리가 있다고 판단된다. 즉, (4c)에 관해서는 앞서서도 언급했던 것처럼, (1b)의 해석이 부자연스럽게 느껴진다는 점과 (4)와 같은 문맥에서 「~(さ)せてくれる」와 같이 사용할 수 있다는 점에서도 예상할 수 있듯이 「드라마가 가지는 속성(드라마의 구성 및 내용 등)이 시청자에게 만족감을 맛보게(맛볼 수 있게) 해주다, 또는 드라마를 통해서 시청자들이 만족감을 맛볼 수 있다」와 같은 의미로 해석하는 것이 보다 타당할 것으로 생각하기 때문이다. 이 문장에서 드라마를 인과관계를 구성하는 원인으로 보는 것에는 무리가 있다고 판단된다. 다음 예문들도 인과관계로 파악하는 것은 무리일 것이다.

- (6) 「甲子園には今の教育に欠けているものがある。甲子園は人を育て、変えるんです。(…中略…)甲子園は土がやさしくて、子どもたちにファインプレーをさせてくれる。愛のあるグラウンド、日本一のグラウンドです。」(毎日040213)⁶⁾

마찬가지 이유로 (6)에서 고시엔(甲子園)이 원인이 되어 아이들이 화인플레이를 하는 결과를 초래한다는 것은 대단히 어색한 해석이라고 판단된다. 사토(1990) 등에서도 <넓은 의미로 인과관계를 나타낸다>고 설명하고 있지만, 선행연구에서 말하는 <인과관계>의 외연(外延)이 너무나도 광범위하여 (1a)와 (4c)와 같은 무생물주어의 사역문을 바르게 파악하는데 도움이 되지 않는다는 문제점이 있다.

세 번째 문제점은, 앞에서 언급한 문제점들로 인해서 한국어 모어화자들이 (1a)와 (4c)와 같은 사역문을 바르게 사용하는데 어려움이 있다는 것이다. 이하에서는 무생물주어의 사역문에 대해 그 성립조건을 중심으로 일본어교육의 관점에서 고찰하도록 하겠다.

2. 무생물주어의 사역문에 대한 고찰

본 논문에서는 사역문에 대한 정의와 관련하여 시바타니(柴谷方良, Shibatani Masayoshi) (1973, 1978, 2001)를 참고로 하고 있다. 시바타니(1973, 1978, 2001)는 類型論(Typology)적인 관점에서 세계의 언어를 대상으로 조사하여 사역문에 필수적으로 포함되는 요소로서 다음 세 가지 기준을 들고 있다.

1. 동작주(agent, 또는 행위주라고도 함)가 원인이 되는 행위를 함으로써, 다른 참여자(participant), 즉 동작주가 무언가의 행위를 하거나, 혹은 대상(theme)이 어떤 상태가 된다, 와 같은 결과가 생성된다.

6) (5)의 성립조건 등에 관한 자세한 내용은 池好順(2005)를 참조하기 바란다.

2. 두 개의 사태(Event)(원인과 결과) 사이에는, 원인이 되는 사태가 먼저 일어나며 결과가 되는 사태가 이후에 일어난다는 시간적인 전후관계가 있다(고 화자는 생각하고 있다).
3. 두 개의 사태(Event)(원인과 결과) 사이에는, 원인이 되는 사태가 일어나지 않으면, 결과가 되는 사태는 발생하지 않았다고 하는 완전한 의존관계가 있다(고 화자는 생각하고 있다).

이상의 내용을 간략하게 표로 정리해 보면 다음과 같다.

<그림1>

<유형 I>	동작주의 원인이 되는 행위	→	다른 동작주가 행위를 함
<유형 II>	동작주의 원인이 되는 행위	→	다른 대상이 어떤 상태가 됨
	<사태 1>		<사태 2>

시바타니의 주장에 의하면 <그림1>은 前述한 (3b) 등과 같은 전형적인 사역문을 도식화한 것으로 볼 수 있을 것이다. 구체적으로 <유형 I>의 경우는 (3b), (7c)가 해당되며, <유형 II>는 (8b)가 해당될 것이다.

- (3a) 子供たちが運動場の掃除をする。(作例)
 [s 先生が[s 子供が運動場の掃除をする]せる]
 <사태1> 선생님의 지시 행위 → <사태2> 아이들이 청소를 하다
- (3b) 先生が子供たちに運動場の掃除をさせる。
- (7a) 子供がオムレツの卵を割る。
 [s お母さんが[s 子供がオムレツの卵を割る]せる]
 <사태1> 아이 어머니의 지시 행위 → <사태2> 아이가 오믈렛 달걀을 깨다
- (7b) 初めてのボーイスカウトの日、昼食に玉せん(えびせんべいに目玉焼きを挟んだもの)を作ることになって、子供たちは卵割りに挑戦。でも、我が子は割ったというより握りつぶしたに近く、殻が入り、ただ一人卵を焼くことができなかったのです。次の日から(子供に)朝食のオムレツの卵を割らせることにしました。(毎日031231) (괄호 안은 필자에 의함)
- (7c) お母さんが子供にオムレツの卵を割らせる。

(7c)는 (7b)의 문맥에서 사용된 예이다. 시바타니의 주장에 의하면, (3b), (7c)는 각각 (3a), (7a)와 같은 파생 과정을 거쳐 생성되었으며, 유생물(有生物) 주체인 선생님과 (아이의) 어머니가 제3의 대상인 아이(들)에게 행동을 하게 한다고 하는 전형적인 사역문에 해당된다.

(8a) けがが悪化する。

[s 力士が[s けがが悪化する]せる]

<사태1> 스모선수의 행위 → <사태2> 상처가 악화되다

(8b) 最近の大相撲の低迷の一因は、力士のけがによる休場が挙げられないだろうか。私は常々けがをした力士が、治療に専念できる環境づくりが大切だと思っている。ところが、土俵上のけがによる公傷制度が廃止され、力士が完治しないまま、無理して出場することが少なくない。その結果、**有望な力士がけがが悪化させ**、再起不能となる残念な姿も目にする。

(毎日051005)

(8c) 有望な力士がけがが悪化させる。

(8b)의 문맥에서 사용된 (8c)는 (8a)와 같은 파생 과정을 거쳐 생성된 것으로 판단되며, (3b)(7c)와 다른 점은 <사태2>를 구성하는 사태가 동작주의 의도적인 행위가 아니라 <대상((8c)에서는 상처)의 상태변화>를 나타낸다는 점이다. (3b)(7c)와 (8c)는 <사태2>를 구성하는 사태가 다르다는 차이점이 있으나, <사태1>이 동작주(有生物)의 원인이 되는 행위를 나타낸다는 공통점을 갖는다.

본 논문의 연구 대상인 (1a) 등은 <사태1>를 구성하는 사태가 무생물의 논항을 취한다는 점에서 시바타니가 주장하는 (3b)(7c)와 (8c)와 같은 사역문과는 큰 차이가 있다고 할 수 있다. 유형론적인 관점에서 (1a) 등과 같은 일본어의 사역문이나 (1c) 등과 같은 한국어의 사역문, 즉 무생물주어의 사역문이 어느 정도 일반적인 용법인지, 혹은 일본어나 한국어가 특수한 경우가 아닌지 등에 관해서는 별도의 조사가 필요할 것이며, 무생물주어의 사역문에 대한 연구가 필요한 이유이기도 하다.

이하에서는 무생물주어의 사역문을 구성하는 <사태1>을 분석하는 방법을 통해 무생물주어의 사역문의 성립조건 등에 대해 살펴보기로 하겠다.

3. (1a)와 같은 類型的의 무생물주어 사역문

1절(節)에서도 언급한 바 있지만, (1a)와 같은 유형을 시바타니의 설명에 기초하여 다시 정리해보면 다음과 같이 된다. 먼저 (9a)의 밑줄 친 문장은 (9b)에서 (9c)로의 파생 과정을 거쳐 생성된다.

(9a) 「医は仁術」と聞いていましたが、**戦争は医者の人間性までも喪失させる**のでしょうか。

(毎日050809)

戦争(전쟁) → 医者が人間性までも喪失する(의사가 인간성까지도 상실하다)

<사태1> → <사태2>

(9b) 医者が人間性までも喪失する。

(9c) [s 戦争가 [s 医者が人間性までも喪失する](さ)せる]

또한 (1a)는 구성요소인 <사태1>이 원인이 되어 <사태2>의 결과를 초래한다는 의미가 된다. 이와 같은 유형은 선행연구에서 설명하는 인과관계로 파악할 수 있는 유형이 되겠다. (10)도 마찬가지로 설명할 수 있다.

(10) ただ、海から蒸発してできた雲が雨を降らせるんですけど、そのときに温度が下がるので全部解けることにはならないと予想されています。(毎日030826)

雲(구름) → 雨が降る(비가 내리다)
<사태1> <사태2>

즉 <사태1; 雲(구름)>이 <사태2; 雨が降る(비가 내리다)>라는 강우(降雨) 현상을 일으키는 원인이며, 구름으로 인해 비가 내리는 결과가 생성된다고 하는 인과관계로 파악할 수 있다는 것이다.

이상에서 살펴본 바와 같이 (1a)와 같은 유형은 선행연구에서 말하는 인과관계로 파악 가능한 유형이라고 할 수 있겠다.

4. (4b)와 같은 類型的 無생물주어 사역문

(11) 自然の代名詞である緑は、人の心理を落ち着かせる。(毎日010911)

(12) ただのロウソクと思う人がいるだろうが、ほんのかすかに漂って来る香りが、気分を落ち着かせてくれる。(毎日000225)

(13) 木々の葉が風にそよぐ音、小鳥のさえずり、せせらぎの音が心を和ませる。(毎日050425)

(14) 春の訪れを告げる菜の花は、私たちの心を和ませてくれる。(毎日040209)

(15) 10月中旬の本選は大変なにぎわいを見せるが、実は音楽好きにとって一番興味深いのは予選。次々に出てくる俊英たちの、たとえ未熟であっても個性、志向性の千差万別を味わうことは、時間を忘れさせる。(毎日040816)

(16) ベランダで潮騒(しおさい)を聞きながら飲むワインは時間を忘れさせてくれる。(毎日990729)

(17) 世界と時間の彼方へ旅立ちを語る詩(ザール)を伴い、ヴァイオリンとソプラノの途絶えがちな旋律がときに咆哮(ほうこう)するオーケストラと拮抗しつつ恐ろしいほどに凝縮した時間を体験させる。(毎日991208)

(18) 狂ったスケールの物たちは、日常という現実の中で突然、異次元の幻覚を体験させてくれる。(毎日990718)

(19) (突出した個性を嫌う)時代は(か)ものまね芸人に受難を味わわせる。(毎日050711)

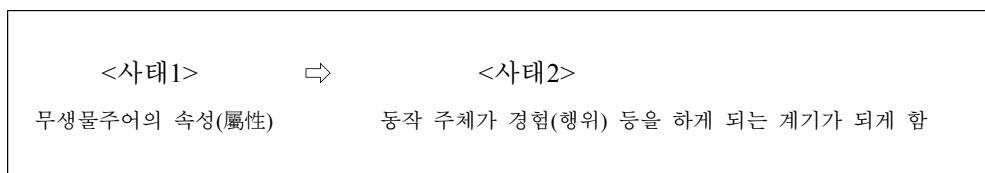
- (20) (少女漫画の「あさきゆめみし」は)素直な解釈と美しい絵で源氏の面白さを少女たちに味わせてくれる。(毎日040210)
- (21) ド라마を生み続ける甲子園は、野球少年を飛躍的に成長させる。(毎日000402)
- (22) 就職活動は正直苦しいが、確実に(私を)成長させてくれる。(毎日040228)
- (23) 複製芸術としての版画の特徴。多くの挿入された版画が読む者を楽しませる。(毎日050410)
- (24) 100円ショップも順調だ。品数の豊富さに加え、「これが100円か」という驚きが、買い物をも楽しませてくれる。(毎日991210)

위 문장들은 『마이니치신문(毎日新聞)』의 기사를 대상으로 하여 (11)의 「(動詞+)(さ)せる→落ち着かせる」와 (12)의 「(動詞+)(さ)せてくれる→落ち着かせてくれる」와 같이 동일한 동사의 「(さ)せる」구문과 「~(さ)せてくれる」구문을 서로 대조시키는 형태로 제시한 것이다.

본 논문에서는 위 예문들의 경우는 「(さ)せる」를 「~(さ)せてくれる」로 교체하거나, 「~(さ)せてくれる」를 「(さ)せる」로 교체하더라도 그다지 의미가 다르지 않다고 판단하고 있으며, 1절(節)에서도 언급한 바와 같이 인과관계로 파악하는데 무리가 있다고 생각한다. 오히려 「<사태1>의 덕택으로, <사태2>를 할 수 있게 되다」, 또는 「<사태1>이, <사태2>를 할 수 있게 해 주다」와 같은 의미가 될 것이다. (13), (14)를 예를 들어 설명하면 다음과 같다. (13)의 <사태1> 즉, 바람에 나뭇잎이 흔들리는 소리, 작은 새의 지저귐, 세류(細流)의 물소리, (14)의 <사태1> 즉, 봄이 왔음을 알리는 유채꽃이 원인이 되어 <사태2>인 마음이 온화해지는 결과를 초래했다고 해석하는 것은 자연스러운 해석이 아닐 것이라는 것이며, 오히려 바람에 나뭇잎이 흔들리는 소리 등의 덕택으로 마음이 온화해졌다, 라는 해석이 보다 자연스러운 해석이라는 주장이다.

필자는 어떤 원인에 의해 생성되는 결과라는 것은 문맥적으로 마이너스적인 의미가 동반되기 쉽다고 생각하고 있으며, 이러한 마이너스적인 의미는 「~(さ)せてくれる」와 같은 「~てくれる」구문과는 호응하기 어려울 것이라는 것은 쉽게 이해할 수 있을 것이다. 「~てくれる」구문은 제3자가 화자(話者)를 위해서 어떤 행위를 한다는 의미, 바꾸어 말하면 <은혜를 입다>는 의미를 나타내는 것이 일반적이기 때문에 마이너스 의미와는 호응하지 않는 것이 일반적이다.

<그림2>



본 논문에서는 (4c)의 유형은 <그림2>와 같이 문장 전체로는 무생물주어 논항의 속성을 서술하는 의미로 파악해야 된다고 생각하고 있다. 실제 이들 문장은 문장의 주체(主體)를 「は」로 표시하는 경우가 대부분이며, 가령 「が」로 표시되었다고 하더라도 구노(久野曄, 1973)가 주장하는 「総記(そうき)」를 나타내는 경우가 될 것이다.

이상에서 살펴본 바와 같이 일본어의 무생물주어 사역문의 경우는 적어도 (1a)와 (4c)의 유형을 구분해야 할 필요가 있다는 점을 재삼 강조해 둔다. (4c) 유형에 관한 보다 자세한 기술은 별도의 논문을 준비하고 있으며 앞으로의 과제로 삼겠다.

4.1. 무생물주어 사역문이 성립되지 않는 경우

본 논문의 연구 대상인 (1a), (4c)의 사역문과 관련하여 일본어교육적인 관점에서 반드시 논의되고 교육되어야 할 내용의 하나로는 이들 구문의 생산성과 관련된 문제점이다. 필자의 조사에 의하면 (10)과 같이 문장을 구성하는 <사태2>가 자연현상을 나타내는 경우는 대단히 특수한 예에 해당된다는 것이다.

- (25) <사태1> → <사태2; 空が晴れる>
 <사태1> → <사태2; 時間が経つ>
 <사태1> → <사태2; 日が暮る> 등

(25)와 같은 구조를 갖는 「晴れさせる」「(時間を)経たせる」「日を暮らせる」 등의 사역문 형태는 말뭉치(corpus)를 대상으로 한 조사에서는 실제로 사용된 예가 존재하지 않았다. 그뿐만 아니라 다음과 같은 구조를 갖는 사역문의 형태도 존재하지 않는 것으로 조사되었다.

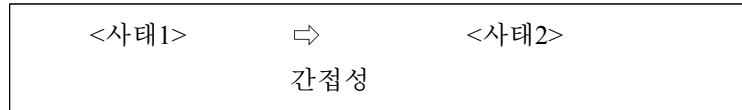
- (26) 무생물주어 논항 → 대상의 상태변화(「NPが Verb」의 구조)
 <사태1> → <사태2; 対象が壊れる>
 <사태2; 対象が膨れる>
 <사태2; 対象が濡れる>
 <사태2; 対象が溶ける>
 (<사태2>의 술어는 論項을 하나 취하며 대응하는 타동사가 있는 자동사)

(26)는 무생물논항 주어(사태1)가 (無生物인)대상(對象, theme)의 상태변화를 일으킨다(사태2), 라는 의미구조를 가지게 되는데 「壊れさせる」「膨れさせる」「濡れさせる」「溶けさせる」 등과 같은 형태로 실제 사용된 예는 발견되지 않았다. 그 이유는 사역문을 분석할 때 본 논문과 같이 시바타니의 주장에 기초하여 복문(複文) 구조로 설명하게 되면, 사역문을 구성하는 <사태2>는 필연적으로 간접성(間接性)을 띠게 된다⁷⁾. 전형적인 사역문의 경우,

7) 간접성(間接性)에 관한 자세한 내용은 사다노부(定延利之, 1991)를 참조하기 바란다.

<사태2>의 주체는 <사태1>의 시킴을 동기로 하여 행위를 하게 되기 때문이다. 예를 들면, (3b)의 경우 아이들은 선생님의 지시로 청소를 하게 되기 때문에 간접적인 행위가 된다는 것이다.

<그림3>



한편 (26)와 같은 구조를 갖는 사역문의 경우, <사태2>의 주체는 무생물 주체가 되기 때문에 의미적으로 <사태1>로 인해서, 또는 <사태1>을 통해서 <사태2>의 주체가 상태를 변화시킨다, 라는 뜻이 될 것이다. 그러나 <사태2>의 주체(對象)는 무생물이므로 자기제어성(自己制御性, self-controllability)을 가질 수 없으므로 비문법적인 문장이 될 것이라고 하는 것은 충분히 예상 가능할 것이다.

5. 결론

본 논문에서는 현대일본어의 사역문 가운데 무생물주어 논항을 주어로 취하는 구문을 대상으로 고찰하여 다음과 같이 주장하였다.

- (1) 일본어의 사역문 가운데 무생물 논항을 주어로 취하는 구문에는 적어도 (1a)와 (4c)와 같은 두 가지 유형이 존재하며, 특히 (4c)의 유형에 대한 구별의 중요성에 대해 기술하였다.
- (2) 무생물주어 사역문과 관련하여 선행연구에서는 넓은 의미의 인과관계로 파악하는 것이 일반적이다. 그러나 본 논문에서는 인과관계의 외연이 너무나도 포괄적이어서 한국어를 모국어로 하는 학습자들이 이들 구문을 학습하기 어렵게 만드는 문제점에 대해 지적하였다.
- (3) 무생물주어 사역문에 대한 성립조건뿐만 아니라, 사역문이 성립하지 않는 경우에 대해서도 <간접성>과 <자기제어성>과 관련해 설명하였다.

◀ 参考文献 ▶

권승림(1994) 「使役文の意味・方法の分類」 『日語日文学研究』, 第24輯. pp. 91-120.
 김경수(2012) 「日本語「させる」に対応する「시키다」と「~하게하다」」 『日本語教育』, 第59輯. pp. 39-53.

- 이정숙(1996) 「日本語非情物使役文に関する一考察」 『日語日文学研究』, 第29輯. pp. 240-258.
- 지호순(2012) 「「~をさせてくれる」構文の意味」 『人文科学研究』 30. pp. 240-261.
- 河上誓作(1996) 『認知言語学の基礎』, 研究社. pp. 112-115.
- 小泉保(2007) 「結合価理論にもとづく新提案」 『日本語の格と文型』, 大修館書店. pp. 36-68.
- 久野暉(1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 久野暉・柴谷方良(1991) 『日本語学の新展開』, くろしお出版. pp. 79-101.
- 佐藤里美(1986) 「使役構造の文—人間の人間にたいするはたらきかけを表現するばあい—」 『ことばの科学1』, むぎ書房. pp. 89-175.
- 佐藤里美(1990) 「使役構造の文(2)—因果関係を表現するばあい—」 『ことばの科学4』, むぎ書房. pp. 103-157.
- 定延利之(1991) 「SASEと間接性」 『日本語のヴォイスと他動性』, くろしお出版. pp. 123-147.
- 柴谷方良(1978) 『日本語の分析—生成文法の方法—』 大修館書店
- 田窪行則(2010) 「推論と知識管理」 『日本語の構造』, くろしお出版. pp. 108-124.
- 寺村秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, くろしお出版
- 仁田義雄(1993) 『日本語のヴォイスと他動性』, くろしお出版. pp. 149-189.
- 仁田義雄(2009) 『現代日本語文法2』, くろしお出版. pp. 257-270.
- 益岡隆志(1987) 『命題の文法』, くろしお出版
- 森山卓郎(1988) 『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院. pp. 60-80.
- Shibatani, M.(2001) Lexical versus periphrastic causatives in Korean, *Journal of Linguistics* 9. pp. 327-373.
- Shibatani, M.(ed.)(2001) *The grammar of causation and interpersonal manipulation*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins

■ 투 고 : 2012. 11. 30.

■ 심 사 : 2012. 12. 15.

■ 심사완료 : 2013. 01. 15.

言語資料로서의 『日韓清對話自在』

李康民*
i-kangmin@hanmail.net

<要 旨>

本稿は、1894年、日本で刊行された『日韓清對話自在』の具体的な内容を学界に紹介し、言語資料として本書の持つ意味を考えてみようとしたものである。

本書『日韓清對話自在』は、その書名が示しているように、日本人に初歩的な韓国語と中国語を習得させるために作られたものであり、日清戦争のような緊迫した国際情勢が、このような多言語学習書の登場を導いた時代的背景になっていると思われる。

調査の結果、本書の日本語は、全体的に明治期日本語の言語現実を反映しているものであり、部分的には文語的な要素も見受けられるものの、近代日本語の資料として資し得る性格のものであることが分かった。また、本書に見られる韓国語の仮名表記には、二重母音に関わる現象など、日本語と韓国語の音韻史研究に活用できる事象が散見されており、今後のより細密な検討が必要であるように思われる。

なお、本書に収録されている韓国語は、近代韓国語の表現、或は語彙史的な側面から興味深い資料的情報を提供し得るものであることが確認できた。

キーワード：『日韓清對話自在』、開化期、多言語学習書、近代日本語、近代韓国語

1. 머리말

本稿는 1894년(明治27)에 간행된 한국어 학습서 『日韓清對話自在』의 내용과 언어자료로서 가지는 가치를 생각해 보고자 한 것이다.

本書『日韓清對話自在』는 그 書名에서 짐작할 수 있듯이 일본인에게 초보적인 한국어와 중국어의 회화를 습득시키기 위하여 제작된 것으로, 이와 같은 다언어 대조 학습서가 출현하게 된 시대적인 배경에는 청일전쟁에 따른 일본사회의 현실적인 요구가 있었다고 할 것이다.

여기에서 개화기에 등장한 다언어 대조 학습서의 흐름을 개관해 보면, 먼저 일본인에게 초보적인 한국어와 영어의 회화를 습득시키기 위하여 1982년에 간행된 『日韓英三國對話』¹⁾가 이 시기에 간행된 최초의 다언어 대조 학습서가 아닐까 생각된다.

이 후, 청일전쟁이 개시되는 1894년에 접어들면 本書『日韓清對話自在』를 비롯하여 『日清韓三國對話會話篇』²⁾ 『獨習速成 日韓清會話』³⁾ 『日清韓三國會話』⁴⁾ 등이 연이어 간행되기에 이른다. 이와 같은 흐름 속에서 러일전쟁이 발발하는 1904년에는 다시 한국어와

* 漢陽大 日本言語·文化學科 教授

1) 李康民(2005) 「1892年刊『日韓英三國對話』에 대하여」 『日本學報』 제63집 참조.

2) 松本仁吉著, 1894년 大阪 中村鍾美堂 발행

3) 吉野佐之助著, 1894년 大阪 明昇堂 발행

4) 坂井夙五郎著, 1894년 東京 松榮堂書店 발행

중국어에 러시아어를 추가한 『日露清韓會話早まなび』⁵⁾ 『日露清韓會話自在』⁶⁾ 등이 등장하는데, 이와 같이 볼 때 당시의 다언어 대조 학습서는 급변하는 국제정세와 함께 변화해왔다고 할 수 있을 것이다.

本稿는 이와 같은 다언어 대조 학습서의 전체적인 흐름을 시야에 넣으면서 本書 『日韓清對話自在』의 언어자료로서의 활용 가치를 생각해보고자 하는 것이다. 이하 먼저 本書의 體裁를 살펴본 후 그 속에 내재되어 있는 언어현상을 검증해 보고자 한다.

2. 本書의 成立과 體裁

앞에서도 언급한 바와 같이, 本書 『日韓清對話自在』는 1894년 9월에 東京 日本橋 鳳林館에서 발행된 본문 127쪽으로 이루어진 중국어 학습을 겸한 한국어 학습서이다. 표지에는 「三國地圖附」 「旅行必用 日韓清對話自在」 「東京 鳳林館發行」으로 기재되어 원래의 서명은 「日韓清對話自在」 앞에 「旅行必用」이란 수식어를 가지고 있음을 알 수 있다. 표지나 內題에는 저자명이 보이지 않으나 本書 말미의 刊記에 「編輯兼發行者 日本橋區上模町十二番地 太刀川吉次郎」으로 기재되어 本書의 저자는 다치가와 기치지로(太刀川 吉次郎)로 추정된다. 단 현재로서는 저자 다치가와 기치지로의 이력을 알 수 있는 자료는 발견되지 않는다. 아울러 本書의 표지와 본문 사이에는 「大日本 支那 朝鮮 三國新圖」로 이름붙인 4장의 지도를 첨부하고 있는데 당시로서는 매우 상세한 지도로서 本書의 표지에 「三國地圖附」라는 문구를 기재한 이유를 수궁할 수 있을 듯하다.

旅行必用	日韓清對話自在
前編	目次
第一章	單語の部
第一	數字
第二	天地日月
第三	物品
第四	食物及び衣類
第五	人、獸、鳥、魚の類

『日韓清對話自在』目次

5) 小須賀一朗著, 1904년 大阪 又問精華堂 발행

6) 1904년 通文書院 발행

本書의 성립 배경을 살펴보기 위해서는 먼저 序文을 참조하는 것이 순서이나 本書에는 序文은 존재하지 않고 다음과 같은 「凡例」만이 목차 앞에 위치한다.

凡例

- 一、本書は朝鮮及び支那の内地を往来する人のために彼地に於て通用する所の日常必要の言語文句を集めたるものなり。
- 一、本書は朝鮮及び支那の日用語と我國の日用語とを対照して之を問答体になせり。
- 一、本書前編は日韓対照にして後編は日清なり。
- 一、本書會話の部に於て前後編共に横断線の上部に在るものは日本語にして其下部に在る仮名は之を韓音或は清音に訳したるものとす。

즉 위의 凡例에 보이는 바와 같이 本書는 당시 조선이나 중국을 왕래하는 일본인들을 위하여 각 지역의 일상어를 수록하였으며 前編에는 일본어와 한국어를, 後編에는 일본어와 중국어를 각각 대응시켜 놓은 것임을 알 수 있다. 또한 회화문에서는 일본어는 상단에, 한국어나 중국어는 하단에 위치시켰으며 한국어나 중국어 공히 한글이나 한자를 사용하지 않고 가나(仮名)를 사용하고 있음을 보여준다. 실제 본문 속에서의 한국어나 중국어는 양쪽 모두 가타가나(片仮名)를 사용하여 음을 표시하고 있다.

한편 本書의 體裁는 크게 나누어 前編(日韓の部)과 後編(日清の部)으로 구성되어 있는데 그 세부 항목은 다음과 같다.

前編(日韓の部)

第一章 單語の部

- 第一 數字
- 第二 天地日月
- 第三 物品
- 第四 食物及び衣類
- 第五 人、獸、鳥、魚の類
- 第六 建築物の類
- 第七 貨幣度量衡
- 第八 地名

第二章 旅行に関する會話

第三章 売買に関する會話

第四章 軍事に関する會話

第五章 雜語

後編(日清の部)

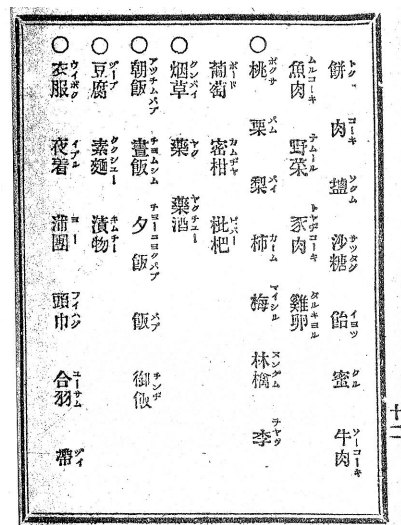
第一章 單語

- 第一 數の部
- 第二 雜の部
- 第三 地名
- 第二章 雜語

위에 제시한 세부 항목에 기재된 내용을 간단히 설명한다면, 먼저 각 편의 제1장에서는 단어를 열거한 다음 제2장 이후에서는 회화문을 수록하고 있다. 또한 단어를 열거할 때에는 처음에 「數字」에서 시작하여 「地名」으로 마무리하는 공통점을 보이고 있다. 다만 「日韓の部」에서는 단어와 회화문이 보다 상세히 세분화되어 있음에 비하여 「日淸の部」에서는 회화문도 「雜語」만 보이는 등, 보다 간략한 내용을 취하고 있다는 점에서 양자는 큰 차이를 보이고 있다고 할 것이다. 실제 본문의 분량을 살펴보면 전체 127쪽 가운데 95쪽까지가 「日韓の部」, 96쪽에서 127쪽까지 분량으로 31쪽에 해당하는 본문이 「日淸の部」에 편입되어 있어, 중국어 학습은 전체 본문의 약 4분의 1에 불과하며 本書의 대부분은 한국어 학습에 할애되어 있다고 해도 무방할 듯하다.

3. 韓國語 本文의 表記 方法

앞에서 언급한 바와 같이 本書의 한국어는 한글이 아닌 가타가나(片仮名)로 표기되어 있다. 그러한 의미에서 本書는 한국어 연구를 위한 가나(仮名)轉寫資料의 일종으로 생각할 수 있을 것이다. 本書의 가나(仮名) 표기가 한국어 음운연구에 접점을 찾을 수 있는 성질의 것인가 하는 점에 있는데 여기에서는 몇몇 표기 현상을 중심으로 本書의 자료적 성질을 생각해 보기로 한다.



「日韓淸對話自在」單語の部

먼저 本書의 한국어 자음 표기에서 주목되는 것은 「ㄱ과 ㅋ」, 「ㄷ과 ㅌ」, 「ㅈ과 ㅊ」이 가나 표기에는 각각 「カ行」 「タ行」 「チ・ツ」를 이용하여 轉寫되어 한국어의 무기음과 유기음의 대립이 구분되지 않고 있다는 점이다.

- 缺 カーウイ (p.10)
- 刀 カル (p.9)
- 足 ターリ (p.14)
- 芋 トラン (p.11)
- 夕 チョニョク (p.8)
- 村 チョン (p.16)

또한 음절말의 [n]은 「ン」으로, [ŋ]은 「グ」로 표기함을 원칙으로 하나 예외도 존재한다.

- 雪 ヌン (p.6)
- 下人 ハイン (p.13)
- 地 タグ (p.6)
- 眼鏡 アンギョグ (p.10)
- 温泉 ヲン초그 (p.7)
- 林檎 ヌングム (p.12)
- 紙 チョング이 (p.10)
- 江 칸그 (p.7)

자음 표기에서 주목되는 또 하나의 현상은 「드」의 표기이다. 이 「드」의 표기는 다음과 같이 「ヅ」와 「ト」의 두 가지 표기 형태로 나타난다.

- 野 즈르 (p.6)
- 提灯 즈그블 (p.10)
- 燈 토그 (p.11)
- 背 토그 (p.10)

아울러 「두」에 대한 표기에 있어서도,

- 豆満江 즈만카그 (p.20)
- 豆腐 즈브 (p.12)

와 같이 나타나 결과적으로 「드」와 「두」의 구별은 어휘 레벨에서 이루어질 수밖에 없는 양상을 보인다.

모음 표기에서 「·와 ㅏ」가 「ア」모음에 대응하는 것은 이미 한국어에서 「·」가 소멸된 시기이기 때문에 당연한 귀결로 보아야 할 것이다. 本書의 모음 표기에서 주목되는 것은 다음과 같은 이중모음에 관련된 표기이다.

- 犬 카이 (p.15)
- 梅 마이シル (p.12)
- 霧 안가이 (p.6)
- 虹 ム치가이 (p.6)
- 車 스레 (p.10)
- 鯨 메키 (p.15)
- 濟州島 첸-게우드 (p.21)
- 巨濟島 코-게우드 (p.21)

한국어에서 이중모음 「ㄱ와 ㅋ」가 단모음화된 것은 18세기 말엽으로 알려져 있으나⁷⁾本書에서는 위에 보이는 바와 같이 「ㄱ」는 이중모음의 형태로, 「ㅋ」는 단모음화된 형태로 나타나는 경향을 보이고 있다. 단 이와 동시에 드물기는 하지만 다음과 같은 단모음화된 「ㄱ」의 형태도 散見된다.

- 泉 セウム (p.7)
- 竹 デーナム (p.16)
- 臍 ぺー코브 (p.14)
- 麻浦 サムゲ (p.21)

이와 같은 용례는 거의 완전히 단모음화된 형태를 반영한 것으로 해석할 수 있으나 이들과 동시에 단모음화의 과정 중인 형태로 해석할 수 있는 용례도 눈에 띈다.

- 鳥 세이 (p.15)
- 鷹 스이 (p.15)

또한 「ㅋ」의 경우도 이중모음의 흔적을 남기고 있는 것으로 보이는 다음과 같은 용례도 확인할 수 있다.

- 蟹 크이 (p.16)

本書의 위와 같은 표기 현상은 한국어의 이중모음의 단모음화가 「ㄱ」보다 「ㅋ」쪽에서 현저하게 빠르게 진행되었다는 점을 示唆해 주는 것으로 해석할 수 있을 듯하다. 아울러 이중모음과 단모음이 혼재하는 「ㄱ」의 표기 현상에 대해서는 금후 보다 면밀한 검토를 필요할 것으로 생각된다.

이중모음의 표기와 더불어 本書의 한국어에 장음 부호를 사용하고 있다는 점도 주의를 요한다. 이것은 주로 한국어 단어의 개음절부에 사용되어지고 있으나 그 사용 조건이 명확하지 않다. 예를 들어,

- 目 ヌーン (p.14)
- 雪 ヌン (p.6)

과 같은 표기 형태는 한국어 고유의 장단음인 「눈(眼), 눈:(雪)」과는 부합하지 않는다. 아울러 장음 부호와 함께 다음과 같이 「우」모음도 장음을 나타내는 데 사용하고 있음을 확인할 수 있다.

- 綿 ソウム (p.13)
- 泉 세우ム (p.7)

이 밖에 주목되는 표기 현상으로서,

7) 李基文(1999) 『新訂版 國語史概說』 태학사, p.212 참조.

- 上衣 ウードッ (p.13) ○ 鮓 ブーゴー (p.15) ○ 舌 세ー (p.14)

와 같은 용례들을 들 수 있을 것이다. 먼저 「우드ッ」과 「부어」는 이들 가나 표기가 형태음소적인 원리에 의한 것이 아니라 연음(liason) 형식의 표기를 보여주고 있다는 점을 주목할 수 있을 듯하다. 이것은 이제까지 검토해왔던 표기 현상과도 맥을 같이한다고 할 수 있다. 또한 「세」는 「혀」의 구개음화된 형태를 보여주는데 이것을 지역성의 문제와 연결시키기보다는 당시의 일반적인 형태를 반영한 것으로 해석해두고 싶다.⁸⁾

이렇게 볼 때, 本書의 한국어 가나(仮名) 표기는 문자를 매개로 한 형태음소적인 文字轉寫方式을 취한 것이 아닌 당시의 발음에 기반을 둔 發音轉寫方式을 취하고 있다고 결론지을 수 있을 듯하다. 따라서 本書의 가나 표기에는 당시의 한국어 음운현상이 일정 부분 반영되어 있을 가능성이 크다고 할 것이다. 이것은 곧 本書가 가지는 자료적인 가치에 의미를 부여할 수 있는 첫 번째 조건이 될 수 있을 것이다.

4. 言語資料로서의 性格

本書가 가나(仮名)轉寫資料로서의 자료적 가치를 지닌다는 사실을 전제로 여기에서는 本書에 보이는 또 다른 언어현상을 일본어와 한국어의 순서로 기술해 두기로 한다.

먼저 일본어 동사활용과 관련하여 本書의 일본어 표기의 특징을 이해해 둘 필요가 있을 것으로 생각된다.

- 咸鏡道は疾く雪が降ったそうです。 (p.29)
- 有ても多くはありません。 (p.40)
- 持てこい。 (p.49)
- 返事を取てきますか。 (p.59)

위의 용례에서 확인할 수 있듯이, 本書의 일본어 표기는 「降った」와 같이 활용형이 표출된 경우도 있으나 대부분은 「有ても」 「持て」 「取て」와 같이 활용형이 드러나지 않는 표기 형태를 취하고 있다. 하지만 아래에 제시한,

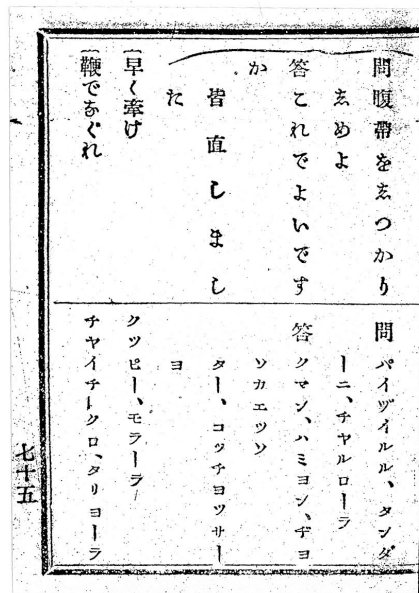
- 足が痛で困ります。 (p.31)
- 負丁一名呼で来い。 (p.73)
- 鹽に水汲で来い。 (p.84)

8) 참고로 게일(James S. Gale)의 『韓英字典』(1897)에서도 표제어 항목으로서 「혀」와 「서」를 동시에 설정해두고 있다.

와 같은 용례는 활용어미의 형태에 의해 音便形을 취하고 있음을 쉽게 짐작할 수 있다. 이와 같은 표기 경향을 바탕으로 위에 제시한 「有ても」「持て」「取て」도 促音便形을 취한 표기 형태로 간주해도 무방하지 않을까 생각된다. 따라서,

○ 草鞋一足買てこい。(p.31)

와 같은 八行5段動詞의 連用形도 促音便形을 취한 것으로 해석하는 편이 적절하지 않을까 생각된다. 이와 같은 추정이 가능하다면 本書의 일본어는 메이지(明治)期の 東京語를 반영하고 있는 것으로 판단할 수 있을 것이다.



『日韓清對話自在』本文

동사활용과 관련하여 명령형의 용례를 살펴보면,

- 火を焚け。(p.46)
- 我れと一所に走れ。(p.40)
- 鞭でなぐれ。(p.49)
- 彼の山に登てみよ。(p.113)
- 此荷を皆船に載せよ。(p.59)
- 鐙が長いから短かくせよ。(p.59)

와 같이, 5段動詞는 「エ段」, 1段動詞와 サ変動詞는 「連用形+よ」의 형태를 취하고 있다. 이와 같은 현상도 메이지(明治)期 일본어의 일반적인 모습을 반영한 것으로 판단된다. 다만,

- 茶碗を能く洗ひ。(p.92)

와 같은 용례의 「洗ひ」는 주의를 요한다. 이 「洗ひ」에 대응하는 한국어는 「シッコーラ」, 따라서 일본어 「洗ひ」도 명령형으로 보는 것이 온당할 것이다. 이와 같은 5段動詞의 連用形이 명령형으로 사용되고 있는 용례의 배경에 대해서는 앞으로의 분석이 필요할 것으로 생각되나 여기에서는 이와 같은 용례의 존재를 지적해두는 데 그치고자 한다.

한편 2段動詞의 1段化와 관련된 현상으로서,

- 此処に火薬拵へる処がありますか。(p.64)
- 考へる。(p.126)

와 같은 용례와 함께,

- 風が吹く時には通ふる事がなりません。(p.36)

와 같이 2段動詞의 殘存形이 확인된다. 이것은 口語 속에 남아있는 문어적인 요소로 해석할 수 있지 않을까 생각된다.

일본어의 존경표현으로서 「お～なさる」 형식이 다용되고 있으며 「お～になる」 형식의 사용도 확인된다.

- 御遠慮なさいますな。(p.26)
- 早く御休みなさい。(p.31)
- 少し御負けなさいませ。(p.50)
- 上等の虎皮ですから御買なさい。(p.57)
- 御わかりになりますか。(p.24)

또한 가능표현으로서는 가능동사와 함께 「れる・られる」 「ことなる」와 같은 형식이 사용되고 있음이 확인된다.

- 鑿がよく切れます。(p.69)
- 彼の山は道がないから登れません。(p.112)
- 腹が痛で堪へられません。(p.71)
- 風が吹く時には通ふる事がなりません。(p.36)

가능표현으로서 사용된 「ことなる」 형식 또한 당시의 口語 속에 남아있는 문어적인 요소로 해석할 수 있을 것이다. 이와 같은 문어적인 요소로서는,

- 明晩御用がなくば御出で下さい。 (p.90)

와 같은 가정조건표현, 아울러,

- 此附近を軍隊が通行せしや。 (p.106)
- 何れに向て進む兵なるや。 (p.111)
- 此様に寒むいにまだ火をださぬか。 (p.118)

와 같은 의문표현 「や」나 부정표현 「ぬ」도 같은 범주 속에서 취급할 수 있는 현상으로 지적해두고 싶다.

한편 本書에 보이는 가나(仮名) 표기에 의한 한국어 속에는 한국어의 어휘사 또는 표현사적인 측면에서 접근할 수 있는 현상이 엿보여 주목을 끈다. 먼저 일본의 翻譯漢字語와 관련된 현상을 제시해보면 다음과 같은 용례를 들 수 있다.

- 蒸汽船 ファーリュウソン (p.10)
- 伝染病 イオンビヨグ (p.15)
- 天然痘 イヨクチル (p.15)

위의 용례는 일본어 「蒸汽船」 「伝染病」 「天然痘」에 대응하는 한국어를 가나(仮名)로 표기한 것들인데, 이들은 각각 「蒸汽船-화륜선」 「伝染病-역병」 「天然痘-역질」과 같이 대응하고 있는 모습을 보여준다. 즉 本書의 시점에서는 아직 한국어에 「증기선」 「전염병」 「천연두」와 같은 문명어는 충분히 정착되지 않은 현실을 보여주고 있는 것이다. 이와 같은 현상은 회화문 속에서도 확인되는 바,

- 案内せよ インド、ハヨラ (p.76)
- 電報打てこい チョンボー、ノッコ、ヲナラ (p.60)

「案内-인도」 「電報を打つ-전보를 놓다」와 같은 대응에서도 당시의 실태를 엿볼 수 있다고 할 것이다. 다만 「警察-경찰」의 경우는 상당히 이른 시기에 한국어 속에 정착되었다고 볼 수 있는 흔적이 다음과 같은 용례로 확인할 수 있다.

- 警察署は何処にありますか キヨグチャルソーン、ラーデーイツ (p.96)

아울러 本書에는 다음과 같이 한국어 「김치」가 등장하고 있어 주목을 끈다.

○ 漬物 キムチー (p.12)

이 「김치」에 대해서는 당시의 일본 관련 문헌 속에서 「침채」나 「침치」의 형태로 등장하는 경우가 있는데 일본에서 간행된 한국어 학습서 속에서 「김치」의 어형을 확인되는 것은 드문 경우라 할 수 있을 것이다. 참고로 같은 시기에 간행된 게일(James S. Gale)의 『韓英字典』(1897)에서는 「침척」와 「김치」의 두 형태로 표제어를 사용하고 있음을 확인할 수 있다.

○ 침척 s. 沈菜(즙길)(나물) Solt pickle. See 김치. (『韓英字典』)

○ 김치 s. 沈菜(즙길-침)(나물-척) Cabbage or radish pickle. See 동침이. (『韓英字典』)

이와 같은 용례들은 그 어느 것이나 당시의 시대성이 반영되어 있는 것으로 한국어의 연구에 귀중한 정보를 제공해 줄 수 있을 것으로 기대된다.

5. 맺음말

지금까지 1894년(明治27)에 일본에서 간행된 한국어 학습서 『日韓清對話自在』의 내용을 소개함과 동시에 일본어와 한국어의 언어사적인 측면에서 本書가 가지는 자료적인 의미를 생각해 보았다.

그 결과 本書에 수록된 일본어는 당시의 현실어를 기반으로 문장어로서의 문어적인 요소가 혼재되어 있음을 어느 정도 확인할 수 있었다. 이와 같은 언어의 중층성은 메이지(明治)期 일본어가 가지는 하나의 특징으로서 인식되어야 하지 않을까 생각한다. 그리고 本書는 이와 같은 메이지(明治)期 일본어의 특징을 반영하고 있는 것으로 해석하고 싶은 것이다.

아울러 本書의 한국어에 대한 가나(仮名) 표기에는 한국어 음운사적인 측면에서 접근할 수 있는 현상이 내재되어 있으며, 특히 어휘 면에서는 근대어휘사적인 측면에서 접근할 수 있는 현상이 적지 않음을 확인할 수 있었다. 이와 같은 문제들을 해결하기 위해서 향후 보다 면밀한 검토의 필요성이 있을 것으로 생각된다.

◀ 参考文献 ▶

- 李康民(2003) 「1893年刊『日韓通話』의 日本語」 『日本語文學』 第17輯
 _____(2005) 「1892年刊『日韓英三國對話』에 대하여」 『日本學報』 第63輯
 _____(2006) 「開化期 日本の 韓國語 學習書」 『日本學報』 第67輯
 _____(2008) 「1896年刊『實地應用 朝鮮語督學書』에 대하여」 『日本語文學』 第39輯
 _____(2010) 「1894年刊『朝鮮語學獨案内』에 대하여」 『日本學報』 第82輯
 大曲美太郎(1936) 「釜山港日本居留地に於ける朝鮮語教育」 『青丘學叢』 24号

桜井義之(1974)「日本人の朝鮮語学研究」『韓』Vol.3 No.7
梶井陟(1978)「朝鮮語學習書の変遷」『三千里』第16号

- 투 고 : 2012. 11. 30.
- 심 사 : 2012. 12. 15.
- 심사완료 : 2013. 01. 15.

各國漢字音의 輕唇音化에 대한 比較考察

— 陽聲・入聲韻을 중심으로 —

李京哲*・李相怡**
kanzi22@empal.com /zzivi@hanmail.net

<要 旨>

本稿では、各国漢字音の比較分韻表を作成して、唐代の秦音で発生した輕唇音がどのように反映されているかについて考察した。その結果、次のような結論に至った。

- 1) 吳音は、南北朝期の南方系字音を母胎にしているので、時期上、輕唇音を反映しない。
- 2) 漢音は、日本語の音韻體系上、p系の重唇音とf系の輕唇音との區別が存在しないので、聲類においては輕唇音の反映が見られないが、韻類には輕唇音を明確に反映している。陽韻・元韻・鍾韻・東3韻・尤韻においては、牙喉音字と唇音字との字音形の相異から確認できるし、凡韻においては、吳音の字音形との比較から確認できる。
- 3) 韓國漢字音は、聲母においては、輕唇音の反映が全然見られない。ただし、韻母においては、輕唇音を反映する層と輕唇音を反映しない層が混在しているが、輕唇音を反映しない層の比率がずっと高い。輕唇音の反映は、元韻の-an/l形と尤韻明母の-o形から確認できるし、文韻・凡韻・廢韻は輕唇音を全然反映していない。
- 4) 越南漢字音は、聲母と韻母、両方とも輕唇音を反映している。まず、聲母においては、幫・並母をbで、非・奉母をphで、そして、明母をmで、微母をvで弁別して受容していることから輕唇音を反映していることがわかる。しかし、聲類、韻類ともに、輕唇音化以前の層が混在している。陽韻の-ɲ/k形、元韻の-an/t形、文韻の-ə.n/t形、鍾韻の-ɔŋ/k形と-ɔŋ/k形、凡韻の-am/p形、東韻の-uŋ/k形と-ɔŋ形は輕唇音化を反映している字音形であり、陽韻の-waŋ/k形、元韻の-jən/t形と-on形、鍾韻の-uŋ形、凡韻の-jəm形は輕唇音化以前の層を母胎にしている字音形であると考えられる。
- 5) チベット資料も、聲母と韻母、両方とも輕唇音を反映している。聲母においては、微母がo、u、wなどの母音で現れることから輕唇音を反映していることがわかる。しかし、聲類、韻類母ともに、輕唇音化以前の層が混在している。元韻の-an/d(r)形は輕唇音化を反映している字音形であり、陽韻の-waŋ形、元韻の-wan/r形と-er形は輕唇音化以前の層を母胎にしている字音形であると考えられる。

キーワード： 輕唇音、重唇音、漢音、明母、字音形

序論

한국한자음, 일본한자음의 吳音과 漢音, 베트남한자음, 티벳 돈황자료는 시기적으로 약간의 차이가 있지만 모두 中古音을 모태로 하고 있다. 따라서 이들 자료는 中古音 음운체계의 재구 및 그 음운변화를 연구하는 데 있어서 서로 비교의 대상이 되는 중요한 자료가 된다.

中古音 내에서 濁字의 次淸字化, 淸濁字의 鼻音性弱화, 輕唇音의 발생, 3등 歛음류의 통합, 1·2등 重韻의 통합 등 여러 가지 음운변화가 발생하였고, 이러한 음운변화는 각국 한

* 동국대학교(seoul campus) 일어일문학과 부교수, 日本語音韻論(제1저자)

** 동국대학교(seoul campus) 대학원 박사과정 수료, 日本語音韻論

자음에 고스란히 반영되어 있다.

韻鏡의 3等韻에는 切韻音까지 重唇音(幫·滂·並·明母)이었던 것이 秦音에서는 輕唇音(非·敷·奉·微母)으로 바뀐 韻이 존재한다. 이는 微·廢·虞·尤·陽·東(3等)·鍾·文·元·凡韻의 10개韻에서 나타나며, 東(3等)韻과 尤韻의 明母를 제외하고는 모두 輕唇音으로 변화하였다. 한국한자음의 輕唇音化에 대해서는 李京哲(2012)에서, 陰聲韻에 대한 한국한자음의 輕唇音化에 대해서는 李京哲·李相怡(2012)에서 논하였다. 본고에서는 이에 이어 陽聲·入聲韻에 해당하는 陽·東(3等)·鍾·文·元·凡韻의 6개韻에 대해 고찰하기로 한다.

본고에서는 輕唇音化가 일어난 10개韻 중 陽聲·入聲韻에 해당하는 6개韻에 대해 일본뫼음, 일본漢音, 한국한자음, 베트남한자음, 티벳자료의 比較分韻表를 작성하여, 각 韻별로 한국한자음에서 輕唇音化가 어떻게 반영되었는지 비교·분석해 가기로 한다. 이를 통해 한국한자음 및 베트남한자음, 티벳자료가 어느 시대의 字음을 母胎로 하고 있는지, 어느 정도의 비율을 포함하고 있는지를 판가름하는 하나의 기준을 마련할 수 있을 것이다.

이하 한국한자음은 다음과 같은 자료를 참조하였다.

한국한자음: 新增類合, 訓蒙字會, 千字文¹⁾

일본뫼음: 法華經, 般若波羅蜜多經, 新譯華嚴經, 光明眞言, 承曆音義, 類聚名義抄²⁾

일본漢音: 蒙求, 群書治要, 三藏法師傳, 本朝文粹, 佛母大孔雀明王經³⁾

베트남한자음: 三根谷徹(1993) 『中古漢語と越南漢字音』의 越南漢字音對照表

티벳한자음: 高田時雄(1988) 『敦煌資料による中國語史の研究』의 分韻表

本論

이하 輕唇音化가 일어난 각 韻별로 각국 漢字音의 比較分韻表를 작성하여 분석해 가기로 한다. 먼저 牙喉音字의 반영예를 제시하고, 이하 唇音字의 반영형을 제시하여, 牙喉音字와 唇音字의 반영형을 비교하여 輕唇音化를 반영했는지 판가름하는 기준이 되도록 하였다. 각 표에서 진하게 표시한 부분이 牙喉音字이며, 나머지 부분이 唇音字이다. 韓國漢字音에 대해서는 SK로, 日本漢字音 중 뫼음에 대해서는 SJG로, 漢音에 대해서는 SJK로, 베트남漢字音에 대해서는 SV로, 티벳자료에 대해서는 ST로 약칭하며, ST는 전기와 후기⁴⁾로 나누었다.

1) 權仁翰(2005)를 참조하였으며, 新增類合은 1957년간 金東旭博士 소장본, 訓蒙字會는 초간본이라고 하는 叡山文庫本과 東京大學中央圖書館本, 千字文은 光州版의 東京大學中央圖書館本과 石峰千字文의 초간본인 日本國立文書官本에 해당한다.

2) 法華經은 小倉肇(1995), 般若波羅蜜多經은 김정빈(2007), 新譯華嚴經은 榎木久薰(1988), 光明眞言은 榎木久薰(1989), 承曆音義는 小倉肇(1979), 類聚名義抄는 沼本克明(1995)의 分韻表를 사용한다.

3) 蒙求·群書治要·三藏法師傳·本朝文粹는 佐々木勇(2009)의 資料編에 실린 分韻表를, 佛母大孔雀明王經은 李京哲(2005)의 分韻表를 사용한다.

4) 티벳 전기자료는 高田時雄의 1류그룹(8-9세기 자료)에 해당하며, 金剛經, 阿彌陀經, 大乘中宗見解, 天地八陽神呪

본고의 比較分韻表는 다음과 같은 원칙으로 작성하였다.

- 1) 中古漢語 多音字의 他韻을 나타내는 字音形은 제외하고 해당 韻을 나타내는 字音形만 기재한다.
- 2) SJG와 SJK에서 다음과 같이 音韻變化에 따른 表記上의 相異는 인위적으로 통일했다.
 - *唇內鼻音韻尾는 「ム」로, 舌內鼻音韻尾는 「ン」으로, 唇內入聲韻尾는 「フ」로, 舌內入聲韻尾는 「ツ」로 통일한다.
 - *母音「ウ」를 「フ」로 表記한 것은 「ウ」로 고쳐 썼다.
 - *ア行·ワ行의 혼동례, 力行合拗音의 혼동례, -au형·-ou형의 혼동례, -eu형·-jau형·-jou형의 혼동례는 古形으로 고쳐 썼다.
 - *SJG에서는 濁字에 濁音符를, SJK에서는 清濁字에 濁音符를 인위적으로 통일해서 표기한다.
- 3) SJK에 나타나는 명백한 吳音形의 혼입이나 SJG에 나타나는 명백한 漢音形은 제외한다.
- 4) SV에서 Chũ Quốc Ngữ表記는 비교의 편의상 聲調表記는 생략하며, 三根谷徹(1993: 268)의 표기에 국제음성기호를 기준으로 다음과 같이 수정한다.
 - ă→a:, â→a:, u→u, ê→e, e→ε, ô→o, o→ə, o→ɔ
 - ia/iê→iə, ua/uô→uə, ua/uô→uə
 - c/q→k, ng→ŋ, y→j
- 5) ST에서도 비교의 편의상, 聲調表記와 '(a-chung)기호는 생략하며, 국제음성기호에 기준하여 다음과 같이 수정한다.
 - ng→ŋ, y→j

1. 陽韻

<表1> 陽韻 輕唇音字의 各國漢字音 比較表

聲母	SJG	SJK	SK	SV	ST전기	ST후기
群g>k ^h	クウ狂	クキヤウ狂	광狂	kuoŋ狂謳	gaŋ狂	o狂
曉h		クキヤウ況郷	황况况	huoŋ况况 hoŋ况		
非f	ハウ方坊防放舫 ホウ方	ハウ方放	방方放防舫	phuəŋ方坊防舫 phəŋ放放	bwaŋ方	pwo方 pho放
敷f ^h	ハウ芳訪	ハウ訪芳髣	방訪芳紡	phuəŋ芳坊仿紡 phəŋ訪	hwaŋ坊 phuŋ坊 phoo紡	
奉v>f ^h	ハウ房防 ハク縛	ハウ房防 ハク縛	방房防舫	phoŋ房防 phuəŋ坊舫 phok縛		pwag縛

經, 法華經普門品, 寒食編, 唐蕃會盟碑, 雜抄, 金剛經코탄文字가 이에 해당한다. 후기자료는 高田時雄의 2류그룹(9세기 이후 자료)에 해당하며, 千字文, 南天竺國菩提達磨禪師觀門, 道安法師念佛讚, 般若波羅密多心經, 法華經普門品이 이에 해당한다.

微 $\eta >^{n}v$	マウ亡望網惘忘妄 バウ忘	ハウ望網罔亡惘 バウ忘	망亡妄忘忙望網罔 芒茫莽蟒網郎錠	man礎錠沚 von亡忘罔惘網網惘 惘妄望	bwan網 bon妄 on妄 phwan望	
-----------------	-----------------	----------------	---------------------	-----------------------------	--------------------------------	--

宕攝의 습口 3等 乙類 陽韻은 切韻音까지 -wian/k이었던 것이 秦音에서 乙類 拗介音 i의 前舌化로 인해 -wian/k로 변하며, 그 脣音字는 輕脣音化로 인해 습口乙類介音 wi를 탈피하고 -an/k으로 변한다.

SJG는 牙喉音字가 -wau/ku형으로 나타나는 반면 脣音字는 모두 -au/ku형으로 나타난다. SJG는 輕脣音化가 일어나는 唐代 이전의 시기를 母胎로 하고 있다는 것이 명확하기 때문에, 먼저 牙喉音字와 脣音字의 字音形 차이는 輕脣音化 이외에서 그 요인을 찾을 수밖에 없다. 즉 脣音字의 경우 脣音 자체의 圓脣性으로 인해 w가 배제된 字音形이 되었을 가능성이 크다.

SJK는 牙喉音字가 -wijau/ku로 나타나는 반면 脣音字는 모두 SJG와 동일하게 -au/ku형으로 나타난다. SJK는 唐代長安音인 秦音을 母胎로 하고 있다는 것이 명확하기 때문에 SJG와 SJK의 字音形의 차이를 통해 唐代 이전과 唐代의 音韻變化를 유추해낼 수 있다. 즉 SJG의 牙喉音字가 -wau/ku형으로 나타나는 것이 SJK에서는 -wijau/ku로 나타나는 것은 陽韻이 切韻音까지 -wian/k이었던 것이 秦音에서 乙類 拗介音 i의 前舌化로 인해 -wian/k으로 변했다는 것을 의미한다. 단지 脣音字는 輕脣音化로 인해 습口乙類介音 wi를 脫皮하고 主母音이 低位後舌化한 -an/k으로 변했기 때문에 -au/ku형으로 나타난다고 볼 수 있다.

SK는 牙喉音字가 -oan/k형으로 나타나는 반면 脣音字는 모두 -an/k형으로 나타난다. 얼핏 보면 唐代의 輕脣音化를 그대로 반영하는 듯한 모습이다. 그러나 이와 같은 牙喉音字와 脣音字의 字音形의 차이는 SJG와 동일한 모습을 보이고 있다. 이는 李京哲(2012:327)에서 언급했듯이 SK 역시 SJG처럼 脣音 자체의 圓脣性으로 인해 습口性이 배제된 字音形이 되었을 가능성이 크다.

SV는 牙喉音字가 -uon/k형으로 나타나는 반면 脣音字는 -uon/k형과 -on/k형이 혼재한다. 朴炳采(1990:66)는 SV에서 陽韻 3·4等 開口音이 모두 -uon으로 반영된 것은 拗音的 요소 i/i 때문에 核母音인 喉舌母音 a가 中舌 쪽으로 당겨진 결과로, i/i가 核母音에 흡수된 형태라고 논하고 있다. 微母字가 von으로 나타나는 字音形으로 판단해 볼 때, 습口性이 배제된 -on/k형은 唐代의 輕脣音化를 반영한 字音形으로, 介音이 나타나는 -uon/k형은 秦音 이전의 층을 반영한 字音形으로 판단된다. 또한 微母에서 man으로 나타나는 字音形은 -uon/k형보다도 오래된 층으로, 가장 오래된 층의 脣音字는 -an/k형이었음을 추측하게 한다. 그렇다면 曉母의 [hoan/恍] 역시 다른 牙喉音字의 -uon/k형보다 오래된 층임을 알 수 있다. 이처럼 SV에는 秦音뿐만 아니라 秦音 이전의 층이 혼재하고 있다.

ST는 牙喉音字가 -an형 또는 開音節化한 -o형으로 나타나며, 脣音字는 주로 -wan형으로 나타나며, 그 밖에 -un형, 開音節化한 -oo형 등이 혼재한다. 脣音字의 주된 반영인 -wan형

은 合口性을 유지하고 있기 때문에 輕脣音化 이전의 층을 반영하고 있다는 것을 알 수 있다. 敷母의 [妨hwaj]은 f라는 音韻이 없는 音韻體系에서 hw로 전사했을 가능성이 있으며, 微母의 [妄on]은 m>^mv>u의 변화형태, 즉 鼻音性이 약화된 ^mv에서 완전히 鼻音性을 상실하고 母音化된 상태를 반영한 것으로 추정된다.

2. 元韻

<表2> 元韻 輕脣音字의 各國漢字音 比較表

聲母	SJG	SJK	SK	SV	ST전기	ST후기
溪k ^h	クワン券勸	クエン勸券 クヱツ關	권券勸倦卷眷拳 關	khujen總勸 khoan券 qujen總 khujet關 qujet關	khwan勸	khwan勸 khjwan勸
疑ŋ	クワン願 クワツ月	クエン元原源院 クヱツ月	원元原源垣願 院轉遠 월月別	ŋujen元元源源願願 njen院 ŋujet月別月別	gwan元願轉 wan遠 wen原願垣遠 jwan源	hje源 jwan遠
非f	ホン反藩販坂 ヘン返 ホツ發髮	ハン反返藩販坂 ハツ發髮	반反叛返飯 번蕃蕃藩幡繁繁幡 판販 발發髮	phan販 pha:n反返坂販 phjen蕃藩幡販 phat發髮	ban返 phar發髮 pher發 phad發 had發 phwad發	
敷f ^h	ホン番幡	ハン番幡	번幡	phjen反番幡翻 phan反幡幡		
奉v>f ^h	ボン飯煩繁 ハツ伐罰閥	ハン飯煩繁 ハツ伐罰閥	반飯 번煩繁 벌伐伐罰	phjen煩繁蕃蕃幡幡幡幡 phan樊蕃飯幡幡幡 phon蕃繁 bjen筭 phat伐罰 phjet伐閥	ban飯煩 phan煩	pwan煩
微m> ^m v	マン晩萬	ハン晩33萬	만婉彎慢彎慢挽晩 曼滿萬萬蔓蠻謾 饅晚饅	van晩挽婉晚萬曼 man蔓 mjet襪襪	ban晩萬	wan萬

山攝의 合口 3等 元韻은 切韻音까지 -wien/t이었던 것이 秦音에서 乙類 拗介音 i의 前舌化로 인해 -wjən/t으로 변하며, 그 脣音字는 輕脣音化로 인해 合口乙類介音 wi를 탈피하고 -an/t으로 변한다.

SJG는 牙喉音字가 -wan/t형으로 나타나는데, 脣音字는 주로 -on/t형과 -an/t형으로 나타나며 [返ヘン]의 예와 같이 主母音을 e로 반영한 것도 흔하다. 앞서 언급한 바와 같이 SJG는 輕脣音化가 일어나는 唐代 이전의 시기를 母胎로 하고 있다는 것이 명확하기 때문에, 먼저 牙喉音字와 脣音字의 字音形 차이는 輕脣音化 이외에서 그 요인을 찾을 수밖에 없다. 즉 脣音字의 경우 脣音 자체의 圓脣性으로 인해 w가 배제된 字音形이 되었을 가능성이 크며, 나머지 介音과 主母音 ie는 日本語에 없는 音素이기 때문에 이를 a나 o로 대체하여 수

용했을 가능성이 높다. 결국 -on/t형이나 -an/t형 모두 같은 음韻을 어떻게 받아들이느냐 하는 일본인의 수용태도에 따라 다르게 출현한 두 가지 字音形으로 볼 수 있다. 단지 [返へン]의 예와 같은 -en형은 좀더 후기적인 모습을 취하고 있는데, SJG에서 이러한 字音形이 출현한다는 것은 주목할 만한 사항으로 主母音의 前舌化가 일찍부터 일어나고 있었음을 보여주는 예일 것이다.

SJK는 牙喉音字가 -wen/t형으로 나타나는 반면 脣音字는 모두 -an/t형으로 나타난다. SJK는 唐代長安音인 秦音을 母胎로 하고 있기 때문에 合口乙類介音 wi를 脫皮하여 輕脣音化한 -an/t을 반영한 것으로 볼 수 있다.

SK는 牙喉音字가 -wən/l형으로 나타나는데, 脣音字는 -ən/l형과 -an/l형이 혼재한다. 먼저 脣音字에서 牙喉音字의 -wən/l형에서 合口性만 배제된 -ən/l형은 輕脣音化 이전의 층을 반영하는 것이 명백하다. -an/l형은 SJK뿐만 아니라 SJG에서도 나타나기 때문에 그 字音形의 해석이 간단하지 않다. SJG에서는 日本語의 音韻體系에 *ɐ*라는 音素가 존재하지 않기 때문에 이를 *a*로 대체하여 수용했다고 해석할 수 있지만, SK에서는 *ɐ*가 音素로서 존재했기 때문에 SK의 -an/l형은 合口乙類介音 wi를 脫皮하여 輕脣音化한 秦音을 반영한 것으로 판단해야 할 것이다.

SV는 牙喉音字에서 -ujen/t형이 주된 반영이지만 -ɔan/t형이 혼재하며, 그 脣音字에도 -an/t형, -jen/t형, -on형의 세 가지가 혼재하며 -ən형도 보인다. 朴炳采(1990:64)는 SV에 대해서 3·4等 막론하고 開口音은 拗音의 요소 *i*를 반영하여 拗音 -jen으로 반영하였고, 合口音은 반대로 拗音의 요소를 배제하여 -ujen으로 반영하여 合口性을 유지하고 있다고 했지만, -ujen/t형의 *j*는 拗音을 반영한 형태로, 合口性과 拗音性을 동시에 반영하고 있는 것이다. 위의 <表2>를 보면 먼저 牙喉音字의 -ɔan/t형은 SJG의 -wan/t형과 유사한 반영이며, -ujen/t형은 SJK의 -wen/t형과 유사한 반영임을 알 수 있다. 즉 -ujen/t형은 唐代의 字音을, -ɔan/t형은 唐代 이전의 字音을 母胎로 하고 있음을 알 수 있다. 또한 脣音字만을 보면, 먼저 -an/t형은 SJK와 같은 형으로 唐代의 輕脣音化를 반영한 字音形이라는 것을 쉽게 알 수 있다. 그러나 -jen/t형과 -on형은 唐代의 輕脣音化가 일어나기 이전의 층을 반영한 것임을 알 수 있다. 그리고 -ən형 역시 SK에서 合口性만 배제된 -ən/l형과 같은 형태로, 輕脣音化 이전의 층을 반영하고 있다는 것이 명백하다.

ST는 그 후기자료에서 微母가 *w*로 나타나 聲母의 가장 후기적 모습을 보여준다. 牙喉音字는 -wen형, -wan형, -jwan형이 혼재하며, 脣音字에는 -an/d(r)형이 주류를 이루고 있고, [發pher]와 같이 主母音을 *e*로 반영한 字音形이 보이며, [發phwar·煩pwan]과 같이 合口性을 유지한 字音形도 보인다. 脣音字의 주류를 이루고 있는 -an/d(r)형은 唐代의 輕脣音化를 반영한 모습을 뚜렷하게 보여주며, -er형, -wan/d형은 秦音 이전을 층을 반영한 것으로 볼 수 있다.

3. 文韻

<表3> 文韻 輕脣音字의 各國漢字音 比較表

聲母	SJG	SJK	SK	SV	ST전기	ST후기
見k	クン君軍	クン君軍	군君軍	quə:n君軍君摺 qujet越	kun軍	kun君 kjun軍
群g>k ^h	クン群郡堀堀	クン群郡 クキン群郡 クエン群 クツ堀堀	군群郡裙 굴掘	quə:n羣裙瘳郡 quə:t倔堀掘	gun群 gwin郡	
非f	フン分粉糞奮佛弗 フツ佛弗 ホツ佛弗不	フン分粉奮 フツ芾黻絳緯弗	분分粉奮糞饋 블不弗芾	phə:n分粉餼饋粉奮糞債 phə:t弗拂髣黻由 bət不	phur弗 bur弗 bun分 phun分	pun分
敷f ^h	フン芬氛忿拂 ホツ拂	フン紛雰 フツ拂	분紛忿 블拂	phə:n芬紛紛雰忿 phə:t佛拂弗髣黻		
奉v>f ^h	ボン焚 バン焚 ブン憤 ブツ佛	フン汾憤分賁墳氛 フツ佛	분焚墳墳墳墳墳墳 블佛 블佛	phə:n焚焚汾汾汾墳墳墳墳賁 墳墳紛紛分 phan鶩 phə:t佛佛佛佛	bun分墳 bur佛	bur佛 phur佛 wur佛
微m>w ^v	モン文聞蚊問 モツ物勿	ブン文聞紋問 ブツ物勿	문文聞紋問蚊墨素 문吻 물物勿	va:n文紋蚊雯聞 və:n紋汶吻物汶問汶汶素統 vət勿物勿	bun文聞問 mun文 bur勿	wun聞 un聞 bun問

臻攝 諸韻은 拗介音韻尾 i를 가지고 있었는데⁵⁾, 秦音에 이르러서는 i로 변하여, 主母音 자체를 前舌化시켰다. 合口 3等 文韻은 切韻音까지 -wiəin/t이었던 것이 秦音에서 拗介音^가 前舌化하여 -wiəin/t으로 변하며, 그 脣音字는 輕脣音化로 인해 合口乙類介音 wi를 탈피하고 -əin/t으로 변한다.

SJG는 牙喉音字가 -un/t형으로 나타나며, 脣音字는 -un/t형과 -on/t형이 혼재하는데, 특히 明母字는 mon/t으로만 나타난다. 牙喉音字가 -un/t형으로 나타난 것은 原音의 主母音이 高位 母音인 -wiəi이었기 때문에 기본적으로 2拍 이하로 한자음을 수용한 日本語에서는 拗介音, 主母音, 韻尾介音を 모두 合口性에 흡수시켜 수용한 것으로 판단된다. 이는 脣音字의 -un/t형도 마찬가지이며, 단지 脣音字의 -on/t형은 脣音 자체의 圓脣性으로 의해 合口性을 생략하고 拗介音, 主母音, 韻尾介音의 iəi를 1拍으로 수용한 형태로 판단된다.

SJK는 牙喉音字에 -un/t형이 주류를 이루고 있지만 -win/t형, -wen/t형이 혼재하며, 脣音字 모두 -un/t형으로 반영되었다. 牙喉音字의 -un/t형은 -wiəi를 1拍的 u로 수용했기 때문에 나타난 字音形으로 판단되며, -win/t형, -wen/t형은 原音에서 -wiəi가 -wiəi로 변하고, 主母音이 拗介音과 韻尾介音 사이에서 前舌化된 秦音 말기의 상태를 반영한 것으로 판단된다. 또한 脣音字의 -un/t형은 合口乙類介音 wi를 脫皮한 輕脣音 -əin/t에서 əi를 1拍的 u로 수용한 것으로 판단된다.

SK도 牙喉音字는 -un/l형으로 나타나며, 脣音字는 -un/l형과 -in/l형이 혼재한다. 먼저 牙喉音字가 -un/l형으로 나타난 것에 대해서는 秦音의 -wiəin/t보다는 切韻音까지의 -wiəin/t을

5) 李京哲(2003:181)을 참조하기 바란다.

반영했을 가능성이 높다. 만일 秦音を 반영했다면, -win/l형이나 -jən/l형을 나타낼 가능성이 높기 때문이다. 즉 牙喉音字는 SJG처럼 拗介音, 主母音, 韻尾介音を 모두 合口성에 흡수시켜 수용한 것으로 판단된다. 또한 脣音字가 -un/l형으로 나타난 것도 切韻音까지의 -wǝin/t의 반영으로 보아야 한다. 韓國語의 音韻體系에는 單母音 ə와 i 모두 音素로서 존재했기 때문에 만일 輕脣音化한 秦音を 반영했다면 SV와 유사한 -ən/l형이나 -in/l형으로 나타나야 하기 때문이다. 따라서 -in/l형이 輕脣音을 반영한 형태로 귀결된다.

SV는 牙喉音字가 주로 -uə:n/t형으로 나타나며, 脣音字는 주로 -ə:n/t형으로 나타나며, 일부 -a:n/t형이 혼재한다. 위의 <表3>과 같이 脣音字의 -ə:n/t형은 牙喉音字에서 合口性만을 배제한 형태이므로 輕脣音化한 秦音의 -əin/t을 반영했을 가능성이 높다. 또한 -a:n/t형에 대해서는 명확한 판단이 어렵지만, -a:n/t형의 微母 역시 聲母를 모두 v로 轉寫하고 있는 것으로 보아 이 역시 輕脣音化한 秦音を 반영한 것으로 판단된다.

ST는 牙喉音字에 -un/t형과 -win/t형, -jun/t형이 혼재하며, 脣音字 대부분 -un/r형으로 반영되었다. 전기자료에서는 微母를 m으로 반영한 [文mun]과 같은 唐代 이전의 字音形도 보이나 대부분 b로 반영되었고, 후기자료에서는 [聞wun·un]과 같이 母音으로 수용한 것도 볼 수 있다.

4. 鍾韻

<表4> 鍾韻 輕脣音字의 各國漢字音 比較表

聲母	SJG	SJK	SK	SV	ST전기	ST후기
見k	ク共拱拱供 クウ共拱拱供	クキヨウ共拱龔拱供	공共拱拱恭	kuŋ共拱拱拱拱恭龔 升拱龔	guŋ共 khuŋ共 kuŋ拱恭	
溪k ^h	ク恐 クウ恐 コク曲	クキヨウ恐 クキヨク曲	공恐 곡曲	khuŋ恐 khuk曲笛	khwag曲 khuŋ恐	khuŋ恐
非f	フウ封	ホウ封	봉封	phoŋ封犁葑		
敷f ^h	フ峰峰縫峯鋒 フウ峰縫峯鋒	ホウ峰峯捧峰峰鋒	봉丰捧峰峰峰鋒	phoŋ丰峯峰峰峰鋒 phuŋ捧 boŋ捧		
奉v>f ^h	ブ奉逢 ブウ奉	ホウ奉縫逢	봉奉縫逢 복幘	phuŋ奉奉奉捧逢縫 bok幘	buŋ奉	huŋ逢

通攝의 鍾韻은 切韻音까지 -wiouŋ/k이었던 것이 秦音에서 乙類 拗介音 i의 前舌化로 인해 -wiouŋ/k으로 변하며, 그 脣音字는 輕脣音化로 인해 合口乙類介音 wi를 탈피하고 -ouŋ/k으로 변한다.

SJG의 牙喉音字는 陽聲韻은 -u(u)형으로 入聲韻은 -oku형으로 나타나 陽聲과 入聲의 主母音이 다르게 나타나며, 脣音字는 -u(u)형으로 나타난다.

SJK는 牙喉音字가 -wijou/ku형으로 나타나며, 脣音字는 -ou/ku형으로 나타난다. 牙喉音字의 -wijou/ku형을 통해 秦音에서 合口乙類介音 wi가 wi로 前舌化되었음을 알 수 있으며, 脣音字의 -ou/ku형을 통해 秦音에서 脣音字는 合口乙類介音 wi가 탈락되어 輕脣音化되었음을

알 수 있다.

SK는 牙喉音字와 唇音字 모두 -oŋ/k형으로 나타난다. 朴炳采(1990:92)는 SK가 3·4等 拗音의 변별에 따라 3等은 1等과 같이 동일한 直音인 -oŋ으로, 4等은 拗音인 -joŋ으로 명확히 반영되었다고 했다. 그러나 SK는 3·4等 拗音의 변별에 따라 1等韻과 동일한 直音形을 취한 것이 아니라, 1音節로 漢字音을 受容하는 것을 원칙으로 하고 있기 때문에 -uoŋ/k과 같은 字音形은 출현할 수 없으며, -uŋ/k형이든 -oŋ/k형이든 어느 한쪽의 字音形으로 나타날 수밖에 없는 것이다. 여기에 開口3等 東韻을 -uŋ/k형으로 受容함에 따라 이와는 변별성도 字音形의 결정에 영향을 미쳤을 가능성이 있다. 또한 李京哲(2012:331)에서 언급했듯이, SJG에서 陽聲韻은 -u형으로 入聲韻은 -oku형으로 나타나 陽聲과 入聲의 主母音이 다르게 나타나는 점과 SJK의 牙喉音字가 -wijou/ku형으로 나타남을 고려할 때 SK 牙喉音字의 -oŋ/k형은 秦音 이전의 층을 반영한 것임에 틀림없다. 만일 秦音을 반영했다면 -joŋ/k형으로 나타났을 가능성이 크기 때문이다. [凶脚jjuŋ]과 같은 일부 -juŋ형이 秦音을 반영했을 가능성이 큰 것이다. 唇音字의 -oŋ/k형도 唇音 자체의 흡수된 圓唇性으로 인해 wi를 탈피했을 가능성과 輕唇音을 반영했을 두 가지 가능성을 모두 가지고 있으나, 牙喉音字가 秦音 이전의 층을 母胎로 하고 있음이 분명한 것으로 보아 唇音字 전체의 체계상 秦音 이전의 층일 가능성이 높다.

SV에서 牙喉音字는 -uŋ/k형으로 나타나지만 唇音字는 -oŋ/k형, -uŋ/k형, -joŋ/k형이 혼재한다. 牙喉音字의 -uŋ/k형은 合口3等 乙類 wi에 主母音이 흡수된 형태로 전사한 것으로 판단된다. 그런데 唇音字의 경우는 秦音에서 輕唇音化로 인해 合口3等 乙類 wi를 탈피하고 主母音을 반영하기 때문에 -oŋ/k형 내지 -joŋ/k형으로 나타나야 한다. 따라서 唇音字의 -oŋ/k형과 -joŋ/k형이 輕唇音化가 발생한 秦音을 母胎로 하고 있음을 알 수 있으며, 牙喉音字와 같은 -uŋ/k형은 合口3等 乙類 wi에 主母音이 흡수된 형태이므로 合口性을 반영했다는 점에서 秦音 이전의 층을 반영하고 있는 것으로 판단된다.

ST는 牙喉音字가 주로 -uŋ/k형으로 나타나며 그 밖에 -wag형이 보이며, 唇音字는 -uŋ/k형으로 나타난다. 후기자료에서는 [huŋ逢]과 같이 h로 반영한 형태가 보이는데, 이는 輕唇音化된 聲母의 ʰ를 f가 없는 ST의 音韻體系에서 h로 대체한 것으로 판단된다.

5. 凡韻

<表5> 凡韻 輕唇音字의 各國漢字音 比較表

聲母	SJG	SJK	SK	SV	ST전기	ST후기
非f	ホフ法	ハフ法	법法	phap法	phab法 pub法 bwab法	phab法 phwab法 pwab法
敷fʰ	ホム汎泛	ハム泛	범汎	phjem汎汎泛 phjen汎		
奉vʰ	ボム凡帆帆 梵 ボフ乏	ハム范凡帆梵 ハフ乏	범凡犯帆範 핍乏	pham凡帆犯范 範梵帆 phap乏	bam凡梵 ban凡	pwam梵 wjam梵

咸攝의 凡韻은 脣音字뿐으로, 切韻音까지 $-w\ddot{i}em/p$ 이었던 것이 秦音에서 輕脣音化로 인해 合口乙類介音 w 를 脫皮하고 主母音이 後舌低位化하여 $-am/p$ 으로 변한다.

SJG는 $-om/\phi$ 형으로 나타난다. 이는 合口성과 主母音을 동시에 반영하여 $w\ddot{i}e$ 를 1拍의 o 로 대체하여 수용한 것으로 판단된다.

SJK는 $-am/\phi$ 형으로 나타난다. 이는 輕脣音化로 主母音이 後舌低位化한 秦音의 $-am/p$ 을 반영한 것이 명백하다.

SK는 $-am/p$ 형으로 나타난다. 主母音을 a 로 반영한 것은 切韻音까지의 $-w\ddot{i}em/p$ 을 반영한 것으로 보인다. 이는 脣音 자체의 圓脣性으로 인해 w 가 배제된 $\ddot{i}em/p$ 을 $-am/p$ 형으로 반영한 것으로 볼 수 있다. 만약 秦音의 $-am/b$ 을 반영했다면 SJK나 SV와 같은 $-am/p$ 형으로 나타났을 것이기 때문이다.

SV는 $-am/p$ 형으로 나타나지만, $-jem$ 형이 혼재하고 있다. $-am/p$ 형은 SJK와 유사한 형태로 秦音의 반영으로 볼 수 있다. 또한 脣音字의 $-jem$ 형은 介音이 반영되었다는 점에서 秦音 이전의 층을 母胎로 하고 있음을 알 수 있다.

ST는 SJK나 SV와 같은 $-am/b$ 형이 주류를 이루고 있어 대부분 秦音의 輕脣音化를 반영하고 있으나, [法 $bub \cdot bwab \cdot pwab \cdot phwab$]와 같이 合口성을 반영한 輕脣音化 이전의 층도 혼재하고 있다.

6. 東韻

<表6> 東韻 輕脣音字의 各國漢字音 比較表

聲母	SJG	SJK	SK	SV	ST전기	ST후기
見k	クウ宮躬弓 ク宮躬 キク菊	キウ躬弓宮 キク菊掬鞠	궁躬躬宮 궁躬 국菊掬鞠鞠	kuŋ躬躬宮 kuk菊鞠掬鞠鞠	gun躬	
影?	イク郁	イク郁燠	옥楮燠	uk郁澳燠燠		
非f	フウ風諷 フ風諷 フク福腹幅	フウ風 フク復幅腹福	풍風風諷 복幅福腹幅幅	phoŋ風楓 phuŋ諷 phuk福幅幅腹復 phuwək福 phuk複 buk福蝮	phuŋ風 pug福 bug福 phug福 bog福 bu福	phuŋ風 phoŋ風
敷p ^h >f ^h	フ豊蝠覆 フウ豊 フク蝠覆	ホウ豊鄂 フク覆	풍豊 복蝠覆	phoŋ豊鄂 phuŋ贈 phuk覆		
奉v>f ^h	ボウ鳳 ブク復服伏馥馥	フウ馮 ホウ鳳 フク伏鵬復服匍	봉鳳 복服復伏馥馥鵬	phuŋ鳳馮馮焚 phuwəŋ鳳 phuk伏沃沃服服復復復 ba:k伏	bug伏 bug復	phug復
明m>mb	ム夢 ムウ夢 モク目穆牧	ボウ夢 ボ夢 ボク目牧睦穆 ブク目	몽夢櫓 목目睦首牧 목牧	moŋ夢夢穆 muk目首牧睦穆	bug睦牧目 bog目	

通攝 開口3等 東韻은 南北朝音에서 $-i\lambda u\eta/k$ 이었던 것이 切韻音에서는 拗介音乙類 i 와 韻尾介音 u 사이에서 主母音이 高位化하여 $-i\lambda u\eta/k$ 으로 변하며, 秦音에서는 乙類 拗介音 i 의 前舌化로 인해 i 로 변하며 다시 主母音이 乙類 拗介音과 韻尾介音 u 사이에 흡수되어 $-iu\eta/k$ 으로 변한다. 또한 그 脣音字는 輕脣音化로 인해 切韻音 $-i\lambda u\eta/k$ 이 秦音에서는 乙類拗介音 i 를 脫皮하고 $-\lambda u\eta/k$ 으로 변하며, 明母字는 輕脣音化하지 않고 $mi\lambda u\eta/k$ 을 유지한다.

SJG는 牙喉音字와 脣音字 모두 주로 $-u(u)/ku$ 형으로 나타나며, 明母字를 중심으로 $-oku$ 형이 혼재한다.

SJK는 牙喉音字가 $-iu/ku$ 형으로 나타나며, 脣音字는 陽聲韻이 $-ou$ 형으로 나타나는 반면 入聲韻은 $-uku$ 형으로 나타난다. 먼저 牙喉音字의 $-iu/ku$ 형을 통해 秦音에서 乙類拗介音 i 가 i 로 前舌化되었음을 알 수 있다. 그런데 脣音字에서 陽聲韻 $-ou$ 형과 入聲韻 $-uku$ 형의 두 가지 字音形으로 나타나는 것은 秦音에서 $-o\eta/k$ 이나 $-u\eta/k$ 과 같은 單母音형태가 아니었음을 의미한다. 일본 쪽의 수용입장에서 보면 陽聲韻의 $-ou$ 형은 秦音의 $-\lambda u\eta$ 을 $-ou\eta$ 으로 인식한 것으로 볼 수 있는데, 入聲韻은 陽聲韻과 ㅍ어를 이루기 때문에 $-oku$ 형의 출현이 기대된다. 그런데 굳이 入聲韻의 主母音을 陽聲韻과 다른 u 로 轉寫한 것은 秦音의 단계에서 $-\lambda u\eta/k$ 와 같은 主母音과 韻尾介音을 유지한 상태였기 때문에 主母音을 u 로도 o 로도 轉寫했을 가능성이 높다.

SK는 牙喉音字가 $-u\eta/k$ 형으로 나타나며, 脣音字는 $-o\eta/k$ 형과 $-u\eta/k$ 형이 혼재한다. 먼저 牙喉音字의 $-u\eta/k$ 형은 ㅈ류의 $-ju\eta/k$ 형과 그 拗介音을 구별하고 있기 때문에 ㅈ을류 모두 $-iu/ku$ 형으로 나타나는 SJK보다 이전의 층임을 알 수 있다. 그러므로 牙喉音字와 같은 字音形인 脣音字의 $-u\eta/k$ 형 또한 輕脣音化 이전을 층을 반영하는 것으로 보아야 한다. 문제는 $-o\eta/k$ 형인데, 乙類拗介音 i 를 脫皮하고 主母音과 韻尾介音이 결합한다면 이러한 형태의 母胎音을 떠올릴 수 있을 것이다. 즉 SJK의 $-ou$ 형과 같은 반영으로 볼 수 있다. 그런데 문제는 그리 단순하지 않다. SJG에서도 明母字에 $-oku$ 형이 혼재하기 때문인데, 乙類拗介音 i 를 유지하고 있는 $-i\lambda u\eta/k$ 을 반영했다고 하더라도 $-o\eta/k$ 형이 출현할 수 있기 때문이다. 김정빈(2005)은 이것이 SJG와 SK가 유사한 母胎를 가진 결과로 파악하고 있다.

SV는 牙喉音字가 $-u\eta/k$ 형으로 나타나며, 脣音字는 $-u\eta/k$ 형이 주류를 이루고 있지만 $-u\lambda\eta/k$ 형, $-o\eta$ 형, $-uk$ 형이 혼재한다. 주된 반영인 $-u\eta/k$ 형과 $-o\eta$ 형 등이 輕脣音化를 반영한 층으로 보이며, $-u\lambda\eta/k$ 형과 $-uk$ 형은 介音을 반영한 형태를 보이고 있어 秦音 이전의 층으로 판단된다.

ST는 牙喉音字의 예가 없으며, 脣音字는 주로 $-u\eta/g$ 형으로 나타나며, 일부 $-o\eta/g$ 형이 혼재한다.

結論

지금까지 秦音에서 輕脣音化한 10개韻 중에서 陽聲·入聲韻에 해당하는 6개韻에 대한 각

국한자음의 반영을 고찰하였다. 이에 李京哲(2012)의 陰聲字에 대한 고찰을 포함하면 각국 한자음의 輕脣音化 반영에 대해서 다음과 같이 결론지을 수 있을 것이다.

1)SJG는 南北朝期の 南方系 字音を 母胎로 하고 있기 때문에 시기상으로 輕脣音을 반영하지 않는다.

2)SJK는 日本語의 音韻體系上 p계의 重脣音과 f계의 輕脣音의 구별이 없기 때문에 聲類에서는 輕脣音의 반영이 나타나지 않지만, 韻類에 輕脣音을 명료하게 반영하고 있다. 陽韻·元韻·鍾韻·東3韻·尤韻에서는 牙喉音字와 脣音字의 字音形이 다르게 나타나는 것을 통해 확인할 수 있으며, 凡韻에서는 SJG의 字音形과 비교를 통해서 확인할 수 있다.

3)SK는 聲母에서는 輕脣音의 반영이 전혀 나타나지 않는다. 단지 韻母에는 輕脣音을 반영한 층과 輕脣音을 반영하지 않은 층이 혼재하지만, 輕脣音을 반영하지 않은 층의 빈도가 훨씬 높다. 元韻의 -an/l형이 輕脣音의 반영이며, 尤韻 明母의 -o형 역시 秦音임을 확인할 수 있으며, 文韻, 凡韻, 廢韻은 輕脣音을 전혀 반영하지 않았다.

4)SV는 聲母와 韻母 모두 輕脣音을 반영하고 있다. 먼저 聲母에서는 幫·並母를 b로, 非·奉母를 ph로 변별하여 수용했다는 점, 그리고 明母를 m으로, 微母를 v로 수용했다는 점을 통해 알 수 있다. 단지 일부 輕脣音化 이전의 층이 혼재하고 있다. 陽韻의 -ɔŋ/k형, 元韻의 -an/t형, 文韻의 -ɔ:n/t형, 鍾韻의 -oŋ/k형과 -ɔŋ/k형, 凡韻의 -am/p형, 微韻의 -i형, 廢韻의 -ɛ형, 東韻의 -uŋ/k형과 -ɔŋ형, 虞韻의 -o형과 -u형, 尤韻의 -u형은 輕脣音化를 반영한 字音形이며, 陽韻의 -uəŋ/k형, 元韻의 -jəŋ/t형과 -on형, 鍾韻의 -uŋ형, 凡韻의 -jam형, 微韻의 -ji형, 虞韻의 -ɔ형과 -ə:u형, 尤韻 非·敷·奉母字의 -əu형과 -uu형은 輕脣音化 이전의 층을 母胎로 하는 字音形이다.

5)ST는 聲母와 韻母 모두 輕脣音을 반영하고 있다. 聲母에서는 微母가 o, u, w 등의 母音으로 나타나는 점을 통해 알 수 있다. 元韻의 -an/d(r)형, 微韻의 -i형은 輕脣音化를 반영한 字音形이며, 陽韻의 -waŋ형, 元韻의 -wan/r형과 -er형, 微韻의 -ji형과 -e형은 輕脣音化 이전의 층을 母胎로 하는 字音形이다.

◀ 참고문헌 ▶

- 權仁瀚(2005) 『中世國語漢字音訓集成』, 제이앤씨.
 김정빈(2005) 「廣韻輕脣音九部に 있어서의 韓國漢字音의 특질에 대하여-일본오음과의 비교를 통해서-」 『口訣研究』 第15輯, 口訣學會. pp.133-171
 _____(2007) 『일본 오음 연구』, 책사랑. pp.372-530
 김지환(1998) 「현대 한(韓)·월(越) 한자음의 비교 및 대조-초성자음의 대응을 중심으로-」 『언어연구』 제17집, 서울대학교 언어연구회. pp.1-25
 文璇奎(1965) 「廣韻에 依한 脣音字 聲母 變化攷」 『국어국문학』 제30집, 국어국문학회. pp.85-105
 朴炳采(1971) 『古代國語의 研究 音韻篇』, 고려대학교 출판부. pp.112-262
 _____(1990) 『古代國語의 音韻比較研究』, 고려대학교 출판부. pp.40-100

- 李京哲(2002) 「四類介母의 합류시기에 대하여」 『日本文化研究』 第7輯, 동아시아일본학회. pp.455-474
- _____ (2003) 「中古漢語 韻尾體系의 再考」 『日語日文學研究』 第44輯, 韓國日語日文學會. pp.165-185
- _____ (2004) 「中古漢語 再構音의 문제점에 대하여」 『日本文化研究』 第12輯, 동아시아일본학회. pp.237-250
- _____ (2005) 『佛母大孔雀明王經字音研究』 책사랑. pp.244-249
- _____ (2009) 「日本漢字音의 字音形에 나타나는 拍의 관여에 대해서」 『日本語學研究』 第25輯, 韓國日本語學會. pp.129-142
- _____ (2012) 「韓國漢字音의 輕唇音化 반영여부에 대한 考察-日本漢字音과의 比較를 중심으로-」 『日本學研究』 第36輯, 檀國大學校 日本研究所. pp.323-343
- 李京哲·李相怡(2012) 「各國漢字音의 輕唇音化에 대한 比較考察-陰聲韻을 중심으로-」 『日本研究』 第18輯, 高麗大學校 일본연구센터. pp.127-143
- 李潤東(1987) 「李朝中期唇音聲母에 關한 研究」 『국어교육연구』 제19집. 국어교육학회. pp.1-29
- 李春永(2008) 「輕唇音 分化 및 어음변천에 대한 小考」 『中國語文學論集』 第51號, 中國語文學研究會. pp.85-104
- 林東錫(1991) 「漢語에 있어서의 ‘四呼’와 介音에 의한 音韻 變化 研究」 『건대학술지』 제35집, 건국대학교. pp.127-153
- 伊藤智ゆき(2011) 「한국한자음연구 본문편」 (이진호 역), 역락. pp.187-383
- 榎木久薰(1989) 「光明真言土沙勸信記の字音について」 『鎌倉時代語研究』 第12輯, 鎌倉時代語研究會. pp.215-284.
- _____ (1998) 「高山寺藏寬喜元年識語本新訳華嚴經加點字翻刻並びに分韻表」 『鎌倉時代語研究』 第21輯, 鎌倉時代語研究會. pp.182-270
- 大島正二(1981) 『唐代字音の研究』, 汲古書院. pp.152-216
- 岡本勳(1991) 『日本漢字音の比較音韻史的研究』, 桜楓社. pp.510-591
- 小倉肇(1979) 「金光明最勝王經音義字音攷(II)」 『弘前大学教育学部紀要』 第41號, 弘前大学. pp.1-10
- _____ (1995) 『日本吳音の研究』, 新典社. pp.440-455, 617-643
- 河野六郎(1979) 「資料音韻表」 『河野六郎著作集2 中国音韻学論文集』, 平凡社.
- 高田時雄(1988) 「敦煌資料による中國語史の研究」, 創文社. pp.303-419
- 佐々木勇(1982) 『平安鎌倉時代に於ける日本漢音の研究 資料篇』, 汲古書院.
- 沼本克明(1982) 「漢音と唐代輕唇音化」 『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就いての研究』 武蔵野書院. pp.850-895
- _____ (1995) 「觀智院本類聚名義抄和音分韻表」 『日本漢字音史論輯』 築島裕<編>, 汲古書院. pp.125-186
- 平山久雄(1967) 「唐代音韻史輕唇音化問題」 『北海道大学文学部紀要』 第十五輯第二卷, 北海道大学文学部. pp.2-59
- 水谷眞成(2003) 「上中古 사이에 있는 音韻史上의 몇 가지 問題」 『口訣研究』 第10輯, 口訣學會. pp.253-284
- 三根谷徹(1993) 『中古漢語と越南漢字音』, 汲古書院. pp.393-496
- B. Karlgren(1985) 『中國音韻學』 (李敦柱 역), 一志社. pp.95-100, pp.227-232
- E. G. Pulleyblank(1984) *MIDDLE CHINESE: A STUDY IN HISTORICAL PHONOLOGY*, UNIVESITY OF BRITISH COLUMBIA PRESS. ppp.60-128
- Le, Tuan-Son(2008) 「한국어와 베트남어의 한자음 비교 연구-성모를 중심으로-」 『인문과학연구』 제10집, 대구가톨릭대학교 인문과학연구소. pp.39-64
- _____ (2009) 「한국어와 베트남한자음의 운부모음에 관한 대조 연구」 『인문과학연구』 제11집, 대구가톨릭대학교 인문과학연구소. pp.90-141
- William H. Baxter(1992) *A Handbook of Old Chinese Phonology*, Mouton de Gruyter. pp.61-86

- 투 고 : 2012. 11. 30.
- 심 사 : 2012. 12. 15.
- 심사완료 : 2013. 01. 15.

日本語会話における表現形式と機能の多様性について

— ターン交替時の発話に着目した定量的分析 —

磯野英治*
polkadot7955@yahoo.co.jp

<要 旨>

これまでのターン交替時の発話に注目した研究で、日本語母語話者間の会話では形式的分類「あいづち」、機能的分類「応答」の出現率が高いことが明らかになっている(磯野2010b,f)。本研究では形式的分類、機能的分類と個別に行った分析を踏まえ、形式的分類と機能的分類の対応関係について定量的な分析を行い、会話における日本語の語用論的特徴を明らかにした。この結果、あいづちやディスコースマーカといった形式(形式的分類)、さらに「あー」(形式的分類：ディスコースマーカ(フィラー))といったひとつの表現形式が会話相手への相対的効果として様々な機能(機能的分類による)を有していることが分かり、機能の多様性と語用論的特徴が明らかになった。

本研究によって、日本語母語話者間の会話ではひとつの表現形式が多様な機能で使い分けられていること、そして日本語教育・学習において「こう使えば良い」とステレオタイプ的に考えられている以上の語用論的特徴があることを明らかにした点は現実的、実用的な日本語の語用論的特徴を日本語教育へ取り入れていくにあたって、とりわけ会話教育の分野に寄与できる可能性が高い。

キーワード：日本語母語場面の会話、ターン交替時の形式と機能の対応関係、定量的分析、語用論的特徴と機能の多様性、日本語の会話教育

1. はじめに

これまでに行われてきた会話分析や語用論研究、創作会話と自然会話の比較研究などの成果により、コミュニケーションとしての日本語の会話は、会話教材用に作成された会話のやりとり以上に広いバリエーションを有することが明らかになってきている。文法能力の習得に関する研究が多く、運用能力の習得に関する研究は多くはないというような指摘がされる中で(任1997)、実際の日本語の使用を日本語教育へ取り入れていこうとする流れから教材の試作なども行われているが(才田2003、宇佐美2007)、基礎的研究としての日本語会話の分析は、まだ十分とは言えない状況がある。このため、本研究では場面や被験者、言語環境と言った条件統制のされた日本語会話のデータを活用し、まず日本語会話に現れる表現をあいづちやディスコースマーカといった形式に分類し整理を行った上で、会話相手とのやりとりからどのような機能を有しているのかについて機能的な分類と対応させ、その機能の多様性に迫る。そして、さらに形式的な分類の中から同じ表現形式を取り上げ(例えば「そうですね」)、仮に同じ形式的分類、或いは表現形式であったとしても会話相手との相互作用によってその機能に多様性が存在することを質的に分析し、実証していく。

* 首都大学東京 非常勤講師

2. 先行研究

本研究で明らかにしようとする日本語会話における機能の多様性は、あいづちの役割や機能を分析した水谷(1984, 1988, 1993)や堀口(1997, 1991)、ターン交替と関連させ会話の規則や発話の機能を分析した大浜(1998, 2006)などによって、実際に使用されている日本語会話を日本語教育に取り入れていくための基礎的研究として分析が行われてきた。一方で会話が二者間以上の話者によって行なわれるという点で、当該発話の機能は会話相手とのやりとりであるターン交替時に明らかになるという特徴を有するものの、既述の先行研究ではあいづちの定義やターン交替といった分析に関わる観点が一定しておらず、また一概にその重要性が示されてきた訳ではない。さらに分析データに関しても場面や状況の統制がされている訳ではなく、また事例的な研究も少なくない。このため、磯野(2009a,b, 2010b,f)では日本語母語話者間の会話において、あいづちやディスコースマーカーといった形式や「そうですね」というひとつの表現形式がどのような機能の多様性を有しているのかを分析するためにターン交替時の発話に注目する有用性を指摘した上で、一定の条件統制を行った分析データをもとにして形式的分類、及び会話相手への相対的効果としての機能的分類という二つのレベルに分けて、定量的分析を行った²⁾。以下は実際の会話データから得られた同じ形式的分類「あいづち」、及び表現形式である「そうですね」に関する機能分析の例である。

- (1) 形式的分類：上位分類．あいづち 下位分類．そう系
 機能的分類：上位分類．応答 下位分類．聞いているという信号

IN	じゃあですねー、お休みの日があったら何をすることが多いですか？。
M04	<u>そうですね</u> 、最近はよく麻雀やってますね<笑い>。

- (2) 形式的分類：上位分類．あいづち 下位分類．そう系
 機能的分類：上位分類．応答 下位分類．理解しているという信号

M04	それは、あー、なんかハワイのホノルルマラソンに(はい)、1回出てみたいな<って思います、はい>{<}。
IN	<へー>{>}、あれはかなり長距離になりますけど。
M04	<u>そうですね</u> (うーん)、なんか、あたしの友達が(はい)、行ったことがあるって(ふーん)、なんかその友達の話聞いてたら、すごい楽しそうで(うーん)、1回、一生のうちに1回は<行ってみたいとか>{<}。

1) 被験者については表1を参照のこと。なお本研究で扱う分析会話は磯野(2010b,f)と同様である。

2) 磯野(2010b,f)及び本研究で分析対象となっているのは「IN(インタビュアー)」から被験者である「話者M04」へターンが受け継がれた直後の発話である(「IN」や「M04」については後述の表1を参照)。形式的分類、及び機能的分類についてはコーディングの信頼性を確保するため、2名の評定者が24会話全データの25%(男性3会話、女性3会話)について個別に認定を行うCohen's Kappa(Bakeman&Gottman 1986)を採用し形式的分類(k=0.910)、機能的分類(k=0.823)ともにk>0.75の数値となった。

- (3) 形式的分類：上位分類．あいづち 下位分類．そう系
 機能的分類：上位分類．応答 下位分類．同意の信号

IN	普段から、よく話とかしたりする？。
M04	そうですね、やっぱりまた部活の人に<笑い>(はい)、部活の子に(はい)、タイの方がいいらしいやまして。

上記の三つの例を見てわかるように、ターン交替時に日本語母語話者は円滑なコミュニケーションを行うため、あるひとつの表現形式が持つ様々な機能を会話相手への相対的な効果という点から使い分けをしており、これらの諸特徴は創作会話などとは根本的に異なる。そして磯野(2010b,f)の分析結果からは、日本人母語話者間の会話において形式的分類は「あいづち(34.90%)」、機能的分類では「応答(62.70%)」の使用率が高いことがこれまでに判明している³⁾。本研究ではこの結果に基づき、形式的分類と機能的分類の対応関係を調査し、日本語母語話者のターン交替時における発話の語用論的特徴について考察する。そして、発展的には実際の会話やより実践的なコミュニケーションを日本語教育に有効に取り入れていくための基礎的研究として、本研究を位置付けたい。

3. 研究概要

本研究で扱うデータは、日本人インタビュアー1名に対して日本人母語話者24名(以下被験者)の会話データを録画し、宇佐美(2007)のBTSJ(Basic Transcription System for Japanese)によって文字化資料の作成を行ったものである⁴⁾。データは母語場面、インタビュアーは日本人で同一の人物、被験者も同様に日本人で年齢は20代、現在の言語環境は東京で共通語圏、各ペアはそれぞれ初対面の計24会話(男女各12名)という条件統制を行っている。また、会話の収集方法については、できるだけ自然な会話が収集できるよう西郡(2002)、磯野(2007)を参考に一定の手続きを行った⁵⁾。本研究では録画データによる音声的、対人コミュニケーションの特徴と文字化資料を対応させる形で、インタビュアーから被験者へターンが受け継がれた直後の発話の形式的表現(形式的分類)と会話相手への相対的な効果としての機能(機能的分類)がどのように対応・分布しているのかを定量的に調査・分析する⁶⁾。

3) 形式的分類は堀口(1997)、初鹿野(1998)が提示している項目とそれらをまとめている松本(2005)、機能的分類は尾崎(1992、1993)、堀口(1997)、横山(1998)を参考として筆者が再検討した分類を採用し、既述の統計学的な判定を行った。詳細については磯野(2010b,f)を参照のこと (<http://build.cau.ac.kr/cajiso/>、<http://www.kaja.or.kr/>)。

4) 本研究ではターン交替時の発話を分析対象とするため、BTSJ(宇佐美2007)を採用した。また文字化については会話データの音声的特徴やターン交替の認定の観点から、3次文字化(ピアチェック)まで行った。

5) 本研究で取り扱ったデータは「リハーサル」という設定で、ある程度リラックスした状態で行った録画について事後に被験者から同意を得たものである。フォローアップアンケートでは5段階評価法で「1.会話の自然さ(3.25)」「2.言いたいことを話すことができたか(3.96)」「3.録画を意識しなかったか(3.79)」という数値を得た。本研究では創作されたシナリオのある会話とは違って、あるいは会話参加者の言語行動自体は統制されていないという意味でデータを「準自然な会話」と位置づける。このような会話の位置づけに関しては土岐(2005)、宇佐美(2007)を参照のこと。

6) なお本研究では形式的分類・機能的分類の上位分類について、分析を行う。

表1：被験者の属性⁷⁾

グループ	年代	現在の言語環境	会話協力者の属性	会話総数
日本語母語場面	インタビュアー 30代 学生(被験者) 20代	東京 (共通語)	インタビュアー(IN)：1名(女性) × 日本語母語話者(M01～12、F01～12) ：男女各12名	24 会話

表2：形式的分類

A. ディスコースマーカー(DM)	a-1. 接続 a-2. つなぎ言葉 a-3. フィラー
B. 指示・言及	b-1. 指示 b-2. 言及
C. あいづち	c-1. はい系 c-2. そう系 c-3. 感動詞系 c-4. その他
D. 返答	*
E. 繰り返し	*
F. 言い換え	*
G. 疑問	*
H. 先取り	*
I. 直接発話	*

表3：機能的分類

A. 応答	a-1. 聞いているという信号 a-2. 理解しているという信号 a-3. 同意の信号 a-4. 否定の信号 a-5. 感情の表出
B. 確認	b-1. 反復要求 b-2. 聞き取り確認要求 b-3. 理解確認要求 b-4. 説明要求 b-5. 相手への聞き取りチェック b-6. 相手への理解チェック
C. 直接的な発話	ターンが受け継がれた際に、相対的にみてクッション言葉や会話相手に対する合図や意図がなく、会話が開始される発話で、かつ上記のA、Bを含まないもの。

4. 分析結果と考察

日本語母語話者間の会話において、ターン交替時に現れる形式的表現(形式的分類)が相対的にどのような効果を持っているのか(機能的分類)という対応関係についてその構成比を算出し、以下のような結果を得た。

7) 本研究で対象となったデータは現在「mic-Jcorpus-日本人へのインタビュー」として、首都大学東京大学院日本語教育学教室で公開されている(http://japanese.hum.tmu.ac.jp/mic-j/mic-J_corpus_II/index.html)。詳しくは西郡・崔・磯野(2010c)を参照のこと。

表4：形式的分類と機能的分類の対応関係における出現頻度・出現率

※()内は出現率

	A.応答	B.確認	C.直接的な発話	合計
A. ディスコースマーカー(DM)	476 (76.28%)	5 (0.80%)	143 (22.92%)	624 (100.00%)
B. 指示・言及	0 (0.00%)	1 (1.08%)	92 (98.92%)	93 (100.00%)
C. あいづち	704 (96.57%)	0 (0.00%)	25 (3.43%)	729 (100.00%)
D. 返答	114 (100.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	114 (100.00%)
E. 繰り返し	18 (6.45%)	107 (38.35%)	154 (55.20%)	279 (100.00%)
F. 言い換え	1 (7.69%)	3 (23.08%)	9 (69.23%)	13 (100.00%)
G. 疑問	2 (12.5%)	7 (43.75%)	7 (43.75%)	16 (100.00%)
H. 先取り	7 (100%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	7 (100.00%)
I. 直接発話	4 (1.27%)	2 (0.63%)	309 (98.10%)	315 (100.00%)

上記調査結果から、日本語母語話者間の会話で出現頻度の高い「あいづち」「ディスコースマーカー」が主に応答機能として使用されていることが分かった。しかし相対的にみて会話相手への働きかけとは無関係な発話としての機能(直接的な発話)も少なからず使用されており、例えば以下がその具体的な例である。

(1) ディスコースマーカーの例

			形式 上位	形式 下位	機能 上位	機能 下位
*	F04	あ、『カッコーの巣の上で』です。				
*	IN	うーん。				
/	F04	<u>っ</u> ていう映画で、洋画<なんですけど>{<}、	A	a-2	C	
*	IN	<あー、洋画>{>}。				
*	F04	なんか、精神、カッコーの巣っていうのはなんか(うん)、精神科医の、なん(うん)、精神科医の、をめぐって、なんか患者さんと(うん)、その医師との(うん)葛藤みたいな、すごくよかったですねー。				

上記の会話では、F04の発話を受けてINが「うーん」というフィラーで応えているが、そのフィラーが「相手の話を聞いているだけで理解している訳ではない」といった音声を伴っていた。しかしF04はディスコースマーカーのつなぎ言葉である「っていう映画で～」というようにINの「うーん」という発話に対してというよりも、その前の自身が話した内容である『カッコーの巣の上で』という映画の続き

の内容として発し、まずは会話の収束を図ろうとしている様子が見てとれる。こういった事例は会話相手の直前の発話と直接結びつく形式的分類における返答や先取り(つまり機能的分類における「直接的な発話」としての機能が無い)と比較することによって、あいづちやディスコースマーカ―といった一見すると会話相手の直前の発話と常に結びつくように感じるものも、会話の内容に重点が置かれ、場合によっては会話相手の直前の発話に直接的に応じるかたちにならないものもあるということである。

次に、やはり出現頻度の高かった「繰り返し」については意味交渉の観点から論じられることも多いが、そのような確認として情報のやりとりを行うといった意味合いだけではなく、単純に会話相手の発話を繰り返したり、時には応答機能として自身の様々な意志や意図を発信していることが分かった。以下はその一例である。

(2) 繰り返しの例

			形式 上位	形式 下位	機能 上位	機能 下位
*	IN	じゃあですね、まあそんな、好きでやっている職場とはいえ、何か不満にある、思うこと、あーでもさっき挙げたようなことかな?。				
/	F02	= <u>不満<笑い></u> 、あー、の、ちょ、は、言ってしまうと大学図書館なんですけど(うん)、あの、大学の職員ではなくて、あの、契約社員なんですよ、あの、図書館(ふんふんふん)、関係の仕事をする、まあ派遣会社っていうのかその(へー)、おおもとがあつて(はい)、そこに登録して(ふんふん)、あの、色んな図書館と、で、年間契約とかで(うーん)、仕事をしに行くっていう感じなんですけど(はい)、まあ、やっぱり、その、あの、そ、外部の人間なんで(うんうん)、あの、できる仕事に上限があるっていう(へー)、ちょっと、あの、権限がない部分、	E		A	a-5
*	IN	<なるほど>{<}。				
*	F02	<っていうのが>{>}結構ありましてー、うん、これ、何かこっちでやった方が早いんじゃないのかって思うことがあるんですけど(うんうんうんうん)、何か、職員さん、さ、あ、やるのね、はい、みたいなー<笑い>。				

この会話ではINの不満に関する質問に関して、F02が「不満<笑い>、～」というように会話相手の直前に行った言葉をそのまま繰り返す形式的分類における「繰り返し」から会話を開始しているが、その発話は音声的にも疑問文ではなく笑いながら答えており、さらにその不満内容をすぐに具体的に話し始めていることから、この場で機能的分類による「B.確認」のような意味交渉はされていないことがわかる。またF02はINとのこの会話以前にも「大学図書館の仕事で困ったこと」といった関連

性のある話をして盛り上がっているため、<笑い>には「もうわかりますよね」というような感情が表れていることも窺われる。

その他、出現頻度が高くはなかった「B.指示・言及」「F.言い換え」「G.疑問」「I.直接発話」についてもその機能について使い分けが観察できるため、機能的分類の下位分類における質的分析によってその諸特徴を分析する余地がある。しかし全体的に概観すると表4からあいつちやディスコースマーカ―といった一つの形式的分類に関して、日本人母語話者が会話相手への相対的機能という点から、様々な使い分けをしているというような対応関係、そしてその分布がデータから明らかになっている。

以上の内容を踏まえた上で、次に本研究で扱った分析データの中で出現頻度の高かった形式的分類のディスコースマーカ―から、具体的な表現形式を取り上げ質的に分析していく。まず本研究で扱った分析データからディスコースマーカ―として形式的に分類された表現形式の全体を整理すると以下のようになり、「あー(A.ディスコースマーカ―、a-3.フィルター)」の出現頻度が高いことが分かる。このため、質的分析ではフィルターである「あー」というひとつの表現形式を例に、日本語母語話者がどのようにその機能を使い分けしているのかを詳細に見ていくこととしたい。

表5：A. ディスコースマーカ―(DM)

出現頻度(回)	表現形式の種類(回)
104~35	あー(104)・なんか(53)・えっと/で(40)・うーん(35)
34~17	まあ(34)・あの(33)・えー(26)・あー(17)
16~12	えーと(16)・あと(15)・いや(14)・えーと/でも(12)
11~8	いやあ(11)・えっとー/だから(9)・ちよっと/やっぱ(8)
7~6	あとは/あんまり/えー/なんだろう(7)・えと/もう(6)
5~4	ま/んー(5)・こう/その(4)・
3	いやー・そのー・それで・じゃあ・っていう・と・でー・どうなんだろう・なんていうんですかねー・やっぱ
1	あーあー・あとー・う・えとー・かー・じゃ・それって・それと・ただ・だーから・ついでに・つと・ていうか・ていう風に・てって・とりあえず・とりあえずなんか・どうでしょう・どうですかね・どうなんでしょう・どうなんでしょうね・どうなんですかね・なので・なん・なんかちよっと・なんだろうなんでも・なんでしょう・なんだっけ・なんて・なんていうか・なんですか・に・のでー・まー・もうちよっと・やはり・んで (計624)

(3) ディスコースマーカ―「あー」の機能

(3-1) 形式的分類：A. ディスコースマーカ― a-3. フィルター

機能的分類：A. 応答 a-1. 聞いているという信号

*	IN	じゃあ、まあ今のはアルバイトだったんです(あ)けども(はい)、将来的になんか仕事で懂れてるというか、どんな仕事につきたいとか><{>{<}
*	M04	<あー>{>{<}, えっと、そうですね、えっと、金融関係に興味があって、今4年生(ふん)で就職活動(ええ、ええ)、してってー(はい)、そうですね、えっと一応、しょ、証券会社にー社、頂い、<たどきがあったんで>{<}
*	IN	<お、もう内>{>{<}定が?。
*	M04	そう<ですねー>{<}

(3-1)はINが将来就きたい仕事についてM04に尋ねる場面であり、INの質問に対してM04はまず「あー」と発話し、具体的な内容に入っていく。この会話では序盤にINが「じゃあ」と話し始めていることから、文脈が変わった場面であることがわかり、M04の「あー」に会話相手の内容との関連が無いことが分かる。

(3-2) 形式的分類：A. ディスクースマーカー a-3. フィーラー

機能的分類：A. 応答 a-2. 理解しているという信号

*	M12	<はい>{>}、なんか個人経営でやってるところで知り合いがやってるらしくて(はい)、まあちょっと、やってるんですけど。
*	IN	ふーん。
*	M12	はい。
*	IN	どれぐらい行ってるんですか、それは。
*	M12	どれぐらいっていうのは<期間ですか?>{>}。
*	IN	<えーっと>{>}、週に何回<とか>{<}。[→]
*	M12	<あー>{>}、週3位ですね、<大体>{<}。
*	IN	<ほー>{>}、そうですか。

(3-2)はM12がよく行く喫茶店について話している場面である。INは会話の中盤で「どれぐらい行ってるんですか、それは」と質問するが漠然としており、M12は頻度や期間など具体的に何を答えれば良いのか分からないため、意味交渉が行われている。これによってINが「えーっと、週に何回とか」と具体的な内容を提示したため、M12はこれを理解し「あー」と分かったことを伝えた上で「週3位ですね、大体」と発話を続けている様子が見て取れる。

(3-3) 形式的分類：A. ディスクースマーカー a-3. フィーラー

機能的分類：A. 応答 a-3. 同意の信号

*	IN	まず、今何かアルバイトをしていますか?。
*	M09	あー、やってますねー。
*	IN	やって<ますか>{<}。
*	M09	<えーっと>{>}、漫画喫茶で(はい)、深夜帯なんですけど(はい)、1時から9時で(へー)、まあ週2位やってます。

(3-3)では、INがアルバイトに関して質問しており、M09はこれに対して「あー、やってますねー」と答えている場面である。これは「はい」が「いいえ」のように直接的な印象を与える訳ではないが、質問に対して肯定的な回答をするために特に「はい」という本論文の定義で言う形式的分類「D.返答」のみが重要ではないことがこの事例から指摘できる。

(3-4) 形式的分類：A. ディスコースマーカ― a-3. フィラー

機能的分類：A. 応答 a-4. 否定の信号

*	IN	へー、何か将来的につきたい仕事はありますか？。
*	M03	あー、まだちょっと良くは決めてないんですけども{<}。
*	IN	<うーん>{>}、これからゆっくり決めて<いく感じ>{<}。
*	M03	<そうですね>{>}。

(3-4)は、「何か将来的につきたい仕事はありますか？」という質問に対して、「あー」と反応し「まだちょっと良くは決めてないんですけども」という「No」の意味で回答している。つまり「いいえ」を使用せずに「あー」で代用しその後の発話に結びつけることによって、直接的な印象を回避していることが分かる。既述のように「D.返答」の「はい」や「いいえ」はディスコースマーカ―に代えることが可能であり、このようなストラテジーを使用することによって、円滑なコミュニケーションを図っていると考えられる。日本語のテキストでは分かりやすさを重視しているため、初級の後半でも「大学を出たらすぐ働きますか？」「いいえ、1年ぐらいいろいろな国を旅行したいです」(みんなの日本語初級I・第25課)のような会話文型が見られるが、日本語母語話者は配慮の観点から直接「No」を表わす表現形式を使用しないことも多い。これは特にディスコースマーカ―やあいづちが応答機能として活用されていることの好例である。

(3-5) 形式的分類：A. ディスコースマーカ― a-3. フィラー

機能的分類：A. 応答 a-5. 感情の表出

*	M01	あ、ちょっと、東アジア、東ア、東南アジアとか(はーい)行きたいなって思ってた(へー)、ベトナム(うんうん)、とかそのへんの所にちょっと行きたいなって今思ってます。
*	IN	うん、それもし行ったら何をしたいんですか？。
*	M01	何をしたい??(うん)、うーん、やっぱり、そのへんをこう、うろろ、うろろして(うんうん) こう、どんな、そこに住んでいる人が(うんうん) こうどんな生活をしているの(うんうんうん) かみたいな、なのとか、まあ、できれば何かちょっと話して(はい)、こう、"何、何してんの"みたいな(へー)、聞けたらいいなと思ってますけど。
*	IN	はー、じゃあ積極的な感じですね。
/	M01	あー、何かやっぱり<笑い>外に行く(うん)、こう、まあ、一人で行くからやっぱり一人なんで(うん)、何もしていないとすごい寂しいから(うーん)、こう、こう追こまれるとちょっと頑張るみたいな、
*	IN	ふふっ。
*	M01	<ところで>{<}。
*	IN	<へー>{>}、あー、じゃ現地の人とちょっと交流したりとかも。

(3-5)は、M01が行きたい旅行地について話している場面であり、1ターンあたりの発話量、やや吃った話し方を見るとM01が盛り上がっていることが分かる。そして会話の中盤でINが「はー、じゃあ

積極的な感じですね」と話を向けると「あー」と発話し一人旅の醍醐味について説明を続ける。この会話ではM01の「あー」以降の発話が終了するのが会話終盤の「ところで」であり、文末のまとまりの無さからもM01がやや感情的になっている様子が窺える。

(3-6) 形式的分類：A. ディスコースマーカー a-3. フィラー

機能的分類：B. 確認 b-3. 理解確認要求

*	IN	<へー>{>}、じゃあ、やってて(はい)、嬉しかったこと、やってて良かったって思うこと<>{<}。
*	F04	<あー>{>}、あ、そのバイトの中ですか?。
*	IN	<はい>{<}。

(3-6)は、INの質問が具体的ではなかったため、M04は質問そのものは聞き取れたものの意味が分からない。このためまず「あー」と発話し「あ、そのバイトの中ですか?」と例を挙げ、意味交渉を行っている。仮に自身の理解確認を行うだけであればその内容のみを尋ねれば良いのであるが、「意味がわからない」ということのみを伝えるのではなく、「あー」と発話することによってF04は円滑に会話を展開させようとしている意図が見える。

(3-7) 形式的分類：A. ディスコースマーカー a-3. フィラー

機能的分類：C. 直接的な発話

*	M08	<あと>{>}小笠原、行ってみたいです。
*	IN	小笠原<諸島??>{<}。
*	M08	<お、お>{>}小笠原諸島、はい。
*	IN	ほー、それは何をしたいんですか?。
*	M08	いや、ただ単に行きたいだけで。
*	IN	うーん、ふふふ、分かりました。
*	M08	"あーこれでも(はい)都内なんだ"って思って。
*	IN	そう<ですよー>{<}。
*	M08	<はい>{>}。

(3-7)では、M08は、INの「分かりました。」という完結した会話に続いて、INへ自身の考えを再現しているため、直前のINの発話内容との関連性は薄い。そしてM08の「"あーこれでも都内なんだ"って思って」というターン交替時の「あー」は極めてモノローグ調になっており、会話内容もセリフのようである。このため、このM08の発話はINに向いている、或いは相対的な機能を担うものではないと考えることができる。特にディスコースマーカーとあいづちが主に応答機能として活用されていることから(表4参照)、機能的分類「C.直接的な発話」としてのディスコースマーカーは、主に頭の中にある考えをイメージとして相手に示すための発話として、セリフに近いかたちで出現することがほとんど

であった。

ディスコースマーカー「あー」は、以上のように「A.応答」機能に主な多様性が観察された。特に会話相手の話を聞いているというだけではなく、文脈からは「D.返答」の「はい」や「いいえ」の代わりとして、或いは理解を示すシグナル、また「あー」に一定の感情をのせて相手に伝達する機能が明らかになった点は興味深い。さらに理解不足の伝達のために日本語学習者からよく耳にする「え(ー)?」「え(ー)と」といった表現だけではなく「あー」がクッションのように使用されている事は、(3-6)の事例からよくわかる。そして何かを例えたり再現する時も「あー」が活用されていることも明らかになった。このように日本語母語話者の「あー」は無意味に乱発されている訳ではなく、会話相手との円滑なコミュニケーションのために文脈に応じてその機能が使い分けられていると言えるだろう。これまでに具体的な事例から「あー」、ひいては「A.ディスコースマーカー a-3.フィラー」の機能をまとめて論じた例がほとんどないにも関わらず、日本語母語話者間の会話で多用されていることから、本研究で明らかにした語用論的な実態と日本語学習者への視点の提供は、日本語教育への応用について具体的な成果となるだろう。

4. おわりに

本研究では、日本語母語話者間の会話において、あいづちやディスコースマーカーといったひとつの形式的分類、さらに「あー」などのひとつの表現形式がどのような多様な機能と相対的効果を有しているのか、或いは使い分けがされているのかといった観点から、ターン交替時の発話を分析項目とし、形式的分類と機能的分類の対応関係と分布について定量的な調査を行い、さらに事例を取り上げ質的に分析することによって、その実態を明らかにした。その結果、形式的分類の分類項目を機能的分類に対応させると様々な機能を有しており一様ではないことがわかり、またひとつの表現形式が「文字・字義通り」のひとつの意味のみを有している訳ではなく、文脈によって多様な機能に変化していることが明らかになった。本研究で得られた知見は、日本語母語話者の実際の会話を日本語教育に取り入れていくにあたり、とりわけ会話教育への寄与が大きいと考えられる。今後は、形式的分類、及び表現形式の各項目について質的な分析を行い、さらなる語用論的特徴を明らかにしていくことを課題としていきたい。

◀ 参考文献 ▶

- 磯野英治(2007)「自然会話教材開発研究における素材データの収集について」『魅力ある大学院教育イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成プログラム」報告集3自然会話教材開発研究部会』、東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室、pp.275-279.
- _____(2009a)「日本語母語話者の会話におけるターン交替の特徴に関する定量的分析—インタビュー会話における調査から—」口頭発表、2009年日本語教育国際研究大会、シドニー、オーストラリア。

- _____ (2009b) 「日本語母語話者のターン交替における定量的分析とその語用論的特徴について—会話教育への示唆—」 『2009年度韓国日本学会傘下学会連合学術大会 Proceedings』、韓国日本学会、pp.122-126.
- _____ (2010b) 「日本語母語話者の会話におけるターン交替の特徴について—インタビュー会話における定量的分析から—」 『日本研究』 Vol.28、韓国 中央大学校日本研究所、pp.137-158.
- _____ (2010f) 「日本語母語話者のターン交替における語用論的特徴について—機能的分類による定量的分析と会話教育への示唆—」 『日本学報』 第84集、韓国日本学会、pp.227-240.
- 任栄哲(1997) 「社会言語能力と日本語教育」 『日本研究』 Vol.12、中央大学校日本研究所、pp.15-29.
- 宇佐美まゆみ(2007) 『魅力ある大学院教育イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成プログラム」報告集3自然会話教材開発研究』、東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室.
- _____ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2007年3月31日改訂版」 『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金 基盤研究B(2)(研究代表者 宇佐美まゆみ)研究成果報告書、pp.17-36.
- 大浜るい子(1998) 「日本人の言語行動—談話展開のためのストラテジー—」 『広島大学日本語教育学科紀要』 no.8、pp.97-105.
- _____ (2006) 『日本語会話におけるターン交替とあいづちに関する研究』、溪水社.
- 尾崎明人(1992) 「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」 『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会、pp.251-263.
- _____ (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー—「聞き返し」の発話交換をめぐる—」 『日本語教育』 81号、日本語教育学会、pp.19-31.
- 才田いずみ(2003) 「あいづち上手でよいコミュニケーション」 『まなびの杜』 23、東北大学、pp.94-97.
- スリーエーネットワーク編著(2009) 『みんなの日本語 初級 I 本冊』.
- 土岐哲(2005) 「インタビュー・聞き書きと質問紙調査法」 『日本語学』 6月臨時増刊号vol.23、pp.32-43.
- 西郡仁朗(2002) 「自然会話データ『偶然的初対面の会話』～その方法論について～」 『人文学報』 330号、東京都立大学人文学部、pp.1-18. (転載：文部科学省科学研究費報告書(基盤研究C(2))『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』(研究代表者：宇佐美まゆみ).
- 西郡仁朗・崔文姫・磯野英治(2010c) 「mic-Jコーパスの公開について—「外国人へのインタビュー篇」—」 『人文学報』 377号、首都大学東京都市教養学部人文・社会系、pp.31-39.
- 初鹿野阿れ(1998) 「発話ターン交代のテクニク—相手の発話中に自発的にターンを求める場合—」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 24、東京外国語大学留学生日本語教育センター、pp.147-162.
- 堀口純子(1991) 「あいづち研究の現段階と課題」 『日本語学』 第10巻第10号、pp.31-41.
- _____ (1997) 『日本語教育と会話分析』、くろしお出版.
- 松本剛次(2005) 「日本語学習者のターンの受け継ぎに関する談話レベルでの横断調査—フランス語母語話者でのケーススタディー—」 『言語社会心理学的アプローチによる自然会話分析方法論ハンドブック』、東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、CD-ROM版、pp.135-150.
- 水谷信子(1984) 「日本語教育と話し言葉の実態—あいづちの分析—」 『金田一春彦博士古希記念論文集』 第二巻言語学編 三省堂、pp.261-279.
- _____ (1988) 「あいづち論」 『日本語学』 Vol.7 No.13、pp.4-11.
- _____ (1993) 「「共話」から「対話」へ」 『日本語学』 Vol.12 No.4、pp.4-10.
- 横山紀子(1998) 「学習言語のインプットとアウトプットに占める役割—効果的な「気付き」を生じさせる教室活動を求めて—」 『国際交流基金日本語国際センター紀要』 vol.8、pp.67-80.
- Bakeman,R.&Gottman,J.M.(1986) Observing interaction: an introduction tosequential analysis. Cambridge university Press.

- 투 고 : 2012. 11. 30.
 ■ 심 사 : 2012. 12. 15.
 ■ 심사완료 : 2013. 01. 15.

일본학 관련 대학 및 학과의 현황과 전망*

朴眞秀**
pjinsu83@gachon.ac.kr

<요 旨>

2011년 3월 11일의 동일본대지진과 후쿠시마 원자력 발전소의 방사능 누출 사고 이후, 한국 내 일본학 관련 대학 및 학과(1)에서는 일본학의 미래에 대해 더 이상의 발전을 기대하기 힘들 것으로 보는 경우가 있다. 물론 이러한 견해는 나름의 일리가 있다. 수년 간 계속되어온 연구 환경 및 교육 여건의 변화 때문이다. 일본어 교육의 담당자인 대학 교원과 중등교육 교사의 공급 과잉 현상이 계속되고 있는 현실에서 정부의 정책이 젊은 연구자들의 대다수를 차지하는 비정규직 교육 담당자 특히 ‘시간강사’들에 대한 세심한 배려가 없어서 더욱 문제이다. 다른 인문학 분야와 마찬가지로 이러한 인력의 수급 불균형 현상과 이에 대한 불충분한 정책과 제도 등으로 인해 불안감이 커져온 것은 사실상 어제 오늘의 문제는 아니다. 그러나 일본학 분야는 최근 들어 일본의 경기침체와 2011년의 재해, 그리고 중국의 급부상으로 인한 중국어 수요의 증가로 인해 상대적으로 인기가 더욱 하락하고 있는 느낌을 주고 있다.

키워드: 日本学、日本学教育、日本語教育、日本語熱、日本学への需要、日本への関心、韓日關係、日韓關係、日本学關係の学科、日本学政策、日本政策

I. 머리말

2011년 일본 동북부 지방의 3·11 재해를 비롯한 후쿠시마(福島) 원자력 발전소의 방사능 누출 사고 이후, 한국 내 일본학 관련 대학 및 학과(1)에서는 일본학의 미래에 대해 더 이상의 발전을 기대하기 힘들 것으로 보는 경우가 있다. 물론 이러한 견해는 나름의 일리가 있다. 수년 간 계속되어온 연구 환경 및 교육 여건의 변화 때문이다. 일본어 교육의 담당자인 대학 교원과 중등교육 교사의 공급 과잉 현상이 계속되고 있는 현실에서 정부의 정책이 젊은 연구자들의 대다수를 차지하는 비정규직 교육 담당자 특히 ‘시간강사’들에 대한 세심한 배려가 없어서 더욱 문제이다. 다른 인문학 분야와 마찬가지로 이러한 인력의 수급 불균형 현상과 이에 대한 불충분한 정책과 제도 등으로 인해 불안감이 커져온 것은 사실상 어제 오늘의 문제는 아니다. 그러나 일본학 분야는 최근 들어 일본의 경기침체와 2011년의 재해, 그리고 중국의 급부상으로 인한 중국어 수요의 증가로 인해 상대적으로 인기가 더욱 하락하고 있는 느낌을 주고 있다.

* 가천대학교 일어일문학과 부교수. 이 논문은 2013년도 가천대학교 교내연구비 지원에 의한 결과임. (GCU-2013-R018).

** 가천대학교 인문대학 일어일문학과 부교수

1) 뒷부분 <자료> 참조.

그렇다면 과연 해결책은 없는 것일까? 사실 1960년대 이후 현재까지 50 여 년 간의 일본 학 교육의 역사는 사회의 일본에 대한 관심과 필요성의 확대로 급속한 성장가도를 달려왔다. 그러한 면에서 지금은 커다란 전환점을 맞고 있다. 본 논문에서는 그 실상을 현재의 상황을 중심으로 구체적으로 살펴보고 이에 대한 대책을 강구하면서 대학 및 학과의 입장에서 일본학계가 나아가야 할 방향을 모색해 보고자 한다.

II. 대학에서의 일본학의 현황과 당면한 문제점

1. ‘호황’의 종언

저출산으로 인해 정규 학교교육의 수요자수(학령인구) 자체가 급감 (<표 1> 참조)하고 있다. 2012년도에 대한민국의 총인구는 약 5000만 명인데 6세부터 21세까지의 학령인구는 약 960만 명으로 전체의 19.2%에 불과하다. 1970년에 총인구의 약 40%가 학령인구였던 것에 비하면 너무나 급격한 변화이다. 30년 만에 학령인구의 비율이 반으로 격감한 것이다. 또 현재 대학생 연령(18세~21세)의 인구는 약 280만 명으로 30년 전의 220만 명과 비슷하지만 1990년의 370만 명을 정점으로 계속 하락하고 있으며 향후 하락폭은 가속화할 전망이다. 특히 초등학생 연령(6세~11세)의 하락폭은 눈에 띄게 급감하고 있는 바, 이대로 가면 2060년에는 200만 명을 한참 밑돌 것으로 보이는데 이는 그 이후로도 지속적인 학령인구의 감소를 의미한다. 총인구 중 학령인구의 비율이 10% 정도로 줄어드는 2060년의 대학생 수는 지금의 절반도 되지 않을 것이며, 2030년만 하더라도 지금의 2/3 정도로 예상된다. 이는 것이다.

<표 1> 학령인구

(단위 : 천명, %)

	총인구	총학령인구 (6~21세)	초등학교 (6~11세)	중학교 (12~14세)	고등학교 (15~17세)	대학교 (18~21세)
1970	32,241(100.0)	12,604(39.1)	5,711(17.7)	2,574(8.0)	2,101(6.5)	2,218(6.9)
1980	38,124(100.0)	14,401(37.8)	5,499(14.4)	2,599(6.8)	2,671(7.0)	3,632(9.5)
1990	42,869(100.0)	13,361(31.2)	4,786(11.2)	2,317(5.4)	2,595(6.1)	3,663(8.5)
2000	47,008(100.0)	11,383(24.2)	4,073(8.7)	1,869(4.0)	2,166(4.6)	3,275(7.0)
2010	49,410(100.0)	10,012(20.3)	3,276(6.6)	1,974(4.0)	2,090(4.2)	2,672(5.4)
2012	50,004(100.0)	9,595(19.2)	2,923(5.8)	1,859(3.7)	2,019(4.0)	2,795(5.6)
2030	52,160(100.0)	7,116(13.6)	2,663(5.1)	1,333(2.6)	1,324(2.5)	1,796(3.4)
2040	51,091(100.0)	6,698(13.1)	2,378(4.7)	1,271(2.5)	1,298(2.5)	1,751(3.4)
2060	43,959(100.0)	4,884(11.1)	1,805(4.1)	906(2.1)	910(2.1)	1,264(2.9)

자료 : 통계청, 「장래인구추계」 2011.12²⁾

이러한 가운데, 현재 국내의 거의 모든 대학은 각종의 대학 평가지표, 특히 취업률, 재학

2) http://kostat.go.kr/portal/korea/kor_nw/3/index.board?bmode=read&aSeq=255362 의 첨부파일 2012 청소년 통계 보도자료.hwp (2013년 2월 15일).

생 충원률, 신입생 충원률, 지원률, 중도탈락 학생비율 등에 대한 수치 관리의 필요성이 증가하고 있음을 절감하고 그 대책 마련에 부심하고 있다. 교육과학기술부의 「대학 교육역량강화 사업」(「교육역량강화 지원사업」 「학부교육 선진화 선도대학(ACE) 지원사업」)의 추진으로 인해 늘 타대학보다 앞서야만 한다는 강박과, 소위 재정지원제한대학에는 절대로 선정되지 말아야 한다는 절체절명의 위기감이 대학 사회에 팽배하여, 대학 본부는 구성원들에 대해 연구와 교육 상의 분발을 요구하고 대학의 구성원들은 이러한 이중 삼중의 심리적 압박에서 하루도 마음 편히 지낼 날이 없다고 해도 과언이 아니다.

이러한 심리적 압박감은 인문사회 계열의 경우가 자연이공 계열의 경우보다 더 심한데 그 중에서도 경상계열에 비해 상대적으로 현실 적응도가 낮은 인문계열의 학과나 전공의 담당자들에게 중대한 부담으로 작용하고 있는 것이 사실이다. 최근 20년간 일본학 관련 학과는 철학이나 역사학 또는 프랑스학이나 독일학 등 다른 인문계열 학과에 비해 학생들의 선호도에 있어서 비교우위를 점해 온 것이 사실이다. 그러나 작금의 상황은 이제 이러한 ‘호황’이 끝나고 이미 일종의 ‘위기’에 처해 있다는 인식이 확산되고 있다. 인문학 전체에 대한 상황적 압박으로부터 이제는 일본학도 자유롭지 못하다는 것이다.

2. 최근의 급격한 변화

이와 같은 상황에서 2011년 3월 11일의 동일본대지진과 후쿠시마 원전 폭발 사고가 발생했다. 그 영향은 곧바로 방사능 공포의 직접적 피해를 우려한 학생 및 학부모들의 당해 연도 일본 대학에의 교환유학 포기과 2학기 교환학생 신청자 감소로 나타났다. 이에 그치지 않고 일본의 국가적 위상과 중요도에 대한 일반의 인식에도 부정적 영향을 주어 학부의 일본어 교양과목에 대한 선택의 감소를 초래한 것으로 보는 견해가 있다. 뿐만 아니라, 대학마다 조금씩 차이는 있을지언정 2012년 입시에서 신입생의 입학경쟁률로도 반영되었을 것으로 여겨지기도 한다. 교양과목의 감소는 사실상 향후 학계의 존립을 위협하는 요인으로 작용할 수도 있는데, 정직(定職)을 찾지 못한 신진 연구자들의 생계에 심각한 영향을 주기 때문이다.

시간강사들의 입장에서 보면 최근 들어 이른바 ‘반값 등록금’ 문제로 비용 절감에 나선 대학들이 학점수와 강좌수를 줄이고 클래스를 대형화 하는 등의 정책을 펴으로써, 담당해야 할 교과목의 수가 줄고 있어서 그 나머지를 출강할 곳을 찾는 일조차 더욱 힘들어졌다. 또 전임교원의 학부장의 비율을 높이라는 교육과학기술부의 정책 방향에 따라 각 대학이 앞다투어 ‘강의전담교수’ 제도라는 매우 독특한 또 하나의 비정규직 시스템을 도입하거나 적극 활용하고 있다. 강의전담교수는 급여의 면에서 사실상 시간강사와 크게 다를 바 없는 존재인데, 오로지 비정규직 연구자들 내부에서의 양극화 현상만 심화시키는 부작용을 낳고 있다. 한편으로 일본학 관련 전임교원의 신규임용 전망은 매우 불투명하다. 기존의 학과 교원의 정원이 크게 늘어나지는 않을 것으로 보이며, 대학은 퇴임 교원의 빈자리를 반드시

전공 분야가 같은 신입 교원으로 제때에 제대로 충원하지 않을 가능성도 있다.

3. 대학원의 상황과 미래의 일본학

한편 대학원에 일본학 관련 학과를 설치하고 있는 대학의 상황은 더욱 힘들어졌다. 일반 대학원의 경우, 박사 실업자의 증가와 함께 학문연구자로서 살아가지가 쉽지 않다는 사회적 인식의 확산으로 말미암아 대학원 진학률이 급격히 떨어진 것은 이미 오래전부터의 현상이다. 소위 명문대학으로의 상향 진학과 소수의 일본 유학으로 과연 장래에 학계의 명맥이 어느 정도로 유지될지 미지수이다. 교육대학원이라고 해서 상황이 크게 다른 것은 아니다. 일본어 교사의 공급과잉 현상으로 임용고시 응시와 중등교사자격증 취득을 목표로 하는 교육대학원 진학자의 수도 크게 줄고 있다. 이러한 현상들은 향후 10~20년 사이에 학계 구성원의 재생산에 많은 차질을 빚을 것으로 예상된다.

1960년대 이후 꾸준히 축적되어 온 일본학의 연구 성과는 일본학 분야의 눈부신 발전상을 대변해 주지만, 작금의 상황을 볼 때 앞으로도 과연 지금까지와 같은 속도로 발전을 지속할 수 있을지 장담하기가 어려운 여건에 처해있다는 것을 많은 사람들이 감지하고 있다. 그런데 이러한 현상은 비단 일본학 분야 내부의 문제로서만이 아니라 한국이라는 한 국가 사회를 넘어 국제적인 문제이며 인류적 역사적인 문제로서 사고해야 할 필요가 있다.

‘한국에서의 일본학 연구’는 매우 독특한 역사적 문맥에서 이루어지는 학술 행위이며 그 때문에 그 나름의 보편성과 역사성을 갖기 때문이다. 식민지를 경험한 나라에서 그 식민종주국에 대한 종합적인 연구를 수준 높게 하고 있는 나라는 그렇게 많지 않다. 20세기 전반만 해도 지구상의 2/3 이상의 지역이 다른 나라의 식민지였다. ‘식민지’ 경험이란 그만큼 인류의 중요한 역사적 경험에 위치하는 것이라 아니할 수 없다. 1970년대부터 시작된 한국의 본격적인 일본 연구³⁾는 지난 40여 년 간 양적으로는 어마어마하게 팽창했고 질적으로는 빛나는 성과를 거두었다. 무엇보다도 세대를 거듭하면서 최근에는 ‘외국학으로서의 일본학’을 가장 다양하고 수준 높게 하고 있는 나라가 한국이라고 해도 크게 틀린 말은 아니다. 그것은 일본학 관련 각 학회나 일본학 관련 각 연구기관의 수량적 규모나 연구 수준 및 성과를 보면 알 수 있다. 그렇기 때문에 필자는 현재 일본학 분야의 문제점과 위기는 자연스러운 흐름이라기보다는 반드시 극복되어야 할 과제로 보고자 하는 것이다.

III. 일본 및 일본어의 위상과 일본학의 수요

위와 같은 변화는 실제 현재 국내의 일본학 및 일본어의 수요가 어느 정도로 줄어들고

3) 이재성(2013) 「한국일본학회 창립과정」韓國日本學會 40周年 特別委員會 編, 『韓國日本學會40年史 日本 研究의 成果와 課題』보고서, pp.60-69. 최건식(2013) 「1970년대 한국일본학회 활동과 연구 성과」韓國日本學會 40周年 特別委員會 編, 『韓國日本學會40年史 日本 研究의 成果와 課題』보고서, pp.313-329. 등 참조.

있다는 것을 의미하는 것인가? 이러한 문제를 일본어 학습자의 증감, 일본에 대한 일반의 관심도, 그리고 일본과의 현실적 관계 양상의 세 가지 측면에서 살펴보겠다.

1. 일본어 학습자의 증감

① 중고등학교—해방 이후 총 아홉 차례 교육과정의 변화를 거치면서 고등학교에서의 제2외국어 과목은 그 종수를 늘려왔다. 기존의 독일어, 프랑스어, 중국어에 스페인어와 일본어를 추가한 것이 1974년의 제3차 교육과정에서부터이다.(〈표2〉 참조) 일본어가 채택된 이후 일본어를 선택하는 학교 혹은 학생은 꾸준히 증가했다. 2009년 현재 서울시내 고등학교의 90%가 일본어를 선택할 수 있는 것으로 보도되고 있다. 즉 제2외국어 과목 중 일본어가 가장 많고 다음이 중국어의 순이다. 최근 대학입학 수능시험에서 제2외국어 자체가 선택과목이 됨으로써 일본어를 선택하는 학생의 절대 수는 감소했을지 모르나 2006년부터 현재까지 일본어는 전체 제2외국어의 60% 이상을 계속 유지해오고 있다.⁴⁾

〈표2〉 교육과정 개정 시기별 제2외국어 과목 개설 현황

개정 시기	공표일	고등학교 제2외국어 과목
제1차 교육과정	1954.4.20	독일어, 불란서어, 중국어
제2차 교육과정	1963.2.15	독어, 불어, 중국어
제3차 교육과정	1974.12.31	독일어, 프랑스어, 중국어, 에스파니아어, 일본어
제4차 교육과정	1981.12.31	독일어, 프랑스어, 에스파니아어, 중국어, 일본어
제5차 교육과정	1987.3.31	독일어, 프랑스어, 에스파니아어, 중국어, 일본어
제6차 교육과정	1992.10.30	독일어(Ⅰ), 독일어(Ⅱ), 프랑스어(Ⅰ), 프랑스어(Ⅱ), 에스파니아어(Ⅰ), 에스파니아어(Ⅱ), 중국어(Ⅰ), 중국어(Ⅱ), 일본어(Ⅰ), 일본어(Ⅱ), 러시아어(Ⅰ), 러시아어(Ⅱ)
제7차 교육과정	1997.12.30	독일어(Ⅰ), 독일어(Ⅱ), 프랑스어(Ⅰ), 프랑스어(Ⅱ), 스페인어(Ⅰ), 스페인어(Ⅱ), 중국어(Ⅰ), 중국어(Ⅱ), 일본어(Ⅰ), 일본어(Ⅱ), 러시아어(Ⅰ), 러시아어(Ⅱ), 아랍어(Ⅰ), 아랍어(Ⅱ)
07년 개정 교육과정	2007.2.28	독일어(Ⅰ), 독일어(Ⅱ), 프랑스어(Ⅰ), 프랑스어(Ⅱ), 스페인어(Ⅰ), 스페인어(Ⅱ), 중국어(Ⅰ), 중국어(Ⅱ), 일본어(Ⅰ), 일본어(Ⅱ), 러시아어(Ⅰ), 러시아어(Ⅱ), 아랍어(Ⅰ), 아랍어(Ⅱ)
09년 개정 교육과정	2009.12.23	독일어(Ⅰ), 독일어(Ⅱ), 프랑스어(Ⅰ), 프랑스어(Ⅱ), 스페인어(Ⅰ), 스페인어(Ⅱ), 중국어(Ⅰ), 중국어(Ⅱ), 일본어(Ⅰ), 일본어(Ⅱ), 러시아어(Ⅰ), 러시아어(Ⅱ), 아랍어(Ⅰ), 아랍어(Ⅱ)

*재공 교육과학기술부 교육과정기획과

② 대학—교양 일본어의 강좌 수가 이전에 비해 줄었다고는 하나 수강 희망자 수가 현격히 줄었다고는 대학의 정책이 전체 강좌 수를 줄이는 쪽에 초점을 두고 있기 때문에 기타 외국어 과목도 함께 줄고 있는 것이다. 수도권에 있는 한 대학의 경우 증가일로에 있는 중국어에 비해 강좌 수로 볼 때 아직까지 2 배 가까이 된다.(〈표 3〉 참조) 2010년과 2011년, 그리고 2012년의 자료를 비교해볼 때 수강 학생수에 있어서 커다란 변화를 찾을 수 없다. 이와 같은 통계는 3·11 동일본대지진과 원전누출 사고와 대학에서의 일본어의 수요는 직

4) http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2011/09/21/2011092100877.html. (2013년 2월 15일).

접적인 관련이 없다는 것을 말해주고 있다. 또 한 가지 주목할 만 한 점은 일본어의 수강 학생 수는 약간 줄거나 거의 변동이 없는데, ‘일본대중문화의 이해’ 과목의 경우는 오히려 수강학생 수가 늘고 있다는 사실이다. 학생들의 일본 및 일본 문화, 특히 일본 대중문화에 대한 관심은 일본의 자연재해 등과도 아무런 상관없이 높다는 것이다.

<표 3> A대학교의 일본관련 교양강좌

연도	학기	일본어		일본대중문화의 이해		중국어		중국문화의 이해	
		강좌수	정원	강좌수	정원	강좌수	정원	강좌수	정원
2010	1	18	55			11	55	16	55
	2	18	55	11	70	10	55		
2011	1	18	55			11	55	10	80
	2	20	40	10	80	12	40		
2012	1	23	40			16	40	13	70
	2	22	40	13	80	13	40		

③ 일반-일제시대에 일본어 교육을 받은 세대가 50, 60대로 활동하던 30년 전에 비해 일본어를 외국어로서 공부한 전후 세대가 늘어났으나 외국어 학습을 위한 미디어의 발달과 한일간 왕래의 빈번함으로 인해 일본어 구사 가능인구는 계속 증가 추세이다. 외국어 전문 학원가의 일본어 수강자 수에도 큰 변화가 없다. 물론 상대적으로 중국어의 부상이 눈에 띄지만 중국어 수강자의 증가가 일본어 수강자의 감소를 의미하는 것은 아니며 중국어 수강자의 증감과 일본어 수강자 수와의 상관관계는 직접적으로는 없어 보인다. 따라서, 3·11 이후에 일본어 학습열의 급감 등 큰 변화가 감지된다고 보기 어렵다.

2. 일본에 대한 관심도

① 일본의 문학, 일본에 대한 지식, 일본 서적 등-일본에 대한 관심은 우선 서점에서의 일본관련 서적의 판매 순위와 일본 문학의 소비 패턴, 일본 서적의 점유율 등으로 간접적으로 알 수 있을 것이다. 서점에 별도로 마련된 일본 소설 코너는 다른 어떤 외국 소설보다도 여전히 인기를 누리고 있고 베스트셀러 상위권에 일본소설이 일정한 수 이상을 점하고 있는 경우를 자주 보게 된다. 한편 대부분의 대형 서점에서 일본어 도서는 영어 도서 다음으로 중시되어 별도의 코너를 점하고 있으며, 프랑스어 도서, 독일어 도서, 스페인어 도서, 중국어 도서에 비해 양적인 면에서 압도적인 위치를 차지하고 있다. 이러한 측면에서 볼 때에도 3·11 이후에 일본에 대한 일반의 관심이 줄고 있다는 증거를 찾을 수 없다고 본다. 오히려 3·11 자체에 대한 관심과 이웃나라 일본의 재난상황을 타산지석으로 삼는 경향이 있는 만큼 일본에 대한 일반의 관심은 더 증가되고 있다.

② 일본 대중문화-앞서 살펴본 바와 같이 대학의 일본 대중문화 관련 강좌는 오히려 증가

하는 것으로 나타나 일본어보다 일본의 대중문화가 대학생들에 의해서 더욱 선호되는 경향이 있음을 확인했다.(〈표 3〉 참조) 대학생들의 일본대중문화에 대한 관심도는 일본 자체에 대한 관심도 반영한 것이지만 무엇보다도 일본 대중문화의 콘텐츠에 대한 구체적인 관심과 선호도 때문인 것으로 풀이된다. 일본 대중문화에 대한 관심은 사실상 한일국교 정상화 이후 공식적으로 혹은 비공식적으로 꾸준히 증가해왔다고 할 수 있으나, 1998년 일본문화의 국내 개방 조치 이후 급격히 증가했고 나아가 현재의 한류를 낳는 원동력이 되기도 했다. 1998년 이전에 금기시되던 일본 문화에 대한 개방 조치가 일본을 포함한 세계문화를 직접적으로 접하고 다루고 폭넓게 받아들여 깊게 이해하는 환경을 조성했고 그만큼 한국 문화에 대한 자신감과 내성을 길렀으며 문화수준의 세계적 동시성을 확보할 수 있었던 것이다. 대중문화 소비층의 성장과 동아시아 대중문화의 세계적인 약진 상황으로 볼 때 이제 한국의 대중문화와 일본의 대중문화는 세계문화의 맥락에서 같은 길을 가고 있다고 생각된다. 이러한 점에서 앞으로도 일본 대중문화의 각 장르에 대한 관심은 상당기간 지속될 것으로 보인다.

③ 일본관광-한국인 일본 입국자의 수가 3월 11일 이후 4월까지 주춤하다가 다시 꾸준한 회복세에 있는 것으로 판단된다. 〈표 4〉에 따르면 2010년에 2,439,816명이었던 한국인 일본 입국자수가 2011년 3·11의 영향으로 3월부터 이듬해인 2012년 2월까지 전년대비 감소세를 보인다. 2011년 일본으로의 한국인 총입국자수는 1,658,073명이었다. 그러나 2012년 3월부터는 전년대비 증가율이 플러스로 돌아서면서 완전한 회복세를 보이고 있다. 2012년 11월까지만 해도 이미 1,844,425명에 달해 12월 통계치가 가산되면 2012년 총 입국자 수는 200만 명을 무난히 넘을 것으로 예상된다.

물론 이러한 수치는 수치 그 자체만으로 모든 것을 대변한다고 보기에는 무리가 따른다. 한국인의 일본 입국자 수가 그 자체로서 일본에 대한 한국인의 관심을 반영하는 측면도 없지는 않겠지만 그 때 그 때의 환율의 변화 등 경제적 상황 또한 민감하게 반영될 것이기 때문이다. 최근 2012년 말부터 일본의 엔저 정책에 따라 한국인 입국자가 상대적으로 증가했을 수 있다. 그러나 이러한 변수가 작용한 점을 충분히 감안하더라도 2011년 3월 11일 이후 일본에의 한국인 입국자 수가 장기 지속적으로 감소한 것은 아니며 향후의 전망에 있어서도 큰 변화가 없을 것으로 보인다. 그런가 하면 한일 양국 정부 간의 역사를 둘러싼 갈등도 약간의 영향을 주었다고 볼 수 있지만 그 영향은 거의 미미한 것이 아닐까? 앞으로도 한국과 일본의 민간인 왕래는 더욱 늘어나고 상호관계는 더욱 깊어질 것으로 보는 것이 자연스러운 흐름이다.

〈표 4〉 주요국 한국인 출국 통계(한국관광공사)⁵⁾

연도		일본에의 입국자수	전년대비 증가율
2010	1월	232,053	78.8%
	2월	197,784	85.0%
	3월	169,295	56.2%
	4월	189,582	67.3%
	5월	201,484	70.9%
	6월	179,088	71.8%
	7월	236,092	38.7%
	8월	246,882	29.3%
	9월	193,975	83.9%
	10월	193,829	47.7%
	11월	197,244	51.3%
	12월	202,508	13.7%
소계		2,439,816	53.8%
2011	1월	268,368	15.6%
	2월	231,640	17.1%
	3월	89,115	-47.4%
	4월	63,790	-66.4%
	5월	84,014	-58.3%
	6월	103,817	-42.0%
	7월	140,053	-40.7%
	8월	147,030	-40.4%
	9월	122,436	-36.9%
	10월	132,259	-31.8%
	11월	134,009	-32.1%
	12월	141,536	-30.1%
소계		1,658,073	-32.0%
2012	1월	173,397	-35.4%
	2월	169,206	-27.0%
	3월	150,615	69.0%
	4월	152,722	139.1%
	5월	157,398	87.3%
	6월	152,160	46.6%
	7월	189,687	35.4%
	8월	201,733	37.2%
	9월	145,707	19.0%
	10월	168,200	27.2%
	11월	183,600	37.0%
	12월		
소계		1,844,425	21.6%

3. 일본과의 현실적 관계 양상

① 문화 및 관광-문화 혹은 관광의 측면에서 일본과의 현실적인 관계 양상이 3·11 이후에 달라졌는지를 알기 위해 주요국 외국인 한국 입국통계에서 일본인 입국자 수를 확인해 보았다. <표 5>가 그 결과이다. <표 4>에서와 같이 일본을 찾는 한국인 입국자의 수와 함께 <표 5>의 한국을 찾는 일본인의 수를 통해 일본과의 현실적 교류 상황을 어느 정도 미루

5) 한국관광공사

<http://kto.visitkorea.or.kr/kor/notice/data/statis/profit/board/view.kto?id=417415&isNotice=false&instanceId=294&mum=1>
(2013년 2월 15일).

어 짐작할 수 있을 것이다. 한국을 방문하는 일본인 관광객의 수는 언제나 한국을 찾는 전체 관광객 수의 30~40%를 점하며 국가별로 볼 때 3·11 이후에도 여전히 1위를 차지하고 있다. 2위와 3위인 미국과 중국을 합한 수치와 맞먹는다. 따라서 한류의 주요 소비국으로서 일본의 위상은 3·11 이후에도 변함없이 다른 어떤 나라보다 높다고 보아도 무방하겠다.

<표 5> 주요국 외국인 한국 입국통계(한국관광공사)⁶⁾

국적	2012년	전년동기	성장률(%)	구성비%
일본	3,518,792	3,289,051	7.0	31.6
중국	2,836,892	2,220,196	27.8	25.5
미국	697,866	661,503	5.5	6.3
유럽	717,315	681,025	5.3	6.4
대만	548,233	428,208	28.0	4.9
홍콩	360,027	280,849	28.2	3.2
태국	387,441	309,143	25.3	3.5
필리핀	331,346	337,268	-1.8	3.0
러시아	166,721	154,835	7.7	1.5
몽골	61,116	48,004	27.3	0.5

② 일본과의 교역 규모-경제적인 관계에 있어서 일본의 비중은 어떠한가? 최근의 국가별 수출입 현황을 <표 6>에서 살펴보았다. 여기에서 보듯이 중국, 미국에 이은 주요 수출국이자 수입국인 일본은 3·11 이후에도 주요 교역국으로서 그 비중이 특별히 줄었다고는 보기는 어렵다.

<표 6> 최근의 국가별 수출입 현황⁷⁾ (2012년 1월부터 11월까지)

국가	수출액	증가율	수입액	증가율
총계	47,779	3.8	43,398	0.9
미국	5,180	-4.1	3,160	-13.1
중국	12,375	10.5	6,909	-7.8
일본	3,618	3.7	5,340	-0.4
홍콩	2,817	5.6	168	-2.3

③ 정치 군사적 관계-대미, 대중, 대북, 대러 관계와 입체적으로 연결되어 있는 일본은 3·11 이후에도 여전히 한반도 주변 4강국이며, 한국의 입장에서 지속적인 대일 협력관계가 필요하다는 점은 변하지 않았다. 일본 역시 한국과의 관계가 미국 및 주변국들과의 관계 속에서 대단히 중요하다는 인식을 하고 있다. 다만 과거사와 관련한 불편함은 늘 존재해왔다. 더욱이 작년부터 독도를 둘러싼 문제 등으로 인해 양국 관계가 급격히 악화되었지만 최근 북한의 핵무기 보유 동향과 박근혜 신정부의 출현으로 새로운 국면을 맞이하게 될 것

6) 한국관광공사

<http://kto.visitkorea.or.kr/kor/notice/data/statis/profit/notice/inout/popup.kto>(2013년 2월 15일)의 2012년 외래객 입국 통계를 참조하여 필요부분만 재구성함.

7) 한국무역협회 http://stat.kita.net/top/state/n_submain_stat_kita.jsp?menuId=01&subUrl=n_default-test_kita.jsp?lang_gbn=kor^statid=kts&top_menu_id=db11 (2013년 2월 15일).

으로 보인다. 독도 문제 및 중군위안부 문제, 일본의 역사교과서 문제, 야스쿠니 신사 참배 문제 등 한일 간의 역사인식에 관한 정치적 줄다리기는 언제나 존재한다. 때로는 양국관계가 급격히 경색되는 모습을 보이기도 하지만 이는 국교정상화 이후부터 지금까지 줄곧 주기적으로 반복적으로 있어왔던 일로 단기간 내에 간단히 해결될 수 있는 것이 아니다. 또 이러한 결끄럽고 복잡한 양국 관계가 두드러지면 두드러지는 대로 한국 내에서의 일본에 대한 관심과 일본어 등 일본학의 필요성은 더욱 커진다고 볼 수 있다. 결코 3·11 이후 일본의 일본에 대한 관심이 줄어들지 않았다고 보는 것이 타당하다.

IV. 문제 해결의 모색과 지향점

1. 문제의 소재

이렇게 볼 때 3·11에 의해 한국 내부의 일본에 대한 관심도와 일본어 등 일본학의 필요성과 요구가 격감했다고 보기는 어렵다. 현재 일본학계에서 느끼는 위기의식과 문제점은 반드시 3·11이라는 일본의 자연재해나 원전사고에 의한 것이라 볼 수 없다. 교양 일본어 강좌 수의 감소 등은 한국 내부에서 교육과학기술부의 교육정책 방향에 따른 인문계열 혹은 어문계열의 모든 분야가 겪고 있는 부담을 같이 공유하고 있는 측면이 오히려 더 크지 않을까? 이와 함께 문제를 심각하게 느끼게 되는 더 큰 이유는, 자격과 실력을 충분히 갖춘 우수하고 유능한 신진 연구자들이 예전과 달리 대학 내에서 안정된 전임 교수직에 안착하지 못하고 있는 현실에서 비롯된다. 앞서 말했듯이 이는 학계 구성원의 재생산 구조에 심각한 차질을 빚기 때문이다.

그렇다면 현재 일본학계가 느끼는 이러한 불안과 문제점은 어떻게 해결할 수 있을 것인가? 문제의 원인이 전적으로 국제정세와 일본에 있는 것이라 할 수 없고 국내 정책과 학계 내 재생산 구조의 불안에 있는 것이라면 그것 자체를 해결하는 노력을 기울여야 한다.

2. 정부와 대학의 정책 수정을 위해

우선 대학마다의 특색과 학문 연구의 자율성을 최대한 인정하기 보다는 생존의 원리에 입각하여 대학을 무한 경쟁의 구도 속에 밀어 넣고 마는 정부의 정책은 전세계적으로 만연한 신자유주의와 맞물려 있는 것이기 때문에 이를 한 학문분야에서 문제제기하여 근원적으로 바로잡는 것은 거의 불가능할 것이다. 그러나 정부 정책 중 영어 위주의 외국어 교육에 대해 제2외국어권의 다른 외국학 분야 학계와 힘을 합해 문제제기를 하고 외국어 교육 정책을 바로 세우는 것은 충분히 실천 가능한 일이다. 물론 이것도 그리 간단한 일은 아닐 것이지만 한국 사회의 미래를 위해 꼭 있어야 할 연구와 교육을 지속 가능하게 하기 위해 관련 학계가 나설 필요가 있다. 영어 위주의 외국어 교육은 소위 국제화 혹은 글로벌화와

도 맞지 않고 21세기에 지향해야 할 다문화 공존의 미래와도 모순되는 정책 방향이다. 정책 입안자들로 하여금 영어 중심의 언어제국주의의 교육적 폐해를 깨닫게 하는 것은 학계 및 연구자들의 몫이다. 사회의 미래를 생각한다면 오히려 영어 관련 학계에서 영어 위주의 교육 정책을 비판하고 나서는 것이 더욱 바람직하고 효과적인 것이다. 기회가 있을 때마다 한국의 외국어 교육 정책이 균형 잡힌 바람직한 것이 되도록 관련 학계가 영향력을 발휘해야 한다.

또 대학의 정책에 있어서도 평가지표의 하나인 국제화지수를 높이기 위해 ‘영어 강좌’ 수를 늘리고자 하는데 이를 기회가 있을 때마다 ‘외국어 강좌’로 표현을 바로잡는 노력이 필요하다. ‘국제화=미국화’가 아니라는 것을 강조하고 ‘영어 강좌’와 기타 ‘외국어 강좌’의 부당한 차별을 시정해 가야 한다.

3. 일본학 아이템의 다양화와 학문후속세대의 육성

학과나 전공 내에서 지속 가능한 일본어 일본학 연구와 교육을 위해 할 수 있는 일은 무엇인가? 첫째, 다양한 일본학 커리큘럼의 개발이다. 이는 학과 또는 전공의 레벨에서 그리고 연구자 개인의 레벨에서도 이루어질 수 있다. 교육과 연구의 관계는 상호보완적이면서 상호촉발적 관계에 있다. 교육자(연구자)는 단지 자신이 과거에 배웠던 것을 가르치는 것이 아니라 지금의 학생들이 배워야 하는 것을 항상 새로 연구해서 가르쳐야 한다. 학생들에게 필요한 지식과 교육 내용에도 유통기한이 존재한다는 것을 늘 염두에 두어야 한다.

둘째, 많은 신진 연구자들이 조속히 대학 내에 채용될 수 있도록 다각적인 노력을 기울여야 한다. 현재 일본학 분야는 다른 어떤 외국학 분야보다도 실력을 갖춘 유능한 신진 연구자들이 30~40대의 학문후속세대를 구성하고 있다. 이들이 연구와 교육에 몰두하여 학계의 학문적 수준을 높여갈 수 있도록 기반을 마련해주어야 한다. 여건이 어렵다면 반드시 학과 시스템이 아니라 연구소 등에서 각종 프로젝트를 통해 안정적으로 연구와 교육 활동을 할 수 있도록 배려해야 한다.

셋째는 10~20대의 학문후속세대를 위한 장기적 관점의 프로그램과 콘텐츠 개발이다. 현재 학부와 대학원에서 이루어지고 있는 형태의 교육 내용에 대한 점검과 장래에 필요한 일본학의 형태가 어떠한 것인지에 대한 진지한 고민이 많이 필요하다.

V. 맺음말

한국에서의 일본학이 겪는 어려움은 과거에도 존재했다. 과거에는 일본과 일본학에 대한 편견과의 싸움이 큰 문제였다. 또 일본어가 하나의 외국어로서 인정되거나 독립된 학문 분야로서 받아들여지는 것조차 힘든 시기도 있었다. 지금은 그러한 편견이 많이 사라졌다. 그런데 이제는 양적으로 확대된 일본학 분야가 그 양만큼의 질을 갖추어 외국학의 다른 분야

를 선도해 갈 수 있는 여건과 입장이 되었다고 생각한다.

일각에서는 1990년대 이후 독일학이나 프랑스학이 걸었던 전철을 밟게 되는 것은 아닌지 하는 우려까지 나오고 있다. 그러나 그것은 반드시 그렇지 않다. 분명히 독일학이나 프랑스학이 겪었던 어려움이 수요 공급의 불균형 즉 시대의 변화에 따라 수요가 줄어들고 그 수요에 비해 공급 과잉이 되었던 것이라면, 일본학의 경우는 이와는 전혀 다른 상황이다. 일본은 일의대수(一衣帶水)의 땅이라 표현되는 이웃이다. 싫다고 이사 갈 수 있는 것도 아니고 앞으로도 함께 공존을 모색해야 하는 동반자로서 한국의 입장에서는 많은 문제를 머리를 맞대고 함께 풀어가야 할 이웃이다. 역사적 경험 속에서 불편한 점도 있지만 한국에 있어서의 일본은 ‘불가피한 타자’인 동시에 우리 스스로를 돌아보는 거울 같은 존재이다. 그러한 점에서 다른 외국학에 비해 일본학의 중요성은 아무리 강조해도 지나치지 않다. 일본학의 자연 수요는 결코 급감하지 않았고 유지되고 있거나 오히려 늘어나고 있다고 본다.

<자료> 국내 일본학 관련 학과의 명칭⁸⁾

일어일문학과 (33)	경기대, 경북대, 경성대, 고려대, 관동대, 군산대, 대구가톨릭대, 대전대, 덕성여대, 동국대(서울/ 경주), 동의대, 명지대(서울), 목포대, 부산대, 서울여대, 성결대, 성신여대, 세종대, 수원대, 신라대, 영남대, 인제대, 인천대, 전남대, 전북대, 제주대, 창원대, 청주대, 충남대, 한남대, 동의대, 부경대
관광일어학과 (2)	경주대, 한국국제대
관광일본어학과 (1)	동신대
국제학부(일본어일본학) (1)	울산대
일본어학과 (7)	강원대(삼척), 경희대(수원), 광주대, 극동대, 동서대, 세명대, 호남대
일어학과 (1)	영산대(부산)
일본어과 (10)	남서울대, 단국대(천안), 대구한의대, 동덕여대, 삼육대, 서울신학대, 영동대, 우석대, 조선대, 한밭대
비즈니스일본어학부 (1)	부산외대
국제비즈니스어학부(일어)(1)	서경대
커뮤니케이션일본어학부 (1)	부산외대
일본학부 (1)	한국의대
중국일본학부 (1)	건양대
일본어일본학과 (1)	대구대
일본학과 (11)	강릉원주대, 강원대, 계명대, 대전대, 동명대, 배재대, 숙명여대, 평택대, 한림대, 한서대, 한신대
일어일본학과 (4)	선문대, 성공회대, 숭실대, 제주국제대
일본어문학과 (3)	가천대, 계명대, 상명대(천안)
일어교육과 (7)	건국대, 경남대, 경상대, 상명대, 신라대, 원광대, 인천대

8) KCUE 대학입학정보(<http://univ.kcue.or.kr/> 2012년 11월 30일) 대학입학정보→학과별 입학정보를 통해 정리한 것임.

◀ 참고문헌 ▶

- 이재성(2013) 「한국일본학회 창립과정」韓國日本學會 40周年 特別委員會 編, 『韓國日本學會40年史 日本 研究의 成果와 課題』보고사, pp.60~69.
- 최건식(2013) 「1970년대 한국일본학회 활동과 연구 성과」韓國日本學會 40周年 特別委員會 編, 『韓國日本學會40年史 日本 研究의 成果와 課題』보고사, pp.313~329.
- 통계청 http://kostat.go.kr/portal/korea/kor_nw/3/index.board?bmode=read&aSeq=255362 의 첨부파일 2012 청소년 통계 보도자료.hwp (2013년 2월 15일)
- 조선닷컴 http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2011/09/21/2011092100877.html. (2013년 2월 15일)
- 한국관광공사 <http://kto.visitkorea.or.kr/kor/notice/data/statis/profit/board/view.kto?id=417415&isNotice=false&instanceId=294&mum=1> (2013년 2월 15일)
- 한국관광공사 <http://kto.visitkorea.or.kr/kor/notice/data/statis/profit/notice/inout/popup.kto> (2013년 2월 15일)의 2012년 외래객 입국 통계.
- 한국무역협회 http://stat.kita.net/top/state/n_submain_stat_kita.jsp?menuId=01&subUrl=n_default-test_kita.jsp?lang_gbn=kor^staid=kts&top_menu_id=db11 (2013년 2월 15일).
- KCUE 대학입학정보(<http://univ.kcue.or.kr/> 2012년 11월 30일) 대학입학정보→학과별 입학정보.

- 투 고 : 2012. 11. 30.
- 심 사 : 2012. 12. 15.
- 심사완료 : 2013. 01. 15.

한반도에서 간행된 일본전통시가 문헌의 조사연구

— 단카(短歌)·하이쿠(俳句) 관련 일본어 문학잡지 및 작품집을 중심으로 —

정병호*·엄인경**
bhjung@korea.ac.kr · uik6650@hanmail.net

<要 旨>

본論文は1920年代から1940年代にかけて、朝鮮半島で刊行された短歌と俳句の専門雑誌や単行本を調査研究したものである。これら歌集と句集及び歌誌と俳誌の種類と特徴、主要な歌人と俳人、さらにこのような日本の伝統的な短詩型文学に関連する文献を朝鮮半島で刊行した目的と、その文献の主な内容など、このジャンルの全貌を捉えようとした。短歌の方は、日本から渡鮮してきた有力歌人たちによって、すでに1920年代にいくつかの歌集や『真人』という歌誌が発行されていた。1930代にはモダニズム系列の破格短歌まで登場し、多様な短歌が創作されたことと推測できる。俳句の方も1920年代から、ホトギス派の俳誌は全国で発行されはじめ、1930年代には新興俳句派と石楠派も加わり、朝鮮の地方色を表わすために競合していたことがわかる。1930年代の歌壇と俳壇の活況ぶりは多様な性格をもつ歌集と句集の出現からも推察できるが、やがて日中戦争、太平洋戦争期に入り、半島の歌壇と俳壇もその影響をうけ、それぞれ国民詩歌連盟と朝鮮俳句作家協会に統合され活動も限られるようになった。本論文で調査したものは短歌雑誌4種、歌集22種、俳句雑誌3種、句集13種である。

今まで植民地に於ける<日本語文学>研究、あるいは韓国作家のいわゆる<二重言語文学>研究は、小説ジャンルが断然と研究の中心に置かれていた。しかし、本論文の調査研究によると、日本の伝統的な詩歌ジャンルが朝鮮半島の中で最も幅広く一貫した形で存続しながら、時代の推移に伴い多様な内容性をも孕んでいることが確認できた。従って、本論文の調査研究は植民地<日本語文学>研究の新しい領域を開拓する可能性を含んでおり、小説分野に片寄っていた植民地文学の研究史を見直すことが出来る土台になることと期待する。

キーワード: 植民地日本語文学, 短歌と俳句, 歌集, 句集, 歌誌, 俳誌(Japanese literature in the colonies, Tanka, Haiku, a collection of Tanka, a collection of Haiku, magazine of Tanka, magazine of Haiku)

I. 서론

한국의 개항과 더불어 한반도 거류가 시작된 이후부터 1945년 종전과 더불어 본국으로 철수하기까지 재조일본인들이 한반도에서 간행한 일본어 문헌은 현재 15,000여건 정도가 확인된다.¹⁾ 이들 문헌은 잡지나 신문 등 미디어 자료, 단행본, 자료집 등 다양한 형태를 띠고 있으며 한반도가 일제의 보호국이나 식민지가 되기 훨씬 이전부터 광범위하게 생산, 유통되어 일본의 패전에 이르기까지 지속적으로 간행되었다.

2000년대 이후 한국이나 일본에서 이들 식민지 <일본어 문학> 또는 <이중언어문학>이라는 관점에서 식민지 시기 <일본어 문학>에 관한 연구가 일대 붐을 일으켰으며 이들 통해 상당수의 식민지 <일본어 문학>에 대한 연구²⁾가 정착되었다고 할 수 있다. 그런데 이들

* 고려대학교 일어일문학과 교수, 일본근현대문학, 한일비교문화론, 단카/하이쿠 작품집 담당

** 고려대학교 일본연구센터 연구교수, 일본시가문학, 한일비교문화론, 단카/하이쿠 잡지 담당

1) 고려대일본연구센터 토대연구사업단(2011), 『한반도·만주 일본어문헌(1868-1945) 목록집』(전13권, 도서출판문)의 1-2권의 한반도 단행본과 8권의 한반도 연간물 수치에 의한다.

<일본어 문학> 중 재조일본인들의 생활과 정서를 표출한 문학이나 문화에 관련한 서적을 살펴보면, 타 장르에 비해 하이쿠(俳句)나 와카(和歌)와 같은 일본전통시가의 창작이 식민지기 내내 가장 활발히 이루어진 것을 확인할 수 있다.³⁾ 이와 같은 일본의 단시형 장르는 조선이 일본의 보호국으로 되기 이전부터 『한국교통회지(韓國交通會誌)』(韓國交通會, 京城印刷社, 京城, 1902-03, 전5호), 『한반도(韓半島)』(韓半島社, 京城, 1903-06, 전5호), 『조선평론(朝鮮評論)』(朝鮮評論社, 釜山, 1904, 전2호) 등 다양한 일본어 잡지의 문예란을 통해 발표되었다. 그러나 1920년대 이후가 되면 이들 일본전통시가는 작품집 또는 하이쿠·단카의 전문잡지 형태로 다량 간행되었으며 일본 패전에 이르기까지 식민지기를 일관하여 재조일본인은 물론 조선인⁴⁾들도 참여하여 가장 폭넓게 그리고 단절 없이 창작된 장르였다.

이렇듯 식민지 시기 한반도 식민지 <일본어 문학> 중 광범위하게 지속적으로 재조일본인은 물론 조선인에 의해 창작되고 감상되었던 일본전통시가에 대한 선행연구는 극히 적은 편이며 그 내용도 개별적이고 단편적인 작품이나 작가에 대한 지적으로 그치고 있다. 예를 들면 유옥희⁵⁾, 구인모⁶⁾, 엄인경⁷⁾의 연구는 식민지 조선에서 창작된 일본전통시가를 다루고 는 있지만 수많은 전통시가 작품집 중 각각 『조선하이쿠일만집(朝鮮俳句一萬集)』, 이치야마 모리오(市山盛雄)가 편(編)한 『조선풍토가집(朝鮮風土歌集)』(1935), 1900초년대 일본어 잡지 『조선지실업(朝鮮之實業)』의 ‘문원(文苑)’란만을 그 대상으로 하고 있다. 그리고 나카네 다카유키(中根隆行)는 ‘목포 카리타고사(木浦かりたご社)’ 소속 조선인 하이쿠 작가였던 박노식(1897-1933)을 분석하여 “철두철미하게 일본과 조선에 걸친 호도토기스게 하이쿠 문단의 커뮤니티 네트워크 속에서 탄생한 조선인 하이쿠 시인”⁸⁾이었다는 점을 밝혀냈지만, 이 역시 특정 전통시가 작가 연구에 그치고 있다. 한편 구스이 기요후미(楠井清文)는 당시 재조일본인의 이주와 문학결사를 전통시가 장르를 중심으로 ‘로컬 컬러’⁹⁾라는 관점에서 논하고 있는데, 역시 특정시기 일부의 전통시가만을 문제시하고 있다. 또한 허석¹⁰⁾의 경우는

-
- 2) 정병호 「한반도 식민지 <일본어 문학>의 연구와 과제」 『일본학보』 제85집, 한국일본학회, 2010.11, pp.109-124.
 - 3) 엄인경(2011) 「20세기초 재조일본인의 문학결사와 일본전통 운문작품 연구 -일본어 잡지 『조선지실업(朝鮮之實業)』(1905-1907)의 <문원(文苑)>을 중심으로」 『일본어문학』 제55집, 일본어문학회, pp.381-404.
 - 4) 조선인들의 일본전통시가가 보이는 최초의 예는 ‘조선총화(朝鮮叢話)’ 및 ‘조선의 가요(朝鮮之歌謠)’ 등 조선문예물의 번역이 보이는 우스다 잔운(薄田斬雲)의 『암흑의 조선(暗黒なる朝鮮)』(日韓書房, 1908) 속에 들어있는 45구(句)에 달하는 ‘조선인의 하이쿠(俳句)’이다.
 - 5) 유옥희(2004) 「일제강점기의 하이쿠 연구 -『朝鮮俳句一萬集』을 중심으로-」(일본어문학회 『일본어문학』 제26집), pp.275-300.
 - 6) 구인모(2006) 「단카(短歌)로 그린 조선(朝鮮)의 風俗誌 - 市内盛雄 編, 朝鮮風土歌集(1935)에 對하여」 『사이(SAI)』, 국제한국문학문화학회, pp.212-238.
 - 7) 엄인경(2011) 전계논문(「20세기초 재조일본인의 문학결사와 일본전통 운문작품 연구 -일본어 잡지 『조선지실업(朝鮮之實業)』(1905-1907)의 <문원(文苑)>을 중심으로」), pp.381-404.
 - 8) 나카네 다카유키(中根隆行)(2011) 「조선 시가(朝鮮詠)의 하이쿠 권역(俳域)」(고려대 일본학연구센터 『日本研究』 제16輯, 고려대 일본연구센터), p.36.
 - 9) 楠井清文(2010) 「植民地朝鮮における日本人移住者の文学-文学コミュニティの形成と『朝鮮色』『地方色』」(『アート・リサーチ』 第10卷, 立命館大学アート・リサーチセンター), pp.6-8.
 - 10) 허석(1997) 「明治時代 韓國移住 日本人の 文學結社와 그 特性에 對한 調査研究」(『日本語文學 第3집』, 한국일본어문학회) pp.281-309.

전통시가장르 중심의 문학결사를 폭넓게 조사를 하였으나 주로 1900초년대를 중심으로 조사하고 있을 뿐만 아니라 누락된 잡지도 적지 않다.

이에 본 논문은 지금까지 한반도 시도되지 않은 한반도 식민지 <일본어 문학> 중 가장 광범위하고 지속적으로 간행되었던 장르인 일본전통시가 장르의 실체에 접근하고자 한다. 그래서 1920년대부터 1940년대까지 한반도에서 간행된 단카, 하이쿠 전문 <일본어 문학>잡지와 단행 작품집을 망라하여, 이들 가집과 구집 등은 시기별로 어떤 종류가 있는지, 나아가 이들 일본전통시가 관련문헌의 간행목적은 무엇이며, 어떤 내용을 포괄하고 있는지 이 장르의 전모를 파악하는데 그 목적이 있다. 이러한 광범위 조사를 통해 한반도에서 일본고전시가의 간행 흐름과 그 전모가 분명하게 드러남으로써 향후 해당 분야의 실증적 연구에 일조할 수 있을 뿐만 아니라 지금까지 식민지 <일본어 문학> 중 소설분야에 치중되었던 연구를 재검토할 수 있을 것으로 기대된다.

II. 본론

1. 한반도 간행 단카(短歌) 관련 문학잡지와 가집(歌集)

(1) 단카 관련 문학잡지

1920년 이전까지 반도 가단(歌壇)에는 전문 단카 잡지도, 단카계의 지도자적 인물도 등장하지 않았고, 신문이나 종합잡지의 문예란에 발표되는 재조일본인과 내지인의 작품이 위주였다. 그러다 1920년대 초 『미즈가메(水甕)』¹¹⁾에 기반한 30대의 가인(歌人)들이 도선(渡鮮)함으로써 반도의 가단은 활발한 움직임을 시작하게 된다. 한국과 일본의 국공립도서관, 대학 도서관에서 조사한 한반도 간행 단카 관련 문학잡지는 <표-1>과 같다.

<표-1> 한반도 간행 단카 관련 일본어 문학잡지

	잡지명	현존본 권호	편자	출판사	출판지	발행년월
1	眞人	제2권제1호-제21권제3호(중간 결호)	市山盛雄, 細井子之助	眞人社	京城 東京	1924.1. -1943.3.
2	歌林	제2권제1호	小西善三	朝鮮新短歌協會	京城	1934.12.
3	朝	제1권제8호	道久良	『朝』發行所	京城	1940.10.
4	國民詩歌	9월호-2년10월호(중간 결호)	道久良	國民詩歌發行所	京城	1941.9. -1942.11.

『진인(眞人)』은 1923년 7월에 창간된 단카 전문 잡지로, 1921년 조선에 오게 된 호소이 교타이(細井魚袋)¹²⁾가 주재하여 경성에서 발간되었으며 ‘진인(眞人)’이라는 명명도 교타이에

11) 1914년 4월 오노에 사이슈(尾上柴舟) 주제로 창간된 단카 잡지. 온화하고 이지적인 가풍을 특징으로 하며 수많은 동인들에 의해 지탱되었고, 2013년 창설 100주년의 해를 맞았다. 현재도 단카 결사 미즈가메의 홈페이지(<http://members3.jcom.home.ne.jp/mizugame100/>)가 운영되고 있다.

12) 호소이 교타이(細井魚袋, 1889-1962년). 본명 고노스케(子之助). 지바 현(千葉縣) 출신. 『미즈가메』 시절 오노에

의한¹³⁾ 것이다. 창간호는 현재 확인되지 않지만, 1924년 1월에 간행된 제2권 제1호부터 제5권까지 일부 호의 원본이 현존하고 제6권부터 1943년 3월의 제21권 제3호까지는 거의 결호 없이 현존본이 확인된다. 『진인』은 종전 이후에도 지속적으로 발간되었으며 1962년 8월 제40권 제8호(통권 389집)로 종간을 맞기까지 수많은 동인들에 의해 유지되었다.

일본의 유망 가인 호소이 교타이가 1921년 10월 조선으로 오게 되었고, 조선가단의 개척자 이치야마 모리오(市山盛雄)¹⁴⁾와 의기투합하여 조선에 있는 가인들을 포용하여 강고한 결사로 성장시킨 것이 ‘진인’이며, 이것이 움직임이 미약하던 반도의 가단에 큰 약진을 가져다 주었다. 기사에 따르면 로맹의 조각을 표지에 배치한 『진인』의 창간호는 반도에 센 세이션을 일으킨 것은 물론 내지의 중앙가단에도 큰 반향을 불러일으켰다¹⁵⁾고 하는데, 1923년 관동대지진으로 타격을 받은 도쿄의 인쇄계가 부진에 빠져 있을 때 조선에서 발행된 『진인』은 내용과 인쇄의 면에서 일본 중앙가단을 놀라게 할 정도로 훌륭한 형식과 내실을 갖추었던 것으로 보인다. 1924년 4월 교타이는 어쩔 수 없는 사정으로 도쿄로 돌아가게 되었는데, 이후에도 이치야마 모리오를 중심으로 한 경성진인사가 『진인』 초반의 발행을 담당하면서 「조선민요의 연구(朝鮮民謠の研究)」, 「조선의 자연(朝鮮の自然)」, 「전국가단일람표 제작(全國歌壇一覽表の作製)」 등 1920년대 한반도의 가단과 단카 연구에 가장 중핵이 되는 특집호를 내놓았다.

1930년대에 들어서도 『진인』은 여전히 내용이 풍성하고 수많은 동인가인을 유지하지만, 이치야마 모리오의 전근으로 인해 『진인』의 두 핵심인물인 호소이 교타이와 이치야마가 도쿄를 기반으로 하게 됨에 따라 발행, 인쇄 등이 모두 도쿄로 옮겨지게 된다. 이렇게 되면서 『진인』 초창기부터 주요 선자로 활약하며 단카의 창작뿐 아니라 다양한 가론과 문예연구를 펼치던 미치히사 료(道久良)가 「조선의 단카(朝鮮の歌)」¹⁶⁾와 같은 글과 더불어 반도가단에서 창작된 단카를 도쿄진인사 쪽으로 보내는 형식을 취하다가 1940년대 이후에는 『진인』에서 반도가단의 자취를 찾아보기는 어렵게 된다.

『진인』이 편집과 발행, 인쇄가 경성에서 점차 도쿄로 이전되면서 1930년대 후반이 되면 완전히 내지에서 발행되는 단카 잡지로 변모하는데, 1930년대 초중반에는 한반도에 『진

사이슈(尾上柴舟)에게 사사하였고, 1921-1924년에 경성에 있으면서 『진인』을 발행하였으며, 일본으로 돌아간 후에도 이 잡지에 진력하였고 개인 가집에 『오십년(五十年)』이 있음. 大島史洋 外編(2000) 『現代短歌大事典』(三省堂) p.535에 의함.

13) 상계서(『現代短歌大事典』) p.321에 의함.

14) 이치야마 모리오(市山盛雄, 1897-?년), 야마구치 현(山口県) 출신. 노다 간장(野田醬油, 현재의 키토만(キッコーマン)의 조선출장소장, 인천공장장을 역임한(井村一夫 「真人歌人抄録-市山盛雄氏-」 『真人』 第9卷第1號, 1933.1. p.32.)인물로, 1973년의 논저도 확인되므로 그 때까지는 생존했던 것으로 보인다. 이치야마가 단카를 짓기 시작한 것은 1922년 병으로 입원했을 때이며 그 직후 『열은 그림자(淡き影)』라는 개인 가집을 출판하였다. 그밖에도 『회향꽃(茴香の花)』이라는 가집도 있었다고 하며, 그의 대표가집 『한향(韓郷)』은 그 가집에 대한 비평이 『진인』 제9권 제11호의 특집호가 될 만큼 반향이 컸다.

15) 相川熊雄 「半島歌壇と真人の展望」 『真人』 第10卷 第7号, 眞人社, 1934.7. pp.14-15.

16) 道久良 「朝鮮の歌」 『真人』 第15卷 第2号, 眞人社 1939. 2. pp.31-33. 미치히사는 조선을 사랑하고 조선에 빠를 문을 각오가 된 사람에게서 비로소 조선이 맛을 담아내는 단카가 나온다는 취지의 내용을 제시한다. 1930년대 후반부터 1940년대에 걸쳐 반도가단의 책임자적 입장을 천명하고 있다.

인』 외에도 『포토나무(ポトナム)』, 『신라야(新羅野)』, 『사스카타(さすかた)』와 같은 단카 잡지도 있었다¹⁷⁾고 한다. 이러한 단카 잡지들의 현존본은 확인되지 않지만, 1930년대는 한반도 가단이 상당히 활황이었음을 반영하듯 신흥단카 결사의 존재를 증명하는 『가림(歌林)』이라는 이채로운 단카 잡지가 등장하게 된다.

『가림』은 조선신단카협회(朝鮮新短歌協會)가 그 기관지로서 경성에서 발행한 단카 잡지이며, 1934년 12월에 발행된 제2권 제1권(1935년 1월호)만이 현존한다. 1934년 여름 무렵 창간되었고 제1권은 4호까지 간행된 것으로 보인다.¹⁸⁾ 조선신단카협회는 표지의 「선언」에서 “동양예술의 전통을 올바르게 계승”하고 “신단카를 수립”을 표방하며 작품행동, 자기비판, 일대약진의 운동을 협회결성과 『가림』 쇄신을 통해 실천한다고 선언하였다. 『가림』이 지향하는 신단카는 “새로운 현실파악”과 “객관적 과학적 방법”으로 “자기비판”을 통해 “새로 개념되는 단카”¹⁹⁾인데, 이 유파는 1927년 일본에서 신단카협회가 설립되어 구어가인들이 자유율 구어단카를 주장하던 모더니즘 단카와 프롤레타리아 단카를 포함한 신흥단카운동과 관련²⁰⁾되어 있는 것으로 파악된다.

실제 『가림』 내에 실린 동인작품과 신인작품으로 수록된 단카들은 31글자라는 외재율에 파격이 상당하고, 구어를 통한 내재적 음율을 구사하고 있다. 또한 잡지 내의 가론에서는 사어(死語)화 된 고어 사용을 배격하고 현대구어를 사용해야 하는 당위성을 강력히 표명하고 있다.²¹⁾ 20명의 동인 외에도 김정록(金正祿)이라는 조선인 가인을 포함한 신인 22명의 작품이 보여 미약하지 않은 세력을 형성하고 있었던 것으로 추측된다. 잡지 안에서 동인과 신인에 대한 작품비평과 작품검토가 면밀히 이루어지고 있어 자기반성적 자세가 엿보이며, 회원의 동정과 편집후기, 회칙까지 담아내 단카 잡지로서의 체제를 갖추고 있다. 발행인 고니시 요시로(小西芳郎)를 비롯한 주요 위원과 동인들이 『진인』에 등장하지 않는데, 조선신단카협회는 독자적 행보를 했던 계열이었던 것으로 보인다.

중일전쟁에 접어든 이후 반도 가단을 대표할만한 뚜렷한 단카 잡지는 『아침(朝)』 정도만이 확인된다. 현재 1940년 10월에 발행된 제1권 제8호만이 남아 있는데, 인쇄는 매일신보사, 발행인은 『진인』에서 큰 활약을 한 바 있는 미치히사 료(道久良)이다. ‘성전(聖戰)’으로 일컬어진 중일전쟁은 장기전으로 접어들었고 문예잡지는 형식과 내실이 점차 곤란한 상황에 빠졌던 듯, 『아침』의 「편집후기」에서는 단카 제출자가 적은 것을 염려하는 문구가 보이고²²⁾, 체제도 시가의 정신을 논하는 소품 산문들과 단카 작품이라는 단순한 구성을 취하고 있다. ‘교육소집(教育召集)’, ‘세계사’, ‘이념’, ‘격돌’, ‘신질서’, ‘배급’, ‘이상호흡’, ‘사

17) 山口豊光 「歌集「韓郷」風景」 『眞人』 第9卷 第11號, 眞人社, 1933.11. p.20.

18) 小西善三 編(1934) 『歌林』 第2卷 第1號, 朝鮮新短歌協會, 표지의 「宣言」에 “『가림』을 결성하고 진지한 정진에 만년을 보냈다”와 「作品檢討」(pp.18-19)에 가림2,3,4輯이라는 표기 등이 보인다.

19) 岡崎靖雄 「毒つれづれ」 『歌林』 第2卷 第1号, pp.2-5.

20) 전게서(『現代短歌大事典』) 「口語短歌」(p.228), 「新興短歌運動」(pp.320-321), 「新短歌」(p.323) 항목 참조.

21) 岩下青史 「短歌用語の問題」 『歌林』 第2卷第1号, pp.8-10.

22) 道久良 「編集後記」 『朝』 10月号, 『朝』 發行所, 1940.10. p.33.

이런' 등 전쟁참여와 직결된 단카가 직접 읊어지거나, 내선일체 구호 하에 조선인들의 창씨개명이 진행되는 상황도 단카 속에 그대로 드러나 있어 1940년의 조선이 놓인 시대상을 읽어내기에 유용한 자료가 된다.

『아침』의 속간여부는 알 수 없지만, 일단 1941년 6월 총독부 당국에 의해 잡지들은 모두 폐간 처분을 받았다. 그리고 국민총력조선연맹문화부 지도하에 7월에 국민시가연맹(國民詩歌聯盟)이 결성되어 단카와 시 장르를 통합하여 9월 조선 유일의 시가잡지 『국민시가(國民詩歌)』가 창간되었다.

『국민시가』는 1941년 9월호(창간호), 10월호(제1권 제2호), 12월호(제1권 제4호), 1942년 8월호(제2권 제8호), 1942년 11월호(제2권 제10호)가 현존하며, 1942년 3월에 국민시가연맹의 제1작품집 『국민시가집』이 별도로 간행되었다. 『국민시가』 발행의 목적은 “고도의 국방국가체제 완수에 이바지하기 위해 국민총력의 추진을 지향하는 건전한 국민시가의 수립”²³⁾이라 명시되어 있고, 종합잡지와 회원잡지의 형태를 겸하고 있다. 또한 내지 일본에서 이루어진 가단의 통일체인 대일본가인회(大日本歌人會)가 종래의 결사조직에 여전이 중점을 둔 것에 비해, 조선의 국민시가연맹은 기존의 모든 결사가 해산하여 결성된 것이었다. 세계 문화와 국민문화, 일본문화와 반도문화를 이론적으로 정립시키려는 노력이 보이며, 단카의 역사성과 전통을 강조하면서 신체제하에 “건전”한 정신문화를 시가로 구현하고자 하였다.

『진인』에서 반도가인의 대표격으로 활동하고 『아침』을 주재했던 미치히사 료와 『히사키(久木)』 계통에서 활약했던 것으로 보이는 스에다 아키라(末田晃)가 중심이 되어 단카선발과 이론을 제시하였을 뿐 아니라 전체 편집과 간행을 담당했고, 시 쪽은 다나카 하쓰오(田中初夫)와 아마가사키 유타카(尼ヶ崎豊)가 담당했다. 전쟁이 확산되면서 전쟁이나 죽음을 소재로 한 단카도 증가하며, 군대생활을 경험한 재조일본인들이 총후문학으로 시가를 창작하는 경우가 대부분이지만, 가야마 미쓰로(香山光郎, 이광수), 주영섭(朱永涉) 등²⁴⁾이 시 창작에서 활약한 것이 눈에 띄며, 단카에서는 한봉현(韓鳳鉉), 남기광(南基光), 남철우(南哲祐), 최봉남(崔峯嵐)과 같은 조선인 가인도 확인된다. 『국민시가』는 명실상부 “반도시가단의 최고지도기관”이자 “시가단의 유일한 공기(公器)”²⁵⁾임을 자부하고 있었는데 이 잡지는 식민지 한반도에서 간행된 마지막 일본어 시가잡지였다.

(2) 한반도 간행 가집(歌集)

1920년대부터 1940년대까지 한반도에서는 수많은 가집(歌集)들이 간행되었다. 이하 한국과 일본의 국공립도서관, 대학 도서관에서 조사한 한반도에서 간행된 단카 가집들은 <표-

23) 道久良「編集後記」『國民詩歌』9月号(創刊号), 國民詩歌發行所, 1941.9. p.96.

24) 단카보다는 시 창작에 조선인명이 다수 확인되는데, 이들 외에도 『국민시가』 제2권(1942년 발행)에는 김경희(金景熹), 조우식(趙宇植), 강문희(姜文熙), 이춘인(李春人), 구자길(具滋吉), 윤군선(尹君善), 임호권(林虎權), 김상수(金象壽), 김기수(金圻洙) 등 많은 조선인 시인들의 시가 게재되어 있다.

25) 美島梨雨「半島詩歌壇の確立」『國民詩歌』10月号, 國民詩歌發行所, 1941.10. pp.62-63.

2>와 같다.

<표-2> 한반도 간행 가집(歌集)

	가집명	저·편자	출판사	출판지	출판년월(일)
1	淡き影	市山盛雄	ボトナム社	京城	1922.12.25
2	莎鷄集	百瀬千尋	ボトナム社	京城	1923.6.1
3	柊	岡嶋郷子	近澤商店印刷部	鎮南浦	1926.7.25
4	さきもり	神尾弋春		京城	1928.11
5	松濤園	渡邊清房	元山短歌會	元山	1928.12.20
6	麥の花	難波專太郎	眞人社	京城	1929.9.4
7	高麗野	名越湖風	大阪屋號書店	京城	1929.11.15
8	(朝鮮歌集序編)澄める空	道久良	眞人社	東京	1929.12.10
9	韓郷	市山盛雄	眞人社	東京	1931.2.9
10	(久木歌集)山泉集	末田晃·柳下博	久木社	京城	1932.1.15
11	鍾路風景	百瀬千尋	ボトナム社	京城	1933.10.20
12	新羅野歌集 第三	丘草之助	新羅野發行所	京城	1934.1.1
13	(昭和九年版)朝鮮歌集	朝鮮歌話會	朝鮮歌話會	京城	1934.1.25
14	儒達	儒達短歌會同人	儒達短歌會	木浦	1934.7.17
15	樂浪	德野鶴子	ボトナム社	京城	1936.8.10
16	朝鮮風土歌集	市山盛雄	朝鮮公論社	京城	1936.11.25
17	松の實	磯部百三	磯部百三先生歌集刊行會	京城	1937.2.22
18	朝鮮	道久良	眞人社	京城	1937.3.31
19	現代朝鮮短歌集	現代朝鮮短歌集刊行會			1938
20	聖戰	道久良	眞人社	京城	1938.9.15
21	愛國百人一首全釋附·愛國短歌集	末田晃	國民詩歌發行所	京城	1943.3.1
22	和魂	楠田敏郎	大洋出版社	京城	1944.7.5

한반도에서 현존하는 것 중 최초의 가집은 1922년 경성(京城)에서 간행된 『가집 열은 그림자(淡き影)』(市山盛雄, 보토ナム社)인데 위의 표에서 알 수 있듯이 1920년대는 전체적으로 총 8편의 가집이 간행되고 있다.

이 중 『고려야(高麗野)』는 경성법학전문학교 예과 교수이자 가인인 나고시 나카지로(名越那珂次郎, 호는 魯石)가 부산과 경성 등 조선에서 읊은 노래를 중심으로 가고시마(鹿兒島), 그리고 영국 유학 중 노래한 단카(短歌)를 모아 편찬한 개인 가집(歌集)으로 경성의 ‘오사카야고서점(大阪屋号書店)’에서 1929년 11월에 발행한 것이다. 발문에서 “이 가집 안에 조선에 관한 것이 다소라도 나와 있다면 다행이”라는 구절이나 “「고려야(高麗野)」라고 이름 붙인 것은 이 가집에 조선에 관해 읊은 노래가 많기 때문이”라는 구절을 보면 역시 조선에서의 “실감·감흥”²⁶⁾을 단카로 담아내고 싶었다는 작가의 의도가 잘 나타나 있다.

『조선가집서편 맑은 하늘(朝鮮歌集序篇 澄める空)』은 가인인 미치히사 료(道久良)가 창작한 가집인데 도쿄의 ‘진인사(眞人社)’에서 1929년 11월 진인(眞人)총서 제3편으로 간행한 것이다. “조선을 모태로 하여 탄생한 진인”²⁷⁾은 이 당시 도쿄에서 조선관련 진인총서를 연이어 만들어 냈다. 그 진인총서 제1편이 이치야마 모리오(市山盛雄) 편인 가집 『봉래집(蓬萊

26) 名越那珂次郎 「跋」 『高麗野』, 大阪屋号書店, 1929.11. pp.1-2.

27) 道久良編 『歌集朝鮮』 眞人社, 1937. p.100

集』이고, 제2집이 이치야마 모리오가 저작한 『한향(韓鄉)』이며, 제12편에는 역시 이치야마가 편집한 조선관련 최대 가집인 『조선풍토가집(朝鮮風土歌集)』이 1935년에 간행된다.

한편 『히사키가집 산천집(久木歌集 山泉集)』은 가인인 스에다 아키라(末田晃)와 야기시타 히로시(柳下博)가 공동 편집한 가집인데 1932년 1월 인쇄하여 경성의 ‘히사키사(久木社)’에서 동년 1월 15일에 히사키총서(久木叢書) 제4편으로 간행한 것이다. 이 가집이 ‘조선가단’에서 가지는 의미나 존재성을 언급하고 있는 부분을 보면 당시 조선의 수많은 가단 중 ‘히사키’의 존재를 상당히 어필하려는 의도가 읽히는데 이는 당시 조선의 다양한 유파가 상호 경쟁관계에 있었음을 잘 보여주고 있다.²⁸⁾

1930년대가 되면 현존하는 가집으로 총 12편이 보이는데 그 중에서 『가집 낙랑(歌集 樂浪)』은 가인 도쿠노 쓰루코(徳野鶴子)가 자신의 단카를 모아 1936년 8월 도쿄의 ‘포토나무사(ボトナム社)’에서 ‘포토나무총서 제27편’으로 간행한 것이다. 이 가집의 ‘권말소기(卷末小記)’를 보면 포토나무 단카회 소속으로 1927년부터 단카를 시작한 작가가 1928년부터 1936년까지의 단카를 모아 이 중 341수를 선별하여 만든 것으로 “실은 세상에 낸다기 보다도 자기 자신의 기념으로서 과거 기록을 남겨 두”(p.2)겠다는 마음으로 간행한 것이다. “「낙랑」이라는 이름은 낙랑예술품에 대한 동경의 뜻과 조선에 대한 애착의 심정을 표상”했다는 도쿠노 쓰루코의 말을 통해 알 수 있듯이 조선을 “나의 고향”이라고 생각하며 조선의 흙으로 돌아가겠다는 슬회를 통해 조선과 조선문화에 대한 애착을 시사하고 있다.²⁹⁾

다음으로 1935년도에 간행된 『조선풍토가집(朝鮮風土歌集)』은 한반도에서 나온 최대의 가집이라 할 수 있다. 이 가집은 가인이자 진인사 동인이며 반도가단의 개척자라고 일컬어졌던 이치야마 모리오가 1935년에 진인사 창립 12주년 기념출판물로 동출판사에서 간행하고 다음해인 1936년 조선공론사(朝鮮公論社)에서 제2쇄가 출판된 가집이다. 이 가집은 이치야마 모리오가 당시 조선에 거주하거나 과거에 거주하였던 가인, 여행자, 조선과 관계가 있는 가인들의 작품 중 조선색이 강한 작품을 유파불문하고 조사, 채록한 것인데 메이지(明治), 다이쇼(大正), 쇼와(昭和)기의 모든 시기를 망라하고 있다. 특히 이 가집은 단지 채록의 범위를 일본인에 한정하지 않고 김응희(金應熙), 장병연(張秉演), 정지경(鄭之璟), 최성삼(崔成三) 등 조선인이 노래한 단가들도 포함하고 있다는 점이 이채롭다. 『조선풍토가집』이 이 시점에서 간행하게 된 배경은 편자인 이치야마 모리오가 조선관련 단카 중 ‘조선풍물’을 읊어 ‘조선색(朝鮮色)’이 잘 드러난 작품을 선별했다고 강조하는 곳이나,

조선풍토는(중략)일본 내지와는 상당히 다른 그 취향을 달리하고 있다.(중략) 이런 종류의 가집은 로컬 컬러가 차분히 드러나 있지 않으면 무의의하다고 나는 생각한다. (중략)이런의 가집에도 조선에 사는 제군의 노래가 많이 들어가 있을거라 생각하지만 내가 기대하는 이국정조가 스며나온 것임을 절망한다.³⁰⁾

28) 末田晃 「卷末小記」 『久木歌集山泉集』, 久木社, 1932.1. pp.143-144.

29) 徳野鶴子 「卷末小記」 『歌集樂浪』, ボトナム社, 1936.8, p.4.

라는 가와다 준(川田順)의 서문을 통해 ‘조선풍토’, ‘이국정조’가 ‘한 지역인 조선이라는 특이한 토지’라는 관점에서 로컬 컬러를 강조하고 있다. 이는 당시 제국일본의 확장구도 속에서 문학이나 미술 분야 등에서 지방문화로서 아니면 지방색으로서 조선색을 강조하고 있었던 문화담론에 강한 영향을 받고 이를 단카라는 분야에서 이를 발굴, 유통시키고자 하는 시대적 문맥이 잘 드러나 있다. 이렇듯 이 가집은 당시의 일본예술계에서 지방문화로서 로컬컬러를 강조하는 시대적 문맥을 잘 반영하고는 있지만 한편으로는 양적으로도 질적으로도 조선, 조선인, 조선문화를 종합적으로 묘사한 일대 단카집으로 위치하고 있었다고 할 수 있다.

다음으로 『가집조선(歌集朝鮮)』은 가인인 미치히사 료(道久良)가 편집한 가집으로 경성의 ‘진인사’에서 1937년 3월 31일에 ‘경성 진인사판 『가집 조선』 제1집’으로 간행된 것이다. 이 가집의 모두에서 미치히사 료가 “조선의 자연과 인간에 대한 한없는 사랑으로부터 조선의 노래가 태어나지 않으면 안 된다. 외지벌이(出稼) 근성을 버려 버리라. 우리들이 올바르게 살아가는 길이 그곳에 남겨져 있다”³¹⁾라는 구절을 본다면 진심으로 조선의 풍물과 그곳에 사는 사람들의 감정을 주제로 한 종합시를 엮어 당대 조선의 참 모습을 단카로 제시하고자 했음을 엿볼 수 있다.

『가집 성전(歌集聖戰)』 역시 조선 ‘진인사’의 대표적인 가인 미치히사 료가 저작 및 발행한 가집인데 ‘경성 진인사’에서 1938년 9월 15일에 간행한 것이다. 이 가집은 모두에 “보잘 것 없는 가집 성전을 대륙에서 싸우는, 또는 싸웠던 충용(忠勇)한 육해군 장병과 전몰장병의 영혼에 바친다”³²⁾고 나와 있듯이 중일전쟁 당시 전쟁의 당위성과 전의의 고양, 전쟁의 추이를 노래한 것이다. 따라서 이 가집은 중일전쟁 1년간을 현장감 있게 기록한 기록문학적인 성격을 가지고 있지만 1940년대 활발하게 만들어진 태평양전쟁기 전쟁찬미의 국책문학적인 성격을 동시에 가지고 있었다고 할 수 있다.

1940년대가 되면 두 편의 가집이 현존하는 것으로 확인되고 이러한 전쟁찬미라는 국책문학적인 성격은 더욱 분명해지는데 이는 한반도의 가단도 이러한 시류에 적극적으로 편승해간 결과라 볼 수 있을 것이다. 이러한 특징은 『가집 조선』이나 『조선가집서편 맑은 하늘』을 창작하여 조선문화와 조선인, 조선의 자연에 대한 깊은 이해를 도모하였던 미치히사 료가 『가집 성전』을 통해 이른바 15년 전쟁기 이후 점차 소용돌이 속으로 휘말려가는 당시의 시류에 적극 편승한 예를 통해 명백히 알 수 있다.

2. 한반도 간행 하이쿠(俳句) 관련 문학잡지와 구집(句集)

(1) 하이쿠 관련 문학잡지

한반도에서는 1920년대 전반부터 호토토기스(ホトトギス) 계열의 하이쿠가 먼저 발흥하면서

30) 川田順 「序」(市山盛雄 『朝鮮風土歌集』, 朝鮮公論社, 1936.11), pp.1-2.

31) 道久良 『歌集 朝鮮』 眞人社, 1937.3, 속표지.

32) 道久良 『歌集 聖戰』 眞人社, 1938.9, 속표지.

하이쿠 전문 잡지가 등장했다. 그러나 한반도에서 하이쿠 전성기라고 할 만한 시기는 1930년대에 접어든 이후라고 할 수 있는데,³³⁾ 현재 한국과 일본의 국공립도서관, 대학 도서관에서 조사한 한반도 간행 하이쿠 관련 문학잡지는 <표-3>과 같다.

<표-3> 한반도 간행 하이쿠 관련 일본어 문학잡지

	잡지명	현존본 권호	편자	출판사	출판지	발행년월
1	草の實	100호-114호	横井時春	草の實吟社	京城	1933.10. -1934.12.
2	長性	제1권제1호 -제6권제12호	西村省吾	朝鮮石楠聯盟	京城	1935.1. -1940.12.
3	水砧	제1호-제6호	菊池武雄	朝鮮俳句作家協會	京城	1941.7. -1941.12.

『풀열매(草の實)』는 1930년대 한반도의 호토토기스 계열 하이쿠를 이끈 잡지로 현존본은 1933년 10월호부터 1940년 8월호까지 확인된다. 1933년 10월호에는 발행소는 풀열매음사(草の實吟社), 경성의 요시오카(吉岡)인쇄소 인쇄, 편집겸 발행인은 요코이 도키하루(横井時春)로 되어 있다. 당시 경성의 호토토기스파 하이쿠를 리드한 구스메 도코시(楠目橙黃子)가 풀열매음사의 잡영을 선호하고 그 선평을 게재하였고, 그가 타계한 후 성대한 추도 특집과 더불어 음사의 잡영은 요코이 가난(横井迦南=도키하루)이 담당하게 되었으며 편집겸 발행인은 기쿠치 다케오(菊池武夫)로 변경되고, 판매처는 일한서방이 되었다. 이미 1933년 10월호가 통권 제100호를 헤아리므로 역산하면 1925년 여름 이전에는 창간이 되었던 것으로 보이며, 1940년 8월호가 통권 제181호라 되어 있는 것으로 보아 한반도에서 15년간 간행된 최장수 하이쿠 잡지로 판단해도 무방할 것이다.

『장생(長性)』은 1935년 1월에 창간되어 1940년 12월까지 6년간 간행된 하이쿠 잡지로 조선석남연맹(朝鮮石楠聯盟)³⁴⁾이 발행한 기관지이다. 1935년 1월 1일에 창간호가 발행되었고 편집³⁵⁾ 겸 발행자는 니시무로 쇼고(西村省吾)³⁶⁾이다. ‘장생’은 장승, 즉 천하대장군, 지하

33) 경성에서만 『세이코(靑壺)』, 『풀열매(草の實)』, 『관(冠)』, 『장생(長性)』이라는 잡지들이 등장했고, 신의주에서는 『아리나레(アリナレ)』, 평양에서는 『유한(有閑)』, 부산에서는 『까치(鶉)』, 원산에서는 『산포도(山葡萄)』, 대전에서는 『호남음사구집(湖南吟社句集)』, 광주에서는 『딸기(いちご)』, 목포에서는 『가리타고(カリタゴ)』, 대구에서는 『가쓰기(かつき)』 등이 잇따라 등장하였다. 이중 호토토기스 계열만 하더라도 『구사노미』, 『관』, 『까치』, 『가리타고』, 『유한』, 『딸기』 등이 있어 역시 한반도에서도 호토토기스파 하이쿠가 상당한 주류였으며, 호토토기스파와 대립한 신흥하이쿠 계열의 『산포도』가 원산에서 상당히 오랜 시간 명맥을 유지했다. 그리고 호토토기스파와 신흥하이쿠를 모두 비판한 석남(石楠) 계열의 『장생』까지 포함 여덟 개의 하이쿠 잡지가 존재했다. 이상의 내용은 『미즈키누타(水砧)』 創刊號朝鮮俳句作家協會, 1941.7) 여러 기사 내용에 근거한다. 1920년대 경성에서 『황조(黃鳥)』라는 하이쿠 잡지가 나왔고, 이것이 『장고(長鼓)』로 이름을 바꾸었다고 한다. 지방에서도 결사에 의한 하이쿠 잡지의 간행이 이루어진 것으로 보이나 1920년대의 잡지 현존본은 확인되지 않으며 1930년대의 잡지들도 <표-3> 이외의 것들은 문헌상에서만 확인될 뿐이다.

34) 경성석남회, 이화동석남회, 와카바(若葉)석남회, 경성고공(京城高工)석남회, 경성치전(齒尊)석남회, 부산석남회, 장진강(長津江)석남회, 정전(京電)석남회, 경성부인석남회, 진해석남회, 신막(新幕)석남회, 하기천(下岐川)석남회, 겸이포석남회, 정원(晶苑)석남회, 감천(甘泉)석남회의 존재와 구성원들의 일단을 알 수 있다.

35) 편집 책임자라는 의미였던 것으로 보이며, 편집후기 등에 따르면 주로 실력과 와카바(若葉)석남회가 실제 편집 작업 등을 했으나 중일전쟁이 심화되자 1938년 후반부터는 연맹 산하의 여러 석남회가 돌아가며 편집을 했던

여장군이라는 조석풍토색을 가장 농후하게 드러내는 특이한 예술품이자, 이정표로서의 의의를 가진 상징물로, 석남연맹의 맹주 우스다 아로(白田亞浪)가 직접 『장생』이라 명명하였다. 『석남』은 원래 일본에서 1915년 3월에 창간된 하이쿠 잡지로 우스다 아로가 주재한 것으로, 호토토기스파나 신경향 하이쿠와는 다른 특색의 중간파였고,³⁷⁾ 『장생』의 창간은 『석남』 20주년 기념에 즈음한 것이었다. 조선석남연맹은 “순정 하이쿠”를 표방한 『석남』과 아로의 강력한 영향하에 “조선 풍물자연의 진실경(眞實境)과 향토색, 지방색을 개척”³⁸⁾한다는 사명으로 성립되었다. 이 점은 『장생』에서 지속적으로 강조되어 “조선의 하이쿠와 내지 하이쿠가 동일궤도를 걷게 하려는 것은 무리”이며 “특성을 신장하는 것이 조선 하이쿠의 생장”이자 “내지와 유일 진정한 연계”³⁹⁾로 인식되었다.

『장생』의 하이쿠 선별에서는 1930년대 후반의 지방색, 향토색에 대한 시대적 관심과 석남파의 예술적 하이쿠 지향점을 합치시키고자 한 노력⁴⁰⁾이 보이고, 한반도나 만주 뿐 아니라 사할린(樺太), 미주지역 관련 내용과 외래어 표기로 세계 각지의 향토색을 하이쿠에 담아내고자 하였다. 조선 생활의 넘새도 잘 드러나며, 1937년 이후 중일전쟁에 관련하여 ‘사변(事變)’, ‘출정(出征)’, ‘기관총’, ‘방공연습’, ‘전사자’ 등의 표현을 수반한 하이쿠도 많아진다. 이 외에도 다양한 산문을 통해 석남파의 하이론, 담화 등을 충실히 싣고 있다.

이윽고 중일전쟁에 돌입한 이후 한반도도 점차 전체주의적인 소위 신체제시대로 이행하게 되었고, 하이단 역시 이 영향을 받게 된다. 1940년에는 귀중한 물자인 종이의 배급도 어려워지면서 조선 전체에 시가 잡지의 간행이 허용되지 않게 되어 하이쿠를 포함한 기존의 시가 잡지는 폐간을 받아들일 수밖에 없었다. 국책에 순응한다는 의미로 모든 하이쿠 잡지들 역시 폐간되었지만, 조선반도의 하이단을 통합하여 강력한 하나의 단체를 결성하여 하이쿠 장르만의 기관지 발간을 허락받고자 호토토기스 계열을 중심으로 급거 1941년 5월 발기인회, 6월 12일 성황리에 조선하이쿠작가협회(朝鮮俳句作家協會)의 결성식이 거행되었다. 이 협회 결성식에 일본하이쿠작가협회의 회장 다카하마 교시(高浜虛子)가 조선 방문을 기회로 임석하였고, 이것이 협회 발족과 활동개시에 큰 기폭제가 되었다.

조선 특유의 냇가에서 빨래 방망이질을 하는 광경과 소리를 일본어로 표현한 ‘미즈키누타’라는 단어를 조선하이쿠작가협회의 기관지 이름으로 명명하게 되는 논의 과정⁴¹⁾을 거쳐,

것으로 보인다.

36) 조선석남연맹의 통제(統制)인 니시무라 고히(西村公鳳, 1895-1989년)이며, 이시카와 현(石川縣) 출신으로 조선에서는 조선흥농사(朝鮮興農社)의 간부였다. 종군 이후에도 가나자와(金沢)로 돌아가 활발히 하이쿠 창작 활동을 하였다. 『現代俳句大事典』 pp.408-409와 豊田康 『韓國の俳人 李桃丘子』(제이앤씨, 2007)p.49에 의함.

37) 山下一海 外編(2008), 『現代俳句大事典』 三省堂, pp.276-277.

38) 西村公鳳, 「鶴丘漫筆」 『長牒』 創刊號, 1935.1. pp.28-29.

39) 大野林火, 「風土的特質その他」 『長牒』 第3卷 第1號, 1937.1. pp.22-24.

40) 福島小蕾, 「いゝはゆる郷土色」 『長牒』 第1卷 第3號, 1935.3. pp.2-4.

41) 원래 ‘다듬이’라는 ‘砥’는 가을을 의미하는 게어나, 냇가에서 빨래방망이를 두드리는 조선 아낙네들의 유니크한 빨래터 광경은 얼었던 물이 풀리는 봄에 어울리는 것으로 협회에서 2월이나 3월 어느 쪽 게어로 하는 것이 좋으냐는 문의에 다카하마 교시가 3월 정도가 적합하다고 답변하여 3월의 게어로 확정되었다. 『水砥』 創刊號에 의함.

‘水砧’라는 표지의 휘호를 교시가 협회에 선물하게 된다. 이렇게 『미즈키누타(水砧)』는 1941년 7월에 창간된 하이쿠 잡지로 조선하이쿠작가협회⁴²⁾의 기관지이며, 편집겸 발행인은 앞선 『풀얼매』에서 편집겸 발행을 맡았던 기쿠치 다케오(菊池武夫)가 맡았다. 현재 확인 가능한 원문은 1941년의 7월 25일에 발행된 창간호부터 제6호까지의 여섯 호이다.

『미즈키누타』는 그 때까지 호토토기스, 신흥하이쿠, 석남과 같은 하이쿠 유파별로 활동하던 조선내의 하이진들이 파를 막론하고 하이쿠의 단일협회를 지향한다는 목적달성을 위해 서로 협력하고 융합과 교섭, 화해를 하는 장으로 마련되었다. 호토토기스 파의 우세 속에서 출발한 『미즈키누타』였지만, 호토토기스, 석남, 신흥, 운모(雲母)라는 네 파의 지분에 해당하는 지면의 할당이 주장되었고 하이쿠를 두고할 때 선고를 받고자 하는 선자⁴³⁾를 미리 지명할 수 있게 규정이 되어 있다는 점에서 유파 간의 갈등을 절충하려 했음을 알 수 있다. 각 파별 「잡영(雜詠)」⁴⁴⁾란과 회보, 선후소감 등의 촌평 외에도 『미즈키누타』는 회장 사토 비호(佐藤眉峰)⁴⁵⁾를 비롯한 임원진들의 수필, 일본 내지의 유력 하이쿠 잡지의 신소식을 거의 한 달 정도의 시차로 전하는 「하이쿠잡지 전망」, 하이쿠의 문학적 정신과 생활의 반영이나 대중화를 논한 다양한 구론(句論), 한반도에서 활동하거나 큰 영향을 주었던 내지 하이진들의 소식⁴⁶⁾, 협회의 규약 등을 담고 있어, 명실상부 한반도에 존재했던 하이쿠 종합잡지로서 최후의 역할을 수행하였다.

(2) 한반도 간행 구집(句集)

하이쿠 구집(句集) 역시 1920년대부터 1940년대까지 한반도에서 상당수 간행되었다. 현재 한국과 일본의 국공립도서관, 대학 도서관에서 조사한 한반도 간행 하이쿠 구집은 이하 <표-4>와 같다.

42) 협회 산하에 경성은 물론 인천, 평양, 전주, 광주 등에 존재하던 낙랑탐승회(樂浪探勝會), 와카나회(若菜會), 경성 제국대학법문학부구회(城大法文學部句會), 단봉회(丹峯會), 광주말기구회(光州말기구會), 석남구회(石楠句會), 산구회(山鳩會), 중앙시험소하이쿠회(中央試驗所俳句會), 라이세이회(來靑會), 하나조노음사(花園吟社) 등의 구회의 존재와 구성원이 확인된다.

43) 네 유파의 선자는 도미야스 후세이(富安風生, 1885-1979년), 니시무라 고히(西村公鳳, 1895-1989년), 예구치 한에이로(江口帆影郎), 이다 다코쓰(飯田蛇笏, 1885-1962년)로 모두 1930년대 후반 한반도에서 각 파의 하이쿠 잡지를 주재하던 인물들이다.

44) 대부분이 재조일본인이지만, 회녕을 근거지로 한 이순철(李淳哲), 목포를 근거지로 한 의성 이영학(諲城 李永鶴), 경성을 근거로 한 윤계원(尹燾元), 평양을 근거지로 한 허담(許淡) 등의 이름이 보여 1940년대 하이쿠 창작에 참여한 조선인 하이진을 확인할 수 있다는 점에서 주목할 만하다.

45) 사토 비호(佐藤眉峰, 1895-1958년)는 본명이 다케오(武雄)이며 도쿄 제국대학 의학부를 졸업하고 법의학에 종사하다 1929년 경성제국대학 교수로서 조선에 부임하였다. 1931년부터 33년까지 외유 후 조선으로 다시 돌아온 비호는 법조계인사들의 하이쿠 잡지 『관』의 중심인물이었으며 조선하이쿠회 회장을 역임하였다. 그는 종전 후 고향 나가노 현(長野県)으로 돌아갔고 신슈 대학(信州大学) 학장까지 역임하였다. 전게서(『現代俳句大事典』) p.252.

46) 예를 들어 제4호에는 1941년 타계한 이시지마 기지로(石島雉子郎)를 추모하는 글, 제5호에는 마사오카 시키의 사촌동생이자 대구에서 도서관장을 하며 하이쿠 잡지 『가쓰기(かつき)』 주재하고 요양을 위해 고향 마쓰야마(松山)로 돌아간 우타하라 소다이(歌原蒼苔)가 보낸 엽서 등이 소개되어 있다.

<표-4> 한반도 간행 하이쿠 관련 단행본

	구집명	저·편자	출판사	출판지	발행일자
1	朝鮮俳句一萬集	戶田雨瓢	朝鮮俳句同好會	京城	1926.9.1
2	合歡の花	新田留次郎	近澤茂平	京城	1927.2.23
3	金剛句歌詩集	成田碩內	龜屋商店	京城	1927.9.4
4	朝鮮	笠神句山	京城日報社學藝部	京城	1930.3.20
5	朝鮮俳句選集	北川左人	靑壺發行所	京城	1930.8.30
6	河越風骨遺句集	河越朝彌	草の實吟社	京城	1933.11.10
7	京城句集	高田宇外,海市綠村	句集刊行會	京城	1934
8	梨の花	小山空々洞 外 4人	梨の花刊行會	京城	1934.8.25
9	朝鮮女流俳句選集	海地福二郎	句集刊行會	京城	1935.7.23
10	くすり吐く	川崎千鶴子	朝鮮印刷株式會社	元山	1935.11.25
11	落壺句集	後藤鬼橋,大石滿城	落壺吟社	京城	1936.7.1
12	朝鮮風土俳詩選	津邨瓢二樓	橋本印刷所	京城	1940.9.1
13	枯蘆	清原伊勢雄	近澤書店	京城	1943.12.20

이 중 조선에서 최초로 간행된 하이쿠집 『조선하이쿠일만집(朝鮮俳句一萬集)』은 도다 사다요시(戶田定喜, 필명 戶田雨瓢)가 편집인으로서 1926년 8월에 인쇄하여 ‘조선하이쿠동호회’ 이름으로 동년 9월 1일 발행한 것이다. 이 구집(句集)은 조선의 하이쿠 동인들 사이에서 구집의 필요성을 느끼고 몇 번인가 발간을 시도하였지만 실현되지 못하였다가 편자인 도다가 1922년부터 몇 년간에 걸쳐 편찬에 착수하여 완성을 본 것이다. 이 구집은 ‘범례(凡例)’에서 밝히고 있듯이 1904년부터 1926년에 이르기까지 약 23년간 주로 조선에 거주하는 동인들의 하이쿠를 수록한 것이기 때문에 한반도 하이단(俳壇)의 추세와 시대적 경향을 알 수 있는 작품집이다. 특히, 경성일일신문(京城日日新聞)사 하이단에서 모집했던 응모작 7만 여구와 조선 각지의 신문·잡지 등으로부터 우수한 하이쿠 1만여구를 발취·수록하였다.⁴⁷⁾

이 구집은 대부분 일본인의 하이쿠를 실고 있는데 이 중 가장 눈에 띄는 인물로는 편자도 조선색이 농후한 다수의 작품을 제공했다고 밝히고 있는 이마무라 도모(今村靱, 필명 라엔(螺炎), 1870-1943)이다. 또한 재조일본인 뿐만 아니라 조선과 대륙을 여행하기 위해 들렀던 근대 일본 하이쿠 대작가인 다카하마 교시(高浜虛子)나 일본 근대문학자 도쿠토미 소호(徳富蘇峰)의 작품도 눈에 띄고 있다. 한편 이 구집에는 박노식(朴魯植), 이우자(李雨子), 김연화(金蓮花) 등 조선인 하이쿠도 상당수 들어 있다. 이는 우스다 잔운(薄田斬雲)이 쓴 『암흑의 조선(暗黒なる朝鮮)』에서 최초의 조선인 하이쿠(俳句)라 할 수 있는 45구(句)의 ‘조선인의 하이쿠(朝鮮人の俳句)’⁴⁸⁾가 실린 이래 조선인들 사이에서도 일본전통시가가 어느 정도 창작, 향수되고 있었음을 알 수 있다. 편자 도다 사다요시는 이 구집의 편찬에 착수하면서 틈이 나는 대로 조선 각지를 여행하면서 조선 풍물을 직접 접하고 조선특유의 색채를 표현하고 있는 수많은 구작을 채취하여 반도의 문예를 널리 세상에 소개하는데 그 노력을 경주

47) 戶田定喜編, 「凡例」. 『朝鮮俳句一萬集』, 朝鮮俳句同好會, 1926. pp.1-2.

48) 薄田斬雲 「朝鮮人の俳句」 『暗黒なる朝鮮』, 日韓書房, 1908. pp.263-267.

했음을 밝히고 있다. 이러한 의도로부터 이 구집을 편찬하는데 가능한 한 ‘조선색(朝鮮色)’이 잘 드러난 작품을 선별하려고 했음을 알 수 있다.

다음으로 『구집 합환의 꽃(句集合歡の花)』은 조선총독부 철도국 공무(工務)과장이자 하이진(俳人)인 닷타 류지로(新田留次郎, 필명 新田如水)가 편집 겸 발행한 구집인데 경성에서 비매품으로 1927년 2월 23일에 간행된 것이다. 이 구집은 뒷부분에 나와 있는 발문(跋文)을 보면 조선총독부 철도국 관리였던 닷타가 청진에서 근무하면서 1916년 용산 철도부에 출장을 가서 당시 재조일본인 사이에 상당히 유행하였던 하이쿠 열풍에 자극을 받아 청진에서 구회(句會)인 ‘나무 싹회(木の芽會)’를 열어 하이쿠 창작을 시작하게 되었음을 밝히고 있다.⁴⁹⁾ 특히 부부와 딸이 함께 조선의 풍물과 자연, 계절, 천문, 일상을 하이쿠로 창작하며 서로 비평하다가 딸의 결혼을 기념하여 가족의 하이쿠 창작집을 출판한 점으로 미루어 재조일본인의 식민지 생활의 한 단면을 읽어낼 수 있을 뿐만 아니라 재조일본인들 사이에 하이쿠 등 전통문시가가 얼마나 폭넓게 창작되고 애독되고 있었는지를 알 수 있다.

한편 『금강구가시집(金剛句歌詩集)』은 하이쿠시인이자 한시인인 나리타 세키나이(成田碩内, 호는 魯石)가 금강산과 관련된 일본인과 조선인의 하이쿠(句), 단카(歌), 한시(詩)를 모아 편집한 시가집으로 ‘가메야상점(龜屋商店)’에서 동년 9월 4일에 발행한 것이다. 특히 이 시가집은 이와야 사자나미(岩谷小波), 가와히가시 헤이고토(河東碧梧桐), 다카하마 교시, 이마무라 도모(今村靱) 등 일본과 조선의 대작가의 작품은 물론 조선의 명사의 수많은 작품들도 함께 실고 있다. 이런 의미에서 『금강구가시집』은 금강산이라는 조선의 특정한 주제를 중심으로 하여 단카, 하이쿠, 한시 등 다양한 시가 장르를 망라하여 일본인, 재조일본인, 조선인의 문학작품을 한데 묶어 한 작품집에서 문학적 교류를 실천하고 있다는 데 다대한 의미가 있다.

『구집 조선(句集 朝鮮)』은 가사가미 시즈노부(笠神志都延, 필명 笠神句山)가 편집자로서 1930년 3월에 인쇄하여 ‘경성일보사 학예부’ 이름으로 동년 3월 20일에 발행한 것이다. 이 구집은 교정을 담당한 쇼지 가쿠센(庄司鶴仙)은 ‘교정을 마치고’라는 글에서 “하이쿠도(俳句道)는 인간도(人間道)”임을 밝히며 세상에 신파(新派), 구파(舊派), 헤키파(碧派), 호토토기스파(ホトトギス派), 석남파(石楠派) 등 다양한 유파가 있음을 언급하며 경성일보사가 “각파의 융화·양해 촉진”을 위해 1929년 가을 “전조선하이쿠대회”⁵⁰⁾를 개최하였는데 그 때 모집한 하이쿠를 집록(輯錄)한 것이 바로 이 『구집 조선』인 셈이다. 따라서 이 구집은 경성일보의 ‘경일하이단(京日俳壇)’이 중심이 되어 1920년대 말 조선내 하이쿠 각 유파의 상쟁을 극복하고 이들의 융합은 물론 각 유파 하이쿠의 전모를 보여 줄 수 있도록 기획되었다.

『조선하이쿠선집(朝鮮俳句選集)』은 하이진 기타가와 사진(北川左人)이 약 3년간 다양한 일본어 잡지들 중 조선 관련 하이쿠를 엮어 1930년 5월 인쇄하여 경성의 ‘세이코발행소(靑壺發行所)’에서 동년 5월 20일에 발행하고 동년 5월 30일, 8월 30일에 각각 재판, 3판한 것

49) 新田留次郎「跋」『合歡の花』近澤茂平, 1927, pp.99-100.

50) 笠神句山『句集朝鮮』京城日報社學藝部, 1930. p.4.

으로 2원에 판매되었다. 총 분량은 400페이지이다. 편자 기타가와는 『조선고유색사전(朝鮮固有色彩辭典)』(京城, 靑壺發行所, 1932)을 간행할 정도로 조선 현지에서 조선 특유의 문화적 특징을 파악하는 데 노력하였으며 『조선하이쿠선집』도 당시 한반도에서 하이단(俳壇)의 융성함을 배경으로 하여 조선 하이쿠의 전체상을 보이려고 간행한 것이다. 이런 의미에서 이 구집은 최초의 한반도 간행 하이쿠집인 『조선하이쿠일만집(朝鮮俳句一萬集)』과 더불어 식민지 시대 전반기 조선관련 하이쿠의 특징을 가장 잘 보여주고 있는 거대 구집이라는 의미를 지니고 있다.

‘범례’에서 밝히고 있는 이 구집의 특징으로는 ‘조선의 지방색’과 ‘조선에 가장 인연이 깊은 만주의 지방색이 선명하게 드러난 구’를 많이 실고 있는 점, ‘조선인이 창작한 다수의 가구(佳句)’를 실고 있다는 점에서 ‘고금 비할 데가 없다’는 점, ‘여류작가의 음영(吟詠)’을 적지 않게 실고 있다는 점, ‘조선 고유의 계제(季題)를 수집하는데 세심한 주의’를 기울이고 있다는 점, ‘모든 계제를 나열하여 조학자의 참고’가 되려고 노력한 점, ‘난독(難讀)의 문자, 난훈(難訓)의 문자에는 반드시 후리가나(振假名)를 달고 있다’는 점⁵¹⁾ 등을 들 수 있다. 한마디로 요약한다면 조선인의 작품을 많이 실고 있을 뿐만 아니라 조선과 만주의 로컬컬러를 강조거나 초심자들에게 도움이 될 수 있도록 배려한 점이 이 구집의 가장 큰 특징이라 할 수 있을 것이다. 이는 이 구집의 ‘권말사(卷末の辭)’에서 보이는 아래 문장과 비교해 보면 이 당시 한반도에서 각지에서 하이쿠가 얼마나 폭넓게 성황을 이루고 있었는지가 잘 나타나 있다.

조선의 하이단(俳壇)은 쇼와(昭和)인 오늘날과 다이쇼(大正) 말기를 비교해 보기만 해도 실로 격세지감이 있을 만큼 화려해졌습니다. 20수년 전 처음으로 개척된 당시 조선의 하이단에서는 이 융창(隆昌)한 건실함을 현현(顯現)하리라고는 아마 상상조차 할 수 없었을 테지요. 현재는 기관지로 치면 월간 14종을 헤아릴 장관을 보이고 있습니다. 구회(句會)는 도읍이라는 도읍의 도처에서 열리고 있습니다. 그리고 그들 모두가 대략 동일한 보조(步調)라는 점은 과연 무엇을 말하는 것일까요? 정말로 모두 다 경사스러워 하지 않을 수 없는 일입니다.⁵²⁾

편자 기타가와는 이러한 시대적 분위기 속에 ‘조선을 중심으로 하는 새로운 구집’을 요청하는 목소리에 부응하여 ‘조선 하이단의 조감도로서 가장 완전한 구집, 습작상 그 참고로하기에 충분한 가장 선량한 구집’을 간행하고자 한 것이 바로 『조선하이쿠선집』인 셈이다.

이렇게 1920년대 말에 조선에서 하이쿠문단은 전성기를 맞이하지만 이후에도 다양한 형태의 구집이 발간되고 있었다. 예를 들면 1930년대 중반 호토토기스와 산하의 각종 “잡영란(雜詠欄)”으로부터 조선 및 조선 관련 하이쿠 중 대표적인 여류 작품을 선별하여 엮은

51) 北川左人編 「凡例」 『朝鮮俳句選集』靑壺發行所, 1930.8. pp.1-2.

52) 北川左人編 「卷末の辭」(상계서 『朝鮮俳句選集』), pp.1-2.

『조선여류하이쿠선집(朝鮮女流俳句選集)』(海地福次郎, 句集刊行會, 1935.3), 개인의 독특한 상황을 노래한 『구집 약을 토하다(句集 くすり吐く)』(川崎千鶴子, 川崎繁太郎 編輯, 朝鮮印刷株式會社, 1935.11) 등 다수의 구집에서 이를 확인할 수 있다.

III. 결론

이상 살펴보았듯이 1900초년대부터 주로 일본어 잡지나 신문 등에서 보이던 일본전통의 시가장르는 1920년대부터 각각 단카, 하이쿠 전문 문학잡지와 더불어 각각의 가집, 구집도 활발하게 간행되었다. 단카 쪽은 1920년대초 일본에서 조선으로 건너온 유력 가인들이 가집을 먼저 간행하였고, 반도에서 활동중인 가인들과 협력하여 『진인』이라는 단카 잡지를 발간하였고 이 잡지는 추후 내지의 주요 단카 잡지로 변모할 만큼 성장한다. 1930년대에는 모더니즘계열의 파격적 신단카까지 등장하며 한반도 내에서 다양한 성격의 단카가 창작되었던 것으로 추측된다. 하이쿠 쪽에서는 1920년대 이미 호토토기스파의 하이쿠 잡지가 반도 곳곳에서 발행되기 시작했고, 1930년대에는 신흥하이쿠나 석남 계열까지 상당한 세력으로 등장하여 경합이라도 하듯 조선의 지방색을 구작(句作)을 통해 표현하였다.

1930년대의 가단(歌壇)과 하이단(俳壇)이 활황이었음은 다채로운 성격의 가집과 구집의 다량 출현으로도 알 수 있다. 이윽고 중일전쟁, 태평양전쟁기로 접어들면서 반도의 가단과 하이단 역시 그 영향을 받게 되어 작품도 전쟁과 애국, 죽음을 소재로 하는 것들이 두드러지며, 단카는 국민시가연맹, 하이쿠는 조선하이쿠작가협회라는 단체에 통합되어 활동도 제한되기에 이른다. 조사연구에서 다룬 가집과 구집, 잡지들은 당시 재조일본인 뿐만 아니라 조선인도 활발하게 참여하는 다양한 형태의 문학결사를 통해 구현되었고 이를 통해 다량의 창작과 폭넓은 향수가 이루어졌음을 확인할 수 있었다.

그런데 식민지 <일본어 문학> 중 일본전통시가의 폭넓은 창작과 유통은 단지 한반도만의 현상은 아니었으며 대만이나 만주지역을 보더라도 사정은 대동소이했던 듯하다. 예를 들어 대만에서는 『가집 대만(歌集臺灣)』(平井二郎編, あらたま發行所, 臺北市, 1935), 『다카사오 가집(高砂歌集)』(高砂同人歌集編輯會編, 高砂同人歌集編輯會, 臺北, 1924), 『새벽 가집(あけぼの 歌集)』(あぢさゐ歌會同人著, あぢさゐ歌會, 花蓮港廳, 1936), 『대만 하이쿠집(臺灣俳句集)』(三上武夫編, ゆうかり社, 臺北, 1928) 등 수많은 가집, 구집이 확인되고 있다. 만주의 경우도 『재만여류가인 십인집(在滿女流歌人十人集 歌集草原)』(柳生昌勝, 古典文化研究會, 大連, 1942), 『가집 만주를 읊다(歌集 滿洲を詠へる)』(永原いね子, 滿洲歌友協會, 大連, 1941), 『하이쿠 만주(俳句滿洲)』(吉田長次郎, 滿洲公論社, 新京, 1944), 『대련하이쿠회 구집(大連俳句會句集)』(和田壽太郎, 大連俳句會, 大連, 1929) 등 다양한 가집과 구집들이 존재하였다. 따라서 일본전통시가의 대량 창작은 동아시아 공통의 문학적 현상이었다고 말할 수도 있겠다.

지금까지 식민지 <일본어 문학> 연구나 한국작가의 이른바 <이중언어문학> 연구는 은 크

게 보면 소설장르가 단연 연구의 중심적 위치를 차지하고 있었다. 그러나 지금까지 위의 조사연구를 보더라도 식민지 <일본어 문학>에서는 일본전통시가 장르가 가장 폭넓고 일관된 형태로 존재했으며 시대적 추이에 따라 다양한 내용성을 가지고 있었음을 확인할 수 있다. 따라서 본 조사연구는 식민지 <일본어 문학> 연구의 새로운 영역을 개척할 가능성을 내포하고 있으며 지금까지 단지 몇 편 정도에 그치며 산발적으로 이루어지고 있었던 식민지 일본전통시가 연구에 새로운 디딤돌로 기능할 수 있으리라 생각한다. 그리고 일본전통시가 중 센류(川柳) 장르 역시 당시 한반도에서 전문 잡지와 구집이 간행되었으나, 이에 관해서는 논문 분량 제한으로 인해 별고를 통해 소개하기로 한다.

◀ 참고문헌 ▶

- 고려대일본연구센터 토대연구사업단(2011) 『한반도·만주 일본어문헌(1868-1945) 목록집』 1,2권, 도서출판문.
 구인모(2006) 「단카(短歌)로 그린 조선(朝鮮)의 風俗誌 - 市内盛雄 編, 朝鮮風土歌集(1935)에 對하여」 『사이(SA D)』, 국제한국문학문화학회. pp.212-238
 나카네 다카유키(中根隆吉)(2011) 「조선 시가(朝鮮詠)의 하이쿠 권역(俳域)」 『日本研究』 第15輯, 고려대 일본연구센터. pp.27-42
 엄인경(2011) 「20세기초 재조일본인의 문학결사와 일본전통 운문작품 연구 - 일본어 잡지 『조선지실업(朝鮮之實業)』 (1905-1907)의 <문원(文苑)>을 중심으로」 『<일본어 문학>』 제55집, 일본어문학회. pp.381-404
 유옥희(2004) 「일제강점기의 하이쿠 연구-『朝鮮俳句一萬集』을 중심으로-」 『일본어문학』 제26집, 일본어문학회. pp.275-300
 정병호(2010) 「한반도 식민지 <일본어 문학>의 연구와 과제」 『일본학보』 제85집, 한국일본학회. pp.109-124
 허석(1997) 「明治時代 韓國移住 日本人의 文學結社와 그 特性에 대한 調査研究」 『日本語文學 第3집』, 한국일본어문학회. pp.281-309
 市山盛雄 編(1933) 『真人』 第9卷第1號, 眞人社. pp.32-33
 _____(1933) 『真人』 第9卷第11號, 眞人社. pp.6-87
 _____(1934) 『真人』 第10卷第7號, 眞人社. pp.8-16
 薄田斬雲(1908) 『暗黒なる朝鮮』, 日韓書房. pp.263-267
 大島史洋 外編(2000) 『現代短歌大事典』 三省堂. pp.1-672
 笠神句山(1930) 『句集朝鮮』, 京城日報社學藝部. pp.1-173
 菊池武雄 編(1941) 『水砵』 創刊號, 朝鮮俳句作家協會. pp.1-46
 北川左人 編(1930) 「凡例」 『朝鮮俳句選集』, 靑壺發行所. pp.1-2
 楠井清文(2010) 「植民地朝鮮における日本人移住者の文学-文学コミュニティの形成と『朝鮮色』『地方色』」 『アート・リサーチ』 第10卷, 立命館大学アート・リサーチセンター. pp.6-8
 小西善三 編(1934) 『歌林』 第2卷第1號, 朝鮮新短歌協會. pp.1-25
 末田晃·柳下博 共編(1932) 『久木歌集山泉集』, 久木社. pp.1-145
 徳野鶴子(1936) 「卷末小記」 『歌集樂浪』, ボトナム社. pp.1-2
 戸田定喜編(1926) 「凡例」 『朝鮮俳句一萬集』, 朝鮮俳句同好會. pp.1-2
 豊田康(2007) 『韓国の俳人 李桃丘子』 제이앤씨. p.49
 名越那珂次郎(1929) 「跋」 『高麗野』, 大阪屋号書店. pp.153-154
 新田留次郎(1927) 「跋」 『合歡の花』, 近澤茂平. pp.99-107
 道久良(1937) 『歌集朝鮮』, 眞人社. p.100
 _____(1938) 『歌集聖戰』, 眞人社. pp.1-29
 _____ 編(1940) 『朝』 10月號, 『朝』發行所. pp.1-33
 _____(1941) 『國民詩歌』 9月號(創刊號), 國民詩歌發行所. pp.1-96
 _____(1941) 『國民詩歌』 10月號, 國民詩歌發行所. pp.1-96
 西村省吾 編(1935) 『長柱』 創刊號, 朝鮮石楠聯盟. pp.1-45

- _____ (1935) 『長柱』 第1卷第3號, 朝鮮石楠聯盟. pp.1-43
_____ (1937) 『長柱』 第3卷第1號, 朝鮮石楠聯盟. pp.1-36
細井子之助 編(1939) 『真人』 第15卷第2號, 眞人社. pp.21-33
山下一海 外編(2008) 『現代俳句大事典』, 三省堂. pp.1-616

- 투 고 : 2012. 11. 30.
- 심 사 : 2012. 12. 15.
- 심사완료 : 2013. 01. 15.

植民地支配の<記憶>の再認識不可避性

— 田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」における<記憶>の間隙 —

黄益九*
younrok@hotmail.com

<要旨>

敗戦後、日本社会において植民地支配の<記憶>は形骸化され、なお忘却の危機に直面していた。そしてそのプロセスには巧妙な論理が隠されていた。具体的には、朝鮮戦争を前後にして沸騰する「民族」をめぐる論議、そしてこれと相俟って浮上する「被圧迫民族」という屈折した自己認識などが取りあげられる。これらの論理には、冷戦空間における日本の「植民地化」という切迫した現実認識の下に出現したことを考慮するとしても、不可思議な点がある。それは、「植民地化」という<現在>は議論されても、かつての植民地支配の<記憶>は封印され、語られなかったことである。つまり集合的記憶としての植民地支配の<記憶>は、忘却を強いられたのである。

このような社会的風潮のなかにあったからこそ、田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」は注目に値する作品である。物語では、朝鮮人との交際が植民地支配の<記憶>と連動して想起され、なおその<記憶>の再認識不可避性を自覚していく。この点において「朝鮮ダリヤ」は、植民地支配の<記憶>をめぐる同時代の捉え方とは明らかに一線を画するものとして評価できる。また物語は、植民地支配の<記憶>を個の<記憶>から共同体の<記憶>として分有し、さらに共有していくことの重要性も物語る。そして植民地支配の<記憶>の分有と共有においては、世代による断絶を容認しない。そのため物語は、子供から大人へと移行する人物の「戦後責任」の問題を見事に漂わせる。「朝鮮ダリヤ」に表れた視点は、今なお植民地支配の<記憶>が葬られ、忘却される今日にも示唆に富む。

キーワード：<戦後>、冷戦イデオロギー、植民地支配の<記憶>、民族

一 形骸化する植民地支配の<記憶>

一九一一年以降から敗戦直前まで日本における小学校用の歴史教科書には、朝鮮半島の植民地化の経緯について、多少の表現的な相違はあるものの、その内容の概ねは次のように記述されている。

この間、わが国は、樺太の開発、関東州の経営につとめるとともに、東亜の安定をめざして、韓の保護にも、ずみぶん力を用ひました。まづ、韓に対する他国の干渉を、いつさい取り除き、ついで、内政の改革を指導しました。かうして韓は、ますますわが国に対する信頼を深め、韓民の中には、東洋の平和をたもつため、日・韓両国が一体になる必要があると考へるものが、しだいに多くなりました。韓国皇帝も、かねてこれをお望みになつておりましたので、明治四十三年、天皇にいつさいの統治権をおゆづりになることになりました。明治天皇は、この申し出をおきき入れになつて、特に韓国併合の詔をおくだしになり、韓国皇帝もまた、韓民に対し、日本の政治に従つて、いよいよ幸福な生活を送るやう、おさとしになりました。また、韓といふ名も朝鮮と改り、新たに置かれた総督が、いつさいの政務をつかさどることになりました。古来わが国と最も関係の深かつた半島の人々は、ここにひとしく皇国の臣民となり、東洋平

* 筑波大学外国語センター特任研究員

和の基は、いよいよ固くなつたのであります。

敗戦直前まで使用されていた『初等科国史』の記述であるが、「日韓併合」という植民地化への歴史を、これ以上に大胆でかつ露骨に至当な出来事として書き記したものはほかにあるのだろうか。「他国の干渉」から「韓国」を「保護」し、さらに「幸福な生活」へと補導する救世主たる存在としての日本。その日本が「韓国」を支配下に置くのは、「東洋の平和をたもつため」に不可避な道程であり、必然にもとづく結果であったという理屈。教科書が国民国家の<記憶>を構築するうえで重要な役割を担っていることはいうまでもないが、ここに記されている「日韓併合」という植民地化への歴史は、まぎれもなく「国民」の<記憶>として定位されてきた。

しかし、このような「国民」の<記憶>も敗戦を機にして新たな機制によって窮地に立たされる。一九四五年一二月、連合軍総司令部(以下GHQ)は、「修身、日本歴史及び地理停止ニ関スル件」の指令を発し、歴史科目の廃止を命じた。それに伴って小学校用の歴史教科書は余儀なく編修され、一九四六年八月に国民学校初等科用の国定国史教科書として『くにのあゆみ』が発行された。「非政治的な実証主義の立場から²⁾」書いたとする『くにのあゆみ』は、「あいまいな何だかぼんやりしている感じ、情熱的な³⁾」教科書として当時の歴史学者の井上清に批判された³⁾。その『くにのあゆみ』には、「韓国(朝鮮)とは日韓協約を結び、そののち、さらに相談をした結果、明治四十三年(西暦一九一〇年)、わが国が韓国を併合しました⁴⁾」というごく僅かな文章で「日韓併合」の経緯を記すにとどまる。前述の『初等科国史』の記述と照らし合わせてみれば、歴然たる差異が見受けられる。記述の分量はいうまでもないが、内容においても「さらに相談した結果」であるというようにしか表さない。つまりこれは朝鮮の植民地化という「国民」の<記憶>が曖昧化され、ねじられていくことを示唆する。植民地支配の<記憶>のねじれが克明に表れた公的資料をもうひとつ取りあげてみよう。

一九四七年頃から日本政府は大蔵省管理局の主導の下、帝国日本の植民地および占領地に対する日本統治の内容を全三七冊という膨大な機密報告書として編纂した。この報告書の「序」には、報告書全体の「序論であり、結論でもあり、構想の基盤をなす考え方」として次の内容が明記されている。

日本及び日本人の在外財産の生成過程は、言わるるような帝国主義的な発展史ではなく、国家或は民族の侵略史でもない。日本人の海外活動は、日本人固有の経済行為であり、商

-
- 1) 文部省「世界のうごき」『初等科国史』下巻、一九四三年、一四六—一四八頁。このほかに、一九一一年以降、「日韓併合」に関連した内容を教材としている小学校用歴史教科書には、『尋常小学日本歴史』第二巻(一九一一年)、『尋常小学国史』下巻(一九二一年)、『尋常小学国史』下巻(一九三五年)、『小学国史』下巻(一九四一年)がある。
 - 2) 『くにのあゆみ』の執筆者のひとりであった家永三郎は、「文部省に同調して、意識的に戦前的歴史観の温存につとめたかのようにいうのは当たっていない。非政治的な実証主義の立場から教科書を書けば、ああいものにしかならないのは不可避であった」と回想している。(小熊英二『<民主>と<愛国>』新曜社、二〇〇二年、三一五頁、再引用。)
 - 3) 小熊英二、前掲書、三一五頁。(再引用)
 - 4) 文部省『くにのあゆみ』下巻、一九四六年、四三頁。

取引であり、文化活動であった。このことは、日本人みずからまづはつきり認識することが必要である⁵⁾。

この発想には、植民地および占領地に対する日本の「帝国主義」や「侵略」の歴史を否認し、支配や統治そのものを正当化していく論理が鮮明に表れている。またこのような発想に基づいて構築された歴史認識を「日本人みずからまづはつきり認識することが必要である」と述べたことは、植民地支配および占領地統治の<記憶>がねじれの位置に処されていたことを傍証する。さらにこの報告書の編集委員として植民地朝鮮での経験を持つ経済学者の鈴木武雄は、報告書の「朝鮮編」において、「日本の朝鮮統治が欧米強国の植民地統治にも勝つて朝鮮人を奴隷的に搾取し、その幸福を蹂躪したといふ論告に対しては正常な抗辯の余地がある」と主張しながら、日本の植民地支配が朝鮮の近代化に貢献したという持論を経済的な数字資料を根拠に繰り広げた⁶⁾。しかし鈴木持論は、帝国主義的搾取の実相は看過したまま、経済発展と産業化という自己解釈を前置化していく、つまり植民地支配の<記憶>の変容を促した論理といえよう。ここで敗戦直後の日本における朝鮮の植民地支配の<記憶>の磁場について確認する必要があるだろう。

一九四五年一月三日、GHQは「日本占領及び管理のための連合国最高司令官に対する降伏後における初期の基本指令」に基づき、「朝鮮人を、軍事上の安全の許すかぎり解放民族として取り扱う」という態度を示す一方、「いままで日本臣民であったのであり、必要な場合は、敵国民として取り扱ってもよい⁷⁾」という二重の立場を表明した。それによって朝鮮人は、植民地解放という側面においては「解放民族」でありながらかつて戦争遂行に加担した帝国日本の臣民としては「敵国民」と規定され、二重の位置に立たされることになった。つまりGHQは朝鮮人に対して帝国の<遺産>としての身分を存続させ、場合によっては「解放民族」としての身分を制限し、警戒の対象として位置づけていく方針であった。このような認識の基底には、植民地支配の問題より戦争責任の問題を上位に設定し、優先しているGHQ側の認識が関与していると解釈できる。このようなGHQ側の認識は、一九四六年五月に開廷される東京裁判の推移からも推察できる。内海愛子は、「東京裁判と戦争責任」をめぐる討論会で次のように述べる。

朝鮮は中国侵略の兵站基地であり、人的物的戦時動員体制で枢要な位置を占めていた。検察側は、なぜ朝鮮と台湾の植民地支配の問題を起訴の対象からはずしたのか。植民地支配に対する審理の不在。これが、戦後の私たちの植民地認識にも密接に関わってくる。支配がどうおこなわれ、その責任がどうとられるのか、植民地の解放に日本人はどう向き合うのかという反省と思想的葛藤の欠落。東京裁判による不問とGHQによる引き揚げ計画が日本人の植民地問題への無自覚を増幅した⁸⁾。

5) 大蔵省管理局「序」「日本人の海外活動に関する歴史的調査 総目録」一九四七年一二月、三頁。

6) 鈴木武雄「朝鮮統治の性格と実績—反省と反批判—」大蔵省管理局『日本人の海外活動に関する歴史的調査』通巻第十一冊、朝鮮編第十分冊、一一二頁。

7) 統合参謀部「日本占領及び管理のための連合国最高司令官に対する降伏後における初期の基本指令」一九四五年一月三日。(引用は、金太基『戦後日本政治と在日朝鮮人問題』勁草書房、一九九七年、一六〇頁。)

ここは「植民地支配に対する審理の不在」のまま展開した東京裁判と、その趨勢に便乗して増幅する「日本人の植民地問題への無自覚」が厳しく追及されている。注目したいのは、東京裁判において戦争責任の問題は問われても、植民地支配の責任は不問に付されたという事実である。このような批判を免れない背景には、当初からGHQ側の審理の対象、つまり問題設定に戦争責任という事象だけが限定的に設定されていた事情があるからではなかろうか。このような推測を可能にする理由は、何よりも裁きの主体に多数の植民地(あるいは疑似植民地)を保有しているものが含まれていたことに大きく起因する。戦争責任の問題だけが追及される裁判、そして植民地支配の<記憶>は忘却される<戦後>。このような社会的時流は、文学の領域においても例外ではない。

一九四五年一二月三〇日、中野重治、宮本百合子、蔵原惟人、壺井繁治などプロレタリア文学系作家らが結成した新日本文学会は、一九四六年三月に「文学者の戦争責任追及」を提案し、可決した。中央委員に選ばれた小田切秀雄は、『新日本文学』六月号の「文学における戦争責任の追求」においてその要旨を記すとともに、戦争責任を負う文学者として、菊池寛、久米正雄、中村武羅夫ら二五名を名指しで取りあげた。ここで小田切秀雄は、「特に文学及び文学者の反動的組織化に直接の責任を有する者、また組織上さうでなくとも従来のその人物の文壇的な地位の重さの故にその人物が侵略賛美のメガフォンと化して恥じなかつたことが広範な文学者及び人民に深刻にして強力な影響を及ぼした者」を重点的に取りあげたという。しかし、新日本文学会の戦争責任追及は、会員自らの戦争協力や戦争美化などの問題で行き詰まって、植民地支配の問題は言及されることもなく頓挫してしまった。つまり新日本文学会において植民地支配の<記憶>は(金達寿など日朝鮮人の会員を除いて)召喚されることはなかったのである。

これとは対照的に植民地支配の<記憶>を主体的に意識しながら言及したのは、雑誌『民主朝鮮』を中心に活動した在日朝鮮人の書き手であった。一九四六年四月に発行された『民主朝鮮』の「創刊の辞」には、「過去三十六年間といふ永い時間を」植民地支配に置かれ、そのため「歪められた朝鮮の歴史、文化、伝統等に対する日本人の認識を正し」ていくことが述べられている。また同じく創刊号には、「我等は現実に即応し人道的立場に立つて人類の敵であるファツシヨ、軍国的国粹主義者、強盗侵略的帝国主義者共の反省と自覚を促す」という林薫の論考が掲載されている。「三十六年間」の植民地支配に由来する諸問題を修正すると同時に、なお責任者に「反省と自覚を促す」ことは、いうまでもなく被植民者としての自己の<記憶>を想起した結果だと認められる。あらためて確認してみると、植民地支配の<記憶>がいかに想起され、どのように位置づけられたのかという点において、新日本文学会と在日朝鮮人の書き手との差異は明確である。このような差異は植民地支配の<記憶>をめぐる当事者の位置、つまり支配と被支配の位置とも無縁ではない。このような差異が確認できる事例はほかにもある。

一九四五年三月、活動の場を日本から朝鮮に移した作家村山知義は、敗戦の日を朝鮮で迎えた。後にその<記憶>は、雑誌『世界』の一九五〇年八月号に掲載された「敗戦の日の思い出」と

8) 保阪正康・吉田裕・内海愛子・大沼保昭「<連続討論・戦後責任—私たちは戦争責任、植民地支配責任にどうむきあってきたか>第一回東京裁判と戦争責任」『世界』岩波書店、第七〇九号、二〇〇三年一月、二八四頁。

して蘇っている。次の内容はその一部である。

日韓併合以来三十五年にもなるのに、朝鮮にいる日本人はどの町でも日本人街を作つて住み、朝鮮人とは生活を別にしている。私が朝鮮人の友達のところに住み、寝食を共にしているのを実に意外のことのように思つてた。ところが私はほとんど日本人とはつきあわず、日本食をも食へなかつた。(中略)

正午。天皇の声だというのだが、雑音が多くてほとんど聞き取れない。ただ、日本が無条件降伏したらしい、ということだけはわかつた。

「朝鮮はすぐ独立できるだろうか？」

というのが、すぐ皆の口をついて出た疑問であつた。

「それは独立できるにちがいない、長い植民地の歴史は終つたのだ！」

と私はいつた。やがて私の胸の中に、抑えても抑えても抑えきれないよるこびが湧き上つて来た。

軍人とファシズムの支配は終つた！

あまりに大きなよるこびのために、皆はただじつと腰掛けていたり。

敗戦の<記憶>とともに想起される植民地支配の<記憶>、しかしその<記憶>には植民地支配側の知識人としての姿は意識的ともいえるほど見事に封印されたままである。そして看過してならないのは、朝鮮人と村山、両者における「敗戦」の意味合いのズレである。朝鮮人にとって日本の敗戦は「長い植民地」からの「独立」であつたが、村山にとっては「軍人とファシズムの支配」からの解放であつた。つまり植民地支配側の知識人にとって植民地支配の<記憶>は、「軍人とファシズムの支配」の<記憶>の一部としてのみ想起され、問題域の周辺に位置づけられていたことが読みとれる。

このように敗戦直後、日本における植民地支配の<記憶>は、戦争の<記憶>に先立つ<記憶>、しかも連動して想起される<記憶>だったにもかかわらず、作為的ともいふべき力学によって忘却の窮地に追い込まれる境遇にあつたといえる。そのなかで、日本を取り巻く国際情勢は、一九五〇年に勃発する朝鮮戦争を前後にして大きな変動を見せる。一九四八年には朝鮮半島における南北分断国家が成立し、一九四九年には中国が共産化に転じた。そして一九五一年九月にはサンフランシスコ講和条約が締結された。このような国際情勢の変化は、日本社会に植民地支配の<記憶>を忘却の地層から掘り起こさせる十分な契機を与えたと思われる。特に、朝鮮戦争の渦中に締結された講和条約が植民地としての経験を持つ多数のアジア諸国をも対象にしていたことを考慮すれば、この時点で植民地支配の<記憶>の召喚は不可欠な事象だったと推察できる。しかし真相はどうだろう。

雑誌『世界』は、一九五一年一〇月号に「講和問題特集」を企画して一〇〇人以上に上る各分野の知識人から講和条約をめぐる論議や批判、意見等を集めて掲載している。ところでこの「特集」を管見するかぎり、講和条約の問題と合わせて日本の植民地支配の<記憶>を召喚する論議は、大阪市立大学学長で平和問題談話会会員である恒藤恭の「和解の講和条約ということについて」という論考にしか見あたらない¹⁰⁾。つまり雑誌『世界』の「講和問題特集」は、日本の植民地

9) 村山知義「朝鮮での八・一五」『世界』岩波書店、一九五〇年八月号、六七頁。

10) 恒藤恭(大阪市立大学学長、平和問題談話会会員)「和解の講和条約ということについて」『世界』一九五一年一〇月、

支配の<記憶>を蘇らせる舞台としては十分に機能しなかったといえる。同年九月一九日、作家田宮虎彦は『東京新聞』に寄せた記事のなかで雑誌『世界』の「講和問題特集」について、「近ごろこの一冊の雑誌ほど知識人の心をゆすぶつた書物は、ほかにないように私には思われる」と述べながら、当時の「知識人の無力さ」を強く批判した。それからその批判の矛先を同時代の作家へと向け、「現在日本人が位置せざるを得なくせしめられた国際的危機について、作家としての発言をその作品の中に行っているものは、皆無というに近い」と苦言を呈した¹¹⁾。注目したいのは、このような苦言を呈した田宮は、その後同年の『群像』一〇月号に日本帝国時代の朝鮮人同級生や敗戦後の在日朝鮮人友人との交際を描いた「朝鮮ダリヤ」を発表したことである。とりわけ注目するところは、朝鮮戦争の渦中にかつて同級生だった朝鮮人との交際が植民地支配の<記憶>と連動して想起され、なおその<記憶>の再認識を余儀なくされたことである。

ここで本論は、田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」を分析することに焦点をしばって、講和条約が締結される占領末期の日本社会において植民地支配の<記憶>がどのように想起され、いかに位置づけられたのかを考察する。

二 内地の美談と「不逞鮮人」

「朝鮮ダリヤ」の内容理解を容易にするため、まず物語のあらすじを簡単に紹介してみよう。

「私」は、朝鮮戦争の渦中に、かつて中学時代の同級生であった呉炳均のことを回想する。呉炳均は朝鮮半島の「北鮮咸鏡北道」から日本に渡ってきて、母と妹三人で生活していた。呉炳均は新聞配達をしながら中学校に通う苦学生であるが、成績優秀な学生であった。「私」は、その呉炳均に「憧れ」と「親愛感」を抱き、親しくなる。そのようななかで呉炳均の母親が死に、呉兄妹は一層の生活苦に直面した。その時、「私」は母に頼んで、呉兄妹を父の勤務先の社長である菅井の家に住み込みの家庭教師と女中として雇ってもらうことになった。しかし呉兄妹は、一ヶ月余りして菅井の家から追い出され、「私」と母は菅井の女主人から叱りつけられる。それ以来、呉炳均は「私」に冷たく接するようになり、「私」は感情を害し、呉炳均に対して憎しみをさえ感じるようになる。その後、理由もわからぬまま呉炳均は学校から行方をくらましてしまった。一〇年ほど経って、「私」は同じく中学の同級生で軍の特務機関に勤める松浦から呉炳均が金東漢という偽名を使う「不逞鮮人」であると聞かされる。敗戦後、「私」は洪聖秀という在日朝鮮人詩人と知り合うようになったが、朝鮮戦争の勃発のため別れることになる。その際、「私」は洪聖秀に呉炳均(金東漢)のことについて問いかけたが、洪聖秀から聞かされた内容に衝撃を受ける。

七一頁。この論考で恒藤恭は、次のように記述している。「朝鮮、台湾および澎湖島、樺太の南部などの地域は、過去において日本が「暴力および貪欲」により略取した地域であつて、これらの地域に対する主権を日本が放棄すべきことを要請されるのは、疑いもなく当然の事理であるけれど、それだからと云つて、かような既得の重大なる權益の放棄が日本に対する懲罰または制裁としての意義をもつていないと判断せねばならぬ理由を見出すことは出来ない。」

11) 田宮虎彦「小説家の最大関心事」『東京新聞』一九五一年九月一九日、二〇日付。

「朝鮮ダリヤ」は、同時代においては「小説が小さな民の声である」という田宮の主張を具現化した作品のひとつとして¹²⁾、また「かつては帝国主義国であり今はかつての朝鮮と同じ境地にある日本人自身の悲しさを描いている」物語として話題にのぼったものの、具体的なテキスト分析は行われなかった¹³⁾。近年には近代日本における<他者>認識の変遷を検討した渡邊一民によって、「戦前の日本人の朝鮮人認識の歪みを、深い反省と悲しみをこめて告発した作品だ」と評された¹⁴⁾。本論は渡邊の評価を継承しながらも問題の焦点を「戦前」という<過去>に完了した事象ではなく、朝鮮戦争の渦中という<現在>にも進行する<記憶>に設定することによって、敗戦以降の日本における植民地支配の<記憶>の位置と意義を探究していく。

「朝鮮ダリヤ」は、過去の出来事が<記憶>の作用を媒介にして意識的に再構築していく必要に直面していく記憶物語といえよう。注意しなければならないのは、<記憶>は、過去の出来事を想起する主体が自身の<現在>に触発されて、過去の出来事を選択的に再構成し、再構築していくという特性を備えていることである¹⁵⁾。このような視座を「朝鮮ダリヤ」の<記憶>に適用した場合、かつて植民者側のひとりだった「私」が日本帝国時代の出来事を敗戦後の冷戦空間という<現在>に触発されて想起したものになる。

まずここでは、植民者側のひとりだった「私」によって想起され、語られる<過去>の叙述に注目して考察していく。

あの長かった陰惨な戦争が終るまで、半島同胞という言葉が呉炳均たち朝鮮人についてよくつかわれていた。日韓二国が合併して同じ一つの国になったものなら、何もことさら半島同胞などといわずに、ただ同胞とだけいえばこと足りたであろう。だが、朝鮮人はやはり朝鮮人であって、日本人でなかった。だから朝鮮人をして日本人といわねばならぬ時、その半島同胞という妙な言葉が使われたのだが、その言葉には、そういうことで日本人がことさら朝鮮人に恩恵を施しているような意識が絶えずまつわりついていたような気がする。

しかし、それは、もっと汚濁にまみれた大人たちの世界のことであって、私たちの世界でのことではなかった。私たちは呉炳均に対して、そんな朝鮮人だからといった特別な感情をもつことはなかった。呉炳均が私たちと交わろうとしなくても、私たちは前にかいた孫徳恵に対してと同様、呉炳均に対して少しも人種的な偏見はもっていなかったとはっきり言える。(五五頁)

最後の「はっきり」という語調が表すように、「私」によって想起された日本帝国時代の内地とは、「汚濁にまみれた大人たち」の「日本人」による「朝鮮人」への差別はあったものの、子供で

12) はぎはら・とくじ「田宮虎彦論」『新日本文学』第七巻六号、一九五二年六月、四五頁。

13) 野村喬「田宮虎彦について」『文学評論』理論社、第一巻、一九五二年一月、二三頁。

14) 渡邊一民『<他者>としての朝鮮 文学的考察』岩波書店、二〇〇三年、一四八頁。

15) 本論における<記憶>をめぐる論議は、「記憶とは過去の出来事の単なる貯蓄としてではなく、現在の状況にあわせて特定の出来事を想起し意味を与える行為」として理解を求める小関隆(阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』柏書房、一九九九年、七頁)の視点や「過去の想起としての記憶ではなく、現在のなかにある過去の総体的構造としての記憶に関心をよせる」ピエール・ノラ(ピエール・ノラ編『記憶の場—フランス国民意識の文化—社会史』第1巻、岩波書店、二〇〇二年、二八頁)の立場などに立脚したものである。

あった「私たちの世界」では、「朝鮮人だからといった特別な感情」や「人種的な偏見」による差別はまったく存在しない空間である。つまり植民者と被植民者という支配と被支配の政治的なヒエラルキーは「私たちの世界」とは無縁な事象として描かれる。それによって「私たち」子供は植民地支配イデオロギーに染まらない潔白の存在となる。しかし「私」が過去を想起する<現在>、つまり敗戦後という時間的位置を考慮すれば、ここには植民者側の一員であったことを強いて拒否し、距離をおこうとする「私」の<戦後的>ともいえる姿勢が明らかに投影されている。

このような「私」の姿勢と相俟って日本帝国時代の内地は、「古い因襲といったもの」はなく、「朝鮮人であるからといって別に、ことさら、のけものに扱う気風はなかった」空間として想起される。さらに日本帝国時代の内地は、朝鮮人の学生が「友人の一人の親から学費を出してもらって大学まで進んだほど」温情のある好意的な空間として表れる。このような日本帝国時代の内地における一種の美談は、同級生の呉炳均に対しても適用される。

呉炳均のことは、私は中学にはいる前から知っていた。町の県立中学に入ることは、小学生であった頃、私たちの憧れであったが、朝鮮生れの呉炳均が苦学しながらその県立中学に通っていることは、何か、非常に崇高なものをみた時と同じといってもいいような憧れのきもちを私たちに与えていたものである。(五六頁)

「苦学」しながらも「私たちの憧れ」の県立中学に通う「非常に崇高なもの」、しかも常に成績が優秀なため先生からは賞賛され、全学の生徒からも注目される「朝鮮生れの呉炳均」、その呉炳均が帝国日本の内地に存在する。これは日本帝国時代の内地における美談の一例となる。このような視座によれば、日本帝国時代の内地は被植民者も努力すれば<日本人>以上に見事に栄光を勝ち取れる公平な空間であることが浮き彫りにされる。さらに物語のなかでは、呉炳均のように努力する人間に対しては様々な慈恵の措置を講じて支援していく感動的で美しい内地の風景が表象されている。たとえば、脚気を患う呉炳均が学校をやめる危機に直面したときには、「教師たちから呉炳均の治療費をつのってやった」こと、また呉炳均兄妹が学校から遠い「朝鮮人の飯場」に移住したときには、「私」の善意によって住み込みの家庭教師と女中として雇われたことなどがあげられる。つまり「私」によって想起された日本帝国時代の内地は、排他的な要素が一切排除され、人間愛にあふれる理想的な空間として想定されている。ところでこのような内地の温情にもめぐまれた呉炳均は、家庭教師として雇われていた菅井の家から「不逞鮮人」と非難を浴びて追い出された後、学校の集金をめぐって「私」とトラブルになる。その際、「私」は先生や生徒の前で侮辱的な言動に曝される。これを機に「私」の呉炳均に対する気持ちは一変する。

私が、長い間、呉炳均にいただいていた尊敬に近い親愛感は、勿論微塵の翳も心に残さなくなった。いや、それとこころではない。私は呉炳均に対して憎しみをさえ感じるようになっていた。それは、被征服民族としての蔑視をもふくめている。そして、その思いは、朝鮮人全体への不信へとひろがっていた。

勿論、後には、そのような子供じみた考え方は、理性としては漸次正しい、余裕のある考え方にもどりはしたが、といて、それはあくまでも理性の上のことであり、感情の上では、呉炳均に裏ざられたという感じはいつまでも消えることなくつづいた。そして、その後、幾度か朝鮮人に親しむ機会があっても、私は、何としても私の方から彼等に歩みよっていこうという気持ちになれなかったのである。(七七―七八頁)

ここで留意しなければならないのは、「私」の呉炳均に対する気持ちが「親愛感」から「憎しみ」へと急変したことと同時に、その「憎しみ」が「被征服民族としての蔑視」や「朝鮮人全体への不信」にまで拡大したことである。言いかえれば、個人への感情が集団全体を規定する価値へと転じたということである。ここに偏見が生まれる。その結果、「私」は朝鮮人の「呉炳均に裏ざられた」という感情を根拠に「幾度か朝鮮人に親しむ機会があっても」決して自ら朝鮮人に「歩みよっていこうという気持ちになれなかった」と語る。またこの文脈は、善意をもって接したにもかかわらず裏切り行為を受けて「感情の上で」傷痕が残ってしまったという被害意識を顕現する。そしてさらに、この論理展開に正当性を持たせるために呉炳均は加害者たる側面を保持する人物として想起されねばならない。

呉炳均が学校を除名になった後、「私」は呉炳均について次のように語る。

呉炳均に関しては、菅井の女主人が言った「不逞鮮人」という言葉が、もっとも真相に近かったようである。勿論、呉炳均に対する私の個人的な感じ方は別として、私は、呉炳均を不逞鮮人だとも思わなかったし、不逞鮮人という言葉自体、敗戦前の慣用句として用いられたことはみとめても、その言葉の真実の内容などは信じはしない。しかし、敗戦前の慣用句としては、そうした観念は、普通の市民の間にはたしかにあった。それに従えば、呉炳均は、やはり不逞鮮人といわねばならなかったようだ。(七八頁)

「私」は、呉炳均に対して「不逞鮮人」という言葉を用いることに逡巡する態度をみせるものの加害者たる側面を確定できる「不逞鮮人」という言葉を「敗戦前の慣用句」の使い方に便乗して容認してしまう。このような「私」の判断は、一〇年ほど経った後も中学同級生の松浦の話、つまり呉炳均が「不逞鮮人手配カード」に挙がるほど危険な「不逞鮮人」であるという噂話によって確実なものとして補強される。このような見地からすれば、「私」が想起する<記憶>とは、善良なる「私」が「不逞鮮人」から被害を受け、なお様々な美談を生産する帝国日本の内地も危険に見舞われたことにほかならない。

三 冷戦空間の風景

前述したとおり、「私」の<記憶>は、敗戦後の冷戦空間という<現在>に触発されて想起されたものである。では、「私」に過去の<記憶>を想起するように促した冷戦空間という<現在>はいかなるものなのか。ここではこの点に重視しながら考察を進めていく。

「私」は呉炳均との交際から深い「心の傷」を受けたため、敗戦後も朝鮮人との交際を回避してきたと語る。そのなかで「私」は、「偶然なこと」を契機に洪聖秀という在日朝鮮人詩人と知り合うようになる。その出会いによって「呉炳均からうけた心の傷はやや消えていった」し、「朝鮮人に対する考え方をあらためるようになった」と語る。しかし、ふたりの交際は朝鮮戦争の勃発のため途絶えることになる。ここで洪聖秀が別れを告げに来た場面に注目してみよう。

洪聖秀が、私にその別れを告げに来てくれた時、私は、それまでやっとな心にやさえていた問いかけを、とうとうおさえきれずに口にした。それは

「君は北か南か」

という問いである。すると、洪聖秀は、その時、彼等にとっては今はもう思い出のヴェイルの中にかくれてしまっていたはずの、あの意味のない笑いを頬にうかべて、答のかわりに首を左右に静かにふった。

(九〇頁)

呉炳均との交際以降、はじめて朝鮮人と交際するようになった「私」が、「それまでやっとな心にやさえていた問いかけ」を口にする。それは「君は北か南か」という問いである。まず疑問にしたいのは、なぜ「私」は洪聖秀にこのような問いを発さなければならなかったのかということである。この疑問についての考察は後に回すが、朝鮮戦争を前後にして反共思想が横行する冷戦空間において在日朝鮮人に「北か南か」を問いかける行為には、いうまでもなく、冷戦イデオロギーに依拠したアイデンティティの境界を確認する意味合いが含まれている。「朝鮮人に対する考え方をあらためるようになった」と語る「私」が、その契機を提供してくれた洪聖秀に対して「北か南か」の選択をせまることは、朝鮮人認識の変化によるものだろうか。「私」が呉炳均との交際以降から持ちつづけてきた朝鮮人認識、それはほかならぬ「不逞鮮人」である。その「不逞鮮人」というひとつの朝鮮人認識が、「北か南か」の選択によって分節される。そうすると、選択の如何によっては依然として「不逞鮮人」というレッテルを背負わなければならない集団も浮上することになる。「北か南か」の選択によって分節される朝鮮人認識、そのプロセスはどのように創り出されたのか検討する必要がある。

敗戦直後、日本の国会では、在日朝鮮人をめぐる論議として次のような内容が報告された。

「……終戦ノ瞬間マデ同胞トシテ、共ニ此ノ日ノ秩序ノ下ニ生活シテ居ツタ者ガ、直チニ変ツテ恰モ戦勝国民ノ如ク、而モ勝手ニ鉄道ナドニ専用車ナド云ウ貼紙ヲ附シタリ、或ハ他ノ日本人ノ乗客ヲ輕蔑圧迫シ、見ルニ堪ヘザル凶暴ナル振舞ヲ以ツテ凡ユル悪虐行為ニ出デテ居ルト云ウ事実ハ、全ク驚クベキモノガゴザイマス。諸君、此ノ朝鮮人、台湾人等ノ最近マデノ見ルニ堪ヘザル此ノ行為ハ、敗戦ノ苦シミニ喘ギ来ツタ我等ニ取りマシテハ、正ニ全身ノ血液ガ逆流スルノ、感情ヲ持ツノデアリマス。而シテ彼等ハ其ノ特殊ノ立場ニ依ツテ、警察力ノ及バザル点アルヲ利用シテ闇取引ヲナシ、日本ノ闇取引ノ根源ハ正ニ今日ノ不逞ナル朝鮮人ナドガ中心ニナツテ居ルト云ウコトハ、今日ノ日本ノ商業取引、社会生活ノ上ニ及ボス影響ハ驚クベキモノガアルノデアリマス、或ハ禁制品ヲ大道ニ於テ密売シ、或ハ露店ヲ占拠シテ、警察カヲ侮辱シツツ白昼公然取引ヲナシツツアルガ如キハ、断ジテ私共ハ、無視スルコト

ハ出来マセヌ……16)」

一九四六年八月一七日、進歩党国会議員椎熊三郎が衆議院各派交渉委員会で緊急動議を行って報告したものである。「終戦ノ瞬間マデ同胞」だった朝鮮人が、そのなかでも「不逞ナル朝鮮人」が敗戦を機に「闇取引」や「密売」、「露店ヲ占拠」する、「警察力ヲ侮辱」するなど「凡ユル悪虐行為」を働く、戦後日本の諸悪の「根源」として断定されている。ここで注意したいのは、「不逞鮮人」という用語が、敗戦以降も朝鮮人認識を構築するディスクールとして有効に機能していることである。つまり敗戦直後、日本における朝鮮人認識は、日本帝国時代に形成されたものから断絶することなく、連続の方向をたどったことが見受けられる。そうだとすれば、日本における朝鮮人認識が「北か南か」という政治的なアイデンティティの境界に二分され、分節されるのは、やはり冷戦イデオロギーが深化する以降のことと推察できる。

敗戦後、日本社会において在日朝鮮人の政治的なアイデンティティが問題視される大きな出来事のひとつに在日朝鮮人連盟(以下、朝連と略する)の解散問題があげられる。一九四九年九月八日、在日朝鮮人の支援活動とともに共産活動を推進してきた朝連は、反共思想を標榜するGHQと日本当局から団体等規正令の「暴力主義的団体」として規定され、解散を余儀なくされる。それ以降、日本の新聞メディアには、在日朝鮮人をめぐる記事において「朝連系」や「共産党系」、あるいは「北鮮系」などの用語が頻繁に用いられるようになる。その主な例を取りあげてみよう。

一九五〇年三月二三日付の『時事新報』社説には、「終戦後わが国の世相を不安にした原因の中に、不良朝鮮人の不法行動は見逃すべからざる一大要素である」と記したうえで、「いつも日本で乱暴するのは、共産党の支配する北朝鮮から筋を引く解散された朝連系の朝鮮人である場合が多い」という意見が掲載されている。ここには、敗戦後の日本社会を攪乱する「一大要素」として「北朝鮮から筋を引く解散された朝連系の朝鮮人」の存在が指摘されている。この文脈からすれば、「不良朝鮮人」と「朝連系の朝鮮人」との間には等式が成立しているのが読みとれる。この社説に次いで「朝連系の朝鮮人」を一層挑発的な存在として取りあげたのは、一九五〇年十一月二七日付の『日本経済新聞』の記事である。「朝鮮人地下組織」明るみへ」という見出しのこの記事は、取締当局の調査内容を受けて、「旧朝連系尖鋭分子を中心とする朝鮮人地下組織」(「在日朝鮮人青年工作隊」)が「列車妨害、基幹産業の破壊、日本にある連合軍要地のこう乱、要人暗殺などの暴力革命的企画」を画策すると報道しながら、「在日朝鮮青工隊組織編成表」、「組織」、「活動目標」、「訓練方法」、「訓練状況」など各項目について詳しく紹介している。前述の『時事新報』社説に比べると、「朝連系の朝鮮人」の活動目的をより具体的でかつ攻撃的に記述することによって読者に警戒心を強めていったと推測できる。次にあげられるのは、一九五〇年十一月二七日、神戸で「住民税反対、在日朝鮮人生活改善、レッド・パーシアン反対」を求めて開かれた在日朝鮮人の決起集会を「騒擾事件」と見なして鎮圧したことに関する記事である¹⁷⁾。まず

16) 金容権「戦後の新聞にみる「朝鮮人」」『季刊三千里』第二五号、一九八一年春、六八一―六九頁。

17) 『朝日新聞』は、一九五〇年十一月二八日付の記事において、この決起集会の名称を「祖国統一決起集会」と記している。

『読売新聞』は、翌日の朝刊記事に「神戸に戦後最大の騒擾事件」という見出しをつけて、「騒擾事件」は「共産党系日鮮人」によって引き起こされたと伝えている。また同日夕刊にもこの問題について、「神戸騒擾の首謀者旧朝連幹部ら十名検挙」という記事を掲載している。この問題については、衆院法務委員会にも取りあげられるようになり、調査団を現地に派遣して原因調査を行うことになる。そしてその調査報告は同委員会にかけられ、本会議にも報告するようになったのである。一九五一年二月八日付の『読売新聞』は、その調査報告の内容を記事化しているが、その記事によると、「騒乱事件は北鮮系暴力分子と共産党員の合作行動であった」と記述されている。次いで『朝日新聞』も同日にこの調査報告に関する記事を「背後に北鮮系」という見出しで掲載している。それ以外にも、一九五一年三月八日付の『毎日新聞』には「旧朝連系の色彩を捨てぬ限り」「朝鮮人学校の紛争」は「さらに繰返される危険が多い」という警視庁からの説明を報道している。

これまで取りあげた新聞記事をあらためて検討してみると、冷戦イデオロギーが高揚する一九五〇年前後の日本において在日朝鮮人の一部は、政治的なアイデンティティの出自によって、「朝連系」または「北鮮系」という烙印を付与され、分節されていった。その際に冠された「北」とは、在日朝鮮人にとって北朝鮮という国家を指すものではなく、冷戦イデオロギーによって分断された朝鮮半島をめぐるイデオロギー版図の一部を表す記号といえよう。そうすることによって「北」の反対側に位置する「南」という記号も機能することになる。つまり冷戦空間において、在日朝鮮人は「北」あるいは「南」という理不尽なイデオロギー版図によって分節されたのである。このようなプロセスと相俟って冷戦空間における戦後日本の在日朝鮮人認識は、在日朝鮮人の問題を研究する外村大が指摘したとおり、「植民地支配の結果としての朝鮮人の日本居住という歴史が意識されないまま、共産主義勢力の外国人が日本の治安を乱すという認識のみが肥大化していった」のである¹⁸⁾。しかも「北」と分類されたものは、日本帝国時代から連続する「不逞鮮人」というレッテルはもちろん、「不良分子」や「敵」という烙印まで押されたのである。

このような冷戦イデオロギーの理不尽な側面は同時代のほかの文学作品からも確認できる。「朝鮮ダリヤ」の発表より一ヶ月ほど早い一九五一年九月、『中央公論』文芸特集号に発表され、芥川賞を受賞した堀田善衛「広場の孤独」は、朝鮮戦争の動静を伝える電文を翻訳する主人公木垣が「北鮮軍」を「敵」として訳する同僚たちに対して違和感を隠しきれず当惑する場面から始まる。ここに示された主人公木垣の態度は、「反共思想」の反対側に位置するものを「敵」として裁断していく同時代の冷戦イデオロギーの理不尽な側面を告発していると解釈できる。

ここでもう一度物語に戻って、「私」が洪聖秀に問いかけた「君は北か南か」という問いを考察してみよう。「私」の問いには、まぎれもなく在日朝鮮人を分節していく同時代の冷戦イデオロギーが反映されている。だとすれば、「私」の問いは、過去に呉炳均から受けたという「心の傷」を幾らか

18) 外村大「戦後における在日朝鮮人と日本社会—日本敗戦から朝鮮戦争停戦後を中心に—」赤澤史朗・栗屋憲太郎・豊下橋彦・森武麿・吉田裕『年報・日本現代史 アジアの激変と戦後日本』第四号、現代史料出版、一九九八年、一〇六頁。ほかにも戦後日本の在日朝鮮人認識については、趙正民「戦後日本における在日朝鮮人の分節と包摂(上)」(『九大日文』二〇〇三年一〇月)を参照している。

治癒してくれた洪聖秀への親近感や人間関係を崩壊させかねない危険性を包含する。このようなことを察しているにもかかわらず、洪聖秀に政治的なアイデンティティの出自を問いかけたのは、洪聖秀は間違いなく「南」であるという「私」の強い期待が作用していたからであろう。そして「私」の期待とおりに洪聖秀から「南」という回答が出された場合、やはり「南」だったという安心感とともに「北」は「不逞鮮人」、「不良分子」、「敵」という分節の論理が暗黙のうちに容認されることになる。ここで注意したいのは、このような分節の論理が容認されれば、「私」は日本帝国時代の「不逞鮮人」から「心の傷」を受けたという被害者の位置を確保できるし、さらに植民地支配の責任から免責を図る自己正当化の論理が構築できるのである。しかし洪聖秀は、「私」の問いに対して直接的な回答を回避する。このような洪聖秀の態度には、在日朝鮮人を同時代の冷戦イデオロギーによって分節していく論理への拒否と抵抗が内包されていると解釈できる。つまり「私」と洪聖秀との会話の断絶は、冷戦イデオロギーの矛盾を浮かびあがらせる。そのため「私」は、自己のアイデンティティについて、「もし私が外国人から「お前は北か南か」ときかされた時、私に果してそれに答えることが出来るであろうか。北も南もない。私は、一人の日本人だ」とつぶやく。まさに「私」は冷戦イデオロギーの矛盾を察知したことになる。しかし現段階においては、冷戦イデオロギーの矛盾の影に隠されていた日本の植民地支配問題に対する「私」の態度は変化を見せないままである。

四 <記憶>の間隙

冷戦イデオロギーが矛盾を孕んでいるにもかかわらず、占領末期の日本においてその風潮は一層深刻化する。共産主義者や労働組合への弾圧として激化するレッド・パージ、朝鮮戦争の勃発とともに浮上する再軍備問題、そしてアメリカ主導で行われた講和条約と日米安全保障条約。これらの問題が社会的な争点となるなか、冷戦イデオロギーによって最も打撃を受けたもののひとつに日本共産党がある。日本共産党が「反共」を標榜するGHQと日本当局にとって絶好の標的となったのは、公然たる事実である。そのため日本共産党は、GHQと日本当局に対して批判の姿勢を強化していった。その姿勢の一面は、一九五〇年三月に発表された声明「民族の独立のために全人民諸君に訴う」のなかに顕著に表れている。この声明は、アメリカ「帝国主義」と「これに奉仕する国内の売国政府」によって「祖国日本」が「隷属化」し、「軍事基地化」していくことを強く批判している。このような日本共産党の姿勢は、一九五一年八月に発表された「日本共産党の当面の要求—新しい綱領」、いわゆる五一年綱領のなかに一層明白に表明されている。

現在、日本の国民は、日本の歴史はじまって以来、かつてなかったほどの苦しみにおちいっている。戦争と敗戦は、国民に破滅をもたらした。戦争後、日本は、アメリカ帝国主義者の隷属のもとにおかれ、自由と独立を失い、基本的な人権をさえ失ってしまった。現在わが全生活—工業、農業、商業、文化等はアメリカ占領軍によって管理されている¹⁹⁾。

この綱領は、日本が「アメリカ帝国主義者」に植民地化されたと位置づけ、当時の吉田政権を「反民族的、反動的」勢力と規定している。そのうえ、「日本の民族解放を闘いとるためには」、「民族解放民主革命」が不可欠であると主張する。小熊英二も指摘したとおり、この頃から日本共産党は日本の植民地的な現状を打破するために「民族」というナショナルな共同体を全面的に強調していた。しかしこのような日本共産党の「民族」を強調する姿勢は、敗戦以降、帝国主義や天皇制などに対して共に闘ってきた在日朝鮮人、そのなかでも戦後「朝連系」という烙印まで押されることになった人々からすれば、いわば裏切りであり、後に「単一民族神話」を後押しするに至る日本の典型的自民族中心主義とみなさざるを得ないものであっただろう。このような日本共産党の方針転換ともいえる変貌について、中野敏男は「民族の被害という図式と植民地主義の忘却」であると批判している²⁰⁾。つまり日本共産党は、「アメリカ帝国主義者」から植民地支配を受けている被害者的な日本の立場は強調したものの、それとひきかえにかつての植民地支配者としての自らの姿は「忘却」してしまったのである。このような視点からすれば、日本共産党と在日朝鮮人の間には、当然ながら植民地支配の<記憶>をめぐる認識の亀裂が生じてしまう。しかしこのような植民地支配の<記憶>をめぐる認識の亀裂は問題化されないまま、「民族」をめぐる問題は様々な領域において拡大していった。

一九五一年五月、歴史学研究会の同年度大会は「戦争と植民地化による民族の危機を控え」でいるとして、大会のテーマを「歴史における民族の問題」と定めて開催された²¹⁾。マルクス主義歴史学者を中心とする歴史学研究会においても当時の日本の現状は、「植民地化」という言葉を使って表されている。そしてその「植民地化」は、「民族の危機」となる深刻で切迫した問題として認識されたに違いない。このような時代認識は、京都大学を中心とする日本史研究会においても同様に確認できる。日本史研究会は歴史学研究会の同年度大会にふれながら、「民族の独立が売られようとしているとき、民族問題はわれわれ歴史家にとってもまことに緊要な問題として追求されなければならない」と述べている²²⁾。そしてこのような意識の下で日本史研究会は、会誌『日本史研究』の一九五一年一二月号の表題を「変革期における民族文化」としている。

「民族」をめぐる問題は、文学の領域においても重要な論点として取りあげられた。一九五一年六月、日本文学協会は第7回大会のテーマとして「日本における民族と文学」を掲げ、アメリカ式新教育やコスモポリタニズムへの抵抗を示す報告を行った。また雑誌『文学』は、同年九月号に「日本文学における民族の問題」という特集テーマを掲載した。ここには「国民文学」を提唱した竹内好の論考「近代主義と民族の問題」も含まれている。ここで竹内好は、敗戦後、「民族主義を悪」と規定して言及そのものを回避する知識人の動向を指摘しながら、「民族を思考の通路に含まぬ、

19) 日本共産党「日本共産党の当面の要求—新しい綱領」一九五一年八月(引用は、神山茂夫『日本共産党戦後重要資料集』第一巻、三一書房、一九七一年、六一九頁)。

20) 中野敏男「ナショナリズムの解禁と植民地主義の忘却—日本共産党と在日朝鮮人運動とのわかれについて」『前夜』前夜、二〇〇五年五月、二一九頁。

21) 『歴史学研究』第一五二号、一九五一年七月、五二頁。

22) 日本史研究会委員会「1951年度歴研大会批判」『歴史学研究』第一五三号、一九五一年九月、三五頁。

あるいは排除する」近代主義を強く批判している。

しかしこのように「民族」をめぐる問題が盛んに論議されたことは、「植民地化」を危惧する同時代の日本知識人の要求にいくらか貢献したものの、かつての植民地支配の<記憶>を召喚して問題化するところまでには至らなかった。むしろ「民族」というテーマは、<日本人>の立場を「アメリカ帝国主義者」による抑圧や圧迫を受ける被抑圧者あるいは被圧迫者の位置へと移動させる役割を果たしてしまっことは否めない。

このような文脈は「朝鮮ダリヤ」のなかにも明確に表れている。

彼等の悲しさが、祖国をなくしたものの悲しさと私には思えた。吳炳均の母親が私にみせた意味のない笑い—それは、笑いではない。私に向かいあっているかぎりは、とぎれることもなく、そうかといって高低もなく、無意味につづいていたのだ。その笑いの底を流れている心理を、私たちは、敗戦後、今度は自分たち自身のこととして感じねばならなくなった。進駐して来た外国人に対して、いや、かつては自分がそれを受けた朝鮮人に対しても、私たちは、同じ笑いをうかべて対さねばならなくなったのだ。(八九頁)

日本帝国時代の朝鮮人の「悲しさ」、その根源は、いうまでもなく被支配者としての悲哀であり、被圧迫者としての鬱憤であろう。その悲哀と鬱憤を「私」自身のものであるとして感受しなければならない敗戦後の日本の現状、それは「進駐して来た外国人」が示唆するように占領化された日本の姿を浮き彫りにする。さらにその占領化は、日米安全保障条約によって「植民地化」という連鎖反応へと進行しようとする。その日本の現状を眼前にする「私」の心理には、当然ながら被害者意識が培養される。注意しなければならないのは、このようなプロセスを経由することによって、<日本人>の位置が被支配者あるいは被圧迫者として容認され、植民地支配に曝されていた経験を持つ朝鮮人と同等の立場を獲得することである。事実、このようなプロセスは、「民族」というナショナルアイデンティティを強調してきた同時代の日本社会に蔓延していった。

一九五三年一月、日教組第二回教研大会では、「在日朝鮮人教育の問題」が取りあげられた。ここには、「朝鮮民族」の「日本帝国主義の圧制の下におかれた歴史的事実」が概括的に述べられている。そのなかには、日本の植民地支配による「朝鮮民衆」の苦難の歴史や在日朝鮮人の<起源>とも関わる「強制収容」の<記憶>などが批判的な立場から想起され、なお日本の「責任と反省」を喚起している。このような視点の重要性はいうまでもない。しかしここで問題となるのは、このような視点が「被圧迫民族」としての日本の現状を強調する前段階のプロセスとして機能することである。ここに取りあげられた内容をさらに確認してみよう。

要するに、在日朝鮮人教育の問題を、単なる外国人の教育というようなよそよそしい眼で見られないのであって、われわれはわれわれの責任と反省に加えて、今日われわれがアメリカ帝国主義の植民地支配の下に置かれ、われわれの愛する生徒児童がパンパン文化に包まれているという切実な問題に思い及ぶならば、在日朝鮮人教育の問題は決して朝鮮民族のみの問題でなくして、ともに被圧迫民族の解放、植民地化に対する抵抗の問題として、われわれがめざしている平和と独立の問題との関連におい

て、深い共感のもとにとりあげられなければならないはずである²³⁾。

「アメリカ帝国主義の植民地支配の下に置かれ」ている「われわれ」<日本人>は、「被圧迫民族の解放」と「植民地化に対する抵抗」という観点から教育問題において、「朝鮮民族」との共闘が求められると述べている。この見解によれば、日本民族と朝鮮民族は同じく「アメリカ帝国主義の植民地支配の下」で同病相憐れむ奇妙な位置に立たされることになる。まさにアメリカを媒介にすることによって<日本人>と在日朝鮮人は共に同情し、共闘すべき仲間関係となってしまう。しかし注意したいのは、それと同時に両者の間に内在する植民地支配の<記憶>が、核心的で中心的な問題として取りあげられるのではなく、「被圧迫民族」の立場を強調するために必要な二次的な問題としてしか取り扱われないことである。このような問題は同時代の知識人や論壇からも度外視されたまま、「被圧迫民族」としての<日本人>の立場だけが注目された傾向がある。

歴史学者の石母田正は、一九五三年三月に刊行した著書において、「日本民族」の歴史が戦争によって大きく転換したと述べたうえで、「その転換のもっとも重大なものは」、「日本が帝国主義的支配民族から、従属国あるいは被圧迫民族に転化した」ことであると記している²⁴⁾。「被圧迫民族」としての<日本人>の位置が強調されるなか、同年の論壇においては、「日本はアメリカの植民地か」という特集テーマを設けて論議が行われた²⁵⁾。各政党派から述べられた見解は、「日本は断じて植民地でない」(自由党、愛知揆一)、「むしろ植民地帝国主義の恐れ」(右派社会党、會禰益)、「アメリカの従属国としての日本」(左派社会党、勝間田清一)、「日本は植民地である」(労農党、堀真琴)などといった小見出しでまとめられて注目されていた。確認したいのは、この論議においても、日本がアメリカの植民地か否かは議論の俎上に載せられたものの、かつて植民地主義に傾倒していた日本の植民地支配の<記憶>は語られることなく、封印されていたことである。

また文学の領域においても、「被圧迫民族」という屈折した自己認識を前景化する持論が展開されていた。一九五三年四月、竹内好を編集者代表として刊行された『岩波講座 文学』第三巻には、竹内好自身の論考「文学における独立とはなにか」と合わせて、中野重治の論考「被圧迫民族の文学」が収録されている。両者の論考には、同時代の日本の現状をそれぞれ「民族的隷属の状態」、「被圧迫民族」といった表現を用いて記している。特に中野重治は、「被圧迫民族の文学」を論じる同時代の「重要性」の所在について、「圧迫民族の文学であったものが被圧迫民族の文学となり、それを、かつて圧迫民族であって今は被圧迫民族となった日本人が考えねばならぬところ」にあると指摘している²⁶⁾。ここで中野重治は「日本人」の位置について、日本帝国時代の「圧迫民族」としての「日本人」と、「被圧迫民族」へと転じた「今」の「日本人」とで類別して位置づけている。当然ながら、このような位置づけ方には、「日本人」の危機的な「今」を強調

23) 日本教職委員会編『日本の教育—第2回全国教育研究大会報告』岩波書店、一九五三年、四六九—四七〇頁。

24) 引用は、『石母田正著作集』第十四巻、岩波書店、一九八九年、二八八—二八九頁。

25) 「特集 日本はアメリカの植民地か」『中央公論』中央公論社、一九五三年六月号、一一五—一二五頁。

26) 中野重治「被圧迫民族の文学」竹内好編『岩波講座 文学』第三巻、岩波書店、一九五四、一八一—一八二頁。

しようとする中野重治の現実認識が、「日本人」の位置を「かつて」と「今」とで二分化することに作用したと捉えられる。ここで問題となるのは、このような捉え方が植民地支配をめぐる歴史認識においても「日本人」の二分化を助長し、さらに断絶を招来しかねないということである。また「今」の「日本人」の位置をもつば「被圧迫民族」に置いてしまうことは、敗戦以降も「日本人」から抑圧や圧迫を強いられる在日朝鮮人の存在を全く無視することになる。

これまで主に検討してみたのは、物語の語り手である「私」と同時代のコンテクストにおける植民地支配の<記憶>の位置と捉え方である。その検討によって確認されたのは、一九五〇年代の冷戦イデオロギーに相俟って登場する「被圧迫民族」という<日本人>の屈折した自己認識が植民地支配の<記憶>そのものを封印し、さらに消去していたことである。

ここでふたたび物語に戻ってみよう。語り手の「私」は植民地支配の風景から隔離した位置に過去の幼い自己を位置づけ、未だに日本帝国時代の被害者としての自己正当化を画策する姿勢を見せている。「私」は洪聖秀に回答を求めて「君は北か南か」と問いかけたにもかかわらず、直接的な回答は回避され、ふたりの間にしばらく沈黙の時間が流れる。それは「私」にとって自己正当化の論理展開の失敗を意味する。そのため「その沈黙に」「たえられなかった」「私」は一層露骨になるしかない。つまり「私」に「心の傷」を与えたとする当事者の呉炳均をめぐって、洪聖秀に勝負ともいえる直接的な問いかけをぶつけたのである。しかし物語の結末は、このような「私」の奮闘に対しても相応の応答を返すことを拒否する。否、それは拒否どころではない。物語は戦慄すべき衝撃を与える反撃を用意していたのである。「私」は呉炳均が金東漢という偽名を使って活動していると語りながら、洪聖秀に問いかけの回答をせまる。これを受けて洪聖秀は、金東漢が確かに「独立運動の闘志」であると「私」に明かした後、彼が「ラジカルな反日思想をもつようになった」経緯を伝える。

雑誌か何かで読んだことだと注釈をつけてから

「金東漢がラジカルな反日思想をもつようになったのは、何でも金東漢に妹が一人いて、一緒に日本人の家にやとわれていた時、その妹が主人に犯されたからだっていいですよ、ちょっと話が出来すぎているようですが、妹は、それから何でも神戸あたりの娼妓になって悪い病気で死んじゃったって—」(九二頁)

当然ながら「私」は、洪聖秀の言葉に「ガンと大きな鉄槌で頭蓋をうちぬかれたような」衝撃を受ける。その衝撃とは、幼い時から抱いてきた被害者としての自己正当化を画策しつつつけてきた「私」にとって、単なる驚きではなく、その正当性の崩壊と直結することになる。それと同時に、「私」の自己正当化の論理の無謀と欺瞞を一瞬にさらけ出す出来事でもある。そのため「私」は、「眼の前がぐらくなって、何も見えない」ほどの現実に立たされ、「悲しみ」を感じざるをえなくなる。その「悲しみ」には、間違いなく、長年封印して滅却してきた植民地支配の<記憶>の間隙を再認識していくことを要求され、なおも反省を求める感情が込められていたといえよう。

五 おわりに

敗戦後、日本社会において植民地支配の<記憶>が形骸化され、なお忘却の危機にさらされていたことは、これまでに検討してみたとおりであるが、あらためて整理してみると、そこには巧妙な論理が隠されていた。それは、加害の<記憶>を抑圧し、被害の<記憶>を前景化する論理である。特にこのような論理の蔓延は、冷戦イデオロギーの強化にともない顕著なものになる。具体的には、朝鮮戦争を前後にして沸騰する日本「民族」をめぐる論議、そしてこれと相俟って浮上する「被圧迫民族」という屈折した自己認識などが取りあげられる。これらの論理には、冷戦空間における日本の「植民地化」という切迫した現実認識の下に出現したことを考慮するとしても不可思議な点がある。それは、「植民地化」されるという<現在>は議論されても、かつての植民地支配の<記憶>は封印され、語られなかったことである。つまり集合的記憶としての植民地支配の<記憶>は、忘却を強いられたのである。このような社会的風潮のなかにあったからこそ、田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」は注目に値する作品である。

物語では、朝鮮人との交際が植民地支配の<記憶>と連動して想起され、なおその<記憶>の再認識不可避性を自覚していく。この点において「朝鮮ダリヤ」は、植民地支配の<記憶>をめぐる同時代の捉え方とは明らかに一線を画するものとして評価できる。また物語は、植民地支配の<記憶>を個人の<記憶>から共同体の<記憶>として分有し、さらに共有していくことの重要性も物語る。そして植民地支配の<記憶>の分有と共有においては、世代による断絶を容認しない。そのため物語は、子供から大人へと移行する人物の「戦後責任」の問題を見事に漂わせる。このような意味において、「朝鮮ダリヤ」に表れた視点は、今なお植民地支配の<記憶>が葬られ、忘却される今日にも示唆に富む。

ただ「朝鮮ダリヤ」にもまったく問題がないわけではない。物語のなかには、呉淑春という呉炳均の妹が登場する。この呉淑春は、物語のなかで最も被害を被る人物として描かれている。それは、被植民者側の女性であるがゆえに被られた被害である。問題になるのは、物語の展開において被植民者側の女性として二重の抑圧に見舞われていた人物にそのような被害を被らせる必然性である。つまり作者田宮のジェンダー視点については、議論の余地が残されている。

【付記】田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」の引用は、『田宮虎彦作品集』(第四巻、光文社、一九五六年)を底本とし、本文引用の際には底本の頁のみ記す。

◀ 参考文献 ▶

- 石母田正(1989)『石母田正著作集』第十四巻、岩波書店、pp.288-289
 ピエール・ノラ編(2002)『記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史』第1巻、岩波書店、pp.15-56
 小熊英二(2002)『<民主>と<愛国>—戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社、p.315

- 阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編(1999)『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』柏書房、p.7
- 金太基(1997)『戦後日本政治と在日朝鮮人問題』勁草書房、p.160
- 高榮蘭(2010)『「戦後」というイデオロギー—歴史／記憶／文化』藤原書店、pp.243-329
- 田宮虎彦(1956)『田宮虎彦作品集』第四巻、光文社
- 趙正民(2003.10)「戦後日本における在日朝鮮人の分節と包摂(上)」『九大日文』九州大学日本語学会、3号、pp.97-109
- 外村大(1998)「戦後における在日朝鮮人と日本社会—日本敗戦から朝鮮戦争停戦後を中心に—」赤澤史朗・栗屋憲太郎・豊下梢彦・森武麿・吉田裕『年報・日本現代史 アジアの激変と戦後日本』第四号、現代史料出版、pp.87-114
- 中野重治(1954)「被圧迫民族の文学」竹内好編『岩波講座 文学』第三巻、岩波書店、pp.181-182
- 中野敏男(2005.5)「ナショナリズムの解禁と植民地主義の忘却—日本共産党と在日朝鮮人運動とのわかれについて」『前夜』前夜、p.219
- 保阪正康・吉田裕・内海愛子・大沼保昭(2003.1)「<連続討論・戦後責任—私たちは戦争責任、植民地支配責任にどう向きあってきたか>第一回東京裁判と戦争責任」『世界』岩波書店、第709号、p.284
- 渡邊一民(2003)『<他者>としての朝鮮 文学的考察』岩波書店、p.148

■ 투 고 : 2012. 11. 30.

■ 심 사 : 2012. 12. 15.

■ 심사완료 : 2013. 01. 15.

영화 『겐지모노가타리-천년의 수수께끼-』 論*

김수희**
kshfolo417@hanmail.net

<要 旨>

2011년 12월, もう一つの『源氏物語』의 映画가 公開された. 東宝配給のお正月映画として邦画市場最大規模で公開された角川映画『源氏物語-千年の謎-』がそれである. 出版と映画のメディアミックスで, もう一つの『源氏物語』の 映画が世に出たのである. 角川歴彦氏の製作総指揮によって角川グループから作られたこの作品は, 「『源氏物語』の最大の謎は作者紫式部だ」という認識から出発している. 角川歴彦氏は貴族社会から武家社会, 町人文化から明治時代, そして現在まで, いつの時代でもベストセラーであった『源氏物語』こそ日本文学の金字塔という認識の上で, 「紫式部こそが源氏物語の最大の謎である」と想いが至った時, 『源氏物語』完全映画化の決断ができたと言っている. 実際, 映画の主なストーリーは『源氏物語』誕生秘話をベースに, <光源氏の華麗なる愛>と<作者紫式部の秘めた恋>が同時進行し, <物語>と<現実>の二つ世界が交錯する仕組みとなっている. 一例として, <物語>の中の登場人物である御息所を<現実>の登場人物である陰陽師安倍晴明が退治したり, <物語>の主人公光源氏と<物語>の作者紫式部が出会ったりする. 現実と虚構が交錯するような仕組みこそ, この映画のポイントの一つである. そして, <なぜ紫式部は『源氏物語』を書かねばならなかったのか>という問いに対し, この映画は天才女流作家紫式部の叶わぬ愛が, その物語を綴らせたことと捉えている. ちなみに, この映画は, 古典文学としての『源氏物語』そのものの映画化ではなく, 角川書店で刊行された高山由紀子作の『源氏物語悲しみの皇女』の映画化であり, それなりに新感覚の『源氏物語』を標榜している. メガホンを取ったのは映画『愛の流刑地』で知られた鶴橋康夫監督で, 光源氏役に『人間失格』でブレイクした生田斗真, 紫式部役に中谷美紀, 藤原道長役に東山紀之, 安倍晴明役に窪塚洋介などが出演した. 豪快な出演陣, そして, 実際に琵琶畔に建立された寝殿造りの壮大な本建築や有名デザイナー宮本まさ江氏による豪華な衣装などで, 紫式部の生きた時代を再現するものとして大きく期待された. 本稿ではこの映画が2001年の映画『千年の恋ひかる源氏物語』などのいままでの映画とどのような点で異なっているのかを, 映画に関する様々な分析を通して明らかにし, 『源氏物語』を加工した作品の一つとしてどのような意義を持っているのかを捉えようとしている. そして, この作品が『陰陽師』などの既存の平安文学関連のコンテンツを見事に取り込みながら, 『源氏物語』関連の他のメディアの限界を克服する形でそれなりに成果をあげていることを分析した. 例えば, 時の権力者道長に光源氏のイメージを負わせることで, 光源氏を<ひたすら恋にさまよう青年>として捉えながらも, 作品全体に<王権論的な視点>を取り込ませることに成功している. 少女漫画『あさきゆめみし』の問題点(王権論の不在)など克服する形として, 高く評価することができると考えられる.

キーワード : 源氏物語, 古典, 映画, 源氏物語千年紀, メディアミックス, 古典文学の加工

I. 서론

주지하는 바와 같이 일본 굴지의 고전이라 꼽을 수 있는 『겐지모노가타리(源氏物語)』는 단순한 고전작품에 그치지 않고, 창작당시부터 현재에 이르기까지 다양한 문화 장르에 투영된 문화의 근간 중 하나로 기능해 왔고, 특히 근현대에 이르러서는 가부키, 영화, 애니

* 본 논문은 2012년도 1학기 한양여자대학교 교내연구비에 의하여 연구됨.

** 한양여자대학교 일본어통번역과 조교수, 일본고전문학

메이션 등의 형태로 일본문화를 주도해 가는 신선한 콘텐츠로서의 역할을 충실히 이행해 왔다. 특히 기억에 새로운 것은 2001년 12월 15일에 개봉된 도에이(東映) 창립 50주년 기념 영화 『천년의 사랑 Genji(千年の恋 ひかる源氏物語)』이다. 1996년 12월부터 발간되기 시작하여 1998년 4월에 완성된 작가 세토우치 자쿠초(瀬戸内寂聴)씨의 현대어역(『源氏物語 全十卷』講談社)과 ‘밀리언문학으로서의 『겐지모노가타리』의 대두’에 힘입어 2001년 말 개봉된 이 영화는 이른바 ‘겐지 붐’, ‘겐지 르네상스’의 상징적인 작품으로 널리 알려져 있다¹⁾. 초호화 캐스팅과 14억 엔에 이르는 총제작비, 화려한 의상 등으로 크게 주목받은 이 영화는 『겐지모노가타리』라는 고전작품에 대한 붐의 일환으로 개봉되었으며, 이후 겐지 붐은 파죽지세로 지속되어 2008년 이른바 ‘겐지모노가타리 천년기(源氏物語千年紀)’를 맞이하게 된다.

그로부터 10년 후인 2011년 12월에 개봉된 본 영화는 ‘겐지모노가타리 천년기’를 맞이한 이후의 일본문화계의 또 다른 발신의 한 형태로 볼 수 있을 것이다. 그런 점에서 일본고전문학연구의 틀을 뛰어넘어 현대의 『겐지모노가타리』 수용 양상, 고전문학 가공 양상의 한 단면을 볼 수 있는 대단히 귀중한 문화자료라고 할 수 있을 것이다. 본고는 이러한 인식을 바탕으로 본 영화를 다양한 각도에서 고찰해 보고 아울러 2001년의 영화와 비교 검토하며 본 영화의 특징을 파악하고, 이를 통해 『겐지모노가타리』의 현대적 수용의 다양한 양상을 거시적으로 조망해 보며 궁극적으로는 일본고전문학이 가공문화로서 어떻게 기능해 가고 문화콘텐츠로서 어떻게 활용되고 있는지를 명확히 하고자 한다.

II. 본론

1. 선행연구동향

서론에서 언급한 바와 같이 본고는 『겐지모노가타리』와 관련된 최신 개봉 영화에 대한 분석을 통해 『겐지모노가타리』의 현대적 수용 양상, 고전문학의 가공 양상을 살펴보는데 그 목적이 있다. 이에 대해 구체적으로 언급하기에 앞서 이와 관련된 선행연구의 동향에 대해 간단히 언급해 보고자 한다.

『겐지모노가타리』 관련 영화에 대한 기존의 선행연구에서는 일본고전작품인 『겐지모노가타리』가 문화콘텐츠로서 어떻게 가공되고 있는지, 그 문제점은 무엇인지를 지적하는 방법론이 주로 행해졌다고 할 수 있다. 예를 들어 국내의 연구성과물로 「한일 국민문학의 가공문화와 유통-『춘향전』과 『겐지모노가타리』를 중심으로-」(김영심, 『日語日文学研究』 제53집, 2005) 「문학의 콘텐츠화 전략 연구-일본의 고전문학 『겐지모노가타리』의 문화콘텐츠 양상을 중심으로-」(권연수, 고려대학교 일본연구센터편 『일본연구』 제13집, 2010) 등

1) 2001년 개봉작에 관해서는 참고 「영화 『천년의 사랑 Genji』-『千年の恋 ひかる源氏物語』論-」(日本學報, 2006.8) 등에 자세하다. pp.111-124

이 있고, 국외의 연구성과물로 「正典化する現代語訳—源氏ルネッサンスの行方—」(河添房江, 『源氏研究』第8号, 翰林書房, 2003), 立石和弘 「『源氏物語』の加工と流通」(『源氏研究』第5号, 翰林書房, 2002.4) 「美的表象と性的表象—そして語られざる『源氏物語』—」(立石和弘, 『ユリイカ』, 2002.2) 「映画『千年の恋』のめざしたもの—「カノン」としての源氏物語—」(三田村雅子, 『源氏研究』第5号, 翰林書房, 2002.4) 등이 있다.

이상과 같은 선행연구는 2001년 개봉작 『천년의 사랑 Genji』에 대한 분석을 일부 행하고 있으나 비교적 최신작인 2011작 『겐지모노가타리-천년의 수수께끼-(源氏物語-千年の謎-)』에 대해서는 아직 국내외의 연구 성과가 거의 전무한 상태이다. 본고에서는 이러한 문제의식을 바탕으로 기존의 선행연구 성과를 참조하며, 2011년 개봉작 『겐지모노가타리』 관련 영화의 제 문제를 고찰해 보고자 한다. 그러나 이에 대해 고찰하기에 앞서 『겐지모노가타리』와 영화라는 장르 간의 관련성에 대해 간단하게나마 살펴볼 필요가 있을 것이다.

2. 영화와 『겐지모노가타리』

기존의 선행연구에서 검토된 바와 같이 『겐지모노가타리』를 소재로 한 극장 개봉 영화들은 상당수에 이른다. 우선 1951년 흑백영화로 개봉된 다이에(大映) 창립 10주년 기념작 『겐지모노가타리』(124분, 大映)가 있다. 요시무라 고자부로(吉村公三郎) 감독, 신도 가네토(新藤兼人) 각본에 의해 영화화되었으며 히카루겐지(光源氏)역에 하세가와 가즈오(長谷川一夫) 등이 출연하였다. 이 영화는 1951년 흥행성적 1위로 상업적인 성공을 거두었을 뿐만 아니라, 칸 영화제 촬영상을 수상하는 등 매우 우수한 성과를 거두었다. 이에 힘입어 몇 년 후 컬러 영화 『겐지모노가타리 우키후네(源氏物語 浮舟)』(1957, 118분, 大映)와 가와구치 마쓰타로(川口松太郎) 원작의 『신 겐지모노가타리(新源氏物語)』(1961, 102분, 大映)도 개봉되기에 이른다²⁾.

특히 저명한 작품이 2001년 12월에 개봉된 『천년의 사랑 Genji』이다. 호리카와 돈코(堀川とんこう) 감독과 하야사카 아키라(早坂暁)의 각본에 의한 본 작품은 초호화 캐스팅과 14억 엔에 이르는 막대한 제작비로 화제를 모았다. 주요 배역을 간단을 살펴보면 무라사키시키후(紫式部)역에 요시나가 사유리(吉永小百合), 히카루겐지역에 아마미 유키(天海祐希), 무라사키노우에(紫の上)역에 도키와 다카코(常盤貴子), 후지와라노 미치나가(藤原道長)역에 와타나베 겐(渡辺謙), 가상의 인물 아게하노키미(揚げ羽の君)역에 마쓰다 세이코(松田聖子) 등이 출연하였다. 이 영화에 대해서는 이미 선행하는 줄고에서 자세히 검토한 바 있는데, 2011년 개봉작과의 비교검토를 위해 간단히 스토리를 살펴보면 다음과 같다.

『천년의 사랑 Genji』의 본격적인 시작 부분은 후지와라노 미치나가 자신의 딸 쇼시

2) 『겐지모노가타리』를 소재로 한 영화의 전반적인 내용에 대해서는 山縣亜矢子 「昭和26年の映画『源氏物語』について」(『日本語文化研究』2001.12, p.23), 立石和弘 「『源氏物語』の加工と流通」(『源氏研究』第5号, 翰林書房, 2002.4, p.136)를 비롯한 여러 선행논문과 줄고 「영화 『천년의 사랑 Genji』 『千年の恋 ひかる源氏物語』論」(日本學報, 2006.8) 등에 자세하다. pp.111-124

(彰子)의 교육을 위해 『겐지모노가타리』의 작가로 알려진 무라사키시키키부를 전격 발탁하여 교토로 불러들이는 장면이다. 이후 영화의 내용은 무라사키시키키부가 쇼시에게 『겐지모노가타리』를 소개하는 형식으로 <현실>과 <모노가타리>의 내용이 중첩되며 전개되고 있고, 이러한 이유로 선행논문에서는 이 영화를 『겐지모노가타리』라는 문학작품을 그대로 영화화 한 것이 아니라 『겐지모노가타리』의 작가와 독자, 그 배경과 사회 환경 등에 이르기까지 『겐지모노가타리』가 만들어진 시대 그 자체를 영화화한 것이라고 지적되고 있다. 히카루겐지와 후지쓰보와의 밀통, 로쿠조미야스도코로의 이키료(生靈) 출현, 오보로즈키요(朧月夜), 아카시노키미(明石の君) 등 여러 여성과 히카루겐지와와의 만남, 히카루겐지의 여성 편력에 괴로워하는 무라사키노우에의 모습 등이 그려지며, 영화의 후반부에는 후쿠이로 돌아간 작자 무라사키시키키부의 모습이 그려지고 있다³⁾.

본 영화는 무라사키시키키부의 남편이 해적에게 살해당한다는 등의 불필요한 창작적 허구와 가상인물, 또는 고전문목과의 괴리 등으로 인해 연구자들로부터 많은 비판을 받았으나⁴⁾, 주인공 무라사키시키키부 역을 맡은 요시나가 사유리가 직접 쇼시에게 『겐지모노가타리』를 들려주고 있는 형식으로 <현실 세계>와 <모노가타리의 세계>가 중첩되며 내용이 전개되고 있다는 점에서, 2011년 개봉작 『겐지모노가타리-천년의 수수께끼-』의 선구적인 역할을 하고 있다. 작가 무라사키시키키부를 직접 등장시켜 관객들의 감정이입을 적극적으로 도모하고, 현대와 다른 당시의 시대상에 대해 여러 가지 방법을 동원해 관객들의 이해를 돕고, 고전 작품과 현대 관객들의 접점을 추구하며 영화의 주제를 전하고자 했다는 점⁵⁾ 등, 2001년 개봉작 『천년의 사랑 Genji』의 장점을 수용하는 형태로 10년 후인 2011년에 새로운 영화가 만들어졌음을 알 수 있다.

3. 영화 『겐지모노가타리-천년의 수수께끼』의 작품개요

2011년에 개봉된 최신 영화 『겐지모노가타리-천년의 수수께끼-』의 제작을 총지휘한 인물은 일본 굴지의 대기업 가도카와(角川) 그룹의 가도카와 쓰구히코(角川歴彦)였다. 그룹 총수의 강력한 의지로 제작에 이르게 된 본 영화는 배우나 감독의 선정 등을 포함하여 많은 부분이 제작자의 의사를 반영하고 있다고 할 수 있다. 참고로 제작을 총지휘한 가도카와 쓰구히코는 작품 공개 시 다음과 같이 언급하고 있다.

겐지모노가타리, 최대의 수수께끼는 작자 무라사키시키키부이다.

세계문학사상 찬연히 빛나는 이 위대한 연애소설은 불가사의하게도 아름다운 비밀에 쌓여있

3) 주1)의 선행논문 등에 자세하다. pp.111-124

4) 三田村雅子 「映画『千年の恋』のめざしたものー「カノン」としての源氏物語ー」(『源氏研究』第5号, 翰林書房, 2002.4) pp.185-189

河添房江 「正典化する現代誤訳ー源氏ルネッサンスの行方ー」(『源氏研究』第8号, 翰林書房, 2003.4) pp.166-168

立石和弘 「美的表象と性的表象ーそして語られざる『源氏物語』ー」(『ユリイカ』, 2002.2) pp.142-161

5) 주1)의 선행논문 등에 자세하다. pp.111-124

다. 때문에 어느 시대에서도 만인을 사로잡은 베스트셀러일 수 있었다. 문호들이 도전했던 현대어역, 초급·상급 연구서도 상당수에 이른다. 그럼에도 불구하고 이루 다 설명할 수 없는 매력은 어디에서 오는 것일까. 일본의 헤이안시대에도 있었던 『다빈치코드』를 완벽할 정도로 영상화할 수는 없는 것일까. 영화에 관계된 일을 하게 되면서 나의 흥미는 언제나 그 점에 있었다. 히카루겐지는 궁중의 아름다운 여성들에게 있어서 동경의 대상이 된 존재였다. 수많은 고귀한 여성들도 미모와 자신이 가지고 있는 모든 것을 걸고 사랑하고 사랑받으려고 한다. 기실은 무라사키시키키부는 당시의 권력자 후지와라노 미치나가에 대한 이루어질 수 없는 사랑 때문에 히카루겐지에게 격하게 질투하고 있었던 것은 아닐까. 그러한 마음이 격해짐에 따라 헤이안시대의 어둠에 배회하는 원령들이 슬렁이며 모노가타리는 중후함과 흥미로움을 더해가는 것이다. (졸역⁶⁾).

이상과 같은 제작자의 언급을 통해 제작자가 일본의 『다빈치코드』 혹은 『아라비안나이트』를 꿈꾸며 본 영화 제작에 임했음을 알 수 있다. 무엇보다 굴지의 출판사 총수로서 천년의 베스트셀러로 파악된 『겐지모노가타리』에 대한 관심이 지대했을 것이고, 클라우드 혁명 등 새로운 미디어에 매우 적극적으로 대응하는 기업인으로서 베스트셀러 『겐지모노가타리』를 새로운 형태의 장르로 직접 표현해 보고 싶은 의욕도 대단했을 것으로 미루어 짐작할 수 있다.

이러한 기업 총수의 전폭적인 지지가 있었기에 비화호 주변에 만들어진 완벽한 신덴즈쿠리(寢殿造) 양식의 세트장(헤이안 시대의 절대 권력자 후지와라노 미치나가의 저택을 재현한 촬영지) 또한 가능했던 것이며 아악 전문가 등의 지원 속에 히카루겐지와 도노추조(頭の中將)의 춤에 의한 세이가이하(青海波) 재현이나 히카루겐지의 성인식 등의 의식이 매우 격조있는 장면으로 완성될 수 있었을 것이다.

가도카와서점(角川書店)에서 간행된 다카야마 유키코(高山由紀子) 작가의 『겐지모노가타리 슬픔의 왕자(源氏物語 悲しみの皇女)』를 원작으로 하여 영화의 메가폰을 잡은 쓰루하시 야스오(鶴橋康夫) 감독은 『사랑의 유행지(愛の流行地)』(2006)의 성과를 바탕으로 매우 관능적인 『겐지모노가타리』를 연출했다. 영화 도입부에 충격적으로 표현되고 있는 미치나가와 무라사키시키키부의 정사 장면은 역사적 사실을 바탕으로 하고 있으나 아니냐의 논의를 떠나 그 자체로 매우 강도 높은 정사신이라 할 수 있으며 본 영화 전체의 이미지를 좌지우지 할 정도로 강렬한 이미지를 제공하고 있다고 할 수 있다.

참고로 본 영화는 앞서 제작자의 의견을 소개한 바와 같이 후지와라노 미치나가에 대한

6) 『源氏物語の最大の謎は作者紫式部である。(中略)一製作総指揮 角川歴彦』(公開時プレシート 및 DVD豪華版『源氏物語-千年の謎-』(136분,2011년 작품, 2012년 6월 DVD발매, 角川映画、東宝販売)소책자 인용)

7) 『겐지모노가타리』를 일본의 『천일야화』 혹은 『아라비안나이트』에 견주어 파악하고자 하는 제작자의 시선은 DVD 제작시에 삽입된 오디오 코멘트를 통해서도 확인된다. 본 영화는 DVD제작시 다양한 오디오 코멘트가 제공되어 쓰루하시 야스오 감독과 주연배우 이쿠타 토마, 나카타니 미키 등 3인에 의한 코멘트와, 아베노 세이메이 붐의 밀바탕이 되었다고도 평가되는 『데이토 모노가타리(帝都物語)』의 작가 아라마타 히로시(荒俣宏), 헤이안 시대 전문가 오보레야 히사시(朧谷寿), 제작자 가도카와 쓰구히코 등 또 다른 3인에 의한 코멘트가 삽입되어 있다. DVD豪華版『源氏物語-千年の謎-』(136분,2011년 작품, 2012년 6월 DVD발매, 角川映画、東宝販売) 참조.

이루어질 수 없는 사랑이 무라사키시키키부로 하여금 『겐지모노가타리』라는 엄청난 작품을 쓸 수 있게 한 것이라고 표현하고 있다.

제작자에 의해 일찌감치 주인공 히카루겐지 역으로 낙점된 배우 이쿠타 토마(生田斗真)는 영화 『인간실격(人間失格)』을 통해 각종 신인상을 휩쓸며 가장 주목받는 신인으로 일약 스타덤에 오른 배우이다. 또한 모노가타리 집필에 몰두한 나머지 현실과 허구의 세계를 오가는 무라사키시키키부 역에 일본 굴지의 실력과 여배우 나카타니 미키(中谷美紀)가 열연하였다. 천황가를 이용하여 자신의 영화를 극대화하고자 하는 현실 세계의 절대 권력자이자 무라사키시키키부의 창작열에 불을 지피며 모노가타리를 일으키는 결정적인 계기를 제공하는 남성 후지와라노 미치나가역에는 그룹 소년대(少年隊) 출신으로 스페셜 드라마 『源氏物語 上の巻・下の巻』(91/92)에서 히카루겐지 역을 연기한 바 있었던 히가시야마 노리유키(東山紀之)가 출연하였다⁸⁾.

참고로 본 영화의 가장 중요한 구조는 <히카루겐지의 화려한 사랑>과 <작자 무라사키시키키부의 숨겨진 사랑>이 동시 진행하며 <모노가타리의 세계>와 <현실세계>가 교차하는 전개라고 할 수 있는데 이러한 구조를 단적으로 표현하고 있는 인물이 음양사 아베노 세이메이(安倍晴明)이다. 절대 권력자 후지와라노 미치자네의 주변인물로서 『겐지모노가타리』를 집필하는 무라사키시키키부에게 이상한 기운을 느끼며, 나아가 무라사키시키키부가 집필하는 『겐지모노가타리』 안으로 들어가 로쿠조노미야스도코로의 이키료를 퇴치하기도 한다. 그야말로 시공을 초월하는 음양사로서 맹활약하고 있는 아베노 세이메이의 존재는 본 영화 그 자체를 매우 스펙터클한 장르로 만들고 있다. 아베노 세이메이 역에는 영화 『GO』 등으로 널리 알려진 구보즈카 요스케(窪塚洋介)가 열연하였다.

2010년 9월부터 12월까지 70일간 촬영하였으며, 2011년 9월 25일 영화 타이틀을 연상시키는 천명의 관객을 초대하여 대히트 기원 이벤트(도쿄 롯본기힐즈)을 행한 것을 시작으로 각종 이벤트를 거행한 후 2011년 12월 10일의 영화 공개에 이르렀으며, 2011년 12월 24일, 공개로부터 466,000명의 관객동원에 의해 무대인사를 도쿄 가도카와시네마신주쿠에서 행한 바 있다.

4. 영화 『겐지모노가타리-천년의 수수께끼-』의 전개양상 및 특징

앞서 언급한 바와 같이 본 영화는 <히카루겐지의 화려한 사랑>와 <작자 무라사키시키키부의 숨겨진 사랑>이 동시 진행하며 <모노가타리의 세계>와 <현실세계>가 교차하는 전개양상을 보이고 있는데 이를 DVD의 구체적인 장면을 확인하며 시간적·내용적으로 파악하여 일목요연하게 표로 정리하면 다음과 같다.

8) 그 외에도 기리쓰보노코이(桐壺更衣)·후지쓰보(藤壺)역에 마키 요코(真木よう子), 로쿠조노미야스도코로(六条御息所)역에 다나카 레나(田中麗奈), 아오이노우에(葵の上) 역에 다베 미카코(多部未華子), 유가오(夕顔) 역에 아시나 세이(芦名星) 등이 출연하였다.

현실 세계		전환	모노가타리의 세계	
0:01:24 0:05:10 (약4분)	▶이시야마데라(石山寺) ▶미치나가 저택	『겐지모노가타리』 집필을 시작하는 시키부(약2분)	0:07:05 0:13:17 (약6분)	▶기리쓰보노코이 죽음 ▶히카루겐지 탄생 ▶후지쓰보 등장
0:13:18 0:13:30 (약1초)	▶『겐지모노가타리』를 읽고 있는 미치나가		0:13:31 0:19:22 (약6분)	▶히카루겐지 성인식 ▶후지쓰보와 헤어짐
0:19:23 0:34:20 (약15분)	▶쇼시 거처-『겐지모노가타리』를 듣는 이치조 천황(一条天皇) ▶미치나가저택 ▶아베노 세이메이 등장	모노가카리 집필에 열중하는 시키부(약1초)	0:34:30 0:44:16 (약10분)	▶아오이노우에와 결혼 ▶로쿠조노미야스도코로 등장
0:44:17 0:46:30 (약2분)	▶왕자 탄생(세이메이가 시키부에게서 흥한 기운을 발견)		0:46:30 0:55:25 (약10분)	▶유가오 등장(히카루겐지와 하룻밤을 보냄)
0:55:26 0:56:45 (약1분)	▶쇼시 거처-『겐지모노가타리』를 읽어주는 시키부		0:56:46 1:00:25 (약4분)	▶이키료 등장 ▶유가오 절명
1:00:25 1:01:07 (약30초)	▶쇼시 거처-『겐지모노가타리』를 읽어주는 시키부		1:01:07 1:10:46 (약9분)	▶아오이노우에 회임 ▶이키료 등장
1:10:47 1:19:18 (약9분)	▶쇼시 거처-『겐지모노가타리』를 읽어주는 시키부 ▶하카마기 의식(이치조천황 미치나가 저택방문)		1:19:19 1:24:09 (약5분)	▶아오이노우에 출산 ▶이키료 등장
1:24:10 1:24:21 (약1초)	▶시키부의 마음을 눈치채는 세이메이	현실과 모노가타리 경계에 있는 시키부(약2초)	1:24:44 1:26:36 (약2분)	▶이키료 출현 ▶세이메이, 이키료와 대면
1:26:37 1:26:46 (약1초)	▶세이메이의 부재를 눈치채는 미치나가		1:26:47 1:29:10 (약3분)	▶이키료 퇴치 ▶아오이노우에 출산
1:29:11 1:30:31 (약1분)	▶시키부의 집필 중단을 조언하는 세이메이		1:30:58 1:56:10 (약15분)	▶이키료 출현 ▶아오이노우에 죽음 ▶후지쓰보 밀통
1:56:11 2:02:35 (약6분)	▶시키부와 미치나가 이별		2:02:36 2:06:35 (약4분)	▶후지쓰보 출가
2:06:36 2:09:29 (약3분) 무라사키시키부와 히카루겐지와 만남				

물리적인 시간의 많고 적음을 근거로, 본 영화가 <현실 세계>와 <모노가타리의 세계> 중 어느 세계를 보다 중요하게 다루고 있는가를 판단하는 것은 너무나도 단순한 논법이었으나, 교차하는 두 세계의 흐름을 매우 간략하게나마 파악해 보고자 양 세계의 물리적인 시간을 계산해 보면 다음과 같다.

표에서 드러난 시간적인 데이터를 합산해 보면, <현실 세계>에 약 40분, <모노가타리 세계>에 약 74분의 시간을 할애하고 있음을 알 수 있다. 영화 도입부의 미치나가와 무라사키 시키부의 정사신이나 영화 곳곳에 등장하는 <현실 세계>의 여러 장면이 매우 임팩트가 강해 <현실 세계>와 <모노가타리 세계>의 균형이 매우 팽팽한 것으로 느껴지는 것이 사실이나, 영화의 전체적인 시간적 데이터라는 측면에서 볼 때는 <모노가타리 세계>에 한층 중점을 두고 있다고 할 수 있다. 본고에서는 한정된 지면 관계상 구체적인 장면 일체에 대해 자세히 살펴보는 것이 거의 불가능하여, 주요하다고 판단되는 몇몇 장면의 의의에 대해 검토해 보며 이를 통해 본 영화의 특징에 대해 고찰해 보고자 한다.

첫 번째, 본 영화의 도입부의 의의이다. 본 영화는 커다란 보름달이 빛나고 있는 밤, 이시야마데라(石山寺) 경내를 홀로 거닐고 있던 무라사키시키부가 귀족 복장을 한 낯선 남자에게 쫓기다가 결국 몸을 허락하게 되는, 매우 강도 높은 정사신으로부터 시작된다. 하얀 꽃이 만개한 이시야마데라가 두 사람의 만남의 장소로 택해진 이유는 『겐지모노가타리』 창작과 관련된 전설과 밀접한 관련을 가지고 있을 것으로 판단된다. 널리 알려진 바와 같이 헤이안 시대의 여러 문학작품에 등장하고 있는 이시야마데라는 무라사키시키부가 『겐지모노가타리』의 착상을 얻었다는 전설로 저명한 곳이다. 요쓰쓰지노 요시나리(四辻善成)의 가카이쇼(河海抄) 등에 의하면 중국 쇼시로부터 모노가타리 창작의 하명을 받은 무라사키시키부는 모노가타리 창작을 위해 이시야마데라에서 1004년 7일간 머물렀으며 때마침 8월 15일 보름달이 비화호에 비친 것을 바라보고 있다가 문득 모노가타리의 착상이 떠올라, 어떤 귀인(히카루젠지)이 교토를 그리워하는 장면을 쓰기 시작했는데, 그것이 바로 『겐지모노가타리』의 스마권(須磨卷)에 투영되었다고 한다⁹⁾. 참고로 정사신에서 낯선 남자는 다음과 같은 말을 남긴다.

男: そなたの評判は私の耳にも届いておる。

男: そなたの物語には本物の血が流れているようだ。

諦めなさい。私は何をしても許される身なのだ。

男: いつかそなたの書く物語を読ませてくれ。男と女の物語だ。

男: 我の名を知りたいか?

男: 我は^{ひかり}光だ。世を^{ひかり}あまねく照らす光だ。

본 정사신의 핵심은 남성이 자신의 신분을 감추고 여성과 만나는 것으로서 고전문학이 현대문화로 가공될 때 종종 쓰여지는 ‘각색’이라고 할 수 있다. 예를 들어 『겐지모노가타리』를 소재로 한 소녀만화 『아사키유메미시(あさきゆめみし)』의 경우, 기리쓰보 천황과 기리쓰보노코이와의 드라마틱한 만남을 위해 고전문에는 없는 이러한 각색이 보인다. 즉 고양미 닻에 천황의 옷이 높은 나무 위에 걸려 버리자 기리쓰보노코이가 홀로 그것을 가지

9) 출처 『겐지모노가타리 문화론』(도서출판 문,2008) p.283

러 갔다가 때마침 그곳을 배회하던 의문의 귀공자(기리쓰보 천황)의 눈에 띠며 이후 귀공자가 자신의 신분을 감추고 만남을 지속한다는 내용이다. 고전원문과는 상당한 괴리가 있는 대목으로 오히려 『고지키(古事記)』 등에 나오는 미와야마(三輪山) 전설을 연상시키는 전개 를 보이고 있다¹⁰⁾.

그러나 본 영화에서는 미와야마 전설과 달리 남자의 정체는 금방 밝혀진다. 정사 장면 직후 보이는 미치나가 저택 장면에는 정사 장면과는 사뭇 다르게 콧수염을 기른 권력자 풍 모의 미치나가 등장하지만, 천황의 마음을 사로잡을 수 있도록 모노가타리를 쓰라고 명령한 뒤 사라지는 미치나가 정사 장면에서 그랬던 것처럼 비취 구슬 소리를 내며 사라지기 때문이다. 비취 구슬 소리야 말로 <낯선 귀족 남성>과 <미치나가>가 동일인물임을 드러내는 결정적인 증거로 표현되고 있는 것이다. 어쨌든 <현실 세계>를 나타내는 첫 장면을 통해 <현실 세계>의 미치나가 <모노가타리 세계>의 히카루젠지의 모습에 투영되고 있음을 알 수 있고, 영화도 그것을 나타내려 하고 있음을 파악할 수 있다.

두 번째, 본 영화에서는 로쿠조노미야스도코로 역할에 무라사키시키부, 히카루젠지 역할에 후지와라노 미치나가 투영되는 구조를 취하고 있다. 앞서 주7)에서 언급한 바 있는 DVD 제작 코멘트 자료 안에서 제작자 가도카와 쓰구히코는 본 작품의 영화화에 대한 구상으로서 제 1단계로 로쿠조노미야스도코로와 무라사키시키부를 1인 2역으로, 제 2단계에서 히카루젠지와 후지와라노 미치나가를 1인 2역으로 할 생각이었으나, 결국 제 3단계에서 본 영화와 같은 형태로 최종 확정하였음을 밝히고 있다¹¹⁾. 그러나 일찍이 제작자를 사로잡았던 제 1단계와 제 2단계의 구상은 폐기되었다기보다는 역시 작품의 근저에 강력하게 투영되어 있음을 확인할 수 있다. 예를 들어 미치나가의 저택에서 보름달이 높이 뜬 밤, 무라사키시키부와 여우 가면을 쓴 미치나가 만나는 장면에서 다음과 같은 언급이 보인다.

紫式部: お離しを。

男: いや、離さぬ。今宵の月は 我にあの夜を思い出させる。生涯忘れ得ぬあの一夜のように今宵そなたの胸で甘えてみたいのだ。

紫式部: お酒が過ぎたようでございますね、道長様。おやすみなさいませ。明日の朝儀に遅れまする。

道長: 道長ではない。我は⁰⁴⁵光だ。そなたが物語の中で我を光と名付けたではないか。

영화 도입부의 내용을 연상시키는 장면으로, 여기에서 미치나가는 자신을 모노가타리의 주인공 히카루(光)로 스스로 인식하고 있을 뿐만 아니라 그것을 무라사키시키부도 의식하고 있음을 확신하고 있다. 이 장면뿐만 아니라, 이후 「早くに母を失い、愛に飢えた子供時代を送られた源氏の君は今でも愛を求めてさまよう一人の童。その童の心を夕顔の君は優しく包んでさあ

10) 줄고 「 소녀만화 『아사키유메미시(あさきゆめみし)』의 문화론-『겐지 모노가타리(源氏物語)』와 고전교육-」(韓國 日本語文學會 『일본어문학』 2008.9)등에 자세하다. pp.271-272

11) 주7)의 대담 정보 참조.

げたのです。」라는 무라사키시키키부의 이야기에 대해 미치나가가 「はは、そうかそうか。我は童か。ふふふ」하고 응대하는 장면이나, 후지쓰보를 찾아간 히카루젠지가 「諦めてください。わたくしは何をしても許される身なのです。わたくしが今自らそう決めたのです」라고 하는 장면, 특히 고향으로 떠나는 시키키부와 마지막 장면에서 두사람이 나누는 다음과 같은 대사는 결정적인 대목이라고 할 수 있다.

道長：その後、源氏はどうなるのだ。世の無常を儚み、隠居するのではないか？

式部：いいえ、そのようなことは決してありませぬ。源氏の君の人生はまだ始まったばかりなのです。これからまた、様々な方と出会い、別れ、多くの喜びを味わい、多くの涙を流して生きてゆかれるのです。

道長：それはまた、随分難儀な人生であるな。

式部：ええ、あなたさまと同じように。

道長：ふふふ、同じようにか。

式部：遠くより、見守っております。この世の榮華を極められるあなた様のことを。

道長：そうよ。我の名は光^{ひかり}。世をあまねく照らす光^{ひかり}だ。

히카루젠지에 대한 걱정적인 사랑으로 인해 이키료로 출현하게 되는 여인 미야스도코로의 불행은 미치나가에 대한 마음을 멈출 길 없어 모노가타리의 세계에 몰입하는 무라사키시키키부의 모습으로 투영되고 있다. 예를 들어 미야스도코로에 대해 이야기를 나누던 시키키부와 미치나가가 다음과 같이 언급하는 장면은 미야스도코로와 시키키부의 캐릭터가 중첩되고 있음을 암시하고 있다.

道長：ふふふふ。ほんに恐ろしい女であるなあ。そなたは。帝も彰子も宮中の者すべての心を掴んでしまったではないか。その筆一つで。彰子は皇子を産み、我の大願は果たされた。ならば式部、それでもまだそなたが物語を綴るのは、何のためだ。無用な物語を何ゆえ書き続けるのだ。

式部：まさか、それをお分かりにならぬあなた様ではありますまい。遂げられぬ思いがわたくしに筆を持たせるのでありましよう。

또한 미치나가에 대한 시키키부의 마음을 눈치챈 아베노 세이메이가 미치나가에게 시키키부의 집필을 막으라고 조언하고 있는 다음의 장면에서도 미야스도코로의 인물조형에 시키키부의 캐릭터가 중첩되고 있음을 짐작할 수 있다.

晴明：道長様に益をもたらした女。物語の使い手。あの者の修羅はいずれ物語の世界から抜け出す。その時は我とて収められぬやもしれぬ。式部の筆を止めるのです。止められるのは道長様の他にはおりませぬ。

道長：それはできぬ。

清明：何ゆえです。

道長：我がそれを望まぬからだ。私は見たいのだ。式部の筆の行き着く先を。あの者の業の深さを。才のすべてを見届けたいのだ。

清明：我が身に害が及ぼうとも。

道長：そうだ。それが務めだ。あの者の才を呼び覚ましたのはこの私なのだからな。

세 번째로 살펴보고 싶은 점은 본 영화가 일본 고전문학 관련 다양한 콘텐츠의 여러 이미지를 활용하고, 역사적 사실에 상상력을 더하는 방식을 취하며, 기존의 『겐지모노가타리』 가공 양상을 다양한 방법으로 절충하고 나아가 헤이안 시대의 문화적 코드를 나름대로 충분히 펼쳐 보이고 있다고 판단된다는 것이다.

우선 일본고전문학 관련 다양한 콘텐츠의 여러 이미지를 활용한다는 의미는 1990년대 이후 일본문화계를 강타한 고전관련 콘텐츠 중 두 가지, 즉 『겐지모노가타리』와 『음양사』의 접목을 꾀하고 있다는 점인데 이에 대해서는 후술하도록 하겠다. 역사적 사실에 상상력을 더하는 방식을 취하고 있다는 것은 후지와라노 미치나가와 무라사키시키키부의 연인 관계가 『겐지모노가타리』 집필의 계기가 되었다는 본 영화의 대담한 발상을 가리키는 것이다.

『무라사키시키키부 일기(紫式部日記)』에 의하면 한밤중에 미치나가가 무라사키시키키부의 방문을 두드렸다는 일절이 있고, 『존비분맥(尊痺分脈)』 등에도 「미치나가의 첩(道長の妾)」라는 언급이 있어 미치나가와 무라사키시키키부가 연인관계라는 설이 존재해 온 것은 사실이나¹²⁾, 그렇다고 해서 이러한 것이 정확한 역사적 사실이라고는 결코 말할 수 없다.

보다 중요한 것은 본 작품이 기존의 『겐지모노가타리』 가공 양상을 다양한 방법으로 절충하고 판단된다는 점인데, 이에 대해 언급하기 앞서, 2011년 11월 7일, 영화완성공개 이벤트(도쿄 프레미아 이벤트, 도쿄 국제포럼)에서 무대 인사를 한 구보즈카 요스케의 발언에 주목하고자 한다. 인터뷰에서 구보즈카 요스케는 음양사 아베노 세이메이의 이미지를 포착하기 위해 오카노 레이코(岡野玲子)의 작품을 참고로 하였다고 발언한 바 있다. 참고로 앞서 간단히 언급한 바와 같이 『겐지모노가타리』와 함께 1990년대를 강타한 고전 관련 콘텐츠로서 음양사를 들 수 있다. 특히 유메마쿠라 바쿠(夢枕獯)씨의 베스트셀러 『음양사(陰陽師)』 시리즈와 이를 바탕으로 한 2001년 흥행영화 『음양사(陰陽師)』(103분, 東宝, 2001)는 그야말로 음양사 붐을 이끈 견인차 역할을 했다고 할 수 있지만 그와 더불어 공전의 아베노 세이메이 붐을 지속시키며 엄청난 규모로 범람했던 세이메이본(清明本)의 주요 작품 중 하나가 오카노 레이코씨의 만화였다¹³⁾. 구보즈카 요스케는 바로 이 만화로 『음양사』의 이미지를 파악하고자 했던 것이다. 대중들에게 고전문학 관련 만화의 이미지는 장르의 특성상 대중에게 깊이 각인되어 있다는 점을 결코 간과할 수 없을 것이다.

12) 福家俊幸 「藤原道長と紫式部」(『源氏物語講座 4』 勉誠社、1992) pp.287-296

13) 이에 대해서는 줄고 「영화 ‘음양사(陰陽師)’와 『겐지 모노가타리(源氏物語)』의 시대」(고려대학교일본연구소 『日本研究』 2008.8)에 자세하다.p.230

그렇다면 『겐지모노가타리』를 소재로 본 영화는 마찬가지로 『겐지모노가타리』를 소재로 한 소녀만화 『아사키유메미시』와 어떠한 관련성을 가지고 있을까. 본 영화가 기존의 『겐지모노가타리』가공 양상을 다양한 방법으로 절충하고 나아가 헤이안 시대의 문화적 코드를 나름대로 충분히 펼쳐 보이고 있다고 지적했던 근거가 바로 이 점에 있다. 우선 영화 곳곳에 보이는 다음과 같은 언급을 살펴보고 싶다. 무라사키시키키부가 쇼시 등을 대상으로 히카루젠지에 대해 언급하는 다음과 같은 대목들이다.

(A)紫式部:まがまがしい女たちの情念渦巻く宮中で限りなき美しさに恵まれて、この世に生を受けた源氏の君。されど母の愛を知らずして育ったその心の飢えは、大いなる悲劇へとつながってゆくのです。

一条天皇:早く続きが聞きたいものよ、のう。

彰子:ええ。

(B)紫式部: 早くに母を失い、愛に飢えた子供時代を送られた源氏の君は今でも愛を求めてさまよう一人の童。その童の心を夕顔の君は優しく包んでさしあげたのです。

道長: ははは、そうかそうか。我は童か。ふふふ。

彰子: 何を仰っているのです、父上?

道長: で、どうなるのだ? その夕顔と源氏の行く末は?

(C)光源氏: これでわたくしたちも打ち解けた並の夫婦となりましょう。お苦しいのですか? わたくしはたまらなく嬉しいのです。わたくしは母親の記憶がありません。けれど、これから生まれてくるわたくしの子は母親であるあなたの愛を存分に受けることができますよ。わたくしはそれを見てようやく寂しかった幼き日々より解放されるのです。葵? これからはつらいことも悲しいことも恨みごと何も何でも仰ってください。わたくしたちは世にも許された夫婦なのですから。

첫 번째와 두번째 장면은 각각 쇼시와 이치조 천황, 쇼시와 뇨보들에게 『겐지모노가타리』의 내용을 들려주고 있는 무라사키시키키부의 이야기에 등장하는 내용이며, 세번째 장면은 아오이노우에의 회임 소식을 듣고 부인을 찾아간 히카루젠지가 다정하는 부인을 달래는 장면이다. 세 장면의 공통점은 히카루젠지의 여성편력이 어머니의 부재로 인한 불가피한 비극이며 이를 통해 히카루젠지를 슬픔의 왕자, 소녀감성을 자극하는 고독하고 순정적인 인물로 조명하고자 하고 있다는 점이다. 이러한 서정적이고 애상적인 부분은 실로 소녀만화의 도입부를 연상케 한다¹⁴⁾.

한편, 일찍이 아즈마 레이코(東玲子)씨는 다수의 여성과 복잡한 관계를 가지는 주인공 히카루젠지가 소녀들의 꿈을 그린 소녀만화, 즉 ‘오직 자신만을 사랑해주는’ 것을 꿈꾸는 소녀만화의 주인공으로서 적합한지에 대해 의문을 제시한 바 있는데¹⁵⁾, 본 영화에는 플레이 보이와 소녀만화의 괴리감은 거의 느껴지지 않는다. 이러한 현상은 과연 어디에서 오는 것일까.

14) 本田和子 「少年『源氏』の絵姿を追って」(『源氏研究』第2号, 翰林書房) p.198

15) 東玲子 「見飽きぬ夢 女性まんが家が映す源氏物語」(『ユリイカ』青土社, 2002.2) p.204.

바로 이 점이 본 영화의 가장 성공적인 측면이라고 본고는 파악하고자 한다. 즉 대중적인 시각에서 히카루겐지라는 인물의 조형을 시도할 때 가장 어려운 점은 <소녀감성을 자극하는 순정적인 서정남의 이미지>와 <다수의 여성들과의 관계를 통해 절대 권력에 다가가는 왕권론적인 실력자의 이미지>을 어떻게 합치시킬 수 있을까 하는 것이라고 할 수 있다. 두 가지 캐릭터는 함께 존재할 수 없을 뿐만 아니라 오히려 결정적으로 위화감을 느끼게 하는 성격이기도 하다. 그러나 본 영화에서는 <현실 세계>의 절대 권력자 미치나가에게 히카루겐지의 모습을 투영시키는 방법으로 <모노가타리 세계>의 히카루겐지를 순수한 청년으로 온전하게 표현할 수 있었고, 이를 통해 고전원문 『겐지모노가타리』의 <사랑에 대한 묘사>와 <왕권론적인 시각>을 모두 담아내는 데 성공할 수 있었던 것으로 판단된다.

III. 결론

앞서 살펴본 바와 같이 본 영화는 <히카루겐지의 화려한 사랑>과 <작자 무라사키시키키부의 숨겨진 사랑>이 동시 진행하며 <모노가타리의 세계>와 <현실세계>가 교차하는 전개양상을 보이고 있으며 이 과정에서 로쿠조노미야스도코로의 묘사에 무라사키시키키부, 히카루겐지 역할에 후지와라노 미치나가 투영되는 구조를 취하고 있다.

또한 1990년도 이래 일본고전문학의 아이콘이자 일본문화계를 강타한 고전문학 콘텐츠 『겐지모노가타리』와 『음양사』의 이미지를 충분히 활용하며, 동시에 각각을 소재로 한 2001년의 영화들, 즉 『천년의 사랑 Genji』(東宝, 2001)이나 『음양사』(東宝, 2001)의 여러 가지 문제점을 극복하고 발전시킨 형태를 취하고 있다.

아울러 『겐지모노가타리』 관련 소녀만화 『아사키유메미시』의 딜레마(왕권론의 부재)를 극복하는 형태로 나름대로 완성도를 높였다고 판단된다. 이는 <현실 세계>의 절대 권력자 미치나가에게 히카루겐지의 모습을 투영시키는 방법으로 <모노가타리 세계>의 히카루겐지를 사랑에 빠진 순수한 청년으로 온전하게 표현할 수 있었고, 이를 통해 고전원문 『겐지모노가타리』의 <사랑에 대한 묘사>와 <왕권론적인 시각>을 모두 담아내는 데 성공했기 때문이라 할 수 있다. 본 영화가 기존의 『겐지모노가타리』 가공 양상을 다양한 방법으로 절충하고 나아가 헤이안 시대의 문화적 코드를 나름대로 충분히 펼쳐 보이고 있다고 파악했던 것은 바로 이러한 이유들 때문이라고 할 수 있다.

◀ 參考文獻 ▶

- 권연수(2010) 「문학의 콘텐츠화 전략 연구-일본의 고전문학 『겐지모노가타리』의 문화콘텐츠 양상을 중심으로-」 『일본연구』 제13집, 고려대학교 일본연구센터, pp.333-335
- 줄고(2006) 「영화 『천년의 사랑 Genji』-『千年の恋 ひかる源氏物語』論-」(日本學報, 2006.8), pp.111-124
- _____(2008) 「영화 ‘음양사(陰陽師)’와 『겐지 모노가타리(源氏物語)』의 시대」 『日本研究』, 고려대학교 일본연구센터, pp.225-244

- _____(2008) 「소녀만화 『아사키유메미시(あさきゆめみし)』의 문화론-『겐지 모노가타리(源氏物語)』와 고전교육-」 『일본어문학』 韓國日本語文學會, pp.263-278
- 졸저(2008) 『겐지모노가타리 문화론』 고려대학교 일본학총서08 도서출판 문, p.283
- 김영심(2005) 「한일 국민문학의 가공문화와 유통- 『춘향전』 과 『겐지모노가타리』 를 중심으로-」 『日語日文学研究』 제53집, pp.109-111
- 東玲子(2002) 「見飽きぬ夢 女性まんが家が映す源氏物語」 『ユリイカ』 青土社, p.204.
- 河添房江(2000) 「メディア・ミックス時代の源氏文化」 『源氏研究』 第5号, p.149
- _____(2003) 「正典化する現代語訳-源氏ルネッサンスの行方-」 『源氏研究』 第8号, pp.157-168
- 立石和弘(2002) 「美的表象と性的表象-そして語られざる『源氏物語』-」 『ユリイカ』, pp.143-161
- _____(2002) 「『源氏物語』の加工と流通」 『源氏研究』 第5号, 翰林書房, p.136
- 三田村雅子(2002) 「映画『千年の恋』のめざしたもの-『カノ』としての源氏物語-」 『源氏研究』 第5号, 翰林書房, pp.185-189
- 福家俊幸(1992) 「藤原道長と紫式部」 『源氏物語講座 4』 勉誠社, pp.287-296
- 本田和子(1997) 「少年『源氏』の絵姿を追って」 『源氏研究』 第2号, 翰林書房, p.198
- 山縣垂矢子(2001) 「昭和26年の映画『源氏物語』について」 『日本語文化研究』 p.23
- <시청각자료>
- DVD豪華版 『源氏物語-千年の謎-』 (136분, 2011년 작품, 2012년 6월 DVD발매, 角川映画、東宝販売)

- 투 고 : 2012. 11. 30.
■ 심 사 : 2012. 12. 15.
■ 심사완료 : 2013. 01. 15.

바쇼(芭蕉)와 에쓰진(越人)의 하이카이를 통한 교류에 관한 고찰*

許 坤**
heokon@kangwon.ac.kr

<要 旨>

越人が芭蕉の門人となったのは、『俳諧七部集』の第一集『冬の日』興行の折であると伝えられている。そして蕉風作家として、華々しく俳壇に登場したのは、第二集『春の日』であり、引き続き第三集『曠野』時代である。蕉門俳諧の初期に芭蕉の俳諧改革に協力し大きな役割をした彼は、当時、江戸俳壇の中心になりつつあった蕉門俳諧が本格的に軌道に乗っていた時には、自分の俳諧に傾倒しすぎる傾向が見られ始めた。理智的で古典的だった越人の俳諧の傾向はますます深くなっていきながら道徳的で教訓的な性格に変わってしまったのである。結局当時自分の主な活動の舞台であった名古屋俳壇の保守性を克服することができなかった越人の俳諧は、回顧的で自慰的俳風の中に埋没されるようになったのである。その後、蕉風に反する独自の俳風を追求することによって、結局は大衆に愛される俳諧よりは自己陶醉の俳諧に終わるにすべなかったであり、蕉門俳諧の発展に大事な役割を果たすべき立場から大きく退いてしまったのである。しかし師匠の芭蕉とは死ぬまで人間関係が終始変わらなかったであり、蕉門に残した彼の足跡は決して悔えることはできないものといえる。運命に恵まれず非運な人生を生きていた越人であるが、芭蕉との俳諧と書簡文を通じて交わったつきあいは彼の人生の中の唯一の楽しみと慰めになったのではなからうかと思うのである。

キーワード : 芭蕉、越人、門人、俳諧、蕉門、交流

1. 序 論

에쓰진(越人)은 바쇼의 문인 중에서도 비교적 초기에 바쇼의 쇼몽하이카이에 입문한 문인으로 바쇼가 사망할 때까지도 바쇼와는 지속적인 무던한 인간적인 관계를 유지하면서 하이카이활동을 한 문인으로서 쇼몽하이카이(蕉門俳諧)의 초기 형성과 발전에 있어서 그가 행했던 역할은 간과할 수 없는 것으로 평가받고 있다. 그는 또 바쇼가 자신의 하이카이를 개혁하고 발전시켜나감에 있어서 중요한 하나의 수단으로 활용하였던 수차례의 기행을 동행하면서 바쇼의 최측근으로서의 입지를 다져갔으며, 그러한 그와 바쇼와의 동행은 바쇼로 하여금 더욱더 깊은 신뢰를 얻게 되었고 그로인한 쇼몽하이카이에서의 그의 활동도 더욱더 크게 인식되어져 갔던 것이다.

에쓰진은 바쇼에게 대해 노골적으로 반기를 들거나 하지는 않았지만, 자신만의 하이카이에 대한 집착이 강함으로 인해 쇼몽하이카이가 추구하고자 하는 궁극적인 하이카이의 경지에는 동참하지 못했던 것이다. 이러한 그의 행동은 바쇼와 쇼몽하이카이시(蕉門俳諧師)들로

* 본 연구는 2013년도 학사경비보조금 재원으로 강원대학교의 연구비를 지원받아 수행되었다.

본 연구는 허 곤(2002) 「芭蕉と莊子とのかかわり—思想世界に於ける影響關係を中心として—」日本中央大學大學院博士學位論文의 일부를 참고하였으며 바쇼와 에쓰진의 내면적 교류와 서간을 통한 교류를 중심으로 재구성 하였다.

** 강원대학교 교수, 일본근세문학

부터 오해를 불러일으킬 소지가 다분히 있었으며 그러한 그의 태도가 원인이 되어 점차적으로 스승인 바쇼와의 거리도 불편한 상황에 놓이게 되었던 것이다.

본고에서는 에쓰진의 하이카이의 특징과 하이카이를 통한 바쇼와의 교류, 그리고 서간문을 통한 바쇼와의 교류 등을 통해서 두 사람이 어떠한 과정을 통하여 서로를 이해하고 교류하였는지, 그리고 그러한 과정에 있어서의 하이카이의 역할과 두 사람의 관계의 변화과정과 영향관계 등에 관해 조명하고자 한다.

2. 에쓰진의 하이카이 세계

에쓰진은 1658년에 출생했으며 바쇼에 비해서 열두 살 아래였다. 그는 20대 중반 경에 나고야로 이사를 와서 1684년경에 발간된 바쇼시치부슈(『俳諧七部集』)의 제 1집인 후유노히(『冬の日』)를 계기로 해서 바쇼의 문인이 되었다. 그 후 『俳諧七部集』의 제 2집인 하루노히(『春の日』)와 제 3집인 아라노(『曠野』)를 통해서 화려하게 하이단에 데뷔를 하면서 쇼몽의 대표적인 문인으로서의 입지를 굳혀갔다. 에쓰진은 쇼몽하이카이 초기의 동향출신 작가로서, 당시 쇼몽의 대표적인 문인으로 활동하던 가케이(荷兮)에 뒤지지 않을 정도의 실력을 인정받으면서 성장해갔다. 바쇼로부터도 대단한 관심을 받게 되었고 바쇼와 함께 이라고(伊良湖)에 있던 도코쿠를 방문하기 위해 동행했으며, 바쇼와 함께 신슈사라시나(信州更科)의 명소인 오바쓰테에서 달구경을 하기위해 행한 사라시나기행(『更科紀行』)도 동행하였다. 그 후에는 에도의 후카가와로 가서 바쇼암에서 약 2, 3개월 바쇼와 동거하면서 바쇼와의 깊은 인간적인 관계를 만들어 갈 수 있었던 것이다. 그리고 에도에 체재하는 동안에 쇼몽의 대표적인 문인들인 기카쿠(其角), 란세쓰(嵐雪) 등과도 교류하며 자신의 하이카이의 영역을 넓혀가면서 바쇼의 측근으로서의 성장을 도모하고 한편으로는 자신의 하이카이의 수행을 지속해 갔던 것이다. 히사고(『ひさご』)에는 나고야 쇼몽의 대표주자로서 서문을 쓰기도 했으며, 사루미노(『猿蓑』)에는 당시 나고야를 대표하던 가케이를 능가하는 6句를 入集하면서 자신의 성장을 대내외에 과시할 수 있게 되었던 것이다. 그러나 만년에 이르러 그의 하이카이의 특징은 쇼몽의 하이카이로부터 점차적으로 멀어져 갔으며, 이지적이고 고전적인 그의 작품의 경향은 더욱더 깊어져가면서 도덕적이고 교훈적인 성격으로 변해갔던 것이다. 이러한 경향은 당시의 나고야 쇼몽하이카이의 공통적인 특징이기도 했지만, 특히 에쓰진에게는 그러한 경향이 더욱더 강하게 나타났던 것이다.

이러한 에쓰진의 성향은 1693년에 고추(壺中)가 편집한 하이후 유미(『俳風 弓』)에서도 확인 할 수 있다. 하이후 유미의 경우 형식적인 의미에 있어서는 고추가 편집을 했지만, 실제로 유미에 나타나 있는 내용을 보면 에쓰진과 야스이(野水), 본초(凡兆) 등이 바쇼에 대해 노골적으로 반감을 나타내고 있는 것을 볼 수 있다. 시다요시히데(志田義秀)는 『問題の点を主としたる芭蕉の伝記の研究(문제점을 중심으로 분석한 바쇼 전기의 연구)』¹⁾에서 “서문에

서 이미 바쇼의 하이카이를 부정한 것으로 보이며, 이하 작품의 편집과 내용, 등장하는 작가의 면면에서도 스승에 대한 반항의 태도를 볼 수 있다”고 언급하고 있다. 1694년 바쇼가 나고야를 방문하기 전, 이미 이반의 태도를 보이고 있었고 이러한 당시의 상황을 유추해 보면, 당시에 바쇼의 심경이 얼마나 복잡하고 난감했는가를 충분히 짐작할 수 있는 것이다.

바쇼시치부슈의 첫 1,2,3집은 나고야에서 성립하여 란세쓰의 데뷔를 이루고 그의 문학적 재능을 널리 알리는데 큰 역할을 했지만, 란세쓰의 이반적인 태도와 나고야하이단의 비협조로 인하여 그 후의 하이단의 중심은 나고야에서 고난(湖南)으로 이동하고 있었던 것이다. 원래 바쇼는 同門의 選集을 만들 때, 유념했던 것은 자신이 당시에 가장 신뢰했던 문인에게 의뢰를 하였던 원칙을 가지고서 일을 추진했었다. 그러므로 쇼몽의 발전은 항상 당시 쇼몽하이카이의 중심에서 활동하던 사람이 죽이 되어서 개혁의 키를 쥐고서 변혁을 추진해 갔던 것이다. 이러한 경향으로 보아서 에쓰진이 몸담고 있었던 나고야 하이단의 역할은 이미 저물어가는 시기였던 것이고 쇼몽하이카이의 중심축은 고난의 진세키(珍碩)撰 히사고(『ひさご』 1690년 발행)의 성립과 더불어 나고야에서 고난으로 이동했다는 것을 간접적으로 알 수 있는 것이다. 물론 히사고에서 나고야 하이단을 대표하는 가케이가 아닌 에쓰진이 서문을 맡아서 기록한 것을 보면 그의 역량에 대한 쇼몽하이단에서의 기대는 완전히 저버린 상황은 아니라 할지라도 바쇼의 마음이 나고야에서 고난으로 이동하였다는 것은 어떤 의미에서는 바쇼와 에쓰진의 당시의 원만하지 못했던 관계를 유추해 볼 수 있게 하는 부분이며, 쇼몽하이카이에서의 에쓰진의 역할 또한 점차적으로 쇠퇴의 기로에 놓여 있었음을 확인시켜주는 부분이라고 할 수 있다.

이러한 일련의 활동으로 인해 에쓰진은 당시의 하이단에서 대내외적으로는 인정을 받고 있었지만, 쇼몽하이카이의 발전에 일조를 하는 역할보다는 자신만의 하이카이를 발전시켜 독자의 하이카이의 경지를 추구하는데 역점을 두다가 대중성의 결여와 당시의 하이단의 흐름에 민감하게 대처하지 못하는 결과를 초래했다고 할 수 있다. 그로 인해 그의 하이카이는 자아도취적인 면이 강하다는 평가를 받기에 이르렀고 초기 쇼몽하이카이의 구축과 발전에는 중요한 역할을 하였지만, 그 후는 더 이상 성장하지 못하고 한계성을 드러내며 당시의 하이단에서 그의 이름이 점차적으로 잊혀져가게 되었던 것이다.

에쓰진이 활동했던 나고야하이단은 교호기(享保期1716~1736)에는 시코(支考)가 중심이 되었으며 에쓰진은 당시의 하이카이의 흐름에 뒤쳐져 그의 존재감은 희미해져 갔고, 에쓰진은 그 이전인 1703년에서 1714년에 걸친 약 12년간을 나고야 하이단과의 연락을 끊고 있었으며 1715년에는 다시금 나고야 하이단에 복귀하여 샤후비칸(『鶴尾冠』)과 니와카마도슈(『庭竈集』)와 같은 하이카이 서적을 발간하지만 그 내용은 이미 당대의 하이카이가 추구하던 흐름과는 거리가 먼 것이었다.

바쇼의 사후 백년을 기념하기 위해서 부손(蕪村)에 의해서 쇼몽십철(蕉門十哲)에 선발되

1) 志田義秀(1938) 『問題の点を主としたる芭蕉の伝記の研究』. 河出書房. 디지털화 (2008,1)

기는 했지만, 그것은 에쓰진이 쇼몽하이카이의 초기에 있어서 지대한 공을 세웠다는 것이 크게 작용한 것과 바쇼와의 지속적인 인간관계를 유지하면서 쇼몽하이카이의 원로로서 활동한 점이 참고가 되었던 것이다. 그의 삶은 가정적인 불행한 환경과 경제적인 어려움을 겪으면서 지냈다고 할 수 있으며 하이단에서 활동한 그에 관한 기록은 1739년에 발간된 『梅鏡』에서 마지막으로 그의 이름을 확인할 수 있을 뿐 더 이상 그의 행적은 찾아 볼 수 없다.

3. 바쇼와 에쓰진의 교류

아래의 내용은 곡물매매 사건으로 말미암아 처벌을 받고서 호비(保美)에 유배되다시피 하면서 외롭게 지내고 있는 도코쿠(杜国)를 만나기 위해 바쇼가 자신의 여정 약 90킬로미터나 되는 먼 길을 마다않고 찾아갔던 것과 관련된 내용으로 1687년경에 기록된 내용이다.

三河の国保美といふ処に、杜国がしのびて有けるをとぶらはむと、まづ越人に消息して、鳴海より後ざまに二十五里尋かへりて、其夜吉田に泊まる。

寒けれど二人寐る夜ぞ頼もしき

天律誦手、田の中に細道ありて、海より吹上る風いと寒き所也。

『笈の小文』 2)

위의 문장의 내용은, 「도코쿠가 미카와의 호비에서 세상을 등지고 지내고 있다는 것을 소식을 듣고서 도코쿠를 방문 하고자 했는데 그에 앞서 먼저 나고야에 살고 있는 에쓰진에게 편지를 써서 불러내어 함께 나루미(鳴海)에서 다시 왔던 길을 약 90킬로미터 정도를 되돌아가서 밤이 되어서야 요시다(吉田)에 묵었다. 「추운 밤이지만 마음이 가는 벗과 함께하니 든든하다.」 아마쓰나와테(天律誦手)는 논 가운데로 작은 길이 하나 나있고 바닷바람이 세계 부는 추운 곳이다.」 라는 의미이다. 위의 句에서 바쇼는 자신이 도코쿠를 방문하고자 했던 시기가 때마침 추운 겨울이기는 했지만, 하이카이의 진정한 맛을 즐길 줄 아는 자신이 아끼는 문인인 에쓰진과 함께 이런 저런 이야기를 나누며 지낸 겨울밤은 혼자서 여행을 했을 때와는 전혀 다른 느낌이었다는 심경을 句로 읊고 있는 것이다. 여기서 바쇼는 자신이 도코쿠를 만나기 위해 어렵고 힘든 길을 나섰지만, 자신의 심경을 이해하고 자신과 함께 하이카이를 논 할 수 있는 에쓰진이 동행했음에 전혀 힘들지 않았다고 언급하고 있는 것이다.

2) 井本農一 外 2人(1982) 『日本古典文学全集 松尾芭蕉集』 小學館

露通も此みなとまで出むかひて、みのゝ国へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より来り合、越人も馬をとばせて、如行が家に入集る。前川子・荊口父子、其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、且喜び、且いたはる。旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮おがまんと、又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

『おくのほそ道』 3)

이 문장은 바쇼가 오쿠노호소미치(『おくのほそ道』)의 마지막 일정이 묘사되어 있는 부분이라고 할 수 있다. 바쇼는 오가키(大垣)까지의 일정을 끝으로 오쿠노호소미치의 6개월간에 걸친 대장정을 마치고 난 뒤, 여독이 채 가시기도 전에 20년 마다 遷宮하는 이세신궁(伊勢神宮)의 遷宮式에 참배하기 위해 또 다시 여정에 나서게 된다. 그때 바쇼가 제자들과의 이별을 아쉬워하면서 읊은 句가 “蛤のふたみに”인 것이다. 이 句에서 바쇼는 “대합의 몸이 두 쪽으로 나눌 때, 힘든 인고의 고통이 동반하는 것처럼, 동고동락했던 제자들과의 이별로 인해 나의 마음은 심란한데, 때마침 불어오는 차가운 가을바람이 나의 애간장을 타게 하는구나.”라고 하면서 자신의 제자들에 대한 애착을 아낌없이 읊고 있다.

위의 문장에서 볼 수 있는 바와 같이 에쓰진은 바쇼가 오쿠노호소미치의 약 6개월간의 긴 여정을 마치고 오가키에 도착해 있다는 소식을 듣고는 바쇼를 만나기 위해서 만사를 제쳐 놓고서 바쇼가 머물고 있는 곳으로 한달음에 말을 타고서 왔다는 내용이 기록되어 있다. 물론 여기에는 많은 바쇼의 문인들이 함께 하여 오랜만에 스승과 제자들이 회포를 푸는 자리이기도 했지만, 바쇼의 애제자였던 에쓰진 또한 스승인 바쇼를 만나기 위해 나고야에서 먼 길을 마다않고 찾아가서 그 자리에 함께 하고 있는 모습을 볼 수 있는 것이다. 이러한 에쓰진의 모습은 그동안 바쇼와 하이카이를 매개체로 하면서 더불어 쌓아왔던 사제시간의 두터운 정을 충분히 대변해 주는 부분이라고 할 수 있다.

さらしなの里、おぼすて山の月見ん事、しきりにすゝむろ秋風の心に吹さはぎて、ともに風雲の情をくるはすもの、又ひとり越人と云。木曾路は山深く道さがしく、旅寝の力も心もとなしと、荷兮子が奴僕をしておくらす。をのをの心ざし尽すといへども、駅旅の事心得ぬさまにて、共におぼつかなく、ものごとのしどろにあとさきなるも、中々におかしき事のみ多し。(中略)

霧晴て棧はめもふさがれず

越人

さらしなや三よさの月見雲もなし

越人

『更科紀行』 4)

3) 주 2와 同書

4) 주 2와 同書

위의 문장은 1688년에 바쇼가 행했던 기행인 사라시나기행(『更科紀行』)의 서두 부분이며 내용은 다음과 같다. “사라시나(更科)의 오바쓰테산(姨捨山)에서 달구경을 하고자 차가운 가을바람을 맞으며 여행길을 나서고자 하는데 하이카이의 정취를 즐길 줄 아는 한 사람이 동행하고자 했는데 그가 에쓰진이다. 기소(木曾)가도의 길은 깊고 험하다고 해서 나고야에서 가케이가 하인을 보내 주었다.”라는 글이다. 여기에서도 알 수 있는 바와 같이 바쇼는 자신의 일생의 과제인 하이카이의 개혁의 하나의 매개체로 활용했던 기행의 여정을 수행함에 있어서 자신이 신뢰하던 에쓰진과 동행하고 있음을 알 수 있다. 그리고 지금도 그렇지만, 당시에 험난하기로 알려져 있어서 그곳을 통행하는 사람의 목숨조차도 보장받을 수도 없을 만큼 힘든 여정 중에 자신이 아끼던 제자인 에쓰진과 문하생인 가케이의 도움으로 난관을 헤쳐나가고 있는 것을 볼 수 있는 것이다. 그 만큼 바쇼는 에쓰진을 자신과 더불어 하이카이를 함께 나눌 수 있는 인물로 굳게 믿고 있었다는 것을 확인시켜주는 부분이라고 할 수 있을 것이다. 다음句는 당시에 바쇼와 동행하던 에쓰진이 읊은句이다. “霧晴て棧はめもふさがれず”의句는 “안개 걷히니 한눈 팔 수 없는 험난한 산길”이라는 내용으로 안개가 걷히지 전에는 알 수 없었지만, 안개가 걷힌 뒤 사방을 보니 자신이 얼마나 위험한 곳을 지나가고 있는가를 인식하고 그에 대한 놀라움을句로 표현한 것으로서, 당시에 바쇼와 에쓰진이 대단히 험준한 곳을 동행했다는 사실을 알려주는句라고 할 수 있다. 그리고 당시에 읊었던 다음句, “さらしなや三よさの月見雲もなし”의句는 “사라시나여 삼일 동안의 달밤 구름도 없이”라는 내용으로 바쇼와 에쓰진이 사라시나를 지나가는 동안에 맞이한 보름달을 즐기던 상황을 묘사하고 있으며, 여기에서 볼 수 있듯이 에쓰진의句에는 꾸밈없이 소탈하게 자신의 심경을 묘사하고자 하는 특징이 잘 나타나 있다고 할 수 있다.

月雪や鉢たたき名は甚之丞

越人

猿蓑撰の時、去来曰く「この比、伊丹の句に、弥兵衛とはしれど隣や鉢叩、といふあり。越が句入集いかが侍らん」。

先師曰く「月雪といへるあたり、一句働き見えて、しかも風姿あり。ただに、しれど隣や、といひくだせるとは各別なり。されど、共に鉢叩の俗体を以て趣向を立て、俗名を以て句かざり侍れば、もつとも遠慮あるべし。また、重ねての折もありなん。」となり。 『去來抄』 5)

위의句는 “달밤이나 눈 오는 날의 밤에도 목탁 치는 이는 진노쵸(甚之丞)” 라는 내용이며, 본문의 내용은 “사루미노(『猿蓑』)를 편집 할 때, 교라이가 ‘최근에 이타미의句에 “弥兵衛とはしれど隣や鉢叩”가 있지만, 에쓰진의句를 入集하는 것은 어떨지요’ 라

5) 栗山理一 外 2人(1982) 『日本古典文学全集 連歌論集 能楽論集 俳論集』 小學館 以下同書

고 물었다. 스승이 '달과 눈이라고 표현한 부분은 창의성이 돋보이고 운치도 있다. 이타미의 句처럼 단순하게 “しれど憐や”를 언급하고 있는 것과는 상당한 수준의 차이가 있다. 하지만, 양쪽 모두 목탁 치는 俗人の 모습을 표현하여 句를 전개하고 있고 있기 때문에 이번에는 入集을 보류하는 편이 낫다.' 라고 말씀하셨다. 라는 내용이다. 위의 에쓰진의 句와 이타미(伊丹)의 句가 유사한 소재로 인해 『猿蓑』에는 入集되지는 못했지만, 여기에서 바쇼는 에쓰진의 句의 능력에 대해서 에쓰진의 句를 통해서 구체적으로 언급하면서 상당히 높이 평가하고 있는 것에서 평소의 에쓰진의 하이카이 세계의 특징과 질적인 부분에 대한 바쇼의 평가를 엿볼 수 있는 부분이라고 할 수 있다.

うらやましおもひ切る時猫の恋

越人

先師、伊賀よりこの句を書き贈りて曰く「心に風雅あるもの、一度口にいでずといふ事なし。かれが風流、ここに至りて本性をあらはせり」となり。

これより前、越人、名四方に高く、人のもてはやす発句おほし。しかれども、ここに至りて初めて本性を顕すとはのたまひけり。 『去來抄』

위의 句는 “부럽도다 매몰차게 맺고 끊는 고양이 사랑”이라는 내용이며, 본문의 내용은 “스승님이 이가 우에노에서 句를 보내시고는 말씀하시기를 ‘마음속에 깊은 시심을 가지고 있는 사람은 언젠가는 반드시 그것을 표현하게 된다. 에쓰진의 하이카이는 이 句로 인해서 비로소 자신의 소질을 세상에 알리게 되었다.’ 라고 하셨다. 이전부터 에쓰진의 하이카이는 이미 당시의 하이단에는 널리 이름이 알려져 있었고 사람들의 입에 회자되고 있는 句도 많았다. 하지만 스승님은 이 句에 이르러서야 비로소 에쓰진의 句가 진면목을 보이기 시작했다고 말씀하신 것이다.’ 이것은 어떤 면에서 보면 바쇼가 에쓰진을 이제부터 진정한 자신의 문하생으로서 인정 하겠다는 의미로도 볼 수 있는 것이며, 실로 에쓰진의 句에 대한 극찬을 아끼지 않는 바쇼의 언급이라고 평가할 수 있을 것이다. 하지만 에쓰진에 대한 바쇼의 평가는 결코 긍정적인 평가 일색만은 아니며, 아래의 문장에는 그러한 바쇼의 하이카이관이 잘 나타나 있는 부분이라고 할 수 있다.

君が春蚊屋はもよぎに極りぬ

越人

先師予に語りて曰く「句は落付かざれば真の発句にあらず。越人が句已に落付きたりと見ゆれば、また重み出来たり。

この句、蚊屋はもよぎに極りたるにてたれり。月影・朝朗などと置きて、蚊屋の発句となすべし。その上に、かばらぬ色を君が代に引きかけて歳旦となし侍るゆえ、心おもく、句きれいならず。

汝が句已もに落付く処においてはきづかはず。そこに尻をすゆべからず。」となり。 『去來抄』

위의 句는 “모기장 색깔은 항상 열은 연두색을 사용하듯이 당신도 삶도 변함없이 변성하시길”이라는 내용이다. 본문의 내용은 “스승님이 말씀하시길 ‘句에 안정미가 없으면 진정한 홋쿠라고 할 수 없다. 에쓰진의 句는 이미 안정미를 갖추고 있음에도 불구하고 재차 중복하여 사용하고 있다. 이 句는 ”蚊屋はもよぎに“ 만으로도 충분하다. 句의 앞쪽에 ”月影“와 ”朝朗“를 두고서 ”蚊屋“가 중심이 되는 홋쿠로 함이 타당하다. 그런데 여기에 ”蚊屋はもよぎ“에 ”君が春“를 중복하여 사용하여 歳旦의 句로 만듦으로 인해 마음이 무거워지고 句의 장점도 사라져 버렸다. 교라이 자네의 句도 이미 안정감을 갖추고는 있지만, 句의 새로운 경지를 추구함에 있어서 결코 안주해서는 안 된다’고 말씀하셨다.”라는 의미이다.

위의 문장에서 바쇼는 이미 당시에 에쓰진의 명성이 에도하이단(江戸俳壇)에 널리 알려져 있었음에도 불구하고 그의 句에 나타나 있는 문제점을 지적하고 있다. 이와 같이 바쇼는 에쓰진을 비롯한 자신의 문인의 句에 문제가 있을 때는 명확하게 지적하면서 그들의 하이카이의 발전을 당부하는 스승으로서의 역할을 충실하게 수행하고 있는 것을 볼 수 있다. 그것은 바쇼가 많은 하이진들과의 인간적인 교류는 갖되 그들과의 하이카이에 대한 교류는 엄격하고 냉정하게 유지하고 있었다는 것을 알 수 있는 대목이기도 하다. 이러한 바쇼의 모습은 자신의 수제자인 교라이에게조차도 하이카이의 새로운 경지를 추구함에 있어서 결코 게을리 하지 말 것을 요구하고 있는 점에서도 공과 私를 분명히 하며 자신의 일생의 업인 하이카이의 개혁을 차질 없이 추구하고자 하는 하이진 바쇼의 본연의 모습이라고도 할 수 있다.

아래의 문장은 前述한 오이노코부미기행(『笈の小文』)에 기록되어 있는 바와 같이 바쇼가 자신의 문인인 도코쿠를 방문할 때, 에쓰진과 동행했던 추억을 근거로 해서 1688년의 연말에 쓴 글이다. 바쇼는 전년도인 1687년의 겨울에 에쓰진과 함께 도코쿠를 방문하였고 이듬해인 1688년의 가을에는 에쓰진과 더불어 사라시나기행(『更科紀行』)을 하고서 에도로 돌아갔지만, 에쓰진은 그곳에서 약 두 달간 바쇼와 머물고 함께 지낸 뒤에 다시 그의 거처인 나고야로 돌아오게 된 것이다. 아래의 글은 아마도 그 즈음에 바쇼가 쓴 것으로 추정된다.

越人におくる

尾張の十蔵、越人と号す。越路の人なればなり。栗飯・柴薪のたよりに市中に隠れ、二日つとめて二日遊び、三日つとめて三日あそぶ。性酒をこのみ、酔和する時は平家をうたふ。こ

れ我友なり。

芭蕉

二人見し雪は今年もふりけるか

『庭竈集』 6)

위의 문장은 “오하리(尾張)에 사는 주조(十蔵)라고 하는 사람은 호를 에쓰진이라고 한다. 에쓰지(越路)사람이다. 생활비를 벌고자 시장 주변에 살았지만 이틀 벌어 이틀 놓고, 사흘 벌어 사흘 노는 생활을 한다. 그 사람은 술을 좋아하고 취하면 헤이게비파(平家琵琶)를 노래한다. 이 사람이야 말로 나의 진정한 벗이로다.”라는 내용이다. “二人見し雪は今年もふりけるか”의 句는 “둘이 함께 보았던 눈은 올해도 내릴까”라는 내용으로 작년에 에쓰진과 함께 호비에 도쿄쿠를 만나러 갔을 때, 마침 눈이 와서 에쓰진과 함께 보았던 눈을 그리워하는 바쇼의 심경이 나타나 있는 句이다. 위에서 볼 수 있는 에쓰진의 성격은 현실에 얽매이기 보다는 자유분방하게 자신의 삶을 즐기는 스타일이라고 할 수 있으며, 그러한 에쓰진의 성격에 대해 바쇼는 대단히 만족해하며 자신과 하이카이를 함께 읊으며 즐길 수 있는 진정한 벗이라고 언급하고 있는 것이다. 위의 문장을 통해서 바쇼와 에쓰진의 인간적인 거리가 얼마나 가까웠는가 하는 것을 알 수 있으며, 두 사람의 긴밀한 교류는 하이카이라는 매개체를 통해서 더욱더 신뢰가 깊어져 갔던 것이다.

4. 서간문을 통해서 본 에쓰진

三九 猿雖(推定)宛 【元禄二年閏正月頃筆】俳誌「にひはり」

去年の秋より、心にかゝりておもふ事のみ多ゆへ、却而御無さに成行候。折々同姓方へ御音信被下候よしにて、申伝へこし候。さてさて御なつかしく候。去秋は越人といふしれもの乃木曾路を伴ひ、棧のあやうきいのち捨てのなぐさみがたき所、きぬた・引板の音、しゝを追すたか、あはれも見つくして、御事のみ心におもひ出候。としは明ても猶旅の心ちやまず、(중략)

『芭蕉書簡大成』 8)

위의 문장은 바쇼가 엔쓰이(猿雖)에게 보낸 서간문이지만, 그 속에는 前述한 사라시나기행(『更科紀行』)의 예문에서도 언급한 바와 같이 바쇼가 에쓰진과 더불어 나고야에서 출발

6) 日本俳書大系刊行会(1926)『俳諧大系 蕉門俳諧後集』春秋社

7) 「おくのほそ道」에도 “風流の痴れ者”라는 말이 등장하며, 원래 의미는 바보라는 뜻이지만, 위의 본문에서는 風雅의 멋과 진정한 의미의 풍류를 즐길 줄 아는 사람이라는 의미로 사용하고 있으며, 그 속에는 에쓰진에 대한 바쇼의 깊은 애정이 담겨 있다고 할 수 있다.

8) 今榮藏(2005)『芭蕉書簡大成』角川書店

하여 기소를 지나서 신슈사라시나(信州更科)의 오바쓰테산(姨捨山)에서 달구경을 하고 에도로 돌아 온 기행의 행로를 기록한 사라시나기행의 추억에 관해 언급하고 있는 내용이다. 내용은 “작년 가을부터 여러모로 바빠서 연락을 드리지 못했습니다. 형님에게 선물을 보내 주셨다는 소식을 들었습니다. 가까운 시일 내에 꼭 만나 뵙고 싶습니다. 작년 가을에는 에쓰진이라는 하이카이의 정취를 아는 사람과 동행하여 기소의 길을 다녀왔는데, 그곳은 가케하시라는 곳은 목숨이 위태할 정도로 험한 길이며, 홍두깨질 소리, 새 쫓는 소리, 사슴 쫓는 소리 등 가을의 애환을 담은 소리만이 마음속에 떠오를 뿐입니다. 새해가 왔지만, 다시금 여행길을 나서고자 하는 마음은 그치지 아니하고, (중략)” 위의 문장 중에서도 특히 밑줄 친 부분에서 언급하고 있는 바와 같이 바쇼는 에쓰진을 자신과 더불어 진심으로 하이카이를 논하고 즐길 줄 아는 문인이라고 인정하고 있으며 그러한 연유로 인해 자신의 하이카이의 개혁의 주요 수단이 되었던 기행의 여정에 지목하여 동행하고 있는 모습을 보여 주고 있는 부분이라고 할 수 있는 것이다.

五三 荷兮宛 【元禄三年正月二日付】 「祖翁消息写」所収

越人へ冬申達候。相届可申候。年始無恙哉。歳旦三つ物御家例可為と存候。おましの浦に波枕して、めづらしきとしをむかへ候。

年暮

何に此師走の市に行からず

都の方をながめて

菰を着て誰人みます花の春

撰集抄の昔をおもひ出候まゝ、如此申候。加州より状越候。集あみ候よし申来候。尤当夏あらましに聞届、予があらあらしき哥仙なども一卷残置候。發句少々越人・野水など仰合被遣可被下候。セゼの孫右衛門方より便度々御坐候。拙者わりなき事出来候間、又伊賀へ立帰候。氣遣なる事にては無御坐候。四国の山ぶみ、つくしの船路、いまだ心不定候。以上

正月二日

ばせを

荷兮様

『芭蕉書簡大成』

위의 서간문은 바쇼가 나고야의 대표적인 쇼몽의 문인인 가케이에게 신년인사를 겸해서 자신의 신년 작품(歳旦吟)을 알림과 동시에, 가가가나자와(加賀金沢)의 호쿠시(北枝)가 하이카이집을 편집 중이며 거기에 入集할 句에 대한 소개를 호쿠시로부터 부탁받았다는 것을 가케이에게 알리면서 위의 문장의 밑줄 친 부분에서는 에쓰진과 야스이(野水)라고 이름까지 언급하며 동향인 나고야의 문인의 작품을 알선하여 호쿠시에게 보내도록 전달하고 있는 내용이 주를 이루고 있다. 이러한 연유로 인해서 나고야 출신의 문인인 에쓰진과 가케이, 그리고 야스이의 句가 호쿠시의 우타쓰슈(『卯辰集』)에 실리게 된 것이다. 이와 같이 바쇼는

자신이 아끼던 에쓰진의 句가 널리 세상에 알려 질 수 있도록 여러모로 배려하고 있었다는 것을 볼 수 있으며 이것은 마쇼가 그만큼 에쓰진의 하이카이를 굳게 신뢰하고 있었다는 것을 간접적으로 증명해 주는 자료라고 할 수 있는 것이다.

御手簡忝、殊ニ御祝儀被掛尊意被下、忝拜受仕候。集料之儀成程金子貳兩御取贄へ、其段慥ニ覺罷有候。書付之儀ハ八月仕置候へ共、大坂へ御座被成候間不進候。御取贄へ候ても、書付ハ御目に掛可申儀ニ御座候間、今度歳旦句料之次手ニ掛御目申候。細ケ成儀進上仕儀も、又自然少々被下候儀御座候共、重而之儀ニ可被遊候。其元様にハ大キ成中へさして出入の無御座候御さん用也。我等も今ニ点など少々候て、殊ニ算用向の儀不調法ニ御座候へバ、来春日永ニ成可仕候。金子御取替へハ貳兩慥ニ覺へ御座候間、左様御心得可被遊候。もはや来春と申ても芦垣の間近キ事ニ御座候間目出度、貴面頓首々々。尚々御尊父様へも乍慮外御一伝申上候。以上

十二月廿七日

問景公
貴報

越人
『芭蕉と蕉門門人』⁹⁾

위의 서간문의 내용은 다음과 같다. “먼저 選集의 출판 비용을 보내 주신 것에 감사드립니다. 출판을 위해 두량(二兩)을 선불로 대신 지불해 주셔서 고맙고, 용처에 대해서는 차후에 알려 드리겠습니다. 차용증서는 8월에 오사카에서 만날 때 드리겠습니다. 이번엔 신년집(歳旦帳)을 출간 할 때 句料를 받으면 드리겠습니다. 당신에게는 얼마 안 되는 액수이겠지만, 저에게는 거금입니다. 저는 点料¹⁰⁾로 약간의 수입이 있습니다만, 갚아야 할 금액이 큰 액수이기에 내년 봄이나 되어야 갚을 수 있을 것입니다. 하지만, 빌린 두량은 절대 잊지 않겠으니, 양해 바랍니다. 내년 봄이라고는 하지만 얼마 남지 않았으니 기다려 주시기를 부탁드리겠습니다. 그럼 아버님께도 안부 부탁드립니다.”위의 서간을 통해서는 당시에 왕성하게 하이카이에 몰두하고 있던 에쓰진이 새롭게 출판물을 간행하려고 했지만, 경제적으로 빈궁한 생활을 하고 있었기에 돈을 지인으로부터 빌렸던 일을 중심으로 기록하고 있다. 에쓰진은 비록 위의 서간을 보낼 당시에는 경제적으로 여유가 없어서 빌린 돈을 즉시 갚을 수는 없지만, 조만간 부족한 자신의 수입을 부지런히 모아서 반드시 갚겠다고 전하고 있다. 여기에서 볼 수 있는 에쓰진의 모습은 너무나도 인간적이면서도, 밝고 소탈하며 꾸밈이 없는 성격이며 그러한 그의 솔직담백한 성격은 그의 하이카이 작품 속에도 그대로 반영되어 나타나고 있다고 할 수 있다.

9) 大磯義雄(1997) 『芭蕉と蕉門門人』 八木書店

10) 하이카이에서 점자(点者 : 句의 우열을 판정하여 점수를 매기는 사람)가 받는 보수. 新村出(2009) 『広辞苑』 岩波書店

5. 結 論

하이카이시 에쓰진은 인간적인 면에 있어서는 의리가 있고 정감이 가는 인물임에는 틀림이 없으며, 하이카이에 대한 열정 또한 결코 누구에게도 뒤지지 않을 만큼의 애착과 실력을 갖춘 인물이라고 할 수 있다. 특히 서간문에 나타나 그의 인성은 성실하기 그지없는 성품이며, 타인으로부터의 부탁을 결코 거절하지 않고 자신의 수고를 마다않고 돕기를 자처하는 실로 정감이 가는 인간성의 소유자라고 평가 할 수 있다. 바쇼와의 관계에 있어서도 오랜 기간 동안 교류를 지속했음에도 불구하고 얼굴을 붉히거나 상대방을 불편하게 하는 일을 삼가는 태도를 보이고 있으며 바쇼가 부르면 어디든지 한달음에 달려가서 시중을 들며 함께 하이카이를 통해 교류를 하곤 했던 것이다.

하지만, 나고야를 중심으로 활동했던 그의 활동영역의 한계성과 자신의 하이카이에 대한 과도한 애착으로 인한 주변 문인들과의 교류의 단절이 가져온 대중성의 결여 등이 그의 하이카이의 발전에 저해를 초래하는 결과를 낳고 말았던 것이다. 이지적이고 고전적인 그의 작품의 경향은 후에는 도덕적이고 교훈적인 성격으로 변해 갔지만, 당시의 하이단의 변화는 그러한 에쓰진의 하이카이의 특징을 결코 수용하지 않았던 것이다. 특히 에도하이단(江戸俳壇)을 중심으로 하는 당시의 하이단의 변화는 많은 수요자의 요구와 시대의 변화상이 민감하게 句에 반영되어 나타나고 있었기 때문에 그러한 시대의 흐름에 역행하는 자세를 취한 에쓰진의 하이카이는 쇠퇴의 일로를 걸을 수밖에 없었던 것이다. 하이카이는 “座의 文學”이라는 특성상 많은 사람들의 교류를 통해서 성장하고 발전하며 정제되어가는 특징을 가지고 있지만, 에쓰진은 그러한 하이카이의 생리를 충분히 숙지하고 있었으면서도 자신의 하이카이에 대한 지나친 애착으로 인해서 스스로 하이카이시의 행로에 커다란 장애물을 만들어 버리고 만 것이라고 할 수 있다. 이러한 에쓰진의 하이카이에 대한 태도는 에쓰진에게 문인으로서나 인간적으로 대단한 애착을 가지고 있던 바쇼에게도 커다란 실망을 안겨다 주었던 것이고, 줄곧 자신과 동행하며 하이카이의 길에 매진하고자 노력했던 바쇼조차도 에쓰진이 가지고 있던 하이카이에 대한 편향적인 시각으로 인해 학문적으로는 소원한 관계로 변해갔으며 그것은 바쇼를 중심으로 한 쇼몽하이카이의 중심축의 이동에서도 확인할 수 있었던 것이다. 결국 쇼몽하이카이의 초기에 한 축을 이루며 활발하게 활동하던 에쓰진은 시대의 변화에 적극적으로 대응하지 못했던 것으로 인해 점차적으로 하이단에서 자신의 이름이 잊혀져가는 상황을 만들고 말았던 것이다. 비록 그 후에도 바쇼와의 인간적인 관계는 지속되었다고 할지라도 학문적으로는 바쇼는 물론이고 쇼몽하이카이의 문인들과도 더 이상 깊게 교류하지 못하고 단절되는 결과를 맞을 수밖에 없었던 문인이라고 평가할 수 있을 것이다.

◀ 參考文獻 ▶

허 곤(2002) 『芭蕉と莊子とのかかわりー思想世界に於ける影響關係を中心としてー』 日本中央大學大學院 博士學位論文

- 麻生磯次(1976) 『若き芭蕉』 新潮社
井本農一 外 2人(1982) 『日本古典文学全集 松尾芭蕉集』 小學館
大磯義雄(1997) 『芭蕉と蕉門門人』 八木書店
角川源義(1969) 『芭蕉の本4発想と表現』 角川書店
栗山理一外 2人(1982) 『日本古典文学全集 連歌論集 能楽論集 俳論集』 小學館
今榮藏(1953) 「談林俳諧覺書- 寓言説の源流と文學史的實態-」 『國語國文研究』
今榮藏(2005) 『芭蕉書簡大成』 角川書店
志田義秀(1938) 『問題の点を主としたる芭蕉の伝記の研究』 . 河出書房. 디지털화(2008,1)
杉浦正一郎(1958) 『芭蕉研究』 岩波書店
田中善信(1998) 『芭蕉の二つの顔』 講談社
新村出(2009) 『広辞苑』 岩波書店
日本俳書大系刊行会(1926) 『俳諧大系 蕉門俳諧後集』 春秋社
広末保(1967) 『芭蕉 その旅と俳諧』 日本放送出版協会
広田二郎(1968) 『芭蕉の芸術 その展開と背景』 有精堂
堀切実(1998) 『芭蕉の音風景』 페리칸社
堀切実(1998) 「芭蕉の笑い、一茶の笑い」 『国文学 解釈と鑑賞』
松尾靖秋(1985) 『近世文学論攷 研究と資料』 桜楓社
村松友次(1977) 『芭蕉の作品と伝記の研究』 笠間書院
宮西一積(1973) 『芭蕉の文学』 桜楓社

■ 투 고 : 2012. 11. 30.

■ 심 사 : 2012. 12. 15.

■ 심사완료 : 2013. 01. 15.

일본에 있어서 미군점령기의 문화정책

구 건 서*
kskoo@ptu.ac.kr

<要 旨>

本稿の目的は米軍占領期の日本でGHQによって行われた文化政策の特徴について考察することにある。そのために日本の文化政策に大きな影響を及ぼした占領政策と実際に行われた文化政策の実態を把握することを行う。この作業によって、米軍占領期における日本文化政策の基本的な枠組みの特徴や限界を提示すると共に、それ以降の時期に日本が行った文化政策との連繋性を論ずる手掛かりを得ることもできる。結論として、戦後日本においてGHQによって行われた文化政策の特徴は次の通りである。一番目に、文化政策が文化的観点や目的よりも政治的観点や意図によって遂行されたことである。文化政策は米国の支配概念である民主主義、自由主義、反共主義等を植え付ける目的の延長線で推進された。二番目に、米国文化を日本に強制的に移植させるとも言うべき文化移植政策の性格が色濃く現れている。三番目に、伝統的日本文化を排斥するという次元で推進された。西欧文化や米国文化の持つ肯定的な要素や真正性が歪曲されたり、もしくは悪用されたりしたことで、その副作用もまた、多様な形で現れた。四番目に、GHQによる文化政策は日米講和条約以降、日本文化論や日本文化政策の基盤あるいは土台となった。しかし、そのような文化政策がそれ以降の時期における日本文化論や日本文化政策にいかなる形で影響を及ぼしたのかという問題は、今後残された課題である。

キーワード：日本占領政策、文化政策の特徴、民主主義、自由主義、反共主義

I. 머리글

전후일본은 전쟁에서의 패배로 인하여 지배하는 국가에서 지배당하는 국가로 전락하게 되어 국가나 사회의 재건이념이나 방향을 세워 추진하는데 연합국군최고사령관사령부(SCAP)와 GHQ(General Headquarters)의 정책에 따라 제한되거나 강제되는 과정을 겪게 된다. 그것은 구체적으로 일본개조정책과 냉전정책으로 나타났다. 특히 미군정이 시작되는 가운데 GHQ산하의 민간정보교육국(CIE: Civil Information and Educational Section: 民間情報教育局)은 문화정책을 추진하는 과정에서 문부성의 협력을 받아 교육계몽용의 영화 상영을 시작으로 정치, 경제, 사회, 문화, 교육, 예술, 언론, 성, 스포츠, 노동 등의 영역에 미국형의 자유민주주의, 문화주의, 반공주의 등을 보급시키는 포괄적인 문화정책을 추진하였다¹⁾.

미군정이 주도하는 시대성에 기초해서 추진된 미군점령기 문화정책은 GHQ의 문화정책, 일본정부와 민간예술단체의 문화정책 등으로 크게 구분할 수 있다. 미군정에 의한 문화정책은 친미국적이며 반군사적이며 반공산주의적인 방향으로 추진되었고, 일본은 전시중의

* 平沢大学校 日本学科教授

1) 竹前栄治・中村隆英 監修, 1996-2000, 『GHQ日本占領史』全55巻・別巻1, 日本図書センター; 正村公宏, 1990, 『戦後史』(上), 筑摩書房, pp.46-47; 竹前栄治, 1983, 『GHQ』, 岩波新書; 구건서, 2007, 『일본영화와 시대성』, 제이앤씨, pp.221-307; 구건서, 2011, 『일본애니메이션과 사상』, 제이앤씨, 166-237; 文化庁, 1978, 『文化行政の歩み』, 文化庁

문화통제에 대한 반성으로 국가의 문화에 대한 관여를 배제하는 방향으로 추진되었다. 그러나 점령기 문화정책은 일본의 자율적인 의지보다는 미군정의 정책과 이념에 의해 추진되게 된다. 그런 가운데 문화정책은 전전 문화정책의 시정, 미국문화이식정책, 냉전문화정책, 종교 및 교육정책, 사회 및 언론출판정책, 레드파시정책, 친전쟁성향지식인추방정책, 예술제 및 예술상활성화정책, 문화재보호정책 등 다양한 모습으로 나타났다.

그처럼 미국이 주도하는 시대성에 기초해서 추진된 문화정책은 당시 일본문화정책의 근간이 되었다는 점에서, 미일강화이후 일본이 추구하는 문화정책의 토대가 되었을 뿐 아니라 방향성을 규정하였다는 점에서, 그리고 그 이후 유행했던 일본문화론의 촉발배경이 되었다는 점에서 고찰할 필요가 있다. 따라서 본고는 GHQ의 일본점령기에 추진된 문화정책의 특징에 대해서 고찰하고자 한다. 그런 목적을 달성하기 위해서 미군점령기 일본문화정책에 영향을 준 일본점령정책과 문화정책의 실태를 중심으로 고찰한다. 그런 작업은 점령기 일본문화정책의 기본적인 특징과 한계를 고찰할 뿐 아니라 이후 일본의 문화정책과의 연계성을 알 수 있는 실마리가 된다는데 가치가 있다.

II. 미군점령기의 일본점령정책

1. GHQ의 일본점령정책

GHQ의 점령정책은 일본의 국운을 좌우하였다는 데 역사적인 의미가 있다. GHQ가 일본 점령정책을 추진하기에 앞서 미국정부는 육군수뇌부 및 맥아더, 중국전문가집단, 뉴딜정책 관료 및 전문가집단 등으로 구분하여 대일정책의 방향을 결정하였다. 육군수뇌부와 맥아더 참모들은 일본군의 저항을 경험한 것을 토대로 일본 군국주의의 재흥을 무력화시키기 위한 정책에 몰두하였다. 동시에 그들은 반공주의의 전략을 위해 일본을 이용해야할 때 점령방침의 변경을 하지 않을 수 없었다. 민간전문가로 구성된 중국연구자들은 항일운동을 전개한 중국의 입장을 지지하고 일본의 비군사화와 민주화를 강하게 주장하였다. 그리고 뉴딜정책 관료 및 전문가집단은 1930년대 루즈벨트 정권의 기초가 된 뉴딜정책을 추진한 개혁 관료와 전문가들로 일본구체제의 타파와 민주적 개혁을 추진하는데 집중하였다.

일본점령방식은 연합국군최고사령관사령부에 의한 간접통치의 형식을 취하였고, 점령정책은 연합국군최고사령관사령부의 지시와 명령을 받아 일본정부가 실시하였다. 실질적인 점령정책입안자는 최대인원을 파견하고 사령관직을 가진 미국이었다²⁾. 그리고 일본에 대한 실질적인 점령정책내용은 미국정부가 구상한 「항복 후 미국의 초기대일방침」(降伏後における米国の初期の対日方針)에 기초하고 있다. 거기에는 일본국이 다시 미국의 위협이 되지 않게 하고 또한 세계의 평화 및 안전을 위협하지 않게 확실하게 하는 것, 그리고 타 국가

2) 竹前榮治·中村隆英 監修, 1996-2000, 『GHQ日本占領史』全55卷·別卷1, 日本図書センター

의 권리를 존중하고 국제연합헌장의 이상을 원칙으로 표현한 미국의 목적을 지지할 것, 책임 있는 평화적 정부를 궁극적으로 수립하는 것 등이 담겨져 있다. 다른 하나는 1945년 11월 1일 결정되어 11월 3일 맥아더에게 전달된 「일본점령 및 관리를 위한 초기의 기본지령」(日本占領及管理のための初期の基本的指令)이다³⁾.

GHQ의 일본점령정책은 크게 나누면, 점령정책방향, 전쟁범죄 및 공직추방정책, 비군사화정책, 민주화 및 농지개혁정책, 비공산화와 재군비정책, 문화정책 등으로 구분할 수 있다. <표1>은 GHQ의 일본점령정책의 기본내용을 정리한 것이다.

<표1> GHQ의 일본점령정책

정책	내용
점령정책방향	일본점령의 목표는 미국에 위협이 되는 일본의 군사력을 해체하고, 군국주의를 폐지하여 미국에 협력하는 국가로 만드는 데 있다. 맥아더는 그것을 ‘위로부터의 혁명’(上からの革命)이라고 하였고, 구체적으로는 전쟁범죄처벌, 공직추방, 비군사화, 민주화, 농지개혁, 비공산화 및 재군비, 문화정책 등을 골자로 하는 정책이었다. 그런 정책은 당시 GHQ의 주도권을 쥐고 있던 민간정보교육국이 추진하였지만, 국제사회에서 미소간의 냉전이 본격화되면서 참모1부로 주도권이 넘어가 레드파지(レッドパージ)에 기초한 냉정정책이 강하게 추진되었다.
전쟁범죄 및 공직추방정책	연합국군은 점령 직후 일본의 전쟁지도자를 검거하여 처벌하였다. 그 정책에 의해 도조 히데키(東條英機) 전 수상을 포함한 10명을 체포하고, A급전범으로서 극동국제군사법정에서 판결을 받아 도조 등 7명이 교수형을 당하고 다수는 금고형에 처하게 되었다. 그리고 전시 중 일본군에 협력적이었던 정치가, 사상가 등을 추방하였다.
비군사화정책	연합국군은 일본전국의 군사시설에 진주하고 일본군의 무장해체를 하는 비군사화정책을 추진하고, 사용가능한 무기류는 회수하고, 군사시설은 점령정책의 기관으로 이용하였다. 또한 국민권리와 기본적인 인권존중에 기초한 민주주의, 전쟁포기를 규정하는 일본국헌법, 천황 및 황실의 신성성의 제거, 국가신도의 폐지, 군국주의교육폐지, 메이지 국가사상의 해체 등을 단행하였다.
민주화정책	연합국군은 정치, 경제, 사회 영역에서의 민주화를 통해 민주국가를 구축하는 민주화정책을 추진하였다. 그것을 추진하는 과정에서는 부인참정권, 노동조합법제정, 교육제도개혁, 압정적인 법제도 폐지, 경제의 민주화 등 5대개혁지령을 발하였다. 그리고 전시 중 처벌된 정치범을 석방하였고, 지방자치법이 제정되어 도도부현 지사는 선거로 선출되었고, 지방분권이 이루어졌다. 경제영역에서는 경제민주화를 위해 미쓰이(三井), 미쓰비시(三菱), 스미토모(住友), 야스다(安田) 등 4대제벌을 해체하였고, 군병기관련기업을 해체하는 한편 농지개혁을 추진하였다.
비공산화와 냉전정책	연합국군은 일본의 비공산화정책을 추진하여, 일본열도를 반공의 방파제로 하고, 공산주의자를 추방하였다. 그러나 국내경제의 붕괴로 인한 사회주의와 노동운동의 유행, 미국과 영국 등 자본주의 국가와 소련 등 공산주의 국가의 대립으로 인한 냉전격화 등으로 공산당세력의 확대에 위기감을 느껴 냉정정책과 재군비정책이 추진되었다. 일본군내의 군사적 공백을 매우기 위한 경찰예비대의 창설과 해상보안청의 강화 등 이른바 역코스(逆コース)정책이 추진되었다.
문화정책	미군점령기 문화정책을 기안하고 실천한 주체는 GHQ이지만 그 산하기관으로 문화정책을 장악하여 추진한 기관 CIE는 4만 7위위원회로 구성되었고, 교육정책, 종교정책, 언론 및 출판책 등을 담당하였고, 신도지령에 의한 정교분리, 프레스 코드 및 라디오 코드 제정, 출판(신문, 잡지, 도서), 방송, 영화, 연극 등 대중미디어의 비군사화와 민주화를 추진하였다. 그리고 교육의 자유화와 민주화, 영화필름의 대출을 통한 미국문화의 소개 등에 큰 역할을 하였다.

자료 : 竹前栄治・中村隆英 監修, 1996-2000; GHQ/SCAP Records, Civil Information and Education Section (CIE), 国立国会図書館; 竹前栄治, 1983, 『GHQ』, 岩波新書; 住本利男, 1965, 『占領秘録』, 毎日新聞社; 日本學術振興會編, 1972, 『日本占領文獻目録』, 日本學術振興會

당시 GHQ의 대일점령정책은 정치, 경제, 사회, 문화 등 전 영역에 걸쳐 추진되어 많은 영향을 미쳤다. 그런 정책의 기본적인 방향과 실행은 GHQ의 지령이나 명령, 법 및 조례제정, 일본국헌법 제정 등을 통해서 하였다. 특히 맥아더와 GHQ는 표면적으로 일본국헌법을 일본의 자주적인 선택이며, 평화, 민주주의, 자유 등을 주장한 헌법을 일본국민이 선택한 것을 환영한다는 태도를 견지하였다. 그 헌법에서는 상징천황제, 전쟁포기와 비무장선언, 인권과 자유의 이념 확립, 사회적 권리의 보장으로 건강한 문화적 최저한도의 생활을 영위할 권리, 선거법개정, 주민직접선거 의해 지방자치단체의 장을 선출하는 지방자치법, 교육개혁 등이 중요시되었다. 그러나 국제사회에서 미국이나 영국 등 자유주의진영과 소련 등의 사회주의 진영 간에 주도권을 둘러싼 냉전경쟁이 심해지고 동시에 비무장을 국시로 했던 일본정책은 역코스정책으로 전환되어 각 사회영역에 새로운 변화를 가져오게 된다.

2. GHQ의 시대성 점령정책

미군점령기 일본에 있어서 GHQ의 시대성 점령정책은 민주주의, 문화주의, 냉전주의 등에 기초하였다. 미국, 영국, 중국, 소련 등은 일본의 제국주의를 극복하는 기본이념으로 민주주의를 규정하였다. 그 특징을 보면 다음과 같다. 첫째는 시대성으로의 민주주의이다. 점령기 하의 일본은 최고의 원리와 사상의 적자로서 민주주의를 자의적·타의적으로 실천하였다. 민주국가화의 근거는 항복후의 대일정책이 함축된 포츠담 선언에 기초하고 있다. 포츠담 선언 제5조 이하에는 일본에 있어서 군국주의의 일소, 완전한 무장해제와 평화적이며 생산적인 생활로의 복귀, 전쟁범죄인처벌, 민주주의의 부활강화, 자유 및 기본적 인권의 확립 등이 규정되어 있다. 또한 경제영역에서는 경제를 지지하고 또한 공정한 실물배상이 가능한 산업과 그것을 위한 원자재수입허용, 장래에 있어서 세계무역관계에 대한 참가허가 등을 추진하였지만 전쟁을 가능하게 하는 산업이 허용하지 않는 것을 원칙으로 하였다⁴⁾. 것처럼 포츠담선언은 일본의 비군사화, 비군국주의화, 민주화, 자유화, 비제국주의화, 평화경제화 등을 추진하는데 있어 시대성으로서 민주주의에 기초하고 있다. 일본의 민주주의질서화는 민주일본의 탄생을 목적으로 한 민주정치, 민주경제, 민주사회, 그리고 민주문화 등의 달성을 의미한다.

둘째는 시대성으로서의 문화주의이다. 일본은 포츠담선언의 수락과 함께 문화국가로서의 길을 걷게 된다. GHQ의 문화정책에 영향을 받은 전후 일본에서 문화국가라는 개념은 국회에서 언급되었다. 문화국가는 문화주의에 기초한 민주문화의 실현과 민주주의를 담당할 국민의 인격형성 및 육성을 통한 교육문화의 실현, 순수한 예술문화의 신장 등에 의해서 구축되는 것을 의미한다. 그것은 국가에 의한 문화청의 신설과 관련된 문화정책으로 귀결된다. 문화국가를 구축하는데 기초적인 토대가 되는 민주문화에 대한 언급은 1947년 가타야마(片山哲)내각총리대신에 의한 중의원본회의 시정방침연설에서 ‘민주주의는 문화의 향상을

4) 升味準之輔, 1983, 『戦後政治 1945—55年』, 東京大学出版会

추구하는 것' 이라는 데서 출발한다. 그리고 문화국가건설을 위해서 교육문제를 중시하는 뜻을 1947년 10월 19일 답변에서 표명하였다. 또한 모리도(森戸辰男)문부대신은 문화국가를 언급하면서 문화비가 국비의 최대부분을 점유할 때 달성되고, 교육개혁이 문화국가로 발전하기 위해서 필요한 것이라는 인식을 하였다⁵⁾. 그런 일본정부가 구축하려는 문화국가는 민주문화와 교육문화에 기초한 것이다.

셋째는 시대성으로서의 반공주의이다. 전후 일본에서 재건된 공산주의운동은 파괴와 공멸에 놓인 민중의 항의와 권리주장을 하는 가장 강력한 목소리와 힘으로 작용하였다. 그러나 공산주의운동은 충돌이나 갈등을 일으켜 얼마 되지 않은 자유민주주의운동을 심각하게 방해하는 요인으로 작용하였다. 그런 이유로 일본정부를 강제로 움직여 공산주의자들을 해방시켰던 미군점령군은 공산주의운동을 주도적으로 억압하고 봉쇄하는 정책을 추진하게 된다. 그런 흐름은 일본에서 미국이 주도하는 반공주의로 나타났다. 미국의 반공주의는 국제사회에서 반소련주의 및 반중국주의, 반사회주의, 반노동쟁의운동, 냉전문화정책 등을 추진하게 하는 원인이 되었다. 또한 미국이 점령정책의 최고 목적으로 했던 일본의 비군국주의화 및 비군사화정책과 방침이 변경되는 원인이 되었다.

III. 미군점령기 문화정책의 특징

1. 미군점령기의 예술정책

미군점령기 민주적인 예술정책을 추진하기 위해서 전시 중 예술문화의 창조, 비평활동 등에 엄격하게 적용하고 제약을 가하는 법적 근거가 되었던 치안유지법, 출판법, 신문지법, 영화법 등을 폐지하였고, 문화지도라는 이름하에 이루어 졌던 문화통제, 문화간섭 등을 배제하였다. 미군점령기의 예술정책은 연극 및 춤, 연극, 음악, 미술 및 패션, 예술진흥정책 등의 영역에서 나타났다. <표5>는 점령기의 예술정책을 소개한 것이다.

<표5> 미군점령기의 예술정책

구분	예술문화정책 내용
연극 춤 정책	GHQ 다카라쓰카(寶塚)극장접수, GHQ 민간교육정보국 민주주의연극의 확립시사, GHQ 민간교육정보국 연극반의 중개로 미국현대작품약 60여편 상유허가, 오사카 댄스영업허가, 동결발레단결성, 동경자립극 협의회결성, 배우좌문학좌·동예 등의 신극단 합동공연, 쇼치쿠가극단 재발족 및 전후제1회공연, 배우좌제1회공연, 신연극인협회결성, 교토좌 누드쇼'비너스탄생'개연, 신주쿠무량무즈재개, 국립극장설립준비기관으로서 연극문화위원회발족, 민주예술극장제1회공연, 무대예술학원개교식, 배우좌 연극연구소창립, 미쓰코시극장현대1회공연, 제국제1회뮤지컬공연, 일보최초원형극장시연, 가부키전면상영금지해제 카나데혼추신쿠라(仮名手本忠臣蔵)동경극장상연, 신주쿠가부키 거리조성

5) 大森實、1975, 『戦後秘史』(4), 講談社; 竹前榮治・中村隆英 監修, 1996-2000, 『GHQ日本占領史』全55巻・別巻1, 日本図書センター

음악 정책	일향(日響)정기연주회, NHK가요곡 및 경음악 방송재개, NHK홍백음악시합, 일본음악문화협회해산, 일본음악연맹결성, 노래사랑음악회, 다카자키(高崎)오케스트라발족, 일본합창연맹결성, 라디오가요방송개시, 칸사이교향악단제1회연주회, 도호교향악제1회정기공연, NHK노도지만(노래자랑)전국콩쿠르우승대회, 미소라히바리 요코하마극장데뷔, 일본최초 코로무비 LP레코드발매, 도쿄교향악단연주회, 미국제즈유행, 섹스 등을 노래한 가집 비장(秘帳)발간, 뮤지컬 나비부인공연
미술 패션 서도 정책	GHQ 전쟁기록 그림접수, 대일본미술보국회해체, 행동미술협회결성, 제1회일본미술전, 직장미술협의회결성, 현대미술전, 일본디자인클럽결성, 전국패션쇼개최, 정부소장의 작품근대미술전시작, 제1회전일본서도전, 미술사학회결성, 마루키(丸木位里)연작 원폭그림전시, 제1회수작미술전시회, 일본사진가협회결성, 샌프란시스코 일본고고미술 및 국보미술품전시, 현대프랑스미술전, 브리지스톤미술관개관, 하코네 미술관개관, 도쿄국립근대미술과개관, 근대제1회미술전개최
예술 진흥 정책	일본문화인연맹발기인회, 제1회예술제개최(문부성예술과주최), 제국예술원을 일본예술원으로 이름변경, 일본예술원상(6인수상), 제1회마이니치연극상, 제1회전일본합창콩쿠르, 제19회음악콩쿠르, 전국창가라디오콩쿠르

자료 : 神田文人, 2005, 『戦後史年表』, 小学館 ; 安江良介, 1991, 『近代日本総合年表』, 岩波書店

<표5>에서처럼 점령기의 예술문화정책은 미국현대 예술작품을 수입하는 정책을 포함하고 있는 한편, 제한적이거나 전통적인 예술문화와 근대적인 예술문화의 진흥과 다양한 예술인을 지원하였다. 구체적으로 예술문화의 활성화를 실현하기 위해서 1947년 국회법으로 상임위원회제도에서 문교위원회와 병행해서 문화위원회를 설치하였다. 문화위원회에서는 국가의 행사, 예술, 국보, 주요미술품, 사적, 음악, 영화, 연극, 신문, 잡지, 그 이외의 저작물, 라디오방송, 국민오락, 박물관, 도서관, 관광사업, 그 이외의 문화 사업에 관한 사항을 폭넓은 분야를 소관대상으로 하였다. 예술을 진흥시키기 위해서 예술진흥정책과 예술상정책이 추진되었다. 문부성은 사회교육국산하에 예술과를 설치하여 예술 활동을 지원하였다. 그리고 반전전주의, 반문화통제주의 등에 기초한 문화국가의 이념실현을 위해서 1946년부터 문부성의 주창으로 예술제를 개최하였고, 무대예술에 대해서 국가가 적극적으로 관여하였다. 그리고 민간수준에서 예술단체의 정비와 활동이 활성화되었다. 예들 들면, 사단법인일전(日展)은 기존의 국가가 관여한 문부성미술전람회를 국가가 관여하지 않도록 한 사단법인일전으로 변경하여 자주적으로 운영되었다. 그리고 정부와 민간수준에서 문화훈장, 문화예술상, 표창제도, 콩쿠르 등이 활성화되었다. 문화훈장제도는 1951년 설치된 문화공로자제도와 보조를 맞춰 운영되었다. 그런 가운데 맥아더는 한국전쟁발발이후 일본공산당을 비합법화하고 예술문화영역 전반에 걸쳐 레드파지정책을 추진하였다.

2. 미군점령기의 종교·교육·학문정책

미군점령기의 종교·교육·학문정책은 전통신앙배제와 종교적 자유를 규정하는 종교정책, 그리고 일본역사교육이나 민주화교육을 골자로 하는 교육정책, 그리고 학술기관의 학문과 문학의 활성화를 위한 정책 등으로 추진되었다. <표6>은 점령기의 종교·교육·학문정책을 소개한 것이다.

<표6> 미군점령기의 종교·교육·학문정책

구분	종교·교육·학문정책 내용
종교 정책	GHQ 국가신도등 종교와 정치분리통달, GHQ국가신도에 대한 정부의 보증, 홍보등폐지에 관한 각서, 천황황후 메이지신궁참배허용, 야스쿠니신사참배허용
교육 정책	GHQ 수신·일본역사 및 지리의 수업정지와 교과서회수에 관한 각서교부, 전학교 지리수업재개허용, 교육칙어봉독폐지, 공민교육실시통달, 천황신격화부인, 신교육지침, 교육기본법공포, 학교에서 천황폐하 만세정지 통달, 제국대학명칭폐지, 학습지도요령, 조선인학교 설립불허가, PTA의 결성축진(50년전국 98%결성함), 교원레드파지시작(1700여명추방), CIE고문 이루즈 니가타대에서 ‘공산주의교수추방’강연, 조선총련계조선인학교93교폐쇄, 각의 상용한자자체표발표, 신제국립대학69교 도도부현에 설치, 교과용 도서검정기준정합, 국립학교설치법, 국가행정조직법에 따라 문부성설치, 문부성설치법(행정권한이행, 지도조언기관), 사회교육법 포, 문교심의회 제1회회의, 수상 교육칙어를 대체하는 ‘교육선언’의 작성 자문, 전국고교53개교에 직업과설치, 구주대학 적색교수에 대한 사직권고, 도야마 및 니가타등 대학에서 동취지 권고, 일본도서관협의회 우량도서 추천실시, 문부성군경교육위원회‘순결교육기본요령’발표, 도쿄도교육청 적색교원246명 퇴직권고(일부소학교반대태도), 학교축일에 히노마루게제 및 기미가요제창 통달, 동경대학생공산당세포(細胞)금지, 공산당 동경대세포 및 와세다대세포의 해산지령, 8대도시 소학교 빨간전급식실시발표, 전국교육장회에서 수신교육부활 및 국민실천요령의 필요성 표명, 어린용 에로구로(エログロ)책·가미시바이·장난감·아동도서추방, 남녀교제의 예의발간, 순결교육심의위원회 결성, 도덕교육진흥방책을 발표, 개국백년기념문화사업회창립결정메이지문화사와 일미교섭사편찬, 제1차교직원 추방해제자 298명발표, 학습지도요령일반편 시안(중학교에 일본역사부활)
학문 문화 정책	동경대 사회과학연구소 설치, 일본사 수업개시, 민주주의과학자협회, 주체성론시작, 일교조 ‘교육백서’ 발표, 부락문제연구소설립(교토), 고등학교용국정교과서 ‘민주주의’발행, 일본정치학회설립, 일본학술회의, 국립국어연구소설치, 유카와 노벨물리학상수상, 일본문예가협회재건, 아동문학자협회, 육체문학유행, 에로 카스토리잡지(리베라루, 로만스)법람, 전후최초 아쿠다와상 및 나오키상발표, 가와바타 야스나리 ‘산의 소리’발표, 제1회요미우리문학상발표

자료 : 神田文人, 2005, 『戦後史年表』, 小学館 ; 安江良介, 1991, 『近代日本総合年表』, 岩波書店

미군점령기 GHQ는 정치적, 민사적, 종교적 자유에 대한 제한을 철폐하기 위해 10월 4일 「정치경찰폐지에 관한 각서」(政治警察廢止に関する覚書)를 일본정부에 전달하였다. 그 내용에는 천황 및 황실에 관한 자유로운 토론을 포함한 사상, 종교, 집회, 언론의 자유를 보장할 것, 치안유지법을 포함한 자유를 박탈하는 일련의 법률, 칙령, 성령, 명령, 규칙 등을 폐하고 즉시 정지할 것, 그런 법에 의해 구속된 사람들을 석방할 것, 비밀경찰이나 언론통제기관등을 일체 폐지할 것, 내무대신·경찰관계수뇌부·전국의 사상경찰 및 탄압활동에 관여한 관리를 파면할 것 등이 포함되어 있다. 종교정책으로는 정치와 종교를 분리하는 정교분리정책과 종교의 자유화정책이 추진하였다. 그리고 교육의 민주화에 기초한 교육개혁 정책으로서 교육제도의 개혁, 자유교육, 교육의 지방분권, 633제, 교과서의 민주적 개편, 국어개혁(로마자화), 남녀공학제, 학교교육법, 교육관련법령, 교육기본법, 교직추방 등을 적극적으로 추진하였다.

3. 미군점령기의 3S정책

미군점령기에 있어서 미국은 패전국 일본에 대해서 강경정책과 유연한 문화정책을 동시에 실시하였다. 미군점령 후 일본에는 성풍속이 개방되었고, 영화와 엔터테인먼트가 부흥하

였으며, 프로야구를 시작으로 한 스포츠가 국민행사로 활성화되었다. 영화, 섹스, 스포츠 또는 스피드(자동차)등은 대중의 욕구를 해소하는 오락으로 자리매김 되고, 대중의 눈을 돌려 생활상에 나타난 불안, 정치에 대한 관심을 갖지 않도록 하는 문화전략으로 이용되었다. 특히 그런 흐름 속에서 정책으로서 강하게 추진된 것이 GHQ의 3S정책이다. 즉 스크린(screen) 정책, 섹스(sex)정책, 스포츠(sport)정책 등이었다. <표7>은 미군점령기의 3S정책을 특징을 소개한 것이다.

<표7> 미군점령기의 3S정책

구분	3S정책 내용
스크린 정책	8.15일1주간 전국영화 및 연극의 상영정지, 전파관계연구6개항목금지, 도쿄극장 상영 중 ‘菅原傳授手習鑑’반민주주의적인 것으로 상연금지통달, 군국주의·초국가주의·봉건주의적 사상 영화236편의 상영금지 및 소각통달, 「비민주주의적 영화배제방지령에 관한 각서」 교부, 민간교육정보부 영화 제작사대표초청, 민주화촉진·군국주의철폐 영화제작방침발표, 영화에 대한 종래의 통제철폐발표, 상영검열규칙의 폐지 및 통제철폐, 영화법폐지공포, 영화검열에 관한 각서, 이후 민간정보교육국과 민간검열국의 2중검열개시, GHQ지령으로 군국영화2만권 소각, 일본영화연합회가 GHQ민간정보국의 요청으로 에로 및 갱을 추방하는 위한 영화윤리규정관리위원회 설립, 영연 GHQ의 요청으로 영화제작윤리규정작성, 일본영화공사해산, 일본영화 ‘日本の悲劇’(일본의 비극)상영금지, 미국영화‘春의 序曲’키스장면등장, 영화‘20세의 청춘’키스신등장, 제1회마이니치영화콩크르, 피카대리극장, 성예방영화 ‘꽃이 되는 독초’상연, 영화라쇼몽 베니스영화제그랑프리, 독립영화유행, 음란영화유행, 핑트영화 등장
섹스 정책	긴자에 특수위안부시설협회(RAA)설립(정부반액출자), 「공장폐지에 관한 각서」 발표, 위생과 매춘업자에게 외국인출입금지 및 성병예방 주의를 조건으로 허가, 순결교육위원회 결성, 「부녀매음시키는 자의 처벌에 관한 칙령」, 경시청 모모이로책(카스토리잡지등)을 형법으로 처벌, GHQ의 ‘일본정부의 매춘검열은 열의가 없다’고 경고, 매음행위등금지법안, 풍속영업검열법공포, 경찰범처벌령금지, 행정집행법폐지(매춘부검진불가능), 미야기현 전국최초 ‘매음검열에 관한 조령’공포, 성병예방법, 공중욕장법, 여관업법, 흥행장법, 소년법, 인신보호법, GHQ점령군병사에 성병을 감염시킨 사실이 있는 자를 군사재판에 제소하기로 결정, 국내에서 유행하는 여자의 매춘에 대해 일본정부에 진상조사할 것을 명령, 경시청 소년의 히로봉환자검열지시, 도쿄에서 밤의 여자 등록제, RAA금지령으로 도쿄의 창가가 활성화됨, 경시청 카바레 및 댄스홀 18세미만출입금지, 제1회전국성병예방주간, 오사카·요코하마·사세보시·카가와현·효고현·가나가와현·야마구치현·오이타현·야마나시현 등 풍기검열조례제정, 환각제 검열법제정, 중앙청년문제협의회 「인신매매대책요령」 결정, 후생성 「수태조정보급실시요령」 발표, 전후오락으로서 패전춤유행, 성병예방전람회, 후생성모자수첩배포, 경시청 에로잡지적발, 출판물풍기위원회발족, 성문제연구소출범, 전국여자학생협의회 40인의 순결운동추진, 긴자터키탕유행
스포츠 정책	제1회국민체육대회, 제1회국체스케이트대회, 프로야구 야간경기, 일본체육협회, 고라쿠엔 국영경마권자와마권발매, 센트럴리그야구연맹결성, 일본사회인야구협회발족, 일간스포츠 창간, 신일본관광도내유담 하트버스운행개시, 일본유도연맹창립, 전후최초 미국야구팀도입, RAA가 일본관광기업주식회사로 개조, 프로야구선수권대회, 스포츠닛폰창간, 일본최초 프로레슬링대회, NHK텔레비전 야구실황중계, 나고야중심으로 파칭코유행, 제19회세계탁구선수권대회,아오야마 최초볼링장개장,오스모홍행 실시

자료: 구건서, 2007, 『일본영화와 시대성』, 제이앤씨; 구건서, 2011, 『일본애니메이션과 사상』, 제이앤씨; 神田文人, 2005, 『戦後史年表』, 小学館; 安江良介, 1991, 『近代日本総合年表』, 岩波書店

스크린 정책은 미국영화, 그것도 오락성이 강한 것을 이식하여 일본인이 복수를 생각하지 않도록 하였다. 당시 CIE는 극영화정책을 추진하는 가운데 일본의 민주화에 필요한 선전계발에 가치가 있는 극영화제작을 장려하였고, 단순한 오락적인 극영화를 선호하지 않았

다. 그리고 일본산영화는 종전 후 전경을 촬영하는 것이 금지되어 오래도록 로케촬영을 하지 못하였다. 또한 어린이들의 문화매체였던 종이극 「황금벃트」(黄金バット)의 캐릭터를 슈퍼맨과 같은 역동적인 금발의 캐릭터로 변경하였다. 그리고 전중에 전의 고양영화를 제작한 도호 등 영화계에도 제약이 가해졌다. 그런 흐름은 영화계에 영향을 미쳐 전투심을 고양하는 찬바라영화(チャンバラ映画)를 금지하여 가타오카(片岡千恵蔵)와 같은 일본을 대표하는 시대극스타가 실직하는 진풍경이 벌어졌다. 특히 일본국민에 대한 미국문화의 침투를 시도하기 위해 할리우드영화의 총괄배급창구회사(CMPE: central motion picture exchange)를 도쿄에 설립했다. 또한 한국전쟁발발이후 일본공산당을 비합법화하고 신문 및 방송업계와 함께 영화계에도 레드파지가 개시되었다⁶⁾.

이어서 진행된 성적정책은 성적 미디어를 범람시켜 향락에 빠져들 정도의 유연한 정책을 시행하였을 뿐 아니라 카스토리잡지(カストリジ雑誌)를 자유롭게 허용하는 등 성자유화정책으로 나타났다. 그리고 종전직후 1945년 8월 18일 일본내무성은 전국의 경찰에 대해서 연합국군의 장교를 대상으로 한 위안소를 설치하는 지령을 내리고, 코노에 후미마로(近衛文麿)는 특수위안시설협회(RAA: Recreation and Amusement Association)를 설치하였다. 그것은 연합국군의 장교에 의한 성범죄로부터 여자를 보호하기 위해서 라는 대의명분에 기초해서 일본각지에 위안소를 설치하였다. 그런 가운데 도쿄의 33개소의 위락시설에는 미군의 출입이 잦았고 또한 더불어 성풍속이 문란해졌으며, 성병도 동시에 만연하였다. 그리고 댄스홀에서는 풍기가 문란해졌으며 댄서는 1주일에 한번 성병검진을 받도록 하였다. 1947년 제2회 국회에서 풍속영업법안이 성립되어 요정, 카페, 카바레, 댄스홀 등에서 선량한 풍속을 해하는 경우 공안위원회의 허가를 취소하였다.

그리고 오락이나 스포츠를 강조하는 정책이 추진되었다. 1948년 11월 일본본토의 제8군을 시작으로 미군의 성병 전염률이 높아져 그것에 대한 대책으로서 매춘색이 적은 오락시설을 개발하게 된다. 즉 건전한 오락장, 레크리에이션 설비, 볼링장, 영화관 등의 적극적인 설치가 필요했다. 스포츠정책은 일본인의 에너지를 스포츠에 집중시키기 위해 추진된 일본인의 비정치화를 위한 정책의 성격을 띠었다. 그 과정에서 미국산의 야구를 수입하여 장려하였고, 볼링, 레슬링 등이 유행하였다. 그런 관점에서 보면 GHQ가 점령당시 일본에 추진한 3S정책은 유연한 문화정책이나 성자유화정책이라는 성격을 띠기도 하였지만 일본과 일본인을 관능적인 신체에 집중시키는 우민문화정책이나 성문란정책이었다는 점에서 비판을 받지 않을 수 없었다.

6) 1950년 9월 25일 맥아더의 지령에 의해 쇼치쿠 66명, 다이에이(大映)30명, 동호(東寶) 13명, 니치에이(日映)25명, 리켄(理研)3명 등 총 137명을 영화계로부터 추방하였다. 그 가운데는 공산당원이 아닌 자도 포함되어 일부는 장기간에 걸친 소송을 통해 복직한 자도 있고 또한 패소한 자도 있었다. 그 결과 이른바 블랙리스트에 오른 영화인이나 표현의 자유를 추구한 영화인은 독립프로덕션을 설립하여 활동하였다. 그 결과 독립프로영화제작수는 1947년 17편, 1948년 38편, 1949년 67편, 1950년 94편 등 매년 증가하는 추세였다(平野共余子, 1998, 『天皇と接吻』, 草思社, p.370; 下川こう史, 2007, 『性風俗史年表』(1945-1989), 河出書房新社; 平井和子, 1998, 『日本占領を「性」で見直す』, 日本史研究)

4. 미군점령기의 사회언론정책

미군점령기의 사회언론정책은 사상 및 사회운동, 언론 및 출판 등의 정책으로 나타났다. 사회언론 정책은 일본의 전통적인 이념이나 사상을 척결하고 당시 미국이 주도하는 시대성을 이식하고 선전하기 위해 추진된 특징이 있다. <표7>은 미군점령기의 사회언론정책을 소개한 것이다.

<표7> 미군점령기의 사회언론정책

구분	사회언론정책 내용
사상 사회 운동 정책	잡지 『세계』, 『전망』, 『근대문학』 창간, 일본저널리스트연맹결성, 일본민주주의문화연맹결성, 전일본민주주의문화회의, 노동쟁의활성화, 전일본학생자치회연합회결성, GHQ2.1제네스트증지명령, 미국 할리우드“赤狩”(공산주의자추방)정책, 직업안정법, 근로자연극협동조합 결성, 제1회청소년보호육성운동실시, GHQ 전노련의 해산명령, GHQ노동과장 에미스 관공노조스트라이크중지권고, 부락해방전국위원회결성, 히로시마 평화식전 거행, 부부관련 잡지유행, 평화를 지키는 모임 원폭금지스톡홀름 어필서명운동, 동북대학생 이루즈 반공강연저지운동, 동경대평의회 전몰학생기념상건설반대, 일교조 신국가제정운동결성, 임금춘투시작, 히로시마원폭피해자회의 발족
언론 출판 방송 여론 정책	GHQ 「언론 및 신문의 자유에 관한 각서」(보도제한), GHQ 5대신문의 사전검열개시, 일본출판협회와 일본자유출판협회 GHQ의 경고로 「출판강령」 제정, 신문윤리강령제정, GHQ 대신문6개사 통신사사의 사전검열폐지 사후검열전환, GHQ 민간정보교육국 신간번역출판허가 100권서명발표, GHQ NHK에 국제방송재개허가, GHQ에 의한 방송편성의 검열이 폐지됨, GHQ에 의한 6대신문사 및 3개통신사 사후검열폐지, 맥아더 공산당기관지‘아카하타’무기학생지(맥아더의 요시다수상서간에서 한국전쟁에 대한 보도태도를 이유로 아카하타제제조치), GHQ 신문사의 공산당원과 동조자추방지시 레드파지개시, 연합국전령군의 우편물·전보·전화의 검열에 관한 건을 폐지하는 법률공포, 기노쿠니아서점개점, 베네딕트 ‘기쿠와 가타나’번역, 내각총리부 국가여론연구소설치, 신문석간부활, 체탈레이부인의 연인 발금, 마르크스 앵겔스전집발간
사회 문화 현상	사교다방유행(성교다방), 집단선문화, 아베크호텔유행, 도쿄아사쿠사 스티립소유행, 온치마트등장, 전후최초누드사진집 ‘나체군상’발간, 스킵트유행, 제1회미스긴자대회, 도카이선 특급열차 식당차부활, 오도시다마쓰키 연하장발매, 성인의 날 지정, 어머니날 지정, 팡팡노래유행, 요미우리신문주최 제1회미스일본선발대회, 디스코유행

자료 : 神田文人, 2005, 『戦後史年表』, 小学館 ; 安江良介, 1991, 『近代日本総合年表』, 岩波書店

사회정책의 핵심이 된 부분이 민주적인 노동문화를 육성하고 노동조합법을 제정하는 것이었다. 이 시기에는 패전으로 발생한 고용유지나 대우개선 등에 대한 요구, 전전의 노동조합운동을 경험한 세력등장, 사회주의자와 공산주의자의 노동운동에 대한 참여 등으로 노동조합의 결성이 급속하게 촉진되었다. 1945년 결정된 「일본노동자조직의 취급에 대해서」라는 문서에는 노동조합의 자유로운 발전을 보장하는 일본정부의 정책을 요구하는 내용이 함의되어 있다⁷⁾. GHQ는 기본적으로 노동조합운동의 자유화를 지지하였고, 그 문제를 담당한 경제과학국노동과의 관료가 열의를 가지고 추진하였다. 그러나 해방된 노동운동이 공산주의의 강한 영향을 받아 GHQ 내부에서 너무 풀어준 것에 반대하는 비판의 소리가 높아졌다. 다른 한편으로는 개혁을 추진해온 뉴딜 정책입안자들이 본국으로 귀국하자 노동조합운동에 제한이 가해지는 정책이 도입되었다.

7) 竹前榮治, 1982, 『戦後労働改革 GHQ労働政策史』, 東京大學出版會

그리고 GHQ에 의한 언론문화정책은 GHQ에 의한 언론검열정책으로 나타났다. 1945년에 「언론 및 신문의 자유에 관한 각서」(言論及新聞ノ自由ニ関スル覚書), 「일본의 신문준칙에 관한 각서」(日本ノ新聞準則ニ関スル覚書), 「프레스 코드에 관한 각서」(プレス・コードニ関スル覚書), 「라디오에 관한 각서」(ラジオニ関スル覚書) 등이 정책의 근간이 되었다⁸⁾. 따라서 일본 매스미디어에 대한 사전검열이나 사후검열이 행해져 반점령군 적이라고 판단된 기사 등을 탄압하고 전면적으로 다시 쓰게 하였다. 그런 제한 조치를 통해서 언론의 자유는 최소한도로 하는 가운데 세계평화에 우호적인 것은 장려하였다. 또한 신문이나 뉴스를 통해서 일본군의 전시중 비행을 반복적으로 보도하게 하고, 국민의 전의를 없애는 한편 국민의 속죄의식을 증폭시켜 전쟁을 혐오하는 협전공작을 시도하였다. 그런 GHQ에 의한 검열행위는 개인의 편지, 전신전화 등에까지 미쳤고, 검열은 은닉되어 일본국헌법 하에서도 강력하게 실시되었다.

5. 미군점령기의 문화재보호정책

미군점령기의 문화재보호정책은 전통적으로 계승되어온 전통문화재를 보호하고 승계하는 문화재보호정책, 문화시설을 확충하는 문화시설정책, 소실된 문화재를 복구하고, 문화재를 발굴하는 정책으로 나타났다. <표8>은 점령기의 시대성과 문화재보호정책을 소개한 것이다.

<표8> 미군점령기의 문화재보호정책

구분	문화재보호정책 내용
문화재보호 정책	국보 마쓰야마성 화재, 금각사소실동경국립문화재연구소발족, 신주쿠공원 국민정원으로 개원, 국립박물관설치, 근대미술관설립
문화재보호법 제정	문화재보호법 공포(국보보존법폐지), 문화재보호위원회발족, 문화재보호위원회 국보181건 신지정, 문화재위원회 무형문화재 공예기술 36건 및 예능 11건 선정
문화재발굴 정책	시즈오카현 유적발굴개시, 문화재보호위원회 아이치현 소호패총유적조사

자료: 文化庁, 1978, 『文化行政の歩み』, 文化庁; 根木昭, 2007, 『文化政策の展開: 芸術文化の振興と文化財の保護』, 放送大学教育振興会

문화재보호정책은 문화시설정책, 문화재보호법 제정, 문화재발굴정책 등으로 나타났다. 우선 문화재지정해제정책이 추진되어 제2차세계대전중의 황국사관과 연결된 많은 황실관련 문물을 문화재로서 지정하였지만 전후 GHQ는 점령하면서 지정해제를 하였다⁹⁾. 일본문화재가 경시되는 경향이 있는 가운데 1949년 호류지(法隆寺)금당벽화소실사건이 일어나 1950년 문화재보호법이 제정되는 계기가 되었다. 문화재보호법은 국보보존법, 중요미술품등의 보존에 관한 법률, 사적명승·천연기념물보존법, 건축물·미술품 등과 같은 유형문화재, 그리고

8) 竹前榮治・中村隆英 監修, 1996-2000, 『GHQ日本占領史』全55巻・別巻1, 日本図書センター

9) 根木昭, 2007, 『文化政策の展開: 芸術文化の振興と文化財の保護』, 放送大学教育振興会, p.116

연극·음악·공예기술 등과 같은 무형문화재, 사적명승·천연기념물 등을 포함한 문화재보호에 관한 전반적이며 통일법으로 기능하였다.

일본에서 문화재보호법이 개정되어 문화재라는 개념이 처음으로 도입되었고, 새로운 무형문화재나 매장문화재가 민속자료로 추가되었고, 문화재보호를 추진하는 전문적인 기관으로서 문화재보호위원회가 설치되었다. 또한 문화재보호에 있어서 지방공공단체의 역할을 명확히 하고 도도부현 교육위원회가 국가의 보호행정에 관한 경유청이 되어 특정 대상에 대해서 국가권한을 위임받아 관리하도록 하였고, 지방공공단체가 조례를 제정하여 문화재를 지정하고 보호하도록 하였다. 문화시설의 정비정책으로는 전전 궁내성의 소관이었던 도쿄와 나라의 제실(帝室)박물관 및 은사(恩賜)교토박물관을 국립박물관으로 전환시켰다. 그리고 1951년 가나카와현립 근대미술관이 설립되었고, 1952년 국립근대미술관이 도쿄에 설립되었다. 그리고 전통적으로 계승되어온 문화재를 발굴하는 정책이 추진되었다.

IV. 맺는 글

일본문화에 대한 정치적인 목적을 갖고 시작된 베네딕트의 『국화와 칼』와 같은 일본문화알기는 미군정에 의한 문화정책으로 구체화되어 전후 일본문화정책의 기초와 토대가 되었다. 그러나 미군정에 의해 추진된 교육정책이나 3S정책을 포함한 다양한 문화정책은 시대성에 기초해서 추진되어 미국문화우호적인 성격을 띠었고, 전통적인 일본문화를 배척하는 반일본문화적인 경향이 있었으며, 또한 시대흐름에 좌우되는 가운데 냉전문화에 경사되는 경향이 있었다. 또한 신체성에 호소하는 형태의 향락을 부추기는 역할을 하여 일본인의 마음을 흔들어 놓고 사회에 확산시키는 가운데 일본에 새로운 문화를 발흥시키는 역할을 하였다. 그런 GHQ에 의한 문화정책은 새로운 일본문화를 형성하게 하는 중요한 원동력으로도 작용하였다.

그렇게 추진된 전후 일본에 있어서 미군정에 의한 문화정책은 다음과 같은 특징이 있다고 요약할 수 있다. 첫째는 문화정책이 문화적 관점에서 추진되기보다는 정치적인 관점과 의도에서 추진되었다. 둘째는 미국문화를 일본에 이식시키는 문화이식정책이라는 성격이 강하며, 이식대상이 되는 문화로는 민주문화, 오락문화, 성문화, 스크린문화, 스포츠 문화 등이 대표적이다. 셋째는 일본문화를 배척하는 차원에서 추진되어 서구문화나 미국문화가 갖고 있는 좋은 점이나 진정성이 왜곡되기도 하고, 또한 부작용이 발생하는 부정적인 측면이 있었다. 넷째는 미군정에 의한 문화정책은 일미강화조약이후 일본에서 발생한 일본문화론이나 문화정책의 기반과 토대가 되었다고 할 수 있다.

◀ 참고문헌 ▶

- 荒敬・内海愛子・林博史編(2005) 『国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP文書目録』, 蒼天社出版
 江藤淳著(1995) 『閉された言語空間-占領軍の検閲と戦後日本』, 『文藝春秋 1』, 文春文庫
 大森實(1975) 『戦後秘史』(4), 講談社.
 加藤秀俊(1971) 『昭和世相史 1945-1970』, 社会思想史
 神田文人(2005) 『戦後史年表』(1945-2005), 小学館
 구건서(2007) 『일본영화와 시대성』, 제이엔씨
 구건서(2011) 『일본애니메이션과 사상』, 제이엔씨
 GHQ/SCAP Records, Civil Information and Education Section (CIE), 国立国会図書館
 下川こう史(2007) 『性風俗史年表』(1945-1989), 河出書房新社
 占領史研究会編著(2005) 『GHQに没収された本 総目録』, サワズ出版
 竹前栄治(1982) 『戦後労働改革 GHQ労働政策史』, 東京大学出版会
 竹前栄治(1983) 『GHQ』, 岩波新書
 竹前栄治・中村隆英 監修(1996-2000) 『GHQ日本占領史』全55巻・別巻1, 日本図書センター
 住本利男(1965) 『占領秘録』, 毎日新聞社
 日本学術振興会編(1972) 『日本占領文献目録』, 日本学術振興会
 根木昭(2001) 『日本の文化政策: 文化政策學の構築に向けて』, 勁草書房
 根木昭(2007) 『文化政策の展開: 芸術文化の振興と文化財の保護』, 放送大学教育振興会
 文化庁(1978) 『文化行政の歩み』, 文化庁
 平野共余子(1998) 『天皇と接吻』, 草思社
 平井和子(1998) 『日本占領を「性」で見直す』, 日本史研究
 正村公宏(1990) 『戦後史』(上・下), 筑摩書房
 升味準之輔(1983) 『戦後政治 1945-55年』, 東京大學出版會
 安江良介(1991) 『近代日本総合年表』, 岩波書店

- 투 고 : 2012. 11. 30.
- 심 사 : 2012. 12. 15.
- 심사완료 : 2013. 01. 15.

1990년대 이후 일본의 국제정치학

— 국제규범에 관한 연구동향을 중심으로 —

류시현*
politique@hanmail.net

<요 旨>

本研究では冷戦の終結後、北米の国際政治学における主流理論である合理主義の批判と反省から登場したコンストラクティヴィズムが、日本の国際政治学にはいかなる模様で現れたのかを明らかにした。その中で特に1990年代以降の日本の国際政治学における国際規範に関する研究動向を探ってみた。その分析対象は、日本国際政治学会が発行する学術誌『国際政治』に1990年93号から2011年の166号まで掲載された国際規範をテーマとする論文である。北米におけるコンストラクティヴィズムへの熱心が盛んになった時期とはギャップがあったものの、日本での国際規範や構成主義を研究テーマとする議論は、1990年代と2000年代を比較すると3倍以上の増加が見られる。2000年以降からは毎号に国際規範に関連するテーマの研究が掲載されつつある。そして主に扱うトピックとしては、国際規範の属性・形成における動態やメカニズムに関する研究や、そのプロセスで現れるNGOの役割、国際規範による国際秩序と国内秩序の相関関係分析、国際規範が及ぶ政府政策への影響などがある。そして、構成主義理論自体に関する研究は少ないが、構成主義アプローチを用いたグローバル・ガバナンス、国際レジーム、国際機構に関する研究も多くあった。日本の国際関係論における理論研究は、北米の国際政治学に影響を受けた部分も少なくはないが、そもそも日本の政治学研究が理論研究を重視した点もあり、観念的研究方法を用いた既存の研究基盤に基づきながら、それに加えた複合的な実証研究への試みも多くあった。

キーワード： 国際規範、コンストラクティヴィズム(構成主義)、日本の国際関係論

1. 연구목적 및 문제제기

전후 서구 국제정치학의 주류이론이었던 현실주의/신현실주의, 신자유주의제도주의등 소위 합리주의 이론이 차지하고 예측하던 영역에서, 냉전의 종결과 함께 합리주의 이론의 결점을 제기하고, 비주류이론으로서의 반박, 비판으로 등장한 것이 구성주의였다. 최근 20여년간 국제관계론 연구에서는 구성주의(Constructivism) 연구의 증가에 기인하여 구성주의 연구의 주요 연구 테마중의 하나라고 할 수 있는 국제사회에서의 규범에 관한 연구가 지속적으로 증가되고 있다.¹⁾

* 서울시립대학교 국제관계학과 강사

1) 국제관계론에 있어서 규범이 중요한 관심테마의 하나가 되는 이유로서, 기존 국제정치이론의 주류이론이었던 합리주의이론들의 냉전종결에 대한 예측과 해석의 실패에 대한 비판으로 등장한 구성주의 연구의 번성을 들 수 있다. 구성주의가 중점을 두고 있는 규범이나 이념과 같은 관념적 요소(ideational factors)들이 국제정치학에 미치는 영향이 중요시되면서, 비 안보적 국제문제(인권, 지구환경보호, 종교등 이념과 아이덴티티에 관한 이슈)들에 대한 관심의 증가 또한 규범연구 번성의 한 요인으로서 생각할 수 있다. 大矢根聡(2005) 「コンストラクティヴィズムの視座と分析—規範の衝突・調整の実証的分析へ」 『国際政治』 第143号, p.125 참조 / 納家政嗣(2005) 「国際政治学と規範研究」 『国際政治』 第143号 「規範と国際政治理論」、p.2참조/ John G Ruggie(1998) “What Makes the World Hang Together? Neo-utilitarianism and the Social Constructivist Challenge,” *International Organizations*, 52, pp.874-76.

본 연구의 목적은 냉전이 종결된 후, 1990년대 이후 일본의 국제정치학(또는 국제관계론)²⁾에 있어서의 연구 동향을 다루는 것이나, 일본 국제정치학의 전반적인 분야를 모두 다루는 것이 아니라, 국제규범에 관한 연구 동향을 살펴본다. 일본의 국제관계론의 이론 연구중에서 특히 구성주의와 국제규범에 관한 연구를 다루는 이유는, 서두에서 서술하였던 냉전종결후 서구 국제정치학에서의 패러다임 변화가 가져온 이론간의 논쟁에서 새롭게 등장한 구성주의가 과연 일본의 국제관계론 논의에는 어느 정도 영향을 미쳤는가, 그리고 일본에서 어떠한 형태로 구성주의 규범연구가 나타났는가를 살펴보기 위함이다. 또한 그것이 일본 국제정치학과 국제정치학계의 특징을 어떻게 설명하고 규정하고 있는가, 마지막으로 그것이 아시아적 국제관계론의 성립에 갖는 함의는 무엇인가를 모색하고자 하는 의도에서 시작했다.

구성주의에 관한 북미의 논의에서는 주로 (국제)규범에 관한 논의를 중심으로 구성주의 이론전개의 실증적 논거를 진행해 온 특징을 볼 수 있는데, 일본에서도 마찬가지로 특히 규범에 관한 논의를 중심으로 구성주의의 연구가 진행되었는지 살펴보고, 더불어 일본에서 국제적 틀과 법칙, 원칙들을 주로 다루었던 국제체제에 관한 활발한 논의와 글로벌 거버넌스, 유엔 연구의 변성과 구성주의의 규범연구와의 관련에 어떤 특징이 없을까 하는 의문점에서 연구가 시작되었다.

이 연구가 가지는 의의는, 일본 국제관계론에서 위와 같은 분석은 아직까지 시도된 적이 없으며, 산발적인 규범연구가 존재했을 뿐이기 때문에 그에 관한 정리와 분석이 필요하다고 보았다. 동북아시아의 지역적 특성을 공유하고 있는 이웃 일본의 국제관계론의 학계동향에 대한 분석은 한국의 국제관계론이 갖고 있는 특징과 과제를 분석하는 데에도 필요하다고 본다.

북미를 제외한 지역에서 국제정치학(국제관계론)의 논의는 북미의 전통과 특징에 많은 영향을 받은 것도 사실이며 일본도 예외는 아니지만, 일본에서는 물론 아시아 다른 지역에서 독자적인 국제정치이론의 성립을 위한 노력이 없었던 것도 아니기 때문에 이러한 문제 의식을 가지고 일본의 국제정치학의 이론을 살펴보는 것은 의미가 있다고 보았다.

일본의 국제관계론 연구에 있어서는 외교사, 지역연구, 일반 국제정치학의 세가지 전통이 있다고 정리된다.³⁾ 일본의 국제관계론 연구에 있어서 이론은 예전부터 큰 비중을 차지하는 것이 특징인데, 국제관계론을 구분하는 세가지 전통의 하나인 일반 국제정치학에서도 이론을 빈번히, 깊게 다루고 있는 것을 볼 수 있다.⁴⁾ 특히 방법론에서 전후 1950년대 일본 국제정치학의 연구에서 시작하여 일본정치학의 주류를 형성한 정치철학 및 정치외교사 연구의 전통을 이어받으면서 발전한 배경에 근거하여 이론에 대한 논의를 자주 다루고 있다.⁵⁾ 또

2) 일본에서 International Politics를 다룰때는 국제정치학으로 번역하고, International Relations를 다룰때는 국제관계론으로 번역한다.

3) 大芝亮·石川一雄(1992) 「1980年代の日本における国際関係研究」 『国際政治』 第100号 「冷戦とその後」、p.271

4) 일본국제정치학회에서 매년 4회 발간하는 학술지 국제정치학의 발간테마를 보면, 2년에서 4년마다 한회씩 이론을 지정주제 논의로 각호가 간행되는 것을 볼 수 있다.

5) 박철희(2001) 『일본국제정치학의 패러다임 변화』 현대일본학회, 일본연구논총 제14호, p.199

한 일본국제정치학 분야에서의 1980년대 연구부터는 외교사 연구와 지역연구 보다는 국제정치이론에 대한 담론이 현저하게 증가하였다.⁶⁾

더불어 본 연구에서는, 일본의 국제관계론 연구에서의 위에서 설명한 이론연구의 기반에 근거한 실증연구가 증가⁷⁾하고있는 경향이 보이는데, 그 안에서 구성주의와 국제규범에 관한 동향을 살펴보고자 한다. 일본의 국제정치학에서 국제관계이론 일반에 대한 논의는 북미의 국제정치학이 현실주의-신현실주의-신자유주의제도주의라는 과정을 거치는 흐름과는 다르게 구성되었다. 즉 일본에서는, 기존의 고전현실주의 대(對) 이상주의 논쟁에서 1960년대부터 번성하기 시작한 행동과학(behaviorism)논쟁, 그리고 케네스 윌츠를 둘러싼 네오-네오 논쟁(신현실주의 對 신자유주의제도주의), 그리고 기존 네오-네오 논쟁의 합리주의이론에 대한 비판으로 등장한 구성주의 논의의 형태로 국제관계이론에 관한 논의가 진행되어 온 것이 아니다. 다시 말하면, 북미의 국제정치학에서 구성주의가 등장하게 된 원인은 기존의 합리주의에 대한 비판에서 시작된 것인데, 일본에서는 기존 합리주의에 대한 큰 영향이나 그에 반한 비판에서 시작한 반론 없이 구성주의에 대한 논의가 번성하기 시작했다.

일본에서는 원래 프랑스 현대사조의 영향이 강해서 규범의식이나 문제의식이 없는 연구를 저급한 연구라고 평가하는 경향이 있어서, 규범의식에 근거한 논의를 다루는 구성주의 논의자체를 신선하게 여기지는 않았다고 한다. 일본의 합리주의 이론가들에게 있어서도 구성주의의 비판은 당연한 비판처럼 여겨졌고, 신현실주의자들 학자들에게 있어서도 가치의 문제가 중요한 것은 자명한 사실이었다. 그러나 1990년대 들어서 프랑스 현대사조의 영향이 일본에서 저하하기 시작한 후에, 새롭게 등장해서 연구자가 된 젊은학자들 에게는 구성주의가 신선하게 비춰지긴 했으나, 그렇다고 북미 국제정치학과 같은 류의 논쟁이 발생했다기 보다는 미국의 구성주의를 수입하는 형태의 논의가 축적된것이라고 타나카 아키히코는 주장한다.⁸⁾ 그러나, 위와 같은 외부적 현상에도 불구하고 일본에서 구성주의 논의는, 그 연구논문 수의 단순한 양적증가의 현실만 보더라도 중요성을 띠고 있다고 할 수 있다.

이러한 모든 배경에 더하여 본고에서는 같은 배경의 국제규범 연구, 구성주의 연구라 하더라도 그 세부 관심과 테마가 연구자마다 각각 다르므로 일본의 구성주의 연구학자들의 관심을 고찰하여 어떤 분야의 주제를, 어떤 방법론으로 국제규범연구에 사용하고 접목시키고 있는 가를 밝힌다.

또한 일본의 국제정치학에서의 국제규범연구는 국제법이나 유엔, 국제기구와 관련한 국

6) 박철휘, 위의책 p.206

7) 일본의 국제정치사 연구에서는 연구방법론에서 수준이 높은 실증연구가 많이 나오고 있다. 특히 일본 외교사 분야에서는 개념의 역사성과 사회성에 대한 민감한 반응이 많은 특색을 가지고 있으며, 주권, 내셔널리즘, 지역주의 등의 국제정치학의 기본개념에 관해서 서구의 국제정치학과는 다른 고찰을 제시해오고 있다고 한다. 酒井哲哉 「近代日本外交史」 『日本の国際政治学 第4巻 - 歴史の中の国際政治』 日本国際政治学会編, p.205. / 李鍾元 「日本の国際政治学の構築における理論と歴史」 日本国際政治学会2012年度研究大会論文集, p.2

8) 田中明彦(2009), 「序章 日本の国際政治学—「棲み分け」を超えて」 『日本の国際政治学1 学としての国際政治』 日本国際政治学会編, p.12

제조약연구, 인간안전보장 논의 연구와도 연관이 있다.⁹⁾ 일본의 국제관계론 연구에서는 1970년대 활발했던 전후 평화연구에서 출발해서 인권문제, 인간안보논의를 중심으로 한 NGO등의 연구가 전개되었는데, 인권문제에 관한 지속적인 관심은 인간안전보장이라는 개념을 적극적으로 일본정부가 제창하는 결과까지 이어졌고, 그 논의를 집중시키는 구심점적인 역할을 한 중심인물로서는 1991년부터 10년간 유엔의 난민고등판무관을 역임했던 국제정치학자 오가타 사다코(緒方貞子)씨의 역할도 컸다. 이러한 시대적 배경과 맞물려 인간안보나 인권에 관한 집중적인 논의가 전개될 때, 그 개념을 해석하고 분석하는 이론적 배경으로서 구성주의의 국제규범논의를 취하여 해석하고 적용시켰던 연구가 많다. 인권NGO에 관한 다양한 연구도 이러한 시대적 배경에 영향을 받았다고 해도 과언이 아니다. 그렇기 때문에 그 중심에 있는 이론적 배경으로서의 구성주의 논의, 특히 국제규범에 관한 논의를 살펴보는 것이 의의가 있다고 볼 수 있다.

2. 분석대상과 기간 및 방법

본고에서는, 국제정치학과 관련된 논설을 게재하는 모든 학술지를 전부 다루기에는 공간적/물리적 제한이 따름으로, 협의적 범위이기는 하나 일본의 대표적인 국제정치학의 학술단체로서 일본 국제정치학회가 매년 4회¹⁰⁾ 발간하는 학술지 『국제정치』에 게재된 국제규범과 관련된 테마의 논문과, 일본 국제정치학회 연례 학술대회의 프로그램을 중심으로 고찰했다. 국제정치학회 학술대회 프로그램은 학회 웹사이트에서 제공하는 2001년 이후의 학술대회 프로그램을 참조했다. 2000년 이전의 학술대회 분석대상은 웹사이트에서 제공하지 않으므로 분석대상에서 제외됐다. 즉, 시간상, 물리적인 제약으로 일본에서 발간되는 정치학과 국제법 관련 학술지 전부를 분석대상에 포함시키지는 않았다.

분석대상논문의 선택시 주의한 점은 국제법학의 규범 연구에 대한 논문은 분석대상에서 제외했다. 관습법, 소프트로(soft law) 등과 같은 테마를 다룬 논문도 대상에서 제외했다. 어디까지나 순수 일반 국제정치학의 관점에서 다룬 논문을 분석대상으로 삼았다. 그리고 일본에서의 국제규범연구는 주로 구성주의에 관한 연구를 하는 연구자에 의해서 실행되고 있거나, NGO와 관련된 연구를 하는 학자, 소프트 파워 연구, 국제 레짐을 중심테마로 다루는 학자들에 의해서 실행되고 있는 것이 특징이다. 그러나 NGO연구와 레짐연구에서는 구성주의적 접근법을 사용하는 학자가 있는 반면, 신자유주의제도주의의 연구방법을 취하는 학자

9) Human Security, 한국의 논의에서는 인간안보라 명칭한다. 일본의 국제정책으로서 인간안전보장은 기본적으로는 UNDP의 노선과 일치하고 있었지만, 아시아 경제위기에의 일본의 자금원조를 신상품명으로 효과적으로 팔기위해, 또 일본의 ODA정책의 90년대이후의 노선변화를 강조 하기위해서 인간안전보장 규범이 사용되게 되었다. 栗栖薫子(2005) 「人間安全保障規範の形成とグローバル・ガヴァナンスー規範複合化の視点から」 『国際政治』 第143号 「規範と国際政治理論」 p.83

10) 전후부터 2003년까지는 매년 3회 발간, 2004년부터는 지정주제 발간 논문집 3권과 자유주제 투고의 독립논문집1권 발간.

도 많기 때문에, 본고에서는 그 중에서도 분석대상의 중심틀을 구성주의의 이론적 기반에 배경한 국제규범을 테마로 다루는 연구논문만을 분석 대상으로 삼았다.

분석 기간은 탈냉전의 움직임이 본격화되었던 1990년부터 최근 2011년 사이에 발간된 국제정치 93호 부터 166호까지가 분석대상 기간이다. 분석 대상의 1차 기간은 1990년부터 2000년까지로, 탈냉전의 시작과 미국에서 구성주의 對 합리주의 논쟁이 시작된 시점부터 2000년까지이며, 2차 기간은 국제정치학의 주요 논의가 냉전종결후 냉전의 안보중심 논의에 가리워져서 제기되지 못했던 인권, 여성, 빈곤, 환경문제등의 비안보적 논의를 주로 다뤘던 경향에서, 2001년의 미국9.11동시다발테러의 발발을 계기로 다시 안보논의로 집중된 시기부터 2011년까지가 분석기간이다. 1980년대 후반에서 1990년대 초반에 이르기까지 북미의 국제정치학 연구동향에서 가장 주목할 것은 앞에서 서술한 것과 같이 신현실주의 / 신자유주의제도주의와 구성주의와의 논쟁이었다. 일본의 국제정치학도 미국의 국제정치학의 영향을 깊게 받고 있다는 주장을 고려하고, 예전부터 이론과 이념, 개념에 대한 연구가 지속적으로 행해져오던 일본 국제정치학의 전통에 대한 고려를 해보더라도 1990년부터 분석 대상으로 지정하는 것이 적절하리라 보았다.¹¹⁾

우선은 구성주의(構成主義, コンストラクティビズム, コンストラクティヴィズム), (국제) 규범, 아이덴티티, 아이디어, 문화, 인간안전보장(인간안보, Human Security)등의 상기의 검색 키워드를 포함한 테마를 다룬 논문을 검색했다. 그리고 연구 테마에 (국제)규범이 삽입된 논문을 중심으로 검색해서, 그 테마와 연구주제 동향을 살펴보았다. 그리고 참고로 현 국제정치학에서 구성주의나 국제규범에 대한 논의에 중점을 두고 있는 학자들의 기존 논문도 살펴보았다.

규범논의의 검색 키워드에는 학습과 담화¹²⁾가 포함되는데, 그 키워드를 다루고 있는 논문도 검색과 분석 범위에 포함시켰다. 키워드에 아이디어, 아이덴티티, 특수규범인 인간안전보장, 문화를 포함시킨 이유는 구성주의가 국제정치에 있어서의 아이디어(이념)의 역할, 아이덴티티, 액터의 역할에 중점을 두고 있는 이론이기 때문에, 그 키워드를 사용하는 것은 구성주의 주류 언설에 영향을 받은 논문 테마로 간주하여 검색대상에 포함시킨 것이다. 그리고 규범과 구성주의에 관한 문헌을 다룬 서평도 그 검색과 분석 대상에 포함시켰다. 더불어 일본의 대표적인 학술논문검색 데이터베이스라고 할 수 있는 국립정보학연구소(国立情報学研究所, National institute of infomatics)의 Cinii(Citation information by NII)에서 검색어를 규범, 구성주의, 인간안전보장으로 검색한 논문수의 분석도 포함 되었다.¹³⁾

연구 방법론에서는 구성주의의 이론적 연구인가, 아니면 이론을 배경으로 한 국제규범에

11) 일본의 국제정치학자들의 개별전공분야를 조사한 연구에서 자신이 국제관계이론 일반을 전공하고 있다고 한 학자들이 21.6%를 나타냈다. 大芝亮・石川一雄(1992) 위의책 p.272

12) 일본에서는 언설(言説)이라고 일컬어짐.

13) 일본의 국제정치학에서 구성주의는 한자 그대로 구성주의(構成主義)라고 해석되기도 하고, 영어원어를 사용하여 카타카나로 외래어 표현 그대로 콘스트럭티브리즘(コンストラクティヴィズム)이라고 해석되어 사용되기도 한다. 이것은 교육학이나 미학분야에서 논의되던 구성주의(Constructionism)와의 구분을 위한 노력의 일환이라고 볼 수 있다.

관한 실증적 연구인가를 보았다. 그리고 그 실증연구의 연구대상은 무엇인가도 보았다. 위에 설명하였듯이 일본의 국제규범연구학자들의 연구대상은 주로 국제NGO연구, 국제레짐 연구, 유엔을 비롯한 정부간 국제기구 연구, 국제조약연구, 그리고 인간안보와 인권연구이다. 이 분야별 특징을 살펴보고 그 동향을 고찰한다. 그리고 구성주의의 논의 접근법에 기반을 두고 연구를 진행하는 대표학자들의 연구를 살펴본다. 즉, 국제규범과 구성주의에 관한 연구의 시대적 추이와 그 현상에서 읽을 수 있는 연구동향과 고찰을 시도했으며, 주요 테마별 연구동향과 시대적 연구동향이 고찰의 대상이 된다.

3. 대상논문들의 동향 분석

1) 시대별 연구동향

1990년대 이후 일본의 일반 국제정치학에서의 이론연구를 살펴보면, 기존의 북미 국제정치이론의 주류를 이루었던 현실주의/신현실주의/신자유주의의가 냉전의 종결을 예상하지 못했다는 비판과 관련된 국제정치이론 전반에 관한 논쟁과 논의는 발견되지 않는다. 냉전의 종결을 사회주의 시스템, 공산당의 붕괴 논의를 중심으로 해석한 1992년의 제 99호 논문집이 있을 뿐이다.¹⁴⁾

일본의 국제관계론에서 연구테마가 국제규범과 관련된 논문의 동향은 1990년 후반부터 시작해서 2000년이 지난 시점에서 활발해진 경향을 보이고 있다. 아래 표 1에서 알 수 있듯이, 학술지 「국제정치」에 실린 전체논문수에 비해서 국제규범 관련테마의 논문의 절대적인 수는 1990년대 3.75%, 2000년대 10.37%정도로 적지만, 1990년대에 비해서 2000년대 연구논문의 수가 상대적으로 3배 이상 증가한 것을 알 수 있다. 연도별 추이를 보고 알 수 있는 것은 90년대 초반부터 관련연구 논문이 서서히 증가하는 경향을 볼 수 있다. 특별히 한 시기에 집중되어 연구대상이 집중된 것은 아니지만, 그러나 규범에 관한 연구테마는 1990년대 5건에서 2000년대 이후 30건으로, 국제관계론에서의 연구대상으로서 「(국제)규범」이라는 언설에 주목하기 시작했다는 현상을 읽을 수 있다. 특히 일본의 국제관계론에서는 글로벌 거버넌스/국제기구/국제제도(레짐) 논의의 증가에 따라 구성주의(국제규범) 이론에 관한 논의가 증가하는 경향도 보이는데, 1990년대의 3건에서 2000년대의 12건의 증가를 알 수 있다.

또한 2000년대의 구성주의 관련테마에서 규범을 주제로한 연구가 현저히 증가한 것을 볼 수 있다. 이것은 일본에서의 국제관계론 연구가 전후 평화연구를 시작으로 해서 국제협력과 협조를 중시하는 근간에서 출발한 배경을 들 수 있는데 그 영향으로 국제관계론 연구에서 상당부분을 차지하고 있는 국제레짐 연구, 국제기구, 유엔연구와 관련된 규범의 역할에 주목한 연구가 증가했기 때문이라고 볼 수 있다. 한가지 더 독특한 경향은, 1990년대 초반 논문보다 1990년대 후반부터 2000년대 들어오면서 논문에 부제가 붙는 경우가 많아진 것을

14) 각주 8) 참조

볼 수 있는데, 부제가 많아지면서 더 세부적인 연구 테마로서 (국제)규범을 연구대상으로 하는 논문이 늘어난 경향이 보인다.

시대적 추이에서 세부적인 사항을 살펴보면, 2000년에 「국제정치이론의 재구축」이라는 지정 테마 논문집 124호가 발간되었는데 여기에서는 구성주의의 이론분석과 국제규범 정통성과 유엔과의 관계에 관한 논의, 국제관계에 있어서의 아이덴티티의 역할, 제도를 이해하는 수단으로서의 구성주의의 적용등 새롭게 등장한 구성주의의 국제정치학에서의 역할을 심도있게 다루고 있다. 2002년 129호의 지정 테마 「문화와 국제정치」에서는 구성주의가 등장하면서 주목하기 시작한 문화의 역할에 집중한 국제정치에서 문화가 하는 역할에 관한 논의가 전개되었다. 주로 국제제도의 문화적 성립이나 문화 개념으로서 분석한 유엔, 그리고 유럽의 동질문화가 가져온 유럽심의회 성립까지의 과정을 다룬 연구가 포함되었다.

나아가 2004년의 137호 「글로벌 공공질서 이론을 목표로- 유엔, 국가, 시민사회」에서는 글로벌 공공질서에 관해 구성주의와 규범에 의한 접근법으로 논한 (복합적)거버넌스 논의가 돋보이기도 한다. 가장 직접적이고 노골적으로 국제규범의 실체에 대해 다룬 논문집은 그 다음해 2005년 143호 「국제정치학과 규범연구」의 지정 테마 논문집에서였다. 여기에서는 국제규범의 실증적 논의를 중심으로 한 국제규범¹⁵⁾의 역할과, 국제규범적 외교정책의 분석, 그리고 구성주의 이론에 관한 논의가 실려있다. 2007년의 147호 「국제질서와 국내질서의 공진」 테마호에서는 트랜스내셔널(transnational) 네트워크의 정치적 움직임에 주목한 논의에서, 그 운동세력의 국제규범 형성 능력과, 다국간 조약형성에 있어서의 역할에 주목한 논의들이 담겨있다. 2008년 「글로벌경제와 국제정치」 153호와 2009년 「현대 국제정치이론의 상극과 대화」 155호에도 각호마다 두편 이상의 규범관련논의의 논문이 등장한다.

이런 시대적 추이를 보더라도 2000년 이후에는 학술지 「국제정치」에 거의 매호마다 규범을 제목으로 하거나, 구성주의적, 규범적 분석을 논의하는 논문이 한개 이상씩 꾸준히 게재되고 있다. 반면 학술지 국제정치에서 다루었던 인간안전보장 자체에 관한 연구는 양적 변화가 적은 것을 알 수 있다.

<표1> 학술지 「국제정치」 통계

논문테마 \ 기간	1990년-2000년	2001년-2011년	테마별 총논문수
규범	5건	30건	35건
인간안전보장	2건	2건	4건
구성주의 이론	4건	7건	11건
글로벌거버넌스/레짐/제도/국제기구	3건	12건	15건
아이덴티티	5건	5건	10건
문화	1건	5건	6건
총계	20건(3.75%)/전체534건	61건(10.37%)/전체588건	

15) 여기서 다루었던 국제규범 토픽은 국제개발협력 규범, CSR(기업의 사회적 책임)규범, 인간안전보장 규범, 체무 규제 규범, 국제해양자원 규범이 있다.

덧붙여서, CiNii 논문 검색의 분석결과를 보면 1990년대와 2000년대의 가장 현저한 차이는 국제규범과 구성주의 관련 논문의 수가 약 4배 가량 증가한 점을 들 수 있다. 특히 국제규범을 포함한 규범을 제목으로 하는 논문이 현저히 증가했다. 여기에서는 인간안전보장 자체에 관한 연구논문도 규범관련 연구테마의 증가와 더불어 양적으로는 증가한 것을 볼 수 있다.

<표 2> CiNii 국제규범관련테마 연구논문 통계

논문테마 \ 기간	1990-2000년	2001년-2001년	테마별논문수
국제규범	5건	27건	32건
규범	46건	213건	259건
구성주의	15건	41건	56건
인간안전보장	7건	24건	31건
시대별총계	73건	305건	

2) 주요테마별 연구동향

학술지 「국제정치」에서 가장 먼저 인간안전보장을 포함해서 (국제)규범을 주 분석 테마로 한 연구 논문은 총 39건인데 그 내용을 살펴보면, 국제규범을 다루는 세부 테마에 있어서 주로 네 부분의 주영역으로 나눌 수 있다. 먼저 해당규범의 속성을 분석하고, 국제사회에서의 그 규범의 형성 프로세스에 대해서 분석한 연구들이 그 첫번째로, 두번째는 국제사회에서의 규범의 역할을 분석한 논의들과, 그 다음으로는 국제규범의 형성과정에서 나타나는 NGO의 역할과 NGO가 중심이 된 트랜스내셔널 네트워크 운동이 형성하는 국제규범에 관한 논의가 있다. 마지막으로 국제 규범이 가져오는 국내질서와 국제질서와의 상관성에 관한 논의들로 나눌 수 있다.

첫번째 영역의 규범의 속성과 규범의 형성 프로세스에 관한 논의에서는 특정 규범이 국제정치 시스템에서 어떤 속성을 지니고 있으며 기존 국제정치의 주류 이론과 기존의 주권 국가 시스템안에서의 규범의 변화 및 변용 그리고 그것이 규범으로 인정되고 수용되는 과정에 관한 논의를 시도했다. 초기의 연구에서는 주로 규범자체의 속성에 대한 논의가 중심이었으나 2000년 이후의 연구에서는 규범의 형성 동태와 형성 메커니즘에 관한 프로세스 논의가 중심을 이룬다. 규범형성 프로세스에 있어서는 국제기구의 역할, NGO의 역할, 다른 비국가적 액터의 역할이 함께 검토 되었다.

연구 대상 규범의 토픽의 예로, 해양 자원 규범, CSR, 탈식민지화, 채무구제, 인간안전보장, 영역관리, 비핵확산규범등 비안보적 이슈에서 안보적 이슈까지 다양한 국제규범을 다루었다. 예를 들면, 국제해양자원을 둘러싼 규범들이 어떻게 변화하고, 그 생성과정과 정착과정을 분석해서, 어떻게 새롭게 등장하는지를 구성주의의 규범논의를 사용해서 신규범으로 탄생하는 과정을 논했다. 또한 기존규범에서 신규범의 등장이 요구되는 국제사회의 조건 설명과, 규범발전의 다각적 진로에 대한 탐색이 고찰되었다. CSR에 관한 논의에서는 다양

한 쟁점을 다루는 규범의 복합화를 제시하면서, 다양한 액터가 참여하는 복합규범의 한 예로서 CSR을 정의했다. 정부, 기업, NGO가 동등한 스테이크 홀더(이해관계자, stakeholder)로서 참여하는 규범형성과정의 동태를 파악하고, 다양한 액터가 규범형성에 참여할 때 발생하는 비계층적 네트워크에서 발견되는 다수 액터간의 지식이 다각적으로 거래되는 오픈소스 어프로치(open-source approach)를 제안하면서 분산형 규범형성 동태를 분석했다.

두번째 영역인, 규범의 역할을 중점적으로 논의한 논문은, 규범의 속성과 형성 동태를 다룬 논문에 비해서 그 수가 많진 않지만¹⁶⁾ 정부의 정책선택에 영향을 미치는 규범의 역할에 관한 논의와, 지구적 이슈에 대한 관심이 규범이 되어 국제문제화 되는 과정에 대한 논의가 포함되었다.

세번째의 세부 테마영역인, 국제규범의 형성/확산 과정에서 나타나는 NGO와 그 트랜스내셔널 네트워크에 관한 연구에서는, 극빈국의 채무를 구제하는 운동에 있어서 “채무구제”라는 규범이 채권국에 어떻게 공유되어 각국의 정책을 변화시켰는가에 초점을 맞추고 NGO들의 트랜스내셔널 네트워크가 국제 규범의 형성과 확산정책에 큰 역할을 했다고 주장한 연구가 있다. 그러나 변화규범만 제시하고 기존부터 존재한 계속적/안정적 규범에는 구성주의가 관심을 두지 않는 것을 비판하면서 영국학파가 그 대안으로서 제시되었다. 이들 연구는 국제정치 시스템의 변용에 있어서의 NGO의 역할에 주목하면서 그 도구적 수단으로서 선택한 규범의 형성에 주목을 둔 연구이다. 특히 규범의 형성 이후에 국내적 내면화로 이행되는 과정에서 발휘되는 NGO역할에 관한 논의가 돋보인다. 또한, 국제개발 협력의 진전에 있어서 국제규범이 미치는 영향으로서 미국 국내에서 국제개발원조 규범의 입법화의 정치과정의 고찰을 통해 국가행동에 국제규범이 어떠한 영향을 주는가를 밝힌 연구도 있다.

국제규범을 주 분석테마로 연구한 논문들의 마지막 영역인 규범이 가져오는 국내질서와 국제질서와의 상관성에 관한 논의에서는 특정규범이 국제질서에서 형성되어 국내질서에 미치는 영향을 분석한 연구들과 국제규범이 형성되어 국내적 법화와 준수를 가져오는 요인에 대한 분석과 그 사례의 실증연구가 포함되었다.

그 다음으로 들 수 있는 관련 주요 테마인 구성주의 이론자체에 대한 연구에서는 우선, 기존의 합리주의 이론과의 비교분석을 통해서 국제정치학에서 구성주의가 등장한 배경과, 구성주의 자체의 존재론적 분석과 구성주의에 기반한 분석범위에 대한 상세한 소개가 전개된 논문이 있다. 학술지 「국제정치」에서는 구성주의 이론 자체에 대한 분석은, 2000년 124호의 「구성주의의 존재론과 그 분석범위」, 2005년 143호의 「구성주의의 시좌와 분석」의 두편이 존재한다. 124호에서는 구성주의의 합리주의에 대한 이론적 비판을 존재론과 인식론으로 자세히 검토하고, 합리주의 이론에서도 구성주의의 주의를 끌 수 있는 접근법이 있음을 제시했다. 143호에서는 국제규범에 관한 연구가 번성한 이유로서 구성주의의 등장을 원인으로 제시하여 논의를 전개하고 무역과 환경규범에서의 규범 충돌과 조정 에 관

16) 총35건중 규범속성을 다룬 논문은 22건이고, 규범의 역할은 5건이다.

한 논의를 그 사례연구로 들고 있다. 이것은 주로 2000년까지의 연구특성이고 2000년 이후의 구성주의에 관한 논의는 구성주의적 연구방법론에 근거한 사회운동, 지역기구논의, 그리고 구성주의의 내용분석과 언설분석 방법을 인용한 연구에 관한 서평등, 구성주의가 함의하는 국제정치학 이론으로서의 배경을 탐구하는 논의들이 있다.

한편, 2000년 124호인 「국제정치 이론의 재구축」이라는 지정테마의 논문집의 서두에서 편집자가 2000년 당시의 북미 국제정치이론의 동향을 분석하고, 일본에서의 국제정치이론의 동향의 분석을 시도하면서 1990년대의 일본의 국제정치학은 북미의 학계와 커뮤니케이션에 있어서 갭이 발생했다고 한다. 그것은 1980년대 북미의 신현실주의의 영향이 일본학계에는 거의 미치지 못했기 때문에, 일본의 국제정치학자에게 있어서 당시 북미에서 왜 국제정치학자들이 다들 구성주의에 주목하는가가 잘 이해되지 않았다고 분석한다.¹⁷⁾ 여기서 알 수 있듯이 2000년 이전의 일본의 대부분의 국제정치학자들에게 있어서 구성주의 언설은 익숙하지않은 언설로, 구성주의나 거기서 파생된 국제규범에 관한 연구가 존재하긴 하지만 극히 소수의 일부학자들에게만 주목받았던 테마라고 할 수 있다. 구성주의 이론 자체에 대한 연구는 2000년 123호의 서평에서 처음 시도되었을 뿐이다.

다음으로, 구성주의 이론자체에 관한 연구를 근간으로 하는 글로벌 거버넌스와 국제 레짐, 제도와 국제기구에 관한 논의는 총 26건인데 여기에서는, 일본의 국제정치학자들 사이에서는 글로벌 거버넌스를 주요 연구 테마로 다루는 학자들이 특히 구성주의적 접근법에 근거하여 글로벌 거버넌스의 논의를 전개시키는 특징을 발견할 수 있다. 지구환경 레짐에 관한 연구에서는 구성주의에서 주목하는 언설과 토의를 통한 합의 도출과정에서 형성되는 국제협력에 관한 연구를, 대인지뢰 금지 레짐에 관한 논의에서도 지배적인 언설이 가져오는 국제규범형성을 통하여 합의에 이르는 레짐 형성과정을 논의하였다. 유엔을 대표로 하는 국제기구의 역할을 논의할때는 글로벌 거버넌스의 형성을 가져오는 국제기구의 역할과, 국제규범의 형성을 가져오는 역할에 중점을 두고 논의한다. 이것은 글로벌 거버넌스의 형성에 있어서 비국가적 액터의 역할을 논의할 때, 국제규범 형성에 있어서 특히 NGO나 국제기구의 역할에 초점을 맞추는 구성주의적 사고에 배경을 둔 논의라고 볼 수 있다. 또한 OSCE와 같은 지역협력체 안에서 동일 규범의 학습을 통해서 국제조직내의 규범설정 기능에 대한 논의와, 그 과정을 통해서 회원국 국내로의 규범 내면화과정에 관한 논의도 있다. 즉, 글로벌 공공질서의 형성에 있어서의 액터의 기대가 수렴되는 지식구조의 한 형태로서 글로벌 거버넌스를 바라보고, 액터 사회화를 통한 글로벌 거버넌스, 그 과정을 가져오는 국제기구의 역할등이 통합적으로 논의된 연구들이다.

또 아이덴티티와 문화를 주요 연구 테마로 한 논문은, 총 16건으로 아이덴티티 테마에서는 1990년대와 2000년대의 연구논문 수가 변동 없이 같다. 이 연구들의 배경으로 볼 수 있는 것은 초기의 구성주의 연구가 구조의 내부적 상호작용에 의한 국가의 아이덴티티와 이

17) 田中明彦(2000) 「序章 国際政治理論の再構築」 『国際政治』 第124号 「国際政治理論の再構築」 p.4

익변화가 가져온 대외정책변화에 중점을 둔 연구에 중점을 둔 것을 들 수 있다. 그리고 국제관계분석에 있어서 아이덴티티를 어떻게 개념 규정하는 것이 왜 필요한가를 논하고, 그 사례연구로서 일본과 호주를 예를 들어 국가적 아이덴티티의 위기에 빠지기 쉬운 나라들이 어떻게 그것을 극복하려 하는가를 분석한 “국제관계에 있어서의 아이덴티티”가 있다. 이것은 구성주의의 이론배경에 근거한 간주관적(intersubjective) 개념으로서 아이덴티티를 성립시키려고 한 연구라고 볼 수 있다. 구성주의의 중심명제중 하나가 국가 이익과 아이덴티티를 문제의식으로 삼고, 아이덴티티가 단순히 내부적인 요인으로만 형성되는 것이 아니라 국제적 상호작용을 통해서 상호주관적으로 형성되는 주장이라는 데 근거한 논의들이라고 볼 수 있다.

마지막으로 국제정치에 있어서 문화에 관한 논의를 살펴보면, 정치학에서의 문화논의는 기존의 정치문화 논의에서 언급된 논제이긴 하지만, 구성주의적 해석에 근거한 문화에 관한 논의는 2002년 129호 「국제정치와 문화연구」의 지정주제 논문집에서 그 시도가 처음 발견된다. 여기에서는 냉전이 끝나고 자본주의의 글로벌화를 통한 문화의 소통과 개방에서 오는 국제정치적 이슈에 관한 논의를 전개했다. 사람과 물건, 자본의 국제이동이 증가되고 국경을 초월한 트랜스내셔널 커뮤니티가 형성되고, 정보문화의 글로벌화가 심화되는 현재의 국제사회 현실에서는, 인간사이의 상호주관적인 상호행위에 의해 문화가 형성되고 그 과정을 통해 국가 아이덴티티, 개인 아이덴티티가 국제관계에 반영된다는, 구성주의적 관점이 글로벌 문화의 형성을 해석하는데 적절하다고 논의한다.

4. 결론 및 과제

상기 논문들의 내용분석을 통하여 알 수 있는 결과는, 일본의 국제정치학에서의 국제규범에 관한 연구테마가 대체적으로 1)국제규범, 2)아이덴티티/문화, 3)구성주의이론, 4)거버넌스/레짐/ 제도/국제기구 연구로 나뉘는 현상이 보였다. 언뜻 산발적인 국제규범의 연구인 것처럼 보이지만, 사실은 일정한 테마 선호성향을 가지고 학자들이 연구를 시도하고 있는 것으로 판단된다. 또한 일본의 국제정치학에서 국제규범 연구를 가장 많이 다루는 논의 중의 하나는 NGO나 국제 레짐에 관한 연구와 연계해서 논의하는 연구가 많다. 이것은 국제사회에서 NGO의 역할과 활약이 증대하는 것과 같이하여, 국제정치학의 입장에서 새로운 액터의 등장을 논의하는 언설로서, 국제규범을 환기시키고 형성하는 규범기업가로서의 NGO 역할 논의에 기반한 배경으로, 이것을 어떠한 정치적 언어로 논증할 것인가에 관한 의문에서 출발한 논의들이라고 볼 수 있다. 여기에는 ODA(정부개발원조)를 필두로 하는 일본의 활발한 국제 개발 원조의 행태와 관련한 NGO연구, 전후 평화연구의 기반에서 출발한 인간안전보장과 인권 NGO연구 등이 중심을 이룬다.

국제레짐을 다루는 연구에 있어서는 1980년대 후반까지는 신자유주의 제도주의의 관점에

기반한 레짐 연구가 주류였으나, 1990년대 초반을 거치면서, 국제 레짐의 형성과 국제조약의 성립에 있어서의 규범의 역할에 주목하는 논의가 점점 증가했고, 특히 레짐 형성 후의 룰과 원칙의 준수, 국제조약의 이행, 비준, 준수등 국내정치에 미치는 법제화와 준수에 있어서의 국제규범의 역할을 중요시 하는 연구도 주목할 만하다. 이러한 연구에 있어서는 1990년대 초반 학부를 거치면서 2000년대 중반부터 학위를 취득하고 새롭게 등장한 30대 중반 이후의 젊은 학자들을 중심으로 한 연구가 돋보인다.¹⁸⁾

1990년대 일본 국제정치학에서의 국제규범연구에 관한 전반적 평가는, 1950년대 이후, 일본 국제정치학 연구 방법 중 하나인 이론 연구를 중시하는 풍토에, 복잡적이고 실증적 연구가 더해져서 일본적 국제정치학 이론에 대한 모색의 노력이 돋보이는 분야라고 할 수 있다. 서구적 국제정치학의 단순한 수입을 넘어서, 국제협력과 유엔을 중시하는 일본의 외교 정책에 근거한 일본적 국제정치학의 관점에서 글로벌 거버넌스 논의, 국제레짐 논의의 주요한 한 축으로서, 국제규범에 관한 지속적인 연구가 실행되고 있는 것이라고 읽을 수 있다. 그렇기 때문에 2000년 이후의 일본의 국제정치학에서 행해지고 있는 규범에 대한 활발한 연구는 주목할 만하다.

더불어 국제정치에서의 주요 액터를 국가에 국한시켜서 연구를 진행하던 시대와는 달리, 현대의 국제정치에서는 다양한 주요 액터들이 등장하는데, 새롭게 등장하는 액터에 대한 새로운 이론적 기반을 살피는 논의로서 주목할 만하다. 일본의 국제정치학은 미국의 국제정치학의 영향을 많이 수용하고 있는 부분도 보이지만, 20여년 전부터 조금씩 증가하기 시작한 북미 유학파들 사이에서도 계량분석에 의한 논의는 잘 실행되고 있지 않고, 오히려 이론적, 개념적, 아이디어 접근법을 통한 국제정치해석에 많은 시도를 하고 있는 것을 알 수 있다. 즉, 상기에서 서술한 기존의 일본적 연구 성향에서 출발한 규범연구가 번성하고 있다고 할 수 있다. 일본의 국제정치학 연구는 시대에 부응하는 연구를 하는 한편, 이론연구와 역사적 연구를 중요시하는 기존의 연구기반에 근거한 연구에도 소홀하지 않고 지속적인 관심을 두고 있고, 시대에 부응하는 연구와 기존의 연구기법과의 복합적 연구도 많이 주목을 받고 있는 것이 사실이다.

앞으로도 더욱 깊이 일본 국제정치학에 대한 관심과 연구가 필요하겠지만, 국제규범 분야의 고찰에서 알 수 있듯이, 그 고찰을 통한 비서구적 국제관계론의 구축가능성 여부에 관한 논의가 함께 필요하다고 할 수 있다. 그리고 동아시아 공동체의 실질적 구축을 향한 이론적 배경으로서, 상호인식과 토의를 통해 이질문화 사이에서도 통합과 협력이 이루어질 수 있다고 주장하는 구성주의와 국제규범적 기반에 대해, 일본의 연구와 같은 정도의 논의의 심화가 한국의 토양에도 필요하다. 마지막으로 아시아 국가들의 국내정책 결정에 영향을 미치는 국제규범의 역할의 검증(한일비교)을 통하여 통합을 향한 이론구성을 위한 노력에 일조를 할 수 있을 것으로 본다. 동아시아를 구성하는 주요 구성체인 한국과 일본의 공

18) 도쿄의 각슈인대학(学習院大学)의 사카구치 이사오(阪口功), 교토의 리츠메이칸대학(立命館大学)의 아다치 켄키(足立研幾), 케이오대학(慶應大学)의 미야오카 이사오(宮岡勲)가 그 중심인물이다

통적인 발전과 번영을 위해서라도 양국의 국제정치학 연구의 현실을 파악하고 그 대안점을 찾는 것은 중요한 의미를 지닌다고 본다.

◀ 참고문헌 ▶

- 박철휘(2001) 『일본국제정치학의 패러다임 변화』, 현대일본학회, 일본연구논총 제14호. pp.195-215
田中明彦(2009) 「序章 日本の国際政治学—「棲み分け」を超えて」 『日本の国際政治学 第1巻-学としての国際政治』, 日本国際政治学会編. pp.1-19
酒井哲哉(2009) 「近代日本外交史」 『日本の国際政治学 第4巻 - 歴史の中の国際政治』, 日本国際政治学会編
李鍾元(2012) 「日本の国際政治学の構築における理論と歴史」, 日本国際政治学会2012年度研究大会論文
John G Ruggie(1998) “What Makes the World Hang Together? Neo-utilitarianism and the Social Constructivist Challenge,” *International Organizations* 52, pp.855-885

- 투 고 : 2012. 11. 30.
- 심 사 : 2012. 12. 15.
- 심사완료 : 2013. 01. 15.

‘일기일회’와 ‘독좌관념’을 통해본 일본다도의 수양적 성격

朴 銓 烈*
ipark@cau.ac.kr

<要 旨>

江戸末期、鎖国から開港に向かい国家体制が激変する時期の政治家である井伊直弼は茶人としても重要な業績を残した。彼は当時の遊興的な要素が強調された茶道界を批判し、精神性を強調する茶道を追い求めた。彼の茶道観は「茶湯一会集」前書きの「一期一会」の論と結論の「独坐観念」という用語に集約することができる。

領主の息子として成長する過程で心身の修練方式の一つで茶道を習い、茶道は単純な道楽ではなく高度の精神世界を修める手段でなければならないと思った。彼は茶道修養過程をまるで自分との熾烈な闘い過程であるかのように思った。彼は厳肅で非常に真剣に茶道に没入し、茶道は政治の道(政道)に役に立たなければならないと考えた。

実はお茶を飲む時、楽な心で主人と客が交われば十分なのに、一般人としては高揚された精神性を維持することは現実ではかなり無理なことである。一期一会の茶道は一種の精神的な理想郷であり、虚構の世界と言える。

今日、日本文化の各方面で「一期一会」という単語が頻繁に用いられ、茶道専門用語に限定されないで、真剣に取り組む人間関係、人と接する時の真面目な姿勢など意味するようになっている。一期一会は日本の井伊直弼によって造語された言葉であるが、韓国でも広まっていることが注目される。井伊直弼は真剣ながらも熾烈な自己省察的な姿勢で望むは茶道の世界のために「独坐観念」という概念を主唱した。今日、日本の茶人の間では覚えるべき概念として定着している。

井伊直弼の茶道は単に茶を飲む行為の洗練さを求めることに留まらず、高揚された精神世界を追い求める修養の方式としての茶道であった。窮極的には政治家として一瞬一瞬を真剣に考えなければならないという修行者の姿勢をもつての茶道を追い求めながら、一期一会と独坐観念という新しい造語で概念を表現し、新しい茶道の世界を開拓したことには歴史的意義があると考えられる。

キーワード：茶湯一会集、一期一会、独座観念、井伊直弼、政道

1. 서론

에도시대 말기에 히코네번(彦根藩)의 영주이자 막부의 다이로(大老)로써 격변기의 정치 일선에서 활약한 이이 나오스케(井伊直弼 1815-1860 이하 나오스케)는 다도에도 조예가 깊어 많은 저서를 남겼다. 그는 다서(茶書) 「차탕일회집(茶湯一会集)」에서 남달리 철저한 수양성을 강조하는 다도관(茶道觀)을 새로운 용어로 전개하며, 다도가 유희성이나 사교성보다 높은 정신세계를 추구해야 한다는 목표와 방향을 제시해주는 것이었다. 특히 ‘일기일회(一期一会 이치고이치에)’와 ‘독좌관념(獨坐觀念 도쿠자칸넨)’이라는 구절을 통하여 진지한 각오로 다회(茶會)에 임할 것, 철저한 구도정신으로 다회를 마무리할 것 등을 주장하여 이와 같은 다도의 정신은 다인(茶人)의 세계뿐만 아니라, 일반사회에도 영향을 커다란 영향을 끼쳤다고 할 수 있다.

* 중앙대학교 교수

일본에서 다도를 배우는 사람이라면 ‘일기일회’라는 말을 모르는 사람이 없다고 할 정도로 보편화된 다도세계의 중요한 개념이다. 일기(一期)란 불교에서 말하는 한 사람의 일생이라는 뜻으로 쓰이는 용어이며, 일기일회란 한 차례 한 차례의 다회를 진행할 때, 주인이나 손님은 이번 다회가 내 일생에 처음이자 마지막 다회라는 각오로 정성을 다하여 진지하게 진행해야 한다는 마음가짐을 뜻하는 다도 용어이다. 이 말이 근년에는 다도의 세계뿐만 아니라 일상생활에도 널리 쓰이고 있다. 이전보다 인간관계에 깊이를 추구하기 어려운 현대 사회에서, 인간관계의 진지성을 강조하는 용어로 널리 쓰이고 있음을 알 수 있다. 예를 들면 서명(書名)에도, 50명의 택시운전수의 감동적인 에피소드를 엮은 『일기일회 서비스(一期一会サービス)』¹⁾, 기행문집인 『일기일회의 여행(一期一会の旅)』²⁾, 작가 이노우에 야스시(井上靖)의 수상록 『나의 일기일회(わが一期一会)』³⁾이 있는가 하면 그의 딸이 부친을 회상하는 글 『부친 이노우에 야스시의 일기일회(父・井上靖の一期一会)』⁴⁾ 등 많은 서명에 등장하며, 상점의 명칭이나 상품의 명칭에도 널리 쓰이는가 하면, 유행가의 곡명⁵⁾으로도 자주 쓰일 정도로 대중의 인지도가 높은 단어라 할 수 있다. 즉 「일기일회라는 다도용어가 일반화된 것」⁶⁾이다.

일기일회는 중국에서 형성되어 한국이나 일본에서도 널리 쓰이는 4자성어(四字成語)의 형성과정과는 달리 일본의 다도가 발전되는 과정에 일본에서 형성된 말이다. 그런데 그 의미가 심오하지만 공감하기 쉽기 때문인지, 근년에 한국에서도 쓰이기 시작하였다. 예를 들면, 노래의 곡목이나 유명인사의 연설문 가운데 혹은 서명에도 등장되는 등 이 단어의 용례가 차츰 빈번해지고 있는 현상이 검색된다.

특히 우리나라의 승려 법정(法頂 1932-2010)은 법문집을 내면서 서명을 「일기일회」라고 하고, 2008년의 가을 정기법회의 법문 부분은 「일기일회」라 제목을 붙였다. 이 책에서 따로 일기일회의 뜻을 설명하지는 않았고, 해당 법문을 「이 삶을 당연하게 생각하지 마십시오. 모든 것이 일기일회, 한 번의 만남, 한 번의 기회입니다. 이 고마움을 세상과 함께 나누기 위해서 우리는 지금 이렇게 살아가고 있습니다. 좋은 가을 맞이하시기 바랍니다.」⁷⁾라고 마무리했다. 이 단어는 많은 사람들이 그 뜻을 알고 있다는 전제로 문장을 전개하고 있음을 알 수 있다. 정작 이 말이 일본 다도에 근원을 두고 있는 용어임은 인식하지 못하는 채, 한국에서도 차츰 뿌리를 내리고 있음을 지적하고자 한다.

독좌관념이란 다회를 마치고 손님이 떠난 뒤에 홀로 남은 주인은 서둘러서 찾자리를 정

-
- 1) 酒井大介(2012) 『一期一会のサービス』 総合法令出版
 - 2) 福田秀夫(2007) 『一期一会の旅』 文芸社
 - 3) 井上靖(1998) 『わが一期一会』 日本図書センター
 - 4) 黒田佳子(2000) 『父・井上靖の一期一会』 潮出版社
 - 5) 中島みゆき(2012) CD 「一期一会」 ヤマハミュージック
布袋寅泰(2012) DVD 「30th ANNIVERSARY ANTHOLOGY III“一期一会”」
七宮史浩(2010) CD 「一期一会-約束の場所へ」 7 Sound Records
 - 6) 筒井紘一(2007) 『茶の湯のことば』 淡交社 p.3
 - 7) 법정(2008) 『법정스님 법문집·1 일기일회 一期一会』 문학의숲 p.41-54

리할 것이 아니라, 차분히 혼자 앉아 손님과 나누었던 이야기나 진행과정을 성찰해보아야 한다, 즉 관념하는 시간을 가져야 한다는 다도의 개념이다. 이와 유사한 개념은 이전부터 있었으나 나오스케는 독좌관념이라는 정리된 용어로 개념을 정리하여 분명하게 하였다.

본고는 이 단어가 다서(茶書) 「차탕일회집(茶湯一會集)」에 정착되기까지의 과정을 살피고, 저자 이이 나오스케가 추구한 수양의 방법으로써의 다도 즉 남달리 치열한 자기성찰적인 다도관(茶道觀)을 형성하는 과정과 그 의미를 밝히는데 목표를 두고자 한다. 이를 통하여 일본다도가 추구하는 가치관의 일면에 대한 심층적 이해를 시도하고자 한다.

2. 이이 나오스케의 시대적 배경과 다도의 환경

이이 나오스케는 직접 다도를 즐기며 다도를 논하는 여러 권의 책을 남긴 다인이기도 하지만, 에도 말기의 격변기에 막부의 요직을 담당하여 쇄국에서 개국정책으로 전향하는데 중요한 역할을 담당하다가 정적에 의하며 살해당한 정치가로 기록되어 있다.

지금의 시가현(滋賀縣) 히코네시(彦根市)의 비와호(琵琶湖) 동쪽에 위치한 히코네성(彦根城)은 이이(井伊) 가문이 영주를 계승해왔다. 가문의 시조인 이이 나오마사(井伊直政, 1561-1602)는 세키가하라 전투(関ヶ原の戦い)에서 도쿠가와 이에야스(徳川家康)의 부하로써 큰 공로를 세워 사와산번(佐和山藩)의 영주로 책봉받았다. 1606년 아들 대에 지리적 여건이 좋은 히코네에 성을 신축하여 이후 막부제도가 폐지되기까지 후손들은 이 성을 계승하였다.

에도시대의 대다수의 영주는 무사로써 지녀야 할 교양이자 사교와 수단으로 혹은 자기수련의 방식으로 다도를 익혔다. 다도는 단순한 소양의 단계를 넘어서 무사사회의 의식(儀式)으로 채용되어 사범을 초빙하여 다도를 배우고, 귀인의 방문 시에는 반드시 다회를 열어 차를 대접하는 전통이 있었다. 히코네번의 경우도 예외는 아니었고, 제14대 다이묘 나오스케도 일찍부터 다도를 수양의 방편으로 다도를 수련하는 한편 가문에 전해지는 많은 다서를 섭렵하여 다도의 역사나 이론적 측면에도 해박한 지식과 정보를 지니고 있었다.

나오스케는 제13대 영주인 이이 나오나카(井伊直中 1729-1789)의 아들로 출생하였으나, 많은 형제 가운데서 14째였기 때문에 가문을 이어받을 가망이 없는 처지였다. 부친 나오나카는 3남 이이 나오아키(井伊直亮 1794-1850)에게 제14대 영주로 가문을 승계하게 했다.

14번째 아들인 나오스케는 다른 형들이 성장하면서 히코네번에서 관직을 받거나 다른 가문에 양자로 떠나는 등 차례로 자리를 잡았지만, 14번째 아들이었기 때문에 좋은 자리를 얻을 기회가 좀처럼 찾아오지 않았다. 에도에 가서 양자 자리를 구해보기도 하였으나, 적절한 인연을 찾지 못하고 실의에 빠져 히코네로 돌아온 후에 심신의 수련에 매진했다.

17세 때 부친이 죽자 곧 녹봉(祿俸)으로 매년 300섬을 받는 히코번의 하급 가신으로 임명받은 뒤에는 성에서 나와 부근의 주택에서 독립해서 살게 되었다. 불우한 환경에 처한 가운데서도 나오스케는 심신을 수련하여 무술연마와 독서와 다도를 지속했다. 이때 거처를

'우모레기야(埋木舎)' 즉 땅속에 파묻힌 나무 같은 사람이 사는 집이라고 명명하며, 자신은 출세는커녕 파묻혀 이름 없는 존재로 살아가야 하는 운명이라고 각오하면서, 강인한 의지를 키워갔다. 그런 가운데서도 유학(儒學), 국학(國學), 선(禪), 시가(詩歌) 등의 문인정신과 검술, 궁술, 유술(柔術) 등의 무술을 비롯하여 다도, 노(能) 등에 몰두하며 수도자의 자세로 심신을 연마했다.

우모레기야의 생활이 15년째 되던 해, 형 나오아키(나오나카의 3남)의 세자로 책봉되어 있던 나오모토(直元, 나오나카의 11남)가 아들을 두지 못한 채로 갑자기 죽자, 뜻밖에 형 나오아키의 양자로 입적되어 가문을 잇게 되었다. 정상적인 상황이라면 영주를 승계할 기회가 거의 오지 않을 14째 아들이 세자가 되었고, 4년간의 세자 시대를 보낸 후 1850년, 나오키는 35세에 히코네번의 제15대 영주가 되었다. 영주의 아들로서는 불우한 청년기를 보내었지만, 꾸준히 자신을 연마하는 등으로 준비하며 때를 기다린 결과 행운을 얻게 되었던 것이다.

도쿠가와 막부 성립 이래로 히코네번은 대대로 큰 신임을 얻고 있었다. 나오키의 기량을 높이 평가한 막부는 1858년 4월에 나오키에게 다이로⁸⁾라는 중책에 임명하여 에 국사에 깊이 참여하도록 한다. 지방에서 뜻을 펼치지 못하고 세월을 보내고 있던 나오키가 44세에 「다이로에 취임함은 실로 의외의 일」⁹⁾이었다.

이 시기는 미국의 페리제독이 이끄는 함대가 우라가(浦賀)에 입항한 이래 미일화친조약을 맺는 등, 일본은 구미열강으로부터 강한 개방 압력을 받으며, 개국여부에 대한 의견이 분열되어 큰 혼란을 겪고 있었다. 나오키는 다이로에 취임한 직후 6월에는 조정의 허가를 받지 않고 미일수호통상조약을 체결¹⁰⁾함으로써 반대파로부터 거센 비판의 대상이 되었다. 이 시기에 제12대 쇼군의 장남 도쿠가와 이에사다(德川家定)가 제13대 쇼군에 취임하지만, 후사(後嗣)를 이을 아들도 없고 병약하여 권력을 장악하지 못하자, 서둘러 후사를 정해야 하는 상황에 이르렀고, 이해를 달리하는 정파 간에 충돌이 생겼다. 한편에서는 이에사다의 조카인 이에모치(家茂)를 제14대 쇼군으로 옹립하려 했고, 또 한편에서는 미토번(水戸藩)의 영주 도쿠가와 나리아키(德川齊昭)의 아들 요시노부(慶喜, 나중에 15대 쇼군 취임)를 옹립하려 했다. 나오키는 반대를 무릅쓰고 이에모치를 옹립하는데 앞장서서 뜻을 이루어, 이에모치가 쇼군으로 취임하자 권력을 장악하자 반대파의 숙청에 나섰다. 그는 1858년에 이른바 「안세이(安政)의 대옥(大獄)」라 지칭되는 대규모 탄압에 나서 많은 사람이 죽거나 투옥되어 큰 비난의 대상이 되었다. 결국 1860년 3월에 에도막부에 출근하는 도중에 반대파 낭인(浪人)에게 살해당하였는데, 이를 '사쿠라다 문밖의 사변(桜田門外の變)'이라 한다.

나오키에 대한 역사적 평가는 오늘날에도 극단적인 두 갈래로 나뉘어져 있다. 「이이

8) 에도막부에서 쇼군에게 직속하여 막부를 총괄하는 최고 관직. 상시 근무하는 직책이 아니라 필요에 따라 임명되며 로주(老中)를 통솔한다. 대대로 막부의 신임을 받는 4개의 가문 가운데서 임명되었다.

9) 井上友一郎(1975) 「井伊直弼」 『人物日本の歴史18 開国と攘夷』小学館 p.35

10) 이이 나오키와 미국 영사 하리스(Townsend Harris 1804-1878)가 조인하여 하코다테, 가나가와, 나가사키, 니이가타, 효고 등 5개 항구를 개항하게 되었다. 이후 네덜란드, 러시아, 영국, 프랑스와도 같은 조약을 체결했다.

나오스케처럼 휘예포핍(毀譽褒貶)이 극심한 인물은 일본역사상 매우 드물다. 그는 때에 따라서 과단하게 조약을 맺은 개국의 공로자라고 칭송받는가 하면, 어떤 때는 무단히 조약을 체결한 책임자라는 낙인을 찍어 악인으로 여긴다.¹¹⁾ 청년기에 강인한 내면세계를 연마해 오던 나오스케는 격변기에 정치의 일선에 나서자 강력한 반대세력에게 굴하지 않고 주장을 관철시키려고 한 인물로써 개성과 의지가 매우 강했음을 알 수 있다.

이와 같은 강한 의지는 오랜 심신의 수련과정에서 확립된 것이라고 여겨지며, 특히 어려서부터 지속한 다도의 육체적 수련과 많은 다서를 섭렵하며 자기류(自己流)의 다도관을 확립하였고, 이는 그의 저술 가운데 잘 나타나 있다.¹²⁾

당시 에도말기에 다도는 무사사회에서 무사의 의례나 교양으로 전개되었을 뿐만 아니라 도회지의 상공인 즉 조닌(町人)사회에도 교양이나 놀이로써 다도가 널리 보급되어 있었다. 조닌 사회의 다도는 진지한 다도정신을 추구하기보다 취미나 도락 혹은 여흥으로 다도를 즐기려는 풍조로 나타났는데, 이를 「다도의 유예화(遊藝化)」라 하여, 다도는 사회적으로 비판의 대상이 되고 있었다. 이런 시기에 나타난 비판적 견해는 「미적 감각을 무디게 한다」, 「재물을 탕진하게 된다」, 「다도에 탐닉하여 자기관리를 하지 못하게 된다」는 등 구체적인 폐해를 제시하며, 이른바 「유예 비판론」¹³⁾이라는 담론으로 정신성보다는 화려함이나 형식미를 중시하려는 다도계에 경종을 울려주고 있었다.

3. 일기일회 관념의 성립과 의미

나오스케는 어지러운 정치적 상황 가운데서도 친구를 불러 다회를 주재하고 다도에 관한 저술을 지속하였고, 살해되기 한달 반 전까지 다회를 개최하며 그 과정을 상세하게 기록한 다회기(茶會記)를 남겼다.¹⁴⁾ 특히 어려서부터 계속한 다도는 단지 전통을 지키는데 그치지 않고, 수련하는 과정에 새로이 터득한 사항이나, 스스로 심화시킨 다도관을 저술로 남겼다는 점은 높은 평가를 받을 만하다.

그는 31세 때 다도에 관한 각오를 밝히는 글인 「입문기(入門記)」¹⁵⁾를 비롯하여 다도의 역사와 일화를 기록한 「한야다화(閑夜茶話)」¹⁶⁾, 다도의 정신성은 정치를 하는데 활용되어야 한다는 이론¹⁷⁾ 등을 남겼다. 특히 그의 다도관의 정수는 「차탕일회집(茶湯一会集)」에 잘 정리되어 있다. 이 글은 이상적인 다회의 진행순서를 제시하면서 다인의 투철한 다도정신을

11) 吉田常吉(1989) 『井伊直弼』 吉川弘文館 p.1

12) 井伊直弼(1956) 「入門記」 『修養篇・茶道篇』 日本哲学思想全書16 平凡社 p.264
나오스케는 31세 때 石州流를 떠나 자신이 시조가 되는 일과를 창립한다고 선언했다.

13) 박전열(2011) 「에도시대의 다도비판론과 전다도」 『일본학보』89 한국일본학회 p.3-8

14) 熊倉功夫(1985) 『昔の茶の湯 今の茶の湯』 淡交社 p.169

15) 井伊直弼(1956) 「入門記」 『修養篇・茶道篇』 日本哲学思想全書16 平凡社 p.263-266

16) 井伊直弼(2010) 「閑夜茶話」 『茶湯一会集・閑夜茶話』 岩波書店 p.143-296

17) 井伊直弼(1976) 「茶道の政道の助となるべきを論へる文」 『近世政道論』 日本思想大系38 岩波書店 p.346-35

서론과 결론에서 새로운 용어와 개념으로 정리하였다. 여러 차례 내용과 어휘를 수정하는 등 심혈을 기울여 작성한 이 글은 히코네번의 영주로써의 임무를 수행하는 한편 막부정치에도 참여하던 시기인 1857년에 최종 정서본이 완성되었다.

나오스케도 당시 대부분의 영주와 같이 무가다도(武家茶道)를 전수받았다. 그의 가문에는 무가다도의 대표적인 유파인 세키슈류(石州流) 다도가 전해졌는데, 「당시 세키슈류의 대표적인 다인으로 알려진 가타기리 소엔(片桐宗遠, 1775-1864)에게 사사」¹⁸⁾하였다. 직접 스승에게 지도를 받지 못하는 상황에서는 의문사항을 반복적으로 편지를 보내 문의하고 답신을 받는 형식으로 수행하며 다도의 정신세계를 심화시켰다.

『차탕일회집』의 서명은 다회는 일기일회 정신으로 진행되어야 한다는 주장이 반영되었다. 다회를 주최한 주인과 초대받은 손님, 혹은 손님과 손님은 일생에 단 한 번만 만나는 자리라고 생각하며 고조된 긴장감을 가질 때 진지한 교류가 이루어진다는 것이다. 이러한 한 차례의 다회 즉 차탕일회(茶湯一會)를 일기일회 정신으로 시작하여 다실을 꾸미기, 차 끓이기, 주인과 손님의 자세, 배웅하기 등이 상세하게 서술되어 있다. 여러 내용 가운데서도 서론에 나오는 「일기일회」라는 개념과 결론의 제목인 「독좌관념(獨座觀念)」은 각별한 의미를 지닌다.

본론은 서론에서 밝힌 일기일회 정신으로 다회를 진행하는데 주인과 손님이 알고 있어야 할 구체적인 준비사항과 작법을 순서대로 기록하였다. 손님을 초대하는 방법, 다실과 로지¹⁹⁾ 그리고 변소 청소하기, 다도구 준비, 대접할 음식 즉 가이세키(懷石)²⁰⁾ 준비, 손님을 맞이하여 인사하기, 숯불을 다듬고, 음식을 대접하고, 이야기를 나누며 차를 대접하기, 손님 보내기, 결론에 해당하는 부분으로 손님을 보낸 뒤에 혼자 앉아 반성하기 등이 장별로 상세히 기술되었다. 결론부는 독좌관념을 논하였으며, 전체는 23단락으로 구성되었다.

『차탕일회집』에는 나오스케의 다도관이 총집약되어 있다고 할 정도로 진지한 다도론이 전개되고 있다. 이 글은 「현재 초고본(草稿本) 2가지와 정서본(淨書本)이 남아 있고, 초고본에는 여러 차례 수정과 추가를 반복하며 퇴고한 흔적이 남아 있다. 그만큼 나오스케가 심혈을 기울여 완성한 다도론이라는 의미를 지닌다.

『차탕일회집』의 다음과 같은 서문은 다회의 진지성을 추구하는 일기일회론으로 시작된다.

此書は、茶湯一會之始終、主客の心得を委敷あらはず也、故に題号を一会集といふ、猶、一会ニ深き主意あり、抑、茶湯の交會は、一期一会といひて、たとへば幾度おなし主客交會すとも、今日の會にふたゝひかへらざる事を思へば、實ニ我ニ一世一度の會也、去るニより、主人ハ万事ニ心を配り、聊も

18) 母利美和(2007) 「井伊直弼の茶の湯観」 『井伊直弼の茶の湯』 国書刊行会 p.56

19) 로지(露地)란 다정(茶庭)이라고도 하며 다실에 딸린 정원으로, 나무를 심고 돌을 깔아 길을 내고, 중간에 문을 만들어 그윽한 산중으로 들어가는 분위기를 나도록 만든다. 석등, 물그릇, 변소, 대시석 등을 설치한다.

20) 가이세키(懷石)란 불교 선종의 용어로, 참선하는 승려가 겨울밤에 추위와 허기를 달래기 위하여 돌덩이를 품는 일 또는 그런 돌을 말한다. 저녁밥을 짓을 때 부뚜막에 돌을 얹어 따듯하게 데워두었다가 형겅으로 써서 품는다. 가이세키처럼 실제로 배가 불러지는 것이 아니라, 허기를 달래주는 것 즉 조출한 요리하는 뜻. 혹은 다실에서 손님에게 간소하지만 정성껏 차려 내는 요리라는 뜻.

庵末なきやう深切実意を尽し、客ニも此会ニ又逢ひかたき事を弁へ、亭主の趣向、何れつもおろかならぬを感心し、実意を以て交るへき也、是を一期一会といふ、必々主客とも等閑にハ一服をも催すましき筈之事、即一会集の極意なり²¹⁾

이 글은 다회 한 차례의 시작부터 끝까지, 주인과 손님의 마음가짐을 자세히 쓴 것이기 때문에 제호를 일회집이라 한다. 또한 일회에는 깊은 주의가 필요하다. 무릇 다도로 만나는 자리는 일기일회라고 한다. 가령 여러 차례 같은 주객이 자리를 함께 한다고 해도, 오늘 모인 자리와 같을 수 없음을 생각하면 실로 내 인생에 단 한 번밖에 없는 모임이 된다. 그러하니 주인은 만사에 마음을 다하여 조금도 소홀함이 없이 깊이 있고 절실하게 진실한 마음을 다하고, 손님도 이후로 두 번 다시 만나기 어렵다는 것을 깨달아야 하며, 주인의 취향이 어느 것 하나도 소홀함이 없음을 깊이 느끼며 진심을 나누어야 한다. 이를 일기일회라 한다. 반드시 주인과 손님이 진지하지 않고 건성으로 하는 차라면 단 한 잔도 마시지 않는다. 여기에 일기일회집의 깊은 뜻이 있다. (필자 역)

일기일회(一期一會)란 매년 열리는 찻자리라 해도 인생에 단 한번밖에 없는 기회처럼 서로 소중히 여겨야 한다는 뜻이다. 인생은 무상할 뿐만 아니라, 사람의 마음도 만나는 상황도 모두가 바뀌는 것이고 보면 오늘 모인 이 자리는 인생에 단 한번 밖에 없는 다회라는 점을 명심하여 주인과 손님 모두가 진지하게 차회에 임해야 한다는 의미이다.

일기일회라는 단어는 이 대목에서 처음 나타나지만, 다도에서 유사한 개념으로 쓰인 용례는 이전에도 있었다. 일본의 고등학교 일본사 교과서에도 「다도의 방식을 완성²²⁾한 인물로 기술되는 센리큐(千利休, 1522-1591)가 이미 이와 같은 정신을 논하였고, 그의 제자 가운데 다도에 뛰어난 미의식을 지닌 야마노우에노 소지(山上宗二, 1544-1590)도 『야마노우에노 소지노키(山上宗二記)』에 「일기에 단 한번의 모임(一期一度ノ會)」이라는 유사한 개념을 제시한 바 있다.

이 책은 다도의 역사, 명물 다도구에 대한 소개, 스승에게 들은 다도이야기와 자신의 다도론을 기록한 것으로, 다인으로써 지녀야 할 마음가짐을 논하는 ‘차탕자각오십체(茶湯者覺悟十體)’라는 부분이 있다. 야마노우에노 소지는 일기일회라는 단어를 쓰지는 않았지만, 나 오스케보다 약 250년 앞서 유사한 의미로 해석할 수 있는 일기일도회(一期一度ノ會)를 논하였다. 야마노우에노 소지가 다회에서 손님이 갖추어야 할 정신자세를 다음과 같이 제시했다.

客人フリ事

在一座ノ建立ニ、条々密伝多也、一義初心ノ為ニ紹鷗ノ語伝ヘラレタリ、但、当時宗易嫌ルル也、端々夜話ノ時云出サレタリ、第一、朝夕寄合間ナリトモ、道具ヒラキ、亦ハ口切ハ不及云ニ、常ノ茶湯

21) 井伊直弼(1977) 『茶湯一会集』茶道古典全集10 淡交社 p.331

22) 五味文彦 他(2010) 『山川日本史』山川出版社 p.147

ナリトモ、路地へ入ヨリ出ルマテ、一期二一度ノ会ノヤウニ、亭主ヲ可敬畏、世間雜談、無用也²³⁾

손님이 지녀야 할 마음가짐

하나의 차 마시는 자리 즉 일좌를 성립시키는데 여러 가지 비밀스럽게 전해지는 사항이 많다. 첫째 초심자를 위하여 다케노 조오가 말씀하셨던 것이다. 단지 당시에 소에키는 이 말을 싫어 했다. 평소에 자주 만나는 사람들이 여는 다회라거나 다도구를 소개하는 다회 혹은 새로 찾아온 단지를 개봉하는 다회는 말할 것도 없고, 평소의 다회에서도 다실에 들어왔다가 다회를 마치고 나갈 때까지 일생에 한번의 만남처럼, 주인을 경외하는 마음을 가지며 세간에 대한 잡담은 하지 않는다. (필자 역)

일좌건립(一座ノ建立)이란 제아미(世阿彌, 1363년경-1443년경)가 노(能)의 역사와 이론을 편술했던 『풍자화전(風姿花傳)』에 「하나의 노 공연집단 즉 일좌(一座)를 경영해간다」는 뜻으로 이미 쓰였던 말이다.²⁴⁾ 일정한 목표를 공유하는 사람들이 목표를 수행하기 위하여 한 자리에 모이는 일, 혹은 모인 자리를 일좌건립이라 하여, 목표를 공유한다는 정신성을 소중하게 여기는 전통이 확립되어 있었던 것이다. 다도에서는 진지한 마음으로 정성을 다해서 한 차례 한 차례의 다회를 개최한다는 뜻으로 다케노 조오(武野紹鷗, 1502-1555)는 다회는 일좌건립과 같은 것이라는 뜻으로 이 용어를 쓴 것이라 생각된다. 그러나 다회의 개최를 일좌건립이라는 용어로 설명하려는 다케노 조오와는 달리 센리큐는 이 말을 마땅하게 여기지 않았다.

그후에 센리큐의 제자인 난보 소케(南方宗啓)가 스승의 언행을 기록한 다서(茶書) 『남방록(南方錄) 1690년경』에는 일좌건립은 나오지 않고, 「일좌일회(一座一会)」²⁵⁾라는 단어가 나타난다. 여기서는 주인과 손님이 한 자리에 모여 여는 한 차례의 다회라는 의미로 쓰였기 때문에 일기일회의 고도로 고양된 정신을 추구한다는 의미의 일기일회의 정신이 강조된 용어는 아니었다.

야마노우에노 소지는 일기일도(一期二一度)의 정신 즉, 다회에 참석한 손님은 두 번 다시 이런 대접을 받을 수 없다고 생각하며 주인을 경외하는 마음으로 다회에 임해야 한다고 다인의 각오해야 할 바를 제시하였던 것이다.

나오스케가 말한 일기일회는 나오스케가 읽은 다서 가운데 일기일회라는 단어의 모형(母型)이라고 할 수 있는 「일기에 한 번의 모임(一期一会ノ参会)」이라는 구절이 발견되었다. 다니무라 레이코(谷村玲子)는 히코네번에 전해지는 문서 가운데 나오스케가 애독하였던 다서 『계서여담(溪鼠余談)』 가운데 「一期二一度の参会」와 「一期一会の會」라는 구절을 발견하고, 나오스케는 「이 구절의 의미를 심화시키고 같고 다듬은 용어로써 일기일회를 제창한 것」²⁶⁾이라는 견해를 제시하였다. 『계서여담』은 세키슈류에 소속한 다인으로 세키슈류 오구

23) 山上宗二(1977) 『山上宗二記』 茶道古典全集6 淡交社 p.93

24) 世阿彌(1974) 「風姿花傳」 『世阿彌 禪竹』 日本思想大系24 岩波書店 p.45

25) 南方宗啓(1977) 『南方錄』 茶道古典全集4 淡交社 p.271

치파(大口派)를 창시한 오구치 쇼오(大口樵翁, 1689-1764)가 다회에 손님을 초대하는 방법을 비롯하여 다실과 로지를 다루는 방법, 다회를 진행하는 작법 등을 100개 조항을 기록한 책이다.

나오스케의 「차탕일회집」은 단번에 써내려간 글이 아니라, 오랜 시간을 두고 여러 차례 수정 보완단계를 거쳐 완성되었다. 초고에는 서론에 일기일회가 나타나지 않고, 결론부분에서 다도는 일생에 한 번의 만남이라는 뜻으로 「일기일편지교회(一期一篇之交會)」²⁷⁾라는 말이 쓰였다. 수정을 반복한 뒤의 만년에 쓴 최종 정서본에 「일기일회」라는 용어가 처음으로 등장했고, 새로운 조어(造語)는 이후에 널리 알려지게 되었다는 것이다.

나오스케가 제창한 일기일회란 여러 가지 측면을 포괄적으로 제시하고 있다. 주인과 손님이 가져야 할 정신적 측면, 다회의 진행에 필요한 구체적인 행위적 측면에서도 진지성을 요구하는 것이었다. 일기일회는 주인과 손님에게 두루 요구된다. 주인으로써는 손님을 위하여 어떻게 해야 하는가라는 과제가 있고, 손님으로써는 주인이 자신을 위해 베푸는 여러 가지 과정을 존경하는 자세로 진지하게 음미하며 이해하려는 정신이 필요하다. 일기일회의 의미는 다회를 통해 구현되는 정신과 행위, 다회에 참여하는 주인과 손님 등 입체적인 요소를 통해서 전개되는 것이라고 생각할 수 있다.

4. 내면성의 심화를 추구한 독좌관념

일기일회를 논하는 서론에 이어 「차탕일회집」의 본론은 나오스케가 생각하는 이상적인 다회의 진행과정을 순서에 따라 구체적으로 기술하고 있다. 이 부분은 여러 유파의 다도와 크게 다르지 않으며, 이와 유사한 내용을 다룬 다서가 널리 유포되어 있었다. 그러나 「독좌관념」이라는 장을 결론으로 삼는 체제는 다른 다서에는 나타나지 않는다. 이 장은 나오스케의 매우 진지한 수양자세와 자기성찰적인 다도정신을 잘 드러낸다는 점 때문에 큰 주목을 받는다. 특히 다회를 마친 후 주인은 손님을 보낸 뒤에, 손님들과 나누었던 이야기나 기억은 훌훌 털어버리고, 서둘러 청소를 시작하는 것이 아니라, 혼자 빈 찻자리로 돌아와 앉아서 그날 손님과 나누었던 이야기나 다회의 과정 등을 되새겨보는 반성의 시간, 내면을 성찰하는 시간을 가져야 한다는 것이다. 일본다도에서 주인은 다회 자체를 진지하게 진행해야 한다는 이야기나 교훈은 일반적인 사항이지만, 다실에 혼자 앉아 「관념」하는 시간을 가져야 한다는 점은 다도에 대한 치열한 정신세계를 추구해야 한다는 나오스케의 주관적 견해였다. 관념이란 메이지유신 이후에 불교용어으로써의 관념이라는 어휘를 의식하면서 영어 idea의 번역어로 쓰면서 철학상(哲學上)의 새로운 의미를 지니고 오늘날에도 널리 쓰이는 말이다. 그러나 관념이란 원래 불교용어으로써 「진리 또는 부처님을 관찰 사념하는 일」²⁸⁾

26) 谷村玲子(2001) 『井伊直弼 修養としての茶の湯』 創文社 p.132

27) 谷端昭夫(1998) 『近世茶道史』 淡交社 p.357

즉 마음을 가라앉히고 지혜를 통하여 진리를 깊이 관찰하는 일을 뜻한다.

손님이 떠나가고 빈 다실에 돌아와 혼자 앉아서, 스스로의 내면세계를 관념한다는 것은 그만큼 일기일회의 정신으로 진행되는 다회에 한층 더 깊은 성찰을 시도해야 한다는 치열한 자기 수련의 자세를 요구하였다고 할 수 있다. 다소 길지만, 해당 부분을 인용하고 번역한다.

独座観念

主客とも余情残心を催し、退出の挨拶終れハ、客も露地を出るに、高声ニ咄さず、静ニあと見かへり出行は、亭主ハ猶更のこと、客の見へさるまでも見送る也、扱、中潜り・猿戸、その外戸障子など、早々立なといたすハ、不興千万、一日の饗応も無になる事なれハ、決而客の帰路見えすとも、取かた付急くへからず、いかにも心静に茶席ニ立もとり、此時にしり上りより這入、炉前ニ独座して、今暫く御咄も有へきニ、もはや何方まで可被参哉、今日一期一会済て、ふたゝひかへらさる事を観念シ、或ハ独服をもいたす事、是一会極意の習なり、此時寂莫として、打語ふものとてハ、釜一口のみシて、外ニ物なし、誠ニ自得せされはいたりかたき境界なり²⁹⁾

주객이 더불어 여정과 아쉬움을 가지도록 다회를 진행하며, 다실을 나서는 인사를 마치면 손님도 로지로 나갈 때 큰 소리로 이야기하지 않고 조용히 뒤를 돌아보고 인사를 하고 나간다. 주인은 말할 나위도 없이 손님이 보이지 않게 될 때까지 배웅한다. 나카쿠구리나 사루도³⁰⁾ 그 밖의 문을 서둘러 닫아버리면 흥취가 사라진다. 모처럼 하루 동안의 향응도 허사가 되어버리고 만다. 돌이간 손님이 멀어져 보이지 않게 되었다고 해서 서둘러 청소를 시작하지 않도록 한다. 마음을 아주 차분하게 가라앉히고 니지리구치³¹⁾를 통하여 다실로 들어가서 솔 앞에 혼자 앉는다. 한동안 방금까지 이야기를 나누었지만, 이제는 아무도 없다. 마음을 가다듬고 오늘 끝낸 일기일회가 두 번 다시 돌아오지 않는다는 것을 생각하며, 혼자서 한 잔을 마신다. 이는 일회의 지극히 깊은 뜻을 익히는 것이 되며, 이때 적막하여 이야기를 나눌 상대라고는 솔 주둥이 하나뿐 아무도 없다. 실로 스스로 깨달아 얻기 즉 자득하지 않으면 이를 수 없는 경계(境界)인 것이다. (필자 역)

앞부분에서 말하고자 하는 바는 다회를 진행할 때 여운이 남도록 운치 있게 진행하며, 끝날 때는 아쉬움이 남도록 함으로써 다회의 묘미를 심화시킬 수 있다는 것이다. 다회란 대개 4시간 안에 끝낸다는 약속이 있다. 순서에 따라서 차근차근 진행하면 시간을 얼마든지 지연시킬 수 있지만, 너무 길어지면 긴장감도 떨어지고 지루해질 수도 있기 때문에 감

28) 織田得能(1983)「クワンネン 観念」『仏教大辞典』大蔵出版 p.350
真理又は仏体を觀察思念すること。

29) 井伊直弼(1977)『茶湯一会集』茶道古典全集10 淡交社 p.414-415

30) 나카쿠구리(中潜り)는 로지의 안쪽 영역과 바깥 영역 사이에, 그윽한 분위기를 느끼도록 하기 위하여 설치하는 문. 사루도(猿戸)는 외부에서 로지로 들어가는 입구에 나무로 간소하게 설치하는 문.

31) 니지리구치(躡口)는 손님이 로지에서 다실로 들어가는 문으로, 누구나 겸손한 자세로 몸을 낮추고 들어가도록 작게 만든다.

칠맛이 있도록 적절한 시점에 종료해야 여운이 있고, 아쉬움도 남길 수 있다는 견해는 다인 사이에서는 일반적인 상식에 속한다. 나오스케가 강조하고자 하는 바는 손님이 떠난 뒤에 아무도 보지 않는 혼자 된 상황에서의 주인의 자세를 논하고자 했던 점에 큰 의의가 있다. 다회는 여러 손님을 불러 이야기도 나누며 차를 대접하는 대목이 클라이맥스가 되는데, 이런 일반적인 과정도 중요하지만 다인으로써 보다 큰 의미 있는 일로써 독좌하여 관념하기를 제안하였다. 즉 다인은 차를 맛있게 대접할 수 있는 역량뿐만 아니라 관념할 수 있는 존재가 되어야 한다는 것. 혹은 즉 스스로 사유세계를 전개할 수 있는 능력, 즉 철학하는 능력을 말한 것이다. 물론 아무나 이런 경지에 이를 수도 없고, 현실적으로 모든 다인이 이런 능력을 지닐 수 있는 것은 아니지만, 나오스케는 당대의 교양인이자 사회적 지도자로서 이상적인 다인의 모습에 고도의 수양적 요소를 강조하고자 했던 것이라 생각한다.

이 글은 전반부의 주인이 해야 할 행위적인 측면과 후반의 추구해야 하는 정신적인 측면으로 구성되어 있다. 이를 여러 구절로 나누어 음미해본다.

전반부에는 다회가 끝나고 손님이 돌아갈 때, 보통 같으면 고맙다거나 잘 가시라는 인사말을 할 법한데 나오스케는 마음 속으로 인사를 나누면 되지 굳이 소리를 내서 인사말을 하지 않는 것이 좋다고 했다. 무언의 인사가 더 운치와 여운을 남기게 된다는 것이다. 손님이 돌아가면 주인은 해방감을 느끼면서 서둘러 문도 닫아버리고 정리라도 시작하고 싶어지는 것이 일반적인 경향이지만, 그렇게 하면 여운이 사라져 버리고 그날 손님에게 쏟았던 정성이 모두 허사가 되어버린다고 하며, 한동안 움직임을 최소화하며 조용한 상태에서 내면을 성찰할 태세를 갖추어야 한다는 주인의 행위적인 측면을 제시했다.

후반부에는 정적인 분위기를 갖춘 뒤에 추구할 정신세계를 제시하였다. 주인은 손님 배웅한 후에 손님들이 들어오던 니지리구치로 들어와서 혼자 앉아 관념하는 시간을 가지는데, 이 부분은 「차탕일회집」 가운데서도 가장 독특한 견해라고 할 수 있다. 손님이 돌아가고 다실에는 아무도 없는 상황임을 강조하기 위한 표현으로 이야기를 나눌 상대라고는 술주동이 하나뿐 아무도 없다(打語ふものとしてハ、釜一口のみ)고 했다. 입이 있다고는 해도 이야기 상대가 되지 못하는 술을 통하여, 혼자 앉아 있는 상태 즉 독좌라는 상황을 효과적으로 설명하고 있음이 주목된다. 맨 끝 구절은 자득(自得)한 다인이 누릴 수 있는 경지가 곧 독좌관념의 경계(境界)라고 선언하였다. 경계란 불교적 의미로는 「자신이 얻은 과보(果報)의 영역」³²⁾ 즉 업보로써 각자가 놓이게 된 처지 혹은 경지를 뜻하는데, 독좌관념을 누릴 수 있는 경지란 스스로 깊은 수양을 쌓은 결과 터득할 수 있는 경지라는 뜻이다.

후지 나오모토(藤直幹)는 오구치 쇼오가 저술한 다회 진행 지침서인 『교회평점규범(交會平点規範)』에 나오는 내용을 나오스케가 일부분 차용하였음을 논증한 바 있다. 나오스케의 독좌관념은 『교회평점규범』을 참고로 창안한 것이라고 하며 「다회를 마치고 손님을 보낼 때, 인사를 마치고 다실로 돌아와 독좌하여 어떤 이야기를 나누었는지 되새기면서 아쉬움

32) 織田得能(1983) 「キヤウガイ 境界」 『仏教大辞典』 大蔵出版 p.249
 我の得たる果報の界域を境界と云。

(殘心)을 음미해야 한다는 부분과 유사한 내용이 있다. (중략) 이는 우연의 일치라고 하기 어렵고, 차용한 것³³⁾이라는 것이다. 그러나 오구치 쇼오의 『교회평점규범』의 해당부분에는 「독좌관념」이라는 제목이 붙어 있지 않고, 내용에도 4자성어처럼 등장하는 독좌관념이라는 말이 나타나지 않는다. 즉 「독좌관념」이란 용어는 나오스케의 창작이라고 할 수 있다는 것이다.

나오스케의 다도관의 원형은 이미 유포되어 있던 선행 다서에서 모형을 찾아볼 수 있다. 그러나 나오스케는 주인이 주체로서 ‘독좌관념’을 할 수 있는 경지에 이르도록 진지하고 치열한 정신으로 수련을 쌓아야 한다는 다인의 자세를 세련된 용어로 응축된 표현을 시도하고 이를 「차탕일회집」의 결론으로 삼아 독자적인 주장을 펼쳤다고 할 수 있다.

5. 결론

에도 말기 왜국에서 개항으로 국가체제가 격변하는 시기의 정치가 이이 나오스케는 다인으로서도 중요한 업적을 남겼다. 그는 당시의 유흥적인 요소가 강조되던 다도계를 비판하며 정신성을 강조하는 다도를 추구하였는데, 이는 「차탕일회집」 서론의 「일기일회」와 결론의 「독좌관념」이라는 용어로 집약할 수 있다. 영주의 아들로써 성장하는 과정에 심신의 수련 방식의 한 가지로 다도를 익히며, 다도는 단순한 도락이 아니라 고도의 정신세계를 연마하는 수단이어야 한다고 생각하였다. 자신의 다도 수양과정을 마치 자신의 내면세계와의 치열한 투쟁과정처럼 생각하며, 다도는 엄숙하며 매우 진지하며 정치에도 유익하게 활용되어야 한다는 실용성을 추구하기도 하였다. 이런 정신은 다도(茶道)는 정치의 도(政道)에 도움이 되어야 한다는 글³⁴⁾에도 잘 나타나 있다.

일본에서 접한 대다수의 다인은 편안한 마음으로 주인과 손님이 즐기면 충분하다고 생각하는 것 같았다. 사실 다회를 열 때마다 일기일회라는 지극히 고양된 정신상태를 유지해야 한다는 것은 현실에서 가능한 것이 아니라, 일종의 이상 혹은 허구(虛構)라고 할 수 있다. 일생에 단 한번의 만남이라고 설정하지만, 사실 매일 만나는 사이일 수도 있고 그리 어렵지 않게 또 만날 수 있는 사이일 수도 있다. 그러나 이런 허구이지만 진지하게 다회를 진행함으로써 고도의 정신세계를 추구하는 수양적 기능이 작용하게 된다. 즉 다도의 세계는 현실을 잠시 제쳐둔 또 하나의 가공적인 세계로써 의미를 지니며, 일상생활에서는 기대할 수 없는 정신 수양의 이상적인 세계가 구현된다는 것이다.

이처럼 정신적 세계를 심화시키려는 경지에 이른다는 것은 자신과의 대면하는 또 하나의 자신, 즉 독좌하여 관념함으로써 얻을 수 있는 내면적 성찰 혹은 자득이야말로 참된 다도

33) 藤直幹(1977) 「茶湯一會集 解題」 『茶道古典全集』10 淡交社 p.453

34) 井伊直弼(1976) 「茶道の政道の助となるべきを論へる文」 『近世政道論』 日本思想大系38 岩波書店 1976 p.359
이 글에서 나오스케는 다도의 법도는 국가를 다스리는 근본과 같다고 하면서, 다도의 정신세계는 위정자가 반드시 익혀야 할 덕목이라고 주장했다.

의 경지에 이르는 방법이라는 것이 나오스케의 주장이었다.

오늘날 「일기일회」라는 단어는 다도 전문용어에 머물지 않고 일본문화의 각 방면에서 두루 쓰이고 있다. 인간관계에 진지성과 만남에서의 성실한 자세가 요구될수록 일기일회라는 어휘의 활용범위는 확대되고 사용빈도도 높아지고 있다. 일기일회는 일본의 나오스케에 의하여 조어된 4자성어이지만, 어원에 대한 고찰과정이 생략된 채로 한국에서도 두루 쓰이고 있음이 주목된다.

나오스케의 진지하면서도 치열한 자기성찰적 생활자세는 다도의 세계에서 「독좌관념」이라는 조어로 재정리되며, 오늘날 일본의 다인 사이에 반드시 알고 있어야 하는 개념으로 정착되어 있다. 나오스케는 차를 마시는 방식(the way of tea)으로써의 다도를 훨씬 뛰어넘은 세계, 즉 고양된 정신세계를 추구하는 수양의 방식으로써의 다도를 구상하였던 것이다. 그는 극한 상황에 놓여 있는 정치가이자 한 시간 한 시간 진지하게 살아가려는 수행자(修行者)로서 다도를 추구하는 과정에서 얻은 깨달음을 일기일회와 독좌관념이라는 조어로 표현하였다. 진지한 삶에 대한 자세와 이를 통하여 얻은 깨달음을 반영하여 다도관을 개척하였음에 다도역사의 중요한 의의가 있다고 생각된다.

◀ 참고문헌 ▶

- 박전열(2001) 「에도시대의 다도비판론과 전다도」 『일본학보』 89, 한국일본학회. pp.3-8
 법정(2008) 『법정스님 법문집 · 1 일기일회 一期一會』, 문학의숲. pp.41-54
 井伊直弼(1976) 「茶道の政道の助となるべきを論へる文」 『近世政道論』 日本思想大系38, 岩波書店. pp.346-359
 井伊直弼(1977) 『茶湯一会集』 茶道古典全集10, 淡交社. pp.414-415
 井伊直弼(1956) 「入門記」 『修養篇 · 茶道篇』 日本哲学思想全書16, 平凡社. pp.263-266
 井伊直弼(2010) 「閑夜茶話」 『茶湯一会集 · 閑夜茶話』, 岩波書店. pp.143-296
 井上友一郎(1975) 「井伊直弼」 『人物日本の歴史18 開国と攘夷』, 小学館. p.35
 織田得能(1983) 「觀念」「境界」 『仏教大辞典』, 大蔵出版. p.350
 熊倉功夫(1985) 『昔の茶の湯 今の茶の湯』, 淡交社. p.169
 五味文彦 他(2010) 『山川日本史』, 山川出版社. p.147
 世阿彌(1974) 「風姿花傳」 『世阿彌 禪竹』 日本思想大系24, 岩波書店. p.45
 谷端昭夫(2007) 『近世茶道史』, 淡交社. p.357
 筒井紘一(2007) 『茶の湯のことば』, 淡交社. p.3
 谷村玲子(2001) 『井伊直弼 修養としての茶の湯』, 創文社. p.132
 南方宗啓(1977) 『南方録』 茶道古典全集4, 淡交社. p.271
 藤直幹(1977) 「茶湯一会集 解題」 『茶道古典全集』10, 淡交社. p.453
 母利美和(2007) 「井伊直弼の茶の湯観」 『井伊直弼の茶の湯』, 国書刊行会. p.56
 山上宗二(1977) 『山上宗二記』 茶道古典全集6, 淡交社. p.93
 吉田常吉(1989) 『井伊直弼』, 吉川弘文館. p.1

- 투 고 : 2012. 11. 30.
- 심 사 : 2012. 12. 15.
- 심사완료 : 2013. 01. 15

日本高度成長期の鉄鋼産業構造調整における政府－市場関係

－ 新日本製鉄の誕生を中心に －

李 晚 熙*
leekorea@poole.ac.jp

<ABSTRACT>

This thesis attempts to analyze the Japan's restructuring of the iron and steel industry which gave birth of Nippon Steel Corporation(1970) in response to the internationalization during the late 1960s, emphasizing market initiatives over government leadership. As it was exposed to internationalization in a state of its over-heated competition and small size, the Fuji steel company posed an initiative of M&A to make an end of it with the support of several steel companies and sub-government more than government. The government just showed a collaborative attitude towards him as a member of sub-government, since the denial of M&A by the Fair Trade Committee (FTC). However, he did not resort to the government measure because the market consensus has been powerful enough for him to push an initiative against the FTC. It proves that the government role has been changed due to the impact of internationalization. Taking it into much consideration, market initiatives must be taken more important than government leadership in analyzing the restructuring of Japan's iron and steel industry.

Key words: Nippon Steel Corporation, the restructuring of iron and steel industry, internationalization, market initiative

I. はじめに

日本経済は1950年代初までの戦後復旧期(1945-52)を経て、第1次オイル・ショック直前にまで著しい高度成長(1956-73年の間、年平均9.1%の成長率)を成し遂げ、1968年には明治維新以後100年ぶりに、アメリカに次いで世界第2位の経済大国と浮上した。ところが、その裏で「第2の黒船襲撃」と呼ばれるほど、欧米から市場開放を巡り様々な圧力をかけられ、日本経済にとっては国際化の流れで欧米企業との本格的な向き合いに当たり、競争力が大きな懸念となった。これが、1963年11月29日、通産省が「産業構造調査会」の答申をきっかけに打ち出した「新産業体制論」の背景である。

その一環として、鉄鋼産業においては「世紀の合併」と呼ばれる八幡製鉄と富士製鉄の間の合併が行われ、1970年3月31日新日本製鉄(株)(以下、新日鉄と略称する)という巨大な製鉄企業が誕生するようになった。言い換えれば、新日鉄は国際化の圧力に対応するため、政府と財界を含む様々なアクターが携わり行った産業構造調整の産出である。本研究は、日本の高度成長期における産業構造調整の象徴物と評価される新日鉄の誕生までに携わってきた様々なアクター間の相互作用のダイナミクスを探る。特に、通産省を中心とする政府のリーダーシップを強調するこれまでの主な研究と

* プール学院大学

は異なり、市場の積極的なイニシアチブを強調する新たな見方を重視し、政府と市場のダイナミックな関係を分析する。

これまでの研究は、①誰が状況を認識・診断し、アイデアを出したか、②誰が構造調整を導いたかの「主体」や「主導権」などに焦点を合わせ、政府主導型もしくは政府主導と市場順応(followership)の組合型を強調することが主流となっている。それとともに、政府のリーダーシップより、市場のイニシアチブを強調する少数の見方も注目を集めている。いずれも、それなりに受け止めるべき論調を部分的に示す。しかしながら、国際化が政府能力の変容をもたらしたことに注目を集めるべきである。政府主導型の構造調整においては、これに相応しい政府能力が求められるが、国際化の影響で市場の政府能力への依存度が低下し、市場のイニシアチブが上昇するなど、政府能力の変容をもたらすからである。これが、政府の主な政策手段の効果をじわじわ弱め、市場のイニシアチブを向上させるきっかけを提供してきたといえる(Beeson, 2007:153, 157)。これに着目し、本研究は市場のイニシアチブを重視すべきであることを見抜き、新日鉄の誕生までにおける市場と政府の関係を探る。

II. 産業構造調整における政府－市場関係に関する理論的考察

1. 政府－市場関係に関する先行研究の考察

日本の産業構造調整における政府主導型を重視する多くの研究は、国際化に伴う危機意識や、通産省をはじめとする政府の伝統的かつ実用主義的なアプローチに焦点を合わせている。戦後、取り組んできた欧米へのキャッチ・アップが達成されたにも関わらず、日本は国際化がもたらす危機意識を重く受けとめ、経済安保を憂慮するまでに追い込まれていた。一方、鉄鋼産業は不景気にも関わらず、過小規模の主な6社が競争していることにつれ、過当競争の憂慮が生じた。このような過小規模と過当競争の状況が、政府の積極的な介入の根拠を提供したという(Tsuru, 1993:99; Okimoto, 1989:31)。その中で、通産省は自国企業が外国企業と競争するため、規模の大型化や有効競争体制を目指す産業構造の合理化に取り組み、新日鉄が誕生したことである。その裏では、政府がいかなるアクションも取らなければ、市場力だけでは政府の戦略的欲求を満たせないという市場資本主義に関する懐疑論に基づき、反不況カルテルや合理化カルテルを容認する「産業政策の政治化」が固着化し、鉄鋼産業の構造調整にも大きな影響を及ぼしたという(Okimoto, 1989:28-30,35)。

同様に、自由競争より有効競争の秩序を構築しようとする新産業体制論(産業集約化)は、外見的に官民協調方式で進められたが、実際に独禁法を形骸化しながら、市場機構の調整力を完全に否定する官僚統制に過ぎないことであるという(鶴田俊正、1982:92-5)。その背景として、通産省による「組織化される市場」の概念を取り上げる研究が目立つ。もともと通産省は、認許可権を生かし参入障壁を政治的に操作し組織化される市場を創出し、その結果として、行政指導によるカルテルや機能分割的な寡占的競争体制を築き、産業構造調整を進めてきたという(樋渡展洋、1991:16-9,54-5,62)。それと関連して、通産省は利益団体から高度に断絶される特権に基づき、積極的な仲介や調

整を行い合意を導出する能力を持ち、産業構造調整をリードしてきたと強調する研究も見当たる(Okimoto,1988a:179)。このような政府と市場関係の仕組みで、不況カルテルや行政指導が正当化され、新日鉄が誕生でき、欧米に対しての相対的な優位を占めるようになったという(Yamamura, 1988:220-1)。

こうした政府主導を強調する見方を批判しながら、市場のイニシアチブに焦点を合わせる研究も少数見当たる。日本資本主義の特徴として、財界のイニシアチブを強調し、政府の役割は仲介者より安定者(stabilizer)に留まるパターンを「企業主導の戦略的資本主義」と名付けている(Kalder,1993:16-25)。通産省の役割に関しても、行政指導万能説を否定し、市場との絶えず情報交換により市場力を補完する機能をはたしたと強調する。新産業秩序を目指す方途として取り上げられた協調調整論が、それにあたる証である(大山耕輔、1996:45,126)。それから一步踏み出して、社会的なアクターが「下位政府」の場を生かし、政府へ圧力をかけ、通産省が彼らの要求に応じる政策的指向を打ち出した結果、鉄鋼産業の構造調整ができたという論調も注目を集める(北山俊哉(一)1985年8月:56-61)。同様に、財界は政府との共通なパースペクティブの上で、政治資金、省庁出身の自社人材、経済的影響力の政治的資源化の能力などの組織的な権力に基づき、通産省をコミュニケーションの対象と位置付けながら、自分の政治的代弁者や機能的協力者として活かし、公取委の反対ハードルを乗り越え、新日鉄を生み出したともいう。即ち、市場のイニシアチブに基づく「機能的協力関係論」である(大嶽秀夫(一)、1978年5月:297-9,316-7;(二)、1978年10月:645-8)。

以上で比較したように、日本の産業構造調整における政府と市場の関係については様々な見方が取り上げられているが、本研究は後者の見方に注目を集める。このタイプも、政府のリーダーシップと市場のイニシアチブの程度により、見直すことができ、日本の鉄鋼産業における新たな分析枠組みとしての政府と市場関係を提示できると考えられる。

2. 本研究の分析枠組み

ジョンソン(Chalmers Johnson)は、日本を軟性権威主義(soft authoritarianism)と社会的組合主義(societal corporatism)が混ざっているレジームと位置付けている。即ち、形式的には民主主義であるが、実際に軟性権威主義であり、社会的組合組織と、利益団体(例：経団連)の要求に敏感に応じる介入主義的な官僚などの混合体であるという(Johnson, 1991: 79-81)。ここで生え始める市場のイニシアチブは、市場の成熟や経済規模の巨大化により、もっと活発化となることが当然であり、国民1人当たり所得4000ドルをその分岐点として提示している。

一方、ウェイド(Robert Wade)はリーダーシップとフォローシップの概念を取り上げ、とくに、政府の介入パターンによって多様なタイプの市場と政府の関係ができていと指す。政府が民間企業へプロジェクトを提案するか、もしくは自ら政府企業を立ち上げるかにより、市場をリードしていく(リーダーシップ)。その代わりに、政府が民間企業からの提案を選択し、サポートすることにより、市場をフォローする(フォローシップ)ことも想定している。その積極性の程度により、積極的リーダーシップ(big

leadership)、消極的リーダーシップ(small leadership)、さらに積極的フォローシップ(big followership)、消極的フォローシップ(small followership)などに見分けられる。彼は、日本をはじめとする東アジアの経済発展は、自由市場より政府の積極的なリーダーシップの成果であると強調する。これに基づき、東アジアの経済レジームの特徴を「支配される市場(governed market)」と取りまとめている(Wade, 1990: 28-29)。

軟性権威主義や支配される市場の論理は、政府の積極的なリーダーシップと市場の積極的なフォローシップの組み合わせパターンで、日本の経済発展ができたことをほめめかす。政府のフォローシップを想定せず、そのリーダーシップを独立変数とする論調であり、市場のフォローシップは政府のリーダーシップにより生じる「従属変数」としての位置付け、国際化がもたらした政府能力の変容や市場のイニシアチブの活性化を見逃し反映していない。確かに、国際化による政府能力の変容で市場のイニシアチブの活発化を認識すべきであり、その影響力を重視しなければならない。そのことで、次のように政府と市場の関係を見直し、本研究の分析の枠組みとして改めて定型化する。日本の鉄鋼産業における構造調整を分析する際には、政府のフォローシップと市場のイニシアチブの組合型であるIのタイプに注目を集めるべきである。

<表1> 構造調整における政府-市場関係のタイプ

		市場のイニシアチブ	
		積極的	消極的
政府の フォローシップ	積極的	I. 目標一致・政府の能動的な協働やサポート	II. 個別な自主調整・政府の能動的なサポート
	消極的	III. 市場自主調整・政府の受動的な協働やサポート	IV. 自由放任

鉄鋼産業の構造調整におけるイニシアチブを発揮した主体は、当事者の富士製鉄と八幡製鉄であり、通産省や政府、政界はリーダーシップより、積極的なフォローシップを発揮したことは事実である。さらに、両社以外の市場や政府(系)のアクターも利害一致の上で合併を積極的に賛成することにより、両社のイニシアチブをよりバック・アップしたことに注目する。

それでは、市場がいかにイニシアチブを発揮していったのかが、分析の主なポイントとなる。日本の軟性権威主義で、市場のイニシアチブを刺激した大きなインパクトは、国際化がもたらした危機意識である。1966年7月の富士製鉄社長の「東西二大製鉄論」、1967年6月の「日本経済調査協議会」の7つ業種の集約化構想などは、こんな危機意識から発揮された市場イニシアチブの出発点である。特に、この協議会のメンバーの構成上、集約化構想は社会的な合意を反映する市場からのシグナルとして受け止めるべきである(中山素平, 1977:205)。両社が公取委との交渉に当たり、通産省をはじめとする政府や政府系の日本興業銀行が消極的な態度を示したにもかかわらず、一貫して独自の案を持ち公取委の審査に向き合ったことは彼らのイニシアチブを裏付ける証である。それゆえ、国際化が鳴らしたシグナルに関する市場や政府の状況認識を先に取りまとめる必要がある。

市場がイニシアチブを発揮するためには、市場内部のアクター間、さらに市場と政府の間の利害一

致が求められる。当時、市場のアクターは、資本自由化と鉄鋼産業の不況の中で過当競争からの無駄を排除する必要性や産業体制の変革の必要性を認識していた。そのため、激しい競争の源泉である両社の合併が実現できれば、過当競争が緩和されるとともに、合併後もライバル企業が存在するので、有効競争体制が築かれると信じ、合併を積極的に賛成していたといえる(中山泰平、1977:210：熊谷典文、1977:258)。

要するに、両社は国際化がもたらす危機意識や合併の必要性について財界内部や政府のアクターと共有し、その実現のため、政党、政府、財界を下位政府に引き付け、公取委にも影響力を行使することができるようになった。そのことで、彼らは経済的な影響力を政治的な資源として活かせる多くの接近ポイントを持っていたといえる。公取委を除き、通産省、財界、自民党、同種業界などが自己利益を目指し下位政府のメンバーとなり、合併を積極的に支持してきたことは、接近ポイントの影響やその効果を裏付ける(大嶽秀夫(二)、1978年10月：619-30)。それゆえ、鉄鋼産業調整における政府と市場の関係を分析する際に、多くの接点ポイントをいかに生かしたのかについても注目すべきである。本研究は市場のアクターが自己利益と一致する合併をサポートするため、下位政府へ積極的に参入し、自民党、政府、特に通産省の積極的なフォローシップを誘導していったことを重視する。

Ⅲ. 国際化の構造調整圧迫と新産業体制論の打ち出し

1. 国際化の構造調整圧迫と新産業秩序への取り組み

日本はIMF(1952年)、GATT(1955年)への加盟がそれぞれ認められた一方、1950年代後半から貿易黒字が発生するようになり、1959年9-10月中に、IMF、GATT、さらに欧米諸国からの貿易・資本自由化の要求に追い込まれていた。これは、日本経済の本格的な国際化のシグナルであり、政府や財界へ産業構造調整を圧迫するインパクトとなった。それに対応するため、政府レベルでできたのが、1960年6月に発表された「貿易為替自由化計画大綱」である。ここで、政府は貿易・為替自由化をやむをえず選択肢として受け止めなければならないと認識する一方、これに伴うメリットを取り上げながら、強力に推進しようとする意志を明らかにした。

特に、政府が強調したのは、自由化の積極的な利点を生かしつつ重化学工業の高度化を推進することである。その条件として、取り上げたのが、産業秩序の整備である。政府は「…企業の過当競争を防止し、自由化に伴う過渡的な混乱を防止するための企業の協体制の整備を図る…」といい、1960年4月現在の40%台の自由化率を3年後80%まで拡大するという自由化のスケジュールを公示した。これが財界の間に危機意識を引き起こしたのは間違いない(通商産業政策史編纂委員会17、平成6年：376-8)。

これに基づき、通産省が1962年5月打ち出したのが、国際競争力の向上を目指し産業構造調整を向かう「新産業秩序」への取り組みである。これは、国際化に伴う競争の激化による危機感を反映したものであり、日本企業の過当競争や過小規模を当面課題として位置付けたものである。この方途と

して、通産省は自主調整、金融による調整、政府による調整などについて検討し、「協調調整論」を提案した(大山耕輔、1996:126-8)。

これに関して、経団連は政府の責任を明確化するため、立法化を希望した。これに応じて、通産省は1963年3月25日、鉄鋼業、石油化学、自動車産業を特定産業と指定し、合併ないしは整理統合、設備投資を進めることを骨子とする「特定産業振興臨時措置法案」を提出した(通商産業政策史編纂委員会8、平成3年：106)。しかし、立法化過程での通産省内部の対立、財界内部での同友会と経団連の利害対立、さらに現実認識を巡り通産省と経団連の対立などで、各アクターの利益を集約することが難しくなった。それゆえ、自民党もこの法案について熱意を持っていなかった(大山耕輔、1996：145-8)。

要するに、現状認識(過当競争の有無など)、政策目標(産業秩序形成の是非など)、目標実現の方式(自主化、協調かなど)などを巡り、政府、財界、利害関係者の間に利害不一致が表面化し、この法案は、結局、利害調整ができず、7月6日廃案となった。通産省はこの廃案について、政策当局と企業におけるいわゆる「協調方式」が一層重視される契機となったと反省しているが(通商産業政策史編纂委員会8、平成3年：106-7)、これは確かに国際化がもたらした政府と市場の関係の変容を裏付けることである。通産省を中心とする政府の市場への介入手段が限られ、市場アクターの協力を得ない限り、構造調整が不可能となることを示す。市場のイニシアチブを重視し、さらに様々なアクターの利害を調整することが、成功的な構造調整の必要条件であることを示唆する。

2. 貿易・資本自由化の拡大による鉄鋼産業界のイニシアチブ発信

日本経済における貿易・資本自由化は、政府の予告より早く進み、実際に1963年8月現在、自由化率が92%までに上がり、激しい国際競争を避けられないのが現実となった。これをより実感させたのは、貿易・資本自由化の完成である。日本は、欧米からの圧力で1963年2月IMF11条(貿易自由化の義務付け)国へ移行し、1964年4月にはIMF8条(資本自由化の義務付け)国へ移行するとともにOECDへ加盟し、1967年7月には、第1次資本自由化を断行した。これは、「第2次の黒船襲撃」と呼ばれるほど、危機意識までを引き起こした。とくに、鉄鋼産業においては、イギリス、フランス、西ドイツ、アメリカの企業がそれぞれ競争力の向上を目指す合併に取り組み、巨大な企業が誕生することにより、国際市場での競争はより激しくなった。

一方、国内の鉄鋼産業においては、高度成長を支えてきた自動車、造船、電機産業の資本財市場の拡大により、需要が伸び盛り、経済成長率を上回る生産増加率を記録していた。企業にとってこうした状況は、生産拡大や市場参入を誘引する大きな魅力として受けとめられ、競争的に生産量の増加や市場参入に取り組むようなきっかけとなった。このような過当競争の中で、日本鉄鋼産業の後進性が目立ち、生産量水準を向上させるのが課題であった。これが、過当競争や生産単位の過小規模化をもたらし、国際化を市場拡大のチャンスより、1853年の黒船襲撃事件の再現と認識させるほど、鉄鋼産業に大きなショックを与えた。それゆえ、鉄鋼産業にとっても危機意識が広がり、1960年

代前半の鉄鋼市場の不景気(国内需要は1961-65年間、3%に落ちる)は危機意識を一層高めた。それに応じて、大手企業である富士製鉄と八幡製鉄が過当競争を避け、競争力の向上を目指し、生産単位を大型化、即ち、鉄鋼産業の集約化に取り組んだことである。これに関しては、すでに富士製鉄社長が両社の合併の必要性について水面下で政界以外の政府省庁、銀行、大株主などに提案したことがある(熊谷典文、1977:260; 永野重雄、1977:185-7)。

市場のイニシアチブのシグナルが、水面上で捉えられたのは、1966年7月16日の「東西二大製鉄論」の発言からである。その後の8月22日、富士製鉄社長は「鉄鋼大合同についての永野富士製鉄社長の見解：鉄鋼大合同について私の考え」でより具体的に、日本鉄鋼産業の再編成の必要性として、①内外需要の伸びの鈍化、②技術革新による最適生産規模の巨大化を取り上げた(新日本製鉄株式会社、昭和56：266)。内外需要の鈍化は過当競争と生産単位の過小規模化の問題点を露出させたきっかけである。永野社長はこれに関して次のように診断している。「…鉄鋼の投資主体として6社なり10社なりが存在することは多過ぎる。どうしても2社ぐらいにして、新鋭設備を経済スピードで効率よく建設する必要がある…従って現在の大手6社が合併して2社程度になることが望ましい…」(新日本製鉄株式会社、昭和56：267-8)といい、過当競争、設備の小規模化と老朽化を見直すため、大きなメリットを伴う合併による規模の大型化に取り組むべきであると主張した。

このような個人レベルの市場シグナルは、「日本経済調査協議会」により正式に政府へ提言された。1967年6月、同協議会は「我が国産業の再編成」で内外の厳しい競争に対応するためには、「有効競争を維持し、常にダイナミックな活動を行いうる産業組織が必要である…鉄鋼業では最適設備の大規模化に伴い、3グループ程度への投資単位の集約化が望まれる」といい出した(新日本製鉄株式会社、昭和56：285-288)。この協議会のメンバー構成上(企業、学者、官僚、銀行)、これは社会的な合意に基づく市場アクターのイニシアチブのシグナルとして受け止めるべきである。ここでは明確に示していないが、そのリーダーであった日本興業銀行取頭によると、鉄鋼構造調整の方途について「銀行主導と企業の協力の組成型」をめざし、品目を考慮すると富士と住友金属の合併を、競争の激しさを考慮すると両社の合併をそれぞれ構想したという(中山泰平、1977:208-10)。

このように、国際化が日本の鉄鋼産業に大きな危機意識をもたらすようになり、これに応じて、鉄鋼業界は過当競争や過小規模を乗り越えることを当面な緊急課題と認識し、その方法として、産業集約化の必要性を発信しイニシアチブを発揮し始めたといえる。その方策としては、業界の責任ある自主的な調整のもとで、大手2-3社を中心に集約化することを提言し、これをサポートする政府の積極的フォローシップを呼び掛けていることがうかがえる。

IV. 鉄鋼産業の構造調整における政府－市場関係

1. 市場アクター間の現実認識共有

以前に述べたような「特定産業進行臨時措置法案」の廃案は、自由化がもたらした政府能力の変

容による政策手段(行政指導)の制約や市場のイニシアチブの拡大を裏付ける証である。自由化の影響で、通産省が影響力を保つためには、規制や行政指導を動員するより、市場のイニシアチブを尊重し、市場からのシグナルに敏感に反応するような「市場依存的や補完的な役割」に変わるしかなかった(樋渡展洋、1991:54-5)。さらに、通産省の鉄鋼減産を巡る行政指導に正面的に反発した1965年の「住友金属事件」は、官僚統制の限界を示し、産業行政の在り方を抜本的に見直すきっかけとなった(日向方斉、1977:67)。

一方、1960年代後半からは市場が政府に対してイニシアチブを発揮できる多元的な社会が出現し、鉄鋼産業の構造調整においては社会的アクターの利益追求行為に焦点を合わせなければならぬとも言われる(北山俊哉(一)1, 1985年8月:55-6)。軟性権威主義レジームでは、市場がイニシアチブを発揮しても、これを実現するには、政府と市場の間の状況認識や利害一致のもとで、政府の積極的なフォローシップに支えられなければならない。その側面で、通産省が打ち出した「新産業秩序論」は、国際化に伴う「外部不経済効果」について、市場と状況認識を共有していることを裏付ける。その後も、通産省と市場は、過大な競争防止や市場の安定的な秩序維持という政策指向の共通性を保ち続けていった。

1968年8月21日の産業構造審議会(通産省所管)の意見書は、このような共通な認識に基づき、市場が発信したシグナル、即ち、重化学工業における合併の必要性の提言に対する政府の反応である。同審議会は、国際化に伴う危機に関する市場との同様な認識で、設備規模や生産規模の大型化、専門生産体制の確立に基づく「国際的に闘える企業」の育成の必要性を述べ、合併を現実的な代案として取り上げた。合併による企業の集約化の進展は、外資に対する日本企業の対抗力を強化し、資本自由化を早めるという意味において、競争制限的であるよりは、むしろ、競争促進的であるといった(新日本製鉄株式会社、昭和56:273-280)。

これに関して政府と経団連をはじめとする財界は、貫いで合併が競争を制限する可能性が少ないという意見を出し、合併を積極的に賛成していった。特に、ライバル企業の住友製鉄所、川崎製鉄社、日本鋼管も旧日本製鉄に戻ることは無理なく、業界の秩序を本位に考え、合併を認める姿勢を積極的に示した(中山泰平、1977:210, 220; 熊谷典文、1977:258; 日向方斉、1977:75; 坪内輩、1977:91)。その方途については明確にしていなかったが、市場のイニシアチブや利害調整を尊重する一方、政府の積極的なフォローシップや監視機能と呼び掛けていたといえる。このように、鉄鋼産業の再編を巡り市場アクター間には自己利益の実現に向けて利害が一致し、政策過程へ積極的に干渉したことがみられる(北山俊哉(一),1985年8月:60-1)。

実は、通産省は合併についてリーダーシップよりフォローシップに傾き、市場イニシアチブを尊重する姿勢を貫いて示した。資本自由化を迎えるため、合併が必要であると認識していたが、行政指導の限界で介入しにくく、さらに公取委との関係上、合併が難しいと判断し、公取委の意見を打診するぐらいのフォローシップの役目に留まっていた(熊谷典文、1977:256)。両社もすでに公取委の意図を把握して、政府や政界が乗り出すことが望ましくないと判断し、「正攻法戦略」を選択したといわれる(中山泰平、1977:212-3)。

ところが、両社と公取委の間の合併に関するアプローチの差は大きかったことも事実である。両社は過当競争の克服を経済発展に欠かせないものであると主張したが、公取委は競争そのものが、経済の活気を吹き込むことであると主張した(大嶽秀夫(二)、1978年10月：630)。これは、合併を巡り産業政策と独禁法の対立の前兆であり、通産省、内閣、経済企画庁、財界などを含む実用主義かつ調整主義の賛成グループと、公取委、学者、消費者などを含む反独占主義的な反対グループの間の葛藤を示し、利害調整が大きな課題となることをほのめかす(大嶽秀夫(一)、1978年5月：316；Okimoto,1989:13)。

2. 両社の合併への取り組みによる公取委との出会い

賛否世論の中で、八幡・富士製鉄は1968年5月22日、公取委に「合併趣旨書」を提出した。この趣旨書では、鉄鋼産業における3つの問題点として、技術革新の結果である設備単位の大型化と増加需要との間の矛盾の問題、技術開発力の強化、さらに、企業の総合的な国際競争力強化の必要性などを示し、合併による大型化を正当化している。特に、注目を集めるのは、3つ目である。両鉄鋼社は「経済開放化の進展著しい今日、特に鉄鋼においては国際的規模での企業競争が熾烈化し今や商品競争の時代から企業の総合力が問われる時代が到来している。かかる趨勢に対処するため技術開発力、資本力、資金調達力の強化及び生産能率の向上等企業規模の大型化を伴う企業の総合的な競争力を高めることが急務とされているのである」といい、合理的かつ実質的な解決の途は企業間の合併しかありえないと強調した(新日本製鉄株式会社、昭和56：116-7)。

これに対して公取委(事務局経済部企業課)は1968年6月、独禁法第15条1項(競争を実質的に制限する行為)の違反かどうかには焦点を合わせ、事前審査を開始した。その結果、公取委は両社の合併が市場競争を実質的に制限する行為であると判断し、合併を否認するという結論を出した。これは、公取委が両社の市場シェア(35.6%)に基づき、合併により市場競争秩序が乱れる可能性を懸念していたことを裏付ける。これに名乗って、一部の学者や野党などが公取委の結論に賛成するようになり、両社の立場がより厳しく追い込まれていった。このような結果や反対世論に対して、両社は①管理価格形成の可能性はない、②「競争の実質的な制限」という結論の妥当性がない、③大手同業他社は新規参入しうる相手であるなどの論理を取り上げ、激しく反発していた(新日本製鉄株式会社、昭和56：57)。こうした不透明な状況の中で、両社は1969年3月6日、6月1日をめどに合併を完了するよう、合併契約書を調印し、3月19日に合併届出書を公取委へ正式に提出し、合併への決意を固めていった。

公取委との関係がハードルとなると見込まれるにもかかわらず、両社が政府をはじめとする賛成グループの支援に頼らず、合併手続きに本格的に踏み出したことを見逃してはいけない。両社は、すでに政府の支援を期待しながら根回しをしたが、政府の積極的な態度を感じできず、批判的な世論のため政府や政治家が乗り出すことが、むしろマイナス効果をもたらすと判断し、独自の「正攻法」を取った。さらに、公取委の委員長がとても公正な人物であるので、法律的基準に相応しい対応策

を提示すれば、問題なく合併ができると確信したので、政府や政治家の介入が望ましくないと判断したという(中山素平、1977:212)。それに加え、両社は根回し段階で合併を巡り市場アクター間の利益一致を確認し、このような力強い後押しがあれば、イニシアチブを発揮できると確信したことも見逃せない。

両社の申請書提出により、1969年3月24日から公取委の正式審査が開始されるようになった。その直後の4月10日から11日まで公聴会が開かれ、様々なアクターが合併に当たり自己利益の観点から所見を噴出した。アクターは合併から見込まれるメリットで賛成するグループ、合併からの独占的な弊害を懸念するグループなどに分かれていたが、賛成するアクターが圧倒的に多かったことがうかがえる(新日本製鉄株式会社、昭和56：65-74)。とくに、競争関係の同種業界さえも合併からのメリットを優先とし、合併を後押しする追い風となっているのが明らかになった。そのことで、両社は賛成グループが下位政府のメンバーとして公取委へプレッシャーをかけることも期待できた。

3. 公取委の審査基準の明確化と両社のイニシアチブ発揮

これにも関わらず、1969年4月25日、公取委は「両社の合併が競争を実質的に制限することとなる」と判断し、合併を否認する勧告を言い渡した。同時に、東京高等裁判所へ合併に対しての緊急停止命令申し出を提出し(5月30日取消)、財界の激しい反発を引き起こした。否認理由は、鉄鋼大手6メーカーの中で八幡・富士製鉄の市場シェアが1, 2位であるので、合併により競争が実質的に制限され、「私的独禁法」第16条1項1号の規定に違反するものであるといった。ここでは、市場シェアが高く競争を実質的に制限する可能性がある品目、即ち、鉄道用レール(100%)、食かん用ブリキ(61.2%)、鋳物(56.3%)、鋼矢板(98.3%)などの4品目の独占解消を合併承認の条件として示した。(新日本製鉄株式会社、昭和56：132-42)。公取委は、合併後にも競争相手があるかどうか、即ち「有効な競争相手」があるかを重視し、総合力(粗鋼シェア)や市場支配力より、「個別」品目の市場シェアを合併承認の条件として明確化したことである。それゆえ、4品目の独占を解消すれば、合併への承認可能性がうかがわれた(有賀美智子、1977：229-30)。

このような勧告直後、両社は興銀や通産省と協議した結果、勧告を拒否しながら、対応策についてコミュニケーションを活発化し、イニシアチブを行使し続けていった。例えば、対応策として興銀からの釜石製鉄の分離案を拒否し、合併自体をすべて敵に回した思想であることを懸念している通産省からの合併の取り消し案についても断固に反対したことがある(永野重雄、1977：193；熊谷典文、1977：262-3；中山素平、1977：217)。その中で、合併を積極的に賛成するアクターが両社の決意を支持するため、下位政府のメンバーとなり、公取委へプレッシャーをよりかけるよう乗り出した。

「経団連独禁法研究会」は開放経済体制下の産業再編成や企業力強化のための努力を阻害しないことを訴え、また独禁法の運用に当たっては、法律的観点に終始せず、産業政策面からの判断もすべきことを要望した。「自民党経済調査会」は日本産業構造の再編成と今後の経済発展に阻害となら無用、独禁法体制を検討するよう呼びかけた。さらに、政府は鉄鋼の大型合併が原則的に必要で

あることを統一意見として閣議決定した(新日本製鉄株式会社、昭和56：84)。

公取委審査官が6月19日の第1次審判で、合併に伴う問題品目として指摘したのは、両社が独占している、鉄道レール、食缶用ブリキ、鋳物用鉄、鉄矢板などである。これに対して、両社は反論し、特に3回の審判(7月14日)では同種業界の参考人が使い慣れは価格、安定供給などの取引条件により打破されること、材料の配給計算や品質分析等管理技術が進んでいるという趣旨の証言をし、両社の合併を後押ししていった(新日本製鉄株式会社、昭和56：89)。合併が市場競争を制限する危険性はないという証言が、同種業界のから出たことに注目を集めるべきである。彼らは、両社が合併した場合、有効な競争体制の確立をもたらす、市場構造上でも合併が望ましいという利害一致を示したことである(熊谷典文、1977：258-60)。このような市場アクターの後押しの中で、両社は8月11日の第9回審判の前後に独占品目について一種の妥協案である「対応措置」を提出した。市場シェアのみならず技術をほかの鉄鋼会社へ譲渡し、独占の危険性を払拭するように動き出したことである。

4. 下位政府の公取委への圧迫と合併承認

鉄鋼産業構造調整においては、財界の要求と通産省の政策方針の共通性に基づき、財界、所管省庁、自民党政務調査会などが下位政府のメンバーとなり、当事者の利害衝突を仲介、もしくは後援し、過当競争の防止や規模の大型化を中心とする業界の健全な発展を導いていく役目を果たした。これは、非政府アクターにとって、自己利益を実現するための政策形成や執行過程の場であるが、排他的な政策過程の場でおらず、構成員以外のアクターも関与できる「開放的」な政策決定機構である(北山俊哉(一)、1985年8月：56-7)。下位政府の開放で、産業政策の形成や執行が下位政府で行われたという見解も見られる(樋渡展洋、1991：54；Krauss and Muramatsu, 1988:209；北山俊哉(二)、1985年11月：94；Kalder,1993:4)。

下位政府の後押しをきっかけに、合併を巡る争いは両社と公取委の間から、公取委と下位政府の間までに拡大され、公取委は下位政府の圧迫に追い込まれるようになった。財界の積極的な支持、合併の必要性に関する閣議決定、さらに自民党の公取委の改組や独禁法の無力化への取り組みは、独禁政策が産業政策に従属していることを示し、反対側の反発を引き起こした原因となった(鶴田俊正、1982：152-3)。

ところが、1969年10月14日、公取委事務局審査部は「審査官意見の概要」で、両社の合併による市場支配力に対して有効な牽制者(競争者)がなくなれば、「私的独禁法」第15条第1項第1号の規定に違反するものであり、両者が提案した対応措置も、市場構造、取引事情、市場の特徴などにより変わることを、即ち、「確実性」の担保のないものであると反論した(新日本製鉄株式会社、昭和56：181-224)。

これは独占解消を担保できる対応措置の確実性を求めることである。ここで目立っているのは、公取委の姿勢の変化である。この意見は以前の強硬的な姿勢から緩んでおり、対応措置の確実性が合

併承認の条件であることを明らかにしたことである。当時の公取委の委員によると、政府や政治界から公取委への圧力はあまり感じられなかったと述べているが(有賀美智子、1977:235)、公取委の姿勢変化は下位政府の圧迫の効果を裏付けることである。

両社是对応措置の確実性を担保するため、他の製鉄会社と協力関係を深めるという契約書や覚書のみならず、違反事実を排除するという契約としての「排除計画書」を添え、同意審決の申し出を公取委へ提出した。対応措置を備える際に、両社のイニシアチブが目立った。前で述べたように、日本興業銀行は事業譲渡案として釜石製鉄所の分離案を提示したが、両社は断固に拒否したことがある。主務省の通産省は一切関与しておらず、需要業界の意見を聴取することや、運輸省や建設省へ協力を要請することなど、両社のイニシアチブをサポートする、要するに、フォローシップの役割へとどまっていた(熊谷典文、1977:264-5)。

これに関して、公取委は一部分の修正を求め、両社はこれに応じて10月28日新同意審決申出書を提出した。公取委は新同意審決申出書に基づき、審議を行い、対応策の実践を前提として、10月30日合併を承認する「同意審決書」を言い渡し、長期間に渡って議論されてきた合併問題が決着するようになった。その後、両社は同意書を実行するため、1970年3月30日まで様々な後続措置を行い、1970年3月31日新日鉄の誕生を迎えるようになったことである。

V. おわりに

本研究は日本の産業構造調整において、政府のリーダーシップを重視するこれまでの研究とは異なり、市場のイニシアチブを重視する見方で新日鉄の誕生までの政府と市場の関係を考察した。これまでの多くの研究が見逃しているのは、国際化という大きなインパクトが政府能力の変容に与えた効果である。特振法案に関する鉄鋼業界の反発と住友金属事件は、国際化の影響で政府の市場に対してのリーダーシップが限界に直面したことを明らかにする事例である。これに着目し、市場のイニシアチブと政府のフォローシップの組合型で鉄鋼産業の構造調整が行われたことが本研究の核心的な論調である。

市場がイニシアチブを発揮するためには、市場アクター間の利害一致と政府の了解が必修条件である。国際化が本格化となる状況で、鉄鋼業界は過小規模と過当競争に巻き込まれ、有効な競争体制を望んでおり、通産省も不景気の中での設備投資をなるべく遅らせる必要性和独占品目の開放などを望んでいたので、利害一致ができたといえる。特に、ライバル関係にある住友製鉄所、川崎製鉄社、日本鋼管などの積極的な後押しは、鉄鋼業界の利害一致を示し、両社がイニシアチブを発揮する際に、思いかけぬ追い風となった。

さらに、両社は公取委の委員長の公正を重視する人柄を考慮するなら、政府や政界を動員することがマイナスとなると判断し頼らず、一貫してイニシアチブを発揮してきた。両社としては、同種業界、政府、政治界が合併を賛成しているので、合併を支援する下位政府のメンバーとなると確信して

いたといえる。公取委の合併に関する否認をきっかけとして、その審査基準、即ち、総合粗鋼能力ではなく4品目の独占解消による有効な競争体制の構築がその基準となることが明確になってからは、両社のイニシアチブがより活発化となった。対応策を備える際に、興銀や通産省の意見を拒否し独自の案で公取委と向き合ったことは、それを明らかにする証である。

本研究で調べたように、両社のイニシアチブに対して、通産省をはじめとする政府や自民党はフォローシップの役割にとどまっていた。最初、通産省は両社からの合併提案に賛成したが、両社と公取委の間を仲介し、下位政府のメンバー間の仲介役として公取委へプレッシャーをかける役割をしたことがある。通産省が主導したといわれる合併に関する閣議決定、公取委の改組案や独禁法形骸化への取り組み、関連省庁へ協力要請などは、両社のイニシアチブをサポートするための積極的なフォローシップを明らかにするものである。特に、公取委の合併否認以降、通産省が両社とコミュニケーションをとりながら、両社の意向を尊重し「能動的」に支援に乗り出したことで、このフォローシップが「積極的」であると評価できる。

通産省がこのような積極的なフォローシップに乗り出す際に、両社が接近ポイントをどれだけ活用してきたのかについては、不分明である。両社が合併に本格的に着手する前に、政府との根回しを行い、賛成を引き出したが、経団連や同種業界の支援、公取委委員長の人柄を確認してから、とくに、公取委の審査基準が明確化になってからは、両社が一貫して独自の対応策で公取委と向き合ったことで、接近ポイントを活用する必要がなくなったともいえる。ところが、通産省が公取委の否認直後から下位政府のメンバー間を仲介しながら、公取委へプレッシャーをかけたことで、「間接的」には接近ポイントを活用してきたと考えられる。何よりも、両社にとっては、ライバル関係の同種業界からの追い風がイニシアチブを発揮できる環境を整えるに決定的な分岐点となったことに注目すべきである。

これは、国際化のインパクトが政府能力の変容、さらに政府のリーダーシップの限界をもたらし、産業政策も価格メカニズムを重視する方向へ一変するしかないことを示す。言い換えれば、国際化は政府の役割と市場の役割を逆転させるインパクトとなったことが明らかになる(長谷川啓之、1999:134)。それゆえ、新日鉄の誕生における政府と市場の関係を解明する際に、国際化という大きなインパクトを前提とすれば、これまでの政府主導を重視する見方では、不十分であり、市場のイニシアチブを重視する見方が求められることが明らかになる。

◀ 参考文献 ▶

- 大山耕輔(1996)『行政指導の政治経済学：産業政策の形成と実施』。東京：有斐閣。pp.45,126-8,145-8
 大嶽秀夫(1978)「現代政治における大企業の影響力(一)」『国家学会雑誌』、第91巻、第5・6号。pp.297-9,316-7
 _____(1978年10月)「現代政治における大企業の影響力(二)」『国家学会雑誌』、第91巻、第9・10号。pp.619-30,645-8
 北山俊哉(1985年8月)「日本における産業政策の執行過程(一)：繊維産業と鉄鋼産業」『法学論叢』、117巻5号。pp.55-61

- _____ (1985年11月) 「日本における産業政策の執行過程(二)：繊維産業と鉄鋼産業」 『法学論叢』、118巻2号。p.94
- 熊谷典文(1977) 「公取委との攻防」。エコノミスト編集部編。『戦後産業史への証言一：産業政策』。東京：毎日新聞社。pp.256,258-265
- 新日本製鉄株式会社(昭和56) 『炎とともに：新日本製鉄株式会社十年史』。東京：大日本印刷。pp.57,84,116-7,152-3,181-204,267-8,273-80,285-8
- 通商産業政策史編纂委員会(平成3年) 『通商産業政策史8：高度成長期(1)』。東京：通商産業調査会。pp.106-7
- _____ (平成6年) 『通商産業政策史17：資料索引編』。東京：通商産業調査会。pp.376-8
- 坪内輩(1977) 「世界に冠たる大製鉄所」。エコノミスト編集部編。『戦後産業史への証言二：巨大化の時代』。東京：毎日新聞社。p.91
- 鶴田俊正(1982) 『戦後日本の産業政策』。東京：日本経済新聞。pp.92-5,152-3
- 永野重雄(1977) 「旧日鉄再興への情熱」エコノミスト編集部編。『戦後産業史への証言一：産業政策』。東京：毎日新聞社。pp.185-7,193
- 中山素平(1977) 「大型合併の舞台裏」。エコノミスト編集部編。『戦後産業史への証言一：産業政策』。東京：毎日新聞社。pp.205,208-10,212-220
- 長谷川啓之(1999)。「アジアの経済発展と政府の役割」東京：文真堂.p.134
- 日向方斉(1977)。「官僚統制への挑戦」。エコノミスト編集部編。『戦後産業史への証言二：巨大化の時代』。東京：毎日新聞社。pp.67,75
- 樋渡展洋(1991) 『戦後日本の市場と政治』。東京：東京大学出版会。pp.16-9,54-5,62
- 有賀美智子(1977) 「風穴空いた独禁法」。エコノミスト編集部編。『戦後産業史への証言一：産業政策』。東京：毎日新聞社。pp.229-30,235
- Beeson, Mark(2007) *Regionalism and Globalization in East Asia: Politics, Security and Economic Development*. New York: Palgrave Macmillan. pp.153,157
- Johnson, Chalmers(1991) “What is the Best System of National Economic Management for Korea.” in Cho, Lee-Jay and Kim, Yoon Hyung. eds. *Economic Development in the Republic of Korea*. Hawaii: East-West Center. pp.79-81
- Kalder, Kent E. (1993) *Strategic Capitalism*. New Jersey: Princeton University Press. pp.4,16-25
- Krauss, Ellis S. and Michio, Muramatsu(1988) “Japanese Political Economy Today: The patterned pluralist Model.” In Okimoto, Daniel I. and Rohlen Thomas P. eds. *Inside the Japanese System*. Stanford, California: Stanford University Press. p.209
- Okimoto, Daniel I.(1989) *Between MITI and the Market: Japanese Industrial Policy for High Technology*. Stanford, California: Stanford University Press.pp.13,28-31,35
- _____ (a) (1988) “The liberal-Democratic Party’s Grand Coalition.” In Okimoto, Daniel I. and Rohlen Thomas P. eds. *Inside the Japanese System*. Stanford, California: Stanford University Press. p.179
- Tsuru, Shigeto(1993) *Japan’s Capitalism: creative defeat and beyond*. Cambridge: Cambridge University Press. p.99
- Wade, Robert (1990) *Governing Market*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press., pp.28-9
- Yamamura, Kozo(1988) “Procartel Policy: The Advantages.” In Okimoto, Daniel I. and Rohlen Thomas P. eds. *Inside the Japanese System*. Stanford, California: Stanford University Press., pp.220-1

- 투 고 : 2012. 11. 30.
- 심 사 : 2012. 12. 15.
- 심사완료 : 2013. 01. 15.

전후 일본의 외국인 정책의 흐름*

이진원**
ljw2626@uos.ac.kr

<要 旨>

1945년以降、日本は旧植民地から移住してきた外国人・外国文化を日本の外部のものとし、このような現象は日本政府が国際交流に関する指針を発表する1987年まで続いた。その後、高度経済成長や国際化の流れの中で外国人との交流を行っていかねばならないとの認識を持ち始めた。このような認識を先に政策レベルに引き上げたのは、中央政府ではなく、地方公共団体である。しかし、当時の交流は字面通りのものに留まっていたのであって、社会の中に外国を受け入れることではなかった。つまり、外国人はいつか国に帰る者として見なされていたのである。しかし、外国人が生活者として日本に定住することで、日本政府は彼らとの共存を考えざるを得なくなった。

このような日本の外国人政策は一般的な説明である差別(排除)モデル、同化モデル、多文化主義政策とは異なる特殊性を持っており、これは単一民族神話に根差した強い閉鎖性を反映したものである。言い換えるなら、日本にとって外国を受け入れる、もしくは理解するということは、時代の流れや国際情勢の変化に伴って、積極的ではなく、消極的に対処した結果によるものなのである。

キーワード：日本の外国人政策、外文化排除、異文化交流、多文化共生

I. 서론

단일 민족의 신화를 갖고 있는 일본은 외국인에 대해 개방적이지도 관대하지도 않았다. 일본은 일본 이외의 지역에 대해서는 외지(外地), 일본인 이외의 민족에 대해서는 외인(外人)이라고 지칭하면서 자신들과 구분하는 폐쇄적인 생각을 갖고 있었다. 따라서 일본 민족과 다른 민족이 공존하는 것에 대한 개념이 매우 희박하였으며 이를 거부하였다. 그렇다고 일본에 일본 민족만이 일본인만의 문화를 고집하면서 생활하는 것은 불가능하였다. 서구세력의 압력으로 개국을 한 이후에는 서구인과 서구의 문화가 일본에 유입되었고 일본 제국의 침략 팽창주의가 이웃나라와 동남아시아를 식민지화하면서 일본과 식민지와의 인적 물적 교류가 진행되었다. 그렇지만 일본이 개국하였을 시기의 서구 등 외국과의 교류는 물리적으로 매우 어려웠기 때문에 극히 일부에 불과하였으며 제국주의 팽창시기의 일본은 식민지 종주국으로 피식민지의 시민과 문화에 대해 우월감을 갖고 있었기에 일본의 폐쇄성은 그대로 유지할 수 있었다. 그 후 제2차 세계대전에서 패전한 일본은 제국주의 시기 피식민지로부터 유입된 민족과 문화가 있었음에도 불구하고 민족적 문화적 폐쇄성을 고집하였다. 그렇지만 세계적인 국제화 흐름이라는 외부적 요인과 저출산 고령화라는 내부적 요인

* 이 논문은 2008년도 한국연구재단 지원 사업(연구의제; 한국사회의 다양성과 공존, 연구 명; 한국사회의 소수자, 다문화가족 분석:한·중·일 비교를 통한 '사회적 인정질서'의 반성적 재구성)을 중심으로, 과제번호 328-2009-1-B00033)의 지원을 받아 연구되었음.

** 서울시립대학교

으로 일본의 외국인과 외국문화에 대한 기존의 시각을 바꾸지 않으면 안 되게 되었다.

이러한 일본의 외국인에 대한 태도의 대해 콘도 아츠시(近藤敦)는 외국인에 대한 정책 대응과 인권보장의 주요 과제를 시계열적으로 정리하여 1945년부터 1979년의 시대는 제1기로 배제·차별 동화 정책의 시대, 1980년부터 1989년까지는 제2기로 평등·국제화정책의 시대, 1990년부터 2005년까지는 제3기로 정주·공생정책의 시대, 2006년 이후는 제4기로 다문화 공생정책 시대로 설명하고 있다.³⁾ 콘도의 구분은 다문화 다민족 사회에 대응하는 여러 나라의 정책에 대한 일반적인 설명을 토대로 하고 있다. 즉 한 국가 내의 인종적 소수 인을 인정하지 않고 단지 국민의 단일성을 위협하는 요인으로 소수 인종과 소수문화를 인식하여 이를 제거하거나 최소화하는 것을 정책 목표로 하는 차별(배제)모형과 소수 문화를 주류적 문화에 흡수하고 동화하고자 소수인종, 이민자, 외국인 노동자 집단이 이주 지역의 주류 문화에 동화되는 것을 정책 목표로 하고 있는 동화모형, 그리고 동화주의가 사회 통합보다는 종족 간 민족 간 갈등의 원인이 된다고 보고 이에 대한 대안적 방안으로 소수 다문화 이주자들에 대한 문화적, 정치적 사회적 차이를 인정하고 이들에게 정당성을 부여하는 다문화주의 정책을⁴⁾ 외국인과 외국문화에 대한 정책의 기본 틀로 보고 이를 일본에 적용하여 설명한 것이다.

야마와키 케이조(山脇 啓造)는 일본의 지방자치단체의 외국인 정책의 유형을 구분하면서 “1970년대 제일 코리안을 대상으로 한 정책(주로 인권정책)을 시작한 자치체와, 1990년대 뉴커머를 대상으로 한 시책(주로 국제화시책)을 시작한 자치체”라고⁵⁾ 설명하여 일본의 외국인에 대한 정책을 인권형, 국제형 등으로 구분하고 있다. 야마와키는 또한 일본의 외국인 수용의 역사를 ‘전후 제일 외국인은 그 대부분이 구 식민지 출신자이고, 법적 지위의 안정화와 권리 획득을 위한 운동이 전개’되었으며 ‘80년대 이후 아시아 및 남미 국가들로부터 뉴커머 외국인이 증가하고 점차 정주화가 증가’하고 있다고 설명하면서 ‘현재, 구 식민지 출신자와 그 자손에 대해서는 전후 보상 현실과 민족적 아이덴티티의 보장, 뉴커머에 대해서는 국가 및 지방자치체에 의한 수용태세의 정비가 큰 과제’라고 주장하고 있다.⁶⁾

본 논문에서는 이상에서 설명과는 다른 시각에서 일본의 외국인에 대한 정책을 보고자 한다. 제2차 세계대전 이후 이민 정책을 적극적으로 추진하여 다민족·다문화에 대한 정책을 시행하지 않으면 안 되는 국가들과는 달리 일본은 단일민족 신화를 유지하면서 외국인에 대한 정책을 시행하여 왔다. 따라서 중앙정부 차원의 외국인정책은 그다지 적극적이지 않았으며 외국인을 피부로 접촉하면서 이에 대한 정책을 시행하지 않으면 안 되었던 지방자치체차원에서 다소 적극적인 모습을 띠었다. 이러한 일본의 특징을 고려하면서 본 논문에서는 국가적 차원에서 시행한 외국인정책은 어떠한 성격과 내용을 갖고 있는가를 살펴보고자 한다. 즉 이민정책을 적극적으로 추진한 국가들의 정책을 분석한 틀이 아닌 일본만의

3) 近藤敦 「外国人の権利と法的地位」(近藤敦 (2011), 『多文化共生政策へのアプローチ』、明石書店) pp.66-67

4) 지종화 외 「다문화 정책 이론 확립을 위한 탐색적 연구」(사회복지 VOL 36. No2, 2009.6) pp.474-475

5) 山脇 啓造 「日本における外国政策の歴史的展開」(近藤敦 (2011) 『多文化共生政策へのアプローチ』、明石書店) p.32

6) 山脇啓造・柏崎千佳子・近藤敦, 「多民族国家日本の構想」(<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~yamawaki/vision/koso.htm>(2012/5/28))

특징을 바탕으로 그 성격을 도출하고자 하였다. 또한 지방자치단체 차원이 아닌 전 국가적 차원에서 시행한 정책은 어떠한 성격을 갖고 있는가를 정리하여 보고자 한다.

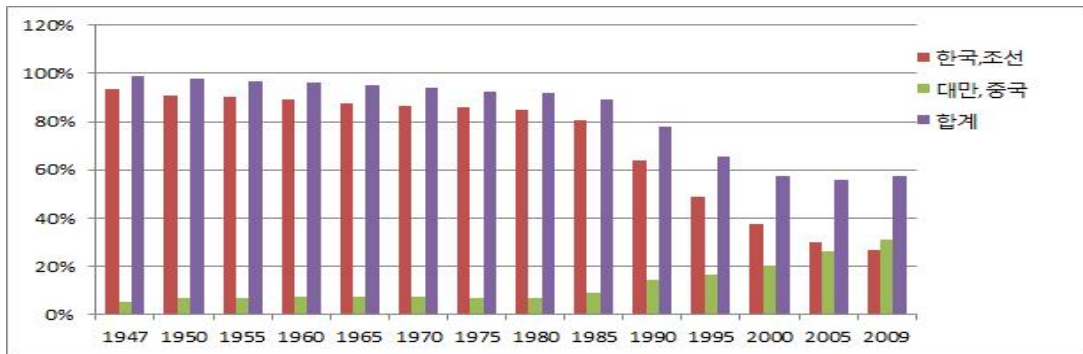
본 고에서는 전후 일본의 외국인에 대한 정책을 외문화 배제정책(外文化 排除政策)과 이문화 교류정책(異文化 交流政策), 다문화 공생정책(多文化 共生政策)으로 구분하였다. 앞서서도 설명한 바와 같이 일본은 전통적으로 자신들만의 것 이외의 것들을 전혀 다른 것이라는 의미의 요소모노(よそ者)로 구분하여 자신들과 분리하려 하였다. 따라서 전전의 일본은 일본 민족 이외를 인정하지 않는 민족 차별을 공공연하게 자행되었다. 패전 이후 일본의 외국인에 대한 기본적인 생각과 정책은 이러한 의식을 바탕으로 이루어졌다고 생각한다. 즉 일본국적을 갖지 않는 외국인들에게 대해 국적 차별을 자행하였던 것이다. 따라서 외(外)문화로 지칭하고자 한다. 그 후 세계적인 국제화의 흐름 속에서 일본 이외의 것들을 인정하지 않으면 안 되었고 그들과의 교류를 부정할 수 없게 되었다. 즉 일본 이외의 것을 완전하게 부정할 수 없었고 다른 것이라는 의식을 갖게 되었고 이들과의 교류를 불가피하게 생각하게 되었던 것이다. 따라서 이를 이(異)문화로 지칭하였다. 그리고 사회경제적 필요에 따라 다른 문화를 자신들과 같이 생활하지 않으면 안 되는 것을 인정하여 자신들의 사회 속에서 존재하는 다(多)문화로 생각하게 되어 이들과의 공생을 모색하게 되었다고 볼 수 있다.

II. 외문화 배제정책(外文化 排除政策)

1. 패전 후 일본사회의 외국인

1945년 패전 이후 일본 사회의 외국인·외국문화는 구 피식민지로부터 이주하여 온 사람들과 그들의 문화였다. 1947년 인구통계에 따르면 외국인 등록자 중 구 피식민지인 한국·조선, 중국·대만 국적자가 차지하는 비율이 93.6%와 5.14%로 전체의 98.8%로 거의 대부분을 차지하고 있었으며 이러한 현상은 1980년대까지 지속되었다.⁷⁾

외국인 등록자 중 한국·조선, 대만·중국 국적자 비율 현황



7) 일본 통계국 통계데이터 <http://www.stat.go.jp/data/chouki/02.htm>(2012/6/3)

그런데 이들 대부분은 직·간접적인 강제로⁸⁾ 피식민지로부터 일본에 이주하여 살면서 일본사회로부터 적지 않은 차별을 받은 경험을 갖고 있으며 자신들만의 공동체를 형성하여 자신들의 고국에서의 문화를 유지하면서 일본 사회의 차별의 슬픔을 극복하고자 하였다.⁹⁾ 이에 따라 이들은 일본 사회에 대한 부정적이고 저항적인 사고를 갖고 있는 사람들이 대부분이었다. 즉 패전 당시 일본사회 안의 외국인·외국문화는 일본 사회와 대립적인 입장을 갖고 있었으며 일본사회도 이에 대해 매우 강한 경계심을 갖고 있었다. 일본은 먼저 구 피식민지 출신 인들의 일본국민으로서의 참정권을 제한하였다. 1945년 12월 일본정부는 중의원 선거법을 개정하면서 부칙에 ‘호적법 적용을 받지 않는 자의 선거권 및 피선거권은 당분간 이를 정지한다.’라는 규정으로 일본에 호적이 없는 조선인 및 대만인의 선거권 행사를 금지하는 등의 조치를 취하여¹⁰⁾ 구 식민지 출신자들에 대한 경계를 표시하였다.

점령국인 미국도 이를 인식하고 있었다. 미국은 일본 점령에 앞서 다양한 점령연구를 하였는데 그 중 ‘재일 비 일본 거류민에 대한 정책(CAVC 227)’ 및 ‘재일외국인(R&A 1690)’ 등에서 1923년 관동대지진 당시 조선인 학살 사건 등을 언급하고 일본인에 의한 폭력과 사회적 경제적 차별로부터 외국인을 보호할 필요가 있다고 지적하였다.¹¹⁾ 이에 따라 1946년 2월 일본 정부에 전달된 맥아더 헌법 초안에는 제16조에 ‘외국인은 법의 평등한 보호를 받는다.’라고 명기하였다.¹²⁾ 그렇지만 일본 정부는 미국의 이러한 조치를 수용하지 않았을 뿐만 아니라 원래 일본 국적을 갖고 있던 구 피식민지 출신자들을 일본 국민과는 구별된 외국인으로 규정하여 자국민들과 철저히 분리하는 정책을 구사하였다. 결국 일본정부는 구 피식민지 출신을 일본 국적에서 제외함과 동시에 전술한 맥아더 헌법 초안을 교섭과정에서 삭제하였다. 법무부(현재의 법무성) 민사국장 통첩(1952년 4월 19일 민사갑 438)은 구 피식민지 출신인 조선인과 대만인에 대해 다음과 같은 조치를 취하였다.¹³⁾

- (1) 조선인 및 대만인은 [일본] 내지에 거주하는 자를 포함하여 모두 일본 국적을 상실한다.
- (2) 원래 조선인 또는 대만인이었던 자도 조약 발표 전에 신분행위[혼인, 양자입양 등]으로 내지 호적을 취득한 자는 계속해서 일본국적을 갖는다.
- (3) 원래 내지인이었던 자도 조약 발효전의 신분행위에 의해 내지 호적으로부터 제외된 자는 일본 국적을 상실한다.

8) 일본의 한반도에 대한 정책으로 ‘토지조사사업’ ‘산미증산계획’ 등은 당시 조선인들에게 경제적인 궁핍을 초래하게 되었고 이것이 일본에 이주하게 된 배경이 되었다. 이를 ‘간접적 강제 이주’라고 하고 있으며(中尾宏(2005), 『在日韓朝鮮人問題の基礎知識』 明石書店, p.11), 조선인들을 일본군대로 강제 징집을 하거나 일본의 노동력 부족을 보충하기 위한 징용으로 일본에 이주하는 경우는 직접적인 강제에 의한 이주이다. (참고 「아이덴티티 변용의 측면에서 본 재일 코리안」 (한국일본학회 『일본학보 89집』 참조)

9) 歴史教科書在日コリアンの歴史作成委員會編에서 편찬한 『歴史教科書 在日コリアンの歴史』의 제2장 ‘해방전 재일 조선인의 생활’에서는 일본 사회에서의 재일 조선인들의 차별에 대해 매우 상세하게 설명하고 있다.

10) 田中宏(2010), 『在日外國人』 岩波新書, p.63

11) 田中宏, 위의 책, p.61

12) 田中宏, 위의 책, p.62

13) 田中宏, 위의 책, p.66

- (4) 조선인 및 대만인이 일본 국적을 취득하기 위해서는 일반 외국인과 동일하게 귀화 수속을 밟아야 한다. 이 경우 조선인 및 대만인은 국적법에서 말하는 ‘일본 국민이었던 자’ 및 ‘일본국적을 잃은 자에 해당하지 않는다.

즉 일본 내 호적을 갖고 있지 않은 구 피식민지 출신 인들을 철저하게 외국인으로 규정하여 일본 사회와 구분하려 하였다. 이러한 규정은 야마와키 케이조가 주장하는 일본 지방자치단체가 추진한 외국인 정책이 인권형이라는 주장과는 다소 차이가 있다. 이 시기 일본 정부가 추진한 정책은 오히려 자신들과는 전혀 다른 외(外)인으로 생각하는 경향이 강했다고 할 수 있다.

2. 외국인 배제정책

일본 사회에 존재하는 구 피식민지 출신인과 그들의 문화를 확실하게 외국인·외국 문화로 규정한 일본 정부는 외국인등록령을 발표하여 외국인들에 대한 제한조치를 취하였다. 1947년 5월에 발표된 이 칙령은 외국인 등록의무, 등록증명서 휴대의무, 거주지 변경에 대한 변경등록 의무화 등을 규정하고 있으며 이를 위반할 경우 ‘6개월 이하의 징역 또는 금고, 천엔 이하의 벌금 또는 구류 혹은 과료에 처한다.’라는 등의 제재조치를 규정하고 있다. 또한 제13조와 제14조에는 외국인을 강제로 퇴거시킬 수 있는 내용도 규정하였다. 특히 제11조에는 ‘대만인 가운데 내무대신이 정하는 자 및 조선인은 이 칙령의 적용에 대해서는 당분간 외국인으로 간주한다.’ 라고 하여 구 피식민지 출신은 일본 국적을 갖고 있음에도 불구하고 외국인등록령에 적용한다는 규정을 명확하게 하였다.¹⁴⁾

일본정부가 구 피식민지 출신자들, 특히 한반도 출신자들을 일본으로부터 배제해야 한다는 내용은 요시다 시게루(吉田茂)가 맥아더에게 쓴 편지에 잘 나타나 있다. 그는 조선인들이 그들의 모국인 한반도로 귀환해야 하는 이유에 대해 다음과 같이 쓰고 있다.¹⁵⁾

- (1) 현재 및 장래의 일본 식량 사정으로 보아 필요 이상의 인구를 유지하는 것은 불가능합니다. ... 조선인 때문에 지고 있는 대미부채를 장래 세대에 지우게 하는 것은 불공평하다고 생각합니다.
- (2) 대다수의 조선인은 일본 경제의 부흥에 전혀 공헌하지 않습니다.
- (3) 더욱 나쁜 것은 조선이 가운데 범죄분자가 많은 비중을 차지하고 있다는 것입니다. 그들은 일본 경제 법령을 상습적으로 위반하는 자들입니다. 그들의 대부분은 공산주의자 및 그 비슷한 새로운 유형으로 악질적인 종류의 정치범죄를 저지르는 경향이 강하며...

즉 일본 정부의 수반은 외국인 특히 구 피식민지 출신자들을 일본 사회에 전혀 공헌하지

14) 外國人登録令 [http://ja.wikisource.org/wiki/\(2012/6/3\)](http://ja.wikisource.org/wiki/(2012/6/3))

15) 田中宏, 위의 책, pp.72-73

않을 뿐만 아니라 범죄자로 규정하고 있다. 이러한 이유로 일본에서의 외국인들은 철저한 관리의 대상이 되었다. 1951년 발표한 출입국관리령은 외국인에 대해서는 재류 조건을 정하고 강제퇴거를 할 수 있게 하였으며 벌칙 등을 부과할 수 있게 하였다.¹⁶⁾ 1952년에는 외국인등록법 제14조에 ‘외국인은... 지문을 날인하지 않으면 안 된다.’라는 조항과 함께 이를 위반할 경우 제재조치를 취할 수 있게 하여 외국인을 잠재적인 범죄인으로 취급하였다.¹⁷⁾ 이들에 대해 최종적으로 희망하는 조치 사항은 전술한 요시다 수상 편지에 명확하게 나타난다. 그는 조선인들의 본국 송환에 대해 “원칙적으로 모든 조선인을 일본 정부의 비용으로 본국에 송환해야 합니다.” “일본에 잔류하기를 희망하는 조선인을 일본 정부의 허가를 받지 않으면 안 됩니다. 허가는 일본 경제 부흥에 공헌하는 능력을 가졌다고 생각되는 조선인에게 주어집니다.”라고 하여¹⁸⁾ 일본사회에서 원하지 않는 외국인은 모두 본국으로 송환해야 한다는 의견을 표시하였다. 즉 일본사회가 원하지 않는 외국인의 일본 사회로부터의 철저한 배제 정책을 취하고 있다.

이러한 일본 정부의 정책기조는 1980년대까지 변화하지 않았다. 그렇지만 일본이 고도경제성장을 거치면서 경제적으로 세계적인 대국이 되고 선진국 대열에 들어서면서 사회의 변화가 일어나기 시작했다. 먼저 구 피식민지 출신인 재일 코리안들의¹⁹⁾ 취업과 사법시험에서의 배제정책에 대한 반발이 일어났다. 1970년의 히다치(日立) 취업 차별사건은 일본에서 태어나 일본 교육을 받고, 생활을 하면서 일본이름을 사용하였지만 취업 당시 원래 이름을 밝히지 않았다는 이유로 취업에 차별을 받은 것에 대한 저항운동이었고, 1976년 사법시험 합격자의 일본 귀화 강요 사건이 사회문제가 되었다. 이러한 반발에 대해 일본 사법부는 재일 코리안들의 주장을 인정하는 등 사회 분위기의 변화가 일어났다. 또한 1978년에는 미국인 매클린이 재류자격이외의 정치 활동을 등을 했다는 이유로 일본 재류에 제한을 받은 것에 대해 일본 사법부는 ‘기본적 인권 보장은 권리의 성질상 일본 국민만을 대상으로 하고 있다고 해석할 수 있는 것 이외에 일본에 재류하는 외국인에 대해서도 평등하게 적용된다.’라고²⁰⁾ 하여 일본 재류 외국인을 단순한 감시의 대상으로 하는 것에 대해 제재를 가했다.

이러한 사회적 분위기의 변화와 함께 이어 선진국 일본에 대한 국제사회의 요구로 1979년에는 일본이 국제 인권 규약에 가입을 하고 1981년에는 난민조약에 가입함으로써²¹⁾ 일본의

16) 出入國管理令 http://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/Detail_F0000000000000105925 (2012/6/10)

17) 外国人登録法 http://www.shugiin.go.jp/itdb_housei.nsf/html/houritsu/01319520428125.htm (2012/6/3)

18) 田中宏, 위의 책, pp.72-73

19) 이 용어에 대한 많은 논란이 있지만 본 고에서는 한반도 분단 이전의 시기부터 일본에 거주하고 있던 사람을 모두 지칭하는 것이기 때문에 ‘재일 코리안’이라고 한다.

20) 近藤敦 「外国人の権利と法的地位」 위의 책, pp.66-67

21) 일본은 난민조약(난민의 지위에 관한 조약)에 가입하였지만 난민인정에는 매우 인색하였다. 2003년의 예를 들면 미국이 60,700명이 신청을 하여 28,420명이 인정을 받고 캐나다가 31,900명이 신청하여 10,730명이 인정을 받은 것에 비해 일본은 336명이 신청하여 10명이 인정을 받았을 뿐이다. (安田修. “日本の永住権と国籍取得・在留特別許可・難民認定・子供の認知”; [http://www.interq.or.jp/tokyo/yystation/jvisa5.html\(2012/10/31\)](http://www.interq.or.jp/tokyo/yystation/jvisa5.html(2012/10/31))) 그렇지만 이로 인해 1990년에는 재류 자격을 재편하고 2004년에는 출국 명령제도를 창설하였으며 2005년에는 난민 심사참여원제도를 도입하기에 이르렀다. (出入國管理及び難民認定法 [http://ja.wikipedia.org/wiki/\(2012/10/31\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/(2012/10/31)))

출입국관리법을 개정하고 더 나아가 일본 사회의 다양한 사회보장 제도에 대한 국적 요건을 폐지하기에 이르렀다.

즉 이 시기 일본의 외국인 정책은 콘도 아츠시가 주장하는 배제·차별 동화 정책의 시대와 맞물린다. 그렇지만 일본정부의 정책은 철저한 배제정책의 성격이 더 강하다고 할 수 있다. 차별과 동화의 차원이 아닌 자신들과는 전혀 다르고 일본사회에 존재 자체를 인정할 수 없는 문화이기 때문에 배제해야 한다는 생각이 강하였다고 할 수 있다.

III. 이문화 교류정책(異文化 交流政策)

1. 경제성장과 외국인·외국문화

일본의 경제성장에 따른 국제적 위상의 제고와 이에 걸 맞는 역할을 해 줄 것에 대한 국제사회의 요구는 지금까지 일본 정부가 취하고 있던 일본 내의 일본인, 일본 문화 이외의 사람들과 문화에 대한 배제정책에 변화를 가져오게 하였다. 앞에서 설명한 바와 같이 일본 내의 외국인에 대한 차별에 반발하였고 이들의 기본권 보장 등에 대해 인식하기 시작하였다. 또한 외국인의 일본 사회 수용에 대해 긍정적인 생각을 갖기 시작하였다.

고도경제성장이 계속되면서 1980년대 이후 특히 버블경제 이후 일본에는 많은 외국인들이 입국하기 시작하여 합법, 불법적으로 일본 사회에서 생활을 하기 시작하였다. 특히 일본 고임금과 환율 등에서 유리한 동남아 국가를 중심으로 많은 노동자들이 입국하여 1979년에는 893,987명이었던 것이 1989년에 이르러서는 2,455,776명으로 거의 2.7배가 증가한 것으로 나타났다.²²⁾ 이 배경에는 일본의 고도경제성장에 따른 기업들의 구인난과 노동자의 임금 상승이 있다. 기업 활동에 압박을 받은 일본의 기업들은 외국인 노동자들을 수용하여 노동시장의 유연성을 도모하고자 하였다. 1989년 칸사이(關西)경제동우회는 ‘외국인 노동자문제에 대한 제언’을 통하여 외국인 노동자 수용을 적극적으로 제언하였으며 이어서 일본 경제인들의 전국 조직인 경제동우회도 ‘금후 외국인 고용에 대해’를 제언하여 단순노동자를 실습생으로 취업을 시키는 ‘실습프로그램’을 제안하였다.²³⁾

이러한 경제계의 요구를 받아 정부는 1989년 3월 ‘출입국 관리 및 난민 인정법’을 개정할 것을 결정하였다. 개정된 법에 따르면 지금까지 일본에서 외국인 노동자로 수용 직종을 확대하였고 이들에 대한 절차를 개선하였다. 또한 재류자격에 주로 일본계 외국인을 염두에 둔 정주자(定住者)를 신설하여 재류기간 및 취업에 제한을 두지 않았다.

그렇지만 경제계의 외국인 노동자의 수용 범위 확대 요구는 지속되었다. 도쿄(東京)상공회의소는 1989년 12월에 ‘외국인 노동자 숙련 형성제도’ 구상을 비롯하여 유사한 제안을 사용자단체들이 제안하였다. 이에 따라 정부는 ‘연수생’제도를 탄력적으로 운용하는 대안을

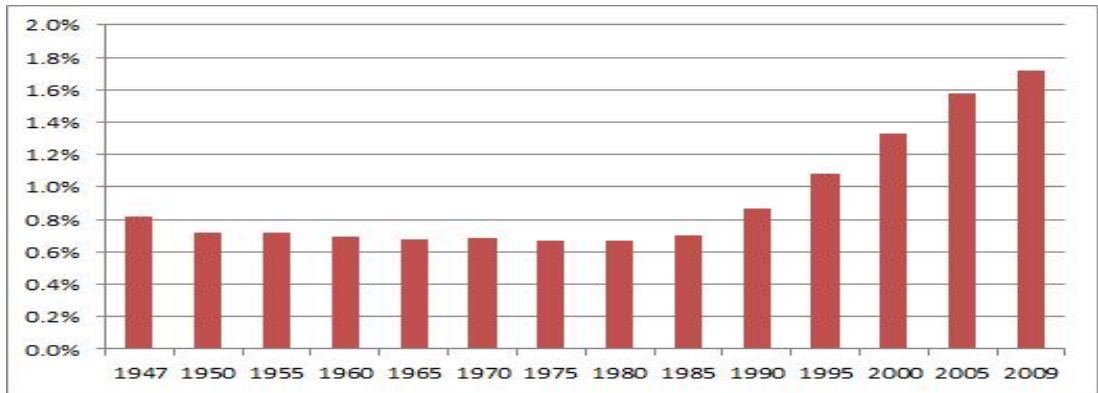
22) 藤井禎介, 「日本の外国人労働者受け入れ政策」 (http://www.ps.ritsumei.ac.jp/assoc/policy_science/142/14204fujii.pdf(2012/5/8))

23) 위의 글

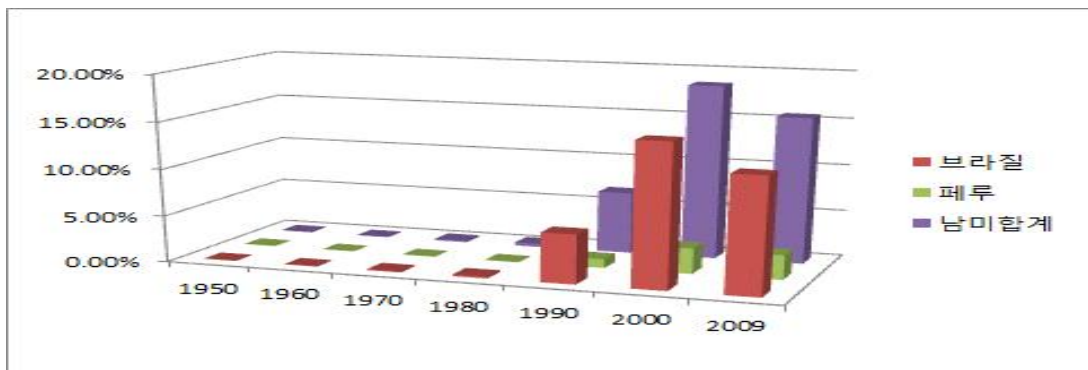
마련하였고 1991년 보고된 제3차 임시행정개혁추진심의회(臨時行政改革推進審議會;行革審)는 ‘기능실습’ 형태로 고용관계를 맺게 하는 ‘기능실습제도’를 제안하였다.

이러한 일련의 제도적 변화로 일본내 외국인의 수는 증가하였다. 특히 정주자라는 재류 자격으로 입국하여 단순노동 등 종사하고자 하는 남미 국적자의 숫자가 급격하게 증가하였다. 표에서 보는 바와 같이 등록된 외국인의 비율은 점차 감소하는 양상을 보인다 1980년대 이후 증가하고 있다. 1990년에 이르러서는 100만명을 초과하였고 2005년에는 200만명을 돌파하였다. 그 중 브라질 페루 등 남미 국적자의 비율의 증가세는 매우 두드러졌다. 특히 정주자 제도를 신설한 이후 매우 급격하게 증가하여 외국인 등록자 중 남미 국적자의 비율이 1988년 0.73%에서 1989년에는 2.22%로 증가하였다. 이 중 브라질 국적자의 비율이 1988년 0.44%에서 1989년 1.48%로 페루 국적자의 비율이 1988년 0.09%에서 1989년 0.42%로 증가하였다. 2009년의 통계에 따르면 브라질 국적자는 26만 7천여명, 페루국적자 5만7천여명으로 외국인 등록자중에서 차지하는 비율이 각각 12.23%, 2.63%이며 브라질과 페루의 합쳐서 34만여명으로 외국인 등록자중에서 15.59%를 차지하고 있다.²⁴⁾

등록 외국인 추세(전체 인구에 대한 비율)



외국인 등록자 중 남미(브라질, 페루) 국적자 비율



24) 統計局 統計데이터 <http://www.stat.go.jp/data/chouki/02.htm>(2012/6/3)

그렇지만 일본 사회가 이들을 수용 통합하고자 한 것은 아니다. 1989년의 ‘출입국 관리 및 난민 인정법’을 개정하면서 특정의 능력이 있다고 인정하는 외국인에 어느 정도의 문호를 개방하였지만 불법으로 외국인을 고용하는 사업주에 대해서는 ‘불법 취로 조장죄’를 제정하여 벌칙을 강화하였다.²⁵⁾ 연수생 등의 명목으로 일본에 재류하는 기간을 철저히 제한하였다. 즉 일본사회의 필요에 따라 일본사회에 외국인의 존재는 인정하지만 이들과 영원히 같이 할 수 있다고는 생각하지 않았던 것이다.

외국인 노동자들과 함께 이 시기 일본사회의 외국인·외국문화를 형성하고 있었던 것이 유학생들이다. 일본은 1983년 ‘21세기 유학생 정책간담회’를 통하여 일본정부는 21세기를 대비하여 유학생 수를 프랑스와 같은 10만 명 수준으로 늘리기 위해 장기적이고 종합적인 계획을 수립할 것을 제안하였다. 이러한 정부의 정책을 바탕으로 각 대학은 적극적으로 유학생을 유치하기 시작하여 1978년 5,849명이었던 총 유학생의 수가 1983년에 10,428명으로 증가하였고 그 이후 꾸준히 증가하여 1987년에는 22,154명이 되었다. 이러한 추세는 1995년 이후 감소하다 1999년부터 다시 증가하였다. 이러한 유학생의 증가는 일본 사회에서 일본 이외의 문화를 접하는 기회를 확대하였다. 그런데 유학생의 역할에 대해 일본정부가 ‘일본과 외국과의 상호 이해를 증진하고 개발도상국의 인재 육성을 위해 필요하다’고 인식하고 유학을 마친 학생들이 귀국하여 ‘자국의 발전과 일본과의 관계에 중요한 역할을 한다’²⁶⁾고 설명하고 있는 바와 같이 유학생들은 학업기간에 일시적으로 일본에서 체류하는 존재로 인식하여 이들과 이들이 일본사회에 소개한 외국문화를 일본사회가 통합한다는 생각은 강하지 않았다. 즉 이 시기에 일본 사회 내의 외국인과 이들의 문화는 이문화(異文化)라고 할 수 있다. 따라서 콘도 아츠시가 1980년대부터 1989년의 일본의 외국인 정책을 평등·국제화 정책 시기로 규정한 것은 다소 무리가 있다고 할 수 있다. 즉 일본 정부가 외국인들의 문화를 이(異)문화로 생각하고 있다는 것은 평등과는 거리가 있는 것이다. 단지 일본 사회와 다른 지역에서 존재하는 이질적인 문화로 일본 사회 내에서는 일시적으로 보여 질뿐이라고 생각하였다.

2. 국제화와 국제교류

국내외 환경의 변화에 따른 외국인·외국문화의 일본사회 유입을 가장 먼저 피부로 느꼈던 것은 지방자치단체이다. 지방자치단체는 외국인 노동자와 유학생들이 주민으로 생활하면서 이들의 문화를 이해하지 않으면 안 되었고 주민들과의 관계를 고민해야 했다. 이를 위해 지방자치단체들은 지역 내의 외국인과 교류는 물론이고 외국의 지방자치단체들과 국제교류 사업을 증대시키려 노력을 했다. 이러한 지방자치단체들의 국제교류 정책에 대해 일본 정부는 보다 효율적이고 통일된 국제교류 정책을 도모하였다. 1987년 자치성(自治省

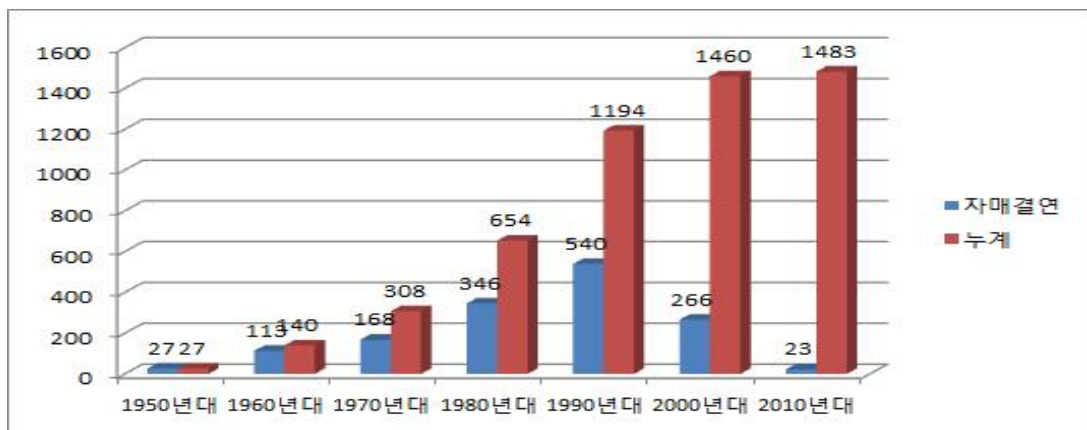
25) 藤井禎介, 위의 글

26) 当初の「留学生受入れ10万人計画」の概要

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101/2-1.htm (2012/6/28))

당시)은 ‘지방공공단체의 국제교류에 관한 지침’을 발표하였다. 여기에서는 지방공공단체의 국제교류가 활발하게 진행되고 시책도 다양하다는 설명과 함께 다른 시책 영역에 비해 경험이 없기 때문에 질적 양적으로 국제교류를 향상시킬 필요가 있다는 것을 지적하고 있다. 또한 국제화 현상에 대해서 종래의 경제 정치적인 분야를 넘어서 지역주민, 민간단체, 학술연구기관, 기업, 지역차원의 국제교류로 인적교류, 문화교류, 지역경제교류 등의 분야로 증대되고 있다고 설명하였다. 이러한 의미에서 지방자치단체가 선도적인 역할을 하면서 국제교류를 할 필요가 있으며 지방자치단체의 국제교류 사업의 목표를 ‘주민의 국제인식·이해 함양’ ‘지역이미지의 국제차원의 고양’ ‘국제사회에서 지역 아이덴티티 확립’ ‘지역에서 필요한 정보 수집 제공’ ‘지역의 행정주체로서 국제협력’ 등을 제시하였다. 지방자치단체는 국제교류를 추진하기 위해 먼저 추진체제를 정비하고 국제교류 담당직원을 양성하여 국제감각과 외국어를 습득하게 하며 국제교류를 위한 기반시설을 정비와 민간의 추진체제도 정비할 것을 요구하였다. 구체적인 시책으로 자매·우호단체 등과의 교류, 주민의 국제감각·국제인식의 함양, 교육 문화 청소년 스포츠 교류 등의 추진, 국제행사 등의 유치 등을 예시로 들고 있다. 또한 주민과 외국인과의 교류를 위한 간담회 개최 등도 제안하고 있다.²⁷⁾ 이 지침에 따르면 지방자치단체는 중심으로 해외의 다른 단체와의 교류의 활성화와 더불어 지역 내의 외국인들에 대한 이해와 교류를 증진시키는 것에 중점을 두고 있다. 이를 위해 일본인들의 국제적 감각과 이해를 함양하고 외국어를 구사할 수 있는 직원을 양성하며 지역주민들과 외국인들과 교류의 장을 마련하고자 하였다. 1988년 7월 1일 자치대신 관방기획실장(당시)의 ‘국제교류 마을 만들기 지침’에도 국제교류 마을 만들기의 기본 방향의 하나로 ‘재류하는 외국인과 지역주민의 교류의 장 마련’을 제시하고 있다.²⁸⁾

일본 지방자치단체의 해외 자매결연 현황 (단위: 건)



27) 地方公共団体における国際交流の在り方に関する指針 http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b8.pdf(2010/5/29)

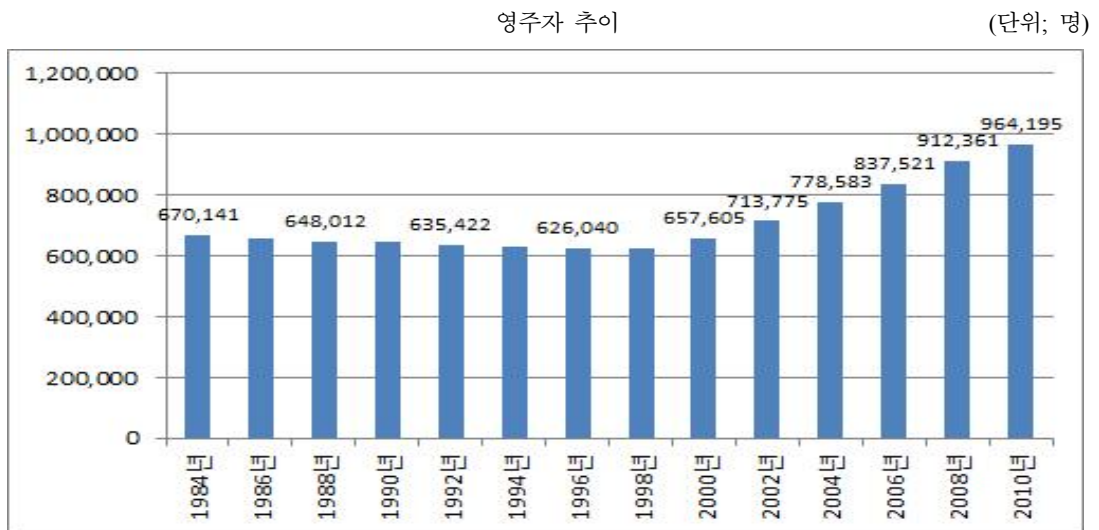
28) 国際交流のまちづくりのための指針について http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b9.pdf(2010/5/29)

지방자치단체의 국제적인 교류도 활발하게 진행되었다. 도도부현(都道府縣)과 시정촌(市町村)의 해외 자매결연을 맺은 지역현황을 보면 1950년대의 27개지역에서 1980년대에는 401개지역으로 1990년에는 586지역으로 증가하였고 그 이후 새롭게 자매결연을 맺는 지역은 감소추세를 보이고 있다. 이 통계에서 보듯이 1980년대 1990년대에 일본 지방자치단체의 국제교류에 대한 의지는 매우 강했고 가장 활발하게 진행하려고 한 측면을 엿볼 수 있다.²⁹⁾ 이러한 경향은 콘도 아츠시와 야마와키 케이조가 말하는 국제화정책의 시대, 혹은 지방자치단체의 국제형 정책에 해당한다고 할 수 있으며 이러한 규정은 명확하게 나타나는 사회 현상의 반영이라고 할 수 있다.

IV. 다문화 공생정책(多文化 共生政策)

1. 생활자의 증가

일본이 외국인·외국문화에 대한 교류를 활발히 진행하면서도 외국인의 일시적인 재류만을 전제로 한 정책을 기조로 한 것과는 달리 일본에 지속적으로 거주하는 외국인의 수는 증가하기 시작하였다. 1984년 67만141명이었던 영주자(특별영주자포함³⁰⁾)가 2002년에는 71만 3775명으로, 2010년에는 96만4195명으로 증가하였다.³¹⁾



29) 自治体国際化協会 都道府県別姉妹都市提携の状況

<http://www.clair.or.jp/cgi-bin/simai/j/01.cgi>(2012/8/14) 참고 작성

30) 1991년 실시된 ‘일본국과의 평화조약에 기초하여 일본 국적을 이탈한 자들의 출입국관리에 관한 특별법’에 따라 정해진 재류자격으로 구 피식민지 출신자들에 대한 조치이다.

31) 統計局 統計데이터 <http://www.stat.go.jp/data/chouki/02.htm>(2012/6/3)

영주자(특별영주자 포함) 이외에 일본에 지속적으로 거주를 하는 재류자격이 있는 자는 일본인의 배우자, 영주자의 배우자, 정주자³²⁾ 등이 있다. 이들의 숫자는 점차 증가하여 1999년부터의 통계를 보면 영주자, 일본인 배우자, 영주자의 배우자, 정주자, 특별영주자의 숫자가 112만 8,247명이던 것이 2007년에는 141만 935명으로 증가하는 경향을 보이고 있다. 최근 들어 다소 감소하고 있지만 이들이 차지하는 일본 사회에서의 비중은 적지 않다. 그리고 이들은 외국인이지만 일본 사회를 떠나기 어려운 입장으로 일본인들과 함께 살지 않으면 안 되는 사람들이다. 즉 이들은 자신들의 문화를 가진 채 일본 사회에서 적응을 해야 하는 그룹이었다. 이에 일본 사회는 이에 대한 대응책을 강구하지 않으면 안 되었다. 즉 콘도 아츠시가 주장한 바와 같이 일본은 정주정책을 실시하지 않으면 안 되었던 것이다. 다만 본 고에서는 그 시기가 콘도가 주장한 바와 같이 2005년까지가 아닌 다문화공생정책을 추진하고 있는 현재까지 지속적으로 이어지고 있다고 생각한다. 내각부는 2009년에 일본의 내각부는 정주외국인 지원에 관한 대책을 추진하였고 2010년에는 ‘일본계 정주 외국인 정책에 관한 기본 방침’을 발표하기도 하였다.

영주자 등의 숫자 추이³³⁾

(단위: 명)

	영주자	일본인의 배우자	영주자의 배우자	정주자	특별영주자	계
1999년	13,038	270,775	6,410	215,347	522,677	1,128,247
2000년	145,336	279,625	6,685	237,607	512,269	1,181,522
2001년	184,071	280,436	7,047	244,460	500,782	1,216,796
2002년	223,875	271,719	7,576	243,451	489,900	1,236,521
2003년	267,011	262,778	8,519	245,147	475,952	1,259,407
2004년	312,964	257,292	9,417	250,734	465,619	1,296,026
2005년	349,804	259,656	11,066	265,639	451,909	1,338,074
2006년	394,477	260,955	12,897	268,836	443,044	1,380,209
2007년	439,757	256,980	15,365	268,604	430,229	1,410,935
2008년	492,056	245,497	17,839	258,498	420,305	1,434,195
2009년	533,472	221,923	19,570	221,771	409,565	1,406,301
2010년	565,089	196,248	20,251	194,602	399,106	1,375,296
2011년	598,440	181,617	21,647	177,983	389,085	1,368,772

2. 다문화 공생 정책

외국인의 정주화가 확대되는 가운데 먼저 대응에 나선 것이 지방자치단체이다. 1994년

32) 법무대신이 특별한 이유를 고려하여 일정한 재류기간을 지정하여 거주를 인정하는 자로 일본계 외국인의 배우자, 정주자의 자녀, 일본인이나 영주자의 배우자의 자녀 등과 일본인이나 영주자와 이혼 또는 사별 후 계속해서 재류를 희망하는 자 등을 말한다.

(法務省 http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyukan_hourei_h07-01-01.html(2012/8/19) 참조

33) 法務省 http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html

出入國管理(白書)<http://www.moj.go.jp/content/000001937.pdf> (2012/8/19)참조작성

효고(兵庫)현에서는 ‘효고현 지역국제화추진기본지침’에서 ‘외국인 현민과의 공생사회를 향하여’라는 부제를 붙여 외국인들과의 공생에 대한 대책을 마련하고자 하였고 1999년 센다이(仙台)시에서는 ‘다문화 공생추진행동계획’을 책정하였다. 아울러 정부에서도 ‘21세기 일본의 구상’에서 “일본에 살기를 원하고 일해 보고 싶은 마음이 생기도록 하는 ‘이민정책’을 수립해야 한다.”³⁴⁾는 제언을 하였다. 보다 실질적으로는 외국인이 모여 사는 지역이 중심이 되어 2001년 외국인 집주도시 회의를 개최하여 일본인 주민과 외국인 주민의 지역에서의 공생을 위한 ‘하마마츠(浜松)선언’을 채택하였다.³⁵⁾ 지방자치단체를 중심으로 외국인 주민과의 공생을 위해 ‘다문화 공생’을 주장하면서 2003년 효고현이 ‘어린이 다문화 공생센터’를 설치하였고 2004년에는 아이치(愛知)현, 기후(岐阜)현, 나고야(名古屋)시가 ‘다문화 공생사회 만들기 공동선언’을 책정하였으며 2005년에는 카와사키(川崎)가 ‘다문화 공생사회 추진 지침을, 다치카와(立川)시는 ‘다문화 공생추진플랜’을 책정하였다.³⁶⁾

일본 정부도 정주 외국인의 증가에 대응책의 필요성에 대해 인식하기 시작했다. 2004년 총무성은 ‘다문화 공생 추진에 관한 연구회의’를 출범시켜 2006년 보고서를 제출하였다.³⁷⁾ 이 보고서에서는 일본은 지금까지는 ‘외국인 노동자 정책 혹은 재류 관리의 관점에서’ 외국인에 대처하여 왔지만 앞으로는 ‘외국인 주민도 또한 생활자이고 지역 주민이라는 것을 인식’하고 ‘1980년대 후반부터 국제교류와 국제협력을 주축으로 하여 지역의 국제화를 추진하였지만... 다문화 공생을 주축’으로 추진해야 한다고 하고 있다. 따라서 앞으로는 외국인·외국문화를 ‘커뮤니케이션 지원’ ‘생활지원’ ‘다문화공생 지역 만들기’의 관점에서 검토해야 한다고 하였다. 구체적인 내용으로는 “단순히 외국인 노동자 문제나 재류 관리라는 관점에서 논하는 것이 아니라 외국인을 지역에서 생활하는 주민으로 생각하여... 지역사회의 구성원으로 더불어 살아간다는 관점에서”라고 하여 일본 사회를 다문화가 공생하는 지역으로 만들 것을 제안하였다. 이를 위해 정부는 지금까지의 각종 규제를 검토하여 개정하고 다문화 공생을 담당하는 소관부서를 설치하는 등의 하드웨어 면의 정비뿐만 아니라 일본 주민들에게는 ‘다문화 공생에 관한 의식을 계발’하며 ‘국적이나 문화의 차이에도 불구하고 지역에서 함께 생활하는 주민으로 서로를 이해하는 것이 필요하다.’고 하여 소프트웨어 면의 개선의 필요성을 제언하였다. 2006년 12월에는 외국인 노동자 문제 관계 성청 연합회의에서 ‘생활자로서의 외국인에 관한 종합대책’을 제출하였다.³⁸⁾ 이 보고서에서는 ‘외국인에 대해 그 처우 생활환경 등에 대해 일정의 책임을 져야하며 사회의 일원으로 일본인과 동일한 공공 서비스를 향유하여 생활할 수 있는 환경을 정비하지 않으면 안 된다.’라고 하면서 생활자로서의 외국인에 대한 서비스 촉진을 위해 국가뿐만 아니라 지방자치단체나 NPO 등이

34) 21세기 일본의 구상 간담회 「일본의 프론티어는 일본 안에 있다」

(<http://www.kantei.go.jp/jp/21century/houkokusyo/index1.html>(2012/8/19))

35) 外國人集住都市會議 <http://www.shujutoshi.jp/gaiyou/index.htm>(2012/8/19)

36) 山脇 啓造, 위의 글, p.31

37) 多文化共生の推進に関する研究会報告書2006 (http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf(2011/9/30))

38) 生活者としての外国人に関する総合的対応策 (<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/gaikokujin/honbun2.pdf#search>(2010/6/20))

해야 할 역할의 중요성을 강조하였다. 즉 일본의 외국인·외국문화 정책은 과거의 단순한 교류와 협력의 차원을 넘어서 공생하는 정책으로 전환하였다. 외국인을 일본 사회에서 공생해야 하는 생활자로 보면서 이들을 삶을 위한 서비스 체제 정비 등에 힘을 기울이게 되었다.

한편 다문화 공생 정책으로 외국인 정책이 전환되면서 이를 담당해야 할 주체로 민간단체인 NPO의 중요성을 강조하고 있다. 민간단체의 중요성은 지역의 국제교류 추진에서도 강조하고 있다. 2000년 자치대신 관방 국제실장이 지방공공단체에 보낸 ‘지역국제교류 추진대강 및 자치체 국제협력 추진대강에서 민간단체의 위치에 대해’에서는 국제교류에서 ‘민간교류 조직인 지역 국제화협회 등’이 중심이 되어 국제교류에 참여하는 것이 실질적이고 소득이 있었으며 앞으로 주민의 참여와 관여를 적극적으로 전개하고 민간단체나 주민은 국제교류의 주체가 되어야 한다고 하고 있다. 또한 지역의 국제화 협회는 민간단체와 제휴하여 국제교류를 추진하고 지방자치단체 또한 민간단체와 제휴하여 국제교류를 추진할 필요가 있다고 하였다.³⁹⁾ 앞에서 언급한 총무성의 ‘다문화 공생 추진에 관한 연구회의’ 2006년 보고서에서도 다문화 공생의 지역만들기와 지역에서의 다문화공생 추진체제의 정비에 대해서 행정과 민간의 협동을 강조하였고 2006년 12월의 외국인 노동자 문제 관계 성청 연락회의에서 ‘생활자로서의 외국인에 관한 종합대책’에서도 NPO의 역할이 강조되었던 것은 이미 설명한 바와 같다. 총무성의 2007년 보고서는 외국인들의 생활에 구체적으로 적용하는 내용을 담고 있는데 방재 네트워크 구축의 중요성을 강조하면서 연락회의에는 자치회의 회장, NPO, 일본 적십자사 등을 두루 포함시킬 것을 제안하고 있다.⁴⁰⁾

즉 이 시기 일본 정부의 외국인 정책은 국가, 지방자치단체, NPO가 협력하여 추진하는 다문화 공생 정책으로 정착되었다고 할 수 있다.

V. 결론

1945년 이후 일본은 구 피식민지로부터 이주하여 온 외국인·외국문화를 일본 이외의 것으로 구분하려 하였고 이들을 일본인과 어울리지 못하게 하였다. 이러한 현상은 일본 정부가 외국인·외국문화와의 교류를 위한 지침을 내리는 1987년까지 지속되었다. 그 이후 일본사회의 고도경제성장과 국제화의 흐름 속에서 일본은 외국인과 어울리지 않으면 안 된다는 인식을 하게 되어 이들과의 교류의 필요성을 인식하기 시작하였다. 이러한 인식은 중앙정부가 아닌 지방자치단체에서 먼저 하기 시작하였고 지방자치단체는 지역 나름대로의 정책을 수행하였다. 그렇지만 국제교류는 단순히 교류에 그칠 뿐이고 외국인을 일본 안에서 받아들이는 것은 아니었다. 일본 사회내의 외국인·외국문화는 언젠가는 자신의 국가로 돌

39) 地域国際交流推進大綱及び自治体国際協力推進大綱における民間団体の位置づけ k について
http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b3.pdf (2010/5/29)

40) 多文化共生の推進に関する研究会報告書2007
http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/2007/pdf/070328_3_bt1.pdf (2010/3/18)

아갈 것을 간주하였으며 이들과의 교류만을 강조하였다. 그렇지만 이러한 일본의 정책은 일본에 생활자로 거주하는 외국인들이 증가하면서 전환을 하지 않으면 안 되게 되었다. 장기적으로 주민으로 거주하는 외국인들의 증가는 이들과의 공존을 생각하지 않으면 안 되게 되었다. 그리고 이를 원활하게 추진하기 위해서는 중앙정부, 지방자치단체뿐만 아니라 시민 단체의 적극적인 역할이 필요하였다. 이러한 내용을 정리하면 다음과 같다.

일본의 외국인·외국문화 정책의 성격과 내용

분류	외문화배제 (外文化排除)	이문화교류 (異文化交流)	다문화공생 (多文化共生)
대상외국인	구 피식민지민	외국인노동자, 유학생	다양한외국인
성격	패전 처리 대책	경제성장대책	국제화, 다문화 대책
주체	국가	국가, 지자체	국가,지자체, NPO(NGO)
수단	재류관리	국제교류	다문화공생

이상에서 살펴 본 바와 같이 일본의 외국인 정책은 일반적인 설명 방식인 차별(배제)모형, 동화모형, 다문화주의 정책이라는 구분과는 다른 특수성을 갖고 있다. 이는 일본이 단 일민족 신화를 갖고 있는 국가이기 때문에 자신들만의 폐쇄성이 강하기 때문이며 따라서 외국인을 받아들이거나 이해하는 것도 시대의 흐름과 국제환경의 변화에 따라 능동적이 아닌 수동적으로 대응한 결과라고 할 수 있다.

◀ 참고문헌 ▶

- 近藤敦(2011), 『多文化共生政策へのアプローチ』、明石書店
 歴史教科書在日コリアンの歴史作成委員会編(2010), 『歴史教科書 在日コリアンの歴史』,明石書店
 田中宏(2010), 『在日外國人』 岩波新書
 中尾宏(2005), 『在日韓國朝鮮人問題の基礎知識』 明石書店
 지중화 외 「다문화 정책 이론 확립을 위한 탐색적 연구」 (사회복지 VOL 36. No2, 2009.6)

<http://www.digital.archives.go.jp>
<http://www.mext.go.jp>
<http://ja.wikisource.org>
<http://www.cas.go.jp>
<http://www.clair.or.jp>
<http://www.kantei.go.jp>
<http://www.kisc.meiji.ac.jp>
<http://www.moj.go.jp>
<http://www.moj.go.jp>
<http://www.ps.ritsumei.ac.jp>
<http://www.shujutoshi.jp>
<http://www.soumu.go.jp>
<http://www.soumu.go.jp>
<http://www.soumu.go.jp>

<http://www.soumu.go.jp>

<http://www.soumu.go.jp>

<http://www.stat.go.jp>

<http://www.stat.go.jp/>

■ 투 고 : 2012. 11. 30.

■ 심 사 : 2012. 12. 15.

■ 심사완료 : 2013. 01. 15.

일본의 가족주의 경영과 고용안정의 정합성

— 자유주의적 접근 —

전 영 수*
change4dream@naver.com

<요 旨>

시장万能が市場失敗を引き起こした結果、新自由主義の歩みにブレーキがかかった。格差拡大の中に福祉需要が増えながら中産層以下に脱落する階層が増したからである。特に賃金下落とリストラなど職場を取り囲んだ雇用不安が広がっている。この結果、故障した資本主義を克復する新たな代案モデルに対する関心が高まっている。福祉役割の相当部分を企業部門に任せた日本の場合には新自由主義の導入以後に雇用不安と福祉需要が増したから特に代案モデルの必要性が高い。政府福祉が稀薄な状況で企業福祉の弱体化に比例しながら増加した雇用弱者の生活水準が急激に悪くなった結果からである。この中で老舗企業と京都企業で確認されるように伝統の家族主義的な経営哲学が有力なヒントに浮び上がっている。いわば‘イエ(家)’制度として総称される集団主義及び共同体主義などが独特の経営システムに連結された日本の家族主義的な経営システムが最近の市場失敗と政府失敗を同時に乗り越えることができると思う。特に 1990年代以後の危機状況でさえ労使の共存共存のモデルを固守して来た家族主義的な経営企業が高成果を得ている点もその説得力を高める。これは新自由主義の以後に新しく浮上している進歩的な自由主義という代案システムとも繋がる。最初に自由主義が警告した市場失敗とその解法として提示された弱者保護及び相互扶助の価値の再照明が日本の家族主義の見直しと相当の交集を持つからである。それで本稿は日本の家族主義的な経営哲学が雇用安定に整合性を持つという点を企業福祉の変化を通じて西欧の自由主義的な観点から分析しようとした。

キーワード： 家族主義 経営、自由主義、雇傭安定、金融危機、企業福祉

I. 서론; 복지파탄과 대안모델

아담 스미스(Adam Smith)가 중농·중상주의에 맞서 봉건제도에서 독점적인 권력세력이던 군주·특권세력에 반발하며 사유재산권 인정과 완전경쟁(자유방임)으로 요약되는 고전적 자유주의를 설파(1776년, 『국부론』)한지 약 240년이 지났다. 이 기간 자본주의¹⁾는 많은 국가에서 다양한 차원의 도전과 진화를 반복하며 오늘에 이르렀다. 그렇다면 자유방임적인 시장효율이 전체참가자의 후생극대로 연결된다고 본 자본주의는 그 장수비결에 어울리듯 과연 옳았을까. 자본주의의 철학·이론적 배경이던 자유주의는 그간 많은 변용을 해왔다. 이는 상당한 부침 속에서도 약간의 방향전환과 비중변화를 겪으며 생존력과 설명력을 인정 받아왔다는 의미로 해석된다. 비록 고전적 자유주의(자유방임주의)에서 수정 자본주의(케인

* 한양대 국제학대학원 특임교수

1) 자본주의(Capitalism)는 그 광범위한 맥락의미와 범주기반을 감안할 때 쉽게 정의되는 단어는 아니다. 본고에서는 고전적인 자유주의를 기초로 사유재산제 인정, 시장수급에 따른 가격결정(완전경쟁·자유방임), 이윤추구의 허용, 노동력의 상품화 등 다양한 자본주의 그룹에 기초·공통적으로 인정되는 최소한의 개념을 자본주의로 사용함을 밝힌다.

지안), 그리고 신자유주의(자유지상주의) 등으로 프레임의 변화는 있을지언정 기본적인 개념은 고수돼왔다.

그런데 2008년 금융위기는 자본주의에 대한 근본회의 및 반성요구와 시장실패의 대표사례로 부각된 채 폐기 혹은 수정요구를 야기했다. 이후의 대안모델을 찾으려는 움직임과 실제연구도 활발히 진행 중이다. 특히 본고의 분석대상인 일본처럼 신자유주의의 부작용이 컸을수록 대안요구의 수위와 강도는 높다. 내수의존도가 높아 금융위기의 외부충격이 상대적으로 적었음에도 불구하고, 장기·구조적인 복합불황이 20년이나 일본경제를 위축시켰으며 그 과정에서 빈부격차의 희생자인 서민·중산층을 중심으로 한 복지수요가 급증했기 때문이다. 단적인 사례로 일본의 생활보호대상자는 금융위기를 계기로 급속히 늘어나 위험수위에 달했다²⁾. 2002년 규제완화(시장개방), 민영화, 감세의 신자유주의를 적극적으로 도입·채택한 이후 국제경쟁력 확보차원에서 기업부문이 경비절감형 경영전략을 대거 채택한 것이 결과적으로 근로자의 임금하락·구조조정 등 고용불안을 야기했다³⁾. 해고불안과 취업난맥은 전체세대에 광범위하게 확산되면서 일본사회의 집단우울로 연결되는 추세다.

이로써 1973년 일본정부가 공식적으로 선언(經濟白書)한 ‘복지원년’의 자신감은 40여년 만에 폐기해야 할 처지로 전락했다. 민주당으로의 정권교체가 새로운 가능성을 꿈꾸게 했지만 결과론적으로는 희망사항에 불과했다. 불확실성에 포위된 일본국민의 피로감과 피폐감은 사실상 극에 달했다. 반대로 이는 행복과 안정, 그리고 희망을 논하는 새로운 난국타개책의 마련요구로 확산된다. 고장 난 신자유주의를 고쳐 다시 달리게 하든가, 북유럽처럼 사민주의에 근거해 복지국가론을 세우든가, 혹은 경로의존성에 맞게 일본적 복지시스템을 재편·재구축하든가 등 논의방향은 다양하다.

경로는 다소 달라도 목적지는 탄탄한 사회안전망이 가동되는 정부복지의 확대강화라는 점에서 동일하다. 그럼에도 불구하고, 정부복지의 시급한 제도구축은 힘들고 지난하다. 재원확보와 사회타협 등 극복과제가 장기적이며 갈등적이다. 그렇다면 의욕을 다소 낮춰 현실·구체·즉각적인 복지수요 대응모델을 찾는 것이 방법이다. 이때 유력한 것은 ‘일자리=복지’란 차원에서 고용안정에 방점을 찍는 것이다. 동시에 시장실패와 정부실패를 함께 고려할 필요가 있다. 본고는 그 결론으로 ‘일본의 가족주의적 경영’에 주목한다. 그것이 정부복지 실현까지 시간을 벌어줄 뿐만 아니라 제3섹터로서 가족(공동체)주의의 주체인 기업부문의 고용안정에 직결되기 때문이다. 이는 아담 스미스를 비롯해 자유주의자들이 애초부터 거론했지만 강조되지 않은 사회적 약자와의 공생, 공정이념과 부합하며 일본기업의 전통적인 가족주의 경영과도 꽤 공통적이다. 복지파탄이 거론되는 지금 기업의 사회적 책임강조와 함께 복지기능을 담당했던 일본기업의 가족주의를 주목해야 하는 이유가 여기에 있다.

2) 2012년 8월 기초생보자는 213만1,011명으로 사상최대치를 기록했다. 버블붕괴가 본격적인 불황여파로 나타난 1995년(88만2,229명)보다 약 3배 늘어난 수치로 종전직후 최다치(1951년, 204만6,646명)를 넘어선 규모다(후생노동성, 2012).

3) 자세한 내용은 ‘전영수(2010), ‘일본의 신자유주의 도입과정과 그 특징’, 『일본연구논총』 Vol.32, 현대일본학회·참조.

II. 분석틀과 선행연구

1. 분석틀

본고의 가설은 일본의 가족주의 경영철학이 열어지면서(독립변수) 근로자의 고용안정성이 약화됐다(종속변수)는 것이다. 이를 위해 먼저 가족주의 경영철학의 원류와 특징을 살펴보고, 그 실천도구였던 기업복지⁴⁾의 하락추세가 고용불안을 야기했다는 점을 분석한다. 따라서 고용불안을 희석시키고 복지수요를 경감시키기 위해 기업복지를 유지·강화할 필요가 있다는 결론도출에 다다를 것이다. 근로자의 복지수준을 결정하는 실행주체로 신자유주의의 추종논리에서 벗어나 전통적인 일본의 가족주의 경영을 재차 부활·심화함으로써 복지과탄의 난국을 일정부분 벗어날 수 있다고 보기 때문이다. 이 과정에서 일본의 가족주의를 서구의 자유주의적 관점에서 접근·비교함으로써 일본사례가 폐쇄적이며 독창적이지 않으며 반대로 일반적이고 보편적인 대안모델이 될 수 있다는 시사점을 추론한다.

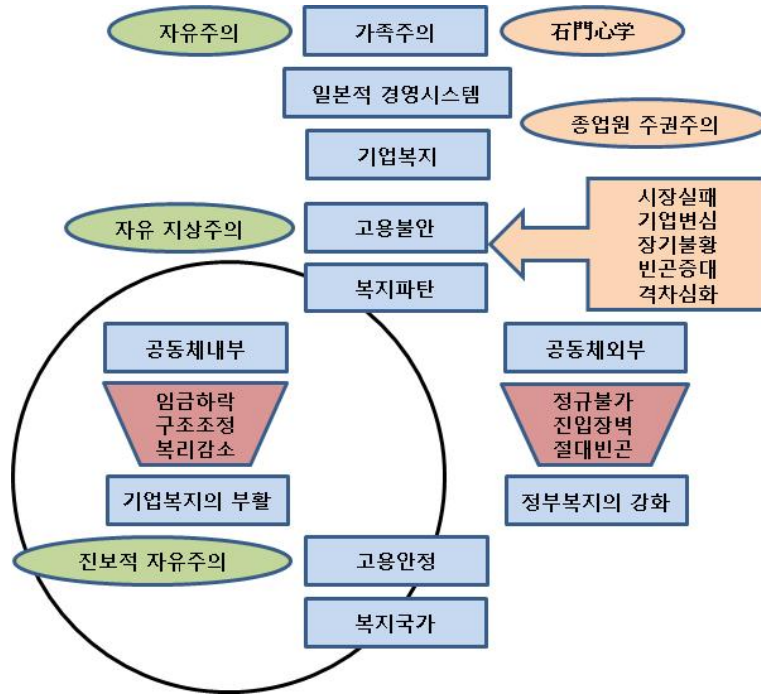
본고는 크게 2가지 분석대상을 선정했다. 3장에서 일본의 가족주의 경영과 관련된 철학·이론기반을 역사적으로 살펴보고 그 탄생배경과 진화과정, 그리고 유효성 등을 고용안정의 스펙트럼에서 분석했다. 특히 서구에서 제창된 자유주의와 일본의 가족주의가 어떻게 연결되고 어떤 거리감을 갖는지 비교 가능한 이론과 함께 그 위치정리(Position)를 시도했다. 이를 통해 4장에서는 일본의 가족주의 경영이 고용안정성과 어떻게 유의미성을 갖는지 그 정합성의 여부를 기업복지와 맞물려 연구했다. 결론에서는 일본의 가족주의를 재고찰한 이상의 결과를 토대로 한국에 대한 시사점을 끌어냈다. 일본과 한국의 성장환경과 배경문화 뿐 아니라 최근의 고용불안 등이 유사하다는 점에서 적잖은 함의를 도출할 수 있다.

구체적으로 본고는 일본의 가족주의가 문화·제도적인 정합성을 가지며 일본적 경영시스템으로 연결돼 고도성장과 함께 전체국민의 중류의식 확대에 이어졌음을 확인한다. 즉 직원우선을 통한 종업원주권주의가 일본의 복지시스템을 완성하고 근로자의 고용안정에 기여했음을 살핀다. 다만 주지하듯 1990년대 이후 고도성장의 종언과 신자유주의의 도입이 가족주의의 단절·편하를 야기하면서 이때부터 본격적으로 일본가계의 고용불안이 증폭된 것을 변곡점으로 봤다. <그림 1>의 분석틀에서처럼 시장실패, 기업변심, 장기불황, 빈곤증대, 격차심화 등의 근본적이고 공통적인 결과가 고용불안·복지과탄이며, 여기에 신자유주의가 상당역할을 했다고 이해한다(전영수, 2012). 이 결과 가족주의 경영의 보호대상인 공동체(기업)내부의 경우 임금하락, 구조조정, 복리감소의 위기상황에 봉착하게 됐다. 종신고용은 약

4) 기업복지(Occupational Welfare) 및 작업장복지(Workplace Welfare)로 해석되는 기업복지는 회사가 근로자에게 지급하는 일련의 비임금급여와 서비스를 말한다. 복지가 국가와 시장, 자원(Voluntary), 비공식분야 등이 다양하게 어울려 혼합된 형태로 제공된다는 복지혼합(Mixed Economy of Welfare), 복지다원주의(Welfare Pluralism), 복지의 사회적 분화(The Social Division of Welfare) 등의 문제제기가 연구원류다. 이를 실현하는 사회적 분화주체는 법적복지, 기업복지, 재정복지로 구분된다(Titmuss, 1963). 자세한 내용은 ‘마틴 포웰 외, 김기태 역(2011), 『복지혼합』, 나눔의 집, pp.21-44 및 pp.205-232’ 참조. 일본학계에서는 기업이 근로자의 복지향상을 꾀하고 귀속의식을 강화·안정시켜 생산성 향상과 노사관계 안정을 위해 행하는 사업(橋木俊詔)으로 정의된다. 기업성장을 위한 정부의 특혜제공이 기업복지를 강화시켰다(정부의 책임전가)는 지적도 있다(神野直彦, 後藤道夫).

화되기 시작했고, 정규직은 비정규직으로 전락했으며, 경비절감 경영은 복리비용의 감소로 연결됐다.

<그림 1> 본고의 분석틀⁵⁾



본고의 분석대상은 일본의 가족주의를 자유주의적 이론과 비교해 접근하면서 특히 가족주의가 실현되는 공동체(기업)내부에 포커스를 뒤 분석⁶⁾할 것이다. 금융위기 이후 대안모델과 관련된 이슈가 확산되면서 세계적으로는 진보적 자유주의라는 대체시스템이 주목을 받기 시작했는데, 이는 일본적 가족주의 경영의 재고찰 및 고용안정과와의 정합성과 적잖이 일치하는 내용으로 시장실패와 정부실패를 모두 고려한다는 점에서 그 의미가 남다르다.

2. 선행연구

일본의 가족주의 경영에 대한 선행연구는 그 주제가 광범위하며 분석결과가 장시간 축적된 상태다. 일본기업의 경영원리와 고도성장의 성공모델을 분석하는 과정에서 일본적인 가

5) 그림에서 세키몬신가쿠(石門心學)에 대한 설명은 3장에서 보다 자세히 다루며 큰 원에 포함된 분석틀이 본고의 결론에 해당함을 미리 밝힌다.

6) 가족주의는 기업내부만의 공동체의식이 아니다. 지역사회와 사회전체를 아우르는 포괄적인 개념으로까지 확대시킬 수 있으며, 이런 점에서 기업의 사회적 책임(CSR)은 그 최종적인 수행범위가 사회전체로 넓어진다. 다만 본고에서는 논리맥락의 관리와 논점확대를 방지하고자 기업의 가족주의 경영을 일단 공동체내부에 한정해 분석했음을 밝힌다.

족주의(혹은 공동체주의) 운영논리가 그 핵심적인 역할을 한 것으로 파악하는 연구결과가 일반적이다(星野修, 2011; 中島晶子, 2012; 原邦生, 2006). 이는 일본을 포함해 한국 등 유교권의 압축적인 고도성장을 유도한 성공적인 경제모델의 근본적인 경영철학으로 해석하는 긍정적인 흐름이지만, 반대로 1990년대 이후 아시아적 가치(Asian Value)가 훼손될 때는 정실주의, 권위주의, 관료주의와 함께 가족주의가 치명적인 성장한계로도 거론된 바 있다(폴 크루그먼, 2009). 물론 과거에는 고도성장에 성공한 아시아의 문화적 가치기반에 대한 서구 학계의 연구결과가 많았는데, 칸(Kahn, 1979)과 보글(Vogel, 1979), 호프하인즈·칼더(Hofheinz·Calder, 1982) 등이 대표적이다. 이들은 개인보다는 집단을, 변화보다는 안정을, 경쟁보다는 합의를 중시하는 아시아특유의 상생연대의 공동체적 가족문화를 유력키워드로 이해한다.

대부분의 가족주의 경영에 관한 선행연구는 그 선순환의 기능과 역할에 긍정적인 의미를 부여하는 관점에서 진행됐다고 볼 수 있다. 특히 자유지상주의(신자유주의)가 득세했던 2000년대 초중반을 제외하면 일본현지에서는 가족주의 경영이 오랜 시간 일본특유의 하위제도와 맞물려 고효율과 고성장으로 연결됐다는 점을 실증·이론적으로 분석한 연구결과가 보편적이다⁷⁾. 실제 가족주의 경영철학을 견지한 기업이 고성장을 내고 있다는 경영학계의 선행연구가 상당수에 이른다⁸⁾.

따라서 이토 오사무(伊藤修, 2007; 207-226), 다케타 하루히토(武田晴人, 2008; 213-214), 미즈하시 타다히로(三橋規宏, 2009; 433-437) 등은 일본기업의 가족주의 경영을 일본경제론의 핵심적인 작동원리이며 일본적 경영(경제)시스템 혹은 일본모델의 중추개념으로 활용한다. 특히 가족주의 경영전략을 채택한 특정기업 및 특정경영인의 철학과 이념을 통해 일본적 경영시스템의 특징이 어떻게 빛을 발했는지에 대해 기술한 선행연구는 셀 수 없이 많다. 일례로 ‘3대 경영의 신(神)’으로 불리는 마즈시타 고노스케(松下幸之助), 혼다 쇼이치로(本田章一郎), 이나모리 가즈오(稲盛和夫)의 경영철학을 다룬 책은 한국에도 다수 소개된 바 있다. 가족주의 경영관이 이들 책의 중요한 설명변수인 것은 재론의 여지가 없다.

금융위기 이후 신자유주의의 대안모델로 공동체에 주목한 연구도 다수 있다. 영국을 중심으로 한 ‘The Third Way’나 ‘Big Society’ 담론이 대표적이며, 한국에서는 사민주의모델인 ‘북유럽형’에 관한 선행연구가 많다⁹⁾. 같은 맥락에서 일본에서는 전통적인 일본모델이 1990

7) 비교제도분석(青木昌彦) 차원의 접근으로 일국의 경영시스템은 다원적이며 다수의 하위제도(Sub-System)가 조합돼 일정한 방향으로 움직인다는 점을 강조하는 시각이다. 이때 하위제도는 서로 맞물리며 전체시스템을 유지·확대시키며 그 점착(粘着)성과 관성으로 일정제도에 올라타게 된다고 본다. 이는 일본의 경영시스템을 ‘역사적 경로의존성’에 근거해 정당성을 찾으려는 대표적인 연구방법론이다(伊藤修, 2007; 13-24).

8) 가족주의와 실력(성과)주의를 대척점에 놓고 창업 100년 이상의 장수기업의 실적통계를 비교분석한 선행연구가 대표적이다(淺田厚志, 2012). 결론은 가족주의를 중시하는 장수기업의 매출(경상이익률)결과가 실력주의 채택기업보다 우량하다는 점이다. (http://choujukigyou.doorblog.jp/archives/cat_60255528.html, 검색일: 2012년 12월 13일).

9) 자세한 내용은 ‘앤서니 기든스(2001), 『제3의 길』, 생각의 나무, 제4장’, ‘김인춘(2012), ‘스웨덴 복지모델의 자본주의적 성격과 진화-자본축적과 분배정치’, 한국자유주의연구학회 2012년 10월 월례발표회, p.2 및 pp.12-20’ 참조.

년대 이후 발생한 복합불황의 원인이 아니며 여전히 상당한 설명력을 갖는다고 주장(江川美紀夫, 2008;9-21)하는 이른바 ‘혼합경제체제(Mixed Economy system)’가 있다. 이는 기업시스템(중신고용, 연공임금, 기업노조, 기업통치, 계열거래 등)과 정부시스템(케인스주의, 재정적 소득재분배, 마찰조정의 사업정책 등)을 보다 강화해 신자유주의의 실패영역을 극복해야 한다는 논리다. 또 일본의 가족주의적인 가치개념인 ‘와(和)’와 ‘이(家)’ 제도를 일종의 공공재로 보고 여기에 부응하는 기업역할을 강조한 연구도 있다(田端博邦, 2010;87-102). 상호적대적인 거래관계가 아닌 사회연대의식에 무게중심을 둔 체제, 즉 도덕경제론을 주장한 선행연구도 있다(賀川豊彦, 1949; 大江健三郎, 2002; 滝川好夫, 2009).

주지하듯 자유주의에 관한 선행연구는 방대한 분량처럼 깊이 있고 시선도 넓다. 메이지(明治)유신을 계기로 일본의 근대화 과정에서 서구(특히 독일)철학에 관한 다양한 관점에서의 선행연구는 1920년대의 자유·민권운동을 비롯해 일본사회에 상당한 영향을 남긴 바 있다. 대형서점(紀伊國屋)에서 키워드 ‘자유주의’를 검색해보면 제목으로 걸리는 서적만 5,500건에 달한다¹⁰⁾. 한국에서도 세부적으로 구분되는 다양한 자유주의 변천사를 연구한 결과가 적잖다. 비교를 위해 한국에서의 검색결과(예스24)는 318건이다. 대표적인 선행연구자로는 계파별, 학자별로 자유주의를 정리한 이근식(2006, 2009)을 필두로 민경국(2007), 고세훈(2011) 등이 유명하다¹¹⁾.

다만 본고의 문제제기처럼 자유주의와 가족주의를 동일평면에 놓고 성격과 특징을 비교해 연구한 경우는 찾기 힘들다. 최근 시장실패가 부각되고 정부실패마저 목격되는 가운데 복지수요가 급증하면서 자유주의와 가족주의를 개별적인 복지 스펙트럼에 접목시킨 연구는 있지만, 둘을 고용관점에서 공통적으로 비교한 연구는 잘 발견되지 않는다. 특히 일본의 가족주의와 그 변용을 고용안정(기업복지) 차원에서 접근하면서 그 비교잣대로 자유주의를 채택한 연구는 독창적이라 할 수 있다. 서구와 일본의 복지시스템을 개별 혹은 비교분석한 연구¹²⁾는 있지만 본고의 분석틀처럼 그 철학원류로 가족주의와 자유주의까지 비교한 경우는 별로 없다. 특히 고용안정에 정합성을 갖는 가족주의의 실천도구로 기업복지를 규정, 그 변화양상을 자유주의 및 가족주의 이데올로기로 접근했다는 점은 기존연구와 구별되는 본고의 특징이다.

10) <http://bookweb.kinokuniya.co.jp/guest/cgi-bin/search.cgi>, 검색일: 2012년 12월 14일.

11) 자세한 내용은 ‘이근식(2006), 『존 스튜어트 밀의 진보적 자유주의』, 이근식 자유주의 사상총서 03, 기파랑’, ‘이근식(2006), 『에덤 스미스의 고전적 자유주의』, 이근식 자유주의 사상총서 02, 기파랑’, ‘이근식(2009), 『상생적 자유주의』, 석학 인문강좌 02, 돌베개’ 및 ‘민경국(2007), 『하이에크, 자유의 길』, 한울아카데미’를 참조.

12) 일본의 복지모델을 자유주의·사민주의와 구분되는 친족·조합·국가중심의 보수주의 복지서비스로 규정한 연구(Esping-Andersen, 1990)가 유명하다. 또 일본을 ‘기업사회’로 규정(渡辺治, 1997)해 이를 유럽모델과 구별한 ‘일본형 복지국가(神野直彦, 1998)’, ‘개발주의 복지국가(後藤道夫, 2001)’ 등으로 정리한 연구도 있다. 이들은 일본의 복지모델을 기업복지, 지방통합, 보완보장 등 3가지 하부구조로 이해한다.

Ⅲ. 자유주의와 일본의 가족주의 경영

1. 일본의 가족주의 경영의 배경논리

먼저 일본적 경영(경제)시스템이 무엇인지부터 살펴보는 것이 순서일 것이다. 이를 통해 고도성장 때 완성된 일본적 경영시스템을 추동시킨 철학개념으로 가족(공동체)주의를 분석한 후 다시 거슬러 올라가 그 최종원류로 기능한 전통적인 이론기반에 도달하는 게 효과적일 것이다. 일본적 경영시스템은 종신고용, 연공서열(임금), 기업노조의 3대 특징으로 요약되는 것이 일반적이다¹³⁾. 유럽·미국 등의 경우 근대화 과정에서 해체된 공동체가 기업내부에서 재생산돼 지속됐다는 점이야말로 일본적 특징으로 거론된다(ジェームズ·C. 아베그렌, 2004)¹⁴⁾. 이런 분석은 고도성장 이후 일본사회의 중심공동체로서 기업역할을 지적하며 이를 ‘기업사회’로 명명하는 일련의 시각(渡辺治, 1997)과 맥이 닿는다. 일본기업을 ‘의사(擬似)공동체’로 본 진노 나오히코(神野直彦, 2010;70-74)는 그 표현단어가 ‘일본적 경영시스템’이라고 본다. 기업이 가족처럼 조직되며 회사가 직원에게 고용 및 생활보장을 해주는 대신 근로자는 회사에 충실한 노동을 제공했다는 의미에서 가족에 비유되는 의사공동체라는 분석이다.

이는 일본의 고용레짐이 갖는 고용보장이 복지레짐의 상당기능을 대체하고 있어(미야모토 타로, 2011;56-59) 경영시스템을 곧 복지모델로 확대해석하는 근거가 된다. 즉 기업복지의 역할·기능이 가족으로 분류되는 근로자에게 주거·교육·의료·노후 등 생애전체의 복지수요를 제공함으로써 정부는 지방도시·중소기업·농촌지역의 공동체 외부그룹과 최하위 탈락계층에 한층해 재정투입(권력이의 유도형 지방통합)과 사회안전망(보완보장)을 보장하는 분립된 생활보장을 갖춘 것이 곧 ‘일본형 복지국가론’과 ‘개발주의 복지국가론’의 내용이다(神野直彦, 1998; 後藤道夫, 2001).

다음으로 일본적 경영시스템을 탄생시킨 원류가 되는 개념 혹은 철학은 무엇인지 살펴본다. 독점이윤보다는 상생이윤을, 기업이익보다는 사회후생을, 시장만능보다는 자율규제를, 주주중시보다 직원중시에 가중치를 둔 일본적 경영시스템의 배경철학인 가족(공동체)주의를 찾아가는 작업이다. 이는 사실상 기타국가와 구분되는 일본적 문화의 특수성에서 실마리를 찾을 수 있다.

결론적으로 그 원류는 일본문화를 ‘국화’와 ‘칼’로 표현되는 집단주의 행위개념으로 분석한 루스 베네딕트(Ruth Benedict, 1946)나 보편성보다 집단적 고유성과 특수성을 문화적 특징으로 꼽은 아오키 타모츠(1997)처럼 집단, 공동체, (大)가족주의 등이 일반적으로 도출됨

13) 특히 ‘전전(戰前) 및 전후(前後)에 형성돼 고도성장부터 버블붕괴에까지 걸쳐서 실천된 일련의 경영관행’을 의미한다. ‘日本的經營’으로 위키디피아 검색결과, 검색일; 2012년 12월 14일.

14) 제임스 아베그렌(ジェームズ·C. 아베그렌)이 1958년 출간한 『日本の經營』에서 최초로 개념정의가 이뤄졌으며, 일본특유의 공동체문화에 주목해 하위제도와 선순환 기능을 강조했다. 자세한 것은 ‘ジェームズ·C. 아베그렌, 2004, 『新·日本の經營』, 日本經濟新聞出版社, 第4章’ 참조. 한편 이를 ‘삼종의 신기(三種の神器)’로 보는 인식도 보편적이다(神野直彦, 2010).

을 알 수 있다. 구체적으로 가족과 공동체적인 질서를 종적으로 규정한 집단원리(中根千枝, 1967), 천황을 정점으로 연쇄적으로 구성되는 권력구조에 따른 비논리와 무책임성(丸山眞男, 1961), 집단내부의 암묵적 이해사항이 중요한 사회질서라고 보는 공기(空氣)론(山本七平, 1977), 일본사회를 집단주의에 근거한 아마에(甘え)구조 등으로 개념화(土居健郎, 1971)한 것 등이 유명하다. 따라서 시간이 흘러 표면적인 미세변동은 있어도 장기간 축적된 기저문화가 뿌리 깊게 착근하기에 행위주체자의 사회적 성격, 일상생활 양식은 변하지 않는다(穴田義孝, 1995).

2. 가족주의의 원류로서 세키몬신가쿠(石門心學)

집단주의라는 문화적 특수성과 함께 기업 및 경영부문에 가족주의적인 이데올로기가 체화된 역사적 원류는 17세기 에도시대의 ‘세키몬신가쿠(石門心學)¹⁵⁾가 유력하다. 실제 많은 역사서에서 서구 자본주의와 비교되는 현대일본의 경영시스템과 그 배경철학의 원류로 이를 지적한다(奈良本辰也, 2005;436-444). 노동을 인격수양의 길로 본 ‘제업즉수행(諸業即修行)’의 철학기반이며 ‘선의후리(先義後利)’의 상도의는 그 결과물이다. 정리하면 세키몬신가쿠는 △선의후리(先義後利) 및 제업수행(諸業修行) △상호부조(相互扶助) 및 사회공생(社會共生) △만인복지(萬人福祉) 및 상가도덕(商家道德) △중리감독(重利甘毒) 및 검약정직(儉約正直)의 세부윤리를 갖는다. 창시자인 이시다(石田)는 또 상인도(商人道)를 인(仁, 남을 배려하는 마음), 의(義, 사람으로서 옳은 마음가짐), 예(禮, 상대를 공경하는 마음), 지(智, 지혜를 제품에 반영하는 마음)¹⁶⁾로 풀며 올바른 경영인의 자세를 쉬운 말로 풀어 설명해 개념대중화에 기여했다.

특히 세키몬신가쿠의 경제관과 경영철학은 아담 스미스가 주창한 18세기의 고전적 자유주의보다 앞섰으며, 그 내용 또한 상당부분 겹쳐 사실상 이를 자유주의 사상의 원류로 봐도 무방할 정도다. 특히 고전적 자유주의가 당시에는 언급했음에도 불구하고, 후대에 오해여지를 남긴 공정과 정의, 그리고 약자보호 등의 시장만능·탐욕추구의 통제필요까지 지적함으로써 상당한 선견지명을 확인할 수 있다. 가령 세키몬신가쿠를 설명한 책을 보면 경제적 자유주의의 두 축인 사유재산권의 보장과 자유방임의 추구는 이윤추구의 정당성(p.49, p.81)과 수요공급에 따른 가격결정 및 결과적인 후생증진(p.53)과 일치한다. 또 아담 스미스의 약

15) 에도중기 도심·농촌부와 무사사회에 급속하게 보급돼 에도말기에는 전국적인 확산추세를 보인 윤리학의 일과다. 사상가이자 윤리학자이면서 세키몬신가쿠의 창시자로 평가받는 이시다 바이간(石田梅岩, 1685~1744)이 계과창시자다. 신도, 불교, 유교의 삼교합일(三教合一)설을 기반으로 한 사상으로 그의 생존당시에는 ‘학문이란 마음을 다해 성(性)을 아는 것’으로써 마음과 자연이 일체화돼 질서를 만드는 성학(性學)으로 불렸지만, 이후 제자들에게 의해 심학(心學)으로 바뀌었다. 원류는 천명(天命)론이다. ‘상업의 본질은 교환의 중개업이며 그 중요성은 다른 직분에 못하지 않다’고 해 상인집단의 지지를 얻었다. 검약의 장려, 부의 축적을 천명의 실현으로 보는 사고관념은 칼뱅주의적 상업윤리의 일본판으로 비유된다. 일본의 산업혁명을 이끈 성공원동력으로 평가된다. 자세한 내용은 ‘由井常彦(2007), 『都鄙問答 經營の道と心』, 日経ビジネス人文庫’ 참조.

16) <http://www.edoshigusa.org/about/genealogy2/14/>(검색일; 2012년 12월 7일), ‘江戸しぐさの誕生とその系譜(中)’, NPO法人(江戸しぐさ).

점일 수 있는 고객우선주의(p.61)와 노사대화 중시, 경영에 좋아도 사회피해 때는 거래금지, 이익을 더 얻으려는 용자금지, 경영자의 강제은퇴(p.86) 등 당시로서는 혁명적인 내용까지 포함된다¹⁷⁾.

즉 세키몬신가쿠는 사농공상의 신분질서를 전제로 기업(상인)의 이윤추구를 정당행위로 보며 적극적으로 긍정한다. 자유로운 이익추구 자체가 사회행복의 실현에 연결된다는 개념이다. ‘보이지 않는 손(Invisible Hands)’의 인정이다. 좋은 제품을 적정한 가격에 사고팔면 서로 좋으며 결국에는 살기 좋은 세상이 된다고 본다. 반면 사람을 속여 버는 것은 상인이 아니며 상인은 오른쪽의 것을 왼쪽으로 단순히 옮겨 이익을 얻지 말 것을 가르친다. 자본 탐욕·금융독주에 대한 경계나 마찬가지로. 또 이익을 얻을 때는 마음자세와 기준이 중요하다. 제품품질과 가격에 진심을 다하며, 고객입장이 돼 배려해 팔고, 이때 진심을 가지는 것이야말로 상인의 생명이라고 본다. 이익만 생각해 행동하면 곤란하고 상호부조와 상호신뢰의 마음을 가지라는 뜻이다. 더불어 공동체의 멤버인 직원은 함께 살아가야 할 중대한 협조자이기에 나누고 논의하며 배려할 것을 요구한다. 이런 점에서 서구철학인 자유주의는 가족주의를 기반으로 하는 일본적 경영철학과도 적잖은 부분에서 맞물리며 공통분모를 갖는다.

3. 가족주의 경영의 현대적 진화

세키몬신가쿠는 현재 상당수의 일본기업에 경영이념과 사시(社是)로 명맥을 유지하며 기능 중이다. 즉 전후 일본적 경영시스템의 기본적인 가치철학을 제공한 원류로서 세키몬신가쿠가 현재에까지 그 영향력을 발휘하고 있다는 의미다. 또 일본에 자본주의가 뿌리내리도록 한 장본인답게 기업운리의 실천차원에서 그를 신봉하는 경영자도 많다(清水正博, 2011). 장수(老舗)기업, 교토(京都)기업 등 일련의 기업군이 대표적이다. 특히 장인(職人)문화를 뛰어난 기술을 가진 자율적인 개인집단으로 보고 이를 ‘이에(家)’로 표현하는 교토기업은 눈에 보이지 않는 무형자산을 당면이익보다 중시하는데, 그중 압권이 바로 내부공동체인 인재(근로자)와의 상생·공존문화다(堀場厚, 2011)¹⁸⁾.

17) 由井常彦(2007), 『都鄙問答 経営の道と心』, 日経ビジネス人文庫. 더불어 창시자의 발언 중 “商家は、家業を続けることで、天下の泰平を助け、万人の福祉に奉仕するものであり、それが商売の本質である(상가(商家)는 가업을 잇는 것으로 천하태평을 돕고, 만민행복에 봉사하며, 그것이 상거래의 본질이다)”, “二重の利を取り、甘き毒を喰ひ、自死するやうなこと多かるべし(이중의 욕심을 내면 맛있지만 결국 독을 먹는 것으로 본인을 죽이는 경우가 많다)”, “実の商人は、先も立、我も立つことを思うなり(참된 상인이면 상대방도 세워주고 나도 서도록 해야 한다)” 등이 특히 유명하다.

18) 호리바 아츠시(堀場厚著, 2011)는 교토기업의 특징으로 모방의 지양, 보이지 않는 것의 중시, 사업의 지속유지, 순환과 균형적 사고 등을 거론한다. 보이지 않는 것의 중시란 인재, 기술력, 신념(가치관), 기업문화, 조직력, 브랜드 파워 등의 무형자산을 의미한다(p.64). 이들과의 공생이 장수기업으로 연결되는 기초가 됐다고 본다(pp.220~225). 따라서 장인(職人)문화는 뛰어난 기술을 가진 자율적인 개인집단이라는 의미에서 ‘이에(家)’라는 단어로 표현된다. 결국 교토기업은 사람(人), 물건(モノ), 자본(カネ) 중 사람을 가장 중시하게 되는데(pp.27-29), 눈앞의 이익보다는 인재를 중시한 경영자원의 적절한 배분에 주력하는 경영전략을 실천해왔다. 자세한 것은 ‘堀場厚(2011), 『京都の企業はなぜ独創的で業績がよいのか』, 講談社’ 참조.

이 결과 처음에는 검약·정직·인내 등 서민을 위한 생활철학으로 시작됐지만 점차 경제와 도덕을 융합한 독특한 사상으로 발전되면서 토착부상(富商)들 중 상당수가 세키몬신가쿠를 이념으로 흡수했다. 현재도 교토 등 간사이(關西)지역 장수기업 중 대부분이 이를 가훈으로 받아들이며 확대·발전을 모색 중이다¹⁹⁾. 동시에 원래부터 일본에 가족경영 스타일인 농민과 중소기업자의 중간층이 대량으로 존재하고 있었다는 점도 가족주의 경영확대의 근거로 작용한다(神野直彦, 2010;72).

<그림 2> 일본의 가족주의 원류와 그 진화내용



최근에는 기업의 사회적 책임을 강조하는 흐름 속에서 세키몬신가쿠의 상생경영에 주목하는 움직임도 있다. 1990년대 이후 완전경쟁·적자생존·승자독식의 신자유주의의 일본도입과 맞물려 그 폐해와 부작용을 극복하는 차원에서 자주 거론된다. 일본의 내수불황·기업부진의 심화이유를 비대화된 기업의 정신적 미성숙과 교만함의 결과로 보고, 그 치유책을 세키몬신가쿠가 제시한 사회적 책임 및 도덕윤리의 배양으로 보는 시각이다(下田幸男, 2012). 세키몬신가쿠가 영리활동을 부정하지 않으면서 비즈니스의 지속적 발전관점에서 본업을 중심으로 노사·거래처·사회관계 등 공동체내부(Shareholder)에서 사회적 책임을 다하고 주장하는 것은 기부·원조 등 본업과 구별되는 사회공헌을 강조하는 미국의 CSR과는 비교되는 특징이다(中尾敦子, 2004)²⁰⁾. 이 추세는 신자유주의 이후 보다 뚜렷해지고 있다.

4. 가족주의와 자유주의와의 비교

1980년 이래 영국·미국 등 서구선진국에서 광범위하게 채택된 신자유주의(자유시장주의)는 30년 가까이 현대 자본주의의 주류이론으로 세를 확산했다. 하지만 자본독주와 금융탐욕 등 시장실패의 절정인 금융위기 이후 신자유주의의 설명력과 존재감은 적잖이 퇴색했

19) '19 石門心學', 『2004 京都市』, 京都市歴史資料館.

20) 심학(心學)연구는 현대에 걸쳐 비교적 활발하게 진행 중이다. 주로 간사이(關西)지역을 중심으로 다양한 '심학강사(心學講舍)'가 설치·운영되고 있다(中尾敦子, 2004;89-95). 특히 재조명을 받게 된 최초계기는 1970년대다. 당시 환경문제의 부각과 기업의 불상사 등이 계속되면서 CSR(Corporate Social Responsibility, 기업의 사회적 책임) 경영이 강조되면서 일본에서는 그 사상원류로 재차 심학이 부각됐다.

다. 빈부격차가 확대되는 가운데 절대빈곤으로의 탈락집단이 급증하면서 ‘고장 난 자본주의’의 심각성은 갈수록 확대된다. 이에 많은 국가와 학계에서 자유시장주의 이후모델(Alternative Model of Post Neo-liberalism)이 존재하는지, 그렇다면 그 내용이 무엇인지에 대해 깊은 관심을 갖고 접근 중이다. 자유주의의 진면목을 둘러싼 제검토도 같은 맥락에서 학계의 관심사항 중 하나다. 여러 계파로 분류되면서 자유주의의 단면(시장만능)을 강조해 온 신자유주의가 최근 30년을 장악, 마치 자유주의의 적자(嫡子)로 인식되는 것이 아닌지 의심하는 가운데 원래부터 강조된 다른 한쪽(공정·분배·상생)의 가치체계를 재조명해볼 필요가 있다는 이유에서다²¹⁾.

따라서 자본주의의 원류이자 이론기반을 제공한 자유주의의 맥락구분부터 간단히 시도해볼 필요가 있다. 자유방임주의(Laissez-Faire Doctrine)로 요약되는 경제적 자유주의의 경제정책은 민주주의와 법치주의의 정치적 자유주의에 이어 16-19세기 고전적 자유주의라는 타이틀로 전성기를 구가했다. 이때 오해의 여지가 있는 것이 자유방임주의자들도 필수적인 공공복지와 공공시설, 의무교육 등 최소한의 정부역할²²⁾은 인정했다는 점이다(이근식, 2012;4). 따라서 자유를 강조하되 정부역할과 시장역할이 균형을 이뤄야 한다고 본다. 굳이 구분하면 분배주의(Rawls, Sen)와 공리주의(Mill, Pigou), 그리고 케인지안(Kynes)은 자유를 추구하되 정부역할도 강조했기에 <그림 3>에서처럼 2/4국면에 위치한다고 볼 수 있다. 반면 시장효율을 신봉한 신자유주의는 야경국가주의(Lassalle), 경험적 자유주의(Hayek, Friedman), 공공선택학과(Buchanan) 등의 형태로 1/4국면에 배치된다. 한편 정부역할과 시장규제를 강조한 사회주의(Fabian협회)나 공산주의(Marx) 등 집산주의는 3/4국면에 위치한다.

이렇게 자유주의를 정부-시장, 자유-규제라는 중형그래프로 구분할 경우 보다 뚜렷하게 성격·위치정립을 할 수 있다. 그렇다면 자유주의의 시장실패와 집산주의의 정부실패라는 양극단에서 자유로운 중간지점의 가치철학은 존재하지 않는 것일까. 적당한 수준에서 자유와 규제, 이익과 분배를 공유하는 중간지점 추구철학은 공동체주의²³⁾로 정리할 수 있다. 약자에 대한 사회보장이 공동체내부에서의 사회연대를 기초로 운영되고 상호부조를 중심으로 움직이는 형태라면 양극단이 지닌 실패영역을 일정부분 커버할 수 있기 때문이다(橋本俊詔,

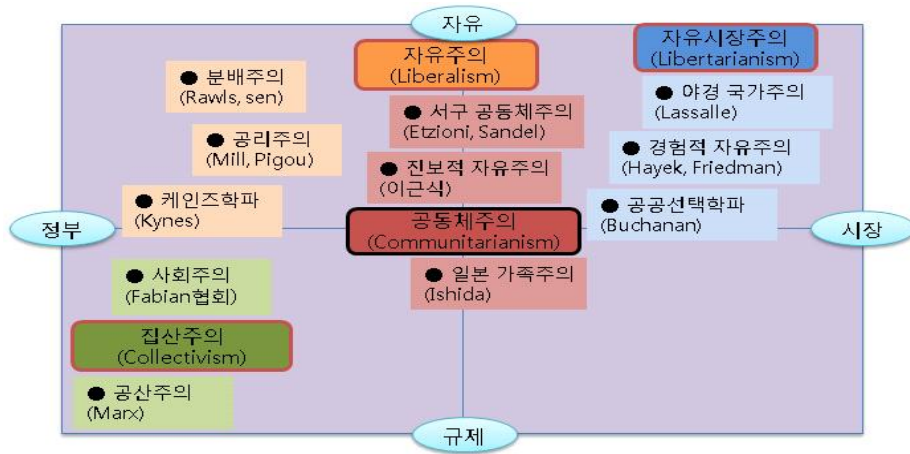
21) 이른바 신자유주의 이후의 대안모델에 관한 연구결과는 한국을 비롯해 세계 각국에서 2009년 이후 양적으로나 질적으로나 광범위하게 생산되고 있다. 자본주의의 진화차원에서 제기된 ‘자본주의 4.0’을 필두로 한국의 경우 대선과정에서 불거진 ‘경제민주화’ 논쟁이 대표적이다.

22) 즉 아담 스미스조차 『도덕감정론』에서 최저수입과 행복실현에 대해 충분히 공감하며 무질서한 사익추구를 용인에는 반대하며 타인에게 부당한 피해를 주지 않는 범위에서 공정질서를 지키며 이익을 추구하는 질서를 강조했다. 국부증진에는 자애뿐 아니라 타인감정도 관심을 가지며 끊임없이 공감하는 과정에서 관찰자로서 나의 이익과 타인의 감정까지도 고려하자고 주장한다. 『국부론』에서 중상주의를 비판하며 그 피해자인 소비자를 강조한 배경도 여기에 있다. 사익을 추구하되 공동체의 질서를 헤쳐서는 안 된다는 게 그의 대전제다.

23) 공동체주의를 복지레짐으로 연결하면 유교적 복지국가주의(Confucian Welfare State)라는 정의도 있는데, 이는 유교적 정부·기업관계(기업중심주의), 위계적 국가질서, 공동체적 질서정립 등이 강조되는 제4의 유형으로 동아시아 복지담론을 분석(심창학, 2004;58-65)한 경우다. 민간부문(기업·가족)의 상대적 역할강화, 복지제공보다는 복지규제로서의 국가역할, 조세부담보다는 기여금 의존성의 재원충당 등의 특징을 갖는다. 유교적 복지국가론(Jones, 1993)에 따르면 서구적 조합주의(Corporatism)와 구분하기 위해 기업중심주의(Corporationism)라는 단어를 쓰기도 한다.

2009;5-10). 이는 공리적 조직, 정의론 등 서구적 공동체주의(Etzioni, Sandel)로 최근 주목받고 있는데, 그럼에도 불구하고 시장규제보다는 자유가치를 존중하는 틀 안에서 움직인다고 볼 때 1/4국면과 2/4국면을 걸치는 곳에 위치시킬 수 있다. 반면 일본적인 가족주의는 비슷한 의미의 공동체지만 세키몬신가쿠에서 확인되듯 기업내부의 경영자·사시·경영이념 등에서 선의(先義), 공생, 만민복지, 도덕, 검약, 정직 등 자체이념적인 내부규제를 마련해 기업경영의 준거 틀을 강조했다는 점에서 3/4국면과 4/4국면에 걸친다고 할 수 있다. 다만 기본적으로 시장과 자유를 존중하기에 거의 원점(0)에 가깝거나 원점을 포함한다고 볼 수 있다.

<그림 3> 자유주의와 가족주의의 맥락구분



이는 이근식(2012)이 대안모델로 주장하는 진보적 자유주의와 상당부분 겹친다. 자유주의를 정치적 자유주의(민주주의+법치주의)와 경제적 자유주의(재산권보장+자유방임)로 구분한 이근식은 다시 경제적 자유주의를 보수적 자유주의(자유시장주의)와 진보적 자유주의(시장실패+정부실패)로 봤는데, 그에 따르면 신자유주의 이후의 대안모델은 진보적(=상생적) 자유주의가 유력하다²⁴⁾. 즉 천민자본주의를 극복하는 건강한 윤리와 공동체의 지향이 윤리와 염치를 잃은 대량해고와 경영진의 거액연봉 등 격차문제를 해소하고 복지강화의 기반이 된다는 입장이다. 이런 점에서 세키몬신가쿠가 원류인 일본의 가족주의는 기본적으로 신자유주의의 극복을 위해 서구 공동체주의를 보다 구체화해 진화시킨 진보적 자유주의와 상당부분 공통된다. 이로써 일본에서도 가족주의 경영의 현대적 재검토와 부활로 신자유주의가 야기한 고용불안을 공동체(기업)에서 흡수·개선시킬 근거가 마련된다.

24) 자유주의를 정치적 및 경제적 자유주의로 구분한 이근식(2012, 7-10)은 또 경제적 자유주의를 상생적 자유주의와 자유 지상주의로 분류했다. 전자는 정부의 적극적 경제개입을 인정하는 구미복지국가의 사고관이며, 후자는 정부의 최소한의 법질서 확립의무를 전제로 기본적으로 민간자유에 맡기는 철학을 의미한다. 이렇게 경제적 자유주의가 둘로 나뉜 계기는 자유의 적이 정치권력이 아닌 빈곤이라고 본 19세기 말 영국의 사회적 자유주의(Social Liberalism)가 등장하면서부터다.

IV. 가족주의 경영과 고용안정의 정합성 및 함의

1. 일본의 가족주의와 고용안정과의 정합성

고이즈미(小泉) 정권이후 급속하게 도입된 신자유주의는 중국수출·미국내수의 글로벌 경기호황이라는 특수성과 맞물려 성공모델로 추앙을 받았지만, 금융위기가 발생하면서 그 부작용과 폐해가 전면에 부각되자 최근에는 시장실패의 상징사례로 전락했다. 일본기업도 같은 기간 세계화를 위해 시장개방(해외진출), 규제완화, 감세 등의 호황흐름에 올라타며 승승장구했지만 역시 최근 소니, 샤프, 파나소닉 등 전자메이커를 중심으로 한 매출 및 경쟁력 저하 이슈가 광범위하게 확산 중이다. 특히 대기업·중소기업, 기업·가계, 도시·지방, 남성·여성, 중장년·청년 등의 격차심화가 사회갈등으로 연결되면서 남성전업·여성가사 시스템의 과거에는 보기 힘들었던 새로운 유형의 고용불안이 확대되고 있다. 즉 ‘실적하락→경비절감→구조조정→고용불안→소비침체’의 흐름 속에서 양극화가 심각하게 진행 중이다.

이 과정에서 새로운 대안모델의 필요가 증가하고 있는데, 일본의 경우 상생·공존을 지향하는 전통적인 가족주의 모델이 유력한 선택지로 대두 중이다. 특히 교토기업을 필두로 성과주의가 득세하던 시절에도 가족주의 경영이념을 고수한 사례에 주목하는 경우가 많다. 집단주의, 공동체주의로도 불리는 가족주의가 여전히 일본적 경영시스템이라는 분류 하에 적잖은 영향력을 발휘하고 있다는 의미다. 특히 1990년대부터 복합불황이 계속되는 가운데 경기부침·외생변수로부터 비교적 영향을 적게 받으며 장기고성적을 내는 경우의 공통분모로 전통적인 가족주의 경영을 주목하는 경우가 늘었다. 무엇보다 고용안정성이 돋보이는 경우다. 정리하면 해고불가, 복리증진, 노사협조, 직원우선 등 비용절감·인원정리와는 대조되는 방향의 고집스러운 경영철학 유지가 오히려 장기성장을 위한 위기극복의 키워드로 해석되는 분위기다.

특히 장기고성과의 경영사례를 분석해 그 추동력이 가족주의에게서 비롯된다는 점을 증명한 연구가 많다. 장수기업의 경영모델을 분석했더니 3대 축이 도출됐는데, 이때도 가족주의적 경영시스템으로 성격을 규정지을 수 있는 근로자의 규정강화가 목격된다. 경영이념의 공유화와 함께 인재육성(내부관리체계, 커뮤니케이션, 인재육성), 이해관계자 경영참가(근로자, 고객, 거래처)가 포함되며, 그 관통주체가 근로자에의 적극적인 배려다(みずほ総合研究所, 2011). 또 장수기업의 생존조건을 조사해도 직원 등 이해관계자와의 관계성이 예외 없이 상위에 랭크됐다(帝國データバンク, 2009)²⁵⁾. 이를 토대로 기업거래, 고용관행, 시장관행, 수익배분, 수익모델, 의사결정 등 일본적 경영시스템이 유기적으로 작동될 때 비로소 고용안정성은 강화된다(<표 1> 참고).

25) 장수기업으로 생존하기 위한 필요조건을 물었더니 신뢰유지·향상(65.8%), 진취적 기상(45.5%), 품질향상(43.0%), 지역밀착(38.6%), 전통계승(34.6%), 기술계승(34.5%), 고객계승(27.9%) 등 근로자를 필두로 한 이해관계자와의 돈독한 관계유지가 상위권에 포진했다. 더불어 장수기업의 가훈·사시·사훈을 요약했더니 감사, 근면, 공부, 검약, 공헌 등의 키워드가 제시됐다. 이는 대부분 근대 상인주의 이념인 세키몬신가쿠의 ‘三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)’의 세부적인 실천전략이다.

<표 1> 일본적 경영시스템과 고용안정성의 정합성

일본적 경영시스템	고용안정성과의 정합성
기업거래	주거래은행(계열기업)→장기거래→상호지보(持合)→경영안정→고용안정
고용제도	신졸일괄채용→종신고용→충성유도→내부승진→노사협조→고용안정
시장관행	관민협조→호송선단→기업성장→정부복지 의탁→기업복지→고용안정
수익배분	노사협조→직원우선→임금상승→복리후생→경력개발→고용안정
수익모델	장기경영→기술개발→숙련중시→수익강화→복리후생→고용안정
의사결정	집단체제(社長會)·Bottom Up→내부중시→의사조율→직원만족→고용안정

또 경영은 단순히 경영자와 출자자(주주)의 이익획득 수단만이 아니라 근로자의 협력과 사회의 지지 등도 필요하다는 인식이 재차 강조되는 추세다(芦屋曉, 2011)26). 이때 포인트는 기업은 사회 안에 있으며 사회와 함께 존재하며 사회를 위해 움직인다는 기업의 사회공공성의 강조트렌드다. 미국식의 기업·주주수익 지상주의, 투자금융 자본주의, 배금주의, 시장경제주의 등에 대한 과다한 위화감에 대한 반발로 발생한 수정의지다. 동시에 ‘공생CSR’이란 개념도 화제인데, 부가가치를 제공하는 이해관계자(근로자, 거래처)와 부가가치를 향유하는 이해관계자(고객, 주주)를 분리해 부가가치의 단순이전을 넘어서자는 개념이다. 기업의 존재이유인 경영이념의 공유로 부가가치의 제공·실현에 모든 이해관계자가 적극적으로 개입하자는 논의다(坂入克子 外, 2010;95-102).

2. 고용안정과 기업복지의 재고

푸트남(Putnam, R.D., 1993)은 남부와 구분되는 북부이태리의 경제성장 원인을 인간의 신뢰관계라는 사회자본 덕분이라고 규정했다. 대신 남부는 ‘고용불안→사회자본 쇠퇴→사회위기→경제위기→정치위기’라는 절망의 악순환에 빠졌다고 본다. 또 진노(神野直彦, 2010)는 시장실패의 원인을 나눔영역과 경쟁영역이 적당한 균형을 유지하지 못했기 때문이라고 했다. 이는 복지제공자로서 작은 정부에 머문 일본사례의 정당화 근거가 된 가족주의적 기업복지와 제3섹터 공동체에 대한 재조명 필요성을 제공해준다. 공동체로서의 기업 및 지역사회의 고용안정 및 복지공급을 위한 강화근거다. 한발 더 나아가 생활정치의 실현을 통해 정부·행정주도의 복지국가를 넘어 각종 NPO와 자조그룹 등 비영리 민간조직을 유효하게 조직화해 고용불안을 포함한 복지 거버넌스를 제공하는 게 효과적이라는 분석도 있다(미야모토 타로, 2011;188-190).

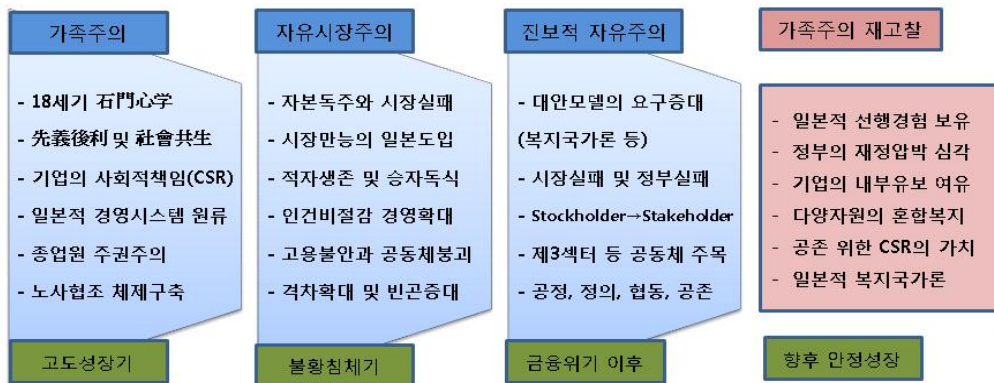
어쨌든 보다 안정적이고 장기적인 고용안정을 확보하기 위해서는 지금까지 복지제공자로서 상당한 영향력과 역할을 담당한 기업부문의 재검토가 필요하다. 이는 신자유주의의 득세시절에 고용불안이 대다수 근로자의 삶과 생활수준을 얼마나 저하시켰는지 살펴보면 더

26) 즉 경영자, 주주, 근로자, 지역사회, 국가 등 제반주체 모두에 응분의 수익배분·환원이 필요하다는 사고확산이다. 이를 원활하게 운영하기 위해 수단과 단계도 발전 중인데, 기업의 국가·지역사회에의 공헌, 근로자의 생활수준 및 만족감·사기의 향상, 경영자원의 효율적 활용, 기업문화의 확립 등이 그렇다.

더욱 기업복지의 존재감이 확인된다. 1990년대 이후 일본근로자의 근로소득과 법정외복지 비용은 추세적으로 감소한 반면 구조조정과 신규실업 등의 고용불안을 의미하는 비정규직은 꾸준히 증가했다²⁷⁾. 반면 기업매출과 세후경비를 제하고 남은 내부유보(이익잉여금)는 증가했다²⁸⁾. 즉 고용 없는 성장과 경비절감형 순익확보 및 가족주의적인 기업복지의 감퇴 증거로 해석되는 대목이다. 결국 재계의 주장처럼 저성장과 경쟁격화로 매출규모가 감소한 것이 아니라 오히려 증가했으며, 근로자의 임금 및 복리후생 수준만 줄어든 것으로 확인된다. 따라서 상생이윤, 사회후생, 자율규제, 직원중시 등 가족주의적인 경영철학이 사회적 대타협과 공존강화에 힘입어 재검토된다면 한계에 달한 정부재원을 대체하며 고용안정에 한층 근접할 수 있다.

결국 임금하락·구조조정 등 고용불안과 격차확대 속에서 확연히 들어난 복지기반 및 국민통합의 취약성을 감안할 때 적어도 일본의 경우 충분한 설명력이 여전히 존재하는 일본적 경영시스템의 근본철학인 가족주의를 재고찰할 필요가 있다. 이는 앞서 대안모델로 거론 중인 진보적 자유주의와도 일맥상통할 뿐만 아니라 시장실패와 정부실패의 양극단에서 벗어나 공정·정의·상생·공존의 일본적 복지국가론을 완성하는데 중대한 계기가 될 수 있다. 궁극적인 정부복지를 위한 중간단계로서 현실·구체·즉각적인 방안이 상생·공존의 기업복지 유지·강화를 통한 가족주의 경영을 실천하는 것이기 때문이다(<그림 4> 참고).

<그림 4> 가족주의 경영의 위기와 대안적 재고찰의 맥락도



27) 샐러리맨 평균연봉은 2009년 467만엔을 기록한 이후 지금(2009년)은 406만엔까지 하락했다(국세청). 또 법정외복지비용은 1996년(2만9,756엔) 이래 감쇄 2010년 2만5,583엔까지 떨어졌다(日經聯). 전체근로자 중 비정규직은 1990년 20.2%에서 2011년 35.1%까지 급증했다(노동력조사).

28) 1990년까지 종업원급여와 내부유보는 각각 100조엔대로 비슷한 비중을 유지하다 2010년 각각 126조엔, 293조엔으로 2배 이상 격차를 보인다. 이 과정에서 매출액 중 직원급여와 복리후생비는 줄어들었지만 내부유보와 배당률(1990년 7.6%→2006년 16.8%)은 오히려 증가했다.

V. 결론; 한국에의 시사점

공동체로서 일본의 가족주의 경영철학이 고용안정과 정합성을 갖는다는 점은 꾸준한 고성과의 장수기업을 필두로 금융위기 이후 ‘경비절감→복리하향→고용불안’의 기업복지 악화 통계에서 확인할 수 있었다. 그리고 가족주의 철학이 기능하는 일본적 경영시스템의 위치와 필요를 자유주의의 대안모델로 힘을 얻고 있는 진보적 자유주의와 동일선상에 놓고 그 의미부여를 시도해왔다. 그 결론은 시장만능적인 신자유주의가 야기한 현재의 고용불안과 복지파탄을 해결할 유력한 도구장치로 기존에 존재하는 공동체 상생지향인 가족주의의 재검토와 기업복지의 재강화로 요약된다. 특히 이는 일본과 유사경로(복지기반, 인구변화, 갈등양상, 경제구조, 사회전통 등)로 성장해온 한국에도 상당한 시사점을 제공한다. 신자유주의의 성과주의 경쟁시스템의 도입수준이 급격했던 한국에는 더욱더 그렇다. 가족주의도 한국적 진화과정을 통해 경로의존성과 부합하는 방향이 돼야겠지만 기본적인 문제제기와 합의도출은 동일하다 할 수 있다.

다만 가족주의적인 고용안정이 기업의 내부종사자만을 위한다는 점에서 반론을 제기하는 의견도 있다. 복지영역에서 공동체주의의 대척개념으로 보편주의라는 입장을 옹호하는 것이 대표적이다(橋木俊詔, 2005). 기본적으로 만인공평에 저해되며 공동체내부의 연대감만 강조하면 그 손해가 한정되기 때문이다. 충분히 옳은 지적이며 바람직하다. 실제 보편주의에 맞게 공평한 손해배분이 가능해지는 것이 최종종착지인 정부복지다. 다만 제도변경과 재원 확보 등 현실론을 볼 때 보편주의에는 상당한 시간과 노력·재원이 요구된다. 충분히 설득적이지만 급증하는 고용불안과 복지파탄을 감안하면 타협카드로서 가족주의와 기업복지를 유지·확대하는 것이 현실적이다. 적어도 공동체에서 ‘정규직→비정규직’으로의 추가적인 탈락은 막을 수 있기 때문이다.

가족주의 경영철학의 유지·확대를 위해서는 일본은 물론 한국에도 다음의 3가지²⁹⁾가 필요하다. 첫째, 기업의 인식전환이다. ‘가족주의→기업복지→성과증진’의 선순환을 전제로 열린 귀속의식과 사내불통 등 조직목적의 중요성이 근로자의 복리후생 증진으로 확보될 것이라는 기업동의를 필요하다. 직원희생으로 축적된 내부유보가 직원·가족복지를 위해 사용될 때 오히려 생산성 향상에 도움이 될 것이라는 공감대 형성이다. 둘째, 정부의 기업지원이다. 기업복지에 우호적인 경우 세제활용을 통해 보조금을 지원하는 등 고용안정과 사회보장의 긴밀한 연대구축의 필요하다. 이렇게 되면 기업은 경비절감을 유지하면서도 기업복지의 확충유인이 발생한다. 셋째, 사회의 공감확대다. 정부복지를 보완하는 기업복지를 인정하며 상호보조적인 협력모델을 추구할 필요하다. 시장실패·정부실패를 극복하려는 진보적 자유주의의 대안주체인 내발·자발적인 시민세력과 지역공동체 등 제3섹터와의 연대와도 연결된다.

그럼에도 불구하고, 본고는 적잖은 한계를 갖는다. 무엇보다 자체적인 실증분석 없이 철학적

29) 전영수, 2012, ‘복지공급의 대안모델로서 일본의 기업복지 재검토’, 동북아경제연구 24권1호, pp.176-180.

이며 이론적인 접근에 한정했다는 것이 단점이다. 가족주의 경영과 고용안정을 연결할 때 사용한 기업복지에 대해서도 한계가 있는데, 여러 설명변수 중 법정외복리비용을 강조한 것과 그 연관성을 통계적으로 입증하지 못한 것도 약점이다. 또 일본의 가족주의를 자유주의라는 거대한 개념 틀 내부에 위치시킬 때도 개별학과 간의 정치(精緻)한 구분법이 부족해 한계로 지적된다. 이와 같은 각종한계는 앞으로의 후속연구로 남겨 분석할 것이다.

◀ 참고문헌 ▶

- 김인춘(2012) ‘스웨덴 복지모델의 자본주의적 성격과 진화’, 한자언 2012년 10월 월례발표회, p.2 및 pp.12-20.
 미야모토 타로 저, 임성근 역(2011) 『복지정치-일본의 생활보장과 민주주의』, 논형, pp.56-59.
 아오키 타모츠, 최경국 옮김(1997) 『일본문화론의 변용』, 한림신서.
 앤서니 기든스(2001) 『제3의 길』, 생각의 나무, 제4장.
 이근식(2012) “‘똑똑한 복지국가’를 제안하며”, 한자언·새사연 공동주최 학술세미나 기조발표, pp.3-9.
 전영수(2012) ‘복지공급의 대안모델로서 일본의 기업복지 제검토’, 동북아경제연구 24권1호, pp.176-180.
 폴 크루그먼(2009) 『불황의 경제학』, 세종서적.
 芦屋暁(2011) ‘今再び求められる企業経営の理念と原理の再確認’, 時局レポート, 東京商工リサーチ.
 由井常彦(2007) 『都鄙問答 経営の道と心』, 日経ビジネス人文庫.
 伊藤修(2007) 『日本の経済—歴史, 現状, 論点』, 中央公論, pp.13-24.
 京都市歴史資料館(2004) ‘19 石門心學’, 『2004 京都市』.
 清水正博(2011) ‘日本の道徳力を高める石門心學’, JMA Marketing View, 3面.
 坂入克子 外(2010) ‘新たな経営モデルとしての「共生CSR」概念の確立に向けて’, みずほ総合特集 2010年 1号, みずほ総合研究所. pp.95-102
 下田幸男(2012) 『今日に生き未来に活かす石門心學-石田梅岩の経営哲学に学ぶもの-』,
 神野直彦(2010) 『「分かち合い」の経済学』, 岩波書店.
 武田晴人(2008) 『高度成長』, 岩波書店, pp.213-214.
 橋本俊詔(2005) 『企業福祉の終焉,格差の時代にどう対応すべきか』, 中公新書.
 _____(2009) ‘政府の役割を量と質でどう考えるか’, 會計検査研究 No.40 巻頭言, pp.5-10.
 帝国データバンク(2009) ‘百年続く企業の条件’, 朝日新聞出版.
 中尾敦子(2004) ‘石門心學活動の現在’, 京都大学 生涯学習・図書館情報学研究, vol.3.
 中島晶子(2012) 『南欧福祉国家スペインの形成と変容—家族主義という福祉レジーム』, ミネルヴァ書房.
 奈良本辰也(2005) 『町人の実力(日本の歴史17)』, 中公文庫, pp.436-444.
 原邦生(2006) 『家族的経営の教え』, アートデイズ.
 堀場厚(2011) 『京都の企業はなぜ独創的で業績がいいのか』, 講談社.
 星野修(2011) 『大家族主義経営—うちの会社はスタッフの夢が叶えられる大きな家庭』, エイチエス.
 三橋規宏(2009) 『ゼミナール日本経済入門』, 日本経済新聞出版社, pp.433-437.
 みずほ総合研究所(2011) ‘永続企業の経営モデル~100年続く企業にむけて’, コンサルティング・ニュース.

- 투 고 : 2012. 11. 30.
- 심 사 : 2012. 12. 15.
- 심사완료 : 2013. 01. 15.

‘사할린연구’의 전개와 ‘樺太’자료

— 인구조사와 가라후토청 경찰자료를 중심으로 —

정 하 미*
junghm@hanyang.ac.kr

<要 旨>

2000年安山故郷の村にサハリン朝鮮が永住帰国したことを契機にサハリン研究が活発化したことを韓国における学術論文や単行本発行の検索から証明し、研究者の関心の範囲やサハリン研究の位置を明らかにした。とりわけ帰国者の年齢が高齢化したことをふまえて、口述や経験語りにより帰国後の適応、サハリンでの生活、経験について研究が進行する必要があることも力説した。

同時にサハリンという空間に注目し、いつから朝鮮人がサハリンに移住したのかを南サハリンと北サハリンを区別して人口の移動と移住について調査した。史料が限定しているのでロシア側の史料と樺太庁の史料を批判的かつ分析的視点をもちつつ活用し表にした。人口の増大が1910年から1940年代に飛躍的になされたことを確認した上で43,000人説については否定的な意見を提示した。なによりも差別的な状況にあったのは劣悪な環境と賃金の格差であったことを史料を利用して提示し、‘労働移民型’‘家族移民型’の移住であったため、さらに日本人としての国籍を維持していたため帰路が準備されず、契約期間が終わっても帰国することが不可能であったことがサハリンでの韓国人の人口増加につながったことを確認した。

さらにサハリンの朝鮮人が独立運動とは無関係であったと今までの研究で指摘されたことに対して樺太庁警察史料を利用して、反論を提起した。また無政府主義者や協賛主義者として特高警察より監視されたことを明らかにしてサハリンでの状況についても視野を広げた。

研究資料が公開され始めた今こそサハリンの資料に注目し、今後ロシア側の史料と日本の樺太庁史料を利用して一次史料に立脚した研究が進められるべきであると提唱した。

Key words: Karahuto, Sakhalin, Karahuto-cho polic probe, population census, Sakhalin State Archives

1. 문제제기

한국이 구소련과 국교를 체결한 이후 사할린 한국인¹⁾의 강제동원의 역사와 고국으로의 재이주문제에 대한 관심이 증가하였다. 1985년의 페레스트로이카와 88년 서울 올림픽을 계기로 한국과 소련의 교류가 진척되고 일본에서도 전후 보상문제가 사회문제로 부상하여 1989년 한일 적십자사간 사할린거주 한인지원공동사업체 협정서가 체결되어 사할린 동포지원업무가 정식으로 수탁되기에 이르렀다. 대한 적십자사의 현황보고에 따르면 1990년 2명을 시작으로 2012년 2월에는 연인원 4,008명에 달하는 한국인이 영주 귀국하였다. 사할린의 주민은 대부분이 1939년부터 45년 사이에 강제 징용되어 탄광 벌목 도로공사 등의 노동으로 생계를 이은 사합들이며 이들은 대부분이 일제에 의하여 그 남부사할린으로 이주하게

* 한양대학교 ERICA 국제문화대학 일본언어·문화학과 교수

1) 사할린 귀환자는 동포, 한인, 한국인, 조선인, 교포, 코리언 등 다양한 표현이 있어 경우에 따라 적절히 사용한다. 일제 강점기의 징용이 주된 원인으로 볼 수 있지만 다양한 이유가 있음을 본고에서 밝힌다.

된 한인들로 그 후손들을 포함하여 3만여명에 이른다는 인식이다. 2)차적 원인제공자인 일본의 귀환의무의 이행 전후 냉전 질서에 의해 왜곡되었고 40년간은 민족역사의 미아였다. 일본은 1956년에 일소공동선언을 발표하여 국교를 회복하는데 합의하고 1957년 8월 1일부터 59년 9월 28일에 걸쳐 일본인을 집단 귀환시켰다. 일본의 전후책임의 이행 미해결된 식민지체제의 유산 소련은 출국금지조치 일본 정부는 사할린 한인에 대한 송환회피 현재 간 귀환을 둘러싼 교섭과 대응은 일본, 러시아 그리고 한국정부와의 관계협치, 일본여성과 결혼을 한 이유로 일본으로 돌아올 수 있었던 박노학씨의 ‘사할린잔류한국동포귀환운동’, 일본의 변호사의 노력을 통해 이루어진 것이고 냉전의 후퇴라는 역사적 전개 아래 진행된 것이다. 근년 사할린 귀국 동포와 관련하여 일본의 제국주의의 강제동원이나 연행에 대한 연구 등 관련 연구가 질적인 면이나 양적인 면에서 크게 증가하였다. 본 연구에서는 1990년 한국과 러시아와의 국교회복과 이와 전후하여 근년의 사할린 연구가 어떠한 경향을 가지고 있고 어떻게 전개되어 왔는지 살펴보는 것을 일차적인 목표로 한다. 보다 근본적으로는 사할린연구의 전개는 우리의 러시아에 대한 관심을 반영하고 있고 일제 강점기의 역사의 단면을 분명히 하는데 있고 민족사적인 관심을 보여주고 있다. 러시아와의 국교가 재개된 후에는 연구를 위하여 사할린에 가는 것도 가능하여지고 일본 강점기에 사할린에 보내지고 일본의 패전 후에도 돌아오지 못하였던 한인 동포에 대한 관심이 강해지면서 돌아오지 못한 한인동포를 위한 위령비를 세우기도 하고 최근에는 한국어 방송국도 사할린에 설립되었으며 민족어로 된 매스 미디어가 민족 문화 정체성 유지와 관련이 있다는 연구³⁾ 현지 사할린 생활에 대한 이해도도 높아졌다. 본고는 이러한 사할린 귀환동포의 연구의 확대가 어떠한 시대적 사회적 변화의 추이와 관련이 있는 지 ‘사할린연구’의 전개와 더불어 생각해보고자 한다. 그 과정에서 현재의 연구의 방향을 살펴보고 한계와 문제점에 대한 고찰을 하고자 한다.

그러나 이제 사할린과 관련된 문제는 다만 동포의 귀환에 그치는 것이 아니라 20세기 초반 동아시아 전역에서 일어난 이민과 국가에 관한 중요한 시사점을 던지고 있다.⁴⁾ 한국에서의 사할린 한인에 대한 연구는 이들의 강제이주에 주목하고 1938년의 국가 총동원령 이후 모집 1941년부터는 관알선 1944년부터 징용령발포, 강제 징용이라는 제국주의적 침략의 희생자로서 냉전구도의 지배에 의한 삶을 영위한 자로서 일본의 귀환노력에 대한 반감으로 이어지는 경우가 대부분이지만 이주의 역사가 비극적인 과정이었고 고국에 돌아오지 못하는 고통이었던 만큼 구체적 사실에 대한 추구역시 필요한 시점이다.

사할린섬에 대하여 일본의 막부가 관여한 것은 1808년이지만 에도막부가 막부관료인 모가미 도쿠나이(最上徳内)를 파견하고 1809년 마미야 린조(間宮林蔵)가 처음으로 섬인 것을

2) 이은숙, 김일림 (2008) 「사할린 한인의 이주와 사회 문화적 정체성」 『문화역사지리』 20권 pp.19-23, 인구수치에 대해서는 본고에서 고찰할 예정이다.

3) 김상호(2008) 「사할린 한인방송과 민족정체성의 문제」 한국방송학회연구보고서

4) イギリス・サベリエフ(2005) 『移民と国家—極東ロシアにおける中国人、朝鮮人、日本人移民』お茶の水書房

확인한 정도였다. 섬에 대하여 국제적인 조약이 맺어진 것은 1854년 러일화친조약의 체결 이고이 시기 국경은 정하여지지 않고 종래대로 혼주하는 지역으로 애매한 상태에서 종료하였다. 국경을 분명히 정하지 않고 혼주하는 것으로 하였다. 결국 이러한 결정이 영토적 이해가 경합되는 결과를 낳았다. 러일전쟁후에 전쟁에서 승리한 일본은 포츠머스조약체결에 의해 북위50도이남의 지역을 점유하게 되었다. 전후 소련의 영토가 된 후에도 사할린 섬은 러시아와 일본사이에서 영토적 이해가 걸린 섬이었던 경위가 있어 정치적 문제가 관련하여 역사적 '사실'의 규명보다 '해석'에 더 큰 의미를 두고 영유주장을 강조하기 위한 포석으로 기능하기위한 연구를 일본측도 러시아측도 진행해왔다. 일본의 경우는 변경지방의 개척적 식민의 역사라는 점이 크게 강조되었다.⁵⁾ 지금까지 일본에서 사할린에 대한 관심이 높았던 시기는 석탄 발굴에 의하여 각광을 받은 1930년대였다. 러시아와 일본의 주장을 객관화하고 이제 사할린이라는 공간자체에 주목하여 역사적 '사실'을 규명하려는 자세가 필요하다고 생각한다.

최근 사할린 관계 자료가 새로이 공개되어 역사적 사실을 밝히는 것이 가능하여졌다. 1980년대 말 소련이 붕괴되고 러시아와의 국교를 회복하여 현지조사가 가능하여지고 공동 연구나 글로벌한 시점을 도입하는 것이 가능하여졌다. 사할린 관련자료는 러시아측의 자료와 일본자료를 이용하는 것이 필요하다. 일본에 남아 있는 '가라후토청의 자료, 사할린에 남아 있는 일본어자료, 러시아측 자료'가 기본적인 자료이다. 이러한 자료의 의미와 비판을 통해 객관적인 연구수행을 하고자 한다.

연구의 순서로는 우선 학술 데이터베이스를 통해 기존의 연구의 특징을 분석하고 사할린에 건너간 한인 동포의 구체적인 자화상을 그려보도록 한다. 인구의 추이를 분석하고 사할린 동포는 러시아 동포임에도 옛소련 지역에 거주하는 고려인과 이주해간 배경이 크게 다른지, 독립운동의 배경을 가지고 있지 않는지 '강제징용'의 구체적인 모습에 대하여도 고찰해보도록 한다.⁶⁾

2. '사할린 연구' 표제 분류에서 본 전개의 양상

본 연구에서는 우선 한국어로 간행된 논문 잡지나 단행본을 '사할린 연구'라고 총칭하여 이에 대한 추이 변용과정을 고찰한다. 구체적으로는 주제에 따라 분류하여 보고자 한다. 조사방법은 제목 중에 '사할린'이라는 명칭을 포함한 것을 추출한다. 이를 위해 한국교육학술정보원이 제공하는 '학술연구정보서비스(RISS)' 데이터베이스를 이용하였다. 그 외에도 다

5) 三木理史(2006) 「20世紀日本における樺太論の展開」, 『国境の植民地・樺太』塙書房

6) 이광규(1998) 「러시아 연해주의 한인사회」. 『재외동포재단총서 1』, 집문당
이성환(2002)사할린 한인문제에 관한 서론적 고찰. 국제학논총, 7(계명대학교 국제학연구소), pp.215-231.

ㄴ 사할린 동포의 특징으로 이주배경이 연해주의 한국인과 다른 점과 독립운동의 배경을 가지고 있지 않는 점을 들고 있다.

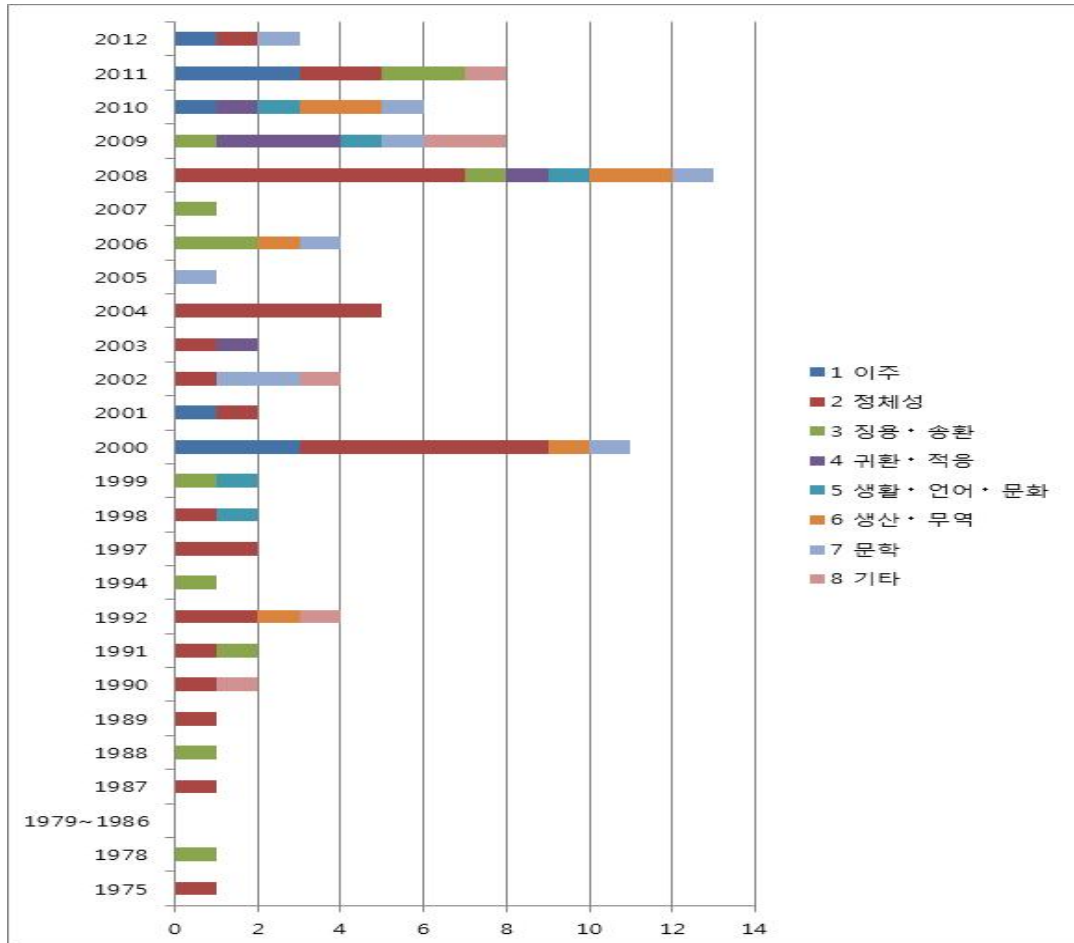
양한 데이터 베이스의 검색결과를 망라하여 그 수치를 이용하는 것도 가능하나 연구의 추이나 변용과정을 살펴 보기위해 여기에서는 의도적으로 지정된 기준으로 수집된 단일 데이터베이스의 결과만을 사용하여 분석을 시도하였다. 단행본은 국회전자도서관의 데이터베이스를 일반도서와 세미나자료를 포함하여 검색하였다. 얻어진 구체적인 자료는 사할린 연구 현황분석의 기초자료로 제시할 수 있을 것으로 기대된다.

학술잡지의 경우 ‘사할린’이라는 주제어의 검색을 통해 총 154건의 논문이 간행되었음을 알 수 있는데 그 내용을 자세히 살펴보면 그 중 70편은 ‘사할린 연구’와 직접적인 연관이 없는 논문이므로 제외하고 ‘사할린 연구’와 직접적인 관련이 있는 논문은 총 84편이다. 관련논문의 편수는 다음과 같다. 2012년 3편, 2011년 8편, 2010년 6편, 2009년 8편 2008년 13편, 2007년 1편, 2006년 4편, 2005년 1편 2004년 5편 2003년 1편, 2002년 4편 2001년 3편, 2000년 11편 1999년 2편, 1998년 2편, 1997년 2편, 1994년 1편, 1992년 4편, 1991년 2편 1989년 1편, 1998년 1편, 1987년 1편 1978년1편, 1975년 1편이다. 이에 대한 주제를 분류하여 보면 정치, 법률 행정에 관한 주제로는 강제 동원과 송환에 관한 내용을 다루는 것이 있고 역사, 지리에 관해서는 사할린의 조선사회 형성이나 이주의 문제, 한인사회의 형성과 관련된 민족 정체성을 다루고 있거나 지역의 문화를 다루고 있다. 예술, 언어 문학과 관련된 주제 그리고 자연 그 외 자연 과학 기술을 주제로 하고 있음을 알 수 있다. 얻어진 결과를 수치가 많은 순으로 보면 역사 지리에 관련된 주제로 작성된 것이 가장 많다. 사할린의 에너지 사정이나 자원에 대한 관심과 관련된 주제, 러시아의 문호 체호프나 미야자와 겐지와 사할린과의 관계에 주목하여 문학자의 여행에 주목한 연구도 있음을 알 수 있다. 크게 3가지의 유형으로 나누어 보면 다음과 같다.

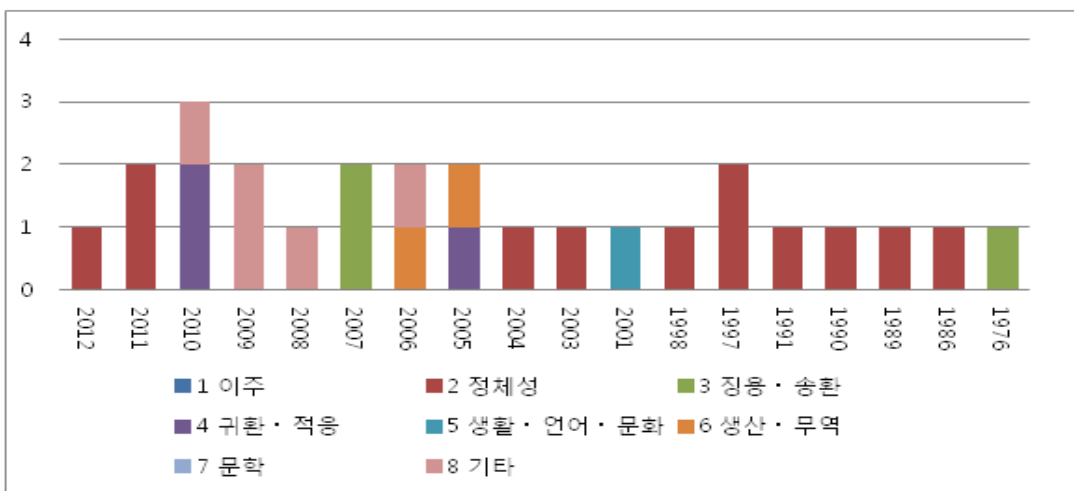
<표 1> 주제에 따른 분류표

주제	내용
역사, 지리에 관련된 연구	1)사할린의 조선사회형성 이주에 관한 문제 2)사할린 한인의 민족 정체성에 관한 문제 3)강제동원과 송환에 관한 문제 4)귀환자의 적응에 관한 문제 5)지역과 언어 및 문화에 관한 문제
자연 과학기술	6)자원생산이나 무역에 관한 문제
예술, 문학	7)문학
기타	8)기타

<표 2> 학술지 검색에 따른 주제 분류



<표 3> 단행본 및 보고서 검색에 따른 건수



검색된 기존의 학술잡지의 수치결과를 가지고 주제분류에 맞추어 알아보기 쉽게 그래프로 작성한 것이 <표2>이고 <표3>은 단행본의 검색결과를 그래프로 나타낸 것이다.

단행본의 경우 국회도서관의 데이터베이스를 통해 일반도서와 세미나자료를 포함하여 사할린이라는 주제어로 검색하여 보면 총 104건이 검색된다. 번역서를 제외하고 진상규명이나 연구조사서 성격의 보고서를 포함한 단행본은 26건이다. 2012년 1편, 2011년 2편 2010년 4편 2009년 2편, 2008년 1편 2007년 1편 2006년 2편, 2005년 2편, 2004년 1편, 2003년 1편, 2001년 1편 1998년 1편, 1997 1편 1986년 1편 1976년 1편이다. 대부분은 연구 조사서 성격의 보고서이지만 이 중 사할린 한인에 대한 정체성에 관련된 주제가 12건이고 송환과 강제징용 적응과정에 관한 건이 6건이 단행본의 주제로 여겨진다.

학술 잡지와 단행본 등의 간행상황을 가지고 기존의 ‘사할린 연구’의 추이와 변용을 살펴보면 다음과 같은 결론을 얻을 수 있다. ‘사할린’이 처음으로 연구의 대상으로 등장한 것은 1975년, 1976년 경이다. 그 이전에는 학술적 의미에서 사할린은 크게 주목받지 못하였음을 알 수 있다. 냉전시대에 사할린에 주목하는 것은 용이한 일이 아니었고 러시아에 대한 연구는 관심을 가지는 것도 정보에 접근하는 것도 크게 제약을 받았었기 때문이다. 이후 학술지나 단행본이 활발히 간행되는 시기를 살펴보면 크게 두 번의 정점이 있음을 알 수 있다. 2000년경과 2010년경이 학술지와 단행본이 가장 많이 간행되었다. 그렇다면 2000년과 2010년의 시대적 관심과는 어떻게 관계가 있는 것일까.

앞서 사할린의 한국인 귀국사업은 1989년 한일 적십자사간 사할린거주 한인지원공동사업체 협정서가 체결됨으로써 시작되었다고 하였다. 이는 한국과 러시아와의 국교 회복이 1990년이므로 이와 연계하여 성사가 가능하였던 점을 미루어 보아 이 시점을 전후하여 크게 학술적인 관심이 일어났다고 볼 수 있다. 게다가 2000년에는 집단 귀국이 성사되어 언론이나학계에서 사할린의 한국인에 대한 관심이 크게 확산된 것이다.

연구의 첫 번째 피크인 2000년은 집단이주가 처음으로 시작되어 안산 고향마을에 이주가 시작된 해이다. 안산 고향마을은 2000년에 816명 그 후 연인원 983명이 입주한 가장 큰 규모의 영주귀국주거단지이고 크게 관심을 받았다. 이러한 대규모의 영주 귀국주거 단지가 형성된 경위 역시 시대적인 흐름과 크게 관련이 있음을 알 수 있다. 1994년 당시 사회당위원장으로서 일본내각의 장이 된 무라야마수상이 방한하여 가진 김영삼대통령과의 회담에서 사할린 한국인의 영주귀국문제가 거론되었으며 그로부터 1개월 후에 ‘내각총리대신의 담화’에서 ‘신속히 일본의 지원책을 결정’하고 약 5억엔규모의 요양원과(인천에 건설) 안산의 고향마을에 27억엔을 계상되어 단지의 건설과 조성이 한일정부사업으로 수행된 것이었다.⁷⁾ 따라서 ‘사할린 연구’의 첫 번째 정점은 안산고향마을과 같은 대단위의 집단 귀국이 성사가 되면서 크게 사회적 관심을 유발하게 된 것으로 보인다. 일본의 이러한 대규모 예산 책정은 ‘식민지 책임론’의 일환으로 수행된 것이었다.⁸⁾ 사할린에 있었던 일본인이 모두 일본으

7) 사할린한국인문제로 계상된 예산은 1987년 조사비명목의 227만엔이 그 시작이므로 1994년도의 예산 규모가 대형예산임을 알 수 있다.

로 송환되었는데도 전쟁 전에 강제로 사할린에 간 한인동포가 일본의 패전 후에도 귀국의 대상이 되지 못하고 사할린에 남아 있었던 문제는 그 사안의 중대함 때문에 일본의 전후책임을 제기하는 기점이 되었던 것이다.⁹⁾ 일본에서의 예산책정은 80년대 후반에 한일 양적십자회의 공동사업에 의하여 점진적으로 상호 모국 방문이 가능하여지고 영주 귀국이 실현되어 정부사업이 되어 집단귀국이 이루어진 것은 2000년부터이므로 이 시기를 전후하여 학술적 관심이 크게 고양되었음을 알 수 있다. 이들의 귀국은 1945년 이전 출생으로 한정되어 새로운 이산가족을 낳는다는 비판이 있지만 이는 1945년 전쟁종료 후에 패전국 일본이 사할린에 일본인 '인양(자국민송환)사업에서 징용된 한국인을 배제한 것에 대한 한국정부의 항의에 대해 '한국인의 문제는 한국정부가 자국민보호권에 근거하여 재류국 사이에서 해결되어야 할 성질의 것으로 일본정부가 관여할 문제가 아니라는 입장'¹⁰⁾에서 일본 정부가 크게 선회한 것으로 일본이 식민지 책임을 인정한 것이었다.

그리고 2000년 무렵의 첫 번째 사할린연구의 고양에서는 이들의 귀국이후 귀환동포에 대한 직접적인 설문이나 구술조사에 의하여 연구가 진행된 것이 특징이라고 볼 수 있다. 귀환동포의 적응이나 현지생활이나 언어 교육 (사할린에서 출생한 자도 1963년 무렵까지는 민족교육이 행하여져 한국어의 구사가 가능하다) 에 대한 관심이 이 무렵의 연구의 활성화와 크게 관련이 있다.

특히 이 귀국 집단에 대한 관심은 '하나의 집단에 공통된 동류의식', 즉 민족정체성에 대한 관심으로 이어졌다. '조상 대대로 관계를 지나고 있는 한 집단에 대한 충성¹¹⁾, 공동 사회 멤버들 간의 결속의 느낌, 자신들과 남들에 의해 구성되고 유지되는 민족경계 이는 포괄적일수도 배타적일 수도 ¹²⁾있는 것이지만 역사의 산 증인들의 구술을 통해 역사의 단면을 민족적 입장에서 정리하는 것은 이 시점에 필요한 일이었다.

두 번째의 '사할린 연구'의 고양은 현실의 여건상 러시아를 실제로 방문하는 것이 가능하고 현지조사가 가능하게 된 것이 크게 연구의 양적 확산에 도움이 된 것으로 보인다. 다소 '망향의 그늘' '실향민의 묘' 등 감상적인 보고서 차원의 연구가 많지만 2010년경의 연구의 확산은 국가의 사할린 한국인에의 관심과 맞물려 크게 증가하였다. '가해'와 '피해'의 구도로 일제의 식민지 책임을 극명히 드러내고 한국인의 민족적 정체성을 주장하는 연구경향을 살펴보고 기존의 연구가 놓치고 있던 실증적 연구 방법에 의한 조사를 포함시킴으로써 보다 구체적인 실태 자료를 제시하는 것을 목표로 하는 본 연구에서는 이와 같은 '사할린 연구'의 분석을 바탕으로 보다 구체적인 역사적 사실을 실증적으로 살펴보는 것이 연구

8) 五十嵐広三(1997) 『官邸の螺旋階段市民派官房長官奮闘記』ぎょうせい

9) 사할린 동포 귀국에 관한 사정에 대한 호소는 박노학씨의 노력과 다카기변호사의 노력으로 사할린 재판이 진행되고 일본내의 세론과 국제 세론을 환기시키게 되었다.우편저금 반환문제제판 등 아직 현안이 남아 있으나 이는 '식민지 책임론'에 대한 경각심을 불러 일으켰다.

10) 「樺太残留韓国人に関する件」1957年9月27日、外務省記録『太平洋戦争終結による旧日本国籍人の保護引揚関係雑件・朝鮮人関係』

11) Edward J(1984), *Language, Society and Identity*, NY Basil Black Well Ltd.p.22.

12) 윤인진(1996), 「재미한인의 민족 정체성과 애착의 세대간 차이」 『재외한인연구』 6호 pp.66-95

의 전개상 필요한 시점이라는 것을 확인하였다. 그러기 위해서는 우선 ‘사할린의 한국인’의 인구에 대한 기초조사가 필요하다. 사할린의 한국인의 인구수에 대한 조사는 단편적이고 분명하지 않다. 러시아에 남겨진 일본의 통치자료가 가장 신뢰를 들만한 자료인데 이 자료는 근년 공개되기 시작하였다.¹³⁾ 일본 카라후토청의 통치자료는 1945년 8월 소련군의 공격을 받은 지점에서 일본이 포기한 문서이고 ‘전리문서’로 칭하여져 일부 유지노 사할린스크에 집약되었고 1946년에는 블라디보스톡경유로 하바로프스크에 이송되었다. 이 문서군은 목록작성을 한 후 비공개문서로 보관되다가 1962년 사할린으로 돌아와 비공개문서로서 국립사할린주 문서관에 보존되었다. 1995년 야노 마키오는 처음으로 이를 조사하여 연구보고서를 작성하였다.¹⁴⁾ 이러한 문서군에는 경찰서 오지제지주식회사, 석유회사의 기록도 있어 이를 이용할 수 있다면 구체적이고 실증적인 조사가 가능하다고 할 수 있다. 최근에 이러한 연구는 일본에서도 연구가 활발해지기 시작하였고 이는 일본어로 된 자료가 중심이므로 일본인 연구의 관심으로 진행되고 있는 실정이다. 점차 이러한 연구의 축적이 이루어지고 연구결과를 공유함에 따라 밝혀질 것이다. 본 연구에서는 우선 일부 공개된 카라후토 자료를 중심으로 인구조사와 경찰청의 조선인관련 자료에 대한 실증적 연구를 진행하고자 한다.

3. 사할린으로의 이주와 인구조사

얼마만큼의 한인이 사할린으로 이동했는가? 언제 어떤 계기로 이동했는가는 러시아측 자료와 일본 가라후토청의 자료에 의존할 수밖에 없다.¹⁵⁾ 특히 러시아와의 국교정상화는 1990년에 들어서 가능하므로 일방적인 러시아측의 자료공개에 근거할 수 밖에 없다. 그런 점에서 아나톨리 쿠진(Anatolij Timofeevich Kuzin)의 연구는 의미가 있다. 쿠진(1939~)은 사할린주 당위원회서기로서 민족문제를 담당하였고 문서관자료에 접근할 수 있는 인물이며 이를 구사하여 전후 소련령 사할린에서의 조선인 문제전반에 관하여 독점적 상황에서 사료에 근접한 만큼 독보적인 연구를 진행하고 있으며 현재까지 일본어로 읽을 수 있는 유일한 문헌을 제공하고 있다. 게다가 이런 자료는 얼마 전까지는 ‘극비’의 공문서였다. 그는 북사할린 소련 통치지역의 자료와 일본이 1945년 8월이후 퇴출된 후 남은 자료에 접근할 수 있어 사할린 자료에 대하여 유일하게 1차적인 자료를 제공하고 있는 것이다. 그는 1993년에 러시아어로 ‘극동의 조선인-생활과 운명의 비극이’라는 책을 출판하였으며 1994년 9월에는 ‘극동의 조선인’이라는 제목으로 블라디보스톡에서 열린 학회에서 발표하였다. 이 책이 1998년에 일본어로 번역이 되었는데 이 책이 전후 사할린에서의 조선인 문제를 러시아 측 사료를 이용하여 작성한 일본어로 된 유일한 문헌인 것이다.¹⁶⁾ 그런데 이 책을 읽어보면 1

13) 井潤 裕(2003, 7) 「サハリン州公文書館の日本語文書」 『アジア経済』 pp.16-7

14) 矢野牧夫(1994) 『北海道開拓記念館研究紀要』

15) 이외에도 조선총독부의 ‘모집’이나 ‘관알선’ ‘강제 징용’과 관련된 가라후토자료가 있을 가능성이 있다.

16) Anatolij Timofeevich Kuzin(1993) *Daljnepstochmye korejtsy: zhiznj i tragedija sudjby*

차자료의 제시와 물량에서 귀중하지만 분석은 충분하지 않은 것이 결점으로 보인다. 게다가 종종 통계상의 수치가 같은 문서안에서도 다르게 표기되는 경우가 있어 수치를 전적으로 신뢰하기 어렵다. 특히 인구수는 그렇지 않아도 단편적이고 장소에 따라 다르게 통계수치가 제시되는 경우가 많아 혼란이 증폭된다. 그렇다하더라도 사할린¹⁷⁾의 한국인의 수에 대하여 언제부터 조선인이 살기 시작하였는 지에 대하여는 현재의 시점에서 쿠진의 연구 이외에는 알 길이 없다. 그에 의하면 처음으로 사할린 지역에 조선인이 살기 시작한 것은 1870-80년대라고 한다.¹⁸⁾ 러시아가 1860년에 연해주를 획득하고 1871년 블라드보스톡에 시베리아 소함대를 이동시키면서 이에 필요한 노동력이나 물자를 조달하기위해 근린 지역을 중시함으로써 이 진여이 활성화되기 시작하였고 이 무렵부터 조선인은 연해주로 이주하기 시작했다는 것이다.¹⁹⁾ 1869년의 기근도 한국인이 러시아령에 이주하는데에 영향을 미쳤다. 초기에는 대부분이 농민이고 촌락을 형성하면서 이 지역의 식량을 제공하거나 주로 함경지방과의 교역도 담당하였다고 한다.²⁰⁾ 1897년 사할린에서 처음으로 러시아의 국세조사가 수행되어 이 조사에 조선인이 포함되어 있는 것으로 보아 연해주에서 점차 사할린까지 이동한 것을 확인할 수 있다.²¹⁾ 이 조사에 의하면 당시 남북사할린 전역에 거주하고 있는 조선인은 67명이라고 한다. 총 인구는 28,000명이었으므로 이는 전인구의 0.2%에 해당한다. 당시에 가장 많이 살고 있었던 것은 러시아인으로 15,807명(56.4%)이었다. 일본인은 227명(0.8%)이었다고 한다. 이어 우크라이나인 2,368명(8.4%), 니브히 1,978명(7%), 폴란드인 1,636명(5.8%) 타타르인 1,523명(5.4%)이며 아이누인이 1,434명(5.1%)이 살고 있고 기타 2,960명이라고 한다(쿠진의 연구의 경우 종종 수치가 맞지 않는 경우가 있다. 여기에서 기타의 수가 맞지 않아 100%의 내역을 알기 어렵다). 조선인중에서 조선국적을 가진 이는 54명이라고 하므로 이들이 이주하여왔음을 확인할 수 있다. 이들은 모두 섬의 서남쪽지역인 콜사코프에 거주하고 농민9, 어업53, 재봉사1, 무직1, 형사법복역자가 3명이라고 한다.²²⁾ 이들이 어업과 농업에 주로 종사하고 있는 것을 보아 이들은 연해주에 이동하기 시작한 무렵 '빈곤이나 압박'에서 벗어나기 위해 연해주를 거쳐 사할린 섬으로 이주하여 온 것으로 보인다. 이들은 생활의 활로를 찾아 이주하기 시작한 것으로 보이고 사할린에 이러한 조선인들이

アナトーリ ケージン(1998) 『沿海州・サハリン近い昔の話—翻弄された朝鮮人の歴史』 凱風社

17) 이후 러시아측 호칭인 사할린과 일본측 호칭인 가라후토를 사료에 따라 적절히 구별하여 사용한다

18) アナトーリ ケージン(1998) 『沿海州・サハリン近い昔の話—翻弄された朝鮮人の歴史』 p.171 凱風社

19) グラーウェ(1925) 『極東露領に於ける黄色人種問題』 満鉄庶務部調査課
ユ・ヒョジョン 「利用と排除の構図—十九世紀末、極東ロシアに於ける「黄色人種問題」の展開」 原田勝正編(2002) 『「国民」軽視における統合と隔離』 日本経済評論社

20) 原暉之(2008) 「近代東北アジア交易ネットワークの成立」 左近幸村編 『近代東北アジアの誕生—跨境史への試み』、(北海道大学出版会, pp. 29-35

21) 1874년 3월 특명전권대사 에노모토 다케아키(榎本 武揚)는 성페텔부르크에 가서 러시아외상과 교섭하여 사할린에서의 일본권익을 포기하는 대신 쿠릴열도를 러시아로부터 할양받는 조건으로 '가라후토 치시마열도교환조약'을 체결하였다.

22) 쿠진은 이 근거를 캄차카교회종무국의 알렉산드로프스크 형무소교회의 등록문서에서 찾았다. 1897년 당시의 외국인 복역수의 수는 112명이었다고 한다. 1858년에서 1906년까지 사할린은 유형지로서 기능하였다.

1870년에서 1880년대에 이주의 형태로 나타난 것으로 볼 수 있다. 소수이지만 이러한 사람들이 이동이 사할린 섬으로 이어진 것을 확인할 수 있다. 23) 1897년의 수치에서 쿠진이 언급한 총 인구 중 4,000명 정도가 수치에서 모자라는데 당시에 이미 석탄이 채굴되었다는 점을 감안한다면 외국인노동자가 들어온 것이 아닌가 추정한다. 홍콩에서 중국인 노동자가 1868년부터 도입되어 주로 남자가 많이 들어오고 이 무렵 탄광부는 중국인이 가장 많았다고 되어 있는 자료가 있는 것을 보아 중국인 노동자가 석탄에서 수입을 얻기 위해 들어온 것이 아닌가 여겨진다. 이 무렵 탄광부는 중국인이 가장 많았다고 한다. 이 탄광에도 조선인 노동자가 있음이 알려지고 있다. 농업뿐만 아니라 탄광, 어업에 종사하기 위한 이주가 진행되었음을 알 수 있다.

1905년의 러일전쟁의 결과 사할린섬 50도선 이남과 이북에 다른 정권이 성립되었다. 남사할린에 일본 민정국이 들어서 남사할린과 북사할린은 행정적으로 분리되었다. 1907년에는 일본의 지방 행정기관으로 가라후토청이 발족되었다. 1908년에는 사할린의 지명을 일본 어식한자표기인 ‘가라후토’로 변경하고 1915년에는 칙령 제 101호 ‘權太ノ郡町村編制ニ関スル件’에 의하여 17郡4町58村이 설치되었다. 이 시기의 가라후토청의 인구통계에 의하면 당시 총인구는 남사할린만 1만2천명 정도가 있었던 것으로 보인다. 이조사에 의하면 1907년의 조선인은 주로 ‘어업’에 종사하고 ‘무교육’ ‘무자산’이라고 가라후토청이 표기하고 있다. 이들은 주로 연해주를 경유하여 온 것으로 보인다. 47명이 서해안의 마오카 지역에 있는 것만이 확인이 된다. 러일전쟁후에 러시아인 등 선주 북방민족은 러시아로 돌아갔고 남사할린에는 일본의 행정부서가 들어섰으므로 이 시점의 남사할린 민족구성은 일본인이 90%이상이었다 일본가라후토청은 초기에는 농업척식의 방침을 취하였지만 곧 기후조건 등을 고려하여 1915년을 분계점으로 타개책으로 어업보다 목재 펄프공업주체로 이행하였다. 어업은 서해안의 연안도시를 발달시키는데 불과하였으나 이러한 정책의 변화에 따라 내륙을 포함한 여러 지역에 거점도시가 생겨났다

가라후토청이 처음으로 시행한 국세조사는 1920년이였다. 이 시점에는 사할린에 10만여의 인구가 있었음을 확인할 수 있다. 이후 5년마다 국세조사의 기록이 있는 것을 보면 가라후토에서는 5년마다 정기적으로 국세조사가 있었던 것으로 보인다. 이 기록을 보면 당시의 외국인 수는 중국인, 러시아인 폴란드인 독일인의 수를 확인할 수 있다. 여기에 외국인 항목에서 조선인의 수를 확인하고자 하였는데 조선인은 일본인으로 간주되어 드러나지 않았다. 1920년의 남사할린에는 937명의 조선인이 있었다는 것만이 확인되었다.²⁴⁾

1) 러시아 행정부아래의 북사할린 조선인 인구변화

이 시기인 1920년에 러시아본토인 니콜라에프스크에서 주둔한 일본군과 거류민 700명이

23) 따라서 조재순(2009) 「사할린 영주귀국 동포의 주거생활사」 『한국주거학회논문집』 20권 4호 이나 기타연구에서 사할린의 이주의 경우 이러한 점을 간과하고 있다

24) 權太庁國勢調査表 近代デジタルライブラリー 자료공개에 의거함

러시아 빨치산에 의하여 살해된 사건이 발생하였다.(尼港事件) 일본 정부는 이에 대한 보복으로 출병하여 4월에 사할린에 상륙하고 5월에는 북사할린의 알렉산드로프스크시를 점령하였다. 이로부터 5년간 일본은 북사할린을 점령하였으므로 이 시기는 남사할린과 북사할린 사이에서 조선인이 이동하는 일이 있었다. 이 5년간의 사이인 1923년 일본지방행정정부는 북사할린에서도 인구조사를 하였는데 이 인구조사에 의해 군인을 제외한 민간인의 수를 확인할 수 있다. 이에 의하면 당시 북사할린에는 12,672명의 인구가 있었고 그 중 러시아인이 6,571인, 외국인이 6,191인이 있었고 일본인이 3,553인, 조선인이 1,431인, 중국인이 1,207인이 있었다고 한다.²⁵⁾ 따라서 단순계산하면 당시 1920년의 시점에는 남사할린에 조선인이 937명(23년에는 약간의 변화가 있었겠지만)이 있었고 1923년에는 북사할린에 1,431명이 있었고 남북사할린을 합하면 2,368명 이상의 조선인이 있었다고 추정할 수 있다. 다만 남사할린에서 북사할린으로 일본이 이동할 때 같이 이동한 조선인도 있었고 북사할린에서 남쪽으로 이동한 조선인도 있었으므로 최대치는 2,368명이지만 중복인구를 제외하면 이보다 더 적은 인원이 있었을 것으로 추정할 수 있다. 1923년 시점에 조선인의 인구는 기록에 잡힌 최대 남북사할린에서 2,368명이므로 1897년 러시아가 조사한 97명에서 2,368명 정도로 크게 증가하였음을 알 수 있다.

5년간의 일본 통치기간을 마치고 1925년 1월 일소기본조약에 의하여 북사할린은 다시 러시아의 행정구역이 되었다. 쿠진은 러시아측 사료를 가지고 조사하였는데 1925년의 북부도시 알렉산드로프스크의 시의 경우를 보면 62명의 조선인이 남아 있었고 루이프로프스크는 214명의 한인이 있었다.²⁶⁾ 이보다 앞서 일본측이 조사한 1923년의 수치는 북사할린에 1,431명의 조선인이 있었던 것으로 확인되는데 1925년이후 북사할린에 소련정부가 들어온 후에도 남아 있어 확인되는 수치는 이 두시의 경우만 수치가 남아 있어 정확하지 않지만 이 두 도시를 합하여 최소한 276명 이상의 한인이 남은 것을 알 수 있다.

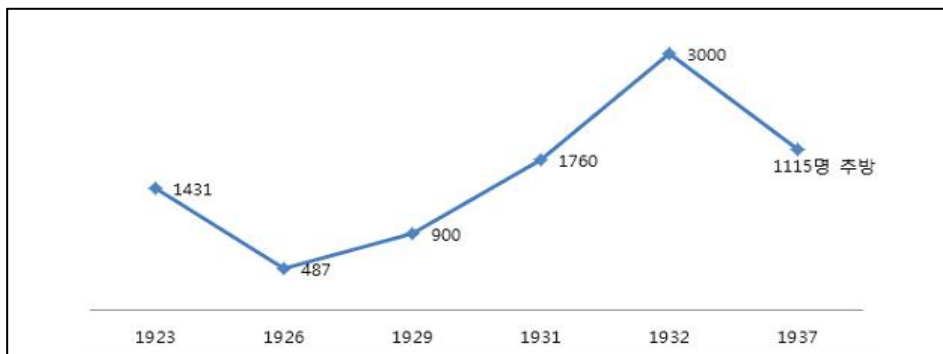
북사할린에서는 1925년이후 5월 14일에 알렉산드로프스크시에 소비에트 정권(사할린관구 혁명위원회)이 수립되었다. 소련령이 되었음에도 이 지역에는 1925년 1월 소련과 맺은 일소기본조약에 의하여 일본은 북사할린에서 철회하였지만 45년간 석유석탄채굴의 이권을 얻고 있어 「北樺太石油株式会社」, 「北樺太工業株式会社」가 여전히 있었다는 점은 한국인 연구자가 놓치기 쉬운 오류라 남북사할린의 특별한 위치와 지위에 대한 인식이 부족한 연구가 많다. 섬 북단의 오하를 중심으로 석유채굴이 이루어졌다. 북가라후토석유회사는 상급노동자수의 비율은 일본과 소련이 50%씩, 하급노동자는 일본이 25% 소련이 75%이었다고 한다. 석유회사에는 1925년 9월에 46인, 1926년에 89인, 1929년에 124명의 조선인이 있었고 소련측은 조직적으로 연해주에 있는 조선인을 노동력으로 모집할 것을 기획하였으나 정치적인 문제에 의하여 무산되었고 연해주의 러시아 노동자를 모집하였다고 하므로 124명의 조선인 노동자는 종래의 연해주루트를 통해 비조직적으로 이동한 것으로 보인다. 북 사할린

25) アナトーリ クージン(1998) 『沿海州・サハリン近い昔の話—翻弄された朝鮮人の歴史』 凱風社. p.172

26) アナトーリ クージン(1998) 『沿海州・サハリン近い昔の話—翻弄された朝鮮人の歴史』 凱風社. p.172

은 1926년에는 487명의 한인이 있었던 것으로 확인되는데 그 중 적어도 89명이 석유회사에서 근무한 것으로 여겨진다. 1929년에는 900명으로 증가하였다. 1926년이후 북사할린의 상황은 러시아정부산하이므로 이러한 수치는 모두 쿠진의 연구에 의존한 것이다. 쿠진은 『ソビエツキ・サハリ』지의 보도를 예를 들어 ‘대부분은 대륙에서 잠입한 자’라고 보고 있다. 러시아 측 정부는 이러한 노동력의 유입을 환영한 것으로 보이지만 이 보도에서는 조선인이 오하의 이권회사에 오는 대량유입을 막기 위하여 이들이 사용한 방법은 국경지대에서의 거주법위반으로 강제퇴출시켰다는 것이었고 조선인의 접근은 ‘불리’하고 중국인이 오는 것과 비교가 될 수 없을 정도로 ‘위험’하며 러시아인 노동자수를 삭감하는 경향’을 가진다고 평가하고 있었다는 것이다. 북사할린의 인구는 1931년에는 39,119명이 고 그 중 러시아인이 26,780명이고 3위는 4.5%를 차지하는 조선인으로 1,760명이었다. 따라서 일본이 통치하는 남사할린과는 별도로 러시아가 통치하는 북사할린에서 중국인은 3.1%, 일본인은 2.9%였으나 조선인은 4.5%를 차지하는 인구의 순위로는 3위에 해당하는 것이었다. 이후에도 인구증가는 계속되어. 1932년에는 북사할린의 조선인은 약 3,200명이 되었다. 그러나 이 북사할린의 인구증가는 1937년 9월 27일 당 중앙위원회와 인민위원회의의 결정에 의하여 조선인 강제 이주지령이 사할린에 전달됨으로써 돌연 종료되었다. 그 결과 1,155명이 블라디보스톡으로 더 나아가 중앙아시아 카자흐스탄으로 이주가 강요된 것이다. 게다가 그 과정에서 탄압되어 처형된 조선인은 수 백명에 이른다고 한다. 북사할린에서 3,200명 있었던 조선인 중 1,155명이 떠났어도 계산상으로는 2,045명이 북사할린에 남아있게 되지만 그 뒤의 북사할린의 조선인 인구는 확인할 길이 없다. 러시아 통치하에 확인되는 조선인의 수는 1923년부터 1937년까지 3200명정도까지 꾸준히 증가하였으나 1937년의 정책의 변화로 북사할린에 거주하는 조선인은 확인할 길이 없어졌다. 이러한 증가의 원인은 일본 석유회사의 잔존에 의한 것임을 알 수 있다. 아래 <표4>는 이 시기의 북사할린지역의 조선인의 인구증가의 추이를 표로 작성한 것이다. 수치는 쿠진의 제시에 의거하였는데 최대 북사할린지역에서 3000명 정도의 증가를 보인 한국인수는 1937년이후 기록에서 사라졌다. 확인이 되는 것은 1115명이 중앙아시아로 추방되었다는 점뿐이다.

<표 4> 러시아 행정부산하의 북사할린 지역의 조선인 인구추이



2) 일본 카라후토청산하 남사할린 조선인 인구 변화

메이지무렵부터 일본정부는 '기타에조'라는 종래의 지명이 아니라 '가라후토'로 지명을 사용하고 있다. 따라서 일본측 사료는 '가라후토 사료'라고 총칭한다. 남 사할린에서의 조선인 수는 지속적인 가라후토청의 인구조사에 의하여 확인할 수 있다 앞서 말한 바와 같이 남사할린은 1920년에 가라후토에서 처음으로 국세조사가 실시되었는데 이 때 남사할린에 있는 조선인은 934명이었다. 27)이 시점에는 러시아 통치의 북사할린의 조선인인구수와 크게 다르지 않았다. 그런데 1921년 '러시아령 연해주 및 북 사할린에서 도래하는 자가 많아' 28)다수의 조선인이 북사할린에서 남사할린으로 남하하였다고 하므로 1934년3월의 조선인의 수는 5,813명으로 크게 증가하였다. 이 증가수 중에는 북사할린에서 남사할린으로 이동한 조선인의 수치가 포함되었을 가능성이 있다. 하더라도 일본 통치하의 남사할린의 조선인수는 10년 동안 6배정도 증가하였음을 알 수 있다. 앞서 보았듯이 북사할린에서도 점진적으로 조선인 의 수가 증가하였지만 압도적으로 남사할린의 인구가 현저하게 증가하였다. 북사할린의 조선인 인구가 1937년 이후 정치적 이유에 의하여 인위적으로 크게 감소한 것과 비교하여 일본정부의 적극적인 개척민 요구와 '모집'에 의하여 가라후토에는 더욱 급격하게 조선인 인구가 증가하였다 1937년 '모집' '관알선'이 시작된 후에는 16,056명으로 급격하게 조선인의 인구가 증가하였다. 미키 사토시는 조선인의 이주는 모집이나 연고에 의한 경우가 많고 거주도 분산적이기 때문에 실태의 해명이 더 필요하다고 보고 있다. 29) 중국인은 주로 남성이고 주로 탄광이나 건설노동으로 참여하고 중국본토에서 집단으로 선박을 빌려 섬에 오고 같은 방식으로 귀국하였지만 당시 일본인이었던 조선인의 경우 여성이나 연소자가 포함되어 있으며 다양한 경로를 통해 사할린에 도달하였고 일본인으로 간주하여 이동노동자가 아니라 개척민으로서 돌아가는 선박을 따로 마련하지 않았기 때문에 조선인의 경우 계속 인구가 증가하였다고 볼 수 있다는 것이고 이는 설득력이 있다. 1910년에서 1930년 사이에 조선인의 수는 연구자에 따라 약 250배의 증가를 보인다고 추정하고 있다. 일본인이주자의 유치와 정착이 촉진되고 노동력으로 조선인과 중국인에게 관심이 생기면서 일이 끝나면 돌아간 중국인과 달리 특히 조선인 노동자는 증가 일로에 있었다.

27) 『樺太長豊原警察署文書』

28) 函館市立中央図書館所蔵 樺太庁警察部 『昭和2年10月 第3輯 樺太在住朝鮮人一班』 p.39

29) 三木理史(2012) 「戦間期樺太における朝鮮人社会の形成」 『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』 小樽商科大学出版会

<표5> 남사할린 인구조사

	남사할린 총인구	일본인	조선인 (여성)	러시아인	중국인	기타	근거자료
1897	남북28,000	227	67	15,807		우크라이나인 2,368 폴란드인 1,636 타탈인 1,647 아이누인 1,434	러시아 제1회 국세조사
1906	12,361						
1907			47(12)	197	25		
1908	26,393						權太庁統計書
1913	44,356						權太庁統計書
1918	79,795						權太庁統計書
1920	105,899	102,871	934			토인 1,954	일본 제1회 국세조사
1925	203,754		3,206 (882)				国勢調査,統計書
1926	203,573		4,387				權太在留朝鮮人一班
1934	313,140		5,813				『權太沿革・行政史』
1935	331,943		7,053 (2,532)				国勢調査
1940	414,891		16,056 (4,395)				国勢調査
1943			25,765 (7,552)				
1944	391,825						
1945.8.23	450,000	350,000	23,498				
1946.3		254,299	24,774				국립 사할린주 문서관
1946-48		280,638					
1949					450,000		ミハイル・ビソフ30)
1951			42,900				
1989			35,200				
1991	719,200						Russian Regional Report
1997	631,800						Russian Regional Report

<표5>는 남사할린의 한국인의 인구의 추이를 여러 경로에서 확인하여 제시한 것이다. 러시아측 자료는 모두 쿠진의 제시에 따른 것이고 일본측자료는 근대 디지털라이브러리에 공개된 가라후토자료에 근거한 것이다. 이에 의하면 한국인의 수는 증가일로에 있으며 1943년의 조사에는 25,000명정도이다. 전후 러시아가 통치하게 되면서 1945년 9월 29일 러시아의 당중앙위원회에는 다음과 같이 보고하고 있다.

남사할린에 있는 민족으로 가장 많은 것은 일본인으로 358568명, 그 내역은 남성이 180115인, 여성이 178453인 조선인은 2만3498인이고 내역은 남성이 15356인 여성은 8142인 북방민족은 812인 러시아인은 360인이다.³¹⁾

30) ミハイル・ビソフ(松井憲明訳)(2001) 「サハリンと千島列島編年史 1940-49年」 『鈴谷』 19号、pp.28-75

31) 쿠진 1945년 9월 29일부 남사할린 정치 경제 상태에 관한 당 중앙위원회에의 보고

러시아가 제시한 1951년의 수치가 43,000명이라 통상적으로 사할린의 한국인의 수치로서 일반화되었는데 43,000명설은 1951년의 데이터에 의한 것으로 이는 북조선계의 파견인수를 포함한 수치로 보인다.³²⁾ 소련 측의 역사학자나 출판물은 43,000명에 대하여는 1945년의 수치로 보는데 대하여는 회의적이다. 사할린의 조선인 중 통계 최대치는 42,900명인데 이는 1951년의 데이터이고 이 수치는 북조선에서 파견된 수를 더한 인수라는 것이 러시아의 역사학자의 주장이다. 북조선계 인구유입은 전입 26,065, 전출 14,395(1,1670잔류, 1962년에는 3,851명이 남았다고 한다. 그리고 정책적인 필요에 따라 중앙아시아계의 조선인이 유입되었기 때문이다. 따라서 위의 표에서 작성한 바에 의하면 한국인의 사할린으로의 이주가 확인되는 것은 1897년이 처음이고 이후 점진적으로 늘어 1944년의 시점에 25,000명정도, 그 내역을 불문한다면 1951년 시점에 43,000명의 한국인이 사할린에 거주한 것으로 보인다.

4. '가라후토청'의 경찰기록

구체적이고 실증적인 사할린의 한국인의 실태조사를 위하여 먼저 기초조사로서 인구의 추이에 주목하였다. 기존의 연구에서는 이러한 인구의 추이를 '모집' '알선' '징용'의 3단계를 거쳐 일제강점기에 이주를 강요한 결과로 보고 있다. 그런 측면이 있는 것은 사실이지만 이에 대한 개별적이고 실증적인 연구가 뒤따라야 한다고 본다. '조선총독부령2호'나 '조선총독부직업소개소령' "노무자이동방지령" "선인내지이입알선요강" "조선인노무자활용에 관한방책"³³⁾ 등 정책만으로 구체적인 내용을 알기 어렵다. 노동은 어떤 측면에는 '일자리'와 '수입'이며 사할린에서의 일자리는 다른 지역에 비해 환경여건이 좋지 않아 상대적으로 일본의 다른 내지보다 임금이 비싼 것은 잘 알려진 사실이었다. 일본의 제법령이 강제성있고 동원되는 과정에서 부모에 대한 협박 등 강요된 부분이 있다하더라도 그것만으로 모든 것을 강제징용의 탓으로 돌리긴 어렵다. 오히려 이를 운용하는 과정에서 일어나 여러 가지 구체적 정황에서의 다양한 모습을 그려내는 것이 중요하다. 먼저 중국인 노동자가 외국인 노동자로서 귀로가 보장된 데 비해 조선인 노동자는 일본인으로 간주된 '가족이민형' '노동이민형' 이주였으므로 계약기간이 만료되어도 쉽게 사할린을 떠날 수 없었던 점에 문제가 있다고 본다. 자의든 타의든 사할린에 온 한국인이 쉽게 사할린을 떠날 수 할 수 없는 상황이 있었다면 이는 별개의 문제라고 보는 것이다.

1917년에 일본인 광부모집에 곤란을 느낀 미즈이광산주식회사 가와카미 광업소가 조선에 모집원을 파견하여 110명의 광부를 모집하였다. 이는 미즈이 광산과 오지제지회사가 공동 사업을 시작하여 1차대전 후에 수요가 증가함에 따라 가라후토의 펄프제조에 석탄이용이

アナトーリ クージン(1998) 『沿海州・サハリン近い昔の話—翻弄された朝鮮人の歴史』 凱風社. p.226

32) 쿠진 アナトーリ クージン(1998) 『沿海州・サハリン近い昔の話—翻弄された朝鮮人の歴史』 凱風社.p.122

33) 최계주 (2006) 「사할린역류한인의 국적귀속과 법적제문제」 『한국근현대사연구』

필요하고 가와카미 광업소가 광부를 증원할 필요가 생겼고 이 것이 조선인 도입의 직접적인 계기가 된 것이다. 당시 계약기간은 기간계약으로 1년으로 한정하였다. 처음에는 ‘언어 불통에 의한 의사소통곤란에 기피현상’³⁴⁾이 보이지만 점차 ‘일본어를 잘하는 조선인인부를 고용하여 대처’하고 지휘통제를 시도하여 조선인 노동력의 비중이 확대되었다. ³⁵⁾1920년대에는 민족차별에 의한 임금격차가 등장하여 이는 조선인을 강제 징용하여 사할린에서 노동력으로 사용하려고 하는 가장 큰 요인이 되었다.³⁶⁾ 도망이나 탈락이 증가하자 ‘1명도 송환하지 않’게 되었다. 당시 조선인은 외국인이 아니었으므로 중국인 쿨리처럼 정책적으로 집단으로 도착하고 귀국하는 일이 없었던 것이다. 이것이 사할린의 조선인의 인구 증가의 커다란 단서가 된 것이다.³⁷⁾

사할린탄광에서의 임금의 격차에 대하여 현재 알 수 있는 대목은 1926년 소련이 관할하던 북사할린의 석유회사와 탄광이다. 도에탄광에서의 임금격차만 포괄적으로 알 수 있는데 이 기록에 의하면 일본 노동자는 월급 90루블, 러시아인은 82루블, 조선인은 62루블이었다고 한다.³⁸⁾ 이에 의하면 토요하라에서는 일본인과 조선인의 임금격차는 없으나 오토마리에서는 일본인은 2.5이고 이에 비해 조선인은 2.0이라고 한다. 단편적이라 전체임금을 알 수 없으나 임금격차가 차별적이었음을 확인할 수 있다. 1926년 5월1일 사할린당서기 N.G.루다고프가 극동지방 당 위원회에 보낸 서간에 의하면

최근 오하의 석유이권기업에서 노동자의 파업이 있었다. 5월1일 이권기업당국이 토목공업의 노루마를 올리고 신규노루마를 수행하지 못하면 1엔 80전이던 일급을 20전 깎을 것을 통고하였기 때문이다. 파업에 이른 2번째 이유는 급료의 장기연체, 열악한 주택사정이다. 파업에는 중국인과 조선인의 65명이 참가하고 러시아인이 참가하려는 시점에는 7일 파업이 종료하였고 일본인은 참가하지 않았다. 파업은 자연발생적이었으며 이전의 노루마와 급료를 제공한다는 조건으로 파업이 종료하였다.³⁹⁾

여기에서도 조선인 노동자의 상황이 열악한 주택사정, 급료의 연체, 노동조건에 대한 문제가 있었음을 확인할 수 있다. 임금격차는 당시의 조선인에 대한 차별적 조치였다고 볼 수 있는데 일본통치하의 남 사할린에서의 상황을 다른 자료에 의하여 살펴보기로 한다.

가라후토청의 기본 자료는 ‘權太庁治一斑’이다. 사할린의 위치와 기후 등에 대한 조사 호구에 대한 조사, 소학교 교육에 관한 것⁴⁰⁾ 사원, 재향군인등 兵事에 관한 것 농업, 목축,

34) 函館市立中央図書館所蔵 權太庁警察部『昭和2年10月 第3輯 權太在任朝鮮人一斑』p.84

35) 函館市立中央図書館所蔵 權太庁警察部『昭和2年10月 第3輯 權太在任朝鮮人一斑』p.85

36) 函館市立中央図書館所蔵 權太庁警察部『昭和2年10月 第3輯 權太在任朝鮮人一斑』p.39

37) 가라후토의 향로는 1927년 4월에 고베 시마다니기선이 부산 -門司-伏木-小樽-大泊-真岡직항로가 개통되었다

38) 가라후토일일신문1925년 11월 27일자 임금지표

39) 쿠진アナトーリ クージン(1998) 『沿海州・サハリン近い昔の話—翻弄された朝鮮人の歴史』 凱風社p.182.

40) 가라후토경영의 중점은 ‘외국에 대한 체면유지와 식민지경영의 안정에 필요한 이주자의 유치에 있었으므로 시가지를 계획적으로 건설하고 관립소학교를 국가사업의 시책으로 구상하였기 때문에 소학교 자료가 충실하다.

임야, 수산, 위생, 구육, 토목 및 건축, 재정 등에 대한 기록이 남아 있다. 1911년부터 1928년까지의 자료가 확인이 가능하다 이외에도 '樺太案内 : 渡航移住手引草'는 1908년의 이주의 정황을 알 수 있고 '樺太概要'는 1933년의 상황을 기록하고 있다. '樺太要覽'은 1925년부터 1943년까지의 기록이 남아 있다, 그 중 경찰연감에는 '고등에 관한 사항'으로 각종 단체수, 집회연설회수, 노동쟁의, 신문잡지간행물, 재주외인 및 鮮人'이라는 항목이 보인다. 여기에서 '선인'을 별도로 관리하였음을 알 수 있다. 당시 사할린은 국경지역이라 일본은 군대를 배치하기를 희망하였으나 1905년의 포츠머스조약에 의하여 일본과 소련 양국모두 '군대'를 배치할 수 없었다. 따라서 경찰은 국경경비대의 역할을 담당할 강한 힘을 가진 기관으로 경비를 담당하였다.

2000년 일본에서는 제 1회 오부치펠로우십에 의하여 파견연구활동의 일환으로 사할린주의 공문서관에서 열람이 가능한 전일본자료의 문서목록이 작성되었다. 사할린주의 공문서관에는 '戰利文書'라고 이름붙은 일본어문서가 있다. 1945년 8월 소련군의 공격을 받은 시점에서 일본이 포기한 '공사문서'이고 일부과기된 것을 제외하고 1946년 블라디보스톡영유로 하바로프스크에 이전되었다가 1962년 러시아연방공화국의 문서총국의 결정으로 사할린에 돌려주기로 되어 1963년에 국립사할린주문서관에 돌아온 문서군이다. 41)

그 중 잘 알려진 것이 토요하라경찰서 관련의 문서이다. 2001년 9월 현재 토요하라 경찰서 오지제지회사등의 자료가 13으로 분류되어 정리되었다고 한다 이타니에 의하면 토요하라경찰서 관련 파일수는 216건으로 이 파일에 대한 연구는 근년 '조선인노무자관련명부연구'를 나가사와가 하고 있다.42) 그 내용은 일반 형사사건과 황족경비계획 요시찰명부 외국인 명부등 업무 이 중에는 특별고등경찰관련의 서류가 많이 포함되어 있는데 그 중 조선인 노무자관련명부를 정리하여 2006년에 발간되었다. 이 당시의 사료는 국립 사할린 공문서관의 25,000점의 자료는 소각처분이 되었다고 하므로43) 2006년의 복각본은 의미가 있다고 하겠다.44)

나가사와가 복각한 토요하라 경찰서의 자료에 의하면 '본섬(가라후토)은 적화주의의 강령인 소비에트연방과 접양하고 일본의 치안에 맞지 않는 과격주의의 선전'이 있어 이러한 공산주의의 위협을 위협시하면서 이와 관련하여 조선인의 기록이 남아 있는 것을 볼 수 있다. 즉 경찰자료에 의하면 '토요하라'의 '특고경찰' '비밀'서류 제 76호는 1930년 1월 15일 토요하라 경찰서장의 도장이 찍혀 있고 관내 일반 순사앞으로 작성되어 있는데 여기에 '不逞計畫鮮人に関する風評調査の件'이라는 기록이 있는 것이다. 여기에는 현용범(24세)과 이재화(20세)의 기록이 있다.45) 그 중 한명은 부산부 초량404번지가 본적인데 '이 2명이' '불손계

교원의 급료까지 기록이 남아있다.

41) 井濶裕 「サハリン州公文書館日本語文書」 『アジア經濟研究所』

42) 長沢秀, 戦前朝鮮人關係警察資料集 樺太庁警察部文書 1(大正15年-昭和9年)2006.6

43) サハリン残留韓国・朝鮮人問題懇談会編(1994) 『サハリン残留韓国・朝鮮人問題と日本の政治』 p.278-9

44) 長沢秀(2006) 『戦前朝鮮人關係警察資料集—樺太庁警察部文書』 緑蔭書房

45) 나가사와의 작업을 인용한 논문에 의거함 今西一 「樺太・サハリンの韓国人」 『北東アジアのコリアン・ディアスポ

획‘을 이해 내지(일본)에 도항하여 교토와 오사카방면에 가서 수명의 조선인과 공모하여 고 위고관의 사진을 촬영하고 상해에 있는 조선독립 정부에 송부하고 무엇인가 불손한 계획을 하고 있다’고 기록하고 있다. 조선독립정부와 관계있는 인물에 의해 ‘일본정부 고관암살계획’이 진행되고 있다는 것이다. 이러한 기록은 사할린 동포의 경우 독립운동과 배경이 무관하다는 것과 달리⁴⁶⁾ 조선독립정부와 연계하고 일본까지 활동영역을 넓힌 독립운동과 관련된 인물이 있음을 알 수 있다.

또 1932년의 기록에는 ‘토요하라’의 ‘특고경찰’ ‘비밀서류’ 제 345호 1932년 2월 1일자 자료를 보면 ‘在上海 불손조선인교민단 일파의 불온계획에 관한 건’이 있다. ‘상해에 근거가 있는 불손선인 교민단은 사쿠라다몬가이⁴⁷⁾의 불경사건을 발발시켰는데 그들은 제2, 제3의 직접행동을 감행하려고 하는 계획이 있는 듯하다’는 것이다. 1월 7일 부 포고 1호에서는 ‘별첨과 같은 민단정무위원을 선임하고 동 월 10일제 1차정무위원회를 개최하고 단장 김구가 경무위원장이 되어 직접행동을 담당하고 ‘한국독립당선언’이라는 제목으로 대한민국 14년 10월 10일 한국독립당이라고 게재된 原漢文의 인쇄물로 이봉창의 불경사건을 기재한 불온인쇄물을 제작하여 각 방면에 배포하였다는 정보를 접수하여 그들 일미가 일본잠입을 기획하고 언제 도래할지 모르므로 주의가 필요하다’는 것이다.

이 무렵 가라후토 경찰은 공산주의자 민족주의자 무정부주의자에 대한 추적을 하여 그 일환으로 조선인에 대한 감찰을 하고 있음을 알 수 있다. 가라후토에서 가장 큰 사건은 ‘토요하라’ ‘특고경찰’ ‘비밀서류’ 제 701호 쇼와 10년(1935) 4월 26일의 서류이다. ‘滿州国皇帝陛下御訪日に際し、在露不逞千尋の不逞計画に関する件’이라는 제목이다. 1935년 일본에 갈 만주국 황제 부의가에 대한 암살계획에 대한 건으로 이에 의하면 ‘최근 러시아령에서 귀국한 선인 채모는 首題사건에 관하여 조사받는 과정에서 위와 같은 사실을 자백하여 함경북도 지사로부터 통보가 있었다고 하여 경찰부장으로 통보를 받았다는 것이다. 이에 의하면

1. ‘재러시아 일반鮮人間에 만주국황제의 일본 방문은 일제의 소환에 의한 것으로 자기의 의지와 관계없이 할 수 없이 도일하는 것이므로 모욕적이며 양국(만주국과 일본국)은 표면상은 공수동맹을 맺고 있지만 사실은 일제에 탈취병합된 것으로 황제의 방일후에는 반드시 중국 및 소련의 침공에 더욱 진전될 것이다라는 유언비어가 있다.’
2. ‘재블라디보스톡의 불손선인의 거두 김하석 김만겸등을 비롯한 중요선인간부 10여명은 3월 상순 블라디보스톡 스탈린 구락부에 집합하여 만주국 황제도일시에 이를 살해하고 일만양구구친선의 이면에 존재하는 만구국측의 불평을 폭발시켜 국제문제화하려고 다음과 같은 결의를 하였다.’
3. 1). ‘상해방면으로부터 파견된 의열단원과 책응하여 재조선인 빨치산분자중 가장 의사

ラ』小樽商科大学出版会、2012

46) 기존의 사할린연구에서는 이들이 강제징용으로 사할린에 건너간 것에 주목한 나머지 연해주나 초기미민의 형태로 이동한 한국인을 간과하고 독립운동과도 무관하다고 대부분 서술하고 있다.

47) 1932년의 1월 8일의 이봉창 ‘일본도쿄에서 일왕에 대한 수류탄공격을 가하였고 (사쿠라다몬가이사건)4월 29일에는 상해의 虹口공원에서 ‘천장절’의 기념식전에 폭탄을 던진 사건이다.

가 강한 전위분자를 선발하여 여러조로 나누어 일본에 잠입하려한다. 2) 이들의 파견 원에는 특히 일본어가 유창한 자를 선발하여 出漁船에 편승시켜 북해도 또는 가라후토방면에 상륙시켜 점차 남하여 동경 및 교토에 집합하여 결행한다 3). 목적달성후는 관헌체포에 앞서 현장에서 비장한 가두연설을 한 후 자살한다 4). 동지중 한사람이 목적을 달성하면 다른 사람은 일본 재주 선인숙에 들어가 동지의 획득 일본요인의 암살 연락할 동지 등을 구한다. 이중 하나만이라도 성공하면 귀국한다.

가라후토경찰은 가라후토를 통해서 상륙한다는 점에서 당황하고 1935년 4월 30일에는 '만주국황제폐하 내방 경계 밀항선인수배건' 라는 수배서를 내어 조선인 밀항자를 조사하여 밀항자를 검거하고 있다.

이러한 가라후토청의 기록을 보면 가라후토는 독립운동과 무관하고 소련내의 타지역재외동포와 달리 독립운동의 배경을 갖고 있지 않다는 종래의 연구에서의 기본적 전제가 사실과 다르다는 점을 알 수 있다. 이미 1910년 한일합방이후 러시아령 연해주에 왔던 한인들이 사할린을 건너와 1910년 사할린 섬 북쪽의 알렉산드로프스크시에서 정치망명자들에 의한 상호부조의 협회가 만들어졌다고 한다. 48)

5. 정리 및 전망

본고에서는 '사할린연구'의 현재의 위치를 연구의 변용과정과 추이를 추적함으로써 분명히 하고 그 결과 구체적이고 실증적이고 개별적인 연구가 요구되는 시점임을 밝혔다. 이를 위해서는 지금 새로이 자료가 공개되어 공유가 가능해진 일본의 행정조직 카라후토의 자료를 이용하는 것이 필요하고 국제조사표 등 구체적인 통치자료를 분석하는 것이 필요하다. 우선 기초적인 조사로 인구의 추이를 살펴 고찰하였다. 이는 카라후토의 한국인과 '강제 징용'의 도식을 도입한 나머지 시야에서 사라진 개별적인 인간의 이동을 생각하는데 기초적인 자료로서 기능할 것이라고 판단하였기 때문이다. 게다가 이를 남사할린과 북사할린을 분리하여 고찰한 것은 시기적으로 통치하는 국가가 다르고 또 국경선도 유동적인 것이 특징이기 때문이다. 인구의 변화의 추이를 통해 점진적으로 연해주를 통하여 조선인이 이주하기 시작한 점을 확인 할 수 있었고 북사할린과 남사할린에서 각각 조선인 인구의 이동의 추이와 변화 그 원인이 다르다는 점을 확인하였다. 1920년에서 25년간은 북사할린이 일본의 통치지역이었으며 이 기간 동안 인구 이동이 남북 사할린 사이에서 일어났으며 1925년 이후 다시 소련정부가 통치하게 된 북사할린도 한동안은 일본계 기업이 존속하였고 1937년 이후는 북사할린의 조선인은 모두 러시아 대륙으로 이주를 강요받았다는 사실을 알게 되었다. 그리고 1945년에 이르기까지 '모집', '관알선', '징용'의 단계를 거쳐 조선인의 이주가

48) アナトーリ クージン(1998) 『沿海州・サハリン近い昔の話—翻弄された朝鮮人の歴史』 凱風社. p.172

남사할린으로 ‘노동이민형’, ‘가족이주형’으로 진행되었으며 이 기간 동안 조선인 인구가 비약적으로 늘어 연구자에 따라 250배의 인구증가율을 보임을 알 수 있었다.

그리고 다른 지역에 비하여 상대적으로 ‘고수입’을 보장하였던 사할린 지역에서 ‘강제 연행’된 조선인들은 임금격차와 열악한 노동조건을 감수하게 되었음을 알 수 있었다. 사할린이라는 ‘공간’에 주목한 연구를 진행하여야 할 것이다. 사할린의 한국인의 인구이동이 다양하다는 점을 간과하고 남사할린과 북사할린을 혼돈한 것이 기존연구의 폐해였다면 ‘피해’와 ‘가해’의 강제연행이라는 도식적인 이해만을 사할린연구에서 지적하는 것 역시 기존연구의 시야의 한계라고 본다. 이에 새로이 ‘경찰자료’를 시야에 넣어 통치기간동안 ‘위험분자’로서 관리되고 있는 점을 지적하였고 이들과 ‘독립운동’이 연계하고 있음을 밝혔다.

‘너무나도 늦은 귀환’이어서 사할린 귀환동포는 점차 고령화되어 이들의 경험을 기록할 기회가 점차 줄어가고 있다. ‘기획되고 주어진 공간’인 안산 고향마을의 노인회의 주선으로 여러 번에 걸쳐 귀국 동포의 사할린에서의 경험을 들을 수 있었는데 올해 10월에 재방문하였더니 회장 고창남씨가 갑자기 세상을 떠셨다는 소식을 들었다. 1935년 탄광의 도시 마카로프에서 태어나 모스크바의 대학에서 응용역학을 공부하고 연구소에 근무하다가 2000년에 영구 귀국하였고 지금은 모스크바와 미국에 사는 자녀가 있는 ‘초국적’인생을 경험한 분이다. ‘역사적 빚에 대한 보상’으로서 정부정책의 수혜자이지만 그 역시 다시 또 새로운 이산, 이중 이산을 경험하며 살아가고 있었다. 사할린 동포의 ‘고달픈 삶’에 대하여 ‘동정과 연민’이라는 시각을 가지는 것이 아니라 다양한 삶과 경험에 대하여 귀기울여야 할 것이다. 고향마을의 주민의 대다수는 한국의 국적과 러시아의 국적을 함께 보유하고 있으며 러시아에서 찾아오는 가족과 친지들에게 한국에서의 거점을 제공하고 사후 어디에 묻힐 지에 대하여 진지하게 고민하는 ‘초국적 이주자’들이다. 한국의 이주관련문제는 ‘외국인’들만의 문제로 문화적 적응이나 갈등의 문제를 협소하게 규정하고 있으며 한국인과 외국인사이의 이분법을 전제로 작동하고 이는 동포라는 이름에서도 같이 작동한다. 이제는 묘지문제나 장례문제가 귀환자들에게 최대의 관심사가 되고 사할린체제에서 50년 이상을 겪은 귀환자들의 또 다른 디아스포라가 안산의 고향마을에서도 자리하고 있다.

◀ 参考文献 ▶

- Anatolij Timofeevich Kuzin(1993) *Daljnepstochnye korejtsy: zhiznj i tragedija sudjby*
 アナトリー ケージン(1998) 『沿海州・サハリン近い昔の話—翻弄された朝鮮人の歴史』 凱風社
 半谷史郎(2006) 『中央アジアの朝鮮人—父祖の地を遠く離れて』 東洋書店
 John Stephan(1971), *Sakhalin*, Clarendon Press
 長沢秀(2006) 『戦前朝鮮人関係警察資料集—樺太庁警察部文書』, 緑蔭書房
 長沢秀(1986) 「戦時下南樺太の日強制連行朝鮮人炭坑夫について」(『在日朝鮮人研究』16号
 西成田豊(1997) 『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』 東京大学出版会
 朝鮮人強制連行真相調査団編(1974) 『朝鮮人強制連行強制労働の記録—北海道・千島・樺太編』 現代史出版会
 大沼保昭(1992) 『サハリン棄民』 中公新書1082, 中央公論社

- 今泉裕美子(2004) 「朝鮮半島からの『南洋移民』—米国議会図書館蔵南洋群島関係史料を中心に—」 文化センター・ア
 ラン 『アラン通信』 第32号 pp.1-24
- 이순형(2004) 「사할린 귀환자」 서울대학교 출판부
- 高木健一(1992) 『サハリンと日本の戦後責任 増補改訂版』 凱風社
- Terry Martin(2002) *The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939*, Wilder
 House Series in Politics, History, and Culture
- 大沼保昭(1992) 『サハリン棄民：戦後責任の点景』 中公新書
- 李炳律 (2008) 『サハリンに生きた朝鮮人—ディアスポラ・私の回想記』 北海道新聞社
- 新井佐和子(1997) 『サハリンの韓国人はなぜ帰れなかったのか—帰還運動にかけたある夫婦の四十年』 草思社
- 角田房子(1997) 『悲しみの島サハリン：戦後責任の背景』 新潮文庫
- 이은숙, 김일림(2008) 「사할린 한인의 이주와 사회문화적 정체성: 구술자료를 중심으로」 『문화역사지리』 20(10),
 pp.19-33
- 정인섭, (1989) 「재사할린 한인에 관한 법적 제 문제」, 『국제법학논총』 34-2, 대한국제법학회, 1989, pp.188-189
- 金勝一(2006) 「사할린 한인 미귀환 문제의역사적 접근과 제언」 『한국근현대사연구』 가을호 제38집
- 한혜인(2011) 「사할린 한인 귀환을 둘러싼 배제와 포섭의 정치」 『史學研究』 第102號
- 최계수 (2006) 「사할린 억류한인의 국적귀속과 법적 제 문제」 『한국근현대사연구』 여름호 제 37집
- 김경득(1988) 「사할린잔류 한인 귀환소송의 추이와 법적 논점」 『해외동포』
- 임엘비라(2010) 「사할린한인들의 정체성: 우리말 교육의 현황과 과제」 『문화교육연구』 제3권 1호
- 이은숙, 김일림(2008) 「사할린 한인의 이주와 사회문화적 정체성:구술자료를 중심으로」 『문화역사지리』 제20권
 제1호, p.28
- 太田修(2008) 「外務省外交史料館の現代韓国朝鮮関係資料について」 『現代韓国朝鮮研究』 第8号
- 樺太庁編(1908) 『明治41年9月 樺太要覽 完』 隆文館
- 樺太庁編 『大正9年第1回国勢調査結果表』
- イゴリ・サベリエフ(2005) 『移民と国家—極東ロシアにおける中国人、朝鮮人、日本人移民』 お茶の水書房
- 宮本正明(2010) 「戦前期の樺太在住朝鮮人に関する日本での研究同行」 松井憲明、天野尚樹編訳 『サハリン植民の歴史的
 経験—2008年5月サハリン大学国際シンポジウム報告集(『サハリン・樺太史研究』 第1集)』 北海道情報大学
 pp.130-133
- 딘·유리아(2012) 「아이덴티티를求めて—사할린朝鮮人の戦後、1945—1989」 『北東アジア의 코리아·디아스포
 라』 小樽商科大学出版会, p.151

- 투 고 : 2012. 11. 30.
- 심 사 : 2012. 12. 15.
- 심사완료 : 2013. 01. 15.

日本學報 편집 및 심사에 관한 규정

1. 편집위원회의 구성과 임무

제1조 본 위원회는 韓國日本學會 편집위원회(이하 본 위원회로 함)라 부른다.

제2조 본 위원회는 韓國日本學會 안에 둔다.

제3조 본 위원회는 韓國日本學會 정관에(제3장 제8조)에 의거하여 20명 내외의 국내 편집위원과 약간 명의 해외 편집위원으로 구성하며, 편집위원장과 편집간사를 둔다.

제4조 본 위원회는 학회지에 게재될 논문의 심사위원의 선정을 비롯하여 학회지 편집에 관한 모든 업무를 주관한다.

제5조(편집위원장) 편집위원장은 韓國日本學會 회장(이하 본회 회장으로 함)이 추천하여 이사회의 인준을 얻어 위촉하며 학회지의 편집회의를 주재하고 위원회의 諸般 업무를 총괄한다. 편집위원장의 임기는 2년 단임으로 한다.

제6조(편집위원) 편집위원은 연구업적이 뛰어난 회원 가운데 편집위원장의 추천을 받아 본회 회장이 위촉한다. 편집위원은 편집회의에 참석하여 전공 영역별로 학회지 편집에 관한 업무를 담당하며 임기는 2년으로 한다.

제7조(편집간사) 편집간사는 학회의 편집이사가 겸임하며 편집위원회에서 결정된 심사 논문의 송부 및 심사 결과를 취합·보고하고, 학회지의 출판에 관련된 제반 연락 업무를 담당한다. 편집간사의 임기는 2년으로 한다.

2. 회의

제8조(정기편집회의) 제1차 정기편집회의는 학회지 투고논문의 마감일로부터 15일 이내에, 제2차 정기편집회의는 심사 종료일로부터 10일 이내에 소집하는 것을 원칙으로 한다.

제9조(임시편집회의) 임시편집회의는 필요에 따라 편집위원장이나 5인 이상의 편집위원의 동의에 의해 위원장이 소집한다.

제10조(상임심사위원의 활용) 편집위원회는 논문심사의 형평성과 효율성을 고려하여 전 공별 상임심사위원을 구성하여 심사위원 선정에 활용할 수 있다.

3. 심사 규정 및 절차

제11조(심사의 주관) 논문집의 심사 과정은 본 위원회에서 주관한다.

제12조(심사위원의 위촉) 투고 논문의 심사위원은 제1차 정기편집회의에서 전공 영역에 따라 심사 대상 논문의 담당 편집위원이 3인 이상의 복수로 선정하고 본 위원회의 승인을 받아 위촉한다.

제13조(심사위원) 심사위원은 韓國日本學會 심사서 양식에 의거하여 공정한 심사를 수행하며, 심사위원은 투고자에게 비공개로 한다.

제14조(논문심사비) 韓國日本學會 소정의 논문 심사비를 심사위원에게 지급하며 논문심사비 영수증은 논문 심사서로 대신한다.

제15조(심사의 기준) 심사는 ‘논문의 목적과 동기의 명확성’ ‘논문의 창의성’ ‘논지 전개 의 정합성 및 내용의 충실도’ ‘참고문헌의 인용도 및 결과의 학계 기여도’ ‘용어의 통일성 및 제반 형식의 논문투고규정에 대한 부합도’의 다섯 항목에 대해 각 20점 배점으로 총점 100점으로 한다.

제16조(심사 결과) 본 위원회는 심사위원의 심사 결과를 바탕으로 제2차 정기편집회의에서 ‘게재가’ 또는 ‘재투고’로 결정한다.

제17조(심사 결과의 통보) 해당 편집간사는 제2차 정기편집회의의 결과를 신속하게 논문 투고자에게 통지하며, 심사위원 인적사항 및 점수를 제외한 심사서를 함께 송부한다.

제18조(게재가 논문) 제2차 정기편집회의에서 ‘게재가’ 판정을 받은 논문에 대해서는, 심사서의 수정 요구 등을 반영한 최종 논문을, 결과 통보 10일 이내에 해당 편집 간사에게 송부한다.

제19조(재투고 논문) 제2차 정기편집회의에서 ‘재투고’ 판정을 받은 논문은, 주제나 방법·결과에 있어서 수정 없이 재투고할 수 없다.

제20조(투고 제한) 게재가로 결정되거나 게재된 후에도 표절 및 중복 게재가 밝혀질 경우에는 연구윤리위원회의 의결에 따라 게재를 취소하고 이후 최소 3년간 논문 제출을 제한한다.

제21조(논문게재예정증명서) 논문게재예정증명서는 게재가로 결정된 논문에 대해 편집 위원장의 확인을 거쳐 본회 회장의 명의로 발행한다.

日本學報 투고규정

A. 접수 및 심사

<접수분야> 일본어학, 일본문학, 일어교육학, 일본역사문화학, 일본교육학, 일본민속학, 일본정치경제학, 기타 일본학 관련 분야

<접수마감> 논문의 접수는 수시로 하되 마감일은 다음과 같다.

2월 28일, 5월 31일, 8월 31일, 11월 30일

<투고자격> 본 학회 회원으로서 학회의 정기학술발표회나 분회 또는 연구회에서 구두 발표를 마친 경우에 투고 자격을 부여한다.

<심 사> 논문은 日本學報의 투고규정과 <논문 작성요령>에 맞게 작성된 것만을 심사 대상으로 하며, 제출된 논문은 해당 분야 전문가의 복수 심사를 거쳐 편집위원회에서 게재 여부를 결정한다. 합격 논문이 많을 경우에는 게재를 다음 호로 미룰 논문을 편집위원회에서 결정한다.

<학회지 발간> 연간 4회 발간(2월 28일, 5월 31일, 8월 31일, 11월30일)

B. 투고 규정

1. 내 용: 독창적인 내용으로 기존 국내외 학술지에 게재되지 않은 것으로 한다.
2. 사용언어: 일본어 또는 한국어로 작성하는 것을 원칙으로 한다.
3. 외 래 어: 일본어를 한글로 표기할 때는 한글맞춤법의 외래어표기법에 따른다.
4. 분 량:<日本學報 논문작성 요령> 대로 작성했을 때, 요지, 본문, 참고문헌을 포함하여 10쪽~12쪽으로 한다. 12쪽 초과분에 대한 인쇄료(1장당 2만원)는 필자가 부담한다.
5. 원고제출: 원고는 E-mail로 제출한다. 원고에는 투고자의 인적사항(성명(한자), 소속, 직위, 전공분야, 주민번호(학진등재시 필요)), 연락처(우편번호, 주소, 전화, E-mail) 및 구두발표일과 발표장소, 영문제목과 영문 필자명을 기입한다.
6. 논문양식(<논문작성예시>를 참조)

편집용지 B5 : 위15, 머리말13, 왼쪽17, 오른쪽 15, 아래 20, 꼬리말 0, 제본 7

원고작성 반드시 「한글」로 작성한다. 사진이나 그림 등은 스캔하여 그림파일로 첨부하거나 완전한 형태의 원판을 첨부한다.

글자크기 신명조, 또는 신명조 약자로 한다(줄간격 170)

논문 제목 17(진하게), 부제목 12, 필자명 12(줄 100), 메일 주소 8(줄 100), 요지 8(줄140), 주제어 8, 본문 10(각주와 참고문헌은 8, 줄140), 본문 큰제목

12(진하계)

요지/주제어 논문 1/2쪽 이내의 요지를 영어(권장) 또는 일본어로 작성하고, 해당 논문의 주제어(key words, キーワード) 3-5단어를 요지와 동일한 언어로 요지 끝부분에 명기한다(요지는 첫 장의 필자명 아래에 배치).

각 주 인용 문헌의 경우에는 본문에서 내용주로 처리하고, 내용의 설명은 각주로 제시한다.

참고문헌 필자명을 기준으로 한국어자료, 일본어 자료, 영어 자료의 순으로 배열한다. 한국어는 가나다 순, 일본어는 오십음 순, 영어는 알파벳순으로 한다. 필자명 뒤의 ()안에 연도를 기입하고, 논문 또는 단행본의 제목, 게재지 또는 출판사 순으로 배열한다.

- 7. **수정/교정:** 편집위원회는 심사소견을 바탕으로 투고자에게 원고의 수정을 권유할 수 있으며, 게재가 결정된 원고의 교정은 필자가 행한다.
- 8. **게재료:** 편집위원회의 게재 결정 통보를 받는 즉시 게재료를 온라인 입금한다.
- 9. **사이버출판:** 학회지에 게재된 모든 논문을 사이버 출판한다.
- 10. **별쇄본:** 논문이 게재된 필자에게 학술지 1부를 증정한다. 별쇄본은 필자의 신청을 받아 제작하며 비용은 필자가 부담한다.
- 11. **기타:** 1) 일련 번호(1·2, I·II, 상·중·하 등의 연속 번호)형식의 논문은 게재하지 않는다.
2) 게재(예정)증명서는 편집위원회에서 게재가 결정된 이후에만 발급이 가능하다.

<학회비 입금> 국민은행 589201-04-029152 김수희(한국일본학회)

<게재료·심사비입금> 국민은행 676502-04-024452 채성식(한국일본학회)

<원고 보낼 곳>

일본어학: kygyun2@hanmail.net	김용균 편집이사
일본문학(고전): heokon@kangwon.ac.kr	허곤 편집이사
일본문학(근현대): leejh87@sookmyung.ac.kr	이지형 편집이사
일본학: wkkim@wow.hongik.ac.kr	김웅기 편집이사

日本學報 논문 작성 요령

【편집용지】 <B5용지> 위15, 머리말13, 왼쪽17, 오른쪽 15, 아래 20, 꼬리말 0, 제본 7

【논문제목】 상대 일본어의 음절 구조 (신명조17, 진하게, 가운데)

** 1줄 ** (글자크기 10, 줄간격 170)

【학회비 납부여부】 (글자크기 10, 줄간격 170)

【필자명】 金基童(신명조 12, 줄간격 100)

【e-mail address】 e-mail address(신명조 8, 줄간격 100)

< 요 지 >

작성언어 : 영어(권장) 또는 일본어
분 량 : 논문 1면의 1/2쪽 이내
글자크기 : 신명조 또는 신명조약자 8, 줄간격 140

주제어: 검색의 편의를 위해 주제어(key word)를 명시(요지와 동일 언어로 3-5단어) (신명조 8, 진하게)

** 2줄 **

【큰제목】 1. 연구 목적 및 방법 (신명조 12, 진하게, 줄간격 170%, 문단아래 10pt)

【본 문】 이 논문은 상대 일본어의..... (신명조 10, 줄간격 170%)

** 2줄 **

2. 상대 일본어의 특징

· (작은 제목과 본문사이는 떼지 않음)

·
·

【인 용 문】 아날로그적인 것과..... (글자모양 : 신명조 9, 줄간격 170%)

(문단모양 : 왼쪽 30pt, 들여쓰기 안함)

【각 주】 _____

1) 이에 대해 有坂秀世(1957)은 다음과 같이 논하고 있다.(신명조 8, 줄간격 140%)

(문단모양 : 왼쪽 10pt, 내어쓰기 10pt)

※ 각주와 인용문 작성시 스페이스바로 밀어서 열을 맞추지 마시고 반드시 문단모양의 왼쪽여백과 내어쓰기를 이용해서 맞추기 바랍니다.

5. 맺음말

이 논문에서는.....

** 2줄 **

【참고문헌】 ◀ 참고문헌 ▶ (신명조 12, 줄간격 170%, 문단아래 10pt, 들여쓰기 20pt)

허웅(1985) 『국어음운학』, 샘문화사. pp.131-133 (신명조 8, 줄간격 140%, 내어쓰기 50pt)

井上和子(1976) 『変形文法と日本語』, 大修館書店. pp.23-26

J. Milroy(1992) *Linguistic variation and change*, Basil Blackwell Ltd. p.45

- * <필자명(연도) 논문명(또는 저서명), 게재지 권 호, 발행처>의 순서로 배열
- * 문헌 배열: 국문, 일문, 영문 순으로 하며 필자명을 기준으로 각각 가나다, 오십음, 알파벳 순.
- * 인용 또는 참고한 쪽수를 명기

【필자인적사항】

근 무 처 :	직 위:
주민등록번호 :	
주 소 : <우편번호> (※학회지 및 별쇄본 받으실 주소를 명기해 주십시오)	
전화번호 :	H.P :
E-mail :	한자 필자명:
영문 제목:	영문 필자명:
발 표 일 :	발표장소 :
투 고 일 :	

- * 논문심사, 필자와의 연락 등은 E-mail과 우편을 통해 이루어집니다. E-mail과 주소를 명기해 주시기 바랍니다.
- * 학술진흥재단에 파일 업로드로 필자의 주민번호가 필요하니, 반드시 **주민등록번호**를 명기해 주시기 바랍니다.

한국일본학회 연구윤리규정

제1장 총 칙

제1조(목적) 본 규정은 한국일본학회(이하 “학회”라 한다)의 연구윤리 및 진실성을 확립하여 연구부정행위를 사전에 예방하며, 연구부정행위 발생 시 공정하고 체계적인 진실성 검증을 위한 연구윤리위원회(이하 “위원회”라 한다)의 설치 및 운영에 관한 사항을 규정함을 목적으로 한다.

제2조(적용대상) 본 규정은 본 학회의 회원으로서 연구 활동과 직·간접적으로 관련 있는 모든 연구자에 적용하는 것을 원칙으로 한다.

제3조(적용범위) 본 규정의 적용범위는 인문사회분야의 연구윤리 확립 및 연구진실성 검증과 관련된 제반 사항으로 한다.

제4조(용어의 정의)

① 연구부정행위(이하 “부정행위”라 한다)라 함은 연구의 제안, 연구의 수행, 연구결과 의 보고 및 발표 등에서 행하여진 위조·변조·표절·부당한 논문저자 표시 행위 등을 말하며 다음 각 호와 같다.

1. “위조”는 존재하지 않는 데이터 또는 연구결과 등을 허위로 만들어 내는 행위를 말한다.
2. “변조”는 연구 재료·장비·과정 등을 인위적으로 조작하거나 데이터를 임의로 변형·삭제함으로써 연구 내용 또는 결과를 왜곡하는 행위를 말한다.
3. “표절”이라 함은 타인의 아이디어, 연구내용·결과 등을 정당한 승인 또는 인용 없이 도용하는 행위를 말한다.
4. 본인 또는 타인의 부정행위의 의혹에 대한 조사를 고의로 방해하거나 제보자에게 위해를 가하는 행위.
5. 타인에게 상기의 부정행위를 행할 것을 제안·강요하거나 협박하는 행위.
6. 인문사회분야에서 통상적으로 용인되는 범위를 심각하게 벗어난 행위 등.

② “제보자”라 함은 부정행위를 인지한 사실 또는 관련 증거를 한국일본학회 또는 연구지원기관에 알린 자를 말한다.

③ “피조사자”라 함은 제보 또는 한국일본학회의 인지에 의하여 부정행위의 조사 대상

이 된 자, 조사 수행과정에서 부정행위에 가담한 것으로 추정되어 조사의 대상이 된 자를 말하며 조사과정에서의 참고인이나 증인은 이에 포함 되지 아니한다.

④ “예비조사”라 함은 부정행위의 혐의에 대하여 공식적으로 조사할 필요가 있는지 여부를 결정하기 위한 절차를 말한다.

⑤ “본조사”라 함은 부정행위의 혐의에 대한 사실 여부를 입증하기 위한 절차를 말한다.

⑥ “판정”이라 함은 조사결과를 확정하고 이를 제보자와 피조사자에게 문서로서 통보하는 절차를 말한다.

제2장 위원회의 설치 및 운영

제5조(구성)

① 위원회는 편집위원장, 부회장, 총무이사, 학술이사, 편집이사 및 3인 이상의 관련분야 편집위원을 포함하여 15인 이내로 구성하며, 위원장 및 위원은 학회장이 위촉한다.

② 위원장 및 위원의 임기는 2년으로 하되 연임할 수 있다.

제6조(위원장) 위원장은 위원회를 대표하며, 회의를 주재한다.

제7조(간사) 위원회에는 간사 1인을 두어 제반 행정사항을 처리할 수 있다.

제8조(기능) 위원회는 다음 각 호의 사항을 심의·의결한다.

1. 연구윤리·진실성 관련 제도의 수립 및 운영에 관한 사항
2. 연구윤리규정의 제·개정에 관한 사항
3. 부정행위 제보 접수 및 조사에 관한 사항
4. 본조사 착수여부 및 조사결과 판정, 승인 및 재심의를 관한 사항
5. 제보자 및 피조사자 보호에 관한 사항
6. 연구진실성 검증결과의 처리 및 후속조치에 관한 사항
7. 기타 위원장이 부의하는 사항

제9조(회의) ① 위원장은 위원회의 회의를 소집하고 그 의장이 된다.

② 회의는 재적위원 과반수 출석과 출석위원 3분의 2이상의 찬성으로 의결한다. 단 위임장은 위원회의 성립요건인 출석으로는 인정하되 의결권은 부여하지 않는다.

③ 회의는 비공개를 원칙으로 하되, 필요한 경우 위원이 아닌 자를 참석시켜 의견을 청취할 수 있다.

제3장 제보 및 접수

제10조(부정행위 제보 및 접수) ① 제보자는 학회에 구술·서면·전화·전자우편 등 가능한 모든 방법을 통하여 실명으로 제보하는 것을 원칙으로 한다.

② 증거자료는 반드시 서면으로 제출하여야 하며, 익명으로 제보하고자 할 경우 서면 또는 전자우편으로 연구과제명, 논문명 및 구체적인 부정행위의 자료를 제출하여야 한다.

③ 제보내용이 허위인 줄 알았거나 알 수 있었음에도 불구하고, 이를 신고한 제보자는 보호대상에 포함되지 않는다.

④ 제보의 접수일로부터 만7년 이전의 부정행위에 대해서는 이를 접수하였더라도 처리하지 않음을 원칙으로 한다.

제11조(제보자와 피조사자의 권리보호·비밀엄수) ① 어떠한 경우에도 제보자의 신원을 직·간접적으로 노출시켜서는 안 되며, 제보자의 성명은 반드시 필요한 경우가 아니면 제보자 보호차원에서 조사결과 보고서에 포함하지 아니한다.

② 제보자가 부정행위 제보를 이유로 신분상 불이익, 근로조건상의 차별, 부당한 압력 또는 위해 등을 받을 경우에는 그 피해를 원상회복하거나 제보자가 필요로 하는 조치를 취하여야 한다.

③ 부정행위 여부에 대한 검증이 완료될 때까지 피조사자의 명예나 권리가 침해되지 않도록 주의하여야 하며, 부정행위와 무관한 것으로 판명된 피조사자의 명예회복을 위해 노력하여야 한다.

④ 제보·조사·심의·의결 및 건의조치 등 조사와 관련된 일체의 사항은 비밀로 하며, 조사에 직·간접적으로 참여한 자는 직무수행과정에서 취득한 모든 정보에 대하여 누설하여서는 안 된다. 다만, 합당한 공개의 필요성이 있는 경우 위원회의 의결을 거쳐 공개할 수 있다.

제12조(이의제기 및 변론의 권리 보장) 조사위원회는 제보자와 피조사자에게 의견진술, 이의제기 및 변론의 권리와 기회를 동등하게 보장하여야 하며 관련절차를 사전에 알려주어야 한다.

제4장 예비조사

제13조(예비조사의 기간 및 방법) ① 예비조사는 제보접수일로부터 10일 이내에 착수하고, 조사시작일로부터 30일 이내에 완료한다.

② 예비조사에서는 다음 각 호의 사항을 검토한다.

1. 제보내용이 제4조 제1항의 부정행위에 해당하는지 여부
2. 제보내용이 구체성과 명확성을 갖추어 본조사를 실시할 필요성과 실익이 있는지 여부
3. 제보일이 시효기산일로부터 7년을 경과하였는지의 여부

제14조(예비조사 결과의 보고) ① 예비조사 결과는 위원회의 의결을 거친 후 10일 이내에 제보자에게 문서로 통보하여야 한다. 다만, 제보자가 익명인 경우에는 예외로 한다.

② 예비조사 결과보고서에는 다음 각 호의 내용이 포함되어야 한다.

1. 제보내용
2. 조사의 대상이 된 부정행위 의혹 및 관련 연구과제
3. 본조사 실시 여부 및 판단의 근거
4. 기타 관련 증거자료

제5장 본 조사

제15조(본조사의 기간) ① 본조사는 위원회의 본조사 실시 결정 후 20일 이내에 착수하여야 한다.

② 본조사는 시작일로부터 60일 이내에 완료한다.

③ 제2항의 기간 내에 조사를 완료할 수 없다고 판단할 경우 1회에 한하여 기간연장요청을 할 수 있다.

제16조(출석·자료제출 요구) ① 위원회는 제보자·피조사자·증인 및 참고인에 대하여 진술을 위한 출석을 요구할 수 있으며, 이 경우 해당자는 성실히 조사에 응하여야 한다.

② 위원회는 피조사자에게 관련자료 제출을 요구할 수 있으며, 피조사자는 위원회가 요구하는 자료제출에 대해서는 무한책임을 갖고 임해야 한다. 조사에 성실하게 협조하지 않으면 학회 차원에서의 징계는 물론 해당기관(대학)에도 관련 자료의 일체를 이양하여 강력한 징계를 요청할 수 있다.

제17조(본조사 결과보고서의 제출) ① 위원회는 이의제기 및 변론내용을 토대로 본조사 결과보고서(이하 “최종보고서”라 한다)를 작성한다.

② 최종보고서에는 다음 각 호의 사항이 포함되어야 한다.

1. 제보내용
2. 조사의 대상이 된 부정행위 혐의 및 관련 연구과제

3. 해당 연구과제에서의 피조사자의 역할과 협의의 사실 여부
4. 관련 증거 및 증인
5. 조사결과
6. 위원 명단
7. 기타 보고서 작성에 필요한 사항

제18조(판정) ① 위원회는 이의제기 또는 변론의 내용을 토대로 조사내용 및 결과를 확정한다.

② 위원회는 조사결과를 제보자와 피조사자에게 통보함과 동시에 그 제재 및 징계내용에 대해서도 결정한다.

제19조(이의신청·재심의) 제보자 또는 피조사자가 판정에 불복할 경우에는 통보를 받은 날로부터 30일 이내에 위원회에 그 이유를 서면으로 재심을 요청할 수 있다. 단 재심의의 결정은 위원회의 전원합의와 학회장의 추인이 있을 경우에 한한다.

제6장 검증 이후의 조치

제20조(소속대학등에 대한 보고) 최종보고서는 소속대학기관 등의 요청이 있을 경우 학회장의 승인 하에 조사와 관련된 자료를 제출할 수 있다.

제21조(부정행위에 대한 징계) ① 징계 및 제재조치가 결정되면 위원장은 그 사실을 해당 연구자에게 서면으로 통지하여야 한다.

② 위원회는 부정행위 관련자에 대해 다음 각 호의 징계를 할 수 있다.

1. 학회 견책 서한 발송
2. 해당 연구결과물의 학회지 게재에 대한 취소
3. 3년간 투고자격 제한
4. 제명
5. 소속기관에의 통보
6. 법률기관에의 고발 등

③ 위원회는 조사결과를 학회의 기관지를 통해 전 회원에게 공지한다.

제22조(기록의 보관·공개) ① 예비조사 및 본조사와 관련된 기록은 위원회에서 3년간 보관한다.

② 본조사의 최종보고서는 판정이 끝난 이후에 공개할 수 있다. 다만, 제보자·조사위

원·증인·참고인·자문에 참여한 자의 명단 등 신원과 관련된 정보가 당사자에게 불이익을 줄 가능성이 있을 경우에는 공개하지 않을 수 있다.

제7장 보 칙

제23조(경비) 위원회 운영 및 조사에 필요한 예산은 별도로 책정하여 지급할 수 있다.

제24조(준용) 연구진실성 검증과 관련하여 이 규정에서 정하지 않은 사항은 관련법규를 준용한다.

부 칙

이 규정은 2009년 6월 1일부터 시행한다.

編輯委員會

委員長: 李康民(漢陽大)
編輯理事: 金鎔均(中央大) 金雄基(弘益大)
 李志炯(淑明女大) 許 坤(江原大)

編輯委員

具見書(平澤大)	權赫建(東義大)	金秀姬(漢陽女大)	金雄基(弘益大)
金忠永(高麗大)	金弼東(世明大)	金漢植(韓國外大)	金鎔均(中央大)
金煥基(東國大)	閔丙燦(仁荷大)	朴裕河(世宗大)	白同善(江原大)
宋永彬(梨花女大)	安平鎬(誠信女大)	李在聖(中央大)	李志炯(淑明女大)
李鎮遠(서울市立大)	任苔均(聖潔大)	鄭炳浩(高麗大)	崔 官(高麗大)
蔡盛植(高麗大)	許 坤(江原大)		

日本學報 第94輯

ISSN 1225-1453

2013年 2月 25日 印刷

2013年 2月 28日 發行

發行 韓國日本學會

100-210 서울特別市 中區 水下洞 40-2 宇石빌딩 1002號(韓國日本學會)

TEL(02)568-4662

FAX (02)568-4723

<http://www.kaja.or.kr>

E-mail: jimu@kaja.or.kr

印刷 第一文化社

130-860 서울特別市 東大門區 계기 2洞 137-423

TEL(02)921-7221

FAX (02)924-2395

※ 이 학회지의 출판비 일부는 2013년도 한국연구재단의 지원을 받았음.